

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

8月号



8 - August - 1967

奇譚クラブ

昭和四十二年八月号

昭和四十二年六月二十二日印刷 昭和四十二年七月一日発行 七月号(第二十二卷第七号) 毎月二回二日発行 昭和四十二年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十二日国鉄大局特別扱承認雑誌第10号

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊 花と蛇

小説・絵画

特集号

乞う直接お申込みを 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

四馬孝画 「花と蛇」 テーマ画集 十六葉

- 1、折り曲げられて弄ばれる女体
 - 2、逆エビ縛りで引き回される女体
 - 3、水を顔面に浴びせかける男
 - 4、汚水と薬品の洗礼を受ける女
 - 5、いちじく浣腸を施される女体
 - 6、浣腸とオシメカパーの羞恥
 - 7、ガラス製一〇〇Cの浣腸器
 - 8、強烈なイルリガートルの浣腸
- 9、尻打ちの痛さに泣き喚く女体
10、片足吊りに狂いまわる女体
11、女体滑車吊りの準備万端完了
12、お灸責めに汗を流す女体
13、トイレで排泄の強要をされる
14、後手縛りで宙ぶらりんの女体
15、美女の背の中を這ぐ黒い管
16、グリセリン浣腸液を注ぐ女体

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」
オンパレード

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム
限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

限定版頒価一部 一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

「モデル」 長野良子—大塚啓子—五月亜紀子—新井マリ子

この「緊縛女体アルバム」は、若々しくて豊かな肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを、画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。特に写真に迫力を増すためとグラビア印刷

△華々しき女体緊縛の組写真集▽

限定版 美しき縛しめ 第四集 一〇〇〇円(送共) 写真集 略号「美4」

「登場モデル」 山原清子—木村洋子—玉田美佐子—大塚啓子

◎縛られた美女ばかりのフォト八十態の内容◎

刺青女体の逆エビ責(山原清子)
鉄扉に緊縛晒し責(玉田美佐子)
ブロックの石抱き責(木村洋子)
箱子と浣腸器の鼻責(大塚啓子)
両足吊にあう刺青女(山原清子)
古墳に後手吊組写真(木村洋子)
両手吊に悶える女体(山原清子)
逆さ吊に揺れる女体(木村洋子)
猿ぐつわ百態組写真(大塚啓子)

革拘束具アラカルト(大塚啓子)
柱縛りの庭園晒し(玉田美佐子)
セーラー服緊縛姿態(大塚啓子)
野外に於ける晒責(玉田・木村)
刺青女体の柱縛り責(山原清子)
捕獲された女の悶え(大塚啓子)
入墨女の緊縛絵模様(山原清子)
両足吊りの表と裏(山原清子)

△以上緊縛フォト八十葉▽

Osaka Japan



定価三五〇円

昭和四十二年七月二十日印刷 昭和四十二年八月一日發行 八月號第二十二卷第八號 每月四日發行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日關稅大廳特別販賣手續認可

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円 (〒共) 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王―山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版 (思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動！女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開◎フアンの要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

〔女性刑罰拷問特集〕 △西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態 七十二葉

頒価一〇〇〇円 (送共) 略号△美9▽

モデル―清楚な美木乃々子―グラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽ (日本篇) 「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

アルバム 「美しき縛しめ」 第十集

責められる美女百態

残部 僅少

一部 一〇〇〇円 (〒共) 略号△美10▽

特アート紙グラビア印刷、女体緊縛百ポーズ写真集
〔出演モデル〕 ○一宮百合子○東浦ひかる○美木乃々子○増田みゆき○木村洋子○大塚啓子○絹川文代○山原清子○長野良子○玉田美佐子の十名の美女。

ピチピチとした若鮎のような美しいモデル達の柔肌に厳しく掛った細目。これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びました。いずれも未発表の力作ばかりです。この一冊にて十名の美女モデルの緊縛姿態一〇〇ポーズが、皆さまのお手元に届くのです。残部二十枚冊につき、すぐお申込みを。

昭和四十二年八月号

<第21巻第8号・通刊第230号>

奇譚クラブ 8月号 目次

◇奇クサロン……………編集部構成

○SとMの奉仕精神……………編集子(9)○サロン楽我記(第三十八回)……………辻村隆雄・春風春太郎(11)○光男の戯言……………天道光男(12)○ゴム下着の作り方……………新田英安達寛(13)○映画「胎児が密猟する時」……………佐土恵鬼(14)○僕の大イメーヂ画集「奥女中詮議」……………荒地延浩・「挽馬調教」……………室井亜砂路(15)○僕の大イメーヂ画集「長沢圭子」……………春川ナミオ(16)○緊縛映画通信……………東山映史(16)○僕の大イメーヂ画集「カウント・ダウン」……………高村初子(17)○S・M映画に注文する……………雄松比良彦(20)○橋雅美「夜の徒然草」……………水着ショウ……………中宮栄(20)○「女斗片」……………マニアの失望……………早木夢二(21)○「短信往来」……………漂泊の思い……………中河恵子(22)○関谷夫人讃……………菅敏彦(24)○「あぶ・あ・ら・か」と……………村中耕治(23)○女子乗馬考……………岡辰彦(24)

△本文▽

本誌自粛の徹底……………編集部……………(25)

S・Mカメラ・ハント△秋山美智夫・ローズ秋山夫妻の巻▽

『真夜中の宴』……………辻村隆……………(26)

ピアッシングと刺青……………角三生……………(44)

懸賞入選作「京子抄」……………(続蛇性の女)……………小谷和勝……………(46)

贋作マゾヒスティック・ストーリー

「苦悶の部屋」……………芳野眉美……………(54)

奇譚雑談 II 夜の徒然草 II……………中宮栄……………(60)

告白手記 ゴムプレイに耽る私……………津田亜紀子……………(67)

連載サディズム小説△第三十二章▽

「心傷たむ遍歴」……………西条操……………(70)

稿 談 性風俗資料入門 (5)……………斎藤夜居……………(80)



懸賞入選作品

体験記「続・責め絵のある関係」……能美 積……(90)

私のマゾ雑記帳……馬場 好男……(106)

日本婦人部隊奮迅録「虞淵の譜」……黒淵 嬰一……(114)

告白 正常なる異常者へ母子契約……鈴木 暁……(134)

連載S小説『花と蛇』へ続篇三十三回……団 鬼六……(142)

マタニティ・ヌード観賞……瀬沼 四郎……(158)

告白手記 真夏の悔恨……高村 初子……(165)

ファンタジー『恍惚』……保藤 久人……(168)

ああ伝言板……栗瀬 長……(180)

小説「グループ」……町 陽一……(182)

出版物紹介 煉 獄……黒井 珍平……(190)

懸賞入選作品『白い山河』……島内晋一郎……(192)

写真「愛妻ゆう子」に寄せて「妻を縛る」……中村 伸也……(208)

鬼六談義 ーカメラ嫌いー……団 鬼六……(210)

懸賞入選作品

SFストーリー『地底の国』……山口 広……(220)

カメラ・ルポへ新庄美子の巻

「この女(ひと)と」……山本 一章……(234)

S小説 復 讐 (ガンベッタ)……千葉 青鬼……(242)

読者通信……編集部選……(250)

秋山夫妻残酷ショー・フォト集

逆エビに狂い泣く

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたな

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたに

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたぬ

股間縛を熱演する

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたの

立ったままで太腿の付根を締め上げる秋山独特の股間縛のやり方

を順を追うて、まるで舞台上でシヨロを見るように全裸のプレイを熱演そのままフォト化した。

女馬を調教する男

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたか

尻帆立縛りの実演

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたき

秋山式縛りに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたけ

熱蠟は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

横臥した緊縛女体は僅かに自由になる片足をピンとはね上げて痛さを耐えるのへ火のついたローソクから熱軋がポタポタと柔肌の上にしたたり落ちて苦悶のローズ。

鞭と羽毛の操り責

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたら

早縄術を披露する

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたお

縄に慟哭する踊子

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたそ

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 五〇〇円

えい、えい、と気合を掛けて力いっぱい、縄が肌を埋めるくらい締めあげた美智夫の縄捌きに、余りの激しい緊縛感にローズも又ひいひい悲鳴を挙げて身悶える。

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたし

弄られる緊縛女体

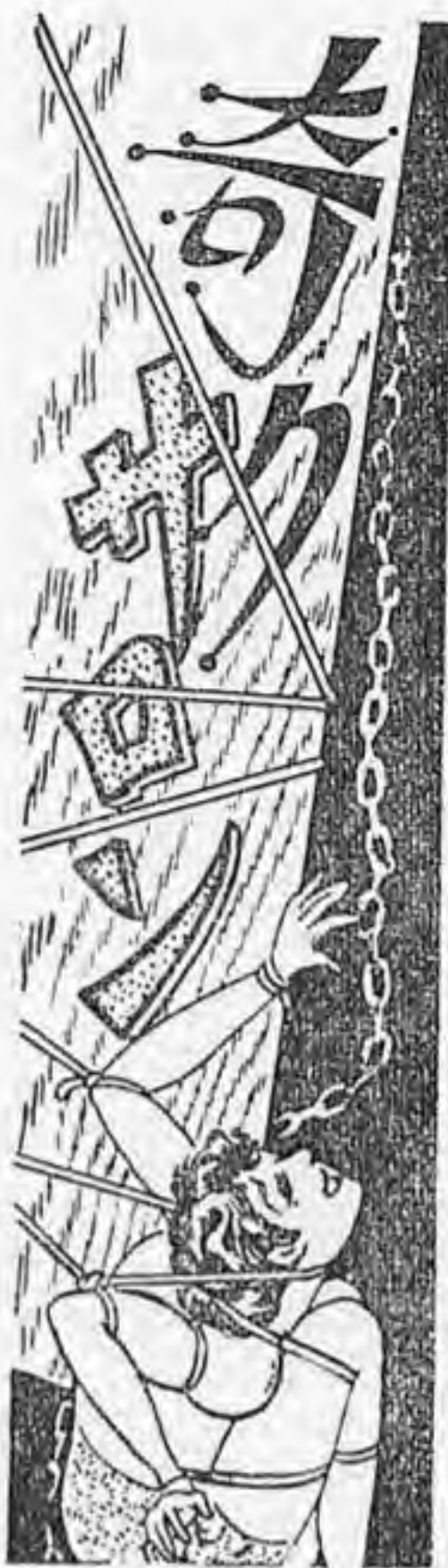
大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたす

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 五〇〇円
略号ハたむ

美智夫特製の鞭が女体の鋭敏な肌を責めつけられ、縄に拘束された女体がうねり続き、思わぬ攻撃の手に備えのけろと、只許しを乞うて泣き喚ぶのみ。

お申込みは、大阪阿倍野郵便局 私書箱第十四号、箕田京二へ。



ここ三カ年がほど、引続いて熱心に奴隷志願をしてきている青年がある。便箋十数枚に色つきの絵入りで、如何に自分が強度のMでござ主人様の如何なる横暴にも絶対服従する神妙な僕であるかということの詳細に亘って述べているのである。その執拗なばかりの粘着性のある文章を読んでいると、その青年は手紙を書くことによって自らその筆に酔っているというようなどころが見受けられる。しかも、そのM願望の手紙が二、三カ月の間をおいて益々熾烈な思いを綿々と書き綴ってくるので、しまいに、厚い封筒と字体を見ただけで、ああ又か、と思わざるを得ないのである。

絶対服従するとか、如何なる奉仕をも厭わないとか、或はご主人様の命令に違反したときは、どのようなお仕置に処せられても構わないという誓約書つきの懇願文を

よくよく読んでみると、さて奉仕するのは果してご主人側なのか奴隷の側なのか、と疑問に思えてくるのである。若し仮りにM青年の要望通りにご主人側が振舞うとすれば、重労働的な奉仕を強いられるのは、むしろ逆にSの立場の側ではないかと思うことすらある。Sを自称する男性がM女性をパートナーに持ちたいという願いを文に托した通信の数は多い。そういう通信を読んでも、如何に相手のM女性の満足を得ようかと努力しているさまが文の端々にまで見えていて、まことに涙ぐましいばかりである。また実際に、そういう紳士達を混えてM女性を対象にプレイしてみようことだが

サービスをしているのはSの側ではないのかと考えさせられることが極めて多い。

涙ぐましいばかりのフェミニストぶりを発揮しているのは、いわゆるSである自称している男性であって、牝犬だとか奴隷だとか言われて屈伏している筈のM女性には、あらゆる面で奉仕を受けているといった感じを抱くのは、皮肉といえば皮肉なSMの一面面ではあるが、これまたSとMの醸し出す謎であり、プレイの実態であるのかもしれない。

私自身、SとかMとかの傾向を多分に持っているという男女の方々とつき合ってみて考えることだが、S女性とM男性という組合せのコンビと一緒にプレイをしたり撮影をしたりしているときが、精神的にも肉体的にも一番らくのようない気がする。Sの女性は能動的に自分の思った通りのアイデアで積極的に行動してくれるので立会っていて疲れることが非常に少いようである。

これがM女性を対象にしたときは、これすべてへあなたまかせVなので、機嫌をとりながらやると疲れることが多い。こちらが苛めているのか逆にしごかれていくのかわからないときがある。殊に濃厚なフェミニストと一緒にM女性を責めているときなどは、M女性の方が女王様でないかという錯覚を起すことさえある。その点S女性は、女王様とか女ご主人様とか言って崇められながら、乗馬にしても、鞭撻にしても、縛りにしても、女性の身で男性にこれを施すということとは、かなりの重労働である筈だ。ましてや日常生活でお化粧の際の人間椅子にM男性を使ったり、足舐めをさせたり、神酒奉戴ということになったりしたら、これは完全にS女性の側からのサービスになってしまうのではなからうか。

私は数多い読者からの通信に目を通しながら、いつもそういう疑問を抱いていたのだが、実際にプレイや写真撮影に立会ってみて、いよいよ、その感を深くした。しかし、これは第三者として、傍観者としての岡目であるかもしれない。

SとMの奉仕精神 編集子

☆

☆



(第三十八回)

辻村 隆

エロダクションの映画も、近頃は女の裸のみや、愛欲の葛藤だけでは客が入らぬらしく、競ってSM傾向のものをとりいれ始めた。身辺多忙で、この種の映画を見る機会も少なくなったが、最近作の小森白監督の「美女拷問」は、名うての監督のものだけに、縛りや吊りシーンが、ふんだんに出てくるようだ。憲兵の拷問もので、親娘が散々責め抜かれ、娘がその復讐をするというストーリーだが、鉄の爪の片輪の男が、女の肌を責め、鬨りものにするところなどゾクゾクとくるといふ、徳永昭三からの早速の連絡である。機会あらば是非一度見ておきたいと思うが、

全篇を通じて吊りや責めが随所に織り込まれているらしいから同好者なら一見の価値ありと言っていた。同時上映の「惨忍」もかなり刺激の強いシーンが各所に散見しているそうであるが、何れこの種のものにおエラ方が、眼を光らせ始めた場合、伝統ある奇クにまで、うるさい干渉が始まりはしないかと、それを懼れる。

七月号の奇クサロンに眼を通していたら、「私の感想メモ」で、藤岡江根真氏が、私の旧作「猥らな虫」を今も覚えていて下さったのには感激した。何しろ春日八郎の「お富さん」が流行っていた頃のこと、あれはフィクションではなく、あの六頭身の娘富子は、私が珍らしく身を焦がした、いとし娘であったからだ。女房子供のある私と彼女は、いずれは結ばれぬ仲ではあったが、あの頃の富子との爛れた愛欲の生活は、今も私の脳裡に、歴々と灼きついていく。フィクションでない、真実の物語はやはり、どなたかの心をうつものであるうか。江根真氏に言及されて、私は過ぎこし方の、あの昭和二十九年頃をなつかしく想い出していた。もう一昔以上も前の、乙女に恋情を燃やした私の告白である。

の、乙女に恋情を燃やした私の告白である。

江根真氏の喜ばれる様なクリスタール・プレイは、三月下旬頃、大島照代さん相手に一度行なったことがあるが、恰度その頃、山本一章氏が、『この女と』で、大島さんのことを書かれたので、二番煎じの感もあって、カメラ・ハントは断念し、山本氏との対談で、彼女とのクリスタール・プレイのことについて、一寸触れた程度に終ったが、これには、後日談がある。先日、編集部経由で、大島さんからのお便りを頂戴し、何事ならんと読み下すと、彼女にとって私とのプレイの顛末がその後全然黙殺されているので、大いに不満を訴えてこられた。出来得ればもう一度クリスタール・プレイに耽溺したいとの希望で、その行間からは、彼女の浣腸に対する、又アイヌス願望のねがいが切々と汲みとられたのである。春のプレイの時は打診程度に終ったが、この調子なら本格的なクリスタール・プレイも可能性がありそうで、そのことは私よりむしろ大島照代さん自身が希んでいるらしい。藤岡氏始めクリスゴ一党の、ご要望に応えるべ

編集部だより

○ベテラン辻村隆のカメラハントは大方読者の絶賛を得て毎月次はどんな女性が登場するかと大いに期待されているのだが、山本一章のカメラポも最近めきめきと支持者が増えてきた。編集部でも強力にバックアップしたいと思っている。今後目を眩るような麗人が次々と登場することと思う。

○八夜の徒然草Vを引提げて立つ中宮栄もまたカメラの名手。東京在住の氏にも都周辺のモデル志望者を紹介したいと考えているので、いづれその成果は誌上に発表の運びとなることだろう。

○五月の末、中河恵子嬢から電話があり、一カ月の予定で今夜帰郷するといふので、見送りながら会食をする。その席でF6セブンの5月20日号が発禁になったことを聞く。△「アングルの女」にみられた奇妙なセックスVが見たくて買ったという5月27日号の同誌を見せて貰う。

○昭和四十年の冬、美木乃々子や山原清子を煩して「日本拷問刑罰史」の女囚物を撮影したとき、撮

く、近々暇をみつけて、彼女と四ツに真向から取っ組んで、本格的なクリス・プレイを試みて見たいと思っています。藤岡江根真氏が、関西の方で、もし勇気がおありなら、ご同行していただいても結構です。「猥らかな虫」を覚えていて頂いた嬉しさで、つい江根真氏に

呼び掛けるような恰好になりましたが、私自身もクリス・プレイには大いにハッスルする方です。

× × ×
独言の「奇クと私」の萩原正氏のお考えには大いに共鳴します。自分だけは安全圏にいて、楽しいめをしたい、プレイをしたいと思

っても、それは無理というものです。虎穴にいらずんば虎児を得ずとか。或る程度自分を裸に曝して、この世界に、飛び込んできたら、楽しいことは無限にあると思います。団鬼六氏も私も殆んど自分というものを曝し出したのですから――。



ここに現れるた女性二人。片や夫の手に縄打たれし若妻（新田英雄氏提供、夫婦プレイ・フォトⅡ右上Ⅱ）。片やギャング氏？に捕われし美女（春風春太郎氏提供、東宝映画、虎の牙、スチールⅡ左下Ⅱ）。同じく椅子縛りの艶姿なれど、甘き縄なるべき筈の若妻の厳しき縄目に比し、命賭して逃走を図る恐れあらん美囚のそのの、これ又いかに緩やかなることよ。その目的の相違、かくも差の生ずるならん。嗚呼。

椅子縛り

フォト二題

提供・新田英雄
春風春太郎



影場所を提供して下さった読者の方が、再び新しい趣向の責道具や背景で拷問処刑の場所を提供して下さる由通信を貰った。早速このことを中河恵子嬢に話して協力を求めたところ直ちに快諾を得た。いずれ六月の末には、中河嬢をモデルにした新しい拷問刑罰の写真撮影が行われるだろう。

○秋山夫妻の残酷ショーを見たいとわざわざ新幹線で大阪まで足を伸ばしたファンもあったとか。このところ秋山夫妻の人氣も上昇の一途を辿っているようだ。上演のスケジュールについての問合せも多いのだが、残念ながら編集部に於ても、余り先々のことはわかっていない。

○本誌に十数年以前から「ボクの責め方」を連載されていた宝塚二三夫氏が急逝された由、謹んで哀悼の意を表したい。送付を受けたフォトが数十枚あるので、差支えないものは誌上に発表して氏の遺志をファンに伝えたいと思う。○隅から隅まで読みごたえのある内容にするためスタッフ一同懸命の努力を読んでいるのだが、自粛徹底のため寄稿家投稿者の方々に充分腕を揮って貰えないのが残念である。乞御諒承。

みつおのざれごと

光 男 の 戯 言



天 道 光 男

誰しも毎日通う電車の中は退屈なもの。光男の退屈しのぎを紹介しよう。車内にはいろいろの女性がいる。顔や姿を見て美しいと思うだけでは、余りにも人生はつまらない。どんなパンティを穿いてるだろう？ ゆううつそうな顔を見ると、この女性は「アレ」じゃないか？ いろいろな想いを廻らすのである。これから陽気も良くなれば、ノースリーブの女性が現われる。この女性は毛深いので情が深いのではないだろうか、などと空想する。

乗物を待つ時間もこれ又退屈なものである。しかし読者よ。これとて楽しみが有る。近くにはきつと公衆便所が有る。急いで入る女性の多い事に驚く。男より女の方がトイレに行く回数が多い為か。今入った女性のトイレ姿を空想するのである。今頃あの女性は自分一人の密室で何をしているのだろう。どの様な顔をして用をたして来た時の顔を見たまえ、満足そうじゃないか。その顔を見るだけでもイライラ気分が鎮まるよ。諸君考えて見たまえ。このままに成らない世の中で、空想だけがそれこそ何の支障もなく、自分の思い通りになるんだよ。

と、諸君自身、密室に入らなければならなくなるよ。ゆめゆめご用心の程を。

○

アメリカには聞く所によると、「変態下着専門店」というのが有るそうだ。さすがに文明国アメリカである。ズバリ「変態……」とつけたところが光男には気に入った。それに比べて日本はまだまだだ。日本にもこういう店は、確かに何軒か有る。しかし、必ず上に「趣味の……」「夫婦の幸福の為に……」という風にもっともらしく書いてある。ズバリ書き、又、それが世間で通る様にならないければ、本当の文明国とはいえない。偉そうな事ばかりいってゴメン。

○

テレビの「芸能ニュース」で、アメリカの有名な歌手が自分と一緒に舞台上で踊る女性を募集していた。ただし、体重百キロ以上の女性とか。採用された女性が、舞台上で、テレビ局が特別仕立て作った「タイツ」を穿いて踊っている姿がブラウン管に登場、その巨軀をみせてくれた。「百貫デブ」といえば、我々（光男も同じ）は大抵「中年ブトリ」の女を想像するだろう。しかし、さにあらず！ 若く美しい女性なのである。

○

ご覧になっていたMマニアの読者諸君にはたぶん「捜し求めていた女王様」に見えた事だろう。さぞかしあの様なすばらしい女王様の尻に敷かれたいのだろうと、光男、他人事ながら気になった。しかし我々貧弱な日本の男性では窒息する事間違いない。まあ空想がよいと思うよ。「死んで花実が咲くもんか」だよ。

○

トルコ風呂が増えた。光男、あるトルコ風呂で、可愛い姉ちゃんを見つけた。年はそんなに若くはないが、色の白いなかなかのポチヤポチヤ美人である。ブラジャーに子供が穿く半ズボンの様な恰好である。

「冬はいいが、これからは暑くて大変だろう」

「そんな事ないわ。ハダカ同然でしよう」

可愛こチャン、楽しそうにいった。

「ハダカ同然で——その姿で、夏海へ行つてごらん、君見たいな恰好では、すてきな男性が現われないうよ」

可愛こチャン、光男のこの言葉にイササカお冠りである。

ゴム下着の作り方 安達 寛

私の友人N子は大のゴムファンです。私の発案で彼女がつくり愛用している作品のいくつかを全国のゴムフェチ・ファンの方にご紹介いたします。

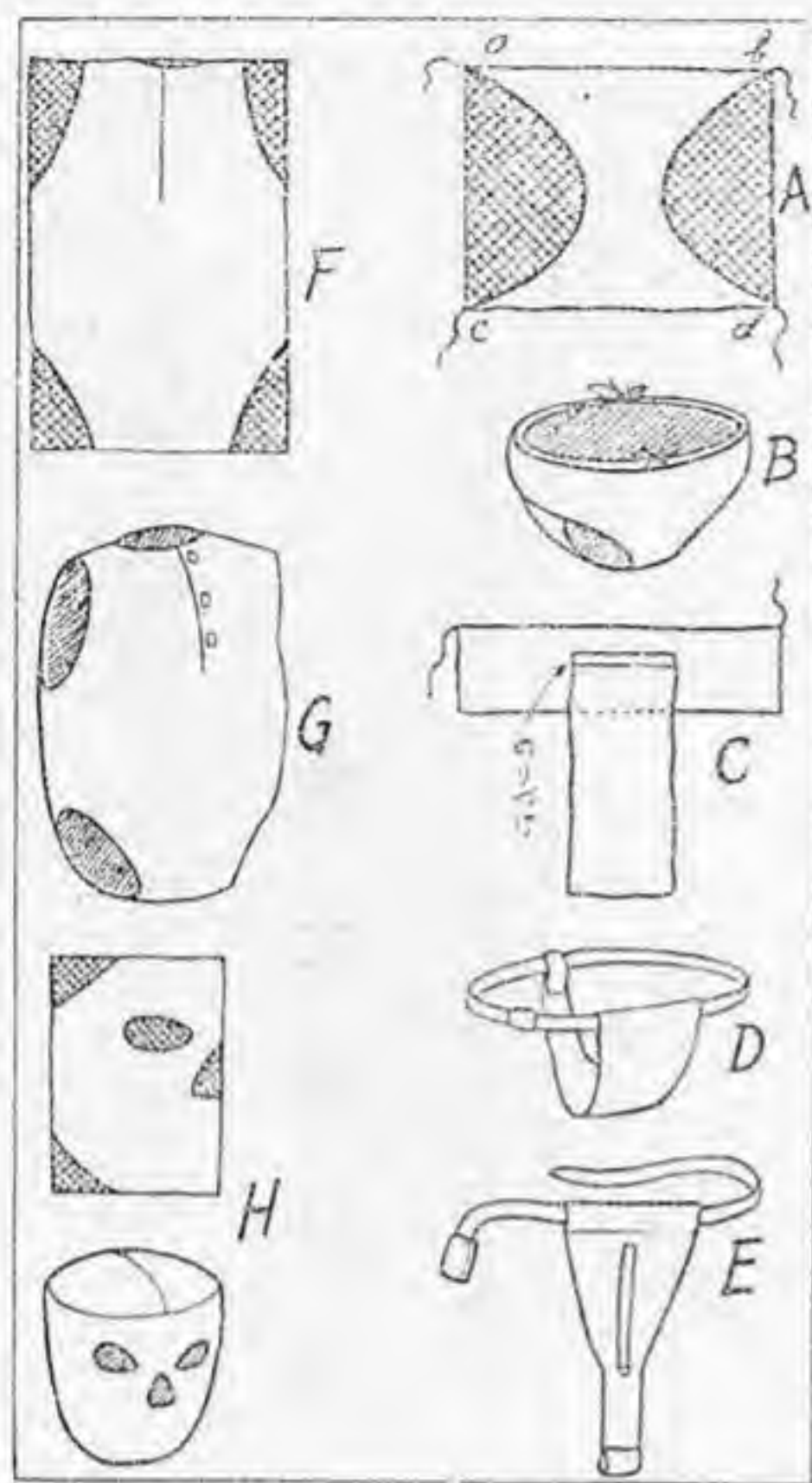
一、材料

ゴムといっても、一番の材質はあのムチムチした感じと、独特の臭いを持つ生ゴムでしょう。生ゴムの布は理科学用品店でも、又、薬局へ注文すれば容易に入手できます。なるべく薄手がよいと思いますが、三種類ぐらい用意すれば楽しめます。ゴム管を少し。医師

用の手袋。自転車チューブ。氷のう。ゴム糊等。

一、ゴムパンティとオシメカパー
本来は木綿で作る男性用の水泳パンツですが、ゴムで作ると、パンティ同様の着心地です。

まず、ゴム布をA図のように裁断します。寸法は巻尺で測りますが、市販のパンティも参考になります。実尺より一割ぐらい小さく切るのがコツです。着用はaとb部を氷のうなどを開いて貼りつければ変化が楽しめるでしょう。



C図はオシメカパーですが、特に説明は不要でしょう。

一、ゴムふんどし

腰ひもは古い革バンドを用います。中央部にゴム管を糊で貼りつけます。N子は近ごろこれを生理用バンドとして、用いているそうです。革バンドもゴム管で代行しているそうです。

一、ゴムシャツ

タテ一米一、二米二十糎、ヨコ四十五糎ぐらいのゴム布を二枚重ねて隅を貼り合せます。切れやすいので、少し厚手のものを用います。糊しろを充分にとること。よく乾いてから、首と手足の穴を切り抜き、首穴から下にハサミを入れてボタンをつけます。尚ゴムにも従目、横目があって伸縮度合が違うので注意して下さい。

一、ゴムマスク

なるべく薄手のものを円筒状に貼り合せます。太さはストッキングの一番太いところぐらいがよいようです。上部を袋のように貼り合せ、目と鼻の穴を切り抜きます。後部に少し、切り込みを入れて、裂け止めをしておく着用の際に便利です。裁ち残りを猿ぐつわに利用することも出来るでしょう。

「ゴメンね、だって君みたいなグラマーな可愛こチャンが、その姿では台なしだよ」

「あらホント。それでそんな事、いったの——ならいいわ」

女と言うものはやはり男性にちやほやされていたいものか。こういうとすぐ機嫌が直ったとみえ、ニッコリした。

「お客さん、本当は私がこのズボンの下に、何も着けてないと思っ

ているんでしょ？ エッチね」

「ばれたか、その通りだよ」

「お生憎様、ちゃんと下に穿いてるわ」

「うそつけ」

「なら賭けようか——もし穿いていたら、どうする？」

「そうだな、チップをはずむよ」

可愛こチャン、サツとズボンを脱いだ。下にはビキニのパンティがあった。

「本当でしょう——。でも、もうだめよ。これまでも」

光男は満足であった。可愛こチャンの「全スト」など、最初から見る気などはなかった。可愛いパンティ姿が見たかったのだ。

実に楽しい雰囲気にしてくれる可愛こチャンであった。

映画通信

「胎児が密猟する時」を観て

佐 土 恵 鬼 羅

私の住んでいる北九州市には、成人映画の専門館が私の知っているだけでも四つある。五月の始めその中の一つ、T映劇に私がぜひ観たいと思っていた「胎児が密猟する時」が上映されていた。私がこの映画をどうしても観たいと思ったのは、いつだったかある週刊誌で——鬼才若松孝二監督が出演者が二人だけの「胎児が密猟する時」という、ちょっとわけのわからないような題名の映画を製作、この映画は、全編ほとんどが縛りのシーンである。——という文章を読んでからである。併映の「惨忍」も題名からして、S的映画を連想させるのに充分だったのでひまをみて、と置いていたうちに、日にちの方は容赦なく過ぎ、勤務の都合もあってとうとう見ずじまいだった。そのうちに他の映画館でも上映されるだろうと思ってあきらめていたところ、T映劇が終つてすぐ今度は、N映劇で上映さ

れる事を知った。日頃の行いがいいとこうまで神様は私の味方をしてくれるのかと喜び勇んで、五月七日の日曜日に、N映劇に出かけた。大枚二七〇円を払って中に入ると日曜日というのに客の入りは悪く、ざっと数えたところ二十人余り。そのほとんどが男である。まず最初が「惨忍」である。ダイトルバックに主演の松井康子が鉄製の組立梯子に逆さに縛られているシーンや、旅館の女中が殴り殺されるシーンがカラーで写されている。このシーンは映画の終わりの方でもう一回再演？されるが、なかなか迫力があつた。ストーリーは6月号誌上で東山映史氏が書かれていたので重複はさけたいと思う。

さていよいよ待望の「胎児が密猟する時」の上映である。ストーリーから先に紹介すると、あるデパートの専務（山谷初男）——彼是不妊手術を受けていて、子供が欲しいと願っている妻（志魔はるみ）と、絶えず『子供が欲しい』『いや生んではいけない』で言い争いをしている。もう一回手術をすると子供が出来るようになるから手術をして欲しいと頼む、妻の言葉に耳もかさない彼に業を煮やした彼女は、人工受精を受ける。そしてお腹が大きくなった時、彼女は『私は私の力で子供を生みます。もう帰ってきませんか』と言に残して、彼の許を去ってしまった。——が彼の妻に瓜二つの彼のデパートの紳士物売場の売子（志魔はるみⅡ役）をかつて彼が妻と住んだマンションに連れ込んで彼女が完全に屈服するまで責め、目的を達する寸前に彼女からナイフで刺し殺されてしまう、という物語りである。さて縛りのシーンだが、週刊誌に書かれていた通りほとんどが縛りと、鞭打ちのシーンでうまっており私達Sファンにはこたえられない映画である。まず、彼女に睡眠薬入りの酒を飲ませ、意識朦朧としている彼女の両手を胸の上で組みあわせて縛り、両足は開いてベッドの枠にくくりつけ、パンティ一枚、まったくの無防備状態の彼女の裸体に鞭の雨を降らせる。がこのあたりはまだ

序の口で次はもっとすごい。睡眠薬の眠りから覚めた女は、自分の体のあちこちについた鞭の跡をみて、男を精いっぱいしのり帰ろうとする。男は抵抗する女を再び寝室までひっぱってくる、ベッドのマットを取り除き鉄製の枠だけにして何か獣の皮の敷物をおいただけの上に、腰を振り手足をばたつかせてあばれる女をスリッパ一枚にして上向きに寝かせ、両手はバンザイのかけっこうにし、両足は思いきり広げてベッドの枠に縛りつけ、ごていねいにも口にはさるぐつわまでかませていよいよ本格的に責めるわけである。男は浴室からカミソリを持ってくると恐怖のために目を大きく見開いている女の鳩尾のあたりに刃を当てる、ゆっくりと下に向って切り裂いてゆく。私は始め、スリッパを切って女を裸にするためにカミソリを持ってきたのかと思ったがそうでなく、肌まで切っているのがある。女の顔いっぱい浮かんた汗と苦悶の表情、なめらかな肌に一直線の血の跡。このシーンは切腹マニアには見ごたえのあるところだと思う。それから鞭を取りあげて振りおろす。ビシッという鈍い鞭の音、獣の咆哮にも似た女の



「奥女中詮議」

荒地 延 浩

僕のイメージ画集

絶叫、鞭が肌に当たるたびにピンとそり返える女の体。しかも先刻スリップと一緒に切られた腹部に鞭が集中するのである。鞭の当たる度に腹の皮がよじれた様に見えるのは、演技ではなく、男がかなり強く鞭を振りおろしていたものと思われる。その他の鞭打ちのシーンでもそう思われる節が多分にあった。だいたい映画では縛りに

しても、鞭打ちにしても手かげんをしているとはっきり判る場面が多く、私達ファンをがっかりさせるのだが、この映画は縛り方も手足にくい込む程きつく、鞭打ちでもさっき述べた通りなのである。ただ鞭で叩いたあとの鞭跡が少しオーバーだったような気がするがそのくらいは大目に見るべきかもしれない。もう一つ浴室で女の髪

「どこの女間者か知ねども、この屋敷を狙う上は、わらわ達の拷問がどれほどのものかも承知で、覚悟の上のことであろうノウ」



「挽馬調教」

室井 亜砂路

僕のイメージ画集

をつかんで浴槽につける水責めのシーンがあったが、これなども息つくひまもなく十回程連続にやるのだから女優さんの苦しみは大変なものだっただろう。その他、首に縄を巻き、部屋の中を四ツンばいでグルグルと廻らせるシーンや、女の足を持って引きずるシーンなど、Sファンには相当見ごたえのある映画だと思う。

私は成人映画、特にS的要素の多い映画はかなり観てきたが、まるで私自身が男に替って女を責めているような錯覚におち入る程、迫力のある映画を観たのはこれが初めてである。

「百聞は一見にしかず」とか。K誌愛読者諸兄も一度観られてはいかがでしょう。

「さあ、もっと馬力を出さなきゃあお車は曳けねえぞ。女王様の鞭はナ、こんな生やさしいもんじゃねえことを覚えときナヨ」

あさじむろい

犬の馬を飼育する

—犬の馬に乗ってみませんか—

長 沢 圭 子

私は一匹の小犬を飼っています。が日本犬の柴犬系統の雑種で、生後間もなくお友達から貰ったものです。家へ持って帰るときケークの箱へすっぽりと入るくらいで、その頃から牛乳で育てたので、私によくなついております。

最初から部屋の中ばかりで育てておりますが、やはり動物特有の臭いがします。私は毎日一回は必ず浴室で犬の体を洗ってやっております。丈夫で元氣な雑種なので大変育て易く、その点心配はないのですが、私が外出するときなど、一緒に連れて行ってくると盛んに鳴きますので困ります。

私はこの犬を自分の馬にしようと考えたのは、生後百日位のとき余りいたずらをするので、両膝の下敷にしてぎゅうと押さえつけたときからです。最初は先ず犬の背に物をくくりつけて、それに馴れるよう練習させました。成長するに従って相当重量のあるものにし

一日に二乃至三時間はくくりつけておきます。品物は毛布を丸く巻いたものを背に跨がらせた恰好でくくりつけるとよいようです。

枕のようなものでもよいと思いますが、私は毛布を用いました。要は時間をかけて馴らし習慣づけることです。徐々に跨れるようになってからも犬はすぐすり抜けようとしますから、その時は厳しく懲戒を加えます。一日に何度でも繰り返えして行います。決して短兵急に跨ってはなりません。犬が怖れるばかりで成功しません。ゆっくり急がずに飼育すると必ず乗れるようになります。

さて乗れるようになっても中腰で気がねするような恰好では駄目です。犬が貴女の重みを感じ違ひしますし、なめられることになりません。しっかりと全身の重みで背筋をのばして跨がります。私の犬は現在三十分近く乗ることができ、動かさないでうつぶせのに跨が



「美女拷問」など

緊縛映画

東山映史

「拷問」シリーズの監督、小森白の「美女拷問」が、題名ズバリの凄まじさで楽しませてくれる。世界に冠たる日本軍憲兵の拷問ぶりをたんのうさせてくれる。時は大東亜戦争の末期、所は支那大陸で、宝石商の隠した宝石を奪わんとしてスパイの容疑をかけて、主人、妻、娘を捕え主人の前で、半裸にした妻と娘を責めて、主人に宝石の隠し場所を云わそうとするのだが、その拷問ぶりがすさまじい。責められる美女は、ポリウムのある美矢かほるに、「拷問」のキリシタン囚徒で責めの美しさをみせた加山恵子。

美矢は女学生で、破れたシュミーズ一枚、加山は赤い衿の半襦袢に桃色の腰巻きというスタ

イル。トップシーン、手足を一つに縛られて吊られた美矢と加山が、竹刀で叩かれてヒイヒイと悲鳴を上げる。本当に猪吊りにされているので、苦しそうで迫真力がある。隊長の「次！」という命令で、伍長が拷問を替える。美矢は逆エビ縛りで、右手と左足を背中にくくりつけられて、その縄目に通した木刀でねじり廻される。苦悶のあと美矢は、イスに縛りつけられて、拷問は夫婦に加えられる。夫婦の両足を縛り合せて吊りあげ、カメラが加山の苦悶の表情を追う。

次には、独り隊長の部屋に連行された美矢が、「父母を救ける」という隊長の言葉にだまされて、おかされるが、その直後



僕のイメージ画 「カウント千」 春川ナミオ

っているだけですが、胸部が圧迫されるらしく初めはしばしば嘔吐しました。然し今ではかえって私が乗るのを待っているようです。出来れば全身写真で私が乗馬？を楽しんでいる姿をお送りしたいのですが、それもならず下半身のみお送りします。なお私は独身で独り暮らしのものですから写真は左手にレリーズを持ってシャッター

を押しました。この写真で私が締められていますフンドシは普通の晒布ではなくガーゼに近い薄い木綿で目がよくつまり、洗えば洗うほど感触がよくなります。この次はもっと大きな犬を仕込み、あぶみをし、くつわもかませ、室内を乗り回してみたいものだと思っております。

に、母と並んで絞首台に乘せられてしまう。後手に縛られ、首に太縄を巻かれて、足台を外されかかる母娘の姿に、主人は遂に白状する。

憲兵隊長は、宝石を手に入れたと、この親子三人を、部下の伍長共々にピストルで射つていずれかへ去る。

十年後、場所は、海岸べりのホテル。名前を変えた隊長が、そのホテルの社長に納っているが、生き返った美矢と、右腕をなくした伍長が現われて、復讐を始める。

社長の娘の観世亜紀と、妾の華村朋子が、人質として監禁され、拷問を受ける。このシーンも凄まじく、「情婦と情夫」などで色っぽさをみせた観世亜紀が、豊満な乳房を荒縄でしめ上げられたり、連縛のシーンや、美矢の床責めなどと、次々に責め場面が展開、監督の熱気がこもっている。

最後に同じ苦しみをとという訳で社長の一家が、立木の中で、絞首刑にされかかるのだが、責め場面をカラーで迫力を加えているのが効果的である。

若松孝二監督の「網の中の暴行」は、外人女優の緊縛シーンというのが異色で、楽しませてくれる。このエマ・ラングストロールは、日本の古美術研究に来て、いまは留学生という異色タレント。

自分の恋人を外人に犯され、殺された男のために、その主人に復讐する手段として捕えられ、可憐な若妻役。前手縛りで、足も緊縛され、猿ぐつわを噛ませられたり車のトランクに押し込まれたり責めの連続である。逃走しかけて失敗、前手縛りから、豊満な腕まで、縄をかけられ、若松監督の異常な責め演出でいたぶられている。

美矢かほるの「禁断の情事」も緊縛シーンが、楽しませてくれた。美貌の産業スパイの美矢が、牙をとぐスパイ団の首領のために、縛られたり、犯されたり、責められたり、責めの写真を撮られたり、仲々の見ごたえを覚えさせてくれるシーンがある。

その他の、成瀬恵子の「女あさり」などには、美女の緊縛シーンはないので念のため。

S・M映画に注文する

橘 雅 美

封切りされたばかりの『美女拷問』、早速に観賞させていたのだ。相当数の入りをみせている中で、座席に身体を寝かせ、布をかぶせたカメラでシャッターを切り続ける人が居た。まことに苦勞さななことである。

映画は、戦時中にスパイの汚名をきせられた男、その妻と娘が、猪吊りや逆さ吊り、そして首吊り寸前に至るまでの拷問を加えられるところから始まる。

この間、青竹やムチで叩かれたり、手錠をかけられたまま弄ばれる娘の姿など、カラーの画面が観客の目をひきつけていた。

後に拷問を受けた娘と、上官に拳銃で射たれて片腕となった男とが共謀、当時の上官とその家族に復讐する。というお決まりのストーリーである。

さて、この頃のS・M映画、いささか迫力に欠け、大衆向けのサービスにはしり過ぎるきらいがあるように思える。資本主義社会の

中での商業政策上、已むを得ぬ結果かも知れないが、むやみに眉をしかめさせたり、耳障りなほどに女のうめき声を聞かせたりするだけが能ではあるまい。

たとえば、「美女拷問」の場合でも、スリップの肩紐を片方だけはずして鞭打たれていた娘が、次の場面では裸でイスに縛られて、胸に縄を受けている。(無論、乳頭はしっかりと隠されて——)

ここまではまあいいとして、次の場面の同一人が、いつの間にかチヤンと下着をつけているのだ。非道極まる憲兵も、拷問さなかに娘の下着脱着にまで気を配っていたものらしい。最後の方でもそうだったが、どうも合点がゆかぬ。

そのくせ、同時上映の「白い人造美人」中では、服をひきちぎられた女が、乳房をふるわせながら逃げまどう姿を克明に写し出し、俗にいう「濡れ場」等では、堂々と全裸の男女のからみ合い、タブーと聞いている痴戯の数々をくり

拡げている現実——。この格差はどういう訳だろう。ある作家が、男女の交りを「神々のなす行為」と小説で書いたことがあるが、映倫のお歴々も、そうした観点から判断を下しているのだろうか。

とすれば「神々のなす行為」は毒性がなく、S・M場面は心をまどわす毒物であるという訳か? 私には難かしいことはよく判らないが、六月号で、丸木戸佐渡氏が書いておられたように、ごく自然な縛りの中にある表情なり、迫力なり、ムードなりに、人の心を酔わせる美的要素というものが存するのでないだろうか。

ひと頃、十八才未満お断り、の映画に刺激され、劇場のトイレや帰り途中でチカンに早替りした人の記事がよく新聞などを賑わしたことがあったが、そうした理由づけが不自然に思えないような、あまりにも興味本位なるS・Mシーンが多いようである。

かつて一世を風靡した映画「肉体の門」では、長い髪を巧みに使って胸を隠したり、片足を浮かせてライトの投影を利用したりで、見事に全裸を印象づけた富永美沙子のハリツケ姿は、女イエスキリストを想わせる程に美しかったし

他の場面でも、野川由美子の両手吊りでムチ打たれるシーンも、当然の全裸で、苦悶の表情を上半身に二重露出の撮影手法を用い、私達に納得の行く描き方をしていた。

同じ作品を採り上げた「女体」(こちらは白黒映画だった)では団令子がボルネオマヤを演じ、やはり全裸で高々と吊られていた。手首を中心に、ゆっくりと回転する彼女の表情も良かったし、(この時には、充分に喘ぐ胸もとを観せてくれた)アップで、首すじから胸、そして胴へと流れ落ちる汗を追い、リンチの惨を美的に表現することに成功していた。

これらを考え合わせ、現実を眼前にして思うに、私の個人的で片寄った観方、受けとり方かも知れないが、どうも、責められる女性の美しさ、というものは、賢明な諸先生の手依り、もったもったと追求され、抽出される余地がありそうな気がしてならない。

外国映画を例にとっても、安易なベッドシーンで、客にこれでもかこれでもかと押しつけるような邦画の手法に比し、余分な音は総て捨て去り、これから始まるであろうところの「神々のなす行為」を男女の掌にまっしるな石鹸の泡

＜短歌＞

こけし

高村 初子

白雪の肌はむざんにくびられて
恐怖にあえぐいけにえのねやみだらなるこけし並べてなぶら
るるなぶりの声に顔そむけいるあえかなる乙女の肌にどす黒き
縄けばだてるどぎつきまでに蛇ぐらの前でおどされ泣く泣く
にこけしをとりぬカメラの前でおぞましきカメラの前にもだえ
つつ必死にたえる女の生理もだゆれどついに耐ええず進む
音はひびきてフラッシュ走るたえきれぬ尿意にもだえ括られ
し杭きしませて身をふるわしぬ伸ばしいる足指かなし曲げずと
も曲りくるたび身をすくめいつ多数なる目にさらされて羞かし
さいまきわまりぬ心うつろに

が交錯する態で表現し、しかも強い印象を与えるというような手法が拷問の場面にも欲しい。
欲をいえばキリはないが、いか

にも映倫に気を使いました式の半裸、全裸の責めなら、むしろチャンとした着衣に本縄での拷問の方が、私にとってはずっと満足出来

るだろう。その意味では近頃、TVの捕物シリーズ番組にも、仲々侮どれない好シーンがあるのだ。諸兄の叱声、ご意見を乞う。



日活映画「肉体の門」の一場面

提供・春風春太郎

女 斗 片 辺

雄 松 比 良 彦

○雄略天皇十三年秋九月の記事は有名であるが、このほか日本書紀をひろいよみしていると次のような女の格闘がある。

同じく雄略七年秋八月。前津屋さきつや(吉備下道臣)、小女(おとめ)を以て、天皇の人(みひと)となし、大女(おおめのこ)を以て己が人となし、競いて相斗わしむ。幼女(おとめ)の勝つを見て、すなわち刀をぬきて殺す。また小な

る雄鶏を以て呼びて天皇の鶏として、毛を抜き翼を剪る。大なる雄鶏を以て呼びて己が鶏として、鈴金の距(あこえ)をつけて競いて相斗わしむ。禿(つぶれ)なる鶏の勝つを見て、又刀を抜きて殺しぬ云々。これをきいた雄略帝は物部の兵士三十人をつかわして、族七十人と共に前津屋を誅するとある。弱小を帝に見たてると不敬はよいが、どちらもその弱小の方が勝

っていて、それを又殺すという話のはこびはなぜであろうか。
○日本霊異記には、中巻第四に「力女拵力試縁」と同じく中巻第廿七に「力女示強力縁」をのせている。前者は聖武の御代、三野国片県郡に三野の狐という力女があつて、往還の商人の物を奪い苦しめた。又、尾張の国愛智郡に別の力女がいて(三野の力女は大、尾張の力女は小とある)、力を試みんとし、「蛤捕五十斛、載船泊彼市也。云々」力くらべの後これをこらしめた、とある。後者は上の尾張の力女のことと思われ、尾張宿弥久玖利の妻となっていて、女

同士の格闘ではない。

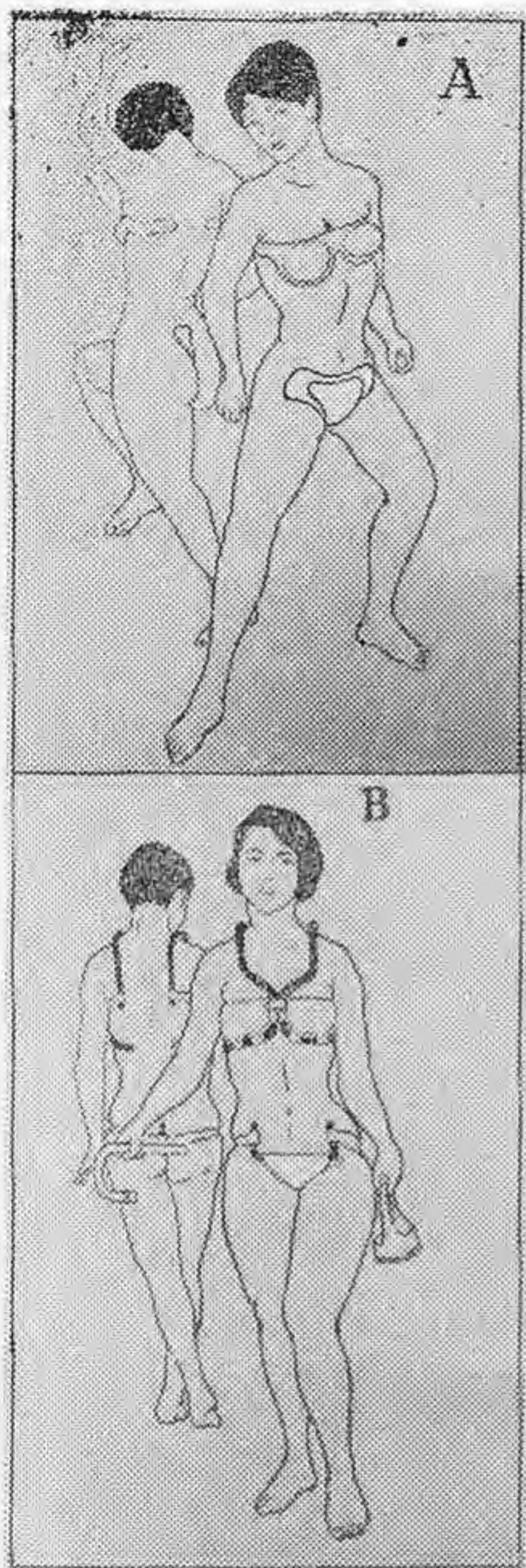
○女力士のことは、例の古今著聞集に出る高島の大井子、及び義残俊覚という書(文禄年間の刊という)にあると伝える熊野辺の比丘尼があるが、他に史書等にあらずれば御教示ねがいたい。大井子の方は力士といっても相撲をとったという記事はなく、節会相撲に召されて上京する佐伯氏長に強力を示し、氏長はこの大井子に稽古をつけてもらったとあることから推しはかるのみである。比丘尼の方は室町末と思われる内野七本松(京伏見)での勧進相撲に、強者立石に歯むかう者のなかったとき年の頃二十ばかりの比丘尼が挑戦して見事投げ倒したとあり、その後他の強力達が挑んだがことごとく倒された、といわれる。横山健堂氏によるとこれが唯一の女力士ということになっている。

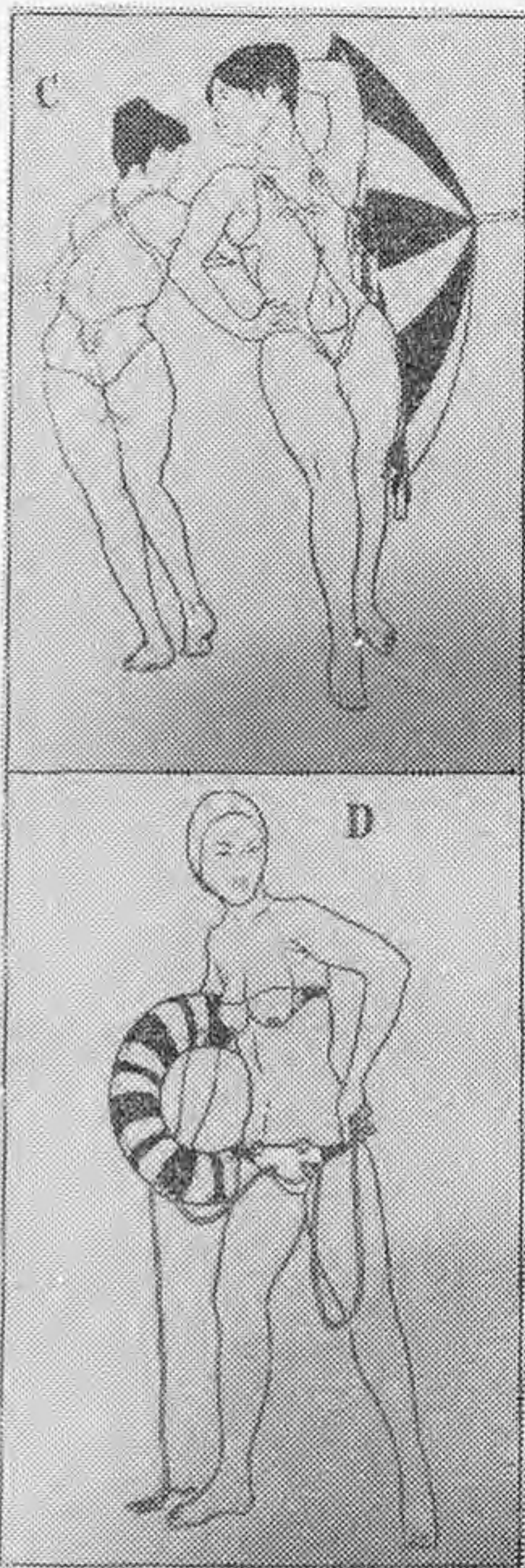
○三月二十日、NETアフターヌーンショウに、山形温海町と長崎式見町の女相撲の試合が出たそうである。TVをもたぬ私には洵に残念であった。サンデー毎日で知ったのであるが、ご覧の方、様子をおしらせ下さるまいか。

『夜の徒然草』水着シヨ一

(本文60頁参照)

中 宮 栄・画





菱縄マニアの失望

—映画「美女拷問」を観て—

早 木 夢 二

私は菱縄マニアであるから、映画を観る時にも、菱縄姿があるかどうか、一つのメドとしている。実際には仲々お目にかかれないから、自然と映画館から遠ざかってしまう。

然し、そうばかりもいつて居られないから、責めや縛りのある映画を追って、僅かにうつうつとした気持を晴らしている次第。

「美女拷問」では、当然、菱縄姿が観れるものと独り決めていた

ので、すこぶる失望した。

内容も知らずに、封切りと同時にびついたのだが、小森監監の「日本拷問刑罰史」や「拷問」を連想、早合点したのが悪かった。

その一週間程前に「拷問」を観た印象から、自然そういう独り合点に落込んだのだと思うのだが、「拷問」にはそれがあった。小森流とか何とかいわれて、乳首をかくすようにして掛けられた菱縄には、色々と批判もあるようだが、

何といっても湯文字一枚の裸形に菱縄縛りというのは、珍重に値するものだろう。私は、この姿を追って五回、映画館に通ったのだ。

「美女拷問」は、そのストーリーからいって、菱縄がないのも当然とも思えるが、目指すものがなく失望させられたから云う訳ではないが、むしろ「美女の復讐」とでも題した方がふさわしく、スリルもサスペンスもなく、私からみれば、甚だお粗末といわざるを得ないものだ。

なるほど、美女の拷問場面はたしかにある。猪吊りや、竹刀打、足と手を括り合せての捻じ上げなど、あの手、この手の拷問を観せてはくれるが、やたらと騒々しく

で、肌の苔痕や刀傷も、カラーであるだけに却ってワザとらしくみえ、迫真力に乏しく思えた。

その他に観せる拷問シーンも、同監督の前作「惨忍」の亜流で、いかに拷問が主題でないにしても「美女拷問」の題名に反することおびただし。

縛りもよくない。私の望む菱縄は別としても、縛る以上はもっと美しさを楽しませてくれてもよいだろう。縛る側が、片腕の元憲兵だから、旨く縛れないのだというのだろうか？

小森監督は、前二作のように、拷問の形がある程度完成された江戸時代のものを中心として、女の皮を破り肉を削り、心をつき破るような拷問の無残さ、陰湿さを追求して貰いたいと思う。例えば、歴史上で有名な、明治の初期、広沢参議暗殺事件容疑者、二十三回も拷問の座に据えられたという妾の姿など、うってつけの題材ではないだろうか。

参議の妾ともなれば、さぞかし美人であつただろうし、これこそ本場の「美女拷問」の図が出来るに違いないと思う。尤も、菱縄のシーンをふんだんに出して貰うこと勿論である。

短 信 注 来

……△近況報告▽

漂 泊 の 思 い

中 河 恵 子

「月日は百代の過客にして、行き交う人もまた旅人なり」と松尾芭蕉は『奥の細道』で言っており、私が、私も春休みを前にした頃より、しきりに旅へ出てみたいという気持が動いて、いても立ってもおられないという例の放浪癖の虫が頭をもたげてきました。

休みになるのを待ちかねて、旅の支度もそこそこに、琵琶湖北岸から敦賀へと足を伸ばしました。もう何度も何度も通った道ですが、この表日本から裏日本へ通ずる北国街道のなんとなく、うらさびれた風景が心にしみるようで印象に残っています。敦賀の駅前で車を停めて駅弁と熱いお茶を買っていると、低くたれこめた空からパラパラと雨が落ちてきました。

車の中で食事をしていきますと、次第に雨あしが激しくなり、敦賀を出て、有料道路の手前の杉津までくると、日本海からまともに受ける潮風と混って、横なぐりに雨

が吹きつけてきます。岩をかむ白波がどうというすさまじい音を立てて灰色の空に舞い上って、そのまま海面に散ってゆきます。海沿いのモーテルには一台の車も停っていないません。私は小高いモーテルの駐車場に車を置いて、レインコートにフードを目深にかぶって断崖の上に立ってみました。

周期的に襲ってくる、あの被虐の空想癖が再び私の身体に巣喰ってきたのでしょうか。発作の起った私でしたら、どんなにひどい縛られ方であっても耐えることが出来るような気がします。松尾芭蕉もこの荒れ狂った北陸への道を辿ったのだらうか、と考えていたさっきの私とは裏腹に、今の私は素裸にむかれて、雨にうたれながら松の樹に縛られていたいという気が胸がしきりに湧いてきて、まるで胸がしめつけられるように切なく思われてくるのです。

国道八号線は故郷への道です。

早く国へ帰りたいたいという心とは反対に、私の心の中には、数日前の緊縛プレイの思い出が心と身体をしびれさせ、もう一度京阪神へとって返えしたいという後髪をひかれる思いがするのです。大阪で、京都で、神戸で、読者の方々と逢って話し合ったプレイをしたりした数々の思い出が、しきりに目に浮んで仕方ないのです。

有料道路を過ぎ

たあたりから道は海岸をそれてやがて武生です。鯖江、福井市と雨のせいか車も少なくて加賀へ着いたのは、午後一時半でした。目ざす小松市はもう指呼の間です。私の放浪癖は満足させられそうです。祖父父母からお小使いを頂いたら、当分春休みの間は方々を走り回れます。

この頃の私を悩ませているものに大阪の叔母への養女の話があり



ます。もう子供を生むという見込みのない叔母は、早く家へ来るようにと矢の催促なのです。私は結婚するまでは両親の家にいたいのですが、飛んで回ってばかりいる私に、両親までが早く叔母の家へ行くようにとすすめる始末です。

若し私の性癖を理解してくれる青年があれば、一緒に叔母の家を継いでもいいのですが、小糠三合持てば何んとかいうように、養子

に来るような人には余りしつかりした方がおられないような気がします。私が国文科専攻のせいかもしれないませんが、今まで頂いた同好の方々からのお便りの中で、一番嫌だったのは、誤字やあて字を平気で使っていたり、人のあること、手紙の中に一つでも間違った字が混っていたり文法にかなわない文章を書いていられると、もうそれだけで尊敬の念が薄らいで

しまいます。正しい日本文を書くということは最も初歩的な教養じゃないかしらと、生意気なことを思ったりしています。でも、これは私の性分なので生意気だと言われても直らないと思います。いずれまた、プレイのお友達の方々のことなども、お便りしたいと思っています。その節はどうかよろしく。

関谷夫人讃

菅 敏彦

豊かな表情は僕の心を掴んで女神のようにほえんでいる。



奇妙な安全ベルトの広告

自動車の安全ベルトの広告に、サドマゾ的な心理効果をあたえる写真がついに使用された。若い女を裸にして自動車のシートにすわらせ、安全ベルトで彼女の体をシートの背に、がんにがらめに縛りつけたところを撮った写真だ。

彼女はエクスタシーの表情を浮かべて、ぐったりしていて、広告コピーには「女性には、縛られることをほんとは望んでいるのです」と書いてある。アメリカの一部の州で、ひと月ほど前に現われた。△平凡パンチ・5月22日号▽

“残酷モード” 流行のきざし

ここ二、三年、パリを中心にヨーロッパで流行しているピアス・イヤリングがアメリカ経由で日本



最近の週刊誌から

あぶ・

あ・ら・かると

村中耕治

にも上陸、すでに上野のデパートなどに、ポツポツお目見えしている。

このピアスというのは、英語で「刺し通す」の意。耳たぶに直径二ミリの穴をあけて輪を通す「残酷」なもの。デパートとタイアップした病院で、わずか五分たらずで両耳に穴をあけてくれる。

「従来のネジ止めだと耳の後ろにネジが見え、すっきりしません。ピアスなら、その点が解消され、より魅力的」(クイーン・チャールズ・キングススクール・芝山幸子さん)とのこと。

日本では六百円から四千円ぐらいまでの大衆品を売り出すというが、この耳たぶに穴をあける「残酷モード」、意外と流行しそうな気配である。△週刊現代・5月22日号▽



女子乗馬考

並にサド女性の思い出

岡 辰 彦

女子の乗馬の記事が、よく「キク」に書かれてあるが、今から四十年位い昔のことを考えると、幾多、女子の乗馬が盛んであったことが思い出される。

第一には、徳川慶喜公の令孫、

◎徳川喜和子姫

当時、英国式山高帽に白の乗馬ズボン、ピカピカのブーツを履かれ、颯爽として都内をギャロップされた。尤も、悪いムシのつくのを警戒してか、常に女中か書生が馬の後に従い、テクテク歩いてい

る姿は、見るも気の毒な態であった。

次には、秋元春朝子爵の姫様

◎秋本英子様（ノーブル、魅力的）

三菱重役令嬢

◎谷井俊子様（セキデュアル・レ

ディ）

阿部喜一郎博士令嬢

◎安部亮子様（サディステイック

レディ）

日本橋、村上電話店令嬢

◎村上愛子様（サディステイック

グラマー・レディ）

当時、東京乗馬クラブは、牛込若松町にあり、現在云うところのグラマー、金持や名士の令嬢達がゾクゾクと、馬に跨って走っておられたものだ。それを、私は柵の下でシャガンで見上げていた訳だが、ほんとうに楽しかった。馬上から、この汚いヤツめ、とばかりに見下しながら、大きなお尻をどっかと鞍に据えて、太股で馬を制御せられるサド女性達の勇姿は、ほんとに懐かしい思い出となって瞼に浮ぶ。

◎高島愛子嬢

身長五尺四、五寸、体重十七貫くらいあり、当時花形のアメリカ映画女優、ルス・ローランドそっくりのおもかげで、代々木の原をよくとばしていた。

生来のサディストで、他の女優の額を、靴で蹴とばして傷つけたり男優達の肩車に乗ったりで、大変な女性だった。

後年、気が狂って、カンイン宮の自動車に石を投げつけたりしたが、とうとう狂ったまま死んだそう、美女の末路としては憐れこの上もない。梅毒の遺伝かも知れない。

サド、マゾ等は新しい言葉であ

るが、実質的には昔から変らないもので、谷崎潤一郎の小説には、早くから女の子のネクタールをのむ少年の話などが登場していることは、余りにも有名である。

昔、富士登山をした時に、登山中の強力な背の荷の上に、二十二三の娘が乗っているのに出合ったことがある。相当のグラマーであったが、大きく股を拡げ、大いばりで強力な苦痛など意に介してない様子に、随分、タマゲたり、呆れたりしたものだった。

又、駅の前がきなどでも、台上に傲然とソリ返って磨かせている女なども、その気になればすぐサディステイックな女性という感じになる。

近頃では、トルコ風呂で、タタキの上で仰向けになり、トルコ嬢のネクタールを要求する客がかなり居るとか。直接にトルコ嬢から聞いたのだから信用出来ると思うが、正にマゾの花盛りだ。

このトルコ嬢も又、なかなかの女傑で、一度、しつこい客の要求を断りきれずに応じた時、口の中より、狙いを鼻に定めてとばしたところ、客は頭をかかえてキリキリ舞をしたそうである。罪なことをするトルコ嬢もいたものだ。

奇譚クラブ

昭和42年8月号

(1967年・8月号<第21巻第8号・通刊第230号>)

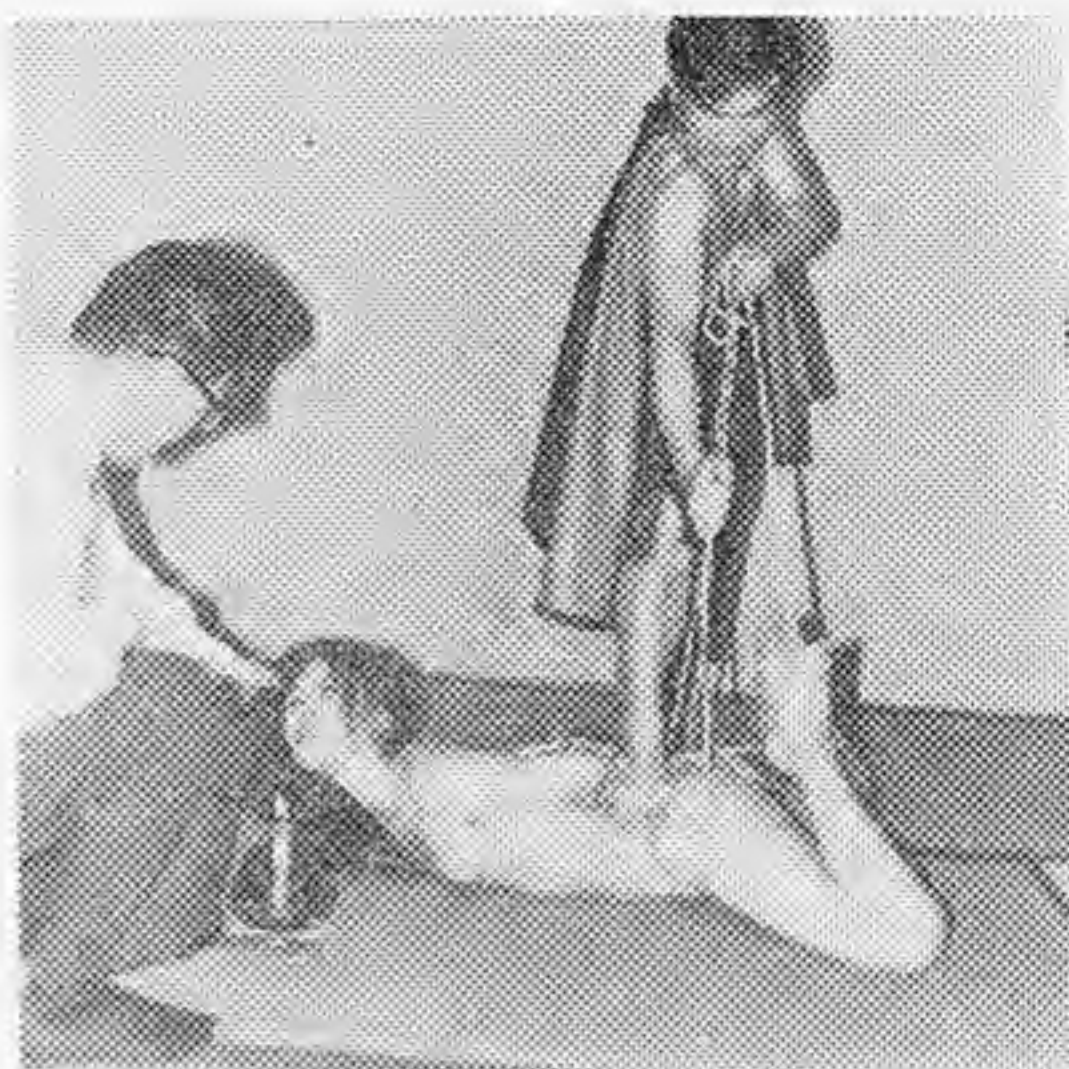


本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



SMカメラ・ハント

真夜中の宴

(うたげ)

秋山美智夫・ローズ秋山夫妻の巻

辻 村 隆

京都大宮劇場出演中の秋山夫妻に、四月九日インタビューした私は、中二日おいて、四月十二日の夜、再び彼等を大阪港区のダイコ

ーミュージックに、箕田編集長と共に訪問していた。残酷ショウに憑かれたように、私はここ数日、彼等のあとを追っている恰好だった。昨日電話しておいたので、ミュージックの入口で来意を告げると、入口附近におった若い人がすぐ取次いでくれた。

「先日の約束通り、今夜は編集長をおつれし

たのですが、プレイの方、お差支えありませんか？」

「ええ、いいですとも、ただ私の舞台が、九時二十分頃から二十五分許りかかりますが構いませんでしょうか」

「勿論そのつもりで来ました。お疲れさまでしょうが、よろしくお願いします」

「じゃあ、十時頃劇場の入口でお待合せしましょう」

私達は尚も、入口の辺りで声をひそませて

喋べり、箕田編集長を彼に紹介した。その時奥の方からダイコーミュージックのママさんが出てきた。

「さあさあ、遠慮せずにお這入りになって下さい。立ち話もなんでしょうから……」

言われる俚に、好意に甘えて、私達はミュージックの傍らの、ミュージック喫茶のボックスに腰を降す。ママさんは私等二人のために、わざわざ紅茶を入れて下さって、気さくな調子で話しかけてきた。

「奇譚クラブは眼を通してゐるんですよ。辻村さんのお名前は、以前から存じていましたが、まあこれを機会に、お互いにいろいろと御協力致しましょう」

「ええ、こちらの方こそ……。実は秋山さんから聞きかと思ひますが、今夜御無理を申しましてネ。兎も角奇クの読者の間では、凄いい評判なんです。それで一応お目にかかつていろいろと話をお聞きして、大々的に秋山夫妻のことを書いてみたいと思つてお伺ひしたのです」

「奇クは私も拝見しましたが、何しろ秋山さんの初舞台がうちなんでしょう。それだけに人気が出てきますと私も嬉しくつてネ。初演の時にくらべたら、随分演技に熱が入ってきましてよ。およろしければお待ちになる間少し舞台の方を、のぞいてゆかれませんか？」

親切なママさんは、秋山夫妻のことになると俄然協力的であつた。ゆく先きぎきの劇場側の人々に愛される秋山夫妻の人柄が、ママさんの言葉のはしほしからも窺がわれた。大宮劇場の奥さんも、ダイコームニョジックのママさんも、秋山夫妻に対しては心から好意を持っているらしいことが、私達への応接にも現われていた。ママさんの言葉に甘えて、

私達は謝意を表して客席の方へ廻つた。

大阪市内の都心からやや外れた、大阪港に近いこの劇場の客は、大宮劇場にくらべて若い観客が多く、憩いのひとときを、安い料金で充分堪能しているかに見えた。以前はキャバレーであつたのをミュージック劇場に改造したせいも、舞台は狭く、エプロンステージへ到る数米の間に、二本の鉄筋の柱がデンと遮ぎり、誠に交错的な構えであるが、それを取巻くようにしつらえてある席の感じは、さながらフロアーショウめいて、ダンサーと客が、じかに触れ合い、なじみ易い雰囲気を感じ出してゐた。ヌードダンサー達の出演や退場も、客の間をかきわけてゆくという、下町めいた親しみがあつた。なじみの観客も相当あるらしく、ミュージック喫茶では、扮装の尽のストリッパーが客達と、ジュースやコーヒーをのみ交わしているといった愉しい気易さである。踊りにつれて観客は伴奏に合わせ手を叩き、声をあげ、他人同志の寄り集りである筈の観客同志が、場内ではまるで親しい友達のように相和しているのも、私には珍しい風景に思われた。いかにも庶民の憩いと慰めの場所といった感じである。このようなミュージック劇場は、一寸世間でも珍らしい存在ではなからうか。

ストリッパー嬢も又、それぞれの持味を出して声援に応え、サービスにこれつとめて熱演していた。客とストリッパーが一体となって融和している感じで、私と箕田編集長はそのやりとりを微笑ましく眺めていた。

九時三十分、予定通り残酷ショウが開始された。中央の円型ステージにマットレスが持たされ、名実共に衆人環視の中でローズ秋山の、激しい踊りが始まつた。三日前には、かなり後部で拝見していたが、今夜は眼前二、三尺の位置で、手にとるようにじかに見られた。進行は寸分違わず、始めての観客には、動作や振舞いが、その場限りの様に思われても、秋山夫妻にとっては、綿密にして緻密な計算の下に、ショウは進行していった。円型ステージの狭い上でのショウなので、彼は鞭を振り上げるのに困難を感じていたが、容赦なく一撃し、それが覗き込んでゐるうしろの客の顔すれすれに飛来したので、見てゐる方の私がハツとする。酔つた一人の客が、半畳めいた言葉を発していたが、するどい秋山美智夫の眼が、その客にそそがれ、さつと低い叱咤の声でたしなめた。酔客は黙ってしまった。彼の氣迫にすっかり氣圧されてしまった

のだろう。箕田編集長も、流石にウームと唸ったようだった。

「うん、うまい鞭捌きだ！」

三旋、五旋して唸る鞭のたくみさに、私も息をのんだ。まかり間違って直撃すれば、ローズ秋山の皮膚は、ズタズタに千切れて、鮮血がほとばしるかも知れない、緊張とスリルの連続——、ストリップパーにはあれ程騒いでいた観客が、シーンとなって、夫妻の一挙一動に魅入られていた。

或いは私と箕田氏を意識したのか、殊更に激しく思われた。それを実証するように、シヨウが終って立上ったローズ秋山が、瞬間、よろよろと二歩よろめいて一礼した。

押えていた溜息がドッと洩れて、一斉に拍手。人々を魅りようし尽して二人は消えた。

「ウン、驚いた。聞きしに勝るね」

大概のことには驚かぬ箕田氏が、ややあつて感嘆の声を洩らした。

出口に向う時、喫茶の前に立ってママさんにもう一度御礼を申し上げる。

「いずれ、一度ゆっくりお目にかかりましょうね。私も興味あることだから——」

ニコやかに彼女は私の肩をポンと叩いて、意味ありげな微笑みを洩らした。SMについ

て語り合おうというのであろうか。私は気さくなこのママさんに同好の親しみを覚えた。

ラストのストリップパーの踊りがもう一幕あるらしかったが、大半の客は残酷シヨウで散っていった。嘸やりづらい事であろう。

× × ×

午後十時、劇場の傍らのうす暗い路肩に止めて待つ編集長の車に、化粧を落して小道具を抱えた秋山夫妻を迎え、私は助手席に乗込んだ。

編集長が会合によく使用する、大名料理のHが、夜のプレイのため予約してあった。

「どうもお待たせしちゃって——お蔭様で大入袋が出ました」

「そりゃよかったですね、シヨウのあとでお疲れなのに、御無理いつてどうも。今夜の出来栄は、何か大宮劇場の時より一段と勝っていたように思いましたよ」

「いえ、私達にしてみれば、どこがいい、どこが悪いという事はないんですよ。御覧になった辻村さんが、極く近くから見られたので、それだけ迫力を感じられたのでしょう」

そうかも知れない。シヨウマン精神に徹している彼の事だから、演技に甲乙をつける筈はあるまい。秋山夫人が横から口を挟んだ。

「マットレスに白いシート縫いつけていただくようお願いしてあるのに、やはりダメでしたわね。いくら頼んでも仲々実行して下さらないのネ」

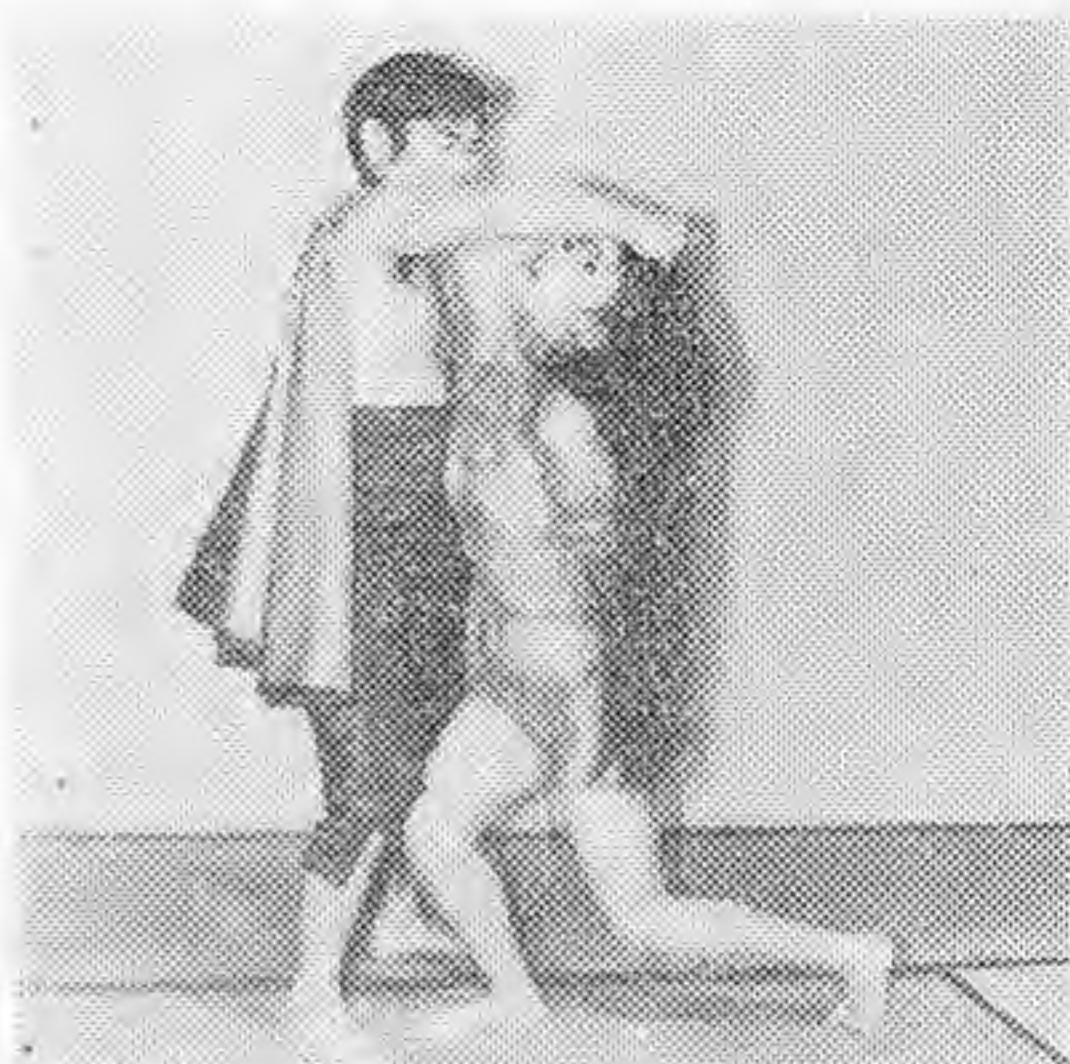
清潔感を出すためと、咄嗟に考えたが、そんな問題ではないらしい。私に聞かすように秋山氏は夫人の言葉につないだ。

「何しろ激しい動きでしょう。だから三つ折れのマットレスをその俣出されると危険なんです。縛った妻の体を、引き摺んだり、押し転がしたりする時、まかり間違つてマットレスの折目に足を挟んだりすると、捻挫するんです。鞭打ちにつれて妻が跳躍するときなんかヒヤヒヤするんですよ」

成程そういうことだったのか。私達見ていて全然気付かないそんな面にも、夫妻のプレイへの細かい配慮があったのだ。

「先日、くわしく聞くのを忘れたのですが、大宮劇場の奥さんが、ローソク使用の点で、パラフィンをどうか仰有ったそうですが、あれはどういうことなんですか？」

「ええ、あれなんです。普通市販のローソクは夏季にも堪えるように作ってあるので、熱度が高いんです。たしか百四十度ぐらいあるそうです。それをパラフィンでやれば、熱



度が低いから、熱さを余り感じないだろうってアドバイスしていただいたのですが、実はこの事は、名古屋の或るお医者様のファンの方からも仰有っていただいたのです。低熱のパラフィンを使用して、もっと皰瘡を沢山かけるようにして、それを剥ぐと、あたかも皮膚がはがれるように見えるんじゃないかっていわれたのです。しかし相変わらず、市販のローソクを使っていますがネ」

「奇クの読者の中には、本当に皰瘡を落しているのかって、書いた人もいましたよ」
「そう思われるのは残念です。背後から見

人は、皰瘡を落す時がよく見えないから、如何にも演技の様に思うのですネ。それに皰瘡が透明で、体にへばりついていてもよく分らないですからね。だから風のある時なんかは都合いいんです、炎が風に流れて、傾けた皰瘡とのかすと黒くなるんです。だからポトポト落下する皰瘡が黒ずんでいるから、かなり後ろの方からも、皰瘡がよく見分けられるのですよ」

秋山氏はあらゆる面に於いて研究しているかに思われた。なればこそ迫力と感動をよぶゆえんかも知れない。

車は寝静まった夜の街を走っている。編集長は運転に懸命で、私達の会話が耳に入るか、入らぬのか、話に言葉を挟まず、黙々と前方を直視していた。

秋山夫妻のシヨウに対する、真剣なアドバイスは、かなりあちこちから寄せられているらしかった。それは偏に夫妻の、舞台での飽くなき追求と、真摯なるプレイに対する賜ものに外ならなかった。

通天閣の赤い灯が見えた。

「あれが通天閣ですよ」

言わずもがなのことをいったものだ。

「ええよく存じています。私達仕事のこと

この辺りへ三度許り来たものですから……この近くで、シヨウ用のいろいろ細かい品を売っているものですから。今妻の使っているのは手製なんですけど……」

「あの奥さんのつけていらっしゃるバタフライ、あれの名称は何ていうんです。バタフライっていうと、ストリップの使う、キラキラした飾りもののついたのを指すのじゃないんですかね」

「楽屋用語でパンツを逆さにした、ツンパって言うのですが、もう一つ下の、ほんの蔽う程度のものでツンパの下の最後のものを、通称『下ツン』って言うんです。ツンパも短かくなって『ツン』なんて言います」

なる程ツンパの下で下ツンか、しかしいきなり、下ツン一枚で、なんて書くと何か分らないだろうと私は苦笑した。

静まり返った天王寺公園の入口に、大名料理Hはあった。時間は十一時前に近かった。

事務服を着た、夜勤の女の子が、やや眠たげな顔で現われた。

案内された大名の居間は芸州侯の間。窓を開くと、夜気と共に通天閣が真すぐに視界にそびえ立っていた。

小やみの雨が、又しても音もなくシトシト

と降り出していた。

× × ×

編集長の心ずくしで、舟型の木皿一杯に盛られた刺身と、うにの生身を肴に私達はビールで乾盃していた。

やがて、舞台でのショウそのままが、私と編集長の、たった二人の観客の前で開始されるようとしている。そして劇場では絶対禁制のカメラが彼等夫妻のプレイの隅々までも飽くなき探求を始めようとしている。

編集長も私も、心は既にプレイに走っていた。しかし、激しい舞台を済まして、そのすぐ車中の人となり、今ここまで運ばれて来た秋山夫妻の疲労を思う時、その言葉は義理にでも口に出すべきではなかった。十分の思いやりといったわりと、或る程度の放談の休息が必要であった。逸る心を押え、さりげなくビールをそそぎ、ウラ話に華を咲かす。

箕田編集長は心得て、お喋べりは専ら私一人に任せ、自分はさらりと聞き役に廻っている賢明さであった。四月九日の対談で、喜びの余り、徳永昭三が、私以上によく彼等と喋べったのとは対照的であった。

「例の操ぐり責めの羽毛ですが、あれはもう随分古くなったので、新調したのがやっ」と間

に合ったのですが、今夜が使い初めですよ」

真白いふわふわした、その毛はまるで化繊のように見えた。私は手にとってみて、しげしげと眺め

「本当の羽毛なんですか？」

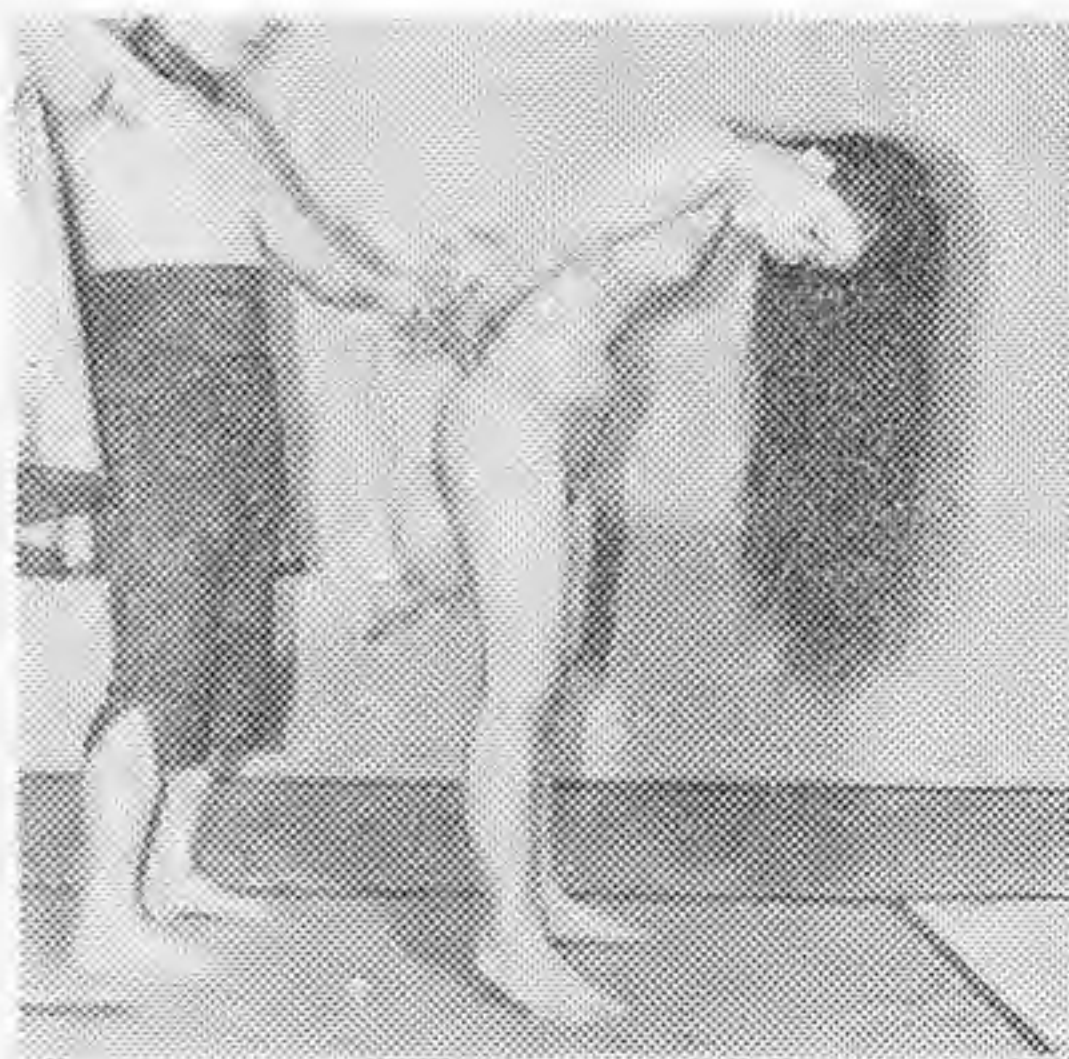
「そりゃ勿論です。ダチョウの羽で、随分高価なんですよ」

彼はその値を私に告げた。この羽毛一枚それ程するものなのか。私は今更乍ら、そうした品に大金を投じる、彼のショウに徹した根性に感嘆した。

「鞭を見て下さい。どうですか、すごく太くて硬いでしょう。運悪く昨日のダイコーの初日の二回目に、腰に当てちゃいましたネ。家内が昨夜一晩中当たった個所が疼いて、ずっと冷やしていました。考えてみれば命がけなんですよ」

「ダイコーのような狭いホールでは、思い切って鞭を振った場合、お客さんに当る時だっであるでしょう？」

「よく、ありますね。しかし謝りません。わざと知らぬ顔をして無視して、演技をつづけているのです。中には怒る客もあります。その時は初めてお詫びします。しかしこれが宣伝になるのですネ。鞭を当てられた客は、



鞭の強さがどんなものか一番よく分った筈です。その激しさを又誰かに宣伝してくれます。そんな凄い鞭を使ってなら、こりゃ本物だ、よし一度見にいったやろうということになります」

「当てられたお客さんは、いい面の皮——」
「ショウに関してもいろいろとアドバイスいたのですが、先日東映の監督部のある方にお目にかかった時は、鞭打ちに女は泣けと仰有るのです。成程、涙は出るものでしょうが、映画やテレビと違って、涙をつけるなんてことは出来やしないし、どう仕様もない



んです。そのかたもまあ出来得ればと仰有ってましたが、僅か三十分そこその、しかも一連した動きのショウでは無理なんですね。有難いアドバイスとは思いますが——」

「無理でしょうね。しかし見ている人は随分とあなた達のショウに対して関心を示すわけですね。あれこれ言ってもらえるだけ、考えようによっては幸せですよ。私の拙ないフォトも今夜は、何かの御参考にと持って来ましたが、御覧になりますか」

「ああ、有難いですね。是非」

私は『甘い鞭』の関谷富佐子の鞭打ち瞬間

の、あの切迫のフォトを、『陶酔の乳房』の河森真理子の数十葉を、更に先日撮った魔子のカラー緊縛フォト、私の家内の雪責めのフォトなどを夫妻の前に拡げた。

秋山夫妻は、或いは感嘆し、或いは黙って興深げに眺め、雪責めフォトにはショックだと嗟嘆した。

編集長は好意で、秋山夫妻の為に、奇クのある奇クを進呈した。関連記事の頁には、親切にも紙片が挟み込まれてあった。

秋山夫人はその一冊を早速手にとって開いた。

「まあ、このスケッチ、よく書けています」と、あなた御覧になって……」

「どれどれ、ウーン、なかなか、うまいですね。細かい処をよく観察していますな」

それは五月号の、鰐喜敬一氏のサロンの小文であった。彼はそれを喰い入るように読み下していた。

「なる程、鳥取の方ですね。鳥取の方へ巡業にいった時、鳥取の劇場では、私達のようなショウは始めてだったのですね。いろいろ説明しまして、どうやら掛りましたが、かなり反響があって喜んでいただきました。何か

ここに倉吉の南恵子さんとか書いてありますが、倉吉の方へも巡業したんですよ」

「この鰐喜さんの文では、あなた達が夫婦なればこそ、あれだけのショウが可能だと強調しておられますが、それは確かですネ。他同志では到底あはいけないと思いますよ」

私達、夢中で話すうち、秋山夫人はさりげなく、メイキャップを始め出していた。頃合はよしと、編集長もカメラをとり出しにかかる。私も卑しく呑み耽っていたビールの手をとめて、あわてて支度にかかる。時計をみると午前零時に近かった。刺身の旨さについて呑む方に心を奪われていたらしい。

大名造りの居間に、二人のショウプレイはふさわしくなかった。私達は二の間の壁際をバックにすることにきめた。

額を外し、茶簞笥を移動させ、テレビを隅におしやり、兎も角プレイの準備は出来た。

夜寒が部屋を冷めたくしていた。ガスストーブに火を点じ、私達は秋山夫妻の支度を待つのみとなった。私は三十五ミリカメラとストロボ。編集長は六×六判カメラとストロボという、どちらも軽装だった。

緑のグラスにローソクは点じられ、黒いサタンの衣裳を纏った秋山氏と、下ツン一枚の

みの秋山夫人は、二の間に立った。

長い腰まで垂れた黒髪が妖しく震え、今正にプレイの幕は切って落されようとしている。

× × ×

秋山氏は舞台での愛用の縄をとり上げた。

「あッ、一寸待って下さい。舞台と違ってフオトをとりますから、少し時間がかかりますので、その縄だと、長時間では相当こたえるでしょう。編集長の持ってこられた方を使われてはどうですか？」

「そうしましょう」

彼は縄を捨てた。パラリと落ちる感じで、

私はそれを拾い上げてみた。汗と凝脂で、縄はまるで電気コードの様に強靱にかたくなっていた。秋山氏は編集長の差出す、いつものダンダラ縋のロープを手にとって、何だこりゃという顔付になった。

「御覧、ホレ、こんなに綿のようにフワフワだよ。これなら君、全然痛くないよ」

いつも固いコードのような縄を使っているだけに、編集長の縄は柔かくて、余りにも飽気なかったらしい。しかし、この縄とて、結構しまり、緊縛には大半の女性は呻いてきたのであるが――。

「こんな縄なら、いくらでも辛抱出来るんですけどね」

秋山夫人もダンダラロープを手にとってしげしげと眺めていた。

「よかったら進呈しましょうか」

編集長はあっさり言った。何しろ大巻一束買い込んで、小切りにして使っているシロモノだから、秋山夫妻が喜ぶのなら、記念に呉れても惜しくないと思ったのだろう。

「ハア、有難いですね。新しい緊縛の研究の折には、是非この方を使ってやることにします。その方が長時間緊縛に堪えられそうで

すから」

「奇クにはこの縄の方がお馴染みで、如何にも奇ク向きでいいですよ」

私はこのなじみの縄で、秋山夫人の種々の緊縛を見られることが嬉しかった。

「じゃあ、縛りますから、撮る時は合図して下さいよ、構えますから。最初は舞台でやる方法でゆきましょうか」

「そうして下さい」

彼は夫人の後ろに廻ると、もう右手首に縄を巻きつけていた。眼にも止まらぬ早業である。私はそこに典型的な夫婦プレーを見た。

縛る夫、縛られる妻の、二人の呼吸が心憎いまでにピッタリと合って、ほんの三十秒たらずで、後手縛りに胸縄をかけ、深々と二の腕にくいこんだ、強烈な縛りの一ポーズが現出した。

その見事さ、早業、手際わのよさに、編集長も私も、半ば飽気にとられ、ポカンとして見惚れていた。スピードを要求されるショウマンとして、この第一歩でモタついては、ショウはだれてしまうことだろう。そういえば、向一也が青木順子を縛る最初の縄捌きも秋山夫妻と同様、かなり素早い動作を示したことを私は想い出していた。



「さあ、どうぞ撮って下さい、構えますからね——」

黒いマントを肩より低い、縄尻をとった秋山氏の小柄の体が、急に大きく見えてくる。声につられ、ハッと我に還って、あわててカメラを構える。緊縛の第一段階のポーズで、秋山夫人はぐっとのけぞる。

「じゃあ、一、二の三ッ」

えいッという裂帛の気合がかかって、一瞬彼の形相は鋭く変化し、夫人は悶絶の様相をさっと現わして、軽い呻きを洩らした。

私達二人のストロボは、忽ち部屋を瞬間的に白く光らせ、交叉して明滅する。

舞台での型通りに、秋山氏の両手の縄は、夫人の服を通して、太腿で左右に分れて引絞られた。ウント力を入れるたび、夫人の体はぐいと持ち上り、縄は深深と両腿に喰い込んだ。両股に縄を喰い込ませて、更にその余白は、胸がくびれるぐらいに二重に強く廻されてしめつけられた。

立った俣の姿の鮮やかな後手に、髪を掴んでの押え込みに、種々のポーズが、私や箕田氏の注文通り、実に手際よく敏捷に型にきまっ

てゆく。懊惱し、責めにのたうつ妻を、夫は容赦も

なく髪を握って引曳り廻し、押し倒し、倒れた彼女を髪を掴んでじりじり抱きよせて起してゆく。

抱き起して、縄尻をうしろに引くと、夫人の体はのけぞって、夫の胸に倒れ込もうとする。倒れ込む体をくると一廻転させると、犂々と縛られた両手の指のあがきが、必死となって指先に力をいれていることを、私達にありありと見せつけてくれる。

のけぞった腰が崩れ、夫人はうつぶせに体をくねらせて、夫の前にかがみ込むように伏してしまふ。いつ廻ったのか、夫の手の縄は、夫人の股を通して背に廻り、夫人の背に足をのせるや、縄を思いきって引き絞る。

四ツ這いの股の間から、縄はぐいと回みにかんぼつして、嗜虐にめくらむ光景が展開された。二度、三度、しごくようにして尚も引き絞ったとき、押し殺した秋山夫人の、たえだえな悲鳴が「ヒーッ」と洩れた。

両股縛りの縄は双丘でくびれ、ヒクヒクと痛みに堪えかねてうごめいていた。

長い黒髪は藻と乱れ、夫人の吐息は激しかった。シヨウには到底見られぬ、二人きりのSMのプレイに耽溺する真剣さが漲り溢れていた。秋山氏のひたいに玉の汗が光った。

私達が黙っている限り、彼等は止めようとしなかった。この余りにもS的なシーンを、いつまでも続けてゆく腹らしかった。

「どうです、ここで一度休みませんか？」思わず私は声をかける、緊迫したSMプレイの重圧に耐えかねたように——。箕田氏もうなづいた。

「ハア、私達ならいいですよ」

秋山氏は手の掌で汗を拭い拭い、幾分息を弾ませていた。彼は素早く妻の縄を解いた。

「奥さん、痛くありませんか？」

「私なら大丈夫ですの、御心配はいりませんわ。シヨウの時の縄は、もっと痛くて辛いのですよ」

豊かな長い黒髪をふり乱して、夫人は顔を上げると、私を見てニッコリ笑ってそういった。私はMじゃないと、判っきり宣言した夫人であるが、このSMのプレイに、長時間忍従し、屈辱にまみれて、緊縛の全裸のあられない肢体をさらし、のたうつ心に、果してM性がないといえるだろうか？夫人自身気付かぬうち、潜在的な被虐を喜ぶ心が、いつしかシヨウという名を藉りて、不知不識しき込んでいたのではなからうか。でないとするば、この様に歓喜として縛られ、歓喜にのた

うち乍ら責められる、その精神の分析が不可解なものになってしまふのだ。

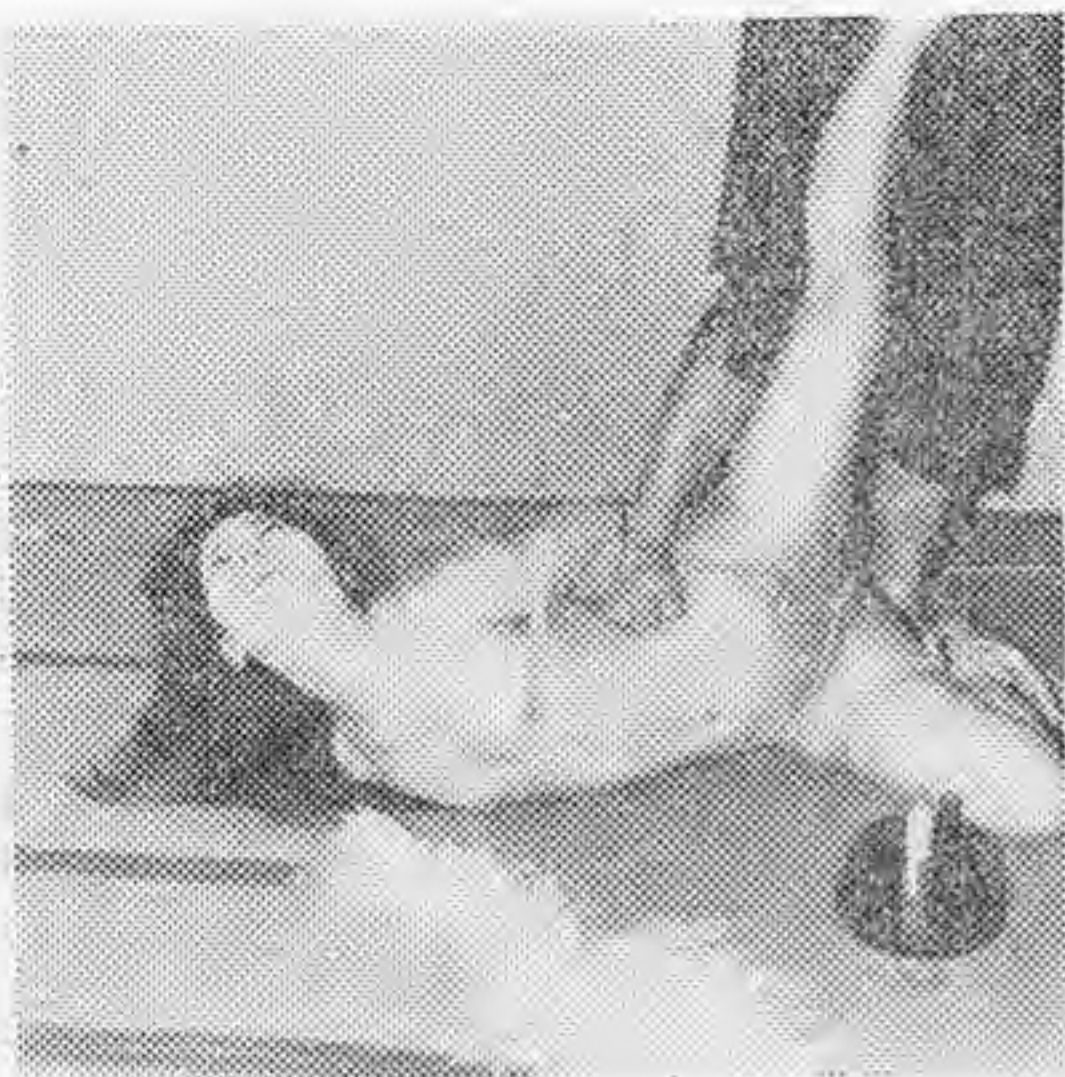
秋山氏は旨そうに煙草をくゆらせた。一責め責めたあとの、場馴れた解放感といったものが、次への構図を何か秘かに考えているのか、彼の眼は宙に浮いて、焦点が定まらなかった。

休憩はほんの煙草一服のひとときだった。

「始めましょうか——」

声をかけたのは、秋山氏自身からであった「ええ、どうぞお願いします」

「辻村さんに何か御注文ありませんか？」



「どうぞ、どうぞ、あなた方のいいように進行して下さい」

事実、私の口の挟む余地はなかった。私とても、過去十数年に亘り緊縛を続けてきたが、謂わばアマチュアの愉しみからに過ぎない。秋山夫妻の場合、始めたのは僅々二年来的ことであっても、SMのシヨウでメシをくっているプロであった。今の場合、アマはプロに対して口出しすべきでないのが礼儀というものであるか。

緊縛にも夫々の型があつて、皆それぞれの特色があるものだ。塚本流、箕田流、辻村流、山本流という風に、一見して、誰の縛りかは分ってくるが、秋山流は、未知なだけに、私達にしても新鮮であつたし、又、私の全然予測もしない様な緊縛が、彼の手によって実施されようとしているのだ。

緊縛においても、その人なりの、好みなり癖というものが如実に現われていた。

今、再度縄をとって秋山美智夫はローズ秋山の傍らに近寄っていった。

シヨウの第二景は始まろうとしている。

× × ×

秋山氏は、夫人の背後に廻り、豊かに乱れる黒髪ごと首から縄を交叉させて胸で引絞る

たが、何と思つたか、その縄を解いた。「どうしたのです？」

私は声をかける。

「いや、縄がすべりましてね。強く締まらないものだから、この僥倖でも、きつとゆるんでくるでしょう。一寸待って下さいよ。いい考えが浮かびましたから」

彼は待ったをかけて、改めて最初の手馴れた縛り方通り、いつものシヨウ式に縛り直した。後手の胸縄で、股縛りという型である。

彼はガラスの燭台を夫人の体の前にやる。

緑のグラスにローソクの炎は揺れて、妖しい雰囲気メラメラと立ち竈めてくる。

彼はその間の螢光灯のスイッチを降した。

仄暗い部屋に、夫人の白い女体が幻のように浮き上り、黒衣の彼の姿は、部屋の暗さに融け込んでいった。夫人の縛った体を抱きかかえて打伏せさせる、両足を揃えて上げさせて、揃えたまま縛り上げ、ぐいと引くと、あつと呻いて、彼女は弓なりにのけぞった。

横倒しにすると両足がぐっと吊り上った。

苦しげに呻く夫人を押えつけ、縄を引き絞って、背に秋山氏は片足をかける。打伏す夫人の顔を、黒髪を掴んで、ぐいと捻げる。夫人の表情は、眼は吊り上り、鼻翼はふくらんで

如何にも苦しげであった。彼が奇クのフオートに表情がないと喝破しただけあって、今、カメラに向う、夫妻の表情は、正に絶品のSMの耽溺を余すところなく伝えていた。

最近余り撮らなくなった私にして、いつしか三十六枚撮りのフィルムを早くも一本消費してしまった。十二枚とりの六×六判の編集長のカメラは誠に忙しい。五分も経てば、もう一巻の終りである。その都度フィルムの入換えに、秋山夫妻のプレイは中断される。ストロボの、三十秒足らずの充電すらもどか

しかった。連続して、次々と夫妻の変転極まりなき演技を追えないのが残念であった。それ程に二人のプレイは激しくも亦、伯仲して熱を帯びていた。責められる夫人、責める夫の呵呷の呼吸がピッタリと合って、壮快というか凄絶というか、息詰まるようなプレイの鮮烈さに、私も編集長も、完全に秋山夫妻のペースに捲きこまれていた。いつものカメラ・ハントなら、私自身が対象の女性を縛り、私自身プレイしているのであるが、彼等の場合、私は最早完全なる脇役のカメラマンに過ぎなかった。玉の汗を拭おうともせず、彼は変幻きわまりなき責めの新手を、次々と私達の眼前で展開していった。

男冥利につきる、プレイの鮮烈な変化と極致の連続であった。

逆海老にのけぞる夫人の唇から、絶えまなく苦悶の悲鳴が洩れた。

弓ぞりの尽、粗々しくグルリと体を反転させ、ククッと呻いて、夫人は思わず腰を持上げて体を浮かせる。何しろ両足を縛って引き絞った尽だからだ。両足を縛った縄が、後手に通して短かく繋がれているのだから、否でも腰を持ち上げずにはおられない体位であった。

下半身浮いた尽、夫は尚も責めの手をやめず、縄を持ち上げる。両足からつながった縄の引き揚げにつれて、夫人の体は無理な態勢で宙に浮く。

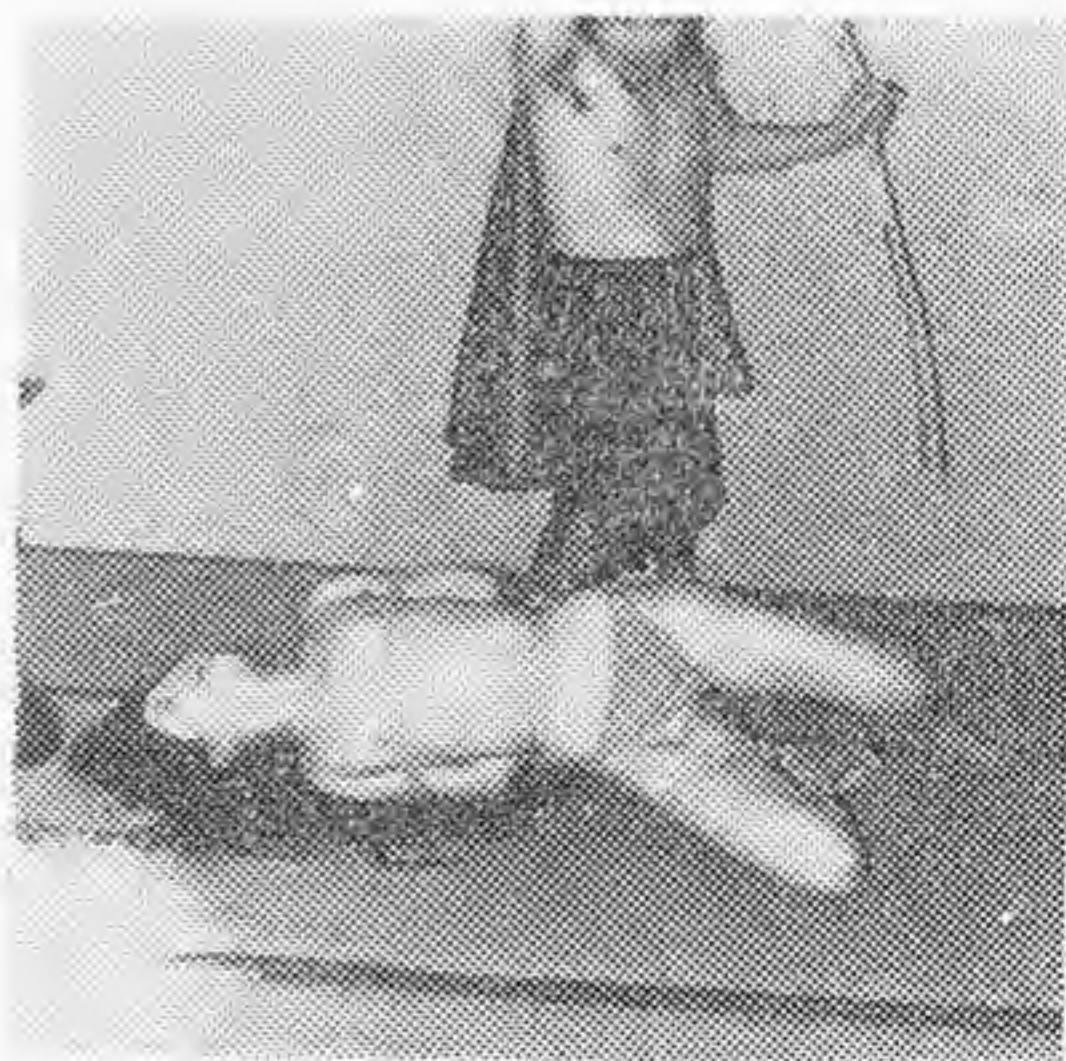
「ウッ、やめて……痛い、あッ、やめて」

思わずほとばしる様に彼女は絶叫した。緊縛したどのモデルにも試みなかった激しい責めの一瞬であった。

ニヤリと笑って、無言で秋山氏は縄を放した。フーッと深い溜息が彼女の口から洩れて出た。

「足の方は解いてやるよ。さあ、今度は俯伏せになって——」

矢継早やな彼の督促に、休む間もなく、夫



人は身をよじって両足を解かれた姿で俯伏した。縄の余白を右足を膝より折り曲げてぐるぐる巻きに巻いて縛ると、彼は妻の脇腹に足をしっかりとふまえ、えいッと気合もろとも、左足首を握って、股裂きのように、思い切って左脚を高々と持ち上げた。プロレスでよくやる股裂きのポーズだ。

演出の表情でない、真剣な苦痛が夫人の顔をよぎり、眉と眉の間に苦悶が流れ、歯を喰いしばって彼女はここの責めをこらえていた。「未だかッ！」

秋山氏の激しい気合で、その足首はねじら

れた。

「ウーッ、く、くるしい」

「どうだ、これで……」

「あッ、いやッ。く、くるしい、痛いわ……」

彼女の必死の形相は、ありありとうかがわれた。ここにはシヨウのような演出はないのだ。真夜中のこの部屋に充満する、残酷なプレイは、秋山氏の咄嗟の考えから出た、責めの悦虐の行為のあらわれに外ならないのだ。

カメラを握る私の鼓動すら妖しくときめき、息苦しいような悦虐のプレイの羅列であった。二人のプレイに最早シヨウ的な匂いも嘘もなかった。あるものは、真剣そのものの裸の真理を曝け出した、SとMの姿であった。

今夜始めて使うという、新品のダチヨウの羽毛のくすぐり責めに、夫人の体は激しくのたうち、うねり、波打った。押し殺した嗚咽の呻きは、快楽に哭いているかにすら途切れ聞こえた。サラサラと微かな音が、シンとした深夜の処刑の間に、さざなみのように揺れて震えて伝わっていた。

身をよじり、のたうって叫喚する夫人の、クククッという、なまめきを帯びた叫びは私の体自身、コソコソと腋下を擦ぐられる搔

痒すら感じさせるのであった。

「そろそろ鞭打ちを始めましょうか。少々音がしますが、差支えありませんでしょうか」

「構いませんよ。この深夜にまさか覗きもしていませんし、誰もやって来ないと思います。派手にやって下さい」

「ああ、少しのどが渴きました。一寸一杯」

秋山氏は緊張の面持ちをふとほぐして、私達の居間にやって来た。

「実の処、私ものがカラカラなんです。さあどうぞ」

ビール瓶に残っているのを傾けて、私と彼はコップ一杯をのみほす。

秋山氏は机上に外しておいた腕時計をとり上げて見た。

「午前一時を廻りましたネ、真夜中の狂宴つてところですね」

「そう、プレイにふさわしい時間ですよ。しかし疲れたでしょう、あなたも奥さんも」

「いや大丈夫です。タフだし私達若いのですからね。これからですよ」

その時、施錠した部屋の扉を、表からコツコツと叩く音――。

何だろう、今頃？ 用心深く玄関の襖を叩いて、何か用？ といって扉を開くと、眠そ

うな仏頂面の、事務服姿の女が二人、

「あもう、お床をとりたいたいですけど――」

「ああ未だいいんだよ。床をとる時はこちらから電話するから」

「そうですか、じゃあお願いします」

私はピシヤリと閉めた。早く床をとって休みたい気持は分るが、今や佳境の我々にとつては、それどころではない。

足音の立去った気配を確かめて、再び残酷SMシヨウは開始――。

秋山氏の手に鞭は握られた。銀色さんぜんと鞭は光る。間合を計って、秋山氏はやっという掛声と共に鞭を振り上げる。

夫人は縛られて横倒しになっている。激しい叱咤めいた声が飛ぶ。

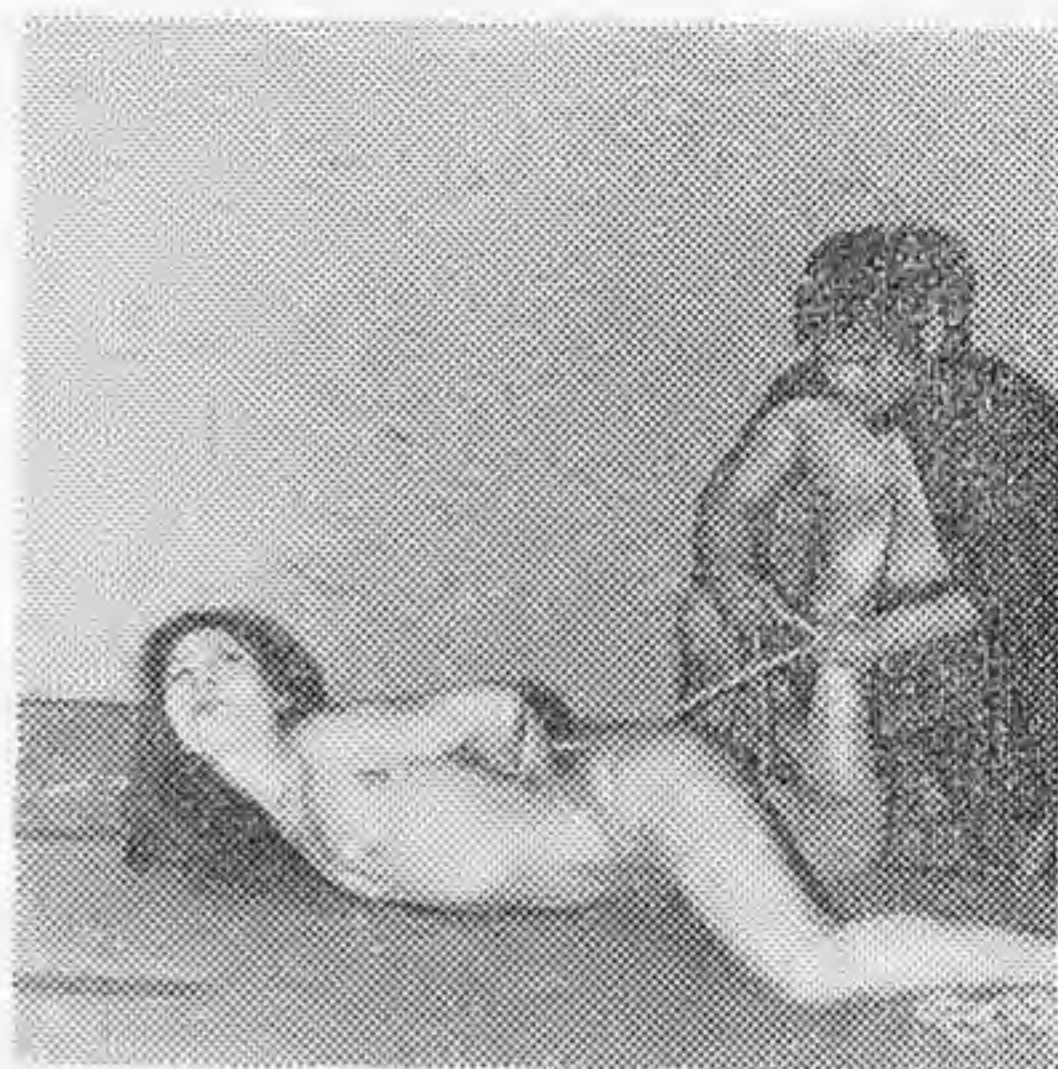
「よくオレの眼を見ているよ、眼を……」
夫人はかすかにうなづいて、縛られた俤、さっと身構える。

「いいな――」

「はい」
「やりますよ辻村さん、瞬間をねらって下さいね」

「準備はいいですよ」

私は真剣な面持で、一眼レフのピントをぐいと合せ直す。



「大丈夫か？」

「ええ、でもオッパイの下辺りがズキズキします。いたいわ」

彼はグラスの燭台をとり上げて、真剣な面持ちで、乳房の下を見やり、ぐっと顔を近づけてその個所を確かめようとしていた。

「ウン、すこし擦った様だ。大丈夫、大丈夫。もう二、三発やるからね、体を動かしちゃダメだよ」

確かに鞭打ちは、危険そのものであった。もし間違つて、夫人の体をあの強靱な鞭で、一打ちしたなれば、忽ち、皮肉は破れて、鮮血を吹き出すに違ひなかった。しかもそんな危険な綱渡りを、秋山夫妻は日に三回、それをずつと繰り返しているのだ。

恐ろしいショウ根性に徹した精神だった。だから、見るものをして惹きつけずにはおかないのである。

秋山氏は、夫人の乳の下を暫らく揉んでいたが、自答するように「よし」と答えて立上り、再び鞭を握った。

パシリ、ヒュウ、パシリ、ヒュウ、パシリと、鞭打ちの連続音が、三度部屋の空気を震わせ、巧みに円を描き、弧を描きつつ、彼の鞭捌きは終った。

鞭打ちの結末をつける様に、ついで休む間もなく、鞭のしごきが始まった。

見るからにゴリゴリした感じの、あの固く太い鞭を夫人の腹に当てると、鞭の真中辺りに足をかけ、鞭の左右をもって、ゴシゴシとしごき出したのである。これは見ていても痛かった。果して、夫人は身をよじり、のどの奥底から迸ばしり出るような呻きを洩らした。ついで、ショウでも見せた、鞭の股のしごき、むしろこの方は下ツン一枚の上からなので、夫人の苦悶の呻きは少し弱まり、むしろ苦痛に歪んだ顔に、微かな悦楽が走った。

悦楽のプレイは次々と進展してゆく。

一息つく間もなく、秋山氏は長く白い真新しいローソクに火を点じた。

横倒しの夫人の体の上にローソクはかけられ、燃え始めて炎の光が長くなり始めた頃を見計らって、彼の手は傾斜した。

熱蠟の涙が、ポトポトと夫人の肌落下していった。刹那ピクリと肌はけいれんし、

「あつ、熱ッ、あッ、あッ」

と夫人は、灼熱の涙涙責めに必死にたえて唇をかんでいた。

押し殺した声で呻く夫人の唇を、厚い夫の片手がしっかと塞ぎ、尚も執拗な蠟涙責めは

「一、二の三で鞭を打ちますからね」

かたい唾をのみ込んで私は構える。

「一、二の三ッ、えいッ」

ビューンと重圧を感じる鞭の唸りと共に、発止と鞭は、夫人の体ごしに床を打った。扮れもなく、鞭の中心は夫人の脇腹を擦過していた。一発は無事。続いて二発目が気合もろ共飛来する。

「あーッ！」

絶叫がワーンと部屋を圧した。

秋山氏はパッと鞭を投げ捨てると、夫人の傍らにかがむ。

続いていった。徐々に彼の手は肌に近づいて垂れる。

「ウウウッ、あッ」

口を塞がれ、緊縛されて、夫人は必死に喘いでいた。

「もうそのくらいにされてはどうですか？」

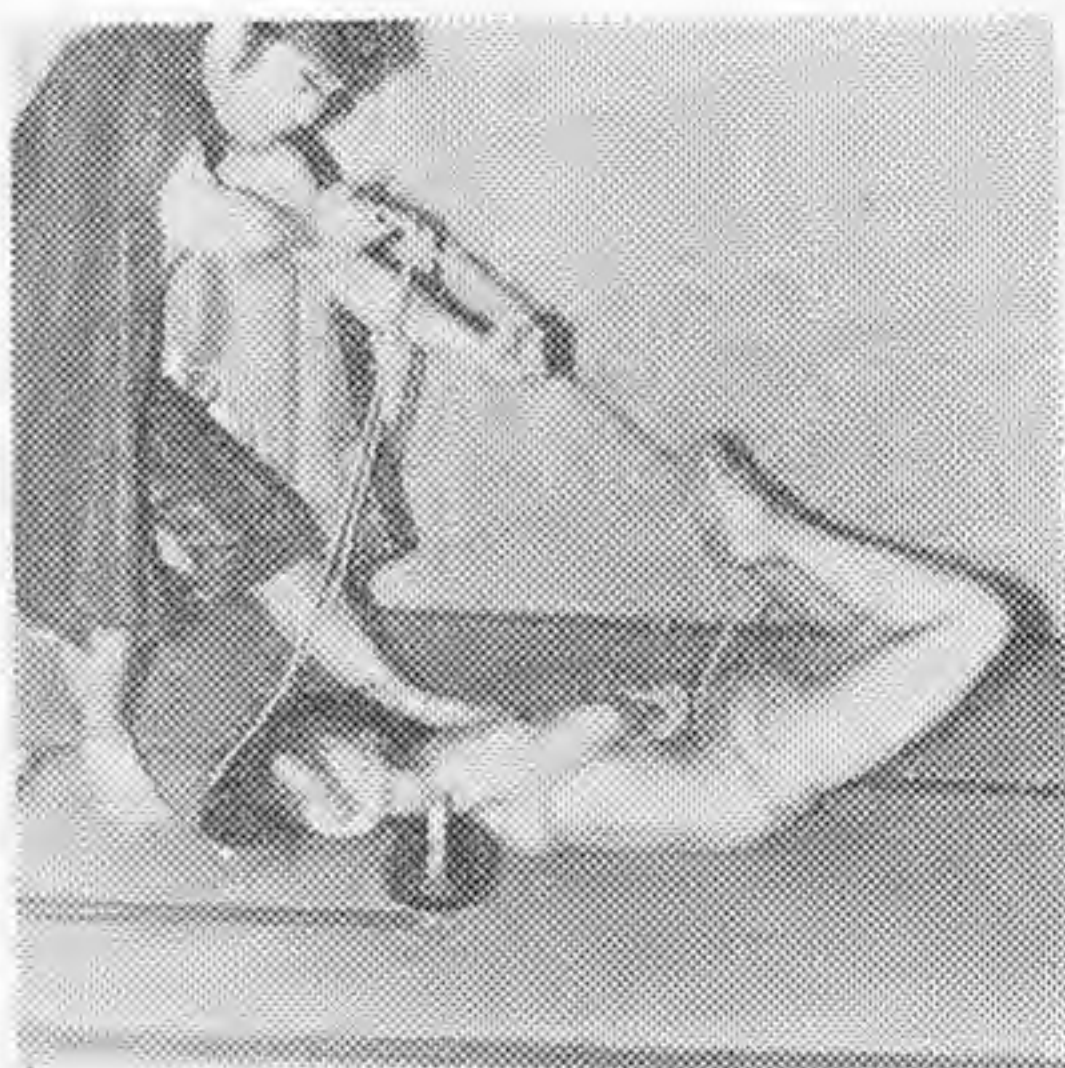
遂に、Sを以て自認する私が、みるに見兼ねて声をかけた。

秋山氏は、ニヤリと笑って、ローソクを吹き消した。今やSプレイに耽溺しきった、舞台以外の実相が、彼のメイフイストめいた笑みから確かにうかがいとれた。

軀骸はあつく夫人の肌を蔽って点在し、夫の手はいつしか無限のいたわりを籠めて、あやしなだめるように、そのひとつひとつを丹念にはぎとっていた。

解き放された夫人の手は、寄添う二人の肌の隙間で、夫の手をしっかりと掴んで放さなかった。二人のみに伝わる、それはプレイのあの愛情の交歓であろうか。ポンポンとその掌を叩くようにして、夫は妻のからんだ指をそっと外していた。

激しいあとの休息——編集長に疲労の色が濃かった。そして私も。そのくせ、二度とあるかなきかの、この絶好の機会を逃してなる



ものかと、私の探求心は、体力の消耗とは反比例して、弥増して燃え上っていた。

夫人は裸のまま、煙草をくゆらし、物懶げな表情で、私達の挙動を見るともなしに、うち眺めていた。

思い切って私は頼んだ。

「どうですか、下ツンをはずした全裸の緊縛は？」

「構いませんよ。しかし、気をつけてカメラに納めて下さいね」

「ええ、勿論ですとも。じゃあ、次はひとつ脱いでお願いしますよ」

秋山氏は快諾した。第三景の全裸の緊縛プ

レイは間もなく始まろうとしている。時計は午前一時十八分を指していた。

× × ×

ストーブの熱気が部屋に籠もって、ムンムンしていた。秋山氏は立上ってガスの栓を止めた。ショウで鍛えた体は、少々低温にも馴れているのだろう。今の部屋の温度は少し上り過ぎて、反って疲れるのかも知れない。

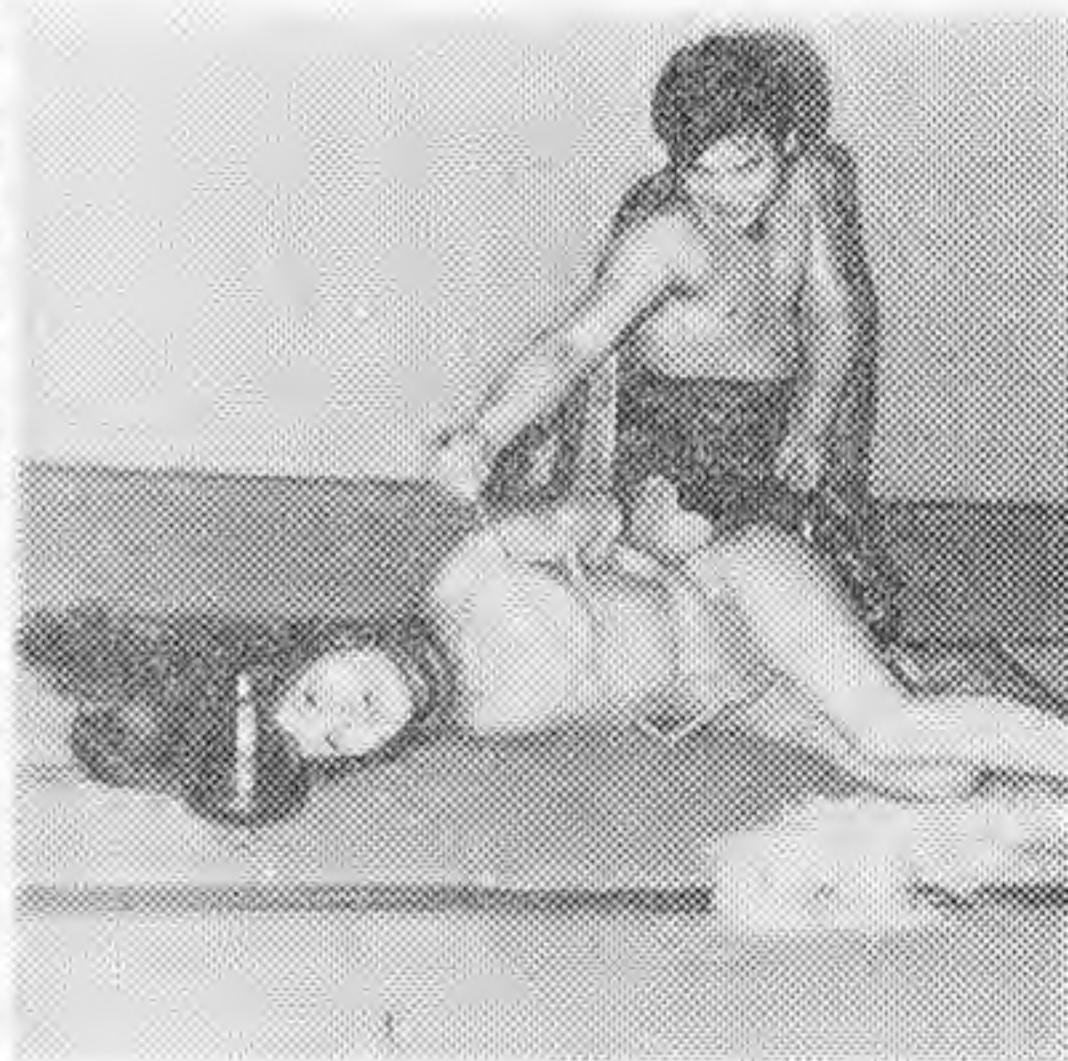
彼は既に黒いマントを脱いで、たくましい上半身を曝していた。胸毛が濃く、男らしい引き締った体つきであった。

秋山氏の縛り方は、後手縛り胸縄の、腿縛りが多いが、これは彼の好みであろうか。猿轡は全然使わなかった。ショウの場合、重大な要素を持つ声を、殺してしまう猿轡は、彼にとっては不必要なのだ。Sのプレイヤーとして、女の絶叫、悲鳴、呻き、喘ぎの、そうした被虐にのたうつ声が、尚更Sの感情をかき立てられるのかも知れなかった。

今、彼は、牝鹿のようにしなやかに伸びた、夫人の全裸の白い玉の肌を、立った俣袴々と縛っていた。胸縄をかけ終えて、押しつぶす様に坐らせ、太腿から足首へと縄はまといつて行く、くねらせたポーズで縛り終えたと、そのくねった座位の俣、夫人の体は自

由にならなかった。縄の余白を握って引き絞ると、どの個所に疼痛が走るのか、ウウンとこらえて、彼女は思わず引っ張る縄を口で噛んで抵抗していた。「ええい」と秋山氏は気合を入れて引っ張り上げ、ぐいと押し倒す。押し倒した夫人の髪を掴んで引起し、粗々しく引き寄せて抱きしめる。プレイの激しさと正比例して、熱い愛情がヒタヒタと押寄せてきたというのであろうか。秋山美智夫は、しばしそうやって愛する妻の緊縛の体を、粗々しく抱きしめていた。悦虐の歓喜を身内にたぎらせて、彼はいとおしく妻の体を抱きしめ、頬をすり寄せていた。甘美な喘ぎが夫人の口からかすかに洩れた。夫人の後手が、夫の肌を求めるように、指先がふるえて伸びてあがいた。

我に還ったように、秋山氏は妻に対する束の間の愛撫をやめると、再び私達への見せるプレイへと移行した。抱いて位置をずらせ、腿、足首の縄をとくと、両足をピッチリ揃えさせて、太腿から足首まで、犇々と巻いて締め上げていった。うしろから抱きかかえるようにして、グラスの燭台をとり上げて、妻の顔に近づける。髪をぐいと引き掴んで顔をねじ上げると、炎を顎の下から近づけていっ



た。尖端の炎の光が、柔かい顎にやがて熱を伝え始める。夫人は避けようとして身悶えする。いとしい妻に灼熱の苦悩を味わわせようというのか。身悶えの激しくなり勝る頃を見計らって夫は燭台を離す。支えた手を離れた途端、夫人の体はユラリと大きく揺れて、傾むくと見るやドサリと横転する。胸許から足首まで犇々と縛り上げられた彼女に重心はなかった。横転したかたわらに、鞭を握った夫が立っていた。又しても始まる鞭のしごき。無惨にも横転した夫人の脇腹に、力強い夫の足がのって、鞭をふんまえる。

ゴシゴシ、ゴシゴシ、ゴシゴシ、鞭は容赦

なく左右に動いた。肌に擦れる異常な鞭のしごく音が数米離れた私の耳にも判っきり聞えた。柔肌がささらのように擦れて、皮膚が破けないかと、私は怖ろしいものを見るように、心を冷やして、そのくせ喰い入るようにこの凄惨なしごきの鞭責めを凝視していた。ともすればカメラ撮る手は留守勝ちになる、余りにも痛烈なプレイだったのである。

言わずもがな、夫人の絶叫は悲鳴となつて、部屋にこだまする。打ち続く責めに、既に彼女の叫喚は噎れてさえいた。

「やめてえ、うッ、やめてえー」

きれぎれに彼女は哀願を洩らしてのけぞっていた。

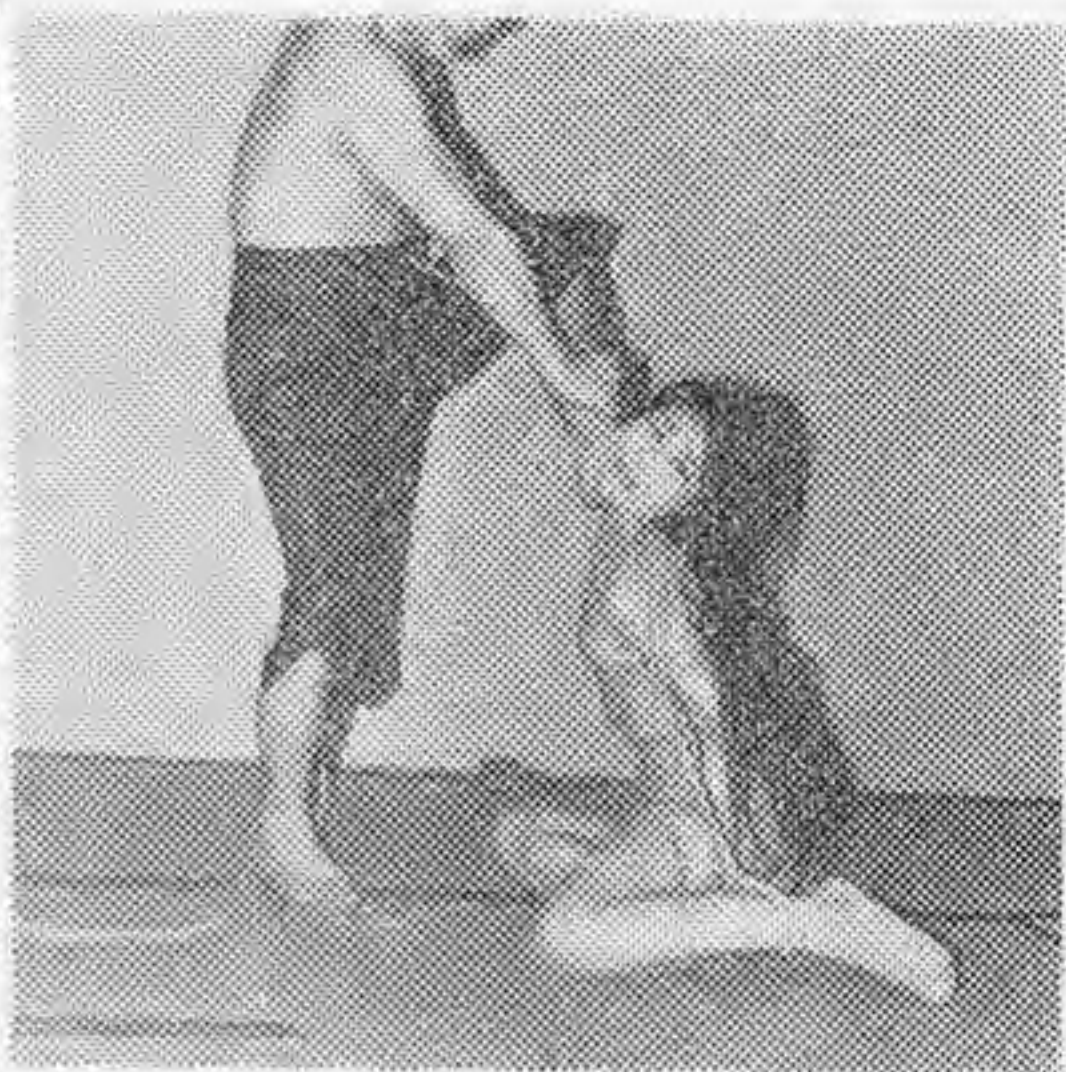
二本目の私のフィルムはここで終わった。それをしおに

「フィルムを入れ換えますが、少し休んで下さい」

私はホッとした様に彼に声をかける。

「じゃあ恰度いい、その間に縄を解いて、次のにかかりましょう」

好漢、秋山美智夫は、疲れという言葉を知らぬらしかった。彼等が疲れてホッとした表情を見せたなら、私も編集長も、異口同音にこの辺りでプレイを打切ったであらうに、今



や主客は転倒して、私達の方が秋山氏に引きずられているといった恰好であった。

秋山氏がそっと私の傍らに近づいてきて、耳に口をよせて囁やきかけた。

「辻村さん、恰度いい機会なんです。この際妻をMに飼育してやろうと思うのですが、シヨ一的な気持を離れてプレイしたいんですがどうでしょうか？」

「願ったり叶ったりですよ。是非そう願いたいですね」

「じゃあ、シヨ一的なプレイのポーズにはありませんが、一寸面白いことをやってみます。あの黒髪で吊り下げてみようと思うんで

すよ」

キラキラ眼を輝やかして秋山氏は愉しそうに呟やいた。

真夜中のプレイの宴は、いつ果てることもなく続けられている。

全裸の夫人は、宿のタオルを腰に纏って、ひそやかな私達の会話を、さりげなく眺めていた。心の準備は出来た。その時秋山夫人は独り言のように几帳を眺めていった。

「あの几帳の枠に、両手足を拡げて縛りつけたら面白いんじゃないかしら」

秋山氏も編集長も聞き通したかも知れないが、私の耳にその言葉ははっきりと灼きついた。彼女は自から求めて、全裸の大的字縛りを希んでいるのだ。すべてをさらけ出す、あられもないその縛りに、几帳を眺めて想念を走らせているのだ。私は判っきりと夫人の心の底に介在する被虐の悦楽をのぞき知った思いであった。しかし、現在の状態として、その余りにも露出的なポーズは許されなかったであろう。夫人の希みにも拘わらず一様に、これは黙殺していたが、私はやりたくてムズムズする気持を押えるのに懸命であった。

煙草をもみ消すと、秋山氏は、裸の夫人を居間の境の、襖の敷居の下に立たせた。

変った縛り方であった。夫人の腰に両手をあてがわせて、胴がぐっとくびれるくらいに強く引きしぼって、左右の手首を腰で支えるようにして縛った。更に別の一本の縄は、長く垂れる夫人の黒髪の尖端を束ねて、それに結びつけ、鴨居を通して首縄にして、片膝立ちの夫人の太腿で引き絞った。立ちもならず、坐りもならず、中腰の俣、彼女は黒髪で吊られて眉をよせ、軽く喘いだ。

白いダチョウの羽毛が、中腰で吊られた夫人の太腿を擦ぐり始めた。

「あッ、あッ、やめてえ」

搔痒に堪えかねて夫人は叫ぶ。チラリと甘美な表情をよぎらせて――。

夫はいつかな擦りぜめを止めようとはしなかった。羽毛は、ゆるやかに、或る時は激しく腋を、乳房を、腿を撫でていった。

くッ、くッと叫喚は歓喜にかわる呻きを挙げて、妻はよじれ、もだえた。腰で支えて縛られた左右の指は、その感動を如実に示して激しく空に開き、ぐっと握りしめられた。夫人の顔は泣いていた。泣くことによって、この擦り責めを堪えようとしているのであろうか――。

髪吊りがやっと許されて、腰の左右の手は

尚もその俛に、縄は股縛りに移行し、太腿には次々と縄がかけられて、引きしぼるために、夫の足は膝立てで打伏した妻の背にかかった。夫自身、今や商売気を離れて、燃えに燃えているのだ。Mへ飼育しようとする段階として、妻の被虐の限界を見きわめようとしているかのようであった。遂に縄は両足首にかかり、そして更に股をくぐり、再び双丘の間から顔を出した。その縄を掛声と共に強く引き揚げると、妻の体はウウツという呻きと共に、瞬間少し浮き上った。

「あつ、許してえ、痛いッ」

それは確かにプレイの極致の、夫人をして痛いと呼ばしめるに足る動作であった。

「痛いのか？、痛いのか？」

夫は、キラキラ眼を輝やかせて、連呼し乍ら、尚も二度、三度ぐいぐいと引き揚げた。その都度妻の唇から魂切る苦痛の絶叫が洩れた。足の縄をとくや、寸時の休みもなく、胸縛りにかかる。恐ろしい程の精力振りだ。

夫人は大きく喘ぎ乍ら、尚且一言もやめてくれとはいわず、夫にされるが俛になっていく。忍従の妻の態度は、羨ましい許りのプレイに対する協力振りだった。

左右の手首は相変らず腰に、そして陥没す

る股縛りもその俛に、夫の縄は、妻の上半身を縛り、ゆらめく夫人の片足をあげさせて、高々とその片足を吊り、一本足として、髪を引摺んでユサユサと体をゆさぶり始めた。

飽くことなく、続々とつづくプレイの連続

に、私も箕田氏も心身共にクタクタだった。

編集長は疲れ果てた体を、辛うじて気力で支えて、半ば機械的にカメラを構えていた。

私達はプレイに対して、言葉を差し狭む隙は寸分もなかった。それ程に二人のプレイは強烈そのものを極めていて、休みなく続いていたのだ。責められても責められても、それに耐えてゆく夫人の、あの強靱な意志は何と云って説明すればいいのか――。その説明の言葉は唯一つ。夫人自身が、責めを甘受し、それに限りなき悦楽を覚えているとした解釈のしようがなかった。

とあれ、こうして思考に耽る間にも、プレイは続いていた。

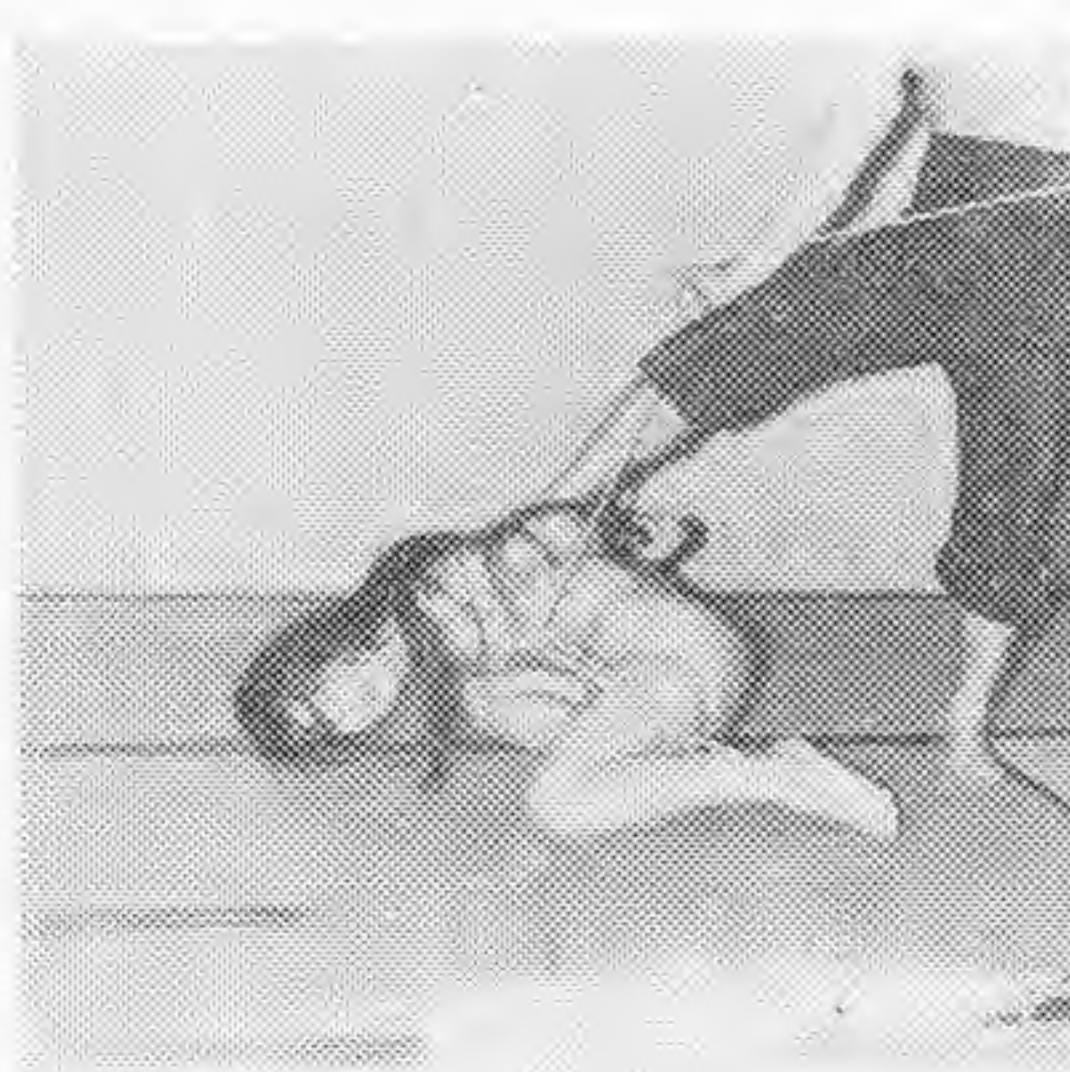
片脚吊りの俛、夫の手は妻の胸の辺りを這い、ふと顔を寄せると見るや、妻の胸に自分の顔を埋めていた。たえがたい快楽の悶えが夫人の顔に走り、恍惚の眸が宙をさ迷った。足首にぎりぎり縄は深く喰込み、股縄はよじれて痛々しかった。にも拘わらず、痛みの

そのさ中に、夫人は快楽に酔っているかの様に喘いでいた。

罇喜氏が言った、夫婦プレイなればこそその悦虐であり、快楽が、今二人の体も心も支配しているかに見えた。

体を離れた夫は、更に一本の縄を使って、股を通して胸から首へと掛け、鴨居に半吊りに妻の体を固定した。

這いなめづる秋山美智夫の熱い唇が、足許から徐々に上昇し、妻の全身に唇の烙印を押して行く。彼がいみじくも言ったショーを離れてのプレイとはこの事であった。今確かに二人は夫婦の遊戲に、私達二人の存在を忘却



の彼方におしやって、魂をとろかせて悦楽にふけっている。這い廻る夫の唇の吸引力の強さが、妻に甘美なる呻きをもたらせ、夫婦プレイの真髓がそこに展開していた。

事実、彼も彼女も夢中だった。初期の私達に対する目的を果し終え、今ここに赤裸々に展開している夫婦プレイに対しては、或いは私は筆にしてはいけないうるかも知れない。しかし、そこに真に迫ったプレイがある以上、私のカメラがそれを執拗に追う以上、私はこうした夫婦のプレイの在り方を書かずにはおられないのだ。

妻の唇に、恍惚のブルースが奏でられ、陶



醉が走って消えた。夫の唇はやっと妻の体から離れる。うつろにうるんだ夫人の眸がつかやかに濡れて、縄をといてゆく夫の顔をじっと見守っていた。

夢中でシャッターをきっていたらしい。フィルム of ナンバーをのぞくと、残りは僅か二枚そこそこしかなかった。

「秋山さん、もうフィルムが残りなんです。この辺りでそろそろお終いにしましょうか」「残念ですネそれは。編集長さんもお終いですか？」

彼は箕田氏にきいた。

「ああ、あと五枚ぐらいで終りなんですよ。

新らしく入れ変えるといくらでもあるが、随分疲れたでしょう、あんた達」

「いえ、私達なら大丈夫なんです。それじゃ最後にひとつ、変った縛りをして止めましょう」

「もうフィルムが少しだから、極く簡単なのでいいですよ」

私は気の毒になってそう言った処、秋山夫人の柔かい声がはね返った。

「そうじゃありませんわ。最後の二枚だから、貴重ですもの、いいものを撮って戴なくちゃあ」

ああ、何たる協力振りであろうか。

秋山夫妻は、改めて、このわずか二枚のフィルムのため、念のいった凝った縛りを始め出した。

山本一章がよく使う縛り方を、更に徹底したもので、両手を挙げさせて後頭部に廻し、そこで引絞って肩から腕にかけて縛り上げる方法で、下手にすると脱臼を起したり、捻坐するかも知れない縛り方である。

最後というので、尚更念入りに丁寧に縛っている。箕田氏はその緊縛の過程を、パツ、パツと素早く撮り終って、新らしく一本装填したが、私には残念乍らあとがない。わずかに二、三枚残すのみのフィルムの余白であるから、縛り終っての慎重さを期さねばならなかった。両手を縛り終えると、胸から腹、そして太腿へと縄はまといついていった。

「そんなに丁寧でなくてもいいんですよ」

再び私は声をかける。

「いいんです、いいんです。やるだけやらしめて下さい」

秋山氏は私の方を見ず、せっせと緊縛の作業をつづけていた。カメラなんかより、最後のプレイの締めくくりを、自分もやり、又私達にも見せてやりたいという、名プレイヤー

の願望がひそんでいたに違いなかったのだ。

縛り終えて、彼は投げ出した妻の、自由な片脚を握った。爪先から指へ唇をつけ、ぐいと持ち上げて、自分の顔の方へ足をもっていた。いつ脱いだのか、秋山氏自身、パンティ一枚の全裸に近いポーズになっていた。

押えつけ、抱きしめ、束の間の夫婦プレイのひとつとき。その間、私のカメラは最後の余りの一枚も含めて、三回シャッターを押したに過ぎない物足りなさであった。

箕田氏のフィルムは尚、六枚許り残っていた。

「辻村さん、一寸手伝って下さい」

どうしようというのだろう。呼ばれてカメラを捨てて立上り、私は秋山夫妻に近づく。

「妻の腕に注意して、頭の方を持って下さい。私は両足を握って、逆さにしますから」

秋山氏は血走った瞳で私にそういつて、夫人の両脚首を握って、抱え上げた。私は夫人の背と頭に手をやって介添する。

力をこめて、エイと持上げた彼の頭上に、伸びた夫人の両足があった。私は静かに手を離す。夫の体の前に、逆さに抱かれた妻は、黒髪を長く垂らして藻の様にゆらめかせ、眼をつぶって、今私達の眼前にその全裸を曝し

ていた。更に声と共に抱きかかえ直すと、夫人の体はもう二十センチ許り上って、彼の肩にかかった。

「しっかり肩へ力を入れて、足でふんばるんだよ」

どうしようというのだろう。

胴をしっかりと抱いていた彼の手は、妻の両脚が、しっかり肩にからまった事を知ると静かに手を放していった。

ヒヤリとする一瞬であった。今、秋山夫人の縛られた体は、彼女の両脚の力のみによって、完全に秋山美智夫の体の前で、逆さになって支えられていた。



私は気付いた。彼等二人は、アダヂオで散々もみにもんで来た、鍛練した体であったことを――。だから余人の許さない、こんな離れ業を敢えてやってのけたのだ。若し今、夫人の足が外れて転落した場合、肩に押し曲げられて縛られている両手腕は、骨折か脱臼間違いないのだ。

ショーマンにふさわしく、フィナーレは実に鮮烈きわまるポーズで幕を閉じたのだった。若しここに数百のSMの同好者の観客ありとすれば、皆斉しく、万雷の拍手を送ったに違いない見事な幕切れであった。

この幕切れをカメラに納められなかった私は、フィルムの準備の少なさを衷心より口惜しく思ったことであった。

胴を抱くと見るや、ポンと一回転して夫人は床に立った。あの不自由なポーズでよくぞやれたものだ、感嘆しきりに、私は唯一人叩かぬ拍手を惜しみなく二人に送っていた。縄を解き終った瞬間、それがまるで合図かのように電話がなった。

「何ですか？」

「あのう、申しかねますが、午前二時で門限なんです。お床をしいて置かないと私達もう休みますので……」

「そう、長い間待って頂いて済まなかったネ。すぐ床をとりに来て下さい」

電話をきいて、慌ただしく辺りを片づけ始めたが、その間もなく、扉が叩かれた。肚をきめて施錠を外す。

二十才許りの女の子が、煙によごれた濡った部屋の空気に、チラと眉をひそめ、あわただしく夜具をとり出し始めた。

秋山氏はパンツ一枚、夫人も腰にタオルを巻きつけた俣で、備えつけのバスに立とうとするところであった。辺り一面に縄や鞭や、燭台や衣裳が散乱し、女の子はパツと頬を染めて、夜具を敷くため片付けていた。

むしろ一番泰然としているのは、裸の秋山氏であった。ホッとした軽い疲労のあとが、

彼の顔に浮んでいた。チラチラと女の子の視線が彼の体に走っていた。

微かなローソクの燃焼の匂い、銀色の鞭、黒衣のマント、緊縛の縄。それらから、この若い事務服の娘は、果して何と想像したであろうか。

午前二時が料理旅館のギリギリの門限であった。午後十時にダイコームニージュックを車で出て四時間、それは短かくも長い、束の間の幻影と消えた。私のSはあらゆる面で満ち足りていた。あわただしく、言葉も交わす間もなく、プレイのあとのしみじみと反芻する名残りもなく、私と箕田氏は時間に追われて部屋を出た。三階から降る階段の途中まで、宿衣を纏った秋山氏を送ってくれた。別れの

手を打振り彼は階段に消えた。

× × ×

午前二時過——、丑満刻の夜気は四月半ばとはいえ冷めたく、いつ迄降りつづく積りなのか、尚も小雨はシトシトとしよぼついていた。振り仰ぐ三階の辺りに、ポツリと一つ、彼等の部屋にのみ灯りはあった。

私は名残り惜しげに立止っていた。その灯りに影が一つ——。彼か夫人か？

彼等にその気があれば、秋山夫妻後援会長を買って出て、同好の志を集めての懇談会でも開きたい。鮮烈なプレイをその会場でも、そんな夢をふくらませて、私は小雨煙る深夜の大阪を、我が家へと辿っていった。

最近欧米では、変ったSプレイが一部の人間の間で流行しているといわれる。それは、ピアッシング (Piercing) といって、意味は「刺し通す」ということである。

これは夫婦又は恋人同志が、お互いに相手の肉体を鋭い針その他で刺し通し、その刺戟を楽しむのである。

ピアッシングは最初、西ドイツから流行しはじめた。その原因は西ドイツの刺青マ

ニアが刺青師に刺青を彫ってもらう中に、針による刺戟が忘れられず、小さな刺青が自然と大きな刺青となり、身体中彫ってゆくうちに、最後には彫る場所すらなくなってしまった。しかし、針の刺戟の方は忘れられず、自

分で身体の一部を鋭い針で刺し通して自己満足していた。それが、いつとはなしに刺青マニアの間に流行していった。

最初は刺青マニアの間だけの秘密であったピアッシングも、今では刺青マニアでない人達の間にも流行し、西ドイツからイギリス、フランス、オーストラリアと流行し現在では北アメリカで一番盛んに流行しているようである。

青

私達日本人が考えると、随分野蠻で残酷のように思ふかも知れないが、その道のマニアにとっては、日常茶飯事であり、身体への害は常に衛生的に施せば害はないという。勿論身体のだんな部分にでも刺し通すというわけにはゆかず、日本の鍼医のように、それぞれ身体のツボを十分に知って施すわけである。

最近では唯、針を通すだけでは満足せず、刺し通した部分に直ぐ小さな金のリングを差込み、それを半永久的につけている人達が多くなった。パリーの或るナイトクラブのヌードダンサーは、自分の踊りを最高演技に見せようと、踊りながら観客の目の前で長い針を自分の両乳首と一緒に刺し通し、その刺戟で自分自身をエキサイトさせ踊り狂うのが、大変評判になったと言われている。それを見る観客も又、一緒に興奮せずにはいられなかったという。

最後にピアッシングの技法を二、三お話ししよう。これはあくまで外国で行われた技法であつて日本でも通用するとは限らないので念のため、お断りしておく。

一、乳首の片側にコルクを押しつけ、反

——欧米で流行している

ピアッシングと刺

角 三 生

の特別製の針でなく皮膚科用の針を使用する時もある。

二、電気歯ブラシを特殊な型に改造し、鋭い針をその器械に取り付け振動を与えながら少し宛刺してゆく。この場合、針は電気メスと同じく血止めの役をする。

三、極度に細い針（日本の鍼医が使用する針と同じ程）を使用して刺し通す方法。

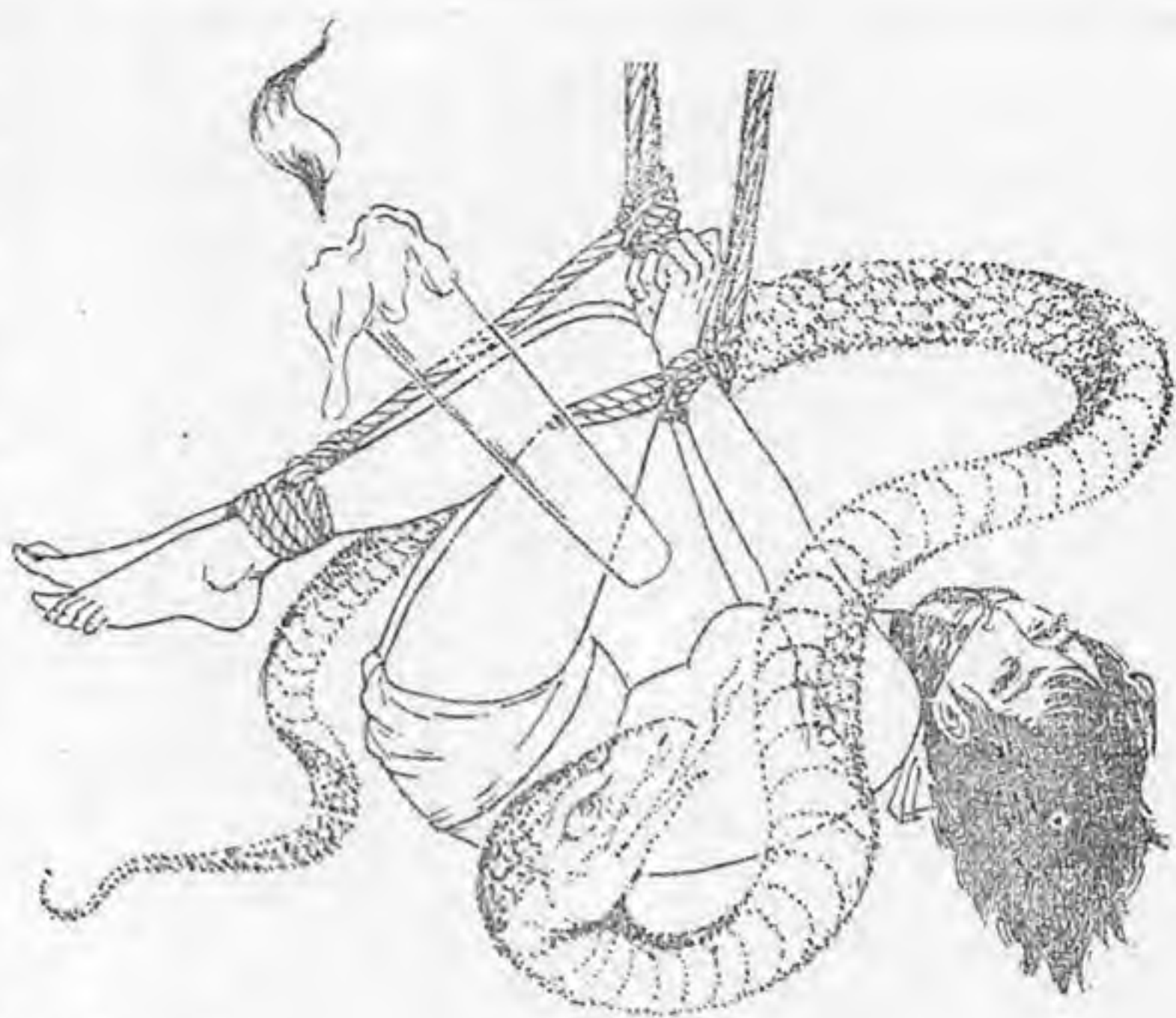
四、針を熱して熱いまま刺し通す方法。

以上、申し上げた技法は、いずれも外国で行われた方法で、欧米では初めてピアッシングを施す希望の人は、その専門家の処に行きいろいろと技法についてのコツを指導してもらい、衛生的で危険のないように心掛けていくという。

最後に御注意申し上げたいのは、この技法は日本でも決して出来ない方法ではないが、勝手に自己流で施すと危険性が多分に考えられるので、ピアッシングを実行したい人は、一度鍼医に相談し、刺して安全なツボを充分に知ることが大切である。

この報告は、私が唯、欧米で珍しいこのサディズムが現在盛んで流行しているという事と申し上げた迄である。

対側よりハンドル付の鋭い三角状のステンレススチール製の針を乳首に押し刺し、次にそのハンドルを針からはずし、針の穴に外科用の糸、又はプラスチック製の細いワイヤを通して、その針を反対側（コルクを持って）から引き抜く。そして糸又はワイヤを、そのまま乳首に残して二、三日置くと小さな穴が出来上る。その穴にいろいろと型の違つたりリング、その他を差込む。そのリングを半永久的に付ける人もあり、一定時間を限って（例えば寝室に於てのみ）付ける人もある。前記



懸賞入選作品

「京子抄」

△続・蛇性の女△

小谷和勝

天井のシャンデリアが、その豪華さとは裏腹に可細い光線を場内に注いでいた。

フロント・ガールの懐中電灯が、足下を照らしてくれねば、たちまちテーブルやソファの脚につまずいてしまいそうである。

それでも、それぞれのテーブルには、洗った木彫りの燭台が置かれてあり、グラスを傾む

ける分には不自由はなかった。

いや、むしろ、紫煙のたちこめる薄暗い雰囲気の魅力なのか、浴衣がけの温泉客でテーブルはほぼ埋っていた。

かく申す私も、未知の温泉場のクラブで一夜のアバンチュールを求める、その一人ではあるが……

「ねエ、これからとても面白いショーが始まるのよ」

奈々と呼ぶ、ホステスが私の耳もとで私語

いた。美人ではないが、広い額に不釣り合いな小さな唇が、どことなく無邪気なく、それが奈々の不思議な魅力であった。

その時、ただでさえ薄暗い場内の灯が総て消された。

微かなどよめきが場内を走る。

間もなく、その漆黒の闇の中に一際鮮かなスポット・ライトが場内の一点を照らし出した。

そこには、真紅のガウンに身をまとい、すらりと伸びた脚に網目タイツも鮮かな、一人

の踊り子が艶然と現われた。

その顔は、これも又、真紅のマスクで隠されている。

「あのガウンの下に、何があると思う」

奈々が、熱い吐息で私に私語く。

「すごい、刺青なのよ」

奈々の何気ない、この言葉に私はギクリとした。

今まで、胸の奥深くに忘れ去っていた、三年前のあの苦い追憶が再び、私の脳裏に鮮かによみがえってくるのであった。

甘いカクテルの酔わせる悪戯か、その踊り子の姿体が、忘れかけていた京子の面影に見間違いそうであった。

「京子……」

思わず呟く私の声に

「どうしたの。私、京子なんて名前じゃないわよ」

と奈々が唇をとがらせる。

踊り子は、やがて軽く会釈をすると、どこからともなく漂ようスロー・テンポのバイオリンの調べにあわせ、ゆるやかに豊満な腰を振り始めるのであった。そして、その細い繊細な指先が真紅のガウンの紐にのびる。

私の手を握りしめている奈々の指が、じっ

とりと汗ばんでいた。

その指が、少しずつ私の手を奈々の胸の中に誘いこんでいく。

奈々の豊かな乳首に、私の指先がふれた。

奈々は微かな声をあげてもだえる。

スポット・ライトに照らせながら、踊り子は尚も、妖しく腰をくねらせて、踊り続けていた。一際、バイオリンの音が鋭く響くと、それが合図でもあったかのように、踊り子は真紅のガウンを脱ぎ取り、それを宙にほうり投げた。

一匹の真紅の蝶が、スポット・ライトの中で鮮かに舞いながら闇の中に消えてゆく。

「オーッ」という歓声とも驚歎ともつかぬどよめきが場内を圧した。

踊り子の輝くばかりの白い肌には、青や朱の色も鮮やかに、華麗な刺青が彫られているのであった。

私は思わず、眼を瞠った。

その、刺青の図柄に見覚えがあるのだ。

背中の中程で掘みあった、二匹の蛇が、一匹は左肩から乳房の方に、もう一匹は右の腰あたりから下腹部めがけて、その鎌首をのばしているのも、右の肩と左の臀部に、各々、目も鮮やかな大輪の菊の花が彫られているの

も、忘れようとて、忘れることのできない京子の肌に彫られた刺青の図柄と同じではないか。私は夢でもみているのではないだろうか。見てはいけない、禁じられた悪夢を……私の指は無意識のうちに、奈々の胸許を握りしめていた。

「いたいわ、そんな強く、いじめちゃ、いやよ」

奈々の甘い鼻声に、私は、やはり夢ではないことを知った。

だが、本当に、今、私の目の前で艶然と、その華麗な刺青を衆目に晒して、踊り続ける踊り子が三年前のあの京子なのだろうか。

私には信じられなかった。

踊り子の顔を隠している真紅のマスクが、今更ながら私の心を慌しくさせるのである。そうだ。もし、本当にその踊り子が京子であるのなら、あの屈辱の刺青が京子の両腿に残っているはずであった。

だが、それも空しかった。羚羊のようにのびきった脚を包んだ、網目タイツは私の希望を軽く打ち砕いた。

但し、京子の刺青のような大胆で、奇抜な図柄を彫った若い女が、他に居るとは信じられない。

やはり、その踊り子は京子の、なれの果てなのであろうか。

私の脳裏では、京子と、眼の前の踊り子とが激しい葛藤を続けるのであった。

奈々の唇が、私の頬に冷めたく触れた。

奈々の唇は妖しく濡れている。

私は、その時、場内が今までとは違った、異様な雰囲気包まれ始めている事に気がついた。

奈々の身体が燃えるように熱い。

ステージでは、いつの間に用意されたのかかなり洒落れたベッドが置かれ、踊り子はそこに横たわりつつあった。

スポット・ライトの強烈な光の中で、踊り子の白い肌が眩しいばかりに美しく映える。

その、豊かな乳房は激しくもだえていた。

私は、その乳房に見た。

陰険な眼で、可憐な踊り子の乳首を狙うかのような蛇の刺青を……

やはり、京子なのか……

踊り子は手に幾本かの蠟燭ろうそくを持っていた。

やがて、その一本に灯がともされる。

これから、踊り子は、それをどうしようというのだろうか……

驚くべきことだった。

踊り子は、灯のともる蠟燭を自分の乳房の上に立てようとするのであった。

溶けた蠟ろうが、豊かな乳房にこぼれ落ちる。

ポトリ、ポトリ、そのたびに踊り子の乳房がピクツ、ピクツと痙攣する。

その、蠟の固まらぬうちに、踊り子は素早く、灯のともる蠟燭を乳房の上に立てるのであった。大きく波うつ乳房とともに、その蠟燭の灯も妖しくゆれる。

そこには、異様な猟奇感さえ漂いはじめるのであった。

踊り子の裸身は、蠟燭の灯で埋っていく。

二つの乳房に、乳房の谷間に、可愛い臍へその上にも……さすがの踊り子も、蠟を落し終った時は思わず呻き声をあげた。それが、より一層、場内の興奮を高めるのであった。

奈々の濡れた唇が、私の唇に重った。

その舌が、私の舌をまさぐる。

一瞬、スポット・ライトが消された。

闇の中に、絢爛たる生きた女体の燭台が残された。蠟燭の灯が、ゆらゆらと闇の中に不気味にゆれる。

踊り子の裸身が、妖しくもだえる。

蠟燭の灯も、それにつれてもだえゆれる。

それは、まさに耽美の世界であった。

だが、灯にも命があった。

その、短かい命が尽きようとする間際、踊り子は叫んだ。

「アアーツ」

美しいその絶叫は、満たされた女の悦びの雄叫びであらうか。

ショーは終わった。

誰しもが、しばらくは虚脱感を禁じ得なかった。それ程、耽美的で、官能的なショーであった。

私は、茫然とした。もし、本当にあの踊り子が、京子であつたら、そう考えると、空恐しい気持になるのであった。

天井のシャンデリアが、再び可細い光線を場内に注いでいる事にも、私は気がついていなかった。

本当に、あの踊り子は京子なのだろうか。

もし、そうだとしたら、あの時の清純な京子はどこに行ったのだろうか。

私は、あの踊り子に会ってみなければいけないと思った。

あつて、確かめなければいけないのだ。それだが、私に与えられた天の意志表示でもあるのだ。

「帰るよ」という、私の声に、奈々は、満た

されぬ欲望に身をこがせながら云った。

「ダメ……今夜は帰さないワ……ネ」

奈々は確かに可愛い。もし、私が、今夜あの踊り子の刺青を見ずに済んでいたら、私はおそらく一夜の情熱を奈々に傾けたかもしれない。

但し、今の私には、奈々の必死の願いも聞く耳はなかった。踊り子の、あの蛇の刺青の不気味な美しさが、私の心を攪んではなさないのだ。

私は逃げるように席を去った。

私の背に、奈々の涙に滲む熱い視線が痛く感じられるのであった。



フロント・ガールに教わった、楽屋口のドアは堅く閉ざされていた。

四月の末とはいえ、海に面した、この界限は、夜ともなれば汐風が肌に冷めたく吹きつける。いつ出てくるか判らぬ、あの踊り子を待ち続けるのは自分の意志がそうさせるにしても辛らかった。

かりに、あの踊り子が京子だとしても、その京子が三年前の私を憶えているかどうか、私には自信はなかった。

それでも、私は待ち続けた。

まるで、野良猫のように……

ドアの開く音に、私は緊張した。

あきらかに、その靴音は女であった。

「どなた……」

靴音が止って、澄んだ女の声がした。

コートの衿を深く立て、サングラスをかけた女の顔は、さだかではなかったが、その声は忘れようとしても忘れることのできない京子の懐かしい声だった。

「……………」

自分では落着いているつもりでも、その声は言葉にならなかった。

「えっ……どなたなの……」

いぶかし気な京子は、用心深く私を観察しているようであった。

その時、表通りを走り過ぎる自動車のライトが、私の姿を明るく照らしだした。

「あっ……」という驚きの声が、京子の口からもれた。

「あなたなのね……」

やはり、待っていてよかった。

京子は私を忘れてはいなかった。

感激に私の胸はふるえた。

ただ、黙ったまま私は近づいた。

京子の白いふくよかな手がさしだされた。

私はその柔かい手を思わず握りしめた。

三年振りに握るその手の暖かさは少しも変ってはいなかった。偶然の再会は、再び私達を強く結びつけたのであった。

さきほどまでは、肌に冷たい汐風さえも今の私には心持よいそよ風と変っている。

「どうして、私がここに居ると判ったの」

京子のこの言葉に私は返事をためらった。今夜の事をそのまま話せば、京子は自分の爛れた生活を覗かれた事に対する羞恥で、いてもたってもいられないのではないだろうか。但し、嘘をいってこの場をごまかしたにしても、それは私の良心が許さなかった。

私の京子に対する愛情は、その様な嘘で積み重ねられる程、浅いものではないはずである。そうだ、本当の事を云おう。京子の為にも、それが一番いいのかもしれない。

「見たんです。クラブのショーを……」

京子の手が、かすかに震えた。

「やはり、そうだったのネ……私を……卑しい女だと思ったでしょうネ」

心の苦しみに耐えながら語る、京子の心中が痛い程に判る私には京子が哀れでならなかった。

「いいえ、僕は少しもそんな事は思っていま

せん。……でも、最初は驚きました」

「そうでしょうネ、あれから三年ですもの。」

いろんな事がありましたわ」

私達は、いつのまにか海岸へ出ていた。

岸にうちよせる太平洋の波が、月の光に反射してキラキラと砕け散る。海岸線に建ち並ぶ旅館の群の灯が、満艦飾のように華やかで美しかった。

京子はサングラスをはずした。その瞳から、ひとしずくの涙が頬を濡らした。

「あなたと、あんな事があってから、間もなく、あの人は暴力団同志の争いで殺されてしまいました。あんなに頑強な人が、まるで虫けらのようにあっけなく……。本当云うと、私ネ、あの人が死んでホッとしたの。私は自由がほしかった。でも、私には本当の自由なんてなかった。こんな凄い刺青を背負っている女が、堅気の世界に住むなんて所詮、無理だったの。ひと時は、こんな私にも近づいてくる人があったわ。でも、駄目。私の身体にどくろをまいている蛇を見るとみんな離れていってしまうの。どこに行っても、どこで働いても、私はいつも一人ぼっち……。そのあげくの果てが、今の私なのよ……。おかしいでしょう。世間の人につまはじきされる

刺青女が、その刺青のおかげでオマンマを食べて行けるんですものネ……。フフフ……」

無理に微笑^{ほほえ}もうとする京子の表情は、苦しみに耐えかねきれず醜^{みにく}く歪む。

そんな京子を、私は思いきり抱きしめずにはいられなかった。

こらえにこらえた悲しみを、一度に投げだすかのように京子は私の胸に泣きくずれた。



深夜に起こされて気でも悪くしたのか、無愛想に頬をふくらませた年増の女中は、あくびをかみころしながら、生ぬるい茶を置くとそそくさと立ち去った。

測^{はか}の欠けた湯のみが、このホテルの低俗さを物語っている。狭い部屋に不釣合いに大きなダブル・ベッドが、あたかもその目的を誇示するかのように幅をきかせている。

部屋の片隅に申訳け程度に置かれている、小さな三面鏡が妙に佻しかった。

ダブル・ベッドの上の天井には一メートル四方位の大きな鏡が意味ありげに取り付けてある。

京子は、その鏡をみて思わず苦笑してみせた。

始めて、明るい灯のもとで見る京子は、こ

れが三十を過ぎた女だとは思えないほど、その肌はみずみずしさを保っていた。

それでも、その身体の線に、なんとなく宿る暗い影のようなものが、京子の荒れた生活を感じさせる。

「嫌な部屋ネ」

京子が、ポツンと呟いた。

「でもいいの、あなたと一緒になら……」

微笑む京子の頬に、私は唇をよせた。

「待って……コート脱ぐわ」

やさしく、私に微笑むと静かにコートのボタンをはずす……。驚いた事に、京子はコートの下には何も身につけてはいなかった。

そんな私に、京子は悪戯っ子が悪戯をしたときのように舌をペロリと出しておどけるのであった。

相も交らぬ、豊かな乳房には可憐な乳首が処女のそれのようにツンとすましている。

その可憐な乳首を陰険な眼で覗みながら、真紅な舌を出している青黒い蛇が狙っているのだ。それに、右の腰のあたりからは、もう一匹の蛇が鎌首をもたげ、京子の下腹の辺りを狙っている。

だが、京子はそっと両手でそこを隠していた。

そこには、私と京子だけが知っている愛の烙印が青黒く印されているはずであった。

だが、あれから三年、すでに私達の愛の烙印は、見えないかもしれない。

私は、やさしく京子の両手を取り除いた。意外であった。

愛の烙印は、今も尚、その青黒い輪郭を鮮やかに見せていたのだ。

私のイニシアルであるI・Kを……

そして、そのイニシアルの周りは朱の色も鮮かに新たな花模様の刺青で飾られていた。

「私が彫ったのよ。きれいでしょう。あなたの愛の印をもっときれいに飾りたかったの」

私は、改めて京子に対する深い愛情で胸が熱くなるのを感じた。

「それにネ、私は、生まれたままの赤ちゃんのようになってしまったのよ。あの人が殺されてから、私は世間の人達にも変な眼で見られるし、もう人生に絶望したの……それで私は、決心したの。これから先の人生を、あなただけの思い出に生きていこうと……。だから、毎日、少しずつ……。刺青を彫るときよりも痛かったわ。でも私、我慢したのよ。あなたのためですもの。……ねえ、京子をほめて……。私の身体は今も全部あなたの

もののなのよ」

京子は、自分の言葉に酔いしれているかのような潤んだ瞳で語りつづけるのであった。

京子の肌に彫られた愛の刺青には、文字通り私の命がこもっていた。

私の胸はふるえた。思わず、京子の前に跪く。

京子のふくよかな腰のあたりを抱きしめ、唇をよせる。

「ウウ……」

京子の呻きがもれる。

その肌はまるで念入りに磨かれた陶器のように冷たく、なめらかであった。

「アアッ……」

悶える京子の裸身は崩れるようにベッドに横たわった。

私の唇は、尚も京子の肌を求めて徘徊し続ける。京子の裸身は火のように熱く、熟れた石榴の如く今にも悶え狂わんばかりに輝いていた。

「いじめて……私を……いじめて！」

京子が、かすれた声で呟いた。

意外な京子の言葉に、私はたじろいだ。

「だめ……このままでは。いじめて……お願い……」

何ということであろうか。京子は月並みの愛し方だけでは満足できない身体になっていたのか……

京子は、やはり蛇性の女だったのか……「刺青の針の味を憶えてしまったら、もうお

終いだよ」と語った、あの刺青師の言葉が、今、まざまざと私の脳裏によみがえるのであった。

哀われな女の性であった。

今の私にしてやれることは、私が京子の忠実な下僕として、京子の思い通りになることだけであるのかもしれない……

「どうすれば、京子さんは嬉しいんです。僕は、あなたのいう通りにしますよ」

私の声は震えていた。

それからの私は無我夢中であった。

もはや、私の良心には羞恥心の一かけらも残ってはいなかった。

私は、京子のいうがままになった。

脱ぎすてられた網目タイツを二本結び合わせると、格好の紐が出来あがった。

この紐で私は、京子の両手首をきつく後手に縛らされた。

つぎに、その紐の余った分を利用して、両脚首を背中の方に曲げ、その脚首をさきに縛

った手首と共に縛る。

その縛りで、京子は弓なりの形でベッドに転がり、その豊かな胸は張りさけんばかりに激しく息づくのであった。

だが、京子の表情は一種の恍惚感さえ漂わせているのだ。

「このまま、私を吊って……」

京子の瞳は妖しく燃えていた。

私自身、いまは、この凄艶な京子への責めに没頭していた。

まだ手をつけていないホテルの浴衣の帯を京子を吊るす紐に用いることにした。

私と京子の分を合わせれば、博多織のこの帯は、女の一人を吊るするには充分のはずである。欄間を開けると、鴨居が格好の吊り場になった。この鴨居に帯を通す。

弓なりの京子の裸身は重かった。

私の額に、ジツトリと汗がにじむ。

帯の端を、縛られた京子の、手首と脚首の間にしっかりと結ぶ。難しい作業であった。

鴨居に通した帯がピンと伸びる。

「ウッ」

京子が苦し気に呻く。

その裸身が一層、弓なりにのけぞる。

京子の苦し気な表情が、私に不思議な満足

感をあたえた。

私は、帯を引きつづけた。

鴨居をこする布ずれの音が、京子の呻きと混りあい妙に私を魅了する。

ついに京子の弓なりの裸身が宙に浮いた。

「アアッ……」

京子の絶叫が熱気のこもる部屋の空気を震わす。

床から一米程の処で、京子の裸身が浮いている。

瞳を閉じて齒をくいしばりながら、吊られる事の喜びに浸っている京子の額にも汗がにじみでていた。

さすがに、激しい疲労感が私を襲う。

煙草の美味さを、この時程感じた事はなかった。

「その火を……私の肌に……」

とぎれ、とぎれの京子の声に、私は愕然とした。

京子の、赤く充血した瞳はじっと私の煙草に注がれているのであった。

京子は、この煙草の火を自分の肌にあててくれと頼んでいるのだ。

何という事だ。

それ程までに、自分の身体を責めさいまな

ければ、京子の燃えた身体は満足できないのであるうか。

所詮、京子は蛇性の女であったのかもしれない。その胸にある蛇の刺青が、急にたまらなく憎くなってくるのを感じた。

私は、その蛇の眼をめがけて煙草の火を押しあてた。

「ウウッ……」

熱さと悦びが交錯した悦楽の呻きにも似ていた。

「もっと……」

京子は、尚も、この火責めを求めるのである。私は続けた。京子の乳房に、横腹に、背中に、そして臀部にも……

その度に、吊られた京子の裸身は妖しく悶え、それにつれて二匹の蛇の刺青までが不気味に、その細長い身をうごめかせるのであった。

唇からは、涎がゆるく尾をひいた。

その白い裸身には幾つかの赤黒い爛れた跡が、その激しさを物語るかのように残されているのであった。

◆ ◆ ◆
京子の唇が、執拗に私の肌をまさぐり続ける。

京子は、あれ程激しい責めを受けたにもかかわらず、さほど疲れもみせず、狂おしいまでの情熱を、私に向ってぶちまけるのであった。

天井の大鏡に写る、私達の奇態な行為は充分、京子を満足させた。

そこには、私達二人だけの快樂があった。京子の両手首に、くつきりと残る薄赤い縛りの跡が私には艶かしい。

満たされた裸身をおし気もなくベッドに晒した自分の姿を、大鏡にみながら、京子は私に語りかけるのであった。

「私ネ。もっと刺青を彫ってみたいなあと思うことがあるの、私の身体には、まだ彫る処が残っているわ。腕や膝の下や……私、今ふっと思ったの。もし、あなたが刺青師だったら、どんなに素敵かしらと……そしたら、私は、私の身体にうんと刺青を彫ってもらわ。あなたの針の味は素敵でしょうね。手首や足首には、朱や、紫や、緑など色とりどりの花模様の輪を彫るの。腕や、膝の下はなにを彫ったらいいと思う。あなたも考えてね。首のまわりに蛇をまきつけるのもいいわ。そうだ。思いきって顔にも何か彫ろうかしら……それに指にも……何かの本で読んだん

だけど、イギリスの女の人で両手の指に、各々、ダイヤ、スピード、クラブ、ハートを刺青している人がいるそうよ。素敵だわネ。あ、私の身体を残らず刺青で埋めてみたい。素敵でしょうね」

自分の言葉に酔いしれる京子の激しい刺青への欲望に、私は恐怖を感じた。

改めて、刺青の持つ妖しい魔力に私は慄然とする。

「日本てつまらないわ。だって、刺青には神経質な位、無理解なんですもの。そのくせ、好奇心は旺盛なのに……外国はいいわ。

何の気がねなく、自分の身体を刺青で飾られるんですもの。ご夫婦で刺青を楽しんでいる家庭も多いそうよ。ああ、日本人は何故、もっと寛くものを見ようとしないのかしら……」

『私』の手記は、ここで終っている。

『私』という青年が、果してどこの誰かは筆者は知らない。

勿論、『京子』という女性が、本当に実在の人物かどうかは筆者の知るところではない。だが、『京子』という女性が架空の人物であったとしても、筆者の心には『京子』の面影が強く焼きついて離れない。

異常とも思える程、刺青に対して強い執着をもつ『京子』という女性を、人は『蛇性の女』と呼んだ。

筆者は、その『蛇性の女』が愛しい。何故なら、世の女性の中で、多かれ、少なかれ、『蛇性の女』のような本能を持たぬ女性はいないはずだから……。

さて、日本人は刺青風俗に限らず、いわゆる『性の神秘』に対しては頑くなにタブーを護り続けようとしている。

外国では刺青を家庭幸福の絆としている例も多数ある由である。

勿論、日本に於てもその例はあるだろう。でも、外国のそのように陽性的ではない。刺青風俗は日本民族の数少ない伝統のひとつである。だが、その伝統の今後は決して樂觀できない。

それでも、最近「快樂の女性」(シンディ・レイ著、佐藤恵三訳)が出版され、隠れたベスト・セラーズとなった。

この事は、今も尚、正しい刺青風俗の存続を願う刺青愛好者が多数居る事を実証してはいないだろうか。

筆者は陰ながら、日本の刺青風俗の前進を祈りたい。

(完)

二 贗作・マゾヒスチック・ストーリー 二

苦悶の部屋



— 芳 野 眉 美 —

A

ニューヨーク発刊の月刊紙「Sexology」一九六七年一月号に、Paul K.P. Van EPSが「Nexu al Slavery」という記事を書いているのを、ヨーロッパ旅行中の三原寛氏が訳して送ってくれた。

警察沙汰になって新聞をにぎわせたというのだから、アメリカでの本当の話なのだろうが「Jorture Chamber」と呼ばれる特殊なSEXの施設の話なのである。

この「苦悶の部屋」に通された男は、「裸になるように命じられ」

彼の新しい女主人は、「五インチもあるハイヒールのロングブーツを膝まではき、乗馬用の鞭を鳴らしながら全裸で」

男の前にあらわれるのである。女主人は新参の奴隷にトレーニングを開始する。

「男は跪まずいて、女主人の脚に接吻し女主人の足を舐める」

男が女主人に奉仕しているあいだ、

「男がオルガスムスに達するように、女主人は適当に苦痛を男にあたえながら鞭打ちを続

ける」

のである。やさしい初歩的な鞭打ちプレイといえよう。裸体を見せるのは一部で、女主人の多くは、

「革の乗馬ズボンに、五インチヒールの革長靴、革の鞭といった変った服装」

をしているので、この服装を見ただけで、マゾヒストはエクスタシーを感じるのである。レザー、乗馬ズボン、鞭、馬といったマニヤは、外国では特に多いのである。

面白いことに、女主人が乗馬ズボンで身をかためるのは、

「保護道具として、男たちに性交を許さないために役立つのである」

と解説され、

「このことは、鞭で仕込まれたマゾヒストにとって問題ではない」

とあった。そんなものなのだろうか。鞭打ちだけで満足するのがマゾヒストなのだろうか。

最初に裸身を見せるのは、

「新米奴隷の興奮を誘うだけの目的なのである」

とことわっている。売春ではないわけであ

る。

「男に性交を許さない以上、彼女にとって重要なのは、男が鞭打ちによって、できるだけ早く欲望を満たすように仕込むことである」

こういう意図のもとに、苦悶の部屋での遊びが始まるわけである。

「回を重ねるにつれ、鞭のサイズも大きくなり、短いループ付きの鞭しかきかなくなり、奴隷が鞭のキスにますます溺れてくると、オルガスムスを得るために、より一層激しい苦痛を受けねばなくなる」

ということになって、やがて、

「彼女の足下に跪まずくことを命じられなくても、みずから進んで彼女の足下に身を投げ、鞭打ちを哀願するようになる」

Mavda Rice Davis という、イギリスの

鞭打ちを商売にしたプロステイチュート（職業的婦人）は、ひと打ち毎に一ポンドをM的貴族から取りたてていたという。高価な鞭の遊びである。遊びには金がかかる。

「女主人の足下に屈従することこそ、これらの男たちのよろこびなのである」

とこの記事は結んでいる。

簡単な紹介で申訳ないが、三原寛氏の手紙

に、

「実際にこうしたプロステイチュートを体験した直後なので、肯けるものがありました」とあるのを加筆しておこう。彼の通信は公表してもいいことに約束がしてあるからもう少し書こう。

「M専門の娼家で革鞭を購入しましたので、おみやげに持参します。バーよしの壁に吊るして、もし、興味を示すご婦人でもあればモア・ザン・ベターです」

奇クの鞭打ちの女王、東雪枝さんがよろこびそうな一節があった。乞御期待。彼が帰国したら実験しよう。俺はモデルにならないよ。見ているほうが面白い。

三原寛氏は「旅行記」を奇クに送ったそうだから、どこの国のどこの美女に鞭打たれたかは知らないが、彼のM的経験を誌上で拝見出来るかもしれない。

彼のことから、どんなカッコで外国婦人に Urine を浴びせられたか、私といたしまし

ては、それだけが楽しみである。

六月号の団先生の「人生論」に、「M派の連中は、セックスに関してはM的であるが、社会生活においてはS的（男性的）」

な行動をとっている」

とあったが、三原寛氏もその部類の一人と見受けられる。

B

ミニスカートの、白いロングブーツの少女を見たとき、牧はしばらくその少女のあとをつけていた。長い素直な髪が腰のあたりまでたれているのも魅力があった。

華麗なネグリジェが飾ってあるウィンドーの前で少女が立ち止ったとき、牧は少女の横に立っている自分に気がついた。

「お好きなネグリジェがあったら、プレゼントしましょうか」

少女に似合うのは、やはり可愛いベビードールスタイルだろう。少女の肌を露出してしまふこの小さい薄物を、牧はこのすばらしい少女に着せてみたいと思った。そんなに高価な品でもない。

少女はちらっと牧を見てウィンドーをはなれた。何もいわない。フレヤーが沢山ついたアイボリーのブラウスをなんなく着こなしているのだから、もしかしたらファッションモデルかもしれない。

ミニスカートの女王といわれる、イギリスのファッションモデルのツイッギーのように小枝のような、未成熟の少年のような肢体ではない。細い身体にくらべて、胸のふくよかな隆起が気になった。成熟した女であった。

牧はホモセックスには興味はない。少年のような少女だったらあととはつけないだろう。少女は地下のバーに入っていた。ネオンにハクラブレザリーVとある。牧も続いて入った。

すみのボックスに坐った少女は足を組み、ハンドバックからケントを取り出して薄い唇にくわえた。白っぽい口紅が浮いている。牧は火をつけて、少女の前に坐った。

ミニスカートから、少女のパンティが見える。が、普通のパンティではない。皮のようであった。レザービキニである。

赤い部厚いジュウタンに、豪華なシャンデリヤ、テーブルの青い炎、ミニスカートの美少女……夢のようであった。

少女はコーラを飲み、牧はオールドパアの水割りを飲んだ。ボーナスで牧の背広の内ポケットに、八万ほどの現金があるのが牧をう図うしくさせたのに違いない。

挨拶にみえたハクラブレザリーVのママを見て牧は驚いた。ママは、ぴったりした皮のカクテルドレスを着ていたのである。ガントレットも皮であった。黒のハイヒールのかかとも高く鋭い。

その時になって、牧はクラブの壁に数本の皮鞭が飾られているのに気がついた。ハクラブレザリーVは特殊な趣味を持つ人たちが集るクラブらしかった。

少女が始めて牧に声をかけたのは、ボックスに坐ってから三十分もたってからである。「奥にいきましょう」

少女は立ち上ってクラブの奥のドアを押した。ドアにハアトリエVとあった。少女の部屋なのだろうか。ハアトリエVの意味はなんだろう。ハクラブレザリーVのママの寝室かもしれない。

レースの天蓋でおおわれたベットも、きゃしゃなテーブルも、椅子も、すべてがアイボリーで統一されていた。

「服を脱いで」

少女はハスキーな声で牧にいった。

「シャワーを浴びて」
まるで命令であった。

牧がシャワー室からでたとき、牧のスーツも下着もかたづけられ、籠の中に皮のサポーターが一つ置いてあった。ストリッパーがつけるバタフライのような、ふくらみのあるレザーサポーターであった。

少女は細いしなやかなよくしなる皮の鞭を持って牧を待っていた。華やかなブラウスもミニスカートも脱ぎ、皮のブラジャーと皮のビキニだけで、白いブーツのかわりに、膝まである編あげのハイヒールを履いていた。

「それでハントしたつもりなの」

きびしい少女の声と共に、牧の肩に激しく皮鞭が打ち下ろされた。牧はよろめいた。

肩といわず、胸といわず、鞭のあとがみみず腫となって浮きあがった。牧の全身は急激に跳躍し伸縮し、いも虫のように床を転げ廻った。頭をかかげ、顎を両手でかばい、少女の残酷な鞭の下を逃げ廻った。

鬱血した牧の裸の背中を、少女のハイヒールの鋭いかかとが傷つけ、鞭のまきおこす唸りと風を、かすんでいく意識の中で牧は聞いた。強烈な鞭打ちの連続に、逃げるひまなく牧は悶絶した。

少女をハントしたつもりが、逆に少女にハ

ントされている。あまりにも痛いガールハントであった。

顔に水を浴びせられて牧は気がついたが、水だと思ったのが美女の Uine で、少女は牧の顔をまたいで、立ったまま牧の顔に放尿していたのである。

終ると、シャワーが牧の全身を濡らした。シャワー室の中にひきずられたらしかった。水にぬれて、皮のサポーターが縮み、牧はその激痛に呻めいた。皮サポーターを牧に穿かせた真意は、こんなところにあったのかもしれない。

少女は全裸であった。

少女は牧の胸にのり、シャワーを浴びていた。少女の素足は、牧の顔を踏みつけ、腹を踏み、皮サポーターをへこまし、牧の全身を自由に動きまわった。

美しい青い肌に、勢よく水滴を散らしている。乳首はふくよかな乳房に埋没して見えない。かすかなけりが息づいている。

レースの天蓋でおおわれたベッドに、全裸の少女は横たわった。

皮のカクテルドレスをまとったハクラブレザーVのママがAアトリエVに姿を見せ、手

錠をはめられて、ぐったりと床にのびている牧の顔をハイヒールの先でつつき、笑いながらタオルを投げた。

「かけておきなさい」

少女が寝ているベッドに近づくと、ママは皮のカクテルドレスを脱いだ。驚いたことに皮のカクテルドレスの下に、ママは何も着ていなかった。素肌にレザーをまとっていたのである。

ぬめぬめと輝くようなまっ白な肢体が、なよなよと少女にからみついた。

牧は眼をつむった。

C

ハクラブレザーVの裏口に、ギャラクシイが横づけされていた。眼も鼻も口も耳も、すべて密閉されている皮の全頭式マスクをかぶせられた牧は、少女に手をとられてギャラクシイに導かれると、車の床に転がされた。鼻のあたりに小さな穴があり、かろうじて牧は息をすることができた。

少女の白いブーツが牧の頭を踏んづける。窓にカーテンがひかれ、少女と牧を乗せたフォードギャラクシイは、都心を離れてスピー

ドをあげた。牧の裸体を足の先まですっぽり包んでいるのは、皮の全身男性用タイツであった。両手首には続いて手錠がはめられてあった。

どのくらいドライブをしたのかわからない。海の音が聞こえる別荘で、牧は全頭式皮マスクから解放された。塩の香がする。

少女と牧を迎えたのは、皮のオールインワンをつけた、皮マスク、といっても眼だけだったが、中年の婦人であった。皮のウエストニッパで強くくびられ、婦人の胸はまるでアリのように細かった。網タイツにかかとの高いハイヒールは、すんなりした美しい脚によく似合った。

「今夜の獲物はこれ」

皮マスクの婦人が少女にいった。

「ええ、そうよ、おば様」

満足そうにうなずくと、

「その皮タイツを脱いで」

と婦人は牧に命じた。

「雄犬の裸が見たいわ」

牧の全身は、生々しい鞭の跡だらけであった。一カ月は消えないだろう。その間、牧は風呂屋に行けないことになる。

「いじめられたわね」

皮のガントレットを脱いだ婦人のしなやかな指が、傷つけられた牧の肌を撫でた。鞭の跡にぬれた熱い唇をそっと触れた。

「この獲物をいったいどうなさるおつもり？ おば様」

「さあ、どうしましょう」

「意外に弱虫なのよ、この雄犬。ちょっと鞭で撫でてあげたら、すぐに失神してしまったの」

それは、こびるような甘い少女の声であった。この少女は何者なのだろうか、と牧は思った。ハクラブレザーVのママと同じように、この中年の婦人ともレスボスの関係なのだろうか。

「こんな残酷なことをするからよ」

「あら、残酷だったかしら」

「あきれた子」

婦人と少女にじっと見つめられて、手錠だけで何も着ていない牧は、羞恥で顔が真赤になった。いままでは皮のサポーターをつけられ、タオルで下半身をかくしていたのである。今はそれもない。二人の美しいレディを前にして、牧は全く無防備であった。

「奴隷の洗礼はすませたわ、おば様」

「まあ、もう飲ませてしまったの」

「いいえ、浴びせただけよ」

「同じことだわ」

楽しそうな二人の会話であった。

「おば様もいかが」

「あとでね」

牧は手錠をつけられたまま、天井から鎖で吊るされた。この部屋にも責め道具が完備していたのである。牧はやっと爪先で立ち、手錠が肉に食い込む苦痛にたえた。

ハクラブレザーVの奥のハアトリエVと同じように、この寝室も、ベッドもテーブルも、壁までがアイボリーで統一されていた。その上、数え切れないほどの赤と黄のチューリップが、洋酒棚にサイドテーブルに、本棚にテレビの上に、いたるところに飾られていたのである。部屋中がチューリップの満開であった。

部屋全体がチューリップの香気で息がつまりそうであった。

アイボリーといい、チューリップといい、普通の神経の持主では、いたたまれなくなるだろう。この異様な部屋に、吊るされただけ

で、牧の神経は高ぶり、胸は圧迫されて再び失神しそうであった。

皮づくめの婦人が牧に近づいた。やわらかな指先がのびて魔物のようにいたずらを始める。ひねりまわす。

「やめて下さい」

牧は悲鳴をあげた。

「それだけは、許して下さい」

その口に、ひょいと丸められた布が詰め込まれた。フリルも美しいレースのパンティであった。

「脱いだばかりだけど、そんなに汚れていないわよ」

皮マスクの婦人のしなやかな指先は、更に牧を叩めかした。なんともいえない恥ずかしい、狂ったような苦痛が嵐のように吹きすさんだ。

くすつと婦人が笑った。

「手がけがれてしまったわ」

牧はがくつと首を垂れた。最高の侮辱であった。

婦人は手を洗いに浴室に消えた。

セミの羽根のような薄ものを幾重にも重ねた、豪華なネグリジェを羽織った少女は、ベ

ッドに横たわって牧が責められているのを面白そうに眺めていた。

浴室からもどると、皮マスクの婦人は、ガラスの浣腸器を持ちだした。グリセリンをどのくらいそそぎこんだかわからない。

婦人は、栓のできる、脱腸帯に似た皮の浣腸帯をすばやく牧の腰にあてがい、更にその上からレザーパンティを穿かせると、パンティのファスナーをしめてそこにカギをした。

牧は全身の筋肉をふるわせながら、浣腸責めにこらえた。牧の顔から血の気が失せて、ひたいに油汗がにじみでた。

皮の浣腸帯は容赦なく牧を責めつけた。牧の顔面は蒼白になった。

夢うつつに、牧は、婦人と少女がベッドでたわむれている声を聞いた。

牧が失神からさめたとき、牧は温泉マークの一部屋に、見知らぬ女と寝ていた。美少女でも、中年の婦人でも、ハクラブレザーVのママでもなかった。

牧はあわてて背広の内ポケットをさぐったが、八万円のボーナスは袋ごと無事であった。ハクラブレザーVの勘定も払わなかった

ことになる。

ホテルの浴衣を着た若い女は、牧が眼をさましたので、浴衣を脱いでしだれかかって来たが、牧は拒絶した。女は商売女だったが、この女に声をかけた記憶はなかった。

女は不審そうな顔付でみつめていたが、牧が何かを思い出そうとするように、しきりに頭をかしげている態をみて、それ以上に誘いかけようとはしなかった。

牧はホテルの風呂でしばらくぼんやりしていたが、やさしい女だったのか、女は牧の背中をながしてくれた。しかし、牧の背中といわず、胸といわず、尻にも、脚にも、生々しい鞭の跡を見て驚いたようであった。

会社を休んでしまった牧は、その夜、うろおぼえにハクラブレザーVを訪ねたが、会員制のクラブとかで、ドアボーイに丁寧なことわられた。

牧はクラブの入口が見える喫茶店で、二時間ばかりねばってみたが、美少女もママの姿も見つけることは出来なかった。

美少女の名前は知らない。

(終)

談 雜 譚 奇

草 然 徒 の 夜

栄 宮 中

【世界獵奇地帯】

東京地区では五月中旬封切予定のイタリア映画である。総天然色ワイドビジョン、十一巻、上映時間は一時間三十三分。

「現代ショック・ドキュメント」とうたい文句があつて、一〇〇〇ミリの超望遠レンズがはじめて覗いた世界の恥部と惹句は云うが、果して額面通り獵奇地帯を見る事になるかどうか、甚だ関心のあるフィルムであつた。映画雑誌は滅多に買わないが、本文の記事やグラビアより目についた広告に惹かれて買い、それから配給会社に問い合せて、試写会に招待されて一般公開より先に観る事が出来たが、慌てて観るには及ばぬ映画だと報告しておこう。

紹介を兼ねる解説では「ショックキングな、残酷な、あるいは禁じられた実態をつぎつぎと暴いたドキュメンタリー」とあるが、一番の話題である奴隷売買の入札現場のかくし撮りにしても、異国趣味的な先入観によってコソコソがたてられた作り物と思つて見てよいだらう。奴隷商人は見つけ次第射殺される国情（レバノン）といいながら、食物を投入出来る小穴のあいた木箱を積み、ライフルを持ち弾帯を肩に提げた武装した男をトラックに上

乗らせて来たり、観てて、テヘテへと笑いたくなるような光景なのである。

ハンブルグで人気を呼んでいるナチス拷問のサディスティック・ショーでは、スチールにあるようなシーンはない。税関カットか映倫カット、又は自粛したのかもしれないが、辻村氏の関谷夫人鞭打シーンなど頭に描いて映画を期待して観に行ったら裏切られる。

夜の海のセックス・ゲームを赤外線撮つたというカットでは、赤外線投光器を使つてというが、器具のセッティングなど仰々しく見せてはいるが、フィルタによる疑似夜景のようだ。現在実用に供されている赤外線撮影装置などの例をとると、真つ暗闇の中でも明瞭に被写体が撮れるのは確か。然し感光したフィルムでは、人間の目は夜光鏡のように光るものである。

原題は「奇妙な世界」なのだそうだから、奇妙にさえ思えばよいのであらう。

【断罪】

セックスが売り物……といわれるスエーデン映画で「スエーデン最後の断頭刑に処せられた一女性の驚くべき実話の映画化」というフィルム「断罪」が近日公開される。当の女主人公の回想で始まるファースト・シーンで

は、首を斬り落す大斧や、刑具が紹介されるらしい。黒布で目かくしされ、仰向けに寝かされて咽喉から断ち落とされる処刑寸前のカットなどショッキングなシーンである。

アルジェの戦い、ではギロチンが見られたが、血を流す断罪——ベトナムの公開銃殺にしても——はやりきれない。プロレスにしても、血を見てエキサイトした試合は「ショウ」そして、軽い気持で見ているテレビ番組であつても寒気だつし、奇巧誌上に「切腹讃美」の記事があつても嫌味だし、自分のアブノーマルなものへの関心を棚上げしても「一体どんな神経の持主なのだろうか」と不可解な気持を抱く。だから、好奇心旺盛でも、「信じられぬ世界」というイギリス映画が、これも近々封切られるらしいが、また、なあんだ、つまらねえ……と、失望するに違いないと思うし、紳士国づらして世界で最も残忍な民族といわれる国の、それらしい焦点の合せ方に、すでにうんざりしている次第であるが、ただ写真家ストレッカーのヌード撮影シーンは観たいと思っている。世界猟奇地帯でも、前衛芸術家と称するビトー・シーケンスがゴーゴーを踊るモデルを、自分も音楽にのって体をゆすりながら撮りまくるハンブニ

「世界猟奇地帯」

ハンブルグのサディスチックショー



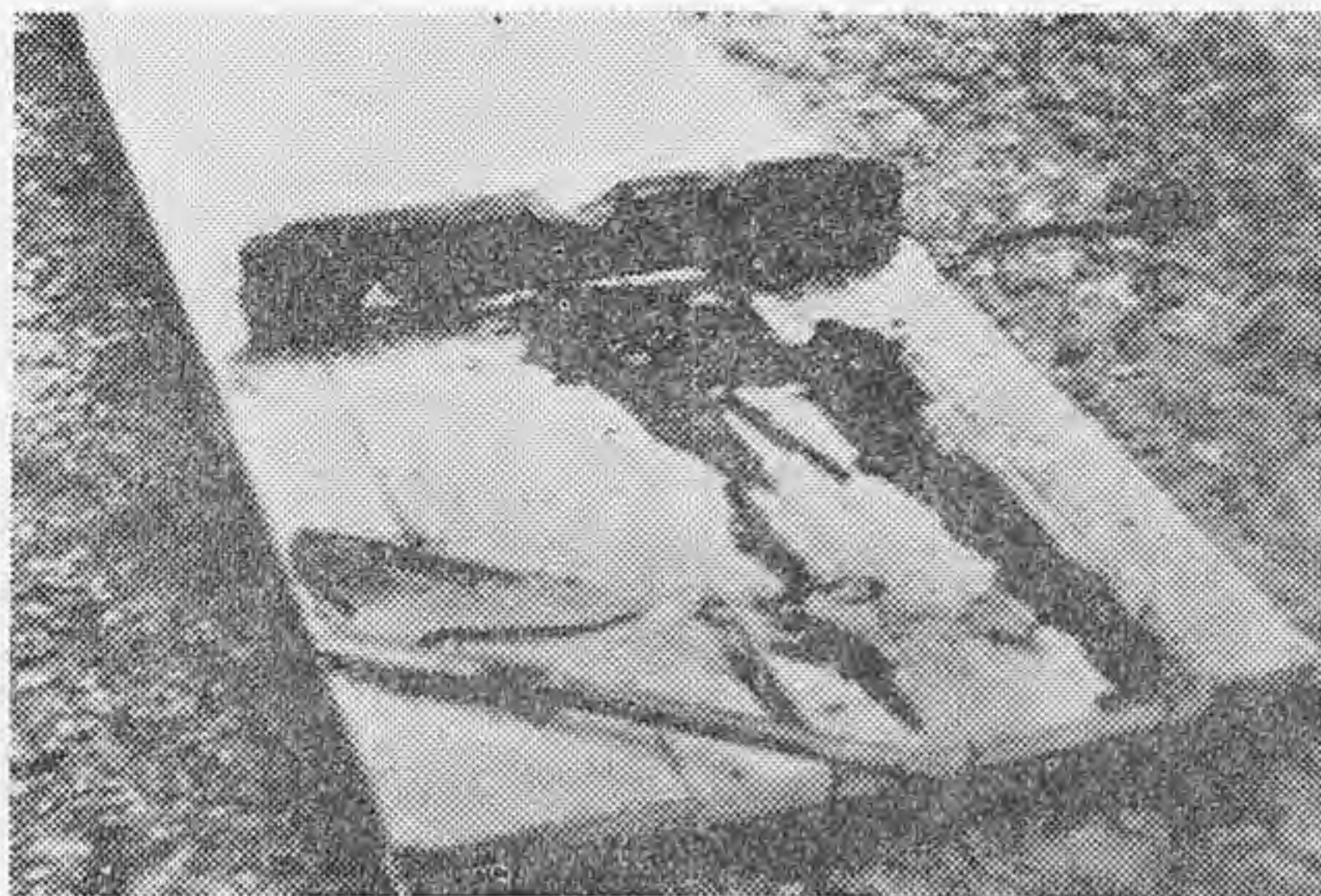
ング的な光景があつたが、衝動的な創造方法は大変に興味がある。

「レベッカ」などという、ヒチコックの旧作再映が女性間に好評で、観たいと思う「欲

望」が東京ではまだ封切られていないが、矢張りカメラマンのハンブニグが話題になっているし、プロの細江氏までが絶賛している主人公のカメラさばきや、モデルの扱い方はカメキチの立場ではこたえられまい。

アン・マーグレットの「スインガー」以来ハンブニグという言葉が使われ出し、見ようまねで試みる人が多く出現して来たらしいが、よきパートナーを得てMSフォトを撮っている人などは、そんな感興は疾うに御経験済みと思うし、それ故カメラが好伴侶であろうと思われる。デラパンといわれる「平凡パンチ」別冊十一号には『人間の喜び』——ニューヨークのハンブニグ・クラブの紹介フォトが一枚だけだがカラー・グラビアにある。麻ロープがよじれて下っている所に、Gパンを穿いた女性が豊かな胸をあらわにして作品を見ているらしいポーズで立っているが、どんな主題が表現されたかを考えてみるのも薫風五月の宵にふさわしかろう。また、ヤングメン達が作る雑誌というふれこみの「スタッグ」二号には、ペインテッド・ガールが表紙で本文中にもカラー頁があるが、（俺も場所さえあればやってみたい）と考える読者も、それを見て現われるかもしれない

い。武智鉄二氏などは「紅閨夢」で既にフィルムの上に定着しているが、流行するアンダーグラウンド・フィルムを安直に試みられるなら、縛りはイヤと拒否する職業的モデルも協力してくれるし、フィルム会社の「公序良俗



「断罪」

断頭台の大斧

を乱す内容のものはお返ししません」などというおどしにも怯えず、「芸術作品」を創る事が出来る。

映画話が続いたところで、話の種を拾うと——京阪神方面では若松孝二氏の「胎児が密猟する時」が公開されたそうであり、偶然それを観た友人から聞いて羨しく思った次第。恐らく今後も風俗取締りのキビシイ東京あたりでは公開されないだろうよ……という彼の憶測であった。

「サディズムというのは、相手に苦痛を与えることで性的な興奮をおぼえる傾向をいうが残念ながら、男は一般的にサディズムの要素をだれもが潜在的に持っているものである。

それは、男の性の深層心理的特性が、支配欲の達成という方向にある以上、やむをえないことでもある」(奈良林祥八医学博士)「こ

れからのSEX——妻はどこまで知るべきか」などと啓蒙書には書かれてあるが仲々MS的な探究・表現には規制が「観念的に」

厳しい。異常な世界に姿をかりて、思想伝播を試みようとする、意図さえ偏見で抑えら

れてしまう。男と女しか存在しない人間社会でありながら、男と女の本然的行為には目を

覆わせておこうという直視否定の姿勢が根強

いし、咀嚼出来ない愚昧な「群れ人」が、いたずらに世に多いからである。

皮肉な事に、その愚昧な人間は、人間臭い営みから生命を享けて世に現われる。「赤ちゃんはどうして生れるの?」という幼い愛らしい質問にも、「コウノトリが連れて来る」「木の股から授かる」などとしか答えられない親達がいまだに居る。というより、殆んどの親となった者が、そういう誤魔化ししか云えないのだらうと思う。それは、自分達の愛情行為否定だとも気づいていないあらわれである。「愛の讃歌」は「結婚」という形式的なものに捧げられるものばかりではなく、確かめて、選んで得た「夫婦の結晶」に対して捧げられてこそ、当然であろう。そこに「子宝」という意味が在る筈である。

マスコミは昨年から今年にかけて、「ベビィ・ブーム」という言葉を様々に使い続けて来た。高校の数が足りない、戦後最大の受験地獄云々。そして「ヒノエウマ」あけの年の新生児数……と云うように。全く性の自覚を持たぬ「群れ人」がいかに多いかの証左をあげているようなものだ。

結婚すると子供を欲しがる女や、子供の頭数が多い程「幸福」と思う夫婦、孫の顔が見

たいという年寄りに孝行する気で赤ん坊を抱いて、やっと一人前になったと思う男や女がいる限り、愚蒙の群れは後を断たぬであろうし、結果的に見てSEXは様相を変えて乱れて行くだろう。

公序良俗を盾にMS的行為を不潔視し排他するより、乳呑児をおぶり大きなお腹をつき出し、幼児の手を引いて歩く女と、手助けのツ・モリで荷物を持って従う男などの姿を見かけたら、呆れて口も利けないと見てやる方がどんなにかましな事である。「子供を多く作りすぎた罪」を規定し、「罰」を制定した上で「風紀問題」を考えなくては「取締り」も片手落ちだと云える時代になっている。産制具のキャッチフレーズではないが、「すくなく産んで楽しい暮し」という生活を基本的なものとして徹底させなければ、人間社会の改善はおぼつかない。

映画話から突然話題がそれたが、こんな事をティーンしてみるのは、性風俗を考察する上で面白いと思う。

【拷問家具】

たびたび女性雑誌を肴にして面目ないが、二月二十日号「女性自身」にカラーグラビアで、「アダムス家の拷問家具」として中世ヨ

ーロッパで使われた拷問具を蒐集してある部屋の写真が紹介されている。アダムス家とは何処の国の、どんな氏素姓の人かまで調べてないから、その写真についてのみ語るしかないが、「今は室内装飾として使われています」とある。「使われている」としたらエライコ

ツチャといわねばならないが、室内装飾に利用されている猟奇人のコレクションと見るべきであろう。だが婦人週刊誌の編集者が、よりに選って何故に採り上げたのであろうか。

「世の中には珍な人もいたもんですな、淑女方よ」とニンマリ笑ってみたかったからか。

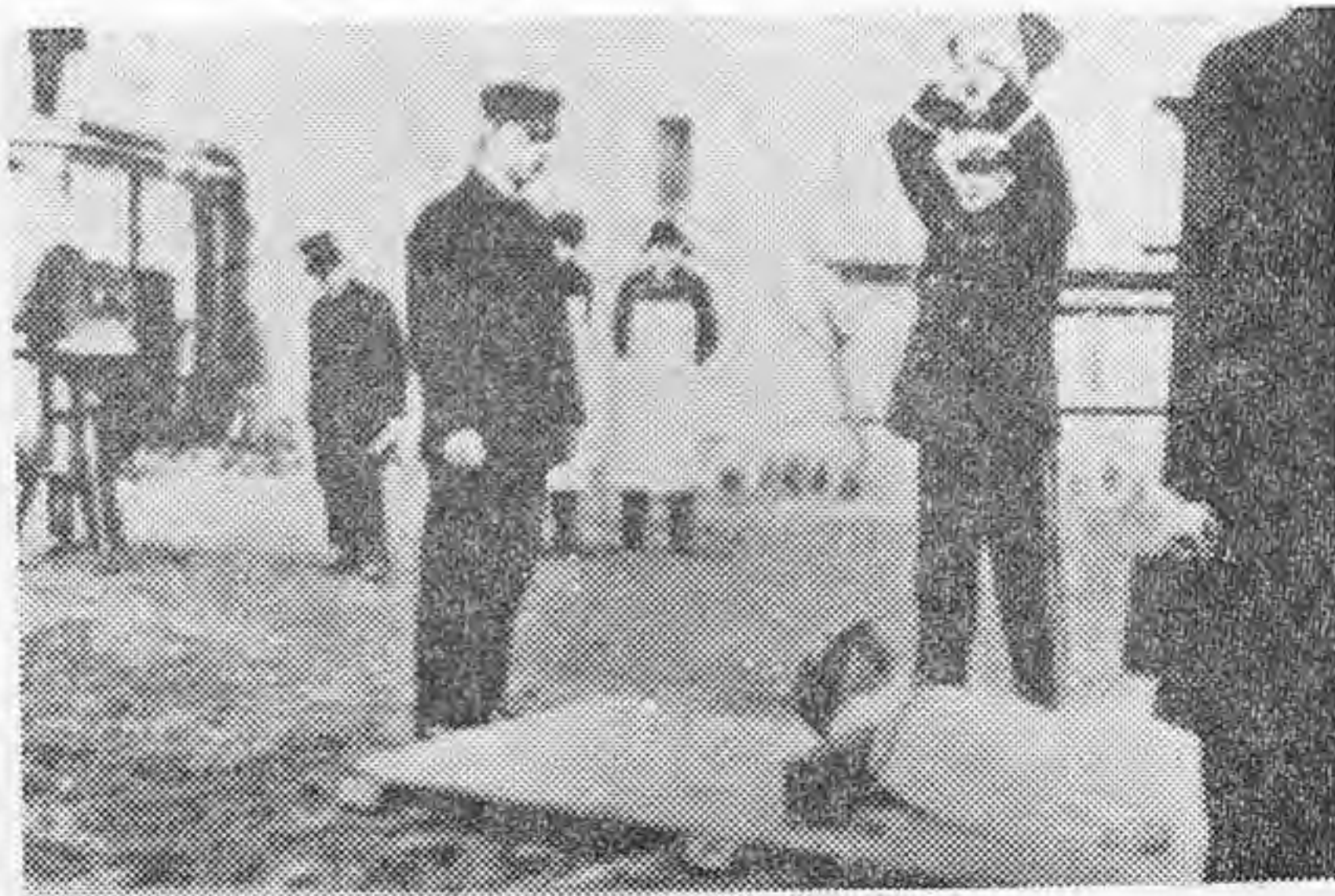
また、このグラビアを見て「素敵だったわ」と云ってくれる女性読者の出現を桜井氏は待ち望んでいたものであろうか。——私はアダムス氏(?)のコレクションを見せてくれた事を桜井氏へ編集人Vに感謝しつつ、どんな反響があったかを知りたいと思っている。

但し、「鉄の処女」の解説が、「生きたミイラを入れる処女像」とあるのはひっかかる。それが提供側のオリオン・プレス社の解説文としてついていた文によるものであったにせよ、「ミイラ」を入れるんじゃないか。「拷問」にはならないではないか。

「鉄の処女」——アイゼルネ・ユングフラウ

「断罪」

処刑のシーン



については二月号誌上にも触れたが、同号挿入画では「鉄娘」と表現されている。いずれにしても、それを拷問に用いるには、「お前をあの中に入れてしまおうぞ」と脅かすか、入れてしまった後で、外まきの鎖をじわりじわ

り締めつけて針が刺さる恐怖や苦痛を与える程度であつたろう。パチンと扉を閉めてしまつたら急所を刺し貫かれて死ぬ筈だし、処刑である。

また、そのコレクションには、ストックといわれる座ったまま足枷、手枷、首枷をはめて晒す事になる穴あきの板（女性用）や、針のベッド、ゆさぶり続ける一角獣の木馬などが紹介されている。

× × ×

奇ク誌上に現われる「プレイ・フォト」では責め具を用いたものは極くまれである。大塚啓子嬢が、京都のT氏所有の黒レザー張りのベンチにベルト固定されたフォトは、かつてグラビアにのつたし、分譲フォトにもあるらしいが、増田氏の「スレーブマシン」など活用させて貰つたりしたら中河嬢のフォトもさえて来るのではないだろうか。

千葉青鬼氏のアイデアは独創的で面白いが、手がこみすぎていて日曜工作でも扱いにくいに違いない。プレイに応用出来る家具をいくつか挙げてみよう。

※インドア・ペット（一万五千円前後で買える美容器具、自転車式の足踏み器）

※パイプ軽量鋼管製物干（三千円前後でT

字型Y字型など、移動用スタンド付き、固定式などある。晒柱、両手挙吊りに利用）

※ソファアーベッド（マットを外すと金網椅子、または金網ベッドとなり、部屋の隅に立てかけると檻にも転用出来る）

※ヘルメスベンチ（ボディビル用のもの、七千円以下で買えるバーベル懸具のついたもの。斜角も変えられしる、シフトを併用して内診台のように羞恥責めに応用出来る）

※ホームスタンド（ボディビル用のもの、一万円を超えるが、安定性のある吊枠となる）

——新社屋の一室にこれらの器具を備えつけて、アメリカンスタイルと呼ばれる傾向のフォトを新開拓しては如何かと思われる。

【我が悔恨】

恋愛結婚のよしあしを、しみじみ思う昨今である。若い人達の仲々賑やかな論争を見聞きしながら、ああ何故俺はあんなにまで熱中し、三拝九拝して結婚しちゃったんだろう……と悔まれる。新しいセックスだ、なんののかと別な生き方が示される一方で、再価値認識論とでも云うのか保守的な行き方を尊重する旧き道徳的な、若い世代にとっては模範的結合をした俺様ノ チェッ、羨しくらえ。



正しく徒然に思うには、須磨氏のように初めから恋人を高姿勢に出て屈伏させとけばよかったと、後悔先に立たずの想念である。

ねえ、「煉獄」の黒井珍平さん。同じ悩みを語ろうじやありませんか。二月号のあなたの「サロン」でのお話は、私が自分の家庭事情を語ったみたいと思われて、思わず唸りし



ばし黙りこくってしまいました。

「ああ、仕事してる。仕事だ……」と誤魔化しながら、深夜こっそりペンを走らせているから「夜の徒然草」なのであって、自分だけのささやかな愉しみのために如何に苦勞しているか、あなたには判って頂けよう。

さてもさても、奇クは魅惑の魔窟。魅せら

れた魂は彷徨し、ノーマル然としたワイフからエロスの園を追われて……若し有料でもいいから本誌が個人広告を扱ってくれたなら、こんな求人広告を連続掲載してみたい。

「当方既婚者子供無。通住自由M性被飼育願望女性、助手として雇用。長期契約。秘密厳守。委細面談」

【雄性資質】

トップレスが出現した以上、水着なんて不用でありたいね、というのが集った雄性旺盛な連中の言。然し中にはバストの巨砲よりヒップの臼砲を眺める方がいいと云う者もいてバックレス水着の讚美も出る賑やかさ。ちなみに当日の代表的作品を御紹介してみよう。

A——全くストラップなしのプラスチック成型による水着。

B——軽量合金製のパイプを曲げてカンバスチェア式のサポーターシステムの水着。

C——オーソドックスながら材質を綿、皮、デラクール（合成皮革）、ビニールなどで仕上げてみては？という水着プラン。

D——長いストラップを附属としてつけ、お好み次第におまかせするビキニ。

近づく夏、何処かの海辺や、ホテルの会員制プールでお目にとまったら——Are you a

K. K fan?——と問いかけてみては？

【雑記一】

東京には私の知る限り「見せる下着」のメーカーが三つある。いずれも通信による販売方法をとっているが、最近では「皮革」製品のオーダーが多いとの事。次回ではその見て歩きを記述してみよう。

【雑記二】

「全裸の女を見ながら飲む」という小見出しで、西ドイツにあるメンズ・バー『ラステイ』の紹介が平凡パンチ、五ノ八号（創刊三周年記念号「海外・話のタネ」）にある。

アンチ・フェミニストおよびサディスチックなものへの関心がある男性に好評という『ラステイ』は、カウンターの中の洋酒だに緊縛された全裸の女性がいつも四五人飾つてあるのだそうである。——本当かな。

【雑記三】

男性とのプレイは好みではないが、過日、懇望されてお相手した。A氏の奥さんは懐妊中。初めての出産となる待望の妊娠という事でかなり神経質になっているとの事。当方としては奥さんを口説きたいところだが、今回は大事とって勘弁してやってくれと云われるとA氏の協力で孕み腹を記録しようと意気込

んだプランも消え、A氏をカメラで追う。久しく奇クに載らなかった男性フォトだけに興味を持たれた方もおありの事と思う。

【この女と】

辻村氏の「SMカメラ、ハント」「縄は知っている」に紹介され、山本氏の「カメラ・ルポ」「この女と」に引継がれた笹原八千子夫人。仲々の好プレイヤーのようである。

辻村氏への私信の一節で「……私の本当の心は、カメラ・ハントには出せない、氷山の海中の秘から隠された大部分を望んでいるかもしれない」と書き、対話では

「もう、こんな私に愛想がつきた?」

「仲々出来ない緊縛をさせてくれて有難かったよ。ただ、これから先、どこまで昂進するか、一寸心配だがね」

「プレイしていて死ねば本望じゃない」

続いて

「辻村さんには余り無理なこともお願い出来ないですわね……」と洩らす。辻村氏はスタミナのある男性を紹介しようと考えて、山本氏がクローズ・アップし、山本氏はバトンタッチで、彼女の堪能に近くプレイを發展させる訳だが……。私がペットにマゾ化誘導を試みるのとは違って、本質的にM形成されたと



見られる既婚歴のある女性をパートナーにする事は、プレイを容易にして興味ある事だと考える。被虐をエロスへのプロセスとして、前戯的なものだけでとどめる事は、理性的制御のお手本かもしれないが、フォト・コレクターとしての自己満足でしかない。未亡人としての希求欲を満たさせ、M性探究へ深く入り込んでみたいと思うのは私だけではあるまい。医家の臨床報告などの様な学術的なレポートとならないまでも、甚だ貴重な記録は残せそうである。「あるす・あまとりあ」の大家は、訪れる客から悩み事を書かせ、カウンセ

セラーの役をつとめながら手記を集積し、実例などと称して著作に役立てているが、私はそうした小賢しい事はしたくない。そこにある世界と、その人とのハンピングをしてみたい。笹原さんのお目にとまれば、まことに幸いである。

【中河恵子嬢へ】

回送の便を、編集部で計らって下さるか否かは、一切御判断におまかせで、四

九一〃的な絵のコピーをお送りしてみた。
『遠山静子』にもなった貴女が、この先どんなポーズを望み、強要されるか興味のある事である。入手されて、徒然居士の徒然なるままに語り合う機会が得られれば幸甚。

「もう、やめたッ」と

とばかり、前ぶれもなく消え失せないで欲しい。

△編集部より▽——中宮栄氏から中河恵子嬢へ托された数枚の絵は、丁度機会があったので直接手渡した。彼女にその意志があれば、いずれ返信があることと思う。



〔告白〕

ゴムプレイに耽る私

津田亜紀子

高校一年の秋のことでした。お彼岸のお寺まいりに家中でかけ、その前の日からおなかをこわしていた私は、一人でるすばんしていました。ラジオや読書にもあきて、廊下に出て庭をながめていましたが、ふと廊下つき当りにかかっているゴム引レインコートが目にとまりました。

その頃は羽二重の裏にゴムを引いたレインコートがすぐ流行していました。すべすべしてなめらかで、しかも冷たくしっとりぬめるようなゴムの感触は、雨の日にも決して不快なものではありませんでした。

その時、私の頭には突然、誰もみていない今、ゴムのレインコートを肌にあててみたい

という感じが湧き上がりました。そしてなにかにつかれたように私は、すぐさま廊下の庭に面しているカーテンを引き、ふみ台をはこんでレインコートの下におき、その上に立ち上りました。釘にかけてあるレインコートは丁度、私の肩と同じ高さになりました。私はパジャマの（その時、私はパジャマをきていたのです）ひもといて胸からおなか一ぱいにレインコートのゴム面を押しつけました。たちまち心地よい感触が身体一ぱいにひろがり、どうきがドキドキと高鳴りました。そのまましばらく、じっとしててから、今度はレインコートのすそを拡げて腰一ぱいにまきつけたり、細長くたたんだレインコートを両

足の間から引き上げて太ももの間にピッタリと密着させたりしました。しかし人に見られたら大変という気持が一ぱいで、一時間ほどでやめました。このときの夢のようなときの思い出が、それからの私の一生を左右することになってしまいました。

その後はレインコートをみると、以前のようになんか平気ではいられなくなり、あやしく胸が高なるようになりました。でも家中が留守になることは、めったにありません。いろいろ考えて、雨の日には学校へレインコートをきて行って、フードだけかばんの中にしまっただけに忘れてたことにしました。そして夜中にフードを、そっと寝床にもちこんで（フードの

裏もゴムが引いてありました)使用しましたが、フードはそんなに大きなものではありませんので、どうしてももの足りませんが、でも全然ゴムがないよりずっとよいので、つづけて使ってみました。

高校三年のとき勉強部屋にはなれを作ってもらいましたので、それから自分のものをつつかりはなれにはこび、寝おきするようになってかなり自由になりました。寝床で使うレインコートは通学用と別に、お小づかいで買って、秘密の場所にしまっておくようになりました。シーツにはったり、おしめカバー風に腰をつつんだり、細長く三十センチ巾くらいにたたんで、おすもうさんのまわしのようにベルトでとめたり、いろいろ考えてゴムをためしてみました。

大学に入った夏、お友達の文子と一緒に海岸に行ったときのことです。文子の伯父さんが網元で網小屋の二階を一夏貸してくれるというのです。網小屋といっても一階が倉庫でいろいろな漁具がいてあって、二階には畳をしいた部屋に炊事場もつけてあります。

二日ごろから肌が日に焼けてヒリヒリだし、なかなか眠れなくなりました。そこで文子が下の倉庫にいったってゴムの合羽を持ってく

ると、それをふとんに敷こうといいました。

私はびっくりしましたが、勿論内心は文子もゴムが好きだったのかと思ってうれしくなりましたけれど、そんな風はみせずに仕方がないというようにいうことをきくことにしました。まだ全然手を通してない新しい黒のゴム合羽一枚をシーツに一枚を上にかかけました。レインコートと違ってガバガバとした感じですが、ゴムとしての感触がよいのには驚きました。さて寝床につくと文子は、はだかになろうといいました。興奮した二人は、はだかになって一晩中ゴムの感触をたのしみながら過しました。翌日はくたびれて昼寝してしまつたのを覚えています。そして十日ほど滞在した間中、ゴムの寝床と海水浴で楽しい夏を過ごしました。文子はその後、結婚していますが、あんなに楽しんだゴムを本当に忘れているだろうか、ときどき思っています。私にとつては大変な面白さでしたが、文子は案外サバサバしているようでした。

大学を卒業すると私は、外国系の会社の試験を受けましたが、合格すると東京へ出て勤めることになりました。家中一人暮らしの私を心配していましたが私は平気でした。アパート暮らしは私のあこがれです。最初のサラリー

を貰うとゴム引のレインコートとゴムの浮輪を買いました。毎晩のプレイは誰も気がねするものではありません。私はときどき止めようと思いつながら、どうしてもゴムプレイとは縁を切ることができませんでした。古くなったゴム引レインコートは袖のあたりが痛んでいることが多いので、切りとって適宜に裁断してスナップをつけ、パンティの内側にとりつけるような掛けゴムをつくり、映画を見にく時などハンドバッグに入れておいてトイレで掛けゴムをつけて観賞し、終る前にまたトイレへいってはすすようにしました。

昭和二十年ごろからゴム引きのレインコートが市場に出なくなり、それから黒ゴムの雨合羽にかえました。ゴムの感触はレインコートのほうがどうしても強いのでゴム繃帯をくるんで用いました。

ある晩、たしか初夏の土曜日でした。明日は休日だということで、いつもは一、二回のプレイが、つい夜中からあけ方までおまけしてしまい、いつのまにか疲れて眠ってしまいました。目がさめたのは昼頃で、ゴム合羽を腰に巻いたままなので、むれてあせもになってかゆくたまりません。薬局へ行ってゴムの水枕を二つ買って来て、太ももに挟んで冷や

しました。その水枕のなんといい心持よさ、それから私は夏のプレイに水枕はかせないものになりました。

そしてだんだんお道具がふえていき、組み合わせてゴム椅子のプレイを考案しました。

ゴム椅子のプレイは前にもご紹介したことがあります、一人で行うプレイとしては最高だと今でも思っています。かんたんなやり方としては椅子のクッションに、空気を半分ほど（余り一ぱい入れるとだめです）入れたゴムの円座をおき、水をたっぷり入れた水枕を口栓の部分を上にして椅子の背に立てかけるようにおきます。そしてゴム合羽の肩を椅子の背にかぶせ、椅子全体をカバーのようにおおうようにしてひろげます。これがゴムクッション入りのゴム椅子です。この椅子に裸になつて後向きに馬乗りになるわけです。またがる時、円座と水枕を適当な位置にうごかしゴム合羽のしわをよく拡げます。椅子の背に胸をうずめて身体全体を椅子にまかせ、身体を動かしてハイド、ハイドとお馬のけいこです。これですと短かいときで、十分ぐらいでプレイを終ることができすし、一度つくっておくと夜中に起きてまたそのままプレイ出来るので、とても便利です。それに手は全然

ふれないですみます。しかしリズムにのって音がすることですが、ステレオでもかけておけば大丈夫でしょう。このゴム椅子のプレイに変化をつけると、もっとすばらしくなります。まず椅子の上にビニールいかだ（海水浴用）をつけてからゴム合羽をかけるようにすると、胸をうずめたその感触がずっとよくなります。頭にはゴムの海水帽をかぶります。手には手術用のゴム手袋をはめます。そして足には魚屋用の太股までのゴム長ぐつがすてきです。そしてこの自分の姿を三面鏡にうつすと、何んとすてきでしょう。男性とちがつてゴムのお道具は、なかなか買いにくいものです。ゴム椅子のプレイを最初かがみにうつして素足が気になりブーツをはいてみましたら、とても、かっこうがよいようにみえました。

その翌日、さっそく男もののゴム長を買いにいったのです。そしたら店先に、太ももまである大きな長ぐつがさがっているではありませんか。見ただけでカーツとなって、ほしくてたまらなくなりました。でも、どういつて買ったらよいかわかりません。へんな目で見られたらどうしようと、とうとう買わずにもどりました。あんなすばらしいものがある

のにと思うと、普通の長ぐつなど全然買う気になりません。でも、その店にはどうしても入れず、決心して別の店できくと「私どもでは扱っておりません」との返事で、がっかりしました。

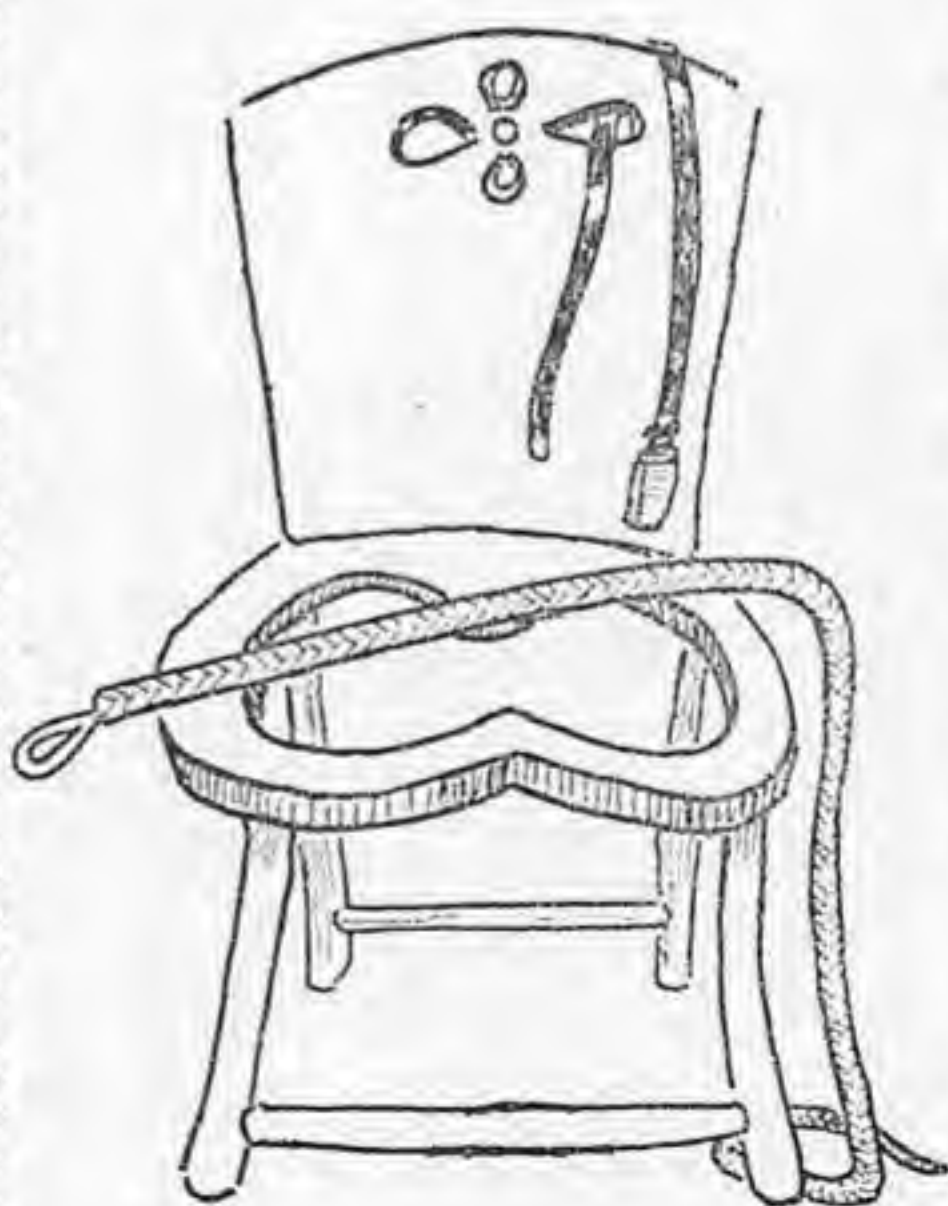
一ト月ばかりたつて決心して、すました顔で、その店に入って「庭のドブ掃除をするから」といつて買ってきました。それをはいてみると、とても気持がよくタッチも格別でした。それにポリウムがありますので、寝床で抱くのにもよいのです。二つ折りにしても十分長さがありますので、サポーター風にベルトでしめることができます。この太ももまでのゴム長ぐつをはいたら、ゴム椅子のプレイをするのにすばらしくなりますし、サポーターかわりにしめて、そのままベッドに入り、丁度おへその上にゴム長ぐつの足首の部分があたるのを愛撫しながら眠るたのしみもできました。欲をいうと、これをはいて外を歩いてみたいという気持と、思いきりだれかをふみつけたり、けとばしたりしたら、さぞいい気持だろうと思ったりしています。

ゴムに憧れる私の気持は、一生かわることがないだろうと思います。

心^{こころ}傷^いたむ遍^{へん}歴^{れき}

第三十二章 女囚ミシユリーヌ (十二) V

西 条 操



コリンヌ刑務課長は黒革張りの回転椅子に納まって、六名の看守長女史連中と談じ込んでいた。

九月も終りともなれば、爽涼の秋が獄舎にも忍び入って、朝夕は快適の気候だ。

暑さに喘いだ女囚たちも息吹き返したらしく、不埒行為が激増して来たという。

「だって、下衣は脱げないんでしょ？」

「お腹のそこから、無理やりに入れるんですわ」と、ミシエル女史が紫煙を吹き上げた。

「そりゃ、締め方がゆるいのよ。駄目じゃない？ そんなことじゃ——」

「ところがねえ、課長さん。腰を締めてやればやったで、こんだ反対側からですわ」
「反対側って？」

「つまり、足先の方。たくし上げちゃって両膝高々と——。MOMPEの裾を破いちゃう勢いですのよ」

「足首のあたりにも要るわねえ、錠前付きの締め革が——」コリンヌは溜息を洩らす。

「でも駄目ですことよ。だって、布地だけでしょ？ その上からだって感度ありますわ」

「あら、あんたとても!! 私のところはそれが多いのよ」

「全く涙ぐましいわねえ。"マチ"の部分を厚手にしなきゃ。ズック布かなんかにね」
「革張りにしたら、どうお？」

看守長女史たちはお茶啜りつつ笑い興じ、コリンヌは眉を吊りあげた。

「笑いごとじゃありませんわ。風紀は厳正に保持して貰わなくちゃ。いままで手抜きしてたとは申しませんが、今後は一層きびしく取締って、細大洩らさず報告して下さい」

女史連中は肩すくめ合った。看守長たちはいずれもコリンヌより遥かに年上だ。学校出のお嬢さんに何が分かるものか、という面持

ちであった。そりゃまあ、御法度のことだし、野放しにしたらどういふことに相成るか、ということだから、「ベルト」や後手錠で脅かして適当に抑圧しているのだが、大体の話が禁制品の取締りと同じことで、トコトンやって仕舞っては実も蓋もない愚策だ。世間知らずの理想肌お嬢さんは、これだから困る。ま、おなじ理想肌でも峻厳派の方だからまだいいが、これが教育刑主義の理想なんか振り回された日には、看守長たる現場責任者は神経がすり減って仕舞うだろう。

女囚取扱いのベテラン六名は顔見合せて、もう一度肩をすくめ合った。

コリンヌは話題を変えた。

「では、所外労役適格囚の選抜についてですけど——。これは有意義なことですよ」

看守長女史たちは眉を寄せた。峻厳派の癖に一面ロマンチストでもあるコリンヌが、またぞろ面倒なことを思いついたのだ。

週一回の甘味品恵与でも相当面倒くさいのに、今度は毎日、なんとまあ娯楽に出して働かせようというのだ。それも仕事を手につけてやるために——。

つまり、獄内での労役は単純作業ばかりであって、それだけでは娯楽で職業とは言えな

い代物——縫製加工にしたところで設備が旧態依然たるものだから、技術革新の今日では取り残されて仕舞う。刑務所の労役としてはそれでいいわけだが、それでは女囚たちが出獄後困るだろうから、世間で通用する職を手につけてやりたいという次第なのだった。

幸いにして娯楽は労働力不足——このコンピエーヌ刑務所から数軒のところにある既製服縫製工場から申し出があって、そこへ通勤させるべき女囚を選ぼうということになったのであった。

女囚たちは最初には怖気をふるった。こんな恰好で娯楽に連れ出されては堪まらない。

しかし、説明を聞いて志願者が殺到した。なにしろ、この情けない囚衣の代りに、娯楽の女工並みの恰好をさせて貰えるのだ。鎖も手錠もなしと聞くや、鼻で笑っていたあばずれたちさえ眼の色を変えた。

しかし、勿論、誰でも志願出来るといふわけでもなく、限定された志願者の中から、さらに厳重に選抜されるのだ。服役成績が良好であることは勿論だが、刑期の四〇%を勤めていなければ、模範囚でも選に洩れる。

三カ月を無反則で勤めたミシュリーヌは獄衣の施錠を解いて貰っていたが、刑期の点で

駄目だった。

選ばれた女囚は総員三〇名——三監からは六名だ。彼女たちは嬉し涙をこぼしつつ獄衣を脱ぎ、ファルマン縫製会社の女工制服を身にまとった。残る連中に励みを与えるため、着替えはわざと監舎内広間で行なわれる。

あばずれたちは鼻で笑いつつも、羨望と嫉妬の眸で見送った。第十一房には該当者は一人もない。空色のスカートを穿き、白ズック靴を履いた六名を見て、ミルドレーヌやシモーヌは嗚咽を洩らしさえたのだった。

——ヴィヴィアンヌは運転席の横にぐったりと身を投げ、ハンドル握るフィリップの肩に金髪をもたせかけていた。

十月末の仏伊国境近く、坦々たる道路が丘を越え、森をよぎる。全速に近いこのシトロエンは、一昨日強奪した車だ。ヴィヴィアンヌは喉を閉じ、虚脱したような疲労感に心身をまかせた。昨年の末、マイヨール弁護士事務所を断わりもなく辞め、フィリップと相たずさえてパリを出奔したとき以来のことが走馬灯のように胸裡を駆けめぐる。

前科者フィリップに対する世間の眼は冷たく、一本気なフィリップの世間知らずがそれ

に輪をかけ、妻ヴィヴィアンヌ心入れの職場での喧嘩別れが、パリでの生活の最後であった。ヴィヴィアンヌの収入だけで二人の暮らしは充分だったが、フィリップはそれを潔きよしとしないのだった。受け入れてくれるであろう肉体労働には、フィリップの体が耐えられなかった。

二人は怒りと絶望を味わいつつ、お互いの愛情だけを信じて、町から町へと転々した。

とある町にフィリップは職を得て二カ月、二人はまたしても悲嘆の淵に突き落とされたのだった。勤め先で金銭が紛失し、フィリップに嫌疑がかかったのだ。

ヴィヴィアンヌは全身をふるわせて憤激した。ただ前科があるというだけで、確たる証拠もなしに、フィリップは逮捕されてしまったからだ。ヴィヴィアンヌの胸は冷たく燃えあがり、彼女は理性を失なった。

拳銃を胸に秘め、弁護士資格を楯に、彼女は留置場のフィリップに面会し、そして二人は脱走に成功したのだった。

それ以来一カ月——新聞やラジオは二人の足取りと犯行の数々を報道し続けた。

もう駄目だわ——ヴィヴィアンヌは後方に眸を投げた。最初から指名手配の二人に対し

て、追跡の網は日に日に狭まっている。夜陰に乗じて国境を突破することが、彼等二人の計画であった。

イタリーに逃げ込んだって、おそかれはやかれ、いずれは——。でも、もういいの。行く先がどこであろうと、私はフィリップと一緒に行くのよ。それが私の定めなんだわ。お、フィリップ。私たち二人、どんな星の下に生まれたのかしら——。

ヴィヴィアンヌは物狂おしく男の首を抱いて唇を求めた。シトロエンがよろめき、彼女の胸でハートが痛む。彼女もついに一昨日、押し入った家で人を射ったのだった。

仕方なかったのよ。だって、一生懸命に生きようとした私たちを、あなたたち世間はどんな風にあしらったの!! ほんの少しでも温かく受け入れてくれて? 善良な市民ヅラした女の一人や二人、射たれようと殺されようと、それが何だっていうの。善人ぶってる奴等ほど意地が悪いのよ。ひねりつぶして復讐してやったの。当り前だわ——。

ヴィヴィアンヌは良心の声に耳をふさぎ、金髪を払いあげ、積もる憎悪を掻き立てた。「ね、ヴィヴィアンヌ。やっぱり無理だよ。自首しよう。その方が——」

「歌目よッ。いまさら何言ってるの?」

ときに触れて弱気を示すフィリップと、いまは悪女そのもののヴィヴィアンヌだった。

出奔して以来音信不通だった肉親からは、新聞やラジオを通じての呼びかけが絶えなかった。フィリップは挫折感を訴え、ヴィヴィアンヌは終始叱咤する。男は心中を迫り、女は笑い飛ばすのだった。

「死ぬのはいつだって出来るわ。最後の最後でいいじゃない? 二発だけ残しときゃいいのよ。それよか、ねえ——」

ヴィヴィアンヌは狂おしく愛を求め、精魂すりへらす逃避行の道すがら、日夜抱き合う二人だった——。

ヴィヴィアンヌはラジオを切り、男の首から腕を離し、コンパクトを開いた。流れ去る車窓に夕暮の色が漂い、映し見る彼女の顔は荒れていた。思えば、風の音にもおののく一カ月であった。

彼女は万感こめて溜息を洩らし、そして、握るパフを取り落とした。後方遙か、サイレンの音が微かに聞えたのだ。

「来たわ、あなた。もう少しなのに——」
彼女は拳銃を握り締めた。

「最後まで戦うのよ。相手は警官じゃないの

よ。いいこと？ いま素晴らしい世間全体なのよ。いえ、そうだわ、運命よ。人生そのものが相手なのよッ」

彼女は後部ウインドウを叩き壊し、第一弾をパトカーに放った。

数分の後、二人は手に手を取って丘の斜面をよじ登っていた。強馬力のパトカーには所詮抗すべくもなく、追い詰められてシトロエンはタイヤを射抜かれ、二人は車を捨てたのだった。数台のパトカーが集まり、武装警官たちが大型拳銃を手にして追う。

「——もう駄目だよ、ヴィヴィアンヌ。僕を射っておくれ。ここで死のうよ」

「まだまだ——。しっかりするのよッ」

ヴィヴィアンヌは入念に照準し、引金を引いた。警官の一人が倒れ伏し、凄まじい応射が返って来た。

「どうお？ 命中したわ、ホホホ」

「ひどいことを——もうよしておくれ、ヴィヴィアンヌ——」

「あなた忘れたの？ 彼奴等の仲間になんか目に逢わされたかを。私は忘れないわ、あなたの背に残ってる傷痕——」

ヴィヴィアンヌは高らかに笑うのだった。

「頼むから、もうやめておくれ」

「あら、もう安心して頂戴。弾が無いんだもの。心配しなくてもいいわ。逃げれば射ち殺してくれるわよ。さ——」

二人は丘を登り詰め、向うの森へとまろび走った。ライフル銃が持ち出され、照準眼鏡の十字に二人が捉えられ、次の瞬間、フィリップが射抜かれて倒れた。

警官たちが包囲して迫ったとき、ヴィヴィアンヌは男の胸に顔を埋めていた。

「——すまなかった、ヴィヴィアンヌ。僕のために、とうとう——お前まで——」

呟いてフィリップは息絶えた。秋深き仏伊国境の丘の上、雑木林を吹く風に、枯葉が舞って遺骸にたわむれ、破けたドレスの裾がはためき、金髪が乱れて額にまつわる。

ヴィヴィアンヌは土に脚折ったまま、近づく警官たちを茫然と見上げた。指一本あげるどころか、口を利く気力さえ萎え果てて、警官たちの荒々しい声すらも聞えない風情であった。双腕を攢まれてねじられ、後手錠が喰い込んだ。同僚を傷つけられた怒りをこめて、さらにもう一個がかけられる。

ヴィヴィアンヌは我に還って双腕をもちいた。その腕を掴みあげられて立たされ、遺体から引き離され、警官たちはフィリップを調

べた。ひげ面の大男がヴィヴィアンヌの体を検査し、彼女は全身をよじる。その捜検は遠慮会釈あらばこそ、頭の先から足の先まで、下着に手を突込んで掻き回すのだ。

大体の話が、この国では女性を甘やかさない。女性の方でもまた、手荒く扱われてどうのこうのと騒ぐどころか、亭主に撲られるのは当然のことと澄まし返る気風なのだ。

ましてヴィヴィアンヌは兇悪犯の女、ドレスをひん剥かれて調べられたって仕方ないことだった。彼女は歯を喰いしばって捜検を受け、ずりおろされた下穿きを尻に摘まんだ。

ままならぬ後手でドレスの上からパンティをたくし上げ、よろめきながらハイヒールをまさぐる。ドレスの胸ははだけたままどうしようにもなく、金髪はね上げて頭を振った彼女は、手錠の固さを初めて骨に味わった。二重に嵌められた手錠はずしりと重い。

フィリップは死んだんだわ。そして、私だけが生き残って、こうして——。

彼女は嗚咽を洩らし、二、三步踏み出して膝を落とした。秋の夕風の冷たさが肌に沁み透り、心の張りを失なった彼女は土にうずくまった。

「立つんだ。おいッ」

後手錠の彼女にビンタが鳴り、金髪を掴まれてゆすぶられる。

突如、彼女は渾身の力で身もだえ、いとしい男の遺骸に突進した。土にハイヒールを取られ、バランス失なって横ざまに倒れる。忽ち警官たちが躍りかかり、手ひどく押えつけられた。手錠にロープが結びつけられる。

「——お、おねがい。あのひとに触らせて。もういっぺんだけキスさせて——」

「馬鹿野郎。彼奴はもうお陀仏だぜ」

ヴィヴィアンヌはなおも激しく身を揉み、膝に必死の想いをこめていざった。ロープが引き戻されてピンと張り、後手錠が手首にめり込んだが、ヴィヴィアンヌ死物狂いの力は、縄尻握る大男の警官が真剣に踏張るほどだ。

「こら、諦めろんだ。おとなしく立て」

「——あのひと、私に礼を言ってくれたわ、ありがとうって——。だから、私も感謝してあげたいのよ。おねがい——。このまま、黙って別れるなんて——」

悲痛な言葉は警官たちの胸を打ち、ヴィヴィアンヌの縄尻がゆるめられた。

ヴィヴィアンヌは夢中でいざり寄り、冷たい額に接吻した。閉じた瞼にも唇にも——。「ありがとう、フィリップ」

じつと見詰めて彼女は呟いた。

お礼を言うのは私の方よ、あなた。あなたのお陰で私は本当に生きたのよ。本当の人生を味わえたんだわ。短かったけど、私にとっては永遠なの。じゃ、いとしいあなた、さよなら。また天国でね。ああ、撫でてあげたいんだけど、駄目なのよ——。

ヴィヴィアンヌは、両手に喰い込む鋼鉄を感じた。立て、というのだ。

「さ、もういいだろ」

ヴィヴィアンヌは静かに立ち上がり、愛する者と自分の人生とに訣別を告げた。

曳かれて丘を降りる途中、彼女はまたも身もだえた。膝の土が丘の風に散る。

あのフィリップとともに終焉した我が人生のはかなさ——それを後悔する気は毛頭だにない彼女だったが、彼の才能を発揮させてやれなかった自分の不甲斐なさを想い返して、身も世もない痛恨に胸嚙まれるのだ。

さぞ残念だったでしょうね、フィリップ。

私にはチンプンカンプンだったけど、なにやら難かしいことを勉強してらしたあなた。きつと立派な電気技術者になったでしょうね。

ああ、もう一度、もう一度だけ引返してお詫びして来なくちゃ——。

こみあげる想いに彼女は踏みもだえ、両腕を扼する警官が引き摺る。

「こら、おとなしくせんか。もがいたって痛いだけだぞ。こうして手錠かけられたら、もう、どうともなりやしないんだ」

「しかし、お前も馬鹿な女だなあ。弁護士にまでなったインテリ女だというのに」

「そうとも。ちょっと分別さえつけりゃ、末長く仕合わせに暮らせたものをなあ。まだ蕾じゃないか。あの野郎だけが男じゃあるまいに。こら、しっかり歩け」

末長く仕合わせに、ですって!! あのフィリップ以外の男と?——

ヴィヴィアンヌはよろめいて立ち直り、頭を立てて金髪をハネあげた。

そんな仕合わせなんてクズだわ。そんなの私がやらなかったっていいの。ほかの女たちが——その他多勢の女たちが、世界中いたるところで昔から飽きもせず繰返してるわ。

私の人生は今日で終わったけども、私のは——

「おい」と指揮者が小声で部下に注意した。「あんまり手荒にするなよ。相手が相手だからな。うるさいぞ」

ヴィヴィアンヌはもう一度丘の頂きを見上げ、促がされてパトカーに押し込まれた。

「——彼の遺体はどうするの？　いつまで放つとくんですの？　寒いわ、あのままじゃ」
「検屍が済まなきゃ動かせないよ。弁護士だったんだろ？　しっかりしろよ」

彼女は後ろ手をもがいて顔をしかめ、深々ともたれかかって臉を閉じた。

さよなら、フィリップ。ほんの暫くのお別れよ。私、これからどうなるか知らないけどそんなことはどうだっていいの。もう、抜け殻ですもの——。

ミシュリーヌは唇を紫色に震えながら、三十二才の新年を侘びしい獄舎で迎えた。

「新らしいお仕着せの有難味、ちっとは分ったかいッ」

寒風吹きすさぶ島で、厚い手袋に握る筈を振りつつ、睨み回してベルディーヌが云う。

腰鎖鳴らせる女囚たちは両手両足の冷たさに泣きたい思いた。しかし、厚い防寒コートのベルディーヌが恩に着せるとおり、この情けない新モード獄衣も冬には有難い。

「先週だったか、週刊誌に出てたね、お前たちの服のこと。暖かくって嬉し涙に暮れてるってさ。ほかの婦人刑務所も見習うべきだって。ホホホ。こらッ、鎖が曲ってる」

ミシュリーヌの尻に答が飛び、凍えかじかんだ指が腰鎖をずらせ回した。

二月の初め、ミシュリーヌは外勤女囚の一員に加えて貰えた。

毎朝毎夕、娑婆の女性の衣裳をまとして、連れ出され連れ戻される外勤女囚たち——羨望の眸でその姿を眺めていたミシュリーヌは夢かと喜んだ。聞くところによれば、ファルマン縫製工場の人々はおおむね温かく迎えてくれて、みじめな思いをさせられることは先ずないということだし、時刻どおりに行動すれば、破格の自由が許されるのだ。食事だってチャンとした食堂で与えて貰えるし、トイレだって扉のあるのに入れる。

デスクの前の床に両手をつかえ、心得と訓戒を説教されながら、ミシュリーヌは天にも昇る心地であった。

「——分ったわね？　私たちの信頼を裏切らないでね」

「はい。誓います」

ミシュリーヌはフォンテーヌ補佐の足許で床に額をすりつけた。

いそいそと着替えるミシュリーヌは嬉し涙をにじませ、そんな姿にイヴェットも胸ふくらませた。外勤囚に選ばれるということは、

仮釈放嘆願資格を与えられるのが近いということだし、まじめに勤めれば、審査委員に対するプラスも大きい。

外勤女囚たちは刑務課に集められ、点呼を受けてから連れ出される。二列に並んで獄門を出ると、マイクロバス二台が待っていた。窓には鉄格子も鉄網もないし、獄門の外では両腕を背に握らなくていいのだ。

「もたれていいの？　叱られないこと？」

ミシュリーヌはおずおずと座席に腰をおろし、三四〇号に訊ねた。

「いいのよ。嬉しい？」

「とっても。でも、お仕事むずかしいんでしょ？　おぼえられるかしら」

「簡単よ。あなたなら一日で熟練女工だわ」
モレシェンヌが前方席からふり返った。

「お黙り」

と叱るが微笑さえ含んでやさしい。今日の外勤監督は、二監のアンナと三監のモレシェンヌの二人——女囚たちのはしゃぐ姿を見ると、心やさしいモレシェンヌは胸ほのぼのとするのだった。

女囚たちはファルマン縫製工場の一面を与えられて、裁断から仕上までの全工程を一貫して担当させられていた。新米女工ミシュリー

「又には仕事を教えてくれるのは中年のベテラン女工——手を取って懇切丁寧に、いともやさしく指導してくれた。」

「あら、涙ぐんじやってどうしたの？ 私、なにかきついこと云ったかしら？ ごめんなさいね。さ、もう一度やって御覧」

ミシュリーヌは嬉し涙を手で拭い、思い出してハンカチを胸ポケットから取り出した。

「すみません。あんまり嬉しいもんですから——。いままでは、いつも——」

「分るわ。でも、ここでは忘れるのよ。あ、メリンダと呼んで頂戴ね」

「はい——。これでいいですかしら？ メリンダさま」

「「さま」は要らないってば。上手じゃない？ とっても物覚えがいいのねえ」

ミシュリーヌは柔和なメリンダの顔をまぶしげに仰ぎ、長いまつげを作業台に伏せた。

メリンダの姿は、空色スカートの作業着はもとより、髪を包む白布も、履いている白ズック靴も、ミシュリーヌたちと同じだ。しかし、小じわ刻まれた顔には化粧があるし、両脚は靴下で包まれている。

お化粧と靴下だけは駄目なのね。当り前のことだわ。でも——。

ミシュリーヌは哀しさを押え、我が身を反省し、初めてお目にかかる新型マシンに組むのだった。この女子工員たちも働いている。しかし、人選に留意した上によく云ふくめられているのだろう。彼女たちの眸は温かだった。しかも、室内には暖房さえあるのだ。ミシュリーヌは何度となく眼頭を押え、仕事を覚えようと懸命だった。

水を飲むのも自由だし、ちょっと会釈さえすれば用便も無制限だ。モレシエンヌとアンナは目立たないように隅に控え、雑誌など眺めて和やかな面持ちだった。ミシュリーヌはトイレの扉を内部から閉め、自由に使えるトイレットペーパーを手にして、しばし嬉し涙に暮れた。昼食のときにはキョロキョロと眼をみはり、あたりがバラ色に見えたミシュリーヌだった。昼の休憩時間は一時間以上あるし、工場の庭なら自由行動を許される。しかし、女囚たちは流石に歩き回ろうとはせず、あちこちにかたまって憩うのだった。

「ここへ来たら？ ミシュリーヌ」

三四〇号のローザンヌが陽溜りに誘った。「戸惑うことないのよ。腕を背に回さなくてもいいんだってば。ここへお坐りなさいな。ホラ、もうじきに雛菊が咲くわ」

工場の庭の芝生にも、早春を待つ気配が感じられる。

「ありがと。あなた、秘書だったんですってね。もうじきなんでしょ？ あの——」

「名を呼んでいいのよ、ここじゃ」

ローザンヌはミシュリーヌの胸から糸屑を取ってやった。二人はどことなく気が合う。

「でも、自分の手で、物を作るってこと、こんなに楽しいものとは知らなかったわ」

「そうね。でも、あなたは大学を出ていらっしやるんでしょ？ それなら——」

「バカね、ミシュリーヌ。前科女がオフィスに戻れると思ってるの？ 一生懸命にお仕事おぼえてるのよ、私」

コリンヌ課長が聞いたなら、さぞや満悦することだろう。

「大きな工場ね、ローザンヌ。向うの方は何かさえてるのかしら？」

「さあ。ウェディングドレスかなんかでしょうよ、きっと。あんまりウロウロしない方がいいわ。理解のある人ばかりじゃないもの。ホラ、あすこで小さくなってるひとねえ」

ローザンヌがそっと指さす若い女囚は、例の傾城の美姫キャプシーヌ・エイメだった。「あのひとなんか、以前が以前だから、ここ

へ来るのだって相当の覚悟だったんでしょ
けど、最初は泣きそうにしてたわ。だって、
いくら理解のあるひとたちでも好奇心はある
ものね」

サイレンが鳴って女囚たちは腰をあげた。

「号令と笛がないと、なんだか張合い抜けし
ちゃうわね」

ミシュリーヌはそう云って、明るく愛くる
しく、頬ほころばせたのだった。

終業時刻は同じだが、女囚たちはそのまま
三十分待たされる。化粧を直し、着更えして
家路に就く人々とカチ合わないように、との
配慮だ。それでも、作業着のままバスに乗せ
られる女囚たちの姿は、完全に人目を避ける
というわけには行かない。

「このときの気持は、やっぱり悲しいわ」

ローザンヌが呟いて眼を押えた。

ドレス姿の娘たちがちらほら連れ立って帰
り支度——バスに乗り込む群を打ち眺めて囁
やき合うし、門を出る車を指さして見送った
りもするのだ。ミシュリーヌも小さくなっ
て、座席に首を垂れたのだった。

獄門の前で女囚たちは悄然と降りる。

「整列ッ」

アンナ婦人看守の号命が凜然と響き、女囚

たちは灰色の境涯を胸に噛みしめた。ここか
ら向うは、囚われの女にふさわしい扱いを甘
受するのだ。双腕を背に獄門を潜る三十名の
女たちは、打ちしおれて鼻を吸った。

いくら模範的な女囚とは云え、娑婆の工場
から戻って来たのだ。外勤女囚たちに対する
夕方の身検は、ほかの女囚たちとは区別して
峻厳だった。万々一のことであってはい——。

「悪く思わないでね」

モレシエンヌはそう云って、ミシュリーヌ
の全身を隈なく念入りに搜検したのだった。

ミルドレーヌやシモーヌはミシュリーヌの
話を聞いて羨望の声を洩らし、ロレッタは悲
痛な色を浮べた。無実を叫びさえしなければ
ロレッタなんかはイの一番に選ばれる筈だ。

「ね、ね、ミシュリーヌ」ダイアナがいう。

「保安課の男は来ないの？ 来ないのね、や

っぱし。じゃ、詰んない」

ダイアナはがっかりした様子だ。もし男性
が監視するのだったら、その眼前で逃げ出す
なり、暴れ出すなりして、逞ましい力で虐げ
られて見たいというわけだろう。けれども生
憎なことに、男性保安課は勿論のこと、最初
は付き添っていた保安課スカートすら、今年
になってからは来ない。

「ふん、なにサ。要するに只働きじゃない？
この頭株あたりにゃ、ファルマン縫製とや
らから袖の下がタンマリ行ってるこったろ。
ま、ピクニックのつもりで出掛けるんだね」

クリスチーヌは鼻で笑い、あばずれたちも
折にふれてコキおろした。どうせ自分たちに
は叶わぬ処遇だから——と、ひがみの色を押
し隠し、やつかみ半分の、八ツ当りなのだっ
た。三五二号のデブ女囚が外勤処遇を取消さ
れた不埒行為を摘発されたのだ。

「へへへ。あのデブちゃん、きつと掃除夫の
ジイさんあたりにモーションかけられてサ、
ポーツとなって帰って来たんだね。ごらん
よ、《ベルト》が縦横とも回り切れやしない
よ。でもサ、よかったこと」

「そうとも。牢役人の口車に乗って、物騒な
娑婆で只奉公するこたないサ」

あばずれたちは外勤女囚を小馬鹿にして強
がっている癖に、その一人が再び蹴落とされ
たと見るや、さも満足げに眼を輝やかせ、他
人の不幸に安心し合うのだった。

ひがんで毒づくあばずれたちは歯牙にもか
けず、コリンヌ課長は満足げだった。外勤女
囚たちの成績が予想以上に優秀なのだ。本省
は未だ懐疑的で、試行段階として様子を見て

いる按配だが、既に二、三のマスコミで取りあげられ、コリンヌ課長の名が活字になっている。

要するに、判別を誤りさえしなきゃいいのよ。どう？ 画期的な矯正手段じゃない？

コリンヌは鼻うごめかせ、さらに一歩前進した。といっても大したことではなく、付き添い婦人看守を私服にさせるだけのことだ。

私服での付き添いの最初の日に、イヴェットは勤務割りが当たった。

イヴェットの容姿に讃嘆の声があがる。外勤させて貰えるような女囚は、おおむね性質も素直だ。イヴェットは照れて頬を染め、運転手の中年男が見惚れてサイドブレーキを忘れ、マイクロバスの中は楽しげだった。もちろん、ミシュリーヌは眸を輝やかさせ、内心鼻高々だ。一一〇号のキャプシーヌだけがソッポ向いていた。

三月に入るや、ミシュリーヌは仮釈放嘆願を許された。まだまだと観念していた夜明けだったが、それももう間近い。イヴェットとその母は手を取り合って喜び、ミシュリーヌも胸ふくらむ思いの日々だった。

しかし、絆に心結ばれ合う三人は、まもなく落胆してガッカリすることになった。とい

うのは、ミシュリーヌの外勤処遇が取消されてしまったのだ――。

ミシュリーヌは、嘆願書を提出して一週間にもならないというのに、はや面接審査の日を指折り数える心地――ファルマン縫製工場の午前の一刻を忙しく立ち働いていた。突如悲鳴が糸を曳き、モーターが異様に唸ってヒューズが飛んだ。悲鳴の主はローザンヌだ。

本人の不注意か、安全装置の故障なのか、ともかく裁断機のカッターが彼女の手首を深く斬ったのだ。飛んで行ったミシュリーヌは血潮を見て色を失ない、駆け寄ったアンリエット婦人看守に突き飛ばされ、運び去られる担架を指の間から見送ったのだった。

そして、昼の休憩時間に、ミシュリーヌは医務室を探して歩き回った。靴下を穿いていない身は恥かしかったが、行先を告げての自由行動は許されているし、重傷のローザンヌの容態が気になったのだ。広い工場内の勝手は分らず、訊ねるのは身分がバレそうだし、ミシュリーヌはおどおどと求め歩いた。尋ねりゃ分るわ、とアンリエットは云ったが、見当をつけた事務所のあたりは女工姿も稀で、上気してウロウロするミシュリーヌは、サイレンを遂に聞き洩らしたのだった。

医務室は別棟で、思いがけないところにあった。彼女はおずおずと扉を押した。

「――あの、ローザンヌさんの様子はどのようなのでしょうかしら？」

「ローザンヌ？ 今日患者が多いのよ」と、出会いがしらの看護婦は突慥食だ。

「あの、手首を怪我したひとですの。第六工場で働いてたんですけど――」

女工姿を小馬鹿にしていた若い看護婦は、ミシュリーヌの素足に気付き、第六工場と聞いて鼻を寄せた。

「ああ、そうなの。あんた、あの女のお友達なのね。仲間同士は友情が厚いこと。そういうもんだとは聞いてたけど――」

ミシュリーヌを女囚と知って、看護婦の表情や声に軽蔑がこめられた。覚悟のことながら、ミシュリーヌも頬を染める。

「ま、大丈夫でしょ。動脈は繋がってたし、

外科の先生も幸い今日はいらしたしね」

「まあ、よかった。ちょっと会わせて下さいませんか？ おねがいします」

「会ってどうするの？ 駄目よ」

玄関払いの気配に、ミシュリーヌはショッげ返った。

「それよか、あんた。他人のことを心配して

「いいの？ 時計見てみた？」

ミシュリーヌはギョツとして色を失ない、思わず喘いだ。定刻を七、八分過ぎている。

「飛んで帰った方がよくはななくて？ どうでもというなら逢わせたげるわ。ここはアソコじゃないんだものね、ホホホ」

看護婦は扉を背に嘲笑い、ミシュリーヌは脚をもつらせた。

「あらま、お迎えのお方じゃないかしら？ 血相交えた娘さんがお見えになったようよ」

いかにも、それはアンリエット婦人看守だった。アンリエットはイヴェットとともに着任した娘看守、若々しいスーツの肩にシヨルダーバッグを吊り、息せき切って来た。

「ミシュリーヌ・ダリユー。なにしてるのよッ」

ミシュリーヌは息を呑み、眺めた看護婦が眼を輝やかせた。白衣がもう一人現われる。

「あら、どうしたの？ いったい」

「面白いわよ。女囚逮捕の巻。でも、女囚を番号で呼ばないのね。感じが出ないわ」

アンリエットは駆け寄りざま、わななく腕を掴んで扼した。

「いま何時だと思ってるの？ おいでッ」

アンリエットのスーツの襟に光るバッジ、

それを見たミシュリーヌの膝が萎える。

「——す、すみません。ついおそくなつて」

「言い訳はいいから来るのよッ」

「は、はい——」

女囚ミシュリーヌは二、三步引き摺られ、立ち止まって哀訴した。

「ローザンヌに逢わせて下さいまし。あのひと、もうじき満期ですし、折角ここまで来たんですから。おねがいしますわ」

「何云ってるの!! 図々しいったら」

女囚は諦らめて鼻を嚙り、娘看守は荒々しく引立てる。氣負い立った支配者は相手の無抵抗に勢いが余り、扼した腕に縋りつく恰好でよろめいた。そのカッコ悪さに、若いアンリエットは顔を真赤にした。看護婦二人をはじめ、背広やドレスの職員たちが数人、足を止めて眺めているのだ。

「まあッ。手向いする気なのねッ」

「——わ、わたしはなにも。お手向いなんてそんな——」

「お黙リッ。口答えは許さないッ」

アンリエットは照れ隠しの八ツ当り、ミシュリーヌの利腕を矢庭にねじあげた。恐怖と苦痛に、女囚は激しく身を揉む。

「ずい分と手荒なことするじゃない？」

「あら、逆らう女囚よ。当り前だわ」

見物する方でも、いろいろな見方がある。

「でも、綺麗なひとね、あの女囚」

「器量は懲役にカンケないの。あらまあッ、手錠よ。あの娘さんたら、あんなもの持ちちゃってるのねえ」

「後ろ手よ。あんなものの御厄介になる身になっちゃ、人間もおしまいね」

血迷ったアンリエットは、シヨルダーバッグから取り出した手錠を後ろ手に叩き込んでしまったのだった。

「あッ、かんにんして——。悪うございました。おとなしくいたしますからこれだけは」

「駄目よッ。神妙にしないからだわ。反則したのよ、お前は。持場離脱。分ってるの？ ほんと、生意気なったら」

アンリエットは秋霜烈々たる態度をし、荒々しく腕を引き立てた。

「い、いたいッ」

「そりゃ、ちっとは痛いわ。初めてじゃあるまいし、オーバーにおしでないよッ」

ミシュリーヌは泣きたい思いで引き立てられたのだった。

(未完)

稿談 性風俗資料入門

(5)

『カーマシヤストラ』(続)
『浅草裏譚』 『しとりこ』
の紹介

齋 藤 夜 居

なお『カーマシヤストラ』創刊号に就いてはその奥附のことに触れる必要がある。

編輯人(英国人)サー・フレデリック・ジ

ョンス、発行印刷人(中華民国人)張門慶

発行所ソサイティ・ド・カーマシヤストラ、

發送依託先上海郵政局第六八〇号信箱共営公

司。ということになっているが、フレデリッ

クも張門慶も勿論梅原北明のことで、この奇

抜な意表をついた刊行は珍書愛好家をよろこ

ばせ、北明本中の異彩を放ったものであつ

た。印刷製本に関しては当時長崎在住の岩崎

一徳——公職に在った人——の尽力によるも

ので、例によってこの雑誌が問題化した時に北明と一緒に起訴されたらしい。熱心なファンであった。

『カーマシヤストラ』第二号 別冊共二冊。

中華民国第十七年(日本昭和三年)一月二十

五日印刷。——別刷りの挿み込みが残ってい

るのでそれを写すと、「これは今度の合本号

の別冊です。印刷屋ストライキ(目下上海の

殆んど凡ての印刷屋、特に日本活字のある印

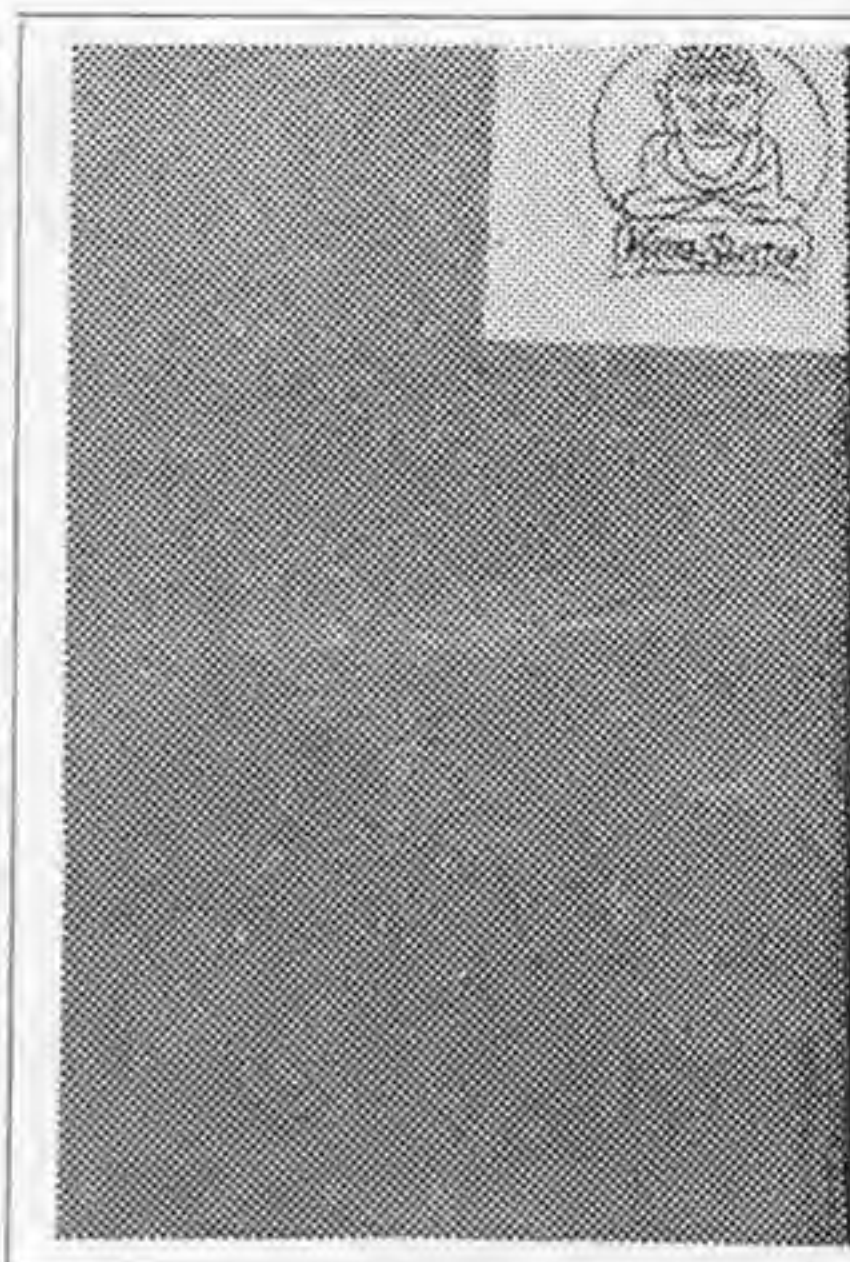
刷屋はストライキ中です)のため、一月十三

日頃の着荷となります。一寸私達も多忙とな

ります。取りあへず別冊だけ送りました。因みに合本号会費は別冊をつけて壹円五拾錢です」と書いてあり、別冊のみ前送したことが分る。活字印刷面はすっきり仕上がって居りハ上海Vなんて出鱈目である。

この号の巻頭には、別刷りの色アート五枚十図があり、「此事実を見よ! (戦争を呪ふの巻)」と題する第一次欧州大戦における非公開戦場写真集で、特に第一図の「凌辱された婦人の屍体」これは男装し決死大隊に参加した女兵士の無惨なる最期の実写で、引き裂かれたズボンから下腹部がむき出しにされて

「カーマシヤストラ」創刊号表紙



いる。戦場心理とサディズムの実例を示した
もの。以下死骸の写真ばかり……。読者は先
ず巻頭に於いてドギモを抜かれ、ふるえ上っ
てしまう。

内容は、

通俗如意君伝解題

日本小咄集成

続・浅草裏譚

えくせ・ほも

猥褻風俗史

女陰崇拜考

世界珍書案内

となっている。本文が始る前に、「本号が
諸君の手に入るまでに二度の災難に逢ってい

ます。一度は出来上りのホヤホヤを領
事館のスパイにかぎつけられ押収さ
れ、二度目は印刷所のストライキで
す。時日と経費の損害については不幸
にして何等の同情もありませんでし
た」と云っている。官憲に対する皮肉
であろう。

「如意君伝」は支那の淫書で艶情小説
として著名な作品。我国でこれを翻案
化した「花の幸」の原作で則天武后の
淫蕩生活を描いたもの。江戸期に板行

された「通俗如意君伝」（明和四年）を解説
し唐本と比較した考証読物である。「日本小
咄集」は江戸の性的笑話を集録したもの。

「続・浅草裏譚」は石角春之助の稿で、同名
単行本の続編——浅草を愛し、浅草に住み、
歓楽街の裏がわに生きる哀れな人たちのみじ
めな生活を綴った幾冊かの著書がある——。

「猥褻風俗史」はフックスの絵入風俗史の部
分訳で、今日では既に光文社版の「風俗の歴
史」10冊が完訳されているので珍奇なもので
はなくなった。「女陰崇拜考」もウォールの
著書よりの抄訳であった。

別冊は、猥味がかった俗謡・俗歌を集録し
た「万枯集」。川柳研究家大曲駒村の「末摘

花に現れた婢女観」。佐藤紅霞訳の「蚤十夜
物語」の第二回目となっている。

『カーマシヤストラ』第三号

クロード・ディース・ド・キュラムの調査

狂言痴語抄（江戸艶本序文集）

サッド侯爵評伝

蚤十夜物語（続）

浅草裏譚（〃）

日本小咄集成（〃）

狂蝶新話（江戸艶本の読和原文紹介）

猥褻風俗史

この号も亦奇稿ぞろいである。巻頭の「
—調査」というのは八常に雄犬と性交せる猥
姦罪に関するV記録で、一六〇一年十月十五
日の調査と称するもの。被告は十七歳の少女
で下婢である。主人の家の褐色の斑犬と通じ
たという罪科で証人が三人も判事に陳述、現
場を目撃し、その破廉恥なる所行を他人の面
前に曝すことの不面目なることを被告に告げ
たが、「なぜわたしの犬を蹴ったの？ 要ら
ないお世話よ」と云われたという。判事はそ
の犯行を調査するために、神学士や賢明なる
婦人や薬剤師の妻や外科専門医をして、少女
を検証せしめた結果、陪審員たちは八事実V
だったと報告——この検証法、がおもしろい

記述だが、省略——遂に、

被告クロディヌ・ド・キュラムの天意に反し、褐色の斑ある白犬と交接せし罪を贖うため、ロニヨン広場において生きながらの火刑に処し、その灰を風に飛び散らさしめ、尚被告に属する全財産を没収し、王に對して罰金十リールを納附せしむ。

右宣告す。

斯うして愈々一六〇一年十月十五日に少女と犬は広場で火刑に処せられ、其の屍の灰は風の中にまき散らされた。そして下婢の全財産、たった三リールが王家に納入された。

雑誌『カーマシヤストラ』 第四号 は連

載物のほかに「性的見世物考」と「リング崇拝考」の二編があり、第五号は「末摘花」の第一編より第六編までを活字化した特集で、当時としては貴重な文献提供だった。

梅原北明の雑誌で最も多くの人々に知られているのは『グロテスク』で、一般大衆の耳目をそばだたしめる話題や事件を新聞に提供して知られているが、所詮は公刊雑誌で、味のうすい物である。その点では『文芸市場』『変態資料』『カーマシヤストラ』の三誌は

直接北明の息のかかっている雑誌だけあって翻訳はまずくても、資料原文の校訂上の難点があったにしても、少数の貴重な性風俗文献資料を復刻流布した熱意は、世の蒐集家、好事家、特殊研究家をどれ程熱狂させたか計り知れない。その当時のみならず、余徳は長く及んでいるのである。

◇ ◇ ◇

「乞食の体験者であり『浅草裏譚』の著者として、貧乏のどん底に生活し、終に市立板橋養育院で死んだ石角春之助は、現代奇人伝中の一人であるが、彼とはたしか北明の紹介で知友になったのだ。

石角の死後一年目で梅原に逢った折、石角のことを話すと彼は非常に驚いていたが、間もなく彼単独で石角のために、浅草で大法要をしたことがある。当日参加者は三十名ばかりだったと思うが、酒の用意は無論のこと、自ら酒匂川で釣溜めたという鮎を仕事師にかつがせて来て、懇ろな法事を営んだ後追悼会をしたなどは、一寸真似の出来ない友情である」斎藤昌三『随筆・海相模』（昭和24・10月青園荘私家版）。

右文中にある『浅草裏譚』（あさくさうらものがたり）は文芸市場叢書第一編として昭和

二年九月に発行された。表紙及び見返しに大衆のトイレ用紙として親しまれた「浅草紙」の実物を、但軟かい紙なので裏打ちして使用、珍装釘本として知られている。非売限定七百部絶版、著者は浅草の奇人石角春之助発行兼印刷者梅原北明。まったくいいコンビ同志の出版だった。この書は読者へのサービースに附けた正誤表（伏字表）のために発禁。

前編近代浅草裏譚、後編現代浅草裏譚、附録・浅草料理店カフェー食堂名鑑となっており、四六判本文二〇八頁、附録二八頁。底辺生活者の性風俗記事として第二章・浅草に巣喰う浮浪者、第三章・浅草の売春婦、第四章・浮浪的淫売婦の態様というのがある。その中で特に興味深い話を次に紹介すると、

男に手をかす女乞食

乞食にもさまざまな種類と、階級があることは、前にも言ったが全く乞食社会にも分業が行はれ皆それぞれ専門的な仕事を持っている。殊に色気があせた五十過ぎの女乞食は、性的不能や病的不能で、淫売も出来ずそれかと言って、ツブ（註。一定の場所を有せず諸所を袖乞ひする乞食）や、ダイガラ（註。残飯を貰って歩く乞食）では生活さへも成り立って行かないので、余り快い

仕事ではないが、燃えるような性的感情を持った男の求めに応じ手をかす珍しい女乞食が生れたのである。こう言へば大体見当がつくであらうが、多くは吉原へも行けず又売春婦も買えないと言う貧乏な性的不遇の男が、最後の手段として見るからに胸がむかむかとするような、時には、梅毒第五期と言う鼻のとれた「フワアフワア」と、発音をする臭気ふんぶんたる女乞食のサメ肌のがさがさした結構な手をかりるのである。そして其の手の賃貸借の料金は、大抵十銭が相場になっているが、シケた日

には五銭でも喜んで賃貸借の契約を締結する。

いわゆる今日でも俗にいうKAKIYAのおばさんの話である。尚ついで乍ら記すと、筆者が最近眼にふれた新書判の藤沢俊太郎著『信じようと信じまいと』——週刊誌記者が集めた性天国のカルテ——（昭和40・7月圭文館）一五三頁に、「映画館にこの種の女が多いのも浅草の特徴だろう。他にあの部分だけスペシャル・マッサージュをする女がいる。一回三百円前後。ペッティング専門で稼いでいる女は八抱っこチャンVといい、五百円から最高千円のお値段。スカートのホックを外して触れさせるのは五百円。

ハチェンジングVというのは、このお

さわりと同時作用で千円。彼女たちは三流館の最前列から、せいぜい四五番目の列にポツンと一人で腰かけている。ただ黙って隣りに坐りさえすればよい」とあった。何ともはや汚ない話で性慾哀愁譚の終点までできてしまったようだ。更にはまた、「新宿歌舞伎町、地下のO座はチャンバラかアクション映画のリバイバルもの専門。十一時半頃から一般興行のハネるのを待つ

て列を作っている。二本立三百円。映画館の中でイタズラしたり、チョッカイかけてくるのは痴漢男と相場がきまっているが、この座ばかりは逆である。ぐっと男の要塞をつかんだり……。同座の支配人はなげいていう、お客がたくさん入ってくださるのはいいけど、ナイトショウの跡かたづけは大変です。ところかまわず放出している液だの、紙屑だのがいっぱい、昼間の客とは質がちがいます、と」これは『チャームフォート』一九六七・二月号の記事で、まったくこれも信じようと信じまいと、かまわない話である。昔も今も同じような話があればあるものである。

石角春之助は日大を中退して乞食の群に入り、その体験をもとに『浅草裏譚』を書き、『乞食裏譚』（昭和4・文人社）を発行し、『楽屋裏譚』『浅草女裏譚』『浅草経済学』『銀座女譚』等々があった。いずれも足と体験で取材した風俗資料として、昭和初年のルンペン・プロレタリアートの生活風俗を知るために役立つが、各著書には記事の重複が多い。また発行所文人社名義の出版が殆どで『浅草裏譚』以後の出版は自身が著者兼発行人となっている。一種の八裏物語ものVを流行させたばかりでなく、底辺生活者の性慾記

「浅草裏譚」表紙



録を殆した点にも価値がある。

◇ ◇ ◇

さきに記した『乞食裏譚』がゲテ装の珍奇な造本であった如く、文芸市場社発行書はどれの一冊を手にしても、独自の装釘上に並々ならぬ苦心があった。梅原北明は無類の珍文献出版狂であったばかりでなく、非常な愛書家でもあった。文芸資料研究会分裂以後数多くの珍書屋が輩出したが、ついに北明におよぶ人物が出なかったことは、その愛書精神と正義感においていずれも欠けていたからである。雑誌『グロテスク』（第二巻第二号昭和四年二月号発禁）に、梅原北明の「最近輸入珍書秘画解説史」の中に『蚤の自叙伝』の解説があり、個人的な感懷をも述べているし、出版裏面談をも語っているので次に記して見よう。

「本書の三分の一は嘗て吾々の雑誌『カーマシャストラ』に連載したことがある。一部の読者には非常な歓迎を受けたが、章を追う毎に益々艶情を極め、それ以外の何等価値なきものと認めたので、中絶して了ったと云う過去を持っている。目下牛込の文芸資料研究会で該書の邦訳の予約募集中であるが、内容見

本に艶文を満載し、売らんかな主義を発揮しているのが不愉快だ、訳者佐藤紅霞大先生の日本の淫本式に翻案化した、スウハア文章だからこの方面の小学生には、もってこいの珍書であろう。その内容見本に依ると、興味の点、文学上の価値に於て、共にファンニーヒルなんて問題にならぬほどの芸術的なものであるそうだが、僕自身に限らず世界の文学者に、この両者を対読させたら、恐らく義経と向うづねほどの差があると答えるだろう。いくら売りたいにもせよ、あんな下手な、識者に直ぐと見へ透かされるような広告文は、文献を冒瀆するの甚だしいものだ。殊に佐藤紅霞君の如き、一ぱしの珍書通でありながら、あんなアクドイ宣伝をさせているとは真面目な学究徒として許されない態度だと思う」

以下は『蚤の自叙伝』の英・仏版の原書の書誌解題と予約出版法について触れているが太っ腹な、文芸市場社に出入する警察の刑事たちまで手なづけてしまふと云われた北明ではあったが、余程黙し兼ねたのであろう。元来が艶笑本刊行関係者が、それを純然たる商売にしている場合に、売らん哉主義そのものに対して、出版良心を云々したって始まらないことだ。然し△限定版▽は読めるばかり

が能じゃないから、海外のこの種の珍書文献を手に入れ精通している者の眼には、非良心的な俗悪な訳文や、安っぽい装釘で奇書を刊行することは△悪徳▽としてその眼に映じたことであろう。

◇ ◇ ◇

文芸市場社の「上海版」。当時俗に「シャストラ社版」と呼ばれた珍本の一つに、

『しとりこ』（閨房秘語集）があった。内容に造本にすこぶる特色があり、今日では残存部数もすくなくなっているので紹介したい。

本書は初め『張型考挿絵』として予約募集したものが刊行事情でおくれ、その代品として発行した。閨房内における痴語・ささやき・嬌声を辞典式に集録したもので、斯道書誌研究家中野栄三氏も、「書物としてこのようなのは本当に珍らしい」と云っている。もっとも戦後になってからはレコードでも、録音テープでも入手し易くなったし、風俗性文献物の特殊雑誌では△嬌声研究▽の論考・探究・記録なども幾つか出てはいるが……。

『しとりこ』昭和三年四月発行。小型折本、タテ11・8cmヨコ9・5cm、表紙・麻布地、扉・序・凡例を別に本文一三七頁（頁取なし）奥附もない、ケースも非常に変っているので

図示した。十字架ように切抜いた部分に書冊の書名がのぞいている。用紙は黒ボール紙で艶がある。本文は赤インキ、緑の飾ワクをとって居り二度刷。本文用紙は薬袋紙のような紙質である。序文と凡例の全文を次に写す。

序

人間の極度の緊張、其の勢力の最高發揮、夫れは性交に外ならぬ。而して其性交には互方の言語、音声があやをなす。夫れが性技巧の一つであり、又感情の自然流露でもあり、是れに由て一層の興奮を惹き起し、情熱を高度に昂進せしめ性交に詩的劇味の花を錦上に添ゆるものである。故に此等の音声、言語を除いたならば交媾は甚しく意義を失って荒涼無味なるものとなる。知るべし、「痴語猥話」と称せられてあるものが人生に尊き価値を付与するものである事を。斯様に解釈すれば其研究も亦忽にすべからざるものがある。況んや其簡潔なる一語一声、肺腑を衝いて出づるあり、又甚しく深刻極まるあり、死生を超越して無我悦に入れるあり、繋って千鈞の重みあるあり、夫等の言語が持つ深奥なる意味は人情哲学の宝庫を開くべき鍵である。

以上の見地から茲に本稿を綴るに至った。

近來性の研究に目ざめて斯学に志すもの続出すと雖も多くは西洋学者の後塵を拝して其説を敷衍するか或は古代文献の焼直しの羅列に過ぎず、一も創造あるなし、彼の徳川時代の人達は吾々に種々の貴重なる材料を遺訓せり、明治大正の人にして後代の人に遺すべき何物あるや、恥づべきの至りと云うべし。余茲に感慨あり敢て此集を後代に遺し百年の後斯学研鑽の自由を得た時に於て同好同学の人に発表せんとするものである。昭和三年一月元旦。

凡例

一、あの場合の言語音声を蒐めたるものなり

一、性交の時の前後並に性交と離る可らざるものに限る

一、言葉は現代の標準語とす

一、一方言又は幕府時代のものにして面白きものあれど採らず

一、実験若くは他より聞きたるもののみに限り架空のものは載せず

内容は△嬌声▽△嬌語▽△叫声▽の採録集成で、いろは別になっており一頁に四語から八語を記してある。例えば、「お前どうして拭かぬ？」（註。すんでも拭かぬやつ。吸い

こんでしまうので、紙いらずという仇名のある芸者）などと評注を加えたりした場合、その頁の採録語の数がすくなくなっている。

附録として「変態の部」がある。いずれも実戦用語であるが、こうしたコトバは書物として印刷されたものを読むより、テープ・レコーダーで録音テープを聴いているべき性質の事柄であろう。あるアパートに住む独身者がつれづれのあまり、知人から借りて来た嬌声テープを深夜にかけていたら、隣室の夫婦者が、おとなりさんが若い女の子を引っ張って来てイチャついているのだと思い、つい誘われて自分たちも熱演してしまい、深夜のアパートは時ならぬ叫声痴語の震源地の如く化したと云うが、連鎖反応とやらで各部屋ごとに始めたからで、管理人の老夫婦はびっくりして、地震かと思って眼をさました、と筆者に語った事実談がある。また、私が実際に目撃したことだが、東京近郊都市の場末のヌード劇場で、これは其処の支配人のアイデアというよりいたずらだったが、実演中に流行歌曲のレコードの合間に、秘蔵の嬌声録音テープを流し、ヌードダンサーがまた茶目っ気のあら女で、それに合わせて演技したからたまらない、只でさえモヤモヤしている場内の空気

が騒然として、観客が総立ちとなってしまうことがあった。——人間男女の愛慾をシゲキするには、視覚と触感が最も強く作用する嗅覚や聴覚はややというより大分微弱な事柄かと思っていたが、時と場合によれば、あなどり難い作用をすることが分った。

次に、奇書『しとりこ』より、内容の部分抄写をする。残念乍ら、遠慮すべき言葉は省いた。

(い)の部

△いい毛だ

△いい心持だ

△痛い痛い(嘘もあり本当もあり、或いは多

毛の場合もある)

△いやらしい人

△いやですよ

△一生忘れられん

△いつ迄も斯うやっていたい

△淫乱だね

△いつも同じ型ね

(ろ)の部

△碌々ねなかった

△老人は厭だろうが我慢してくれ

(は)の部

△はーはーはーはー

△はッははッは

△談^{はな}せる(男が女の腕前を見て)

△早くして

△早く……人が来る

△放して下さい

△始めて?

△始めてです

△はばかりに行つて来ます(興を殺ぐこと甚

し)

△はづした(娼妓がうっかり本気になつてし

まった時に使う言葉)

△初めては極りが悪い

(に)の部

△憎らしい程上手だ

△二階から人が見ている

△妊娠したようです

△臭いがする

(ほ)の部

△本気でやったわ

△本気にならんか(督励)

△程がええ

△ほろ酔の時が一等よい

(へ)の部

△変なものねー

△下手くそ(女の叱り言葉)

(と)の部

△どうしようどうしよう

△毒ですよ

△とうとうこんな事になった

△泊ってもいいでしょう

△隣の音を聞いてまた……くなった(此れを

貰い床と云う)

△年増に限る

△年寄はいやだろう

(ち)の部

△乳を出せ

△ちっとも汚いとは思はんよ

(り)の部

△りんきして居る

△淋病ぢや無くて

(ぬ)の部 略

(お)の部

△女は一体に遅いものです

△女ころし

△女に用があると云つたら外の事ぢやありません

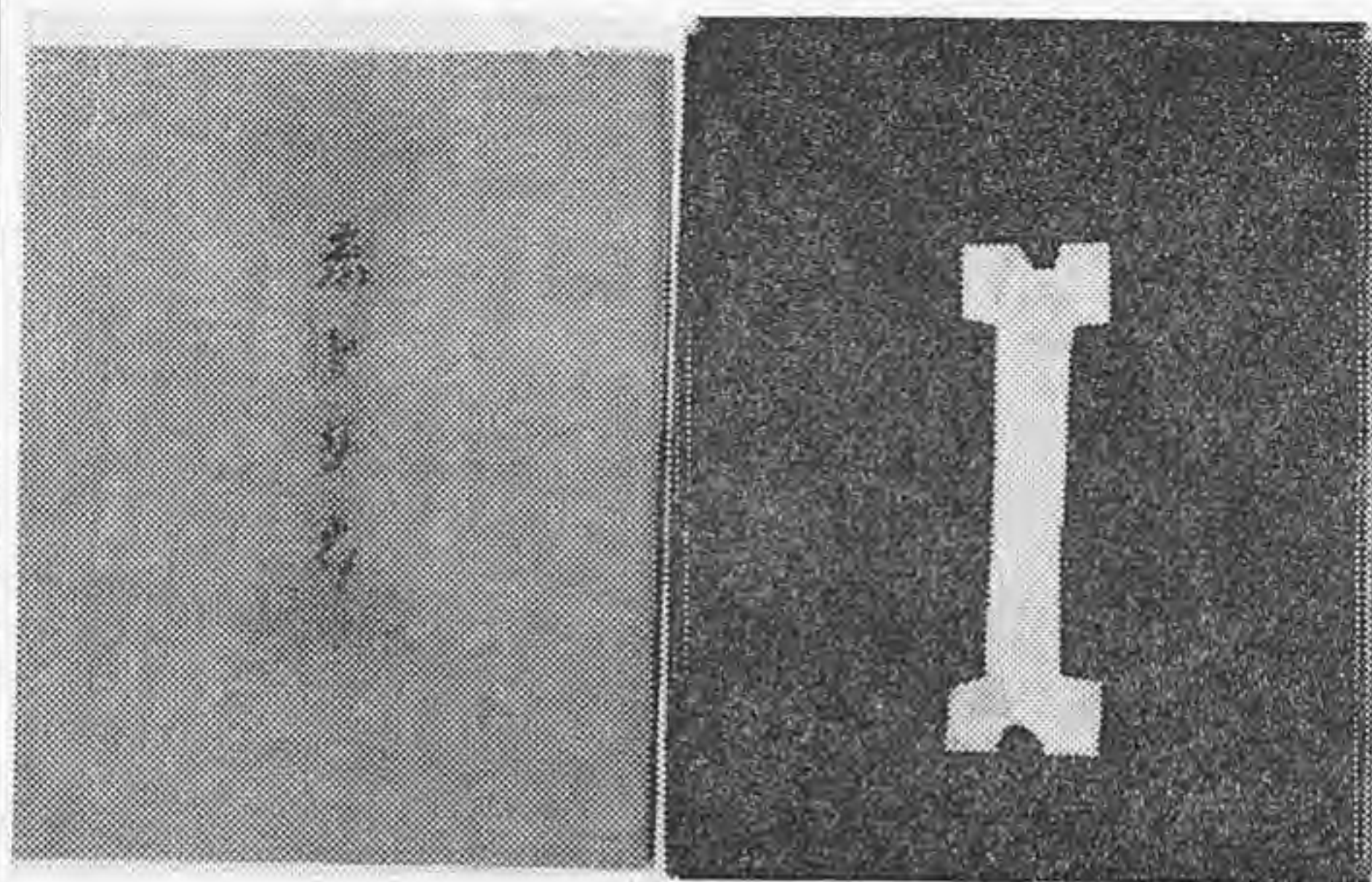
せん

△女は得だよ

△男はすぐ喋るから嫌よ

△お湯に入つて居ないね

「しとりこ」の表紙と外函



△往生した
△奥さんに言付ますよ
△帯を解け

△おばアさんはいやでしょう
△おぢさんはすきよ
(わ)の部

△妾しは床が騒がしいんですよ

(前以て断つて置く)

△笑われてもかまわん

△悪い人ね

(か)の部

△紙を忘れた

△髪がこわれます

△髪の匂いをかぐとたまらん

△顔を見ちゃいやよ

△噛みつくな

△勘忍して下さい

(よ)の部

△夜が明けてもかまわん

△横がすき

△よく眠っていたね

(た)の部

△だらしがなくなった

△旦那 旦那 旦那

△誰も来ませんよ

△誰れにも斯うはしませんよ

△大丈夫よ(主人不在中)

△大丈夫病氣なんか有りやませ

ん

(そ)の部

△そこだそこだ

△そりゃそうですよ

(つ)の部

△詰紙は毒だよ

△爪が痛い

(ね)の部

△ねー、ねー

△姉さんには内証よ

(な)の部

△何ンとか言いなさいよ

△泣かして 泣かして

(ら)の部

△乱暴だねー

△乱暴な人だこと

△乱暴しちやいやよ

△乱暴ぢやないの

(む)の部

△無我夢中だ

△向きを変えよう

(う)の部

△うー、うーん

△嘘泣きをして(これをヒバリ泣きと云う)

(の)の部

△咽が苦しい

△脳天までしびれた

△呑気な真似は厭だよ

(く)の部

△苦しい苦しいもー止めて

△櫛が折れた

△暗くしましょう (電灯を消してもいいでしょう)

(や)の部

△約束がちがう

△破れかぶれだ

(ま)の部

△まだ?

△まだです

△間男は初めてだ

△間男は気がとがめる

(け)の部

△毛が多いなア熊のようだ

(ふ)の部

△拭きます

△蒲団をかけて下さい

(こ)の部

△こんな所?

△恐わがらんでもええ

△殺せ殺せ

△声を立てますよ

△御免なさい御免なさい (放屁)

△子が出来たら困ります

(え)の部

△縁だねー

△ええ加減にして置きなさい

(て)の部

△徹底したわ

△亭主などはどうでもええ

(あ)の部

△遊びましょう

△あの人夢中に惚れた筈だ

△貴方は? (意味深長也)

△洗っちゃ情がない

△貴方の奥さんが死ねばいいのに

(さ)の部

△さっさと早く済まして帰んなさい

(き)の部

△汚くてもかまわん

△きまりが悪いわ

(ゆ)の部

△夢のようだ

△湯のようだ

(め)の部

△目が見えぬ

△目がちらつく

△面目ない

△めしより好きだ

(み)の部

△見たら愛想がつきる

△見かけ倒しだ

(し)の部

△死にます 死にます

△じっとおとなしく寝なさい

△しつこいねー

△素人のようだ

△島田の根が抜けた

△じれったいね

(ひ)の部

△人に知れるとこわい

△人に言っちゃいかぬよ

△人殺し!

△冷飯のようだ

△久し振りだよかった

△紐一つでも邪魔になる

(も)の部

△もう沢山

△もう命もいらん

△もしもしも貴方

△勿体ない

(せ)の部

△せつないせつない

△せんと置こう?

△先生だ(上手をほめて)

△勢がない

(す)の部

△すんだ跡は馬鹿馬鹿しい

◇ ◇ ◇

『しとりこ』から以上の如き無難なコトバのみ抽出して見たが、やはり一抹の時代色とい

うものが、大正末期昭和初年頃の古めかしさや、開放されなかった△性▽の暗さがよんでいるようだ。頹廢的ムードが漂うており、性の実態が重苦しく圧迫されていて、若し現代にこの書の編纂者の如き特志家がいれば、この種の嬌声集を編めば、もっと明るい健康でモダンな△性▽を樂天的にエンジョイしている現代氣質が示されると思うのだが……。例

えは(ひ)の部の、冷飯のようだ、というのは娼家でまわし(註。一夜で数人の客に接する制度)をとったあとの娼妓が、更にまた客に接する場合で、人生これ程つめたく味けない事と時を感じさせられるものはあるまい。痛烈な自嘲と悲哀をも感じさせる。それでも男の生涯のうちの△青春▽には、そんな時期というものがあつたのである。更には、このような事柄の△女▽の生理の悲しみに就いては、云うべき言葉もない。

(未完)

最新撮影総天然色

カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てき▽

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てか▽

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てく▽

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△てこ▽

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△てま▽

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号△うお▽

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号△うて▽

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号△うこ▽

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るむ▽

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るの▽

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るお▽

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るま▽

羞らいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るけ▽

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るふ▽

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号△るや▽

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れよ▽

羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れに▽

—— 懸賞入選作品 ——

【体験記】

続・責め絵のある関係

能 美 積



はじめに

奇譚クラブの発行日は毎月二十五日という事になっています。が地元大阪では二十四日に入手出来ますので、其の日の夕方、本篇の中で、親爺という名称で登場する人から、電話にて、体験記らしくない文体である事から創作として受取られるのではないかと、御忠告をうけました。でも素人の私では、適当な表現も出来ませんので、矢張り、小説体にて書かせて頂くしかありません。実際に、縛りを体験した場合、どのような感じがするのか？といったような事に興味をお持ちの方は、奇クをつうじて御問合せ下さい。

月日、或いは時間、其の他の点につき、多少取捨選択は致しましたが、体験記である事には相違ありませんので御了解の上、お読み下さいますように。

① 天 罰

翌る日から、私は乗務に就いた。

一年有余の生甲斐ともいえる、芳子への恋情が、斯んな形で絶ち切れた今となっては、一刻も早く、大阪を去りたい気持で一杯だったが、就職したばかりの会社を、いきなり飛

び出すような不義理は、いかな私でもやれなかった。

三日後の夜、私は親爺の店へ出掛けていった。悪夢ともいえる芳子との事に、二度と触れたくないのだが、親爺だけには報告しておく義務があった。おくさんが、終始同席していたし、なんともかとも、辛い立場ではあったけれども、聴き上手と、興味を交えた親爺の誘導にのせられて、あの日の苦い体験を、つぶさに私は説明していた。

「あほとちがうか……」

それが親爺の口癖であった。

「いや、ほんまの話や。なんで又あんた、とどめを刺さなんだんや。女ちゅうもんはやな。いや、女に限った事やない。商売かておんなじ事や。そんな中途半端なことでやめたらあかん。とことんまでやれ、そう忠告した筈やで、律子（おくさんの名）と二人で折角成功するように祈ってやってんのに、なんちゅう阿呆な事してもうたんや」

まるきり馬鹿者扱いだった。結局、芳子との関係はこれで終りだ。と親爺は断言した。

「まあ、気の毒やが、その娘のことはすっぱり諦めることやな。その代り、わいが、ええ娘を世話したるがな、今夜のところは、あん

たを慰さめる、そういう事で、どうや、三人でおもしろい遊びでもやろうかいな」

私は、チラとおくさんの顔を見た。親爺はだいが前から、第三者を介入した、プレイについて、しつこい程におくさんに要求していた。親爺の持論によると、釘といえは金槌の例えどおり、夫婦のプレイには自ずから限度がある、此っ方が其の気になると、いち早く察知して、さっさと準備を始める、そうさわると何となく情が先だって、思い切ったプレイが出来ない、ついつい慣れ合いのものに終る。というのであった。感情のこもらない縛り、それが不満であるらしかった。羞恥にのく女体、そして責めにおのく妻を縛る事こそが、本当の愛である筈だと、いうのであった。そのためには第三者が必要であり、その第三者が、私をおいて他にないのだ。

「どうや。律子、不承知かいな？」

「あなた、冗談をいって場合ではないでしょう、能美さんは失恋の痛手で悩んでらっしゃるのに」

断わっておくが、おくさんは大阪人ではない。長く大阪で暮している筈なのに大阪弁を使わない。そんな固意地な半面を持っている人であった。だから、多分親爺の思い通りに

動いてくれないのかもしれない、そんな事で夫婦間がうまくいっていないのかも知れなかった。たしかに、おくさんには私も魅力を感じていた。ただ、親愛なる友人の妻である以上、どうする事も出来ないのである。まして親爺のように、自分の妻、自分だけの花を、他人の手に縛らせるなぞ、到底私には出来そうもない、それこそ異常だと思うのだ。もっとも私と親爺とは、異常故に結ばれている、だから異常であっても良い筈だったが。ともあれ私には、第三者を交えたプレイに執着する親爺の心理は理解出来なかった。二人の夫婦関係が、しつくりいっていないのではないのか？という事は察しられないでもなかった。其の罪が、親爺の側にあるのだという事も凡そ解った。責めとか、縛りなぞという行為は、愛し合う者どうしで行なうものでは有り得まい。若し現実には許されるとしたら、自分が犯罪者にでも落ちない限り到底実現は不可能な事であった。その点では、親爺と私との意見は真っ向から対立している。映画を観賞する場合にも、此の事ははっきりしていた。親爺には緊縛のシーンでさえあればなんでも良いのだったが、私には、軽い縛りでも構わなかった。貞操の危機に打ち震える女体、そ

れであった。夫婦のプレイに、そんな物が期待される訳はないのだ。完全に夫人を縛りたい、その慾望を律子夫人が満たしてくれる筈はなからう。それを私にやらせようなどとは、正に悪趣味だった。

帰路、思い掛けない災難にあった。私の乗ったタクシーは赤信号で停止していた。ドスンというにぶい音がして、私は車内でつんめった。追突されたのだ。起きあがる間もおらず、直進してきた大型車が後部バンパーに接触した。車は横転し、次いで裏がえしになつてしまった。折あしく、日報を書き込んでいた運転手は、ハンドルで胸部を打って悶絶したが、救い出された時、私の方はしっかりしていた。若い男がなにか言つて、ピヨコンと頭を下げた。顔色が真っ青だった。

「あんたかい。オカマ（追突）したのは」

「いえ、あ、赤信号で、お宅の車が……」

氣絶した運転手を助けだした別の男が、私の前に来た、其奴が最初の加害者だった。足をあげて私は其奴を蹴りあげた。序でに一つぶん撲ろうと思つたが、右手が利かず、そのまま私も崩れるようにへたつてしまった。

救急車で運びこまれた病院の、外科医の診断では、全治二カ月程度の右腕骨折という事

だった。すつとんで来た事故係に耳打ちされる迄もなく、私は頭部の激痛をうったえた。これは常識である。二日間程、入れ替り立ち替りに見舞客の訪問をうけたが、痛みが先だつて、泣き顔を我慢するのが精一杯の状態だった。手廻しの良い事故係が、年収を算出して補償の参考にする為に、問い合せに来て始めて事故を知り、加納係長が会いにきてくれたのは、四日目の朝だった。私は、もうなんとか笑顔を作れるまでに恢復していた。

「天罰やのう」

芳子との事を知られてしまった？ 私は、そう解釈してキモを冷した。が、会社をむりやり辞めたのが起因して、此の難にあったのだ、と係長は、やんわりかわした。此の人がなにかを察知していない訳は無い。つい、

「芳ちゃん、どうしてます？」

と口が滑った。

「お前の事はまだ話しておらん。下調べをしとかん事にはな。再起不能なんてことでひきつけでも起されては叶わんからな」

「じゃあ、知らせんといて下さいよ」

「なぜ」

「別に。ただ知らせる程の重態じゃあないですから、心配させるだけ損ですよ」

「ふむ」

係長は軽くうなつた。不用意な私の一言で二人の関係が軌道を外れているという事を、仮に芳子が語っていなくても、知られる結果になったようだった。此の人は我が娘に頼まれて二人だけの時間をつくってくれたのだ。結果は、私が社を辞める事になり、今も又会う必要は無い、と私はいつてしまったのだ。氣まずい沈黙が暫く続いた。

「一体全体、どうなってるんだね？」

「……」

「これは私の推測だが、婚前交渉というんだつたな。芳子がそれを拒否した、それでお前が頭にきた。……そういう風に解釈していいのかね。つまり、痴話喧嘩という奴か？」

扉がノックされた。会社から知らされたのである、思いがけなく、母と弟がはるばる上阪してきたのだつた。

芳子の問題は、それで中絶した。

二週間後、私は故郷へ帰る事になった。もう二度と大阪なんぞで働らいて欲しくない、と母はいった。私にしてもいい汐時だった。社には、自宅療養をしないと理由づけて、医師も許可をくれた。もう二度と大阪へくる事もないだろう。私も又、母と同じ考え方をす

るようになっていた。

② 満たされぬ日々

出発前夜。私は左手でなんどもなんども、ダイヤルを回した。当分の間九州へ保養に帰る、という嘘をいうのは心苦しい限りではあったが、世話になった人々へ最後の挨拶の意味を含めて念入りに別離をこめた。親爺の処へ電話をするのが一番後になってしまった。

「主人は今、名古屋ですよ」

「律子夫人だった。」

「出張ですか？」

「まあね。お仕事を兼ねて、例のほら」

「……」

「凄いショーがあるんですって。はり切って参りましたわ」

「困った人ですなあ、まるで気狂い沙汰だ」

「誰かさんと、よく似てますわね。余り他人の事いえないのと違いますか」

「とんでもない、僕は親爺さんに……」

「でも、芳子さんでしたかしら。……あなたの方がひどいみたい。そう私はみえています」

「おくさん、実は僕、あした帰郷します」

「ききょう？」

「くにへ帰るんです。それで親爺に一度お会

いしたかったんですが……残念だなあ」

「矢張りね、余程、好きだったのね。なんとなく分る気がしますけど。……でも何も逃げださなくってもよろしいのに」

「いや違うんです。交通事故でね、腕を折っちゃったんですヨ。それで此の際思い切って大阪を去ろうと決心したんです」

「事故にあったんですって。いつ、どこで。それにどうして又、……」

「お蔭で生れて始めて、飛行機に乗れるんですよ。すこぶる元気ですから安心して頂いて結構です。それにしても親爺さんに会えないのは何とも心残りです」

「私が参ります。今、どこへいらしてるの」

夫人の驚き方は想像以上のものだった。私はなんとなく目頭が熱くなった。変な親爺との交際^{ツキアイ}だったが、夫人は立派な人だった。斯んな美しい人を自由に出来る親爺に対して、ねたましい気持を抱いた事も幾度かあった。まして、女盛りの柔肌を縛って愛撫出来るのだ。夫婦プレイは否定しても、その姿態を、さまざまに想像して眠れぬ夜も度々あった。母と弟が近くの宿へ引揚げて待つ間もなく夫人は病室を訪ねてくれた。よもやま話の末に夫人は言った。

「能美さんには、種々お願いしたい事もありましたのに、本当に残念ですわね」

「どんな事です？」

「もちろん、主人との事ですワ」

「わかります、字がかけるようになったら、あまりおくさんに無理な要求をするなって、手紙を書きましょう」

「親爺だって、おくさんを愛する故の行為なんでしょう。そう思って暫く我慢してやって下さい、必ず私から忠告します」

「もういいんです、なんとか二人だけで解決しますワ。御免なさい愚痴をいって」

翌朝。十時きっかり加納係長が車で送られた。昨夕、電話した時に伊丹空港まで送ってやるといってくれたのだ。芳子も一緒だった、職場から脱け出してきたのであろう事務服の俣だった。父親の背に隠れるようにして、瞳だけが私をじっとみつめている。一言も云わなかった。車の後部シートに腕をかばうために私と母が坐った、助手席には真中に芳子が乗り弟が端に廻った。

会社での芳子は、長い髪を首筋の後で、リボンでいつも束ねていた。

私は、ただぼんやりと、其の紫色のリボンを見つめつづけていた。

下車する時

「お気を付けて……」

それが、芳子の私に対する唯一の言葉だった。あの親爺と会わなかったら芳子と私は結婚していたかもしれない。然し、だからといって私は親爺を憎みはしない。むしろ、もう再び親爺と会う機会がなくなったのだ、という気持ちの方が強く私を支配していた。始めて乗った飛行機にも別段、興も湧かなかった。あっという間に、機は板付へ着陸した。

三カ月と少しで右腕は完治した。帰心矢の如しのたとえどおり、私の心は大阪へ飛んでいた。且つて悪夢のような、と私を悲しませた芳子との問題も、今となつては、唯一無二の貴重な体験として、むしろ秘かに誇りたい出来事だと思ふようになっていた。だから二度と会う事もない芳子の存在などは、上阪に對するなんの関係もない事だった。既に、完全なSに傾倒してしまつた私にとって、小都市の毎日は退屈以外のなにものでも無い。家族にかくれて奇クを読むのも難事であるし、ときに上映される、其の種の映画も、すでに観古したものでしかなかった。

そして、もっとも私を苛立たせたものは、共通の趣味をもった友人がいないという事で

あった。大っぴらに語り合える、音楽や読書であれば、どうという事もない。然し、此の世の中で私の性向を話せる相手は、一人。親爺がいるだけなのだ。……長い手紙を親爺は寄越した。

(君となら三人だけでプレイに応じる、妻はその事を確約した。甚だ残念な事だが、マネリとでもいうのだろうか？ 儂等の夫婦関係は、今ひどく不安定な状態にある。妻は、決つて儂を、そして縛りをも嫌つてはいない筈だ。だのに何故斯んな状態になつてゆくのか、解らない？ 君には第三者の立場から、儂の行為が異常なのか、妻がなぜ儂を愛しながらついてこようとしなのか、明確な答えを出してくれる事だろう。君が、プレイを止めるべきだというのなら、残念だが諦めよう。しかし君だけは、戻つてきてくれたのむ。でなければ儂の人生は暗黒だ。)

そんな風に結んであつた。

大阪を出発前夜、私は夫人と交した短かい会話を想ひ出していた。必ず忠告してあげます。そう約束しておきながら、私はそれを果してはいなかった。

所詮、縛りや、責めというものは、絵空事や空想の世界での夢でしかないのだ。その事

を親爺に納得させる義務のようなものを私は感じた。まして第三者を交えてのプレイなぞ許せない。律子夫人は、再び私が上阪しない事を知つていて、親爺と約束したのだろう。それを察知し得ないのは、商才に長けた人らしくないミスだ。

ともあれ私は、家族の反対を押し切つて上阪の決意を固めた。

芳子からは、三度程簡単な見舞を兼ねたハガキがきていた。私はむろん返事を書いてはいない。(骨折で書けない故もあつたが)復職の依頼状を認めた後で、親爺にも一筆走り書した。

親爺の喜ぶ顔にダブつて、律子夫人の当惑げな表情が、消えたり、浮かんたりしたが。上阪出来る悦びで、一人私は満足だった。

③ とりちり

上阪すると私はアパートの一室を借りた。

奇クを楽しむ為にも二人一室の同居生活は不便だったし、緊縛美態代表作品の内から好みの物を切り取つて、親爺に譲りうけた数々の責め絵も加えて、壁一面に貼りつけたりして、独り身の気安さを満喫していた。

むろん、いつ誰が訪ねてきても良いように

カーテンを奮発するのも忘れなかった。

親爺との、交友も元に復した。縛り映画が観たい、そう思えば、何時でも何処かで必ず観れる、それも大阪の魅力だった。

「今夜八時、とり菊、知ってるやろ、日本橋の一丁目や、予約しとるんで、間違わんようにな、わいの名前とおしてな」

親爺からの電話は、いつも一方的だった。

もっとも一カ月間の私の勤務^{ジョウムアケ}非番のスケジュールはちゃんと知らせてあるので問題は別になかったが、料亭を指定してきたのは初めての事だった。とり菊というのは、運転手風情ではたびたびゆける場所ではない。ただ職業上、客の送り迎えに、そうした有名な処は記憶しておくのも月給の内である。

定刻を少しずらせて私は着いた。玄関を入った処に箱庭程度だが、しゃれた庭園がしつらえてある、仲居が焦々する程に長い事、私はそれを眺めた。

室には、親爺と女客が二人、私を待っていた。律子夫人と店で働らいている雅代という名の可憐な、かねてから親爺が、ものにしてみんか？と勧めている娘である。夫人と同郷のせいで、子供のない親爺が特別に面倒をみているのだという事もきかされていた。

二人の女は、お揃いの中国服？みたいな物を身につけていた。女性の服装にあまり詳しくない私には、説明のしようがないがノースリーブの、そして裾の深く割れているあれだった。床の間を背に、和服でくつろいでいる親爺は、其の横の座に私を招じた。二人の後をすりぬける時、白い腕と少し小麦色の雅代の肌とを、私は眼の隅に焼きつけた。斯んな場合、多少痴漢めいた視覚が素早く働らく。ハンドルを握っていても、毛色の変った客が乗ると、眼の玉だけが、ルームミラーをチラと覗く。その習性みたいなものかもしれない。（多少、弁解めいて申し訳ない）

「どや、二人ともよう似合うやろ？」

親爺は御機嫌の態だった。若い雅代はともかくとして、律子夫人の方はまさに大輪の花咲き匂うの感じであつた。其の美しさに圧倒されて、私は妙に落着けなかった。

変ったスープで味付けされた、自慢の鶏切りは美味かった、たらふく喰った。九時になると夫人は雅代と連れ立って帰っていった。雅代は店の近くの寮で同僚と合宿している。結局、何の為に二人が同席したのか分らずじまいであつた。が二人きりになると親爺のこゝろは氷解した。親爺は大仰に両手をついて、深く頭を下げた。

「例の件や、今夜たのんまっさ」

「駄目、絶対に駄目です」

もう何度も繰りかえしてきた同じ言葉を、同じ調子で私はいった。

「おくさんはね、愛してあげるのが常道なんですよ、あれだけの人を自由にできるだけで満足なのに、それ以上を望むなんて、ぜいたくですよ、今に逃げられてしまいますよ」

「わかつとる。そやけど律子かて約束は約束やと、ちゃんと了解しとるんや、な頼む」

「……でも僕にはとても」

「わいも男や、あれがあかんいうのならこれつきり、二度と縛ったりなぞはせん。あんたと律子の前で誓うてもええ。嫌な役目やちゅう事は承知のたのみや、その代り、ただとはいわん、礼はきちんとさせてもらいま」

「ぜにかねの問題ではないでしょう？」

「ぜに。なにいうてんねん、あんたとわての仲や。誰がそんな水臭い事いままっか……」

「……」

「よしこ、さんだったかいな？ 失恋の痛手ももう納まったやろう。それでどや、あの娘。雅代や、気にいらんかいな？」

「あの人を呉れるというんですか？」

「やるとはいえん。そやけど、あんたに気のあるのは見通しや。それにあの方も充分素質がありそうなんやで」

「どうして……分るんです」

「わいの感や。ずばりあたっとる」

「あんまり気乗りしませんなあ……」

私はそれ程うぬぼれやでは無い。そうそう都合良く惚れられる程、顔にも体にも自信はない。親爺の口車に乗せられて下手をするとおくさんとも顔を合わせられぬような羽目にもなりかねまい。

「どうしても、あかんのかいな」

此の辺から、親爺の眼付きが変ってきた。

酔うとくどいのも、又此の人の癖だった。

「やりますよ。御希望どおり、やりやあいんでしよう。やりやあ」

熟考の末。但し、と私は条件をつけた。

「一時間、いや三十分でも結構です。おくさんと二人だけの時間を下さい」

その間になんとか夫人と共謀で親爺を丸めこむ相談をする積りだった。

「かまへんがな。そやけど、わいを失望させるような、悪企らみはやめといてや」

年輪の差という奴か、此っ方の腹は見抜かれていた。

店までは、ブラブラ歩いて三十分の距離がある。親爺にも酔いをさます意味で徒歩で帰るように、私は伝えた。大戸はむろん締めてあったが、ぐぐり扉はすぐに開いた。左側には配達用の軽自動車が並べてある。そして反対側は菓子詰めた缶や箱が山積されて、二階にある居間への通路は蟹のように横に歩かねばならない。階段の横にある硝子張りの小さな事務所にも、あかりはともっていなかった。五、六段登った処で、パツと頭上が明るくなった。登り詰めにある応接室の扉が開いて夫人の黒い影が立った。

「能美です」

「……主人は？ 一緒ではないの」

「ええ、少しおくれます」

「そう。……ではどうぞ……」

室へ入って驚いた。そこにある筈の応接セツトが全部、一隅によせられている、勿論、夫人一人の力では到底動かせる代物ではない。敷き詰められた緋色のカーペットが眼にしみるようだった。

「主人はどうしておくれますの？」

「私が頼んだんです。一緒では具合悪くて、坐る物が無いので立った俣の会話だった。夫人は一寸の間、沈思していた。」

「私が賭けに負けちゃったわ」

「……」

「あなたは見えなくて、私は賭けたのよ」

「それはどうも、でもいろいろ都合で」

「それで、すぐに始めますの……」

私はめんくらった。どうも勝手が違う。夫人の口調もとげがあるように、私は思った。

「それが主人の使用しているものよ」

私は、指さされた物を黙って眺め、そしてその一つを手にしてみた。よく呉服屋の店頭にぶらさげてある腰紐のようなものだった。

ただ違うのは、やけに長く、シワにならないようにジグザグにミシン縫いがしてある特別製のものである事だった。ゴツイロープで縛れるような、そんな肌ではない。そんな風な事を親爺にきかされた事があった。

「どんな風にあたしを括るおつもり？」

どうやら、一刻も早く解放して欲しいらしい。私には、全く其の気はなかったのに。

「おくさん。夫婦でしたらなんだって自由に話がでるでしょう……」

「……」

「どうしても、はっきり言ってやらんのです」

「女の口から言えない事もありますわ」

「そんなら現状維持で我慢なさる訳ですか」

「他になにか方法がありました」

「親爺さんはね、おくさんがはつきりいやだつて事を意思表示されるなら、二度と縛ったりはしないっていつてゐるんですよ」

「能美さん」

「なんです？」

「他人のあなたには分らない事もありましてよ。いくら主人のお友達でも、主人の目の前で括られるなんて辛い事ですわ。でも主人はそれを望んでゐるんです」

「……」

「ですから御迷惑ならお帰りになつても構いませんの。でなかったら、あなたのお役目を果して下さい」

どうやら他人の私に干渉の余地はなさそうだった。主人の事で種々相談したかった。そんな事をかつてもらしておきながら、いやそういうえば二人だけでなんとか解決するとも言つていたようだ。女の、人妻の愛情とは、斯んなにも犠牲をとまなうものなのだろうか。私は黙つて道化師ドエロを務める腹を定めた。

④ 女の性

「主人はきまつて後手に括りますわ」

「親爺が戻らなくても構いませんか」

「ええどうぞ。かえつて喜んでくれるかもしれせんヨ」

やれやれである。

「じゃあ、すわつて始めますか」

人並優れた美女を目の前にしながら、私は少しも楽しくなかった。私好みの貞操の危機に震えおののく、あのスリルは現実の世界では犯罪者にでもならない限り、到底味わえるものではなからう。

（糞親爺め、斯んな事をして、なにが面白いんだらう）

夫人は背を向けて、其の場に正座した、両手を自然に後ろで組む、私は又事務的に紐を捌いた、手首を縛つて胸に二巻。それで終つた。それにしても女の肌というものは、どうしてこんなに光沢があるものなのか、露わな二の腕の艶やかさは、縛るよりも思い切り、噛みついてやりたい程に美しかった。この腕が親爺のものでなかったら。……そんな事をぼんやり私は考えていた。

「主人よりずっと優しい括り方なのね」

夫人の声がひどく挑発的なものに変つてきこえた。馬鹿にされた感じだった。別の紐を私は手繰りよせた。どうせ親爺と本人の許可済みの体である、もう一寸位飾りつけをして

やつても文句はでまい。

「上体を前に倒して、爪先だちになつてくれませんか。……そう序でに一寸腰を浮かせて欲しいんですが。ええ、それでいいです」

ストッキングに包まれた足首のあたりに紐をとうした。きっちり結び合わせる。

「もう、いいですよ、お楽にどうぞ」

「足を縛られるのは、始めてですわ」

括る、という言葉が其の時だけ、縛る、に変わった。

「へー、親爺好みと思つたんですがね」

「だって……不便でしょう……」

「不便って、なにがです？」

こん畜性、と思つた。両足の自由が利かないでは確かに不便には違いあるまい。だが、此の場合、私にきかせる言葉ではあるまいものを、よくもまあぬけぬけと。

私は、そつと立ち上つた。二、三步あとさざると頃合いを見計つて、手にした紐を力任せに引っ張つた。不意をつかれて夫人の体は音をたてて、突つ伏した。軽くではあるが、後手に縛つてあるので、まともに胸のあたりを床に打ちつけたようだった。奇声を発つして起きあがろうとしたが、紐を手にしたまま私は夫人の前に廻り、どっかと尻をすえた。

坐り直すためにはあおむけになるより術がない筈だった。そうさせぬように私は両足で夫人の両肩を踏みつけてやった。加虐、私のそれが、むくむくと頭を持ちあげてきたのだろうか？ 手にした紐を、しばらくとすると、折り曲げて、ばたばたしていた両足を、ピンと、垂直に夫人は伸した。完全に気が転倒しているようだった。私はグイグイ紐を引きしぼった、伸びたまんま下半身が宙に浮いた。やがて耐えられる限界がきたのか、がくん、と膝が二つに折れて、顔を伏せた。私はしつように紐を引くのをやめなかった、両足を二つ折りにされたままに下半身がもう一度床を離れた。此の辺で手首と一緒になぎとめよう、そう思った時だった。夫人は大きく首をのけぞらして、私を見上げた、なにかいおうとしたのだろうか？ 小さく口を開いた。私は自分でも予期せぬ行動に出た。素早く、充分にしぼっておいした紐を夫人の唇にねじこんだ。

「あ、あア——」

私は、おおいかぶさるようにして、足首に紐を結えた。完全な逆海老縛りであった。

「どうです、親爺より優しいですか？」

「ヒ、ひどい事を」

声がつれていた。両肩を支えた尽で、私は夫人を観察した。固くにぎりしめた拳から二の腕のあたり、めくれて覆う術のない太腿のあたり、そのすべてが、私の心を今にも狂わせそうな無残な色香をただよわせている。眼を閉ざし、歯を噛みしめて息をつめている艶やかなうなじも又そうだった。右足で左肩を押え、左足で私はゆっくりとうなじから胸乳へとさぐっていった、が紐が禍わいして指先が届かない。焦立って、足先で横に転がした。圧迫を許された胸のあたりが烈しく喘いでなまめかしい。

此の辺までが私に許される限界かもしれない、が乳房をいたぶりたい欲望が炎のよう燃えあがってくる、手首を自由にして胸に回した紐を抜く時、どこかにすれたのである。ヒューッと咽喉が鳴った。腋の下に押さえられた左手は動かせない、自由になった右腕が唇に噛んでいる紐を取ろうとした。が私はその腕を、もう一度、たった今解いたばかりの細紐で縛り直した、腰のあたりでばたつかせている左手とつなぎ合わせる、大の男も音をあげるといふ鉄砲縛りにしたのだった。指先と指先が背骨のあたりで重なって、腕を引上げられた右腋下が汗をにじませている。

髪の前から、とれかかったヘアピンを私は手にした。先でチクリその腋を突いた。ピクツと全身がけいれんする、ピンの頭の丸い部分で、ゾロリ、と撫でる。同じ事を何度も何度も、くり返した。突然、全身が音を立てて崩れ落ちた。完全に緊縛してあるので、姿態に変化の生じる余裕はむろんなかった。が全身の筋肉がピクリとも動かなくなつた事で私は、我にかえった。慌てて夫人の顔を覗きみて、私は信じられないものをみてしまった。悶絶した。そう思ったのだが、夫人は薄く眼を開いていた、瞳は焦点を失なつて宙をさまよっていた。汗で洗い流された白い顔は、みにくく歪んではいたが、あえぎともうめきとも思える、悲しみの声はやがて、切なげなすすり泣きのそれに変つていったのだった。正にそれは歓喜の表情であった。

夫人は、私に見すえられている事さえも気付いてはいなかった。

何という事だ。私も、いや私なんかどうでもいいが、親爺は、とんでもない感違いをしていたのだ。女の口から言えない事。……

私は夫人の手足を解放した。

「おくさん、ひどい事をしてすみません」

応えはなかった。軟体動物のように、時々

体のどこかが弱々しく床をはっている。

“もっと苛めて欲しいですか？”

“いや。もう駄目よ”

“然し、あなたの体は、それを望んでいるんでしょう。そうと違いますか”

“……あたしは……あたしは……”

“なんです、なにをいいたいのです”

“あなたの、あなたの妻じゃあないのです”

“そうだった。夫人を官能の世界に遊ばせる

のは、私の役目では無かったのだ。腕時計をみた。長い時間に思われたが、まだ幾分かの

余裕があった。

“今日の事は、内緒にしますか？”

“良いんです、なにもかも仰つ有って”

夫人は、やっと起きあがった。二の腕を交互に揉みほぐしながら、顔は正気を取り戻してはてっていた。

“はじめは、とっても怖かったんです”

私との事ではなかった。

“括られて自由にされる、そんな毎日に死んでしまいたい程の屈辱感を抱いていました。

其の内に、だんだん慣れっていうんですか、両手は不要なものだと、自分で思うようになり

ました。恥をしのお話しますが、仮に主人が括る事を忘れている時でも、私は両

手を自分の意志で括っていました。それが今

では、主人の遠慮勝ちな行為に、私の事を思

つての上での事だと解っていないながら、なんと

なく焦々して、どうにも耐えられなくなった

のです。そんなとき、能美さん。あなたにお

会いしてなんとか相談に乗って欲しいと、そ

ればかり考えるようになりました。でも私が

そんなみにくい女だって事を知られたら、そ

う思うと、どうしても口に出す事が出来なく

て……”

“解りました。おくさん。もうなにも仰つ有

らなくて結構です。親爺には僕から上手く説

明します。任せといて下さい”

“羞かしい姿を、お見せして……”

“そんな事はない、親爺がうらやましい位で

すヨ。じゃあ途中で親爺をつかまえます”

送ろうとする夫人を、押しとめて私は廊下

へ出た。消えていた筈の階下に灯りが点って

いる。親爺だな、私はそう思った。面倒だが

もう一度外へ連れ出す必要がある。灯りは、

事務室のそれだった。階段を降り切った処で

私は立ち止った。こちらに背を向けて、すわ

っている女。まぎれもなく雅代だった。

⑤ 示 談

“其んな処で、なにしてるんだい”

“べつに……”

ショートカットされた、ヘアスタイルを見

下ろす位置に私は立った。

“いつごろから、そこにいるの”

“さあ、二十分ぐらいになるかしらん”

平然としている。此の娘はなぜ、どうして

此処へきたのか、考えをめぐらすのに時間が

かかった。

“雅代さんは、どうしても長い髪にしないの”

“ながい髪？”

“その方が似合うと思うんだがなあ”

“だって、流行やもん、しゃあないわ”

律子夫人と違って、夫人と同郷の癖に、雅

代はときどき大阪弁を使う。若いから順応性

が早いのだろう。

本人が自分の意志で、此処へ来る筈はなか

った。普通なら表戸は鍵が掛っている筈なの

だといって律子夫人が呼び入れる訳はない。

とすると。私はフィツと親爺と、此の娘との

関係をうたぐってみた。有り得ない事ではな

い。秘蔵の写真や奇クが、雅代の手によって

掃除の時などに、動かされた形跡がある。と

親爺にきかされた事がある。つい、さっきも

とり菊で、あの娘には素質がある。ときかさ

れたばかりであった。

「あんた、親爺さんと親しいのか？」

「おじさんと……あたり前やんか……」

「いや別の意味でさ。つまり抱かれた事があるのかって訳だ」

「あほな事いわんというて」

始めて、まともに私を見上げた。

「うちと、おばさんとは親戚同然なんよ。エツチな想像せんというて、そんな事出来る筈ないやんか」

「じゃあ、なんで此処に来た？」

「……」

「嘘を吐いても無駄だよ。俺には解るからね。それに親爺にも少しだが、きいたしね」

「そんな、それは別の事よ」

「別の事。なんだい、別の事って……」

雅代は一寸の間、黙りこんだ。

「あんた秘密を守ってくれる？」

「秘密か。ああ守るよ」

「一度だけおじさんに頼まれて、モデルになつてやったんよ」

「モデルって……」

「ほら、おじさんって変な趣味あるでしょ」

雅代は細い声で事情を話した。きいてみるとたしかに雅代には罪はなかった。親爺は自

分の性癖や、夫婦生活のあり方を、雅代に見抜かれている事を知っていた。そして、被縛者の心理を雅代によって試そうとしたのだ。ふざけた話かも知れなかった、だが親爺は真剣だったのだろう。

「おばさまの為だと思って、OKしたの」

「それで、結果はどうなったんだい」

「結果って、ただそれだけよ。おじさんかて変な事する筈ないもん」

「そうじゃあない。つまりだな、君は体験の結果を、なんて説明したんだい」

「なんてって、正直に言ってあげたわ」

「……」

「括られても痛いし、ぶたれたら、もっと痛い。そうだったわ」

私は、もう少しで吹き出すところだった。そんな事があったのか。そしてその為に余計に親爺は夫婦のプレイに自信を失くしていったのだろう。

「五千円貰ったの。絶対に秘密って約束で」

「じゃあ僕が五千円出したら、僕のモデルになつてくれるか？」

「駄目よ、絶対に嫌やわ」

「へえー、えらいはつきり断るんだな、少し片手落ち、と違うか」

「だって、おじさんの場合はちゃんとした理由があるもん。……あたしが実験台になつたげた事で、おばさまが、苛められなくてすむんですもの。ちがう？」

「成程、すると僕にも理由があればいいって訳か」

雅代は応えなかった。

「参考になる話を聞かせて貰ったな……そうだから、ドライブにでも招待しようか」

「ドライブって？ 車有るの？」

「ゴマンとあるさ。なんならハイヤー専用の外車を借り切ってもいいぜ」

「ほんと、ほんとに連れてってくれるの？」

「約束するよ。ところで肝心の事だけだね。」

君はどうして今夜、店へ来たんだ？」

くぐり戸の開く音がした。親爺だった。私は雅代の肩を軽くたたいて事務室を出た。どうせ親爺を問い詰めれば解る事である。それよりも、これからが大変である。

私の交通事故の示談が解決したのは、もうそろそろスウェーターを着ても可笑しくない程の涼しさの季節になってからであった。右手に残った傷痕や、慰謝料などの一切を含めて、参拾万程の大金を受取った時は、正直い

って、お事故さままの気分であった。終始骨を折ってくれた事故係に其の一割を差し出した時、彼は言った。

「加納さんにも、挨拶にいった方がいいんとちがうか。一応世話になったんやで」

たしかに其の通りであった。人の道を外さずにすんだ事を、私は彼に感謝した。

超特級の樽酒を土産に、私は久方振りに加納家を訪問した。夕食の終わった時間を見計らって行ったのだが、且つての係長は、おくさん相手にまだ、ちびちびとやっていた。おくさんは階段の下まで行って、

「芳子、芳子ちゃん、能美さんですよ。早く降りていらっしゃい」

と、呼んでくれた。芳子が小柄な体を二つに折って、小声で、

「お元気になられて、お目出度う」

そういつてくれた時、理由もなく熱いものが胸一杯にこみあげてきた。

「いつまでもハンドル握ってもおれんじやろう。どや内の事務所にでも勤めんか」

其の夜、土産の筈の樽酒に、酔い潰れて泊めて貰った。芳子と寝ている夢を見た。

あの夜の事件以来、親爺と私との映画ハントは急に疎遠になってしまった。私の方から

誘いにゆくのは面映ゆいし、親爺の方も滅多に電話をしてこなくなった。無論、怒っている訳ではないのだが、要するに私なんかと会っているより、例の方が余程楽しいに違いないからう。会社を替った関係で仕事の付き合いもなくなっていたし、それでいいのだとは解っていないが、なんとなく淋しい日々だった。そんなある日、突然親爺の方から電話があった。

「店の慰労会をやったなあ、今、引揚げてきたところや。なんしろ未成年が多いやろ、わいが酔っ払う訳にもいかんで、飲み直しをやっているとこや。すぐ出ておいで」

例によって一方的に言うだけ言って受話器を置いた。飲み直しの相手ならおくさんで間に合うでしょう。そういつてやったのだが。

到着したのは八時を少し廻った頃だった。

従業員慰安の為、本日臨時休業仕候。そんな貼紙がしてあった。人を呼びつけておいて内から施錠されていた。ベルを押すと雅代が出て来た。いきなり夫人に会うよりも気が楽だった。

「能美さんて、案外うそつきなのね」

「……」

「ドライブ連れていくって、いい恰好いうと

いて、ほんまに信用でけへんわ」

「嘘なんかいうもんか。一寸おくさんに会い辛い事情があつてね、きにくかったんだ」

「知ってるわ。でも、あたしに電話位してくれてもええやんか」

「いやにからむね、少し酔ってるな」

「酔うてえへんわ、あんたの顔みたら急に文句いいとうなってるん」

「よし解った。今度の公休日に実行する、いっただ」

「おばさんに話してくれたら、いつでも」

此の娘もなかなかの曲者である。ちゃんと伏線をひいておく積りらしい。まあいいや、懐ろも温かいし、一日位お守りをしてやってみようという事はない。私は手帖を繰ってみた。非番と公休が四日後に重なっている。其の日に決めた。

雅代に導かれて応接室に入った。

「其の節はどうも」

親爺よりも先に、私は夫人に一礼した。

「おばさま。能美さんがドライブに連れていって下さるって」

「そう、嬉しい事ね。雅ちゃん、楽しみにしてましたのよ。その節はよろしくね」

なんとなく、その節は、にひっかった。

「やめといた方がいいんとちがうか？ 怖い
でえ」

「へっちらよ。おじさんとちがうもん」

親爺と夫人が、顔見合せて苦笑いした。

⑥ 椿 温泉

約束の日の前日は、朝昼ぬきで布団の中にもぐりこんでいた。空腹に耐えかねて起き出したのは三時を回っていたろうか。入口にハ

ガキが一枚放うりこんであつた。芳子からの便りで、父が人事課長に昇進した事に重ねて

是非帰職して欲しいという事が、係長の代筆みたいに、極めて簡単に認められているだけだった。がそれだけでも私には嬉しい事だった。芳子は、余り多くを語らない。泊めて

貰った夜も私達は全く、と喋っていい程言葉を交える事はなかった、にもかかわらず私は

芳子が私の無謀な行為を許す気持を全身で表わしてくれているのを読みとっていた。客間にしつらえられた寢床に、酔った体を横たえ

た時、私は芳子の手を握りしめていた。飯をばくつきながら、私にはどうしても忘れ切る事の出来ないあの日の出来事が、走馬灯のよ

うに、うかんだり消えたりしている。
「なぜとどめを刺さなんだんや……」

汚ない表現かも知れないが、親爺の言った事が、今更ながら悔いられるのだ。

「いやです。こんな姿で、こんな姿でなんてあんまりです」

そういつて、芳子は号泣した。あの時、憎

しみをこめて振りおろしたベルト。本当に芳子は、あの屈辱を、誤解が生じた出来事とし

て忘れてくれているのだろうか。
「おなごはな、自分の総てをさらけだした時

がおわりなんや。そんなときにあんたのものになったのも同然なんや。それをまあ、なんちゅう馬鹿な事をしてもうたんや」

理由もなく、私は一人で首を振った。たしかにあの日の私は狂っていた。そして、もっと悪い事は、数カ月を経た今の私は、もっと狂ってしまったているのだ。仮に芳子があの事を忘れてくれているとしても、私は又、同じ行為を繰り返すのに違いない。

散髪に行った。明日のドライヴが芳子とだったらどんなに楽しい事だろうに。そんな事が、頭に浮かんだ。九つも年下の雅代の相手は、自分で言いだしておきながら、折角の公休を無駄にするのも同然だった。アパートに

帰ると、二度程男の人から電話があったと知らされた。会社にダイヤルしてみたが違って

いた。他に心当りはない。親爺からは、あす雅代を連れに行くので、電話のあろう筈はない。そうは思ったが念の為に掛けてみた。

「能美さん、御免なさい。ええ主人ですの。

実は、主人が急に無理な事を言いだしましたの。御迷惑でなかったら、あす、御一緒させて戴けないだろうか」

「ふうむ……」

私は、うなった。

「おくさんもですか？」

「はい。……無理ですかしら」
「つまり、その。私の監視が目的ですか」
「とんでもありません。監視だなんて」
「私は構いません。処で親爺いますか？」

「はい、今よんで参ります」
ドタドタと足音がした。酔っている時の歩き方だった。

「やあすまん。どや、かまへんやろ」
「あんた、なんのこんたんがあるんです」
「コンタン、とんでもない。知ってのとおりや、女に甘いんでなあ、頼まれたら、よう断われへんのや」

「誰にたのまれたんです」
「もちろん、かあちゃんやがな。ドライヴな

んでしゃれたもん、ようさせてやれんやろ、

此の際、便乗させてもらたろうたんや”

私は、親爺の言を信用する事にした。

“其の代り費用は、そっちもち、ですよ”

お蔭で二、三万円は得をする。私にしても好都合だった。

翌朝。七時きっかり店へいった。親爺も夫人も和服だった。雅代だけが、ブラウスにスラックス。髪はネッカチーフで蔽うて、サイクリングにでも行くような軽装だった。車に納まると、なんの事はない、何処かの社長がお妾さんと、その妹を連れておでましになるような、そんな感じであった。留守を頼まれた番頭と、私こそいい面の皮だった。

“さて、何処へ行きます”

“まだ、決めてえへんのかいな”

“私は、海がみたい”

“おくさんは?”

“海でも山でも。能美さんと雅ちゃんのお供ですもの”

“じゃあ、海と山のある処にしますか”

“早く、早く行きましようよ”

私は、アクセルを踏んだ。

“なんや、もうエンジン掛ってるんかいな”

“どうやら親爺もフォードは初乗りらしかった。”

国道二十六号線を突っ走って、和歌山を抜け白浜を通り越して、その奥に、椿という名の温泉があった。最近増築されたばかりという、椿という名のホテルに到着したのは、丁度昼食の時間だった。車中、ポットの日本酒で、御機嫌の親爺には構わずに、私はビールを三本空けた。帰路につくまで眠りたかったが、雅代に誘われて海に出た。室の窓から景観は一望だったが、直接汐水に触れてみたいと雅代は言った。戸外は肌寒い位だった。岸壁に沿って、二時間、私達は歩き回った。

“もうそろそろ引き揚げてもいい頃ね”

ひなびた漁師町を歩きながら、雅代が言った。

“おばさま達、なにしてるかしら?”

私は思わず振り返った。此の小娘は、主人夫婦の為に、寒い汐風の中を跳ね回っていたのだった。其んな雅代の心使いも気付かずに親爺は、泊る。と言い出した。

“冗談じゃあない、僕は帰りますよ。斯んな

山の中で膝小僧抱いて寝るなんてくだらんですよ。第一、寝ている間も車代は取られるんですからね”

“わいが払うがな。減多にない機会や、とまらしてえな”

夫人は縁先に腰をおろして知らん顔をしていた。女の図太さみたいなのを、私は感じた。なんとなく嫌な感じだった。

“とにかく、私は仕事もあるので帰ります。

三人で泊って下さい、それなら良いでしょ”

“あたしも帰る。だって来る途中はおばさま達にあてられっ放しだったんですもの”

それであっさり話は決まった。

五時半に帰路に着いた。二人きりになるとなんとなく恋人どうしの気分がするから不思議であった。私は改めて雅代という娘に女を感じはじめていた。

“眠くなっちゃった”

その女は私の肩に額を預けて、居眠りをはじめた。さっきまでの跳ねっかえりとは別人の横顔だった。ふと私は、髪の手で鼻の頭をくすぐられて、意外な事を発見した。

“雅代さん、髪形の変わったね”

“うん。だって仲々伸びないのヨ、二、三年

はかかるんやって”

“へえ、大変なんだねえ”

返事はなかった。本当に眠くなったらしかった。それにしても脈はある。

私は駐車すべき適当な場所を物色しながら車をゆっくり走らせた。山手の方に宅地造成

地ダンブカア入口の標識がある、私は思い切
ってハンドルを右に切り凸凹道に車を入れて
みた。勘が当たった。山の中はきれいに切り拓
かれて、大きな学校の運動場位の広さがあっ
た。木の間から海の彼方が望めるきりで、無
論、此の時間此の山中に人の気配がある筈も
ない。絶好の場所であり、チャンスでもあっ
た。少し可哀想な気持ちもした。だが私の為
に髪を伸す気になったのであろう雅代を、頂
戴しない法はない。私は雅代を揺り起した。
「なあに。あら、ココどこなの」

雅代は、右側の窓を開いて外を見回した。

冷たい風が吹き込んできた。

「雅代ちゃん」

振りかえるのを待って、私はいきなり抱き
すくめ、強引に唇を奪おうとしたが、両手で
烈しく押しかえされた。突然で驚いたに違ひ
ない。そう判断して、表情を柔らげておいて
から、もう一度同じ行動を繰り返した。結果
は、全く同じだった。簡単に許す、そう思い
込んでいただけに、此の抵抗は意外でもあり
心外だった。急に興がさめた。

「俺が嫌いなのか？」

「いやじゃない……」

「そんならキス位させろ」

「駄目」

「なぜ駄目だ？」

「なぜでも……」

持ち前の短気がムクムクと頭をもたげた。

「俺に恥をかかすのか」

私は、ダッシュパンの蓋を開いた。どの車
にも、小指程の太さのロープが常備されてい
る、それを取り出すと、雅代の鼻先に突きつ
けた。

「なにをする気なの？」

「知ってるだろ、お前のおじさんと同じ事を
するのさ」

「……」

「嫌だというんなら縛ってでも、キスして
やる。どうだい」

「縛られたりせえへんわ」

私は無言で三度目の攻撃を開始した。雅代
は両手で顔を覆うと、唇を死守せんばかりの
意気込みをみせた。それが反って好都合だっ
た。遮二無二、両手を引きはがすと右手で一
掴みにしておいて、手早くロープを捌く。眼
の前で手首が括り合わされるのを、あっけに
取られた、といった表情で、雅代は寸時の間
見つめていた。簡単に縛り終って、私は照れ
隠しにピースを取り出した。斯んな場合、な

んとなく次の行動に出難いものだ。其の瞬間
の隙を雅代は見逃さなかった。いきなり両手
で私をつきとばすようにすると、扉を開いて
車の外へ転げでた。慌てて私はロープを掴ん
だ。五米程駆けだした時に、なにかのはずみ
で扉が閉った。車体と扉に細いロープが喰い
込んで、雅代は其の場でつんのめった。

「どうした、どこまで逃げる積りだい」

「……」

「こんな山の中で、逃げだしたって始まらん
ぜ。さあ戻っといで」

「いやや」

「じゃあ、どうする」

「走ってでも一人でかえる」

「ふん、勝手にしろ」

私は煙草に火をつけた。もうあたりは暮れ
かかっていた。

雅代は、齒でロープを解き始めていた。私
は又、慌てなければならなかった。助手席の
扉をあける訳にはいかなかった。ロープを引
きずって下の道路までかけおりられては大変
だった。ズック靴だから其の可能性は多分に
ある。私は左側の運転席へ急いで体をいれ替
えようとした。その時だった、腕がふれて、
ノークラッチのギヤーが入ったのは。

車が動き出すと同時に、雅代の姿が後部へ消えた。当然の事ながら歩き出さねば横転する筈だった。私の心の中にある残忍性は、その時から、車と同時に始動を開始したのだった。ゆっくりとアクセルを踏むと、なにか、わめきながら走っている雅代の姿がバックミラーの視界に入った、両手を胸元に抱えて、ロープがなかったら、何の変哲もない、少し変ったマラソン選手が併走しているのどこにか似ていた。私は、スピードを増した。きっちり三周まわって停めた。車を降りて近づくと、両手を前に差し出した俣、突っ伏してしまっていた。全身が波浪のように、肩先から足元へと烈しい喘ぎを繰り返している。私はゆっくり馬乗りになって縛しめを解いた。それで解放する気は毛頭なかった。親爺のいったようにとどめを刺さねばならないのだ。血のにじみだしている手首を、無情に後手に結び直した。肩先に手をかけると力任せにブラウスを引剥いでやる、手首のところに束ねておいて、ブラジャーも左右に外した。

“かんにん……して”

始めて雅代は哀願した。

“よし、勘忍してやるから立て”

私は立ちあがって、縄尻を引いた。膝では

って、ヨロヨロと起きあがった。私は前に廻った。汗と泥にまみれた肌を、ハンカチーフでぬぐってやった。こんもりと盛りあがった鉄砲乳。小麦色の肌が美しかった。

“どうだ、俺の云う事を聞くか?”

“……”

“まだ観念しねえんだな”

なにかの映画できいた様な台詞だった。型の如く乳房の上下を括りあげると、顎に手をかけて顔を仰向けた。突然、雅代は、ポロポロと涙をおとした。

“俺のいう事をきくといえはいんだ”

“あんたが、あんたが悪いんよ”

“……”

“あんたには好きな女があるんやろ”

“誰がそんな事をいったんだ?”

“お、おばさん……”

“おくさんは俺の事がきらいなんか”

“ちがう。好きな女のある人を、好きになっ

たって辛い想いをするだけだって……”

“俺には、そんな女はいない”

“ほ、ほんと”

“俺のいう事をきくか?”

“はい、いう事をききます”

“よし、そんなら車まで、そのまま歩け”

“はい”

今、私は、鬱陶しい毎日を送っている。雅代との夫婦生活を後悔してるのかって? そんな事ではない。親爺と余り遊べないのである。奇クも大っぴらに読めないのだ。そして壁に貼った数々の責め絵も貼がされてしまった。責め絵のある関係。

それを思うと、なんとなく、鬱陶しいような気がするのだ。雅代は今、心地よさげな寝息をたてている。

私がなにを書いているのか無論知らない。枕元には、いつものように、赤い細紐が用意されている。その寝顔はあどけなく、細紐をまとっている時に見せる表情を拾うのに骨がおれる。私の残忍性の上に腰を据えた安堵の心境か。

これで私の拙ない体験記を終わります。

芳子の事。もういわないで下さい。夫婦プレイを軽蔑していた筈の私が、細紐を用意しているのは変だろうって。でもね、人間、環境が変れば、いくぶん考えが変る事だってありますよ。

(終)

私のマゾ雑記帳

馬場好男



○

映画でよくキスシーンがあるが、戦前の日本では到底、考えられないことであった。

戦前は、アメリカ映画のキスシーンさえ、カットして上映されたものである。

戦後「悲しき竹笛」という映画で、若原雅夫と奈良光枝が始めて接吻なるものを行ったが、これは洋傘に、いざという時、助けられて行ったものだが、それでもぎこちない姿態を現わしていた。

ひとり都の たそがれを

思い悲しく 笛を吹く

ハア 細く悲しき 竹笛なれど

こめし願いを 君、知るや

と、全く歌の通り哀れを感じる悲しき、情

なき接吻であった。

アメリカ映画にあるような、スマートで荒々しいキスなどは、とても思いもよらなかった。尤も、アメリカ人なら普通だが、日本人だと、観ている日本人が恥ずかしくなったよ

うな、変形的な感覚もあった。

それが戦後二十年を経て、日本人の誰もが此のキスというものに、ごく自然の行為としてそれほど顔を赧らめるようなこともなくなってきた。フランスやアメリカのように、さすが人前ではまだまだのようだが、これで明治生れが姿を消せば、日本はアメリカのようになってしまうのではないかとさえ思う。

(昭和生れにも、封建性、強き者もあることはあるらしいが)

さて、私のいわんとすることは、此のキスについてのことではない。「奇譚クラブ」が出て二十年以上になるらしいが、此の雑誌（あえて文献誌というか）にしても二十年の歩みをふり返ってみると、発刊当時から現在には、みる人の気持ちに隔世の感があるのではないかと思う。

事実、今から十数年前は、女性をムチで打つといえば、ヘンタイ。パンティに顔を埋めたといえばヘンタイ。女性の足にキスをしてもヘンタイ、とにかく、ちょっと変わったことはみんなヘンタイであった。ヘンタイとカタカナで書くからそうでもないが、「変態性欲者」と書かれてくると余りよい感じのものではない。そして、マゾとかサドとかいう言葉を知る人も余り多くなかった。

ところが最近はどうだろう。マゾ、サドなど十代の若い女性でも知っているし、バーやキャバレーのホステス、トルコ嬢などは大半がこれを知っている。

梶山季之の小説には、親切丁寧にあらゆる形でヘンタイ行為が出てくるが、実に興味本位でそれほど嫌らしいものはない。

婦人雑誌でさえも、性器接吻など、刻明に方法や心理などを書いているが、マゾ、サド

に通じるものがたくさんある。

映画は当然のこと、テレビにも堂々と出てくるものがあって、いささか我々の方が驚くことさえもある。

誠に有難い世の中になったものである。ひと頃、流行したエッチなる言葉も、ヘンタイの意味をこめたものが、自分から「俺はエッチだぞ」と堂々といえる愛称？にまで変せんしている。

「気違いと天才は紙ひとえ」というが「正常とヘンタイ」もその通りとなった。まして、次のような事で、その変遷の、例としてはいけないと思うが、トルコ風呂などは、一番よくわかる。

以前は、トルコ嬢に「自分の胸の上に馬のりに跨ってほしい」といっても、ほぼ七、八人に一人がそれをやってくれた割合だが、最近では平気で、殆どどのトルコ嬢がやってくれる。彼女らは、そうやって男達を満足させることを知っているのだ。いや、金をとることを……。これらの行為が普及したというのか、或はそのような人種が多くなったというのであろうか。とにかくK・K誌に大先見の明があったのか、或はむかしヘンタイと劣等意識にあけくれた人たちに、先進的な風俗意

欲があったのかは別として、全く嬉しいことと相成った。

○

昨年の夏頃、ニュース映画の毎日ニュースに、ちょっとおもしろいのがあった。

題して、男に「ど根性」を教える女性。とあって、ニチボー出身の半田百合子さんが、京都産業大学バレーボール部のコーチとして、部員の男共を鍛えぬく様子、大松監督にしごかれたまさを再現して愉快だった。あとは、大の男をけりあげている少林寺拳法初段の高校生、初山鈴子さん。宮城県の男子高校生に剣のさばきを指導するフェンシングコーチ、佐々木まさえさんの活躍ぶりである。

戦前の女性にはとても見られなかったカッコのよさで、M族男性のまさにスイエンものであった。

戦争中、映画で「小太刀を使う女」という時代劇があった。主演は水谷八重子で、バツタバツと男をなぎ倒していた。修身のかたまりのような映画ばかりを作っていた頃にしては面白かった。此の頃、私が子供心に惹かれたのは、杉狂児と、朝雲照代の主演した映画で、題名をちょっと失念したが、朝雲照代の乗馬姿が妙に脳裏にこびりついた。

颯爽と馬に跨ったスチールを、私は何枚も買いもとめて、ひそかに机の中にしまったものである。この乗馬姿はブルジョア的なものであったが、うすよごれた乗馬に、高峰秀子主演の東宝作品「馬」があった。

山本嘉次郎監督で、当時、助監督の今をときめく黒沢明と高峰秀子のロマンスが伝えられ、秀子の母が「助監督なんか」といって求婚を蹴った話があった。

黒沢明は今や世界的監督であり、高峰秀子が助監督の松山善三と結婚したのは奇しきものであった……が余談はさておき、東北の貧農の田舎娘にふんし、モンペ姿で裸馬にまたがって乗り廻していた少女時代の高峰秀子は美しかった。

私が小学校五、六年生の頃、郷里から従妹が出て来て、もう三十年も前の映画で、松竹の「男性対女性」をみて曰く。

「東京は女のほうが強いの、だって女の人、男の人のほおをぶったよ」と幼い顔をびっくりさせて、さも新しいものをみつけたような素ぶりであった。

今の桑野みゆきの母親、桑野道子などが出演していた映画で、恋のサヤあてから、お嬢さんが青年のほおを平手打ちして去るシーン

を見て従妹は驚いたのである。

戦後は、女性と靴下が強くなったといわれる通りの世の中だから、映画などは面白いものばかりとなった。

気をつけていると、嫌なものもあるが多かれ少なかれM男をよろこばせるシーンや筋は多い。今まで本誌に出ていたのと、或は重複するかも知れないが、気のついたものだけでもこんなにある。

○

◇松竹「女性の勝利」 昭和二十一年

内容は男の身勝手なために罪を犯す女の話だが、女弁護士になる田中絹代が、男検事を追いつめてゆくところと、題名が大変よい。

◇大映「婦人警察官」 昭和二十二年

小夜福子、轟夕起子が主演したが、婦人警察官の活躍がおもしろかった。

◇大映「男を裁く女」 昭和二十三年

山村聡と折原啓子、内容は題名通り。

◇大映「痴人の愛」 昭和二十四年

この分は前回に述べてある。

◇大映「密林の女豹」 昭和二十五年

荒川さつきが女ターザン、駆け出し時代の小林桂樹が、この女ターザンに散々いじめられる。最後は結ばれるが男の胸の上に馬のり

になる（然も半裸で）のは、この映画がはじめてではないかと思う。

◇大映松竹「自由学校」 昭和二十六年

両方共、五月五日に封切するという競争となったが余りMむきでない。はじめの方がおもしろいというだけ。

◇大映「十代の性典」 昭和二十八年

映画の中にはなかったが、スチールに南田洋子の高校生が同級生の男の子を、原っぱで馬のりになっているのがあった。この映画は続、続々と続々つくられた。

◇東宝「魔子恐るべし」 昭和二十九年

根岸明美の肉体美がよく、まさに我々むきのものであった。

◇松竹「青銅の基督」 昭和三十年

山田五十鈴の扮する遊女が、滝沢修の神父の裏切りをなじり、素足をさし出して指をなめさせるシーンがあったが圧巻であった。

「裏切者は犬だよ、犬ならさア、この足をおなめ、おなめッ！」

ときめつけ、神父は、その足の前にひざまずいてなめる。

◇東宝「猫と庄三と二人の女」 昭和三十一年

森繁久弥と香川京子、それに山田五十鈴だからおもしろいに決まっているようなもの、原

作が谷崎潤一郎ではいうことなし。

◇松竹「禁男の砂」 昭和三十二年

泉京子がグラマー女優として売り出したもので、海女の生態を描き、瞳麗子と共に気の強い役で、二人の大格闘はみものであった。

◇東宝「ますらを派出夫会」 昭和三十二年

柳家金語楼、有島一郎らが主演、シリーズ物としてつづいたが、いわゆる女中ならぬ男中なので、痛快であった。

◇大映「リングの女豹」 昭和三十二年

女レスラーの記録映画だが、劇映画と同じ興行成績をあげた。

映画の中で、レフリーの判定を不服として女レスラーが男のレフリーを投げとばしてこき廻すシーンがあった。

◇松竹「女ざむらい只今参上」 昭和三十三年
美空ひばりの時代劇、胸のすくようなタンカを吐いて男共をなぐり、きり殺す。

◇東宝「男性飼育法」 昭和三十四年

森繁と淡島コンビ。
いつも男が負けていた。

◇大映「氾濫」 昭和三十四年

ピアノ教師の浮気男になる船越英二が、出世のために手段を選ばずで、教授の娘を犯しその母親までも犯してしまう。夢中になった

母親が、船越のアパートを訪ねると、そこでは若い女を引きずりこんでお馬ゴッコの真最中だ。

浮気の罰として、グラマー女に部屋の中を十回這いまわるよう命令されて、這いまわっている時、母親が入ってくる。

女の馬になった男が、第三者に見られるシーンにひどく私は興味を覚えた。

◇大映「痴人の愛」 昭和三十五年

これも前回に述べてあり、最高のM族映画であった。

◇東映「ずべ公天使」 昭和三十五年

続篇も出たがズベ公大暴れでおもしろかった。小宮光枝や星美智子がズベ公になった。

◇東宝「青べか物語」 昭和三十七年

左幸子の芸者が、森繁久弥の小説家をおし倒し、胸の上に馬のりに跨って、今夜はハデに遊ぶか遊ばないかと責めるところがある。

それから余りMには関係ないが、茶山花究と乙羽信子の夫婦役で、夫の乱暴で女房の足を不具にしたことを終身、夫は後悔し、ふろに行くにも、遊びに行くにも女房を背負って歩き、炊事、洗たく一切を男がやる話もある。

◇大映「癡癡老人日記」 昭和三十七年

若尾文子の若妻に、老父の山村聡がはれぬ

き、若尾の足にキスしたり、胸に抱いたり、甘えたりで大変であった。

◇大映「温泉芸者」 昭和三十八年

叶順子や三原葉子がマッサージ娘になり、助平客の伊藤雄之助の頭の上に、三原葉子が半裸の姿で、お尻をのせるシーンがあった。大傑作！

これはほんの一部分であるが新東宝が制作した「女真珠王の復讐」「鏡山登の女仇討」「戦雲アジアの女王」「暴力五人娘」などもよかったし、中島そのみ、団令子、重山のり子のお姐チャントリオも、三人がそれぞれのボーイフレンドを馬にして跨りのっているスチールがあった。

○

毎週木曜日の日本テレビで、午後十時三十分より『おしゃれジョッキー』という番組がある。

三遊亭円楽が

「さよふけて、ねまきのままのうたたねに……」と名調子で喋りながら歌やおどりのゲストを招く番組だが、このおしゃれジョッキーのトップシーンに、馬になった円楽に、三人の半裸のカーバーガールが、背中に乗っている。右と左から一人ずつ腰をかけ、そのうし

ろのお尻のへんに一人が跨っている。

お茶の間テレビにしては珍らしいものであるし、毎週必ず出てくる。然もカラー放映である。

テレビで思い出したが昨年九月八日、同じ日本テレビの『スター登場』で、『日野テル子です、今晚は』というのがあった。

この番組は、高橋圭三アナの司会で、毎週スターを登場させて主役とし、芸能、スポーツものや、各界よりゲストとして出席している先輩や友人らが、主役スターの仮想職業を選んで、その理由をおもしろおかしく喋るのである。

日野テル子に対しては、どの職業の男性と結婚すればうまくゆくかということが始まりこの中で二宮ゆき子が実に愉快な回答を行った。彼女は、日野テル子の結婚は実業家が良いとし、布団屋さんがいいというのである。

何故なら、「おてるはハキハキして行動力が強いので、どうしても旦那さんをお尻にしたいしまう。その時、じかにしていたのでは旦那様の頭が痛いから、お布団をのせておてるのお尻にしていればよいと思います」とユーモラスな珍答に場内は大笑い、見ていた私は思わず胸がたかかってしまった。

日野テル子は、きれいにすいた長い髪に、大きな花をつけた姿で笑いこけていたが、案外彼女はそれ位のことにはやるかもしれない。

結婚相手の男を、豪華なジュウタンの上に仰向けにころがし、その胸の上にハワイのおどり子姿で馬のりになって、夏の日の思い出など歌ったらどんなであろう。

○

私の従妹に実に女丈夫がいる。

私とは同じ年だが、半月ほど私の方が早く生れたので従妹（妹）となっている。

実際は、私など足もとにも及ばないほどの実力をもっていて、従妹どころか、従姉が本当だと思っている。

その生活にしても、戦時中に十八才で陸軍将校の嫁になり、戦争が終わったら些細なことを理由にして此の元陸軍将校と別れてしまった。

戦時中、将校ともなると物質に不自由はしなかったが、戦後はからきし意久地がなくてちよっとしたことから従妹をマキで撲ったことが別れる原因となった。ただちに上京して建築屋と結婚し、家が出来るとこれとも別れ、サラリーマン、芸人と転々として現在は独りで『おにぎり屋』をやっている。

「まだ勤めの身かい、兄さんは……」とあおられるので私は余り訪ねないことにしているが、この従妹と私が小さい時の話である。近所に、どこにもいるガキ大将がいて私達と同じ年だったと思うが、いつも悪童連を集めては山に行ったり、街の中を駆け廻ったりしていた松太郎という子供がいた。

七、八才の頃だったと記憶しているが、松太郎が大将になり、六人の子供を引きつれて街のはずれにある小高い山へ遊びに来た。

男の子が松太郎を入れて四人、女の子が三人である。男の子の中には私が入っており、あまり松太郎と遊ぶのは好きでなかったが、気に入らないと、誰が見ていようと飛びかかって叩いたり、おし倒して馬のりになるので怖くてついていようなものであった。

事実、親の目の前で組みしかれるのは、子供心にとっても嫌だった。

女の子の中には従妹はいなかった……というのは、彼女の父、即ち私の父の兄は軍人で、転勤が多く、私の家の近所に越して来ただけであり、それである。

松太郎は、車のついたみかん箱にのって私達にひかせたり、馬とびをしたり、チャンバラごっこをしたり、何をやるにしても彼が大

将であった。

この日、カンカンと、太陽が照りつけている夏の季節であったが、青々と草の生えている小高い丘に来て、ガキ大将の松太郎が命令を下したのである。

「おい、女と男は別々に一列にならべッ」

松太郎は両手をあげて、いが栗頭を左右にふりながら、男の子と女の子を三人ずつ並べた。その時、私の従妹が遊び仲間に入りたくて、やって来たのだ。

松太郎は大声で従妹を呼んだ。

「女が一人足りないのでもちようどよかった。

おい、お前はオレの前に来い」

従妹はおかっぱの頭を躍らせながらニコニコと駆けて来た。私は内心、従妹の前で家来のようになって松太郎に仕える姿をみられるのが恥ずかしくて困ったなと思ったが仕方がなかった。

この従妹がおてんばで、ケンカでは私はかなわなかったのである。数日前、ぎゅうぎゅうと馬のりされていじめられていたのだ。

「よし、これでいいや、いいか、女はそこへ馬になれッ」

仕方なさそうに女の子は私達の前に四つ這いになる。何も知らない従妹も黙って松太郎

の足許に四つ這った。

「男は女の馬にのるんだ」

松太郎は従妹の背に跨った。私達男の子はみんな女の子の背に跨った。

中には、男の子が乗っただけで、つぶれかかる女の子もいた。

「よし、一列になって前へ進めッ」

松太郎は、従妹のお腹を足でけり草の上を這わせる。ヨロヨロとしながらも女の子達は一生けんめいにふんばって、私達男の子をのせて、ノロノロと歩きはじめる。

「もっと早く歩くん、ハイドウ」

松太郎は従妹のお尻をてのひらで叩く。私達もおもしろがって、ハイドウ、ハイドウと声をかけて女の子のお尻をぶつ。つぶれると、腰をあげてやって又歩かせる。

「ねえ、もうやめて」

「ほかの遊びにして」

女の子達は悲鳴をあげて松太郎に許しを乞いはじめると、彼は一層、得意になってなかなか許さない。

それでもしばらくして

「よおし、馬は終り、みんなたてッ」

と彼も従妹の背から降りた。

「今度はほかの遊びをするッ」

松太郎が号令をかけたとき、従妹が不服そうにいった。

「ずるいわよ、今度は女が乗る番よ」

松太郎は従妹の顔を穴のあくほど見て

「ダメだ、女はウマになるだけだぞ、生意気なことをいうな。いいか、女は今度はそこへすわれッ」

他の女の子三人が、素直に草の上に正座したので、従妹も松太郎の前にすわった。

「男はズボンをぬいで。早くぬげ」

松太郎はいつの間にか小さな木の枝をもつてムチにしている。

松太郎がどなったのと、わあッと悲鳴をあげたのは一緒だった。

従妹が、松太郎めがけて組みついたのである。松太郎は、私と同じにズボンを下にずりおろしていたので足がうまくひらかず従妹につきとばされて、その場にひっくり返ったのだ。

「こいつめ」

松太郎は叫んだが、従妹は松太郎の腹の上に馬のりになって両手をしっかりとおさえつけた。くさむらで、脚が従妹の背をけりあげようとするがうまく動かない。

従妹は松太郎を完全に組みしいてしまっ

た。

「おい、こいつをやっつけろ」

松太郎は従妹の下で強がったが、私達はズボンをはくのに精一杯であった。女の子達も立上って私達といっしょに従妹と松太郎の格闘をこわごとと眺めた。誰も手出しをしないでじっと見ているだけである。

松太郎は顔をまっかにして、脚をふんばったり、はづみをつけて腹をつきあげるが、従妹はそのつど身体をゆらせながら、ヘビがしつように獲物をしめつけるように、松太郎を身うごきもさせなくなってしまった。

従妹は一言も喋らずに馬のりのままだ。

十分か二十分位たったのだろうか。

松太郎の目から涙が耳につたって流れたかと思うと、彼は声をあげて泣き出してしまった。私達六人は、それでも黙ったまま二人の姿を見ているだけであった。

○

ひざ上十センチ、ミニスカートと、スカートはますます短くなる。

短くなるだけあって、若い女性の脚の美しいこと。

電車などで、前の席に腰かけられるともう男共は目のやりばに困ってしまう。

私はその膝小僧に口づけし、足もとにひれ伏して足の指を口の中にふくみたくなるような衝動にかられる。

今にして思えば、ロングスカートは全くさえない服装だ。

テレビで古い映画を深夜劇場で放映しているが、長いスカートで出てくるので見る気がなくなる。

話は違うが、腰の線をハッキリさせるタイトスカートは、私は嫌いである。線そのものは好きなのだが、小またにちょこちょこと歩く姿は私はイヤである。女房が、旅行に行くので洋服をつくるとき、フレヤーにしようかタイトにしようかと数年前訊ねたことがあったが、言下に私はフレヤーと答えた。

私の持論としては、大きな溝もまたげないほど脚にくさりでもつけられたように、せせこましく歩くのは女性自身が、自分を人形化しているのだ。フレヤーで、大股に活発に歩くべきだとはいつているが、本音はかんたんである。タイトでは跨がってもらえないからである。

スカートが長かった頃、フレヤーのスカートを馬のりにされた顔の上にふわっとかけられるのはたまらなくよいものであった。

文字通りスカートの中の男である。

ところが、ミニスカートになると脚のひらきが自由である。ちょっと脚をひろげるとスカートはずっと上の方にたくしあげられて、健康そうなくましい太腿が出てくる。

前回にもちよつと紹介したエロダクションの「乳房の仁義」に、マゾの中年の男に、かつての名優、佐伯秀男がなって世のうつりかわりに驚いたが、この時、佐伯秀男の背にまたがる女性が、映画の中でタイトスカートで足がひろげられないので、

「これじゃ乗れないわ」

といってスカートをたくしあげて馬のりになるシーンがあるが、ミニスカートだとその必要はない。

このスカートこそM族むきのもので、これにブーツなどをはいたら女王様然としてしまう。バスト一六五、ウエスト八八、ヒップ九四のグラマー女性、ダイナミックなおどりの中にみられるおいろけは身ぶるいをするほどと評判の高いのが金井克子さんである。

NHKの「歌のグラウンドショー」は彼女の独だん場である。

このような女性の足もとにひれ伏して、ドレイの誓いを強制されたら永遠のドレイでも

よしである。

二年ほど前――。

用事で名古屋へ二カ月間で十五回ほど通ったことがある。

東京から新幹線で二時間だから便利なこと此の上ない。旅の恥は……ではないが私はトルコへとびこんで思わぬ拾いものをした。

そのトルコ嬢は千秋さんといった。

二十二才だといっていたが、よその例とは逆に私には十八、九才にしか見えなかった。

色の白い、中肉中背で、それでいてムッチリした肉体をしていた。

私はいきなり、マゾに興味のあることを話すと、私がしばられるのでは困るけれど、あなたが私に苛められたいというのなら、何でもしてあげるわよと、ねがったり叶ったりの女性であった。十人以上以上の美人で笑うと可愛い笑くぼが出来た。

はじめての時は、私の上にまたがってもらったり、タイル張りの浴室の中で、彼女を騎手にして私は這い廻ってみた。

「あなたのなら、おしっこでものめる」といったら

「この次にね」

と答えて、いたずらっぽい顔でいった。

「そつと缶ビールでももって来てよ。そしたらすぐ出るわ」

私は天にもものぼるような心地で、名古屋に続けて泊って翌日、缶ビールを三つもって行った。女王様のためならと、つまみまで買ってもらって。哀れな？　ことである。

女とは、悲しきものよ

男のままに

乗りつ乗られつ 通勤電車

などとヘンな歌をつくって、千秋さんは、「私は歌を少しやっているのよ」

と五つ六つ、たちどころに詠んでいたが、まともなものも二、三あって、わりと教養もあるんだなと思ったりもした。ビールをのんだ女性の神酒はまた格別であった。

あの特有の匂いも感じられないで、私の口の中に注ぎこまれる温水を一滴も残さず、息もつかずにのみ干してしまった。

そして此の痛飲がダブルヘッダーときて、私は名古屋に永住しようかと、年甲斐もなく考えこむほどの惚れようであった。

「この磨き砂をつけて、きれいに洗うんだ」千秋さんは、ベッドに腰をおろし、タバコをふかしながら、一生けんめい浴室の掃除を

する私に、いろいろと命令を下した。

「ああ、そのスミの方もね、ゴマかしたら承知しないよ」

嬉々として、スポンジに磨き砂をつけてはごしごしとタイルを洗うこの姿を、女房や子供がみたら何ということか。

死んだ父や、祖父母がどのような顔をしてこの有様をみているかと、あとになって考えはしたが、その時は無我夢中であった。

何回目かに、荒物屋で買った紐をもって行き、後手に背中の上の方で縛りあげられ、長すぎるままにグルグル巻きにされて、ふまれたり、馬のられたり、お湯の中につけられたりしていたら、紐がぬれて結びめが解けなくなり、腕や胸に紐がくいこんで苦しくなり、千秋さんもあわてて、ハサミをとりによくやらの失敗もあった。

千秋さんが忘れられず、私用に名古屋行きをつくったりしていたが「千秋さんは、やめましたよ」とその後いわれて、とうとう別れるハメになってしまった。ほかのトルコへ移ったのかどうかわからなかったが、夢がさめてよかったノとも思うこともあり、あのような女性にはもう逢えないだろうと、勿体なく思ったりしている。

(日本婦人部隊奮迅録)

虞^ぐ淵^{えん}の譜^ふ

黒

淵 嬰

一

昭和十七年一月。

モスクワ・レニングラードに対するドイツ軍の攻撃が不成功に終わった事は確実だった。北アフリカではオーヒンレック將軍のイギリス軍とロンメル將軍のドイツ軍が砂漠のシーソーゲームを反復していた。電撃戦は終り、持久戦段階が到来したように見える。

太平洋の危機は婦人部隊の犠牲的躍起に依り前年十二月初旬に一応回避された。緊張状態は未だ続いていたが西太平洋には上陸作戦を不可能にする季節風が吹き荒れている。

日本が開戦しなかった事で寧ろ失望したのはチャーチルと蔣介石だった。二人共、米

国を世界大戦に引き込む事で当面の重圧を免れようとしていた。ルーズベルトは参戦の計画を持っていたが、米国民は世論調査の示す如く戦争反対七〇%を占め、外部からの攻撃がない限り政府も開戦を強行し得なかった。真珠湾攻撃は联合国の為にこそ必要だった。

併し日本も内部に未解決の難問を持っていた。太平洋に開戦を期して展開した陸海軍の收拾。支那事変の名誉ある終結。失墜した軍

部の名誉回復。

米国が平和維持の誠意を示すか否かも重大な問題だった。

婦人部隊のクーデターは軍閥政治を痛撃した。併し民主主義に基く議会政治が復活したのではない。実権は依然として軍部の手中にあった。主戦論の代表東条から、より穏健な米内、山本系へと移ったに過ぎない。

石油の輸出禁止は緩まなかった。米・英・蘭の経済封鎖を受けた倭、重苦しい日米会談が続行された。一方、支那大陸では果てしな

い消耗戦が新年に入っても反復されている。

× × ×

昭和十七年一月十日。

河南省許昌城内。

三国時代、魏の曹操が首府を置いて以来の軍都である。京漢鉄道に沿い、棉花、小麦、胡麻、皮革、煙草の集散地として知られ、第一戦区軍の前進司令部が置かれていた。

「吾輩の眼を欺く事は出来ない。君が日本人である事は解っている」

絵に見る関羽のような美髯の偉丈夫が言った。呂公良中将だった。

「吾輩は日本の士官学校を卒業した。日本人の性質も日本軍の用兵も良く知っている」

厚い綿入の支那服を着た若い女性が一人、梁から吊られていた。両手は背に縛られ、爪先が辛うじて床に着いている。

「勇氣は認めてもよい。併し軍事探偵としては細心の注意が足らなかったようだ。麵を食べさせたら箸の中間を握った。中国人なら端を持つ。顔を洗わせたら手の方を動かして拭いた。足を調べたら母指と第二指の根本が丸く空いている。子供の頃に鼻緒のある履物を履いた証拠だ。これでも日本人でないと言

い張る気かね」

呂公良は馬鞭の先で女の顎を軽く突いた。縛られた女は僅かに顔を上げた。媒けているが彫の深い整った顔だった。大きな瞳で呂公良將軍を覗んだ。併しすぐ面を伏せた。

「専門の諜報訓練を受けてはいないが軍事知識を持つ者。婦人部隊の斥候だね。玉陽鎮では紅軍と対等に戦ったそうだな。昨年末は東京で叛乱を起し、軍部の内閣を倒したと言うではないか。共産党と日本軍閥の敵とあれば我々の味方だ。何故、友交の手を差し伸べて来ないのだ」

女は固く唇を噛んで一言も言わない。

「日本軍は霸王城の北で何かを企てている。黄河の大鉄橋は満洲から送られた重構桁で修理されつつある。新しい師団も到着したようだ。そのような際に婦人部隊の兵士が変装して許昌城に潜入した。目的は何だろう」

呂公良は椅子に深く腰を埋め、薄い微笑を浮かべながら馬鞭を玩弄している。

「潜入した人数は何人か。調査対象は何か。命令したのは誰で、日本軍の目標は何か。友交の証として教えて貰いたいものだ。勿論君の仲間は鄭重に迎えるでしょう」

女は表情も姿勢も変えない。

呂公良は言葉だけは温和に使いながら、鞭

を逆に把って女の肩を軽く突いた。

後ろの両手首は太綱で梁に吊られ、爪先が床に触れただけの両足首は揃えて縛られている。女の身体は手首と爪先を軸にして緩やかに回転した。

「言いたくないようだね。名も知られずに埋葬されるのを承知なら仕方がない。先頃も二人の男が此の城内に埋められた。拷問に耐えて遂に何も言わなかった。いや、名前だけは言ったな。一人は石川五衛門。もう一人は熊坂長範だそう。吾輩は日本語も日本人の氣質も解る。墓碑銘は此の名を書いておいた。惜しい事だ。名ある勇士が永遠に石川五衛門で眠るのだから」

呂公良はゆっくり立ち上った。吊られていた女の傍を通り抜けて去りながら、膝の下を蹴り上げて行った。女の身体が斜になると同時に、辛うじて床に触れていた爪先が宙に浮き、全身は一本の綱で完全に吊り下った。

「中国古来の拷問を教えてあげよう」

呂公良は扉の前で一度振返って言った。足音が遠退いた。後ろ手首の位置で吊られた身体は、一度床を離れると容易に垂直には戻らなかった。太綱の弾力に従って全身は回転運動を繰返し、爪先は必死に床を探ってい

る。肩の骨が音を立て、脂汗が流れた。女は誰も見ていないのを確かめてから始めて苦しそうな吐息を洩らし、自分に言い聞かせた。「婦人部隊の刈藻佳子は誰にも知られずに許昌城で朽ち果てます。死は恐れていません。只、盧氏城から登封にかけての偵察結果を報告出来ないのが残念です」

× × ×

一月十一日。

近衛師団司令部附の稔田大尉は転任辞令を受領した。

「第二十五軍兵站部勤務。輜重大隊長代理ヲ命ズ」

彼は首を傾^{かし}げた。近衛師団大隊長を予定されていたのに輜重大隊長とは意外だった。

「味噌担ぎをやれと言うのか。零落^{おちぶ}れたな」

婦人部隊叛乱兵の銃殺を押しつけられたり最近どうも運が悪い。

「第二十五軍とは何だろう。歩兵の俺に輜重をやらせる程だから余程の大作戦らしいな」併し鐵運が悪いのは彼だけではなかった。

実に二十箇の輜重大隊が同時に編成されていた。大陸軍と雖も輜重出身の将校を此の数だけ揃え得ない。待命中の将校は大部分がこれに廻された。南方に展開した諸軍を大陸に転

用する為の編成替えだった。

× × ×

一月十二日夜。

許昌城内。

刈藻佳子は地下室で椅子に縛られている。両手は背板の後ろで固く縛られ、両足は椅子の脚に縛りつけられている。此の椅子は丈夫な締具を持ち、坐った者の首を仰向けに固定出来るようになっていた。

「未だ話す気になれないかね」

呂公良が髭に似合わぬ作り声で言った。

刈藻佳子は眼を閉じて身動きもしない。

「二日間も絶食させたから温い食物をあげよう。トマトスープだよ」

兵士が二人現れた。湯気の立つ井を載せた盆を持っている。一人が刈藻佳子の口を無理に押し開けた。他の一人が漏斗のような器具を差し込んだ。確にトマトスープである。但し多量の唐辛子が混入していた。沸騰点に近い濃厚な液汁が唇も食道も灼きながら、溢れるばかりに注入された。

× × ×

一月十三日。

稔田大尉は宇品に居た。彼の指揮すべき輜重大隊は既に集結を終っている。併し検閲し

て驚いた。三十才を越えた予備役の応召兵ばかり。トラックは一台も無く、挽馬編成で平均馬令も十五才前後と見えた。

「軍の機械化が進んで輜重とは自動車隊だとはかり思っていたが余程ガソリンが不足なのか。或は自動車の使えない地方への作戦か」

× × ×

同じ頃。婦人部隊第一中隊は山西省北部の五台山で特殊訓練を課されていた。

昨年秋以来、支那語の巧妙な幹部級若干名が選抜され、北支方面軍の将兵と組んで陝西省、河南省方面の長駆偵察に潜入していた。残余は華北各地で後方勤務に従事中だった。

十二月末、東京で婦人部隊第三中隊がクーデターを起した。鹿島乗組の第二中隊が海軍の監視下に入った如く、第一中隊は北支方面軍に抑留される事となった。併し共に戦っている方面軍の将兵は此の措置に不服だった。

岡村寧次は監視と称して婦人兵を五台山麓に集め、大部分の武装を解き、労役の名目で山嶽訓練を命じた。

千年の伝説を誇る五台山は三千米の雲表に堂塔寺院が林立している。六百人の婦人兵は山上の房舎に収容され、毎日の食糧は山麓で支給された。厳冬季に娘達は糧米を担いで急

坂を登り、雪を掻いて北風の中に炊飯した。薪を得べき森林は山上に無い。空気の薄い高所では圧力不足して生煮えになり易い。婦人兵は鍋蓋に石を載せ、遠くから枯枝を運び、棉実油を滲ませて炊いだ。月余の苦行は婦人兵を有能な山嶽戦士に仕立て上げた。そして岡村大將が計画している次期作戦は正しく冬季山嶽踏破に依る長駆進攻戦だった。

一月十四日。

刘藻佳子は地下室で木製の枠に詰められていた。此の枠は人の大きさに従って調節出来る構造になっている。両手は背に縛られ、正坐して胸が腿に密着する迄押し曲げられ、両足首は手首と連結され、全身を鞆の如く締めあげられた上、首は丈夫な木柱に挟まれた状態で微動も出来なかった。

炉に石炭が燃えていた。これは暖房ではない。灯明りの中に物凄い刑具や拷問具が見えた。梭子。脚棍。脚鐐。匣床。訊杖等々。

「背中が寒そうだね。暖めてあげようか」

呂公良は薄い笑を浮べて言った。

刘藻佳子の服は背中が大きく引き裂かれていた。前に屈んだ姿勢なので背中が水平になっている。呂公良は金箸で灼熱の石炭を一片

把り上げ、縛られている女の背に置いた。

刘藻佳子の口から声にならない呻吟が洩れた。併し唇を噛んで耐えた。水分の析出する音と共に異臭が立ち騰った。

石炭の燃焼は人体に触れた程度では止まない。身体は枠に詰められて動けず、背の異物を振り落す事も出来なかった。

「未だ言わないね。それとも言えないのか」

刘藻佳子の口腔と舌は糜爛し果てていた。

一月十五日未明。

黄河北岸に待機中の第三十五師団が南へ渡って霸王城陣地に対する攻撃を開始した。奇襲を受けた霸王城は忽ち陥落した。

第十二軍が全力を以て出撃した。第三十二師団は東方から新鄭に迫り、第四十一師団はその南側に並列した。黄河北岸には第五十四、第一百十の二箇師団と公主嶺から移動して来た機甲軍其他の軍直轄部隊が残留している。

同じ日、漢口方面からは第十一軍所属の第二十七、第一百十六両師団が出撃し、武勝関から確山に向って北上した。七箇師団を投入し京漢線の貫通を狙った大作戦である。併しこれは一層雄大な進攻の前奏に過ぎなかった。

一月十六日。

刘藻佳子は固い台の上で四肢を引き伸ばされていた。傍では二十本の鉄串を焼く火が燃えている。

「修指甲を試してみよう。手足の指に一本宛爪の間に焼串を刺し込むのだ。これに耐えられるなら褒めてやってもよいぞ」

呂公良が合図した。二人の兵士が真赤に焼けた鉄串を把り上げて近寄った。

一月十七日。

第五十一師団が密県に向けて急追撃した。第一百十師団は密県南方を遮断した。第一戦区の二箇軍団は登封方面に潰走した。

一月十八日。

第四十一師団が早くも許昌城に迫った。

蒋介石は漸く事態の重大性を悟った。第一戦区軍司令官蔣鼎文に対して許昌城の死守を命じ、各方面から援軍を急派した。三羽鳥の一人、湯恩伯は十四箇師団を率いて登封附近の山中に前進潜伏し、南下する日本軍の側背を襲撃せんと策した。

一月十九日。

日本軍三箇師団が許昌城に攻め掛った。

呂公良は狼狽したが、それでも湯恩伯の来援を期待して防戦に努めた。

最早、刈藻佳子などに構ってられない。

日本軍は九一式野砲の放列を敷き、弾丸を惜しまずに撃ち掛けた。城壁が数箇所崩壊した。第四航空軍の九九式双発軽爆撃機が城内の軍事施設に対する爆撃を反復した。

× × ×

刈藻佳子は数日間、放置された体だった。

後ろ手に縛られ、両足には重い枷が嵌められている。着衣は裂け千切れて襦袢と化し、僅に垂れ下るのみで身体を掩う役も果たしていない。猿轡は噛まされていないのに物を言う事は出来なかった。発声機能が阻害されているらしい。縄目を自ら解く技術も心得ていたのだが、十本の爪を傷つけられては、それも不可能だった。地下室は暗黒。併し光が有っても見えなかっただろう。彼女の視力は半ば失われていた。

だが聴覚だけは働いていた。城内の喧騒。それが次第に増加する。軍隊の移動する音が漸次不規則になって行く。地響き。炸裂音。潮騒のような喚声が近寄って来る。

突然、大音響が頭上に鳴り渡った。閃光が一瞬網膜を劈き、硝酸ガスの悪臭が吹きつけ

た。梁が折れ、天井が崩壁した。刈藻佳子に残されていた聴覚機能が麻痺した。そして落下する瓦礫の底に一切が埋没し去った。

× × ×

一月二十日。

決死隊は六十米の外濠を泳ぎ渡って城内に突入した。守将呂公良は勇敢に防戦し、その部署に於いて戦死した。

× × ×

死守を誇号した許昌城は脆くも陥落した。

城内は荒廢を極めていた。呂公良の司令部を搜索していた兵士が地下室を発掘し、監禁されていた一人の女性を救出した。刈藻佳子だった。防空壕を兼ねた堅固な側壁が空気の流通を保って彼女の窒息死を防いだらしい。

自力では立てなかった。四肢も指も動かない。全身の皮膚は裂傷と火傷と凍傷で三重に搔き荒らされていた。それでも意志と記憶は健全だった。飢えているのに食物を辞した。消化器管は機能を失っている。残された体力は消費を許されない。刈藻佳子は焦った。意識の有る間に偵察結果を報告しなければ。

× × ×

声が出ない。

指が動かないので文字も書けない。

眼は僅かに見えた。文字表と地図を指しながら意志を伝えた。

遠く洛陽、盧氏城方面の偵察で重要な情報を得ながら、帰途新鄭附近で捕えられた事。

湯恩伯軍の物資集積所と秘密基地は盧氏城附近にある事。

湯恩伯自身は陝西から河南に進出し、側面攻撃を狙って山中に主力を埋伏している事。

× × ×

第十二軍司令官内山英太郎は許昌に於て情報を検討し、鄆城に南下する当初の計画を変更して揮下全軍に西方大旋回を命じた。

折しも湯恩伯軍は許昌側背へ接近しつつあり、第十二軍はこれと禹県、臨汝間で数回の遭遇戦を交え、第一戦区軍を粉碎した。敵は洛河に沿って敗走する。騎兵第四旅団は長水鎮に迂回先行して退却軍に大打撃を与えた。機甲軍の九七式中戦車は空軍の支援を得て華北平原を疾駆した。湯恩伯將軍は二十名の部下と共に農夫に変装し、闇夜に紛れて嵩山の奥へ逃亡した。

第四十一師団の先鋒は長驅して盧氏城に突入し、飛行場を奪取し、莫大な食糧、燃料と米國製武器彈薬の集積所を接收した。

古都洛陽は二月一日に陥落した。

× × ×
北支方面軍の岡村寧次が洛陽城に入った。第十二軍は西安に向って驀進を続けている。その後十箇師団基幹の第二十五軍が居た。司令官は山下泰文。本来マレー半島進撃を予定して編成された最強力の司令部である。関東軍の精鋭八箇師団を臨時指揮下に収め、兵力的にも最大を誇った。

塚田攻の第十一軍は十箇師団を以て宜昌を出撃し、揚子江に沿って溯航した。減水期にも拘らず小舟艇が不断の補給を行った。

本間雅晴の第十四軍が台湾から移駐して武漢地区を守り、総予備隊を構成した。

南方軍の寺内寿一はハノイに司令部を移し二箇軍を掌握した。飯田祥二郎の第十五軍はラオカイから昆明を衝き、今村均の第十六軍は竜州、南寧經由で柳州から貴州を狙った。杉山参謀総長が漢口から総指揮を執った。

支那派遣軍の畑俊六が占領地の諸軍を統べ第一軍は華北を、第十三軍が南京、上海を、第二十三軍が広東地区を守った。

関東軍は五箇師団に減少したが東条英機を新司令官に迎えて満洲国境を固めていた。

日本軍の大作戦が全姿を現した。参謀本部現地指導の下、四十箇師団が同一戦場に駆使

された。日本陸軍が一会戦に兵力の大部分を投入するのは明治三十八年以来の事である。嚴冬を衝いて動きだした貔貅百二十万。馬匹三十万。各種火炮五千。戦身装甲車千五百。自動車一万。四箇航空軍の飛行機二千。協力する海軍航空隊の飛行機千二百。三方面より分進合撃を以て蒋介石の首都重慶に迫った。

× × ×
二月二日。

病床の刈藻佳子に岡村寧次の感状が届けられた。見えない眼から大粒の涙が流れた。

× × ×
「稔田大尉殿ではありませんか」

婦人兵が駆け寄った。

「近衛婦人部隊第一中隊長船坂倫子です。玉陽鎮の生き残り。あの当時は兵長でした」
「同じく楯法子です。玉陽鎮時代は上等兵。現在は兵長です」

× × ×
二月三日。

稔田大尉は兵站部隊を指揮して鄭州城に居た。市内の治安は良好だった。岡村寧次の三悪通放「焼くな、殺すな、犯すな」が行き亘っていた。宣撫に当たっている婦人部隊も民衆に好印象を与えているようで、端境期にも拘

らず食糧、馬糧の徴発は順調だった。

× × ×
稔田大尉は考える。

——重慶進攻は好機を得た作戦だ——。

日本の軍事力は最も充実した時期にある。太平洋の開戦を期して南方に展開されていた全軍は鋒先を大陸に転じた。

時は嚴冬。関東軍主力を一時転用しても満洲を北から犯される危険は少い。

——若し此の作戦が行われなかったら国内を二分する内乱が起ったかもしれない——。

——併し不安も有る——。

漢口作戦がそうだった。蒋介石が更に奥地へ逃れて抗戦を継続したら何うなる。重慶を維持するには十箇師団入用だろう。支那には軍需産業地帯はない。兵器は悉く外国から来る。極論すれば蒋介石はロンドンから指揮してもよいのだ。

米、英、蘭の石油遮断は解除されず、飛行機、戦車、自動車、舟艇の燃料が足りない。

作戦は冬季に決行し、迅速に完了しなければならぬ。三月には満ソ国境の雪が融け、太平洋の季節風も止む。それ迄に支那事変を解決して関東軍と南方軍を元の配置に戻す必要がある。

——最大の難問は補給だ。——

今の季節に米も麦も現地では得られない。食糧を運ぶべき自動車は不足でガソリンは更に少い。挽馬輜重が主力となる。

——俺の任務は重大だぞ。——

× × ×

鄭州城外に六基の新しい墓標があった。

「偵察任務に斃れた私達の仲間です」

船坂倫子が説明した。

五人の遺骸が鄭州、洛陽間で発見された。

何れも後ろ手に縛られ、青竜刀の如き厚手の刃物で首を切断されていた。幾人かの切口は平滑でなく、農業用押切で斬られたものと判定された。首と胴は同じ穴に仮埋葬されていたが、容貌を見分け難い程に顔面を焼かれた者もあり、例外なく全身に鞭跡や火傷を留め被った拷問の凄じさが推察されたと言う。

六人目が刈藻佳子だった。任務を達成して

気が緩んだか、体力の限界に来ていたのか、破傷風に肺炎を併発して再び起たなかった。

「他に行方不明が四人。怖らくは駄目でしょう。玉陽鎮以来百十七名が失われました。尊い犠牲です。此の死を無駄にしてはなりません。支那事変を此の作戦で解決し、斃れた仲間達を安心して永眠出来るようにしてやりた

いと思います」

稔田大尉は進軍の寸暇に祈祷を捧げた。

× × ×

日本軍の躍進が続く。

第十五軍所属の第一挺身団が昆明飛行場を奇襲占領した。本来パレンバン攻略を目標に編成された落下傘部隊である。ガソリン数万缶を含む援蔭物資が押収された。此の燃料を利用して近衛師団の機械化部隊がビルマ・ルートを進出した。第三飛行集団は昆明飛行場に進出し、四川省爆撃を開始した。

第十六軍は柳州飛行場を占領し、貴陽に向って進撃した。香港攻略の為に集結された第一砲兵団の重砲百余門が凡ゆる堅陣を爆砕した。第九戦区軍は苗嶺の奥へ遁走した。

第十一軍は陳誠の主力四十万を蹂躪しつつ三峡、巫山の名勝を越え、白帝城に入り、遂に万県を奪った。重慶の大手門は破られた。

第十二軍は戦車と騎兵を先陣とし、西安平地を急進して秦嶺の麓に達した。これを阻止し得る敵は存在しなかった。障害は敵兵ではなく秦嶺の峻だった。秦嶺は北が絶壁、南は緩傾斜して四川に下る。陵線の確保こそ全作戦成否の鍵となる。戦車群は麓に停止した。第二十五軍の歩兵が替って先頭に立った。

絶対制空権下。陸軍航空隊は進撃前路に戦術爆撃を反覆し、航続力長大な海軍航空隊は成都、蘭州等の奥地に戦略爆撃を加えた。

× × ×

稔田大尉は輜重縦列を指揮して蜀の境を越えつつあった。

「明二棧道ヲ修メ、暗二陳倉ヲ渡ル。三国時代以来の陽動作戦だ。重慶を屠る必勝策だ」傍の船坂倫子を顧て言った。婦人部隊第一中隊六百人は彼の指揮下に編入されていた。

× × ×

三月一日。

第十八師団の前衛が広元に達した。重慶の裏門も破れた。秦嶺は遂に日本歩兵の健脚に屈した。十五箇師団が冬季に三千米の山嶽を踏破したのだ。ナポレオンのアルプス越えと雖も此の壮挙に比較すれば兎戯に等しい。

× × ×

驚嘆すべき大集中は百二十万の兵よりも三十万の馬だった。老馬に到る迄動員された。対応すべき五万の馬丁も老兵の再召集に頼らなければならなかった。現役の若い輜重特務兵は馬丁ではなく運転手だったから。老兵と老馬が大作戦を支えていた。

× × ×

稔田大尉は婦人部隊の挽馬を見ていた。

——陸軍の常用しない種類の馬だ——。

小型で余り強そうに見えない。最初は、女性向きに小馬ばかり揃えたのかと思った。確かに西安盆地の進撃では遅れがちだった。併し秦嶺に入ると驚く程早い。寒気にも強い。

「木曾駒です」

彼の大隊に一人だけ配属されていた輜重科出身の少尉が教えてくれた。

——源義仲の主力兵器だったな。信濃路から北陸道を踏破した木曾山嶽兵団の機動力は木曾駒の山地行動性に依存していたと言う。これは装備の勝利であって用兵の奏効ではないだろう。後に義仲は同じ軍隊を以て水島の水陸両用作戦に失敗した。京都平野では重戦車に相当する奥州悍馬に小型の木曾駒を正面衝突させて全滅した。木曾駒の特性を活用する為には山地戦に誘導すべきだったのだ——

強いのは馬だけではない。軽装の婦人兵は寒気を感じない如く活発に行動している。

高山の炊事法を心得た婦人兵が、温い食事を縦列の先頭から後尾迄給養して廻る。

× × ×

第十一軍は万県に入った。
第十二軍は広元を奪った。

第十六軍は貴陽に達した。

重慶三面包囲態勢斯くて成る。

嶮路を越えて四川平地に達した歩兵に、輜重が追及して弾薬糧秣の補給を終る時こそ、一鼓して蒋介石の本城を覆えず時である。

× × ×

山間に逃走潜伏していた四川軍の残兵が、輜重隊を見て与し易しと思ったか襲撃して来た。本来が歩兵の稔田大尉は寧ろ欣然として老兵や婦人兵を指揮し、敵を邀撃した。

六尺余もある敵将が青竜刀を振り上げて稔田大尉を目標に斬り掛けて来た。傍の楯法子は銃剣を以て只一刺しに大男を谷底へ突き落した。

× × ×

陳誠も、胡宗南も、湯恩伯も、旗を捲いて重慶へ逃げ込んで来た。

「重慶は守れません。関門を三つ共、破られました。日本軍を防ぐ兵力はありません」

蒋介石一人だけが厳然としていた。

「長期戦では必ず勝つ。重慶を失っても成都で、成都も陥ちたら蘭州で戦うのだ」

併し三箇の戦区軍は潰乱した。失った兵員

武器は少くない。第五戦区軍は老河口へ逃げ込んで出て来ない。洛陽・西安・貴陽・昆明

の四都市を一举に失い、重慶と成都も陥落が近い。残る大都市は蘭州だけだが甘肅省一帯には腸チフスが恐るべき勢で蔓延していた。それにも拘らず宋美齡は政府要人の一部と共に蘭州へ出発した。

× × ×

婦人兵が女学生のような歓声を発した。稔田大尉も峠に立って下方を眺めている。「霧ばかり。何処迄続いているのでしょうか」船坂倫子が言った。

視界の及ぶ限り霧の海が続き、秦嶺の峯々が乳白色の海に島の如く浮んで見える。

「冬の四川省は霧の霽れる事が殆んどない。だから稀に青天を仰ぐと『蜀犬日ニ吠ユ』という事になるのだ」

——此の霧の下にヨーロッパの大国より広い四川盆地が広がっている——。

× × ×

三月五日。

杉山參謀総長は全軍の進撃停止を命じた。

重慶では既に停戦会談が成立しかけていた。

× × ×

日支媾和の機会は今迄に幾度もありながら何時も不成功に終わっていた。併し今度は双方共、真剣に終戦を欲した。日本は太平洋問題

を抱え、蔣介石は共産党の勢力増大に悩んでいた。

× × ×

東久邇宮首相の内命を受けた興亜院総裁宇垣一成が重慶に飛んだ。陸海軍の飛行機は利用出来なかったから、宮内省に依頼して婦人部隊の九一式飛行艇を借り、棉津見洋子の操縦で揚子江に着水した。

媾和会談の相手には先ず張群が、次いで蔣介石自身が出て来た。重慶側は媾和条件を警戒した。宇垣・孔祥熙会談から四年経過し、その間の軍費も死傷者も少くない。更に首都重慶は今や陥落直前の態勢にある。故に宇垣が「基本的には昭和十三年と同じ」媾和条件を提示すると重慶側は驚嘆した。

一、満洲国の独立承認。建国十年を迎えた既成事實は動かせない。正式承認は重慶側の体面に拘るが黙認の形で諒解された。

二、内蒙古の自治。北支の特殊地域化。

内蒙古は重慶の主権下に自治が認められ北支に関しては日本側が譲歩撤回した。

三、内面指導に日本人顧問招聘。

四、全面的経済提携。

此の二箇条に重慶側異議なし。

五、南京国民政府との合同。

これは蔣介石の面目を傷つける条項だった。汪精衛は行政院長として復帰する事になった。併し彼は既に病んで実務を執り得ず、これを継ぎ得る政治家は南京に居なかったから、事実上は南京政府が重慶に吸収される事になった。

六、防共駐兵。最も困難な問題だった。蔣介石自身は若干地区の期限附駐兵を認める心算だったが米国の干渉が予想された。

米国は支那の独占を狙っていた。蔣介石は共産党対策の為に米国の武器が必要だったし彼の政権を維持する金融資本の確保には米国の財政援助が入用だった。

外交家の手腕を持つ宇垣は逆手を使った。

「媾和成立後、日本軍は即時撤兵を行う」

李宗仁や閻錫山が慌てた。日本軍が占領地から即時撤兵したら、その地盤を先に獲得するのは蔣介石系軍隊よりも毛沢東だろう。

宇垣は妥協案として期限附の段階的撤兵を提案した。二年以内に大部分の占領地から撤兵し、南京、上海、北平、天津、青島、海南島、内蒙古に日本軍を集結させる。三年以内に南京、北平、青島を返還し、五年以内に上海、天津、海南島から撤兵する。

これは事実上の五箇年駐兵協定だった。そ

して宇垣は五年以内に太平洋問題を処理し、必要なら再駐兵協定を結ぶ肚だった。

これで媾和が成立するなら重慶側に異議はない。併し蔣介石は調印を躊躇した。

日本政府が此の媾和条件で満足するか。軍部は非賠償、非併合媾和に誠意を示すか。四年半も戦い、七大都市全部を占領し、今や重慶の門前で一時停止している日本が要求する条件としては輕易に過ぎるではないか。

此の媾和を実現し、返還占領地を受領する為に蔣介石は手兵の大部分を奥地から出して日本軍の前に曝さなければならぬ。日本から「媾和の保証」を得なければ諸軍閥の疑惑を解く事が出来ない。

宇垣は蔣介石の立場を察した。

「蘭州地区に伝染病が蔓延していると聞いています。日本の最も優秀な衛生隊を一年間貸与しましょう。近衛婦人部隊を」

東京では東久邇宮首相が「善隣外交、共同防共、経済提携」の近衛三原則を再確認する演説を行い、有効な支援を行った。

蔣介石は感動した。東洋人のみに通じ合う共通の感情が媾和成立を促進した。米国の干渉はその隙もなかった。

三月十五日。

支那事変は斯くて名誉ある解決を見た。

× × ×

四月十日。

進級と同時に予備役編入となった稔田少佐は犬房岬の女官養成所校長室に居た。宮内省を午前十時に出て今着任したばかりだった。百三十枚余の写真が壁の一面を埋めていた。彼は見覚えある婦人兵の顔を見上げた。

一二一事件以来、婦人部隊兵営は空虚となった。併し学校は女達の自治で良く運営されているようだ。

× × ×

三月の人事移動は陸海軍の最上部から末端に迄及んだ。

東条、杉山両大將は軍事参議官に任命。

支那派遣軍の畑俊六は教育総監に就任。

北支方面軍の岡村寧次は参謀総長を拝命。

関東軍司令官には山下奉文が任命された。

南方軍の寺内寿一は陸軍大学長。

石原莞爾が現役に復帰して参謀次長。

海軍では嶋田、永野両大將が予備役編入。

山本五十六が聯合艦隊司令長官と軍令部長を兼務。軍令部員の一部が聯合艦隊幕僚を兼任した。時を同じくして米海軍でも同様な機構改革が行われていた。

稔田少佐の転出も人事移動の一部だった。

「宮内省侍従職、侍従武官。学習院出仕。女官養成所長ヲ命ズ」

松平宮内大臣から直接渡された辞令には斯う書いてあった。故、蘭島少將が遺言を以て後任に彼を推挙したという事だった。

× × ×

「支那事変を四年半戦って日本は何を得たのでしょうか。満洲国の安泰だけのようですが」卒業生代表の杜鵑花秋子が言った。これは支那派遣軍全將兵、更には全国民の疑問でもあった。

「七年戦争でプロシヤが得たものは既に領有していたシレジャの保全だけでした。併し此の戦争以後プロシヤは強国に発展しました」航空科教官の神酒慶子が説明した。

——俺が教える事は何もなさそうだな——
稔田少佐は感心しながら聞いている。

「支那事変は必要だったのでしょうか」

「真の善隣友交は全力で争った後に来ます」

「それなら太平洋の真の平和以前に日米戦争が必要なのではありませんか」

× × ×

日支媾和条約は迅速、誠実に履行された。

日本軍は撤兵を開始し、蔣介石は満洲国領事に張群を任命した。これは機会を見て大使に昇格する予定の人事だった。

一方では最大の難問を除かれた日米会談が急速な妥結に近づきつつあった。

併し国民党と共産党は既に各地で衝突を起し、全面内戦の兆候が見え始めていた。そして不穏な情勢下にも拘らず、婦人部隊第一中隊は蘭州地区で疫病救済に働いている。

× × ×

「杜鵑花秋子以下初年兵七十五名。第一中隊所属を命ぜられ只今から出発致します」

稔田少佐は平和部隊の出発を見送った。小銃以上の武装は本部に残し、代りに衛生資材や饑饉救済の食糧を携行している。此の七十五名は今年卒業した三百五十名中の優秀者を選抜してあった。

× × ×

昭和十七年五月。

ヨーロッパの激戦は続いていたが、太平洋では日米会談が遂に諒解点に達した。日本軍が南方に展開し、機動部隊がハワイ北方に迫っていた事を知って米政府は驚愕した。石油の輸出は再開された。

× × ×

婦人部隊は一二一事件で一箇中隊と教官の

大部分を失っていた。第一中隊は蘭州にあり纏った部隊は鹿島乗組の第二中隊と航空科だけだった。

稔田少佐は最初の事業に着手した。

今年の卒業生を基礎とする第三中隊再建。

鹿島を以てする東南アジアの親善訪問。

航空科の拡充強化。

梅津陸相と阿南次官は陸軍の近代化再編成を急いでいた。

師団五十一箇は現状維持とし、これを戦車八箇師団と歩兵四十三箇師団に改編する。

歩兵師団中、第二師団を空輸師団に、第五第十一、第四十八師団を水陸両用師団に、第二十三、第三十八、近衛師団を完全機械化師団に装備させる。

一式戦闘機隼の採用を中止し、海軍の零戦を以て代用し、設計、試作能力を次期戦闘機の開発に向ける。

師団の配置を満洲二十五、南西諸島十五、支那方面四、朝鮮二、本土五とする。

蘭州では婦人部隊六百人が饑餓と悪疫に対する闘争を続けていた。既に数十名の罹病者も出し、何人かは殞れた。

初年兵七十五名が増援に到着した。船坂倫子等の退役伍長は帰国を延期し、顧問として蘭州に留った。楯法子が中隊長に選ばれた。

米内光政と山本五十六は海軍のみならず、日本全体の近代化を計画している。

大和型戦艦第三、四番艦の建造を中止し、余剰の鋼板を九七式中戦車用として陸軍に渡し、代りにアルミ資材を受領した。陸海軍の協調は嘗てない程に高められた。

昭和十六年末の危機は石油不足が原因だった。石油自給度の上昇が昭和十八年の目標に掲げられ、国内産油、北樺太油田に加えて、石炭液化、フイツシャー法、頁岩油、松根油等、凡ゆる開発が試みられた。

六月一日。

稔田少佐を形式上の艦長とする婦人部隊練習艦鹿島は東南アジア親善訪問航海に出航した。香港、サイゴン、シンガポール、パタヤ、マニラを歴訪する計画だった。

六月から七月初にかけて世界情勢は凶悪化しつつあった。

北アフリカでロンメル軍はトブルクを攻略

してスエズ運河に迫り、東部戦線ではマンシユタイン軍がセバストポール要塞を奪った。米国政府は次第に焦慮し、英、ソに対する援助は愈々露骨になった。

七月七日。

練習艦鹿島はブラウン環礁のエニウエタツク島に停泊していた。一二一事件に連坐して懲役刑を宣告された磐城朋子等六百三十余人の元婦人兵は此の島で服役していた。

「食糧と日用品は有難く頂戴致します。併し私達は懲役囚です。何事にも耐えなければなりません。この次にはセメントや土木具を持って来て下さるようお願いします」

宴席で磐城朋子が言った。半歳余の懲役生活にも拘らず婦人部隊として鍛練された義務観は少しも変わっていなかった。

椰子の実、新芽、海鼠、雲丹、蝦、蟹、魚類。これが最高級の饗応だった。稔田少佐は娘達の誠意を噛みしめながら観察した。

——女囚になっても婦人兵の本質は失われていない。太平洋に事が起る時、此の娘達は必ず元通りの兵士になって役立つだろう——。

翌日、稔田少佐は磐城朋子の案内で島内を一巡した。

半裸に素足の元婦人兵は澆刺と健康的に働いている。女囚の暗さは少しも見られない。赤道直下の太陽に照らされながら砂を運び、セメントを練り、珊瑚礁を砕き、椰子樹を伐り、土を掘って滑走路や陣地を作っていた。軍隊と飛行機が進駐すれば直ちに堅固な航空要塞が出現するだろう。

「私達は硫黄島とロタ島で飛行場を建設し、陸海軍に引き渡して来ました。だが此の島こそ太平洋の最前線です。経験と体力を傾注して立派な基地に仕上げて見せます」

磐城朋子は寧ろ懲役労働を誇るかのように昂然と言った。

七月から八月にかけて。

米国は既に歐洲大戰介入を決意し、西海岸に兵力を集結していた。併し日本は三国同盟を發動して背後から事を起すかもしれない。米国陸海軍はグワムとフィリピンに増援を送り、ハワイの艦隊を愈々強化した。

英国は香港とシンガポールに増兵した。蘭印は対日石油輸出量を大幅に制限した。

日本軍は既に仏印から撤兵していたが、これを待っていたように泰、仏印の国境紛争が再発した。仏印は米や鉱物の対日輸出を禁止

し、泰国の対日貿易を妨害し、日本の仲裁を拒絶した。

斯かる折、中華民国では国民党と共産党の大規模な衝突が起った。国民党軍は兵数的に優勢だったが戦術拙劣と無統制の為に度々大損害を被った。

「あれが驪山陵です。高さ百十五米。底辺の長さ四百八十米。ピラミッドより大きいでしょう。秦の始皇帝が作ったお墓です。始皇帝は万里の長城や阿房宮など大きなものを作る事が好きでしたが驪山陵も其の一つで、七十万人の囚人を働かせ、財宝を悉く持ち込み、建造に関係した技師や職工と一緒に埋めて了ったそうです。後に楚の項羽が此の墓を盗掘しましたが三十万人の兵士を使い三十日かけて財宝運び出したと伝えられています」

船坂倫子が婦人部隊の先頭に立ち、メモを片手に臨時案内役を務めている。

蘭州地方の疫病は日本婦人部隊の献身的活動で遂に征伏された。蒋介石は感嘆し、国賓を以て遇し、黄河地方の名勝旧跡を見学せしめた。

既に日本軍は海岸地方への撤兵を終り、国民党と共産党の武力衝突は漸く内戦の様相を

呈し始めていた。蒋介石の命令で特に呉化同の一軍が派遣され、護衛に当たった。

婦人部隊は咸陽、長安、驪山、函谷関、三门峡、千仏崖、洛陽等を見学し、鄭州經由で連雲港に向った。

九月九日。重陽の佳節。

白色に塗装された婦人部隊の練習艦鹿島は二本煙突から煙を吐き、汽釀成って出航準備完了の態勢に見えた。すべての金具は磨き上げられ、艦内は花と万国旗に飾られ、乗組の婦人兵は歓喜に沸いている。平和の戦士として大功績を顕した第一中隊を迎えに連雲港へ赴くところだった。

稔田少佐は艦橋に立って鹿島艦上や大房岬を眺めながら考えている。

「太平洋と大陸。二つの平和を此の娘達が獲得したのだ。どのように歓迎しようか。其処へ電報が到着した。

宛、陸軍省。

発、徐州特務機関。九月七日。

「婦人部隊第一中隊ノ列車ハ予定日ヲ三日経過セルモ到着セズ。兵匪遭遇ノ懼アリ」

天津軍中継、宮内省經由。緊急の内容が二日遅れ、更に三日間が対策なしで空費されて

いる。情報の混乱か。媾和で気が緩んだか。

艦内は騒然となった。

「慌てるな。平和の使節に危害を加える者はない。それに戦争は終わったのだ」

稔田少佐は言いながらも自分の懸念を打ち消し得なかった。

——第一中隊は非武装同然だ。短剣の他は少数者が拳銃を携行しているに過ぎない——。

山東、河南一帯で本格的内戦が始った由を伝える新聞報道は今朝読んだばかりだった。

× × ×

稔田少佐は外務省へ急行した。併し希望の持てる情報は得られなかった。宿県附近で激戦が行われ、政府軍の二箇軍が潰滅した事。国民党側の有力部隊が共産党側に寝返った事等が伝えられていた。

——隴海線は不通になっっているだろう。鄭州あたりに避難していればよいが——。

× × ×

「婦人部隊ハ宿県附近デ抑留セラレタ如シ」
相手は新編第四路軍。略称新四軍だった。

南京に居た興亜院總裁宇垣一成は国民党政府に嚴重な抗議を行った。蒋介石は直ちに陳明仁。杜聿明、李宋仁等に命じ、徐州西方の掃蕩と婦人部隊の搜索を行わせた。

× × ×

九月十二日。

稔田少佐は宮内省を訪問して請願した。

「蒋介石の誠意は認めますが実力不足です。

外交交渉では間に合いません。六百余の生命が危険です。婦人部隊第二中隊を出動させて下さい。陸海軍の協力も依頼したいと思います」

併し松平宮相は慎重だった。

婦人部隊第一中隊が捕えられたという確証はない。救出が目的だとしても陸海軍を出動させたら再侵略の非難を受け、必ず米国の干渉を招く。微妙な平和態勢に亀裂を生じる。

× × ×

九月十三日。

朝も未だ暗い頃。

船坂倫子、榎法子、杜鵑花秋子等六百六十一名の婦人兵は後ろ手に縛られ、首を繋ぎ合わされて永城附近の一村落へと追い立てられた。護衛に当たっていた呉化同の軍が一斉に寝返って婦人部隊を新四軍に引き渡したのだ。事が不意に起ったのと、婦人部隊が殆んど武装していなかった為には有効な抵抗は出来なかった。且つ婦人兵は戦闘行為を宮内省令で厳禁されていた。

新四軍政治委員劉少奇は巧妙に婦人部隊を欺いた。内戦の危険を避けて護送すると称し

武器は保管の名目で奪い、黄口附近で汽車から下し、政府軍の前線から遠く離れた根拠地に連れ込んで分宿させ、数千の兵を以て囲み一人残らず縛りあげて了った。そして昼は村落内に監禁し、夜は歩かせて永城附近に迄、連行して来た。新四軍の総帥陳毅の司令部が其処にあった。

× × ×

九月十四日。

稔田少佐は陸軍省に赴き、梅津陸相に婦人部隊救出の出兵を陳情したが果さなかった。

「出来れば協力したい。併し軍の大部分は近代化改装の最中で動けないのだ。南西諸島に配置した兵は急には乗船出来ない。本土の師団は帰省中。手輕に移動し得る部隊がない」
悄然と退出する稔田少佐を廊下で呼び止めた者がある。訛りの多い東北弁だった。

「石原莞爾だ。宜敷く頼む」
天才將軍と呼ばれる新參謀次長である。

「婦人部隊は陸海軍と同列に並ぶ第三の軍。君は元帥というわけか。若い者はいいな。好きな事がやれる。俺も満洲事変を起した頃は中佐だった」

稔田少佐は此の暗示で陸軍の伝統を思い出した。

——独断専行——

× × ×

婦人兵は後ろ手に縛られ、足も縛られて、狭い泥小屋に積み重ねるように押し込められていた。屋内に女の体臭が充満している。

国民政府軍が婦人部隊の行方を搜索しているらしく、飛行機が幾度も頭上を通過したが何も発見出来ないようだった。

夕方、一度だけ縄が解かれた。食事、身繕い等の時間である。武装兵に監視されているので抵抗も脱走も出来なかった。そして暗くなる前に又も後ろ手に縛られ、夜通し歩かされた。

× × ×

九月十五日。

稔田少佐は棉津見洋子の操縦する九一式飛行艇に乗って南京に飛んだ。

婦人部隊の全装備を積んだ練習艦鹿島は房岬を出航して西に向っていた。

× × ×

「日本の婦人部隊を捕えて何か益があるか。日本を敵に廻す事になるぞ」

言ったのは新四軍司令陳毅。

「日本は米国の干渉を恐れています。戦争にはなりませんよ」

答えたのは政治委員の劉少奇。

此の男は後に毛沢東と並ぶ程の権力者と成るのだが、当時は若齡の為に未だ陳毅の下位に居た。

「食べさせなければならぬ上に監視の人数も要る。それに政府軍が必死に追って来るぞ」
「延安へ連れて行きます。あそこなら蒋介石も手が届きません」

叢林の中。

歩き疲れた娘達が身を投げ出している。併し小休止の間も縄は解かれない。手足を縛られ、四人宛縛り固められて樹隠に転がされている。物を言う気力も失われているようだ。

「縛ってあるから逃げたり暴れたりはいしないだろうが何の必要があつて延安迄連れて行くのだ。日本の女は我が軍に改編出来ないぞ」

「延安には各国の新聞記者が居ます。其処で世界中に晒すのです。日本は再侵略の尖兵に婦人部隊を利用した、と」

「それが内戦の利益になるのか」

「蒋介石は救出の軍を派遣するでしょう。そうしたら国民党を侵略者の手先と極めつける事が出来ます」

縛られている船坂倫子が、そっと顔を上げて劉少奇の方を見た。

× × ×

九月十七日。

稔田少佐は蒋介石から青天白日旗を受け取った。国民党政府の傭兵として内戦に参加するなら国際問題も起るまい。そして婦人部隊は見栄や体面で大目的を誤らない精神訓練が出来ていた。

× × ×

新四軍の兵士が追い立てた。後ろ手に縛られている婦人兵の背を台尻で撲りつけた。手の自由が効かず、首を繋ぎ合わされている為安定を失って幾度も倒れた。その度に激しく蹴り上げられた。国民政府系の軍隊が接近しているようだった。

× × ×

九月十八日。

練習艦鹿島は西方に航海を続けている。

艦内の浴槽では青色染料が溶かされ、淡褐色をした婦人部隊制服が染め直されていた。

新しい色彩は国民政府軍の軍服色だった。

× × ×

新四軍の手に落ちた婦人兵達は太康附近の孤村に連行されていた。何か慌ただしい空気が

が満ちている。一人宛、後ろ手の縄目を点検され、改めて固く縛り直された。足首も揃えて縛られ、各自の着替えとして所持していた褌を口に詰められ、銘々の手拭で猿轡を噛まされた。尋常の警戒ではないようだ。

斯うされている間にも新四軍の兵士は村の周囲を駆け廻って何かに用心していた。

村の土壁は崩れ、屋根は落ちていく。住民は少ししか見えない。最近の戦火で荒らされたようだ。その一角に古井戸があった。

「此の中に入れろ」

船坂倫子と楯法子が顔を見合わせた。愈々銃殺かと覚悟したが銃器は持ち出されていなかった。

井戸の釣瓶が外された。船坂倫子が先ず太綱を脇の下に通して滑車に吊された。水に漬けて溺殺させられるものと思ったが井戸の中は空虚だった。驚いた事に底から横穴が四方に走り、村の下にもう一つ地下村があった。処々に穴蔵があり、防湿した武器や食糧が貯蔵してあるらしかった。

地の底には土の臭いと湿った空気が飽和していた。その一隅に一段低くなった斜坑があり、底は行き止りで幾分広くなっている。婦人兵達は荷物の如く縛られ、俵のように押し

込められた。

井戸の中から六百余人を吊り下す作業は捗らなかった。途中から急に忙しくなり、滑車では間に合わず、婦人兵は担ぎ上げられ、投げ込まれた。手足を縛られているので平均をとる事が出来なかった。井戸の底に数人が待機していたが受け損じて幾度も落した。娘達の幾人かは捻挫し、より多くは猿轡の下で鼻血を噴いた。昏倒した者もあった。

斜坑の底に婦人兵達は突き倒され、その上に次の者が投げ落された。緊しく縛られた娘達が幾重にも折り重り、苦痛に耐えずして猿轡の下で喘いだ。六百余の呻吟が地下洞に反響して一箇の巨大な唸りとなった。下積みの者は他人の間から鼻孔を空気に接触させるのが漸くであり、それさえ出来ない者も居た。そして地下の空気は最初から汚れていた。

夜に入る頃。無数の足音や車輻の響が接近し、頭上の村で停止した。陳明仁將軍揮下の政府軍が婦人部隊を搜索しながら此の村に一泊しようとしていた。

地下では新四軍の兵士が短剣を抜いて娘達の咽喉に擬していた。併し威嚇は必要でなかった。猿轡は固く、井戸の口は密封され、呻吟は地上へは洩れなかった。

陳明仁の部下は朝になると何も知らずに立ち去った。

地表に連れ出された婦人兵は陽光に眼が眩んだ。すぐ立てる者は幾人も居なかった。五人は既に窒息していた。それにも拘らず、足の縛と猿轡を許されただけで背中に杖が飛んだ。次の目的地に向かって追い立てられるのだった。

× × ×

九月二十日。

婦人部隊の練習艦鹿島が連雲に入った。艦内には保安要員のみを留め、他は全員上陸した。稔田少佐も空路連雲に到着していた。

彼の懐中には参謀次長の命令書があった。

それを持って稔田少佐は兵站部を訪れた。

「必要トスル馬匹ヲ所要期間貸与スベシ」

連雲には多数の馬が送還船を待っていた。

重慶作戦の任務を解かれた駄馬。騎兵聯隊の乗用馬等。各騎兵隊は戦車隊に改編の為、既に兵員の復員を終り、馬だけが残っていた。

「参謀次長の長距離電話で御来訪の予定は承っていました。何頭、何日間御入用ですか」

兵站部の将校が伝票を出しながら言った。

稔田少佐は感謝した。併し此の兵站部員は何も知らないようだ。泰山あたりへ旅行する馬

を借り出しに來た位に思っているのだろう。
「入用数は千三百頭。期間は二箇月。借用の
目的は申し上げられません」

六百五十六名の娘達は後ろ手に縛られて今日も西へ西へと曳かれて行く。

通過した村では悪罵と共に泥や石の雨を浴びせられた。此の周辺は日本軍が以前に荒らした筈もないのだが。

新四軍支配地区では日本帝国主義リベンディクオチユイに対する憎悪が未だ消えていない。

九月二十一日。

支那方面艦隊の参謀が長官古賀峯一の伝言を持って來た。

「九八式陸上偵察機一機を婦人部隊に貸与するよう命令されています」

これは山本五十六の配慮だった。青色塗装で青天白日章を附した複座機が用意されていた。神酒慶子と棉津見洋子の操縦技術は此の新鋭機を扱い得る高さに達していた。

縛られた娘達は夜の間に河舟に乘せられ、新黄河の対岸に送られた。

三人が遂に歩けなくなって路傍に伏した。

兵士数人が銃を把って歩み寄り、後頭部に擬した。威嚇ではなかった。

途端に船坂倫子が駆け出した。縛られた俣の不自由な身で、頭から突き掛り、兵士達を押し倒した。

彼女は骨の髄迄打ち据えられた。それでも起き上った。後ろ手の間に動けない同僚を背負った。楯法子等が見習った。疵い合いながら夜通し歩き続けた。

九月二十二日。

国民政府軍の服装に似た婦人部隊六百五十人が徐州停車場に下りた。此処迄は治安良好の地区で食糧も馬糧も入手出来た。

断片的情報は各地から入っていた。確實と思われるものを総合すると、捕えられた婦人兵は西華附近を西に連行されている如くだった。これから追跡するとすれば初動三百軒は遅れている。

九八陸偵が国府空軍に伍して発進した。

西沙河を渡る際、二人の婦人兵が浅瀬を踏み外して水中に落ちた。両手を背に縛られているので泳げなかった。二人共、翌朝に水死体となって浮んだ。併し埋葬の時間が無く、

石を縛りつけて河底に沈められた。

九月二十三日。

六百五十騎が砂塵を捲いて西南に向った。各自が乗用の他に替馬一頭を曳いている。乗り替えながら寸刻の休止も惜しんで急走疾駆した。

婦人兵は悉くが熟練した騎兵だった。平原と水郷と山地。変化の多い地形を燃料の補給無しに機動するには馬が最適である。

「目的地は郟城。急げ」

稔田少佐は鞭を揚げて婦人騎兵隊を指揮した。併し此の一団中で馬術が最も見劣りするのは彼だった。

九月二十五日。

六百五十四人の婦人兵は十人宛繋ぎ合わされ、固く猿轡を噛まされて夜道を走らされていた。闇の中に鉄道が見えた。京漢線のようにだ。湯恩伯の警備地区である。夜に紛れて政府軍の警戒線を越えた。

「発見されなくてよかったな。見つかったら君達は皆殺しになるところだったぞ」
劉少奇が傍の機関銃兵を指して言った。

九月二十八日。

九八陸偵が稔田少佐宛の通信筒を落した。捕えられた婦人兵は魯山附近から伏井山地の奥に連行されているらしい。

六百余人の囚虜を完全隠蔽護送する事は不可能だった。情報は少し宛聞えて来た。併し常に遅れていた。何時も劉少奇の後を追隨するばかりだった。

だが今度は明確に目標を捉えた。

——あと二百軒——

それは敵が政府軍地区を完全に離脱し、潜行の必要を認めなくなったからだった。

婦人騎兵隊は急追撃を開始した。けれどもその装備は充分とは言えなかった。重量ある兵器、資材は鹿島艦内に留め、大部分の者は拳銃、短剣、手榴弾だけを持っていた。小銃や機関銃は僅かしか無く、食糧と馬糧も替馬に積んだ分だけだった。

伏牛山の北斜面。

道は絶壁の中腹を棚の如く縫っている。

頭上には見上げる程の岩壁。下は遙かな谷底に河が白く光っている。

婦人兵はその山道を歩かされていた。後ろ手に縛られ、五人宛腰を繋ぎ合わされ、長蛇

の列を成して曳かれて行く。

既に意志は無かった。前の者の足を見ながら、曳き擦るようにして歩いた。

道は狭く、三人とは並べない。足の下から石が転げ出し、眼下の谷底へ落ちて行った。

突然爆音が聞えて来た。絶壁の隠から飛行機が現れた。護衛の兵が騒然となった。

隊列の後尾に居た杜鵑花秋子等五人が急に走り出した。腰を繋ぎ合わされているにも拘らず、呼吸を合せ歩調を揃えて走った。

空中に気をとられていた敵兵が漸く撃ち始めた。細い山道なので一斉射撃は出来ない。後尾近くの兵だけが狙撃した。

逃げられるか。

併し矢張り無理だった。脚を撃たれたのが一人が激しく転倒した。他の四人が折り重り一団となって崖下に落ちて行った。

九月二十七日。

婦人騎兵隊は郾城で湯恩伯から補給を受けた。嘗て最も頑強に日本軍と戦った將軍は今や日本婦人部隊に最大の協力を惜しまなかった。併し騎兵を持たない彼の軍は百軒離れた敵に追いつく見込が無かった。

伝作儀、陳明仁、李宗仁の諸軍が三方面か

ら伏牛山脈に向った。だが間に合うか。

稔田少佐は空中偵察の結果を分析した。

「連行サレツツアル者六百余人を伏牛山ノ北斜面ニ認ム。敵ハ時折ソノ一部ヲ威嚇ノ為ニ虐殺スルモノノ如シ」

此の偵察機は杜鵑花秋子等が谷底に落ちた情況を望見したものだだった。

——大部分は未だ生きています。併し最早一刻の猶余もならない。一兩日が勝負だ。——

「私の釦を噛み切って……」

夜道を歩きながら船坂倫子が楯法子に小さな声で言った。

「道に落して下さい。昨日見た飛行機は政府軍の標識をつけていたけれど確かに日本海軍の九八陸偵でした。追跡者は急速に接近しています。或は日本人が加っているのではないかと思います。釦は目印になるでしょう」

楯法子が身の中で唯一一つだけ自由な口を働かせて船坂倫子の釦を千切った。婦人部隊制服の比較的大型な釦が点々と夜道に散った。朝日の下でこれを発見する者は果して誰か。

九月三十日

前衛が報告した。

「蘭河の岸で失神していた婦人部隊員一名を救助しました。重傷ですが助かる見込です」

稔田少佐が駆けつけて驚いた。

「杜鵑花秋子ではないか」

後ろ手に縛られた姿で河岸に打ち上げられていた。崖から直接水中に転落したらしい。水が深かった為か外傷は致命的でなく、気絶した状態で水に入ったので溺死する程に水を飲まなかったものと判断された。

介抱している間に前衛が種々の兆候を発見した。婦人部隊の釦や据章が拾得された。

崖下で惨死していた婦人兵が見つかった。縛られた俣で中腹から落とされたらしい。更に一人。水中から引き揚げられた。これも後ろ手に縛られている。

二時間程で杜鵑花秋子が意識を回復した。動く事は無理だが報告は出来た。

婦人部隊第一中隊は既に一箇月近くも縛られている。曳き廻された道程も五百軒を越える。氣力で耐えているが疲労の極、最早幾日も保ち得ないだろう。一昨日は西方の山道を通過中だった。余り遠くへは行っていない筈だ。急げば追いつける。

「君達の釦は何処に落して来たのだね」

劉少奇が薄い笑を浮べて言った。

船坂倫子も楯法子も黙って答えない。

「言わなくてもよい。解っている。釦は道に落ちていた。目印になるよう点々と列を成していた。併し拾わなかった。君達の仲間に見せたかったからだ。日本の婦人部隊が来ているよ。国民党軍の制服を着用している。あの釦を発見したら慌てて追って来るだろう。それが狙いだ。折角来たのだから君達と一緒に延安へ連れて行こう。一万の兵を潜伏させてある。一人残らず生捕るぞ」

途端に船坂倫子が一声叫んで躍り掛った。噛みつこうとした。併し劉少奇は素早く足を上げて蹴り倒した。

「絶対に解けないよう縛り直せ。猿轡も固く噛ませろ。向うの平地に連れて行き、よく見えるよう並べて転がすのだ」

船坂倫子の顔を踏みつけながら言った。

「餌に使うて更に六百人を釣り上げるのだ」

十月一日。

九八陸偵が蘭河の河原に強行着陸した。此の飛行機の優れた安定性と、操縦者の熟練した技術が不整地着陸を可能にした。

「捕えられた仲間が居る盆地は上流二軒。す

ぐ近くです。護衛の敵兵は千人ばかり。盆地の三方は森林。北の一方だけが開いて蘭河の岸に臨んでいます」

「此処から直進すれば盆地の東口より突入出来ます。北の河岸へ抜けて河原を下れば此処に戻れます。併し三方の森林は伏兵を置く絶好の場所です。蘭河の上流には農耕用貯水池らしい堰堤があり、その附近にも数百人の敵が居ます」

神酒慶子と棉津見洋子が空中偵察の結果を報告した。婦人伍長達が協議して作戦を練り稔田少佐が決裁を与えた。

「最も必要なものは巧妙な戦術よりも、敏捷にして勇敢な突進だ。行くぞ」

劉少奇は岡の上に立って婦人部隊の突撃を見下していた。大縦陣を成した六百騎が一直線に盆地へ突入して行く。

「未だ撃つな。僅かな時間だけでも再会を喜ばせてやれ。どうせ逃げ場はないのだ」

替馬と、その警備に僅かな人数だけを残し他の全力が盆地の東口から駆け下りていた。「あれだけ嚴重に縛ってあるから容易には解けないだろう。その間に此方の護衛兵は逃げる。安全な距離に逃げたら最初の合図を送る。」

る。三方の林に火を放つのだ。二箇月も雨が降らなかったから、よく燃えるぞ。あの連中は一つだけ開いている北の口から河原に逃げ出すだろう。そうしたら第二の合図で上流の堤を爆破する。溺れなかった者も戦鬪力を失って岸に這い上がるだけだ。これを捕えるには何の手間も要らない。伏兵の主力は蘭河の兩岸に展開している」

盆地の中央。薊の多い草の中。

船坂倫子、楯法子等六百四十九人の娘達は電信用の銅線で後ろ手に縛られ、雑然と転がされていた。丈夫な黄麻の新縄で胸も足首も膝も締め上げられ、固い猿轡が二重に噛まされてる。

護衛の兵は逃げ出す姿勢で待機していた。足の早い者を選んであるようだ。

「絶対に停止するな。止ったら最期だぞ」

稔田少佐が叫んだ。鞭を加えつつ数百の鉄騎が疾駆する。

「位置に就け」

劉少奇が自信に満ちた声で命令した。

縛られている娘達が半身を起して跪いた。猿轡を何とかして外そうと頬を地に擦りつけ呼びかけようとして呻いた。

来てはいけない。

だが声も手振りも伴わない動作は救助の催促としか解釈出来なかった。

警備の敵兵は予定通り逃げ出した。

「縄を解くな。一騎が一人を拾って走れ。直ちに右旋回。河原へ駆け抜けろ」

稔田少佐が婦人騎兵隊を督励した。

芋虫の如く縛り固められている娘達が足先だけを使って中腰に立ち上った。馬上から伸ばられた手が背の縄目を攔んで引き上げた。嚴重な縄目が寧ろ役に立った。馬を全力疾走させながら吊り上げて関節を痛めたり落したりはしなかった。

年長の伍長達は馬を下り、縛られて立てない者を抱き上げて馬上の仲間に渡した。一部の婦人兵は三方の林に機関銃を乱射した。

馬上に引き上げた同僚の縄を解く時間は無い。殊に手首は銅の針金で縛ってある。解く代りに鞍の前輪に縛りつけた。用意の革帯を手早く脇下に通し、落ちないよう固定した。

縛りながら馬を駆けさせた。

劉少奇が慌てた。
「火を放つ合図を急げ」

余りにも遅れて、間の抜けたような火の手が上った。

二人一馬の婦人騎兵隊は既に半数近くが河原に溢れ出ていた。

「堰堤爆破の信号を上げろ」

此の時、九八陸偵が急降下して堰堤附近の兵を機銃掃射し、更に多数の発煙弾を投下した。これが信号を見誤らせ、爆破を数分間遅らせた。

「堰堤が爆破されたぞ。水が寄せて来る前に駆け抜けろ。河の中央へ入るな。岸に沿って集結地へ急げ」

縛られている人数と、救助に来た人数とが殆んど同数だった。後衛を引受けた伍長達が二人宛の同僚を鞍の両側に吊り下げていた。火は急速に河岸近くへ燃え広がったが、婦人部隊の最後尾は火よりも早く脱出していた。

先頭は既に河岸の敵を撃退し、残留員との合流を終った。橋頭堡の内側では縄目を解く作業が進行している。自由を回復した婦人兵は疲労を意に介せず戦士の本性を取り戻し

た。全員が替馬に乗った。

火と洪水に挟まれるより早く、千三百の鉄騎が東へ突進した。一万の敵が阻止し得ずに寸断された。

敵は多数だが蘭河の兩岸に分れ、且つ岸に沿って細長く配置されていた。溺れる者を拾い上げて捕える心算だったから本格的戦闘の準備に欠けていた。銃器は少く、鉤棒や綱のような重い道具ばかりが多かった。

婦人騎兵隊の集中突貫力が容易に包囲環を切断した。敵弾に幾人か倒れたが助け合っ

共に駆けた。

伍長達の団が後衛を形勢し、馬を疾走させながら射撃した。稔田少佐が殿軍を指揮して奮戦中。——ではなくて馬術が下手な為に遅れているのだが、外見は勇敢な後退掩護と写った。

× × ×

十月十日。双十節の日。

連雲港を出た鹿島艦は日本に向っていた。

脱出作戦に殲れた船坂倫子等六十二人の遺骨と遺品が艦長室に安置されてある。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、という声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

稔田少佐は独り冥想に耽っていた。

「遂に成功した。併し俺は何もしなかった。形式的な決裁を下し、一番後について行っただけだ」併し、と彼は考える。

「矢張り俺は必要だ。俺でなければ出来ない事が今こそ一つだけ生じた。無断出国、内戦参加の責任を俺一人で負うのだ」

一点の未練も無かった。

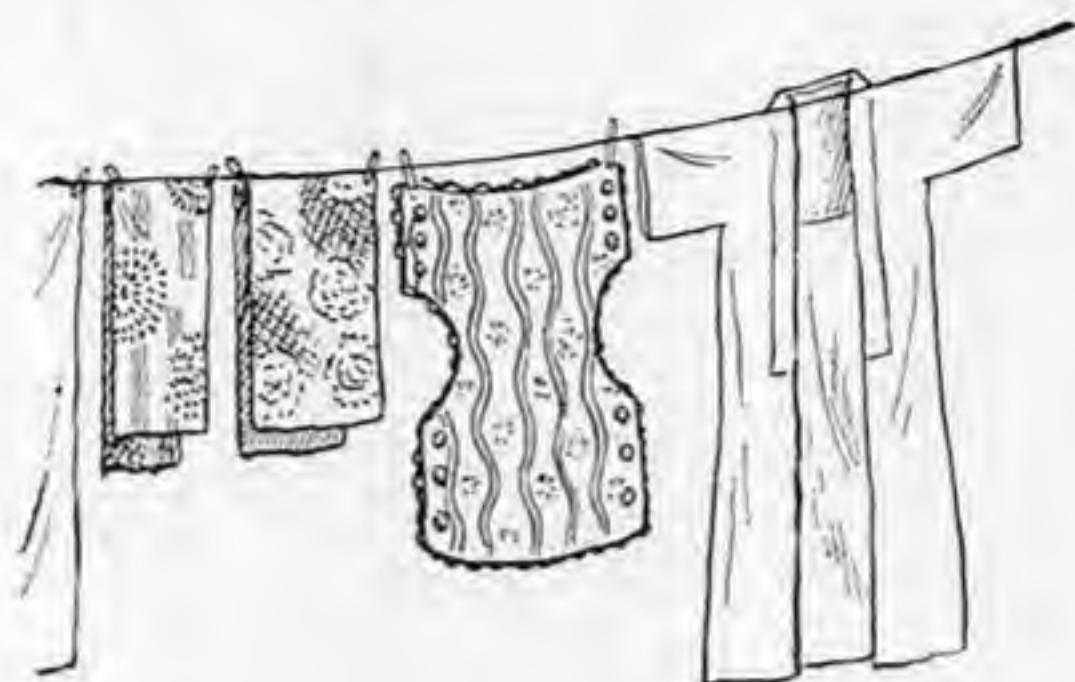
風が出てきたらしい。艦が動揺する。

稔田少佐は横揺れに体を合せながら机に向い、始末書を起草すべく筆を把った。

大阪市住吉局私書箱第四十一号脱出版株式会
社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何
月号より何カ月分と御指定下さい。
○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。
○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ
になりましたので、予約購読料は三月分三冊
一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分
十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間
誌代の改訂はしない予定です。
○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。
○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送
料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御
送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読
者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。
何月号からとお書きにならないときは、重複
や欠号をきたしますので御留意願います。
○予約金が切れましたときは、封筒の上に
八本号にて前金切の判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。
○局留にて雑誌をお受けとりにならない方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間です。その間に
お受取りにならないときは、発送人に返戻さ
れます。

「告白」



『正常なる異常者』

＜母子契約＞

鈴 木 暁

私の入学した学校は、東京でも有名な私立大学だった。はからずも無事入学の榮譽を得た私は、その学生が皆、目ざすように、国家試験へ向って全力をかたむけ勉強することを

心に誓った。が、やはり入試のための勉強とこれに続く国家試験への勉強は、知らず知らずのうちに私の体内に病巣を作っていた。二年目の春、私はとうとう病に伏し、休学届

を出さねばならぬ運命となっていました。後悔しても時すでに遅く、私は空気の清い地方の病院に入院し寝たきりの生活を送るはめになった。

病に伏したとはいえ、勉強から少しでも離れることは、人に抜かれてしまいうらみもあり嫌だった。病にさしさわりのない程度、それも日に三―四時間というわくを医者からいいわたされ、それでも私はうれしかった。元来、私は非常に神経質だったので、一度気にするとたとえこれが時計の秒をきざむ小さな音でさえ耳ざわりなものとなり、勉強に少しも手がつかないたちだった。

私には、小さな個室が与えられた。そして看護婦と医師以外、殆んど誰も室には来なかった。もっともこの病院には患者が二、三名しかいず、残りは外来の患者だったので、看護婦もまるで私につききりであった。そして彼女は、私の目が疲れた時などは私に代って本を読み聞かせてくれた。内容が彼女には難しかったのか、時おり彼女は意味を尋ねたり、どういう事かと説明を乞うた。私は、つまりながらもそれに答えたものだが、このような勉強方法は後になって考えれば、随分と役立ったと思う。私は小さい時、母を無くし

殆んどその味を知らなかった。厳格な父のもとで育った私は、こうして父から離れ、優しい看護婦から母親のようにいたわりを受け、次第に心のうちで母を求める情愛をわかせていた。彼女は私の個室から出ようとはしなかった。何から何まで私の周りに気をつかい、いつも微笑を、その唇に浮かべていた。二十七、八才だと思ったが、女の人の年は外見だけでは明確に判断できなかった。父も時々は見舞いに来た。しかし父はいそがしい仕事を持っていたので、一日とそこに居ることはなかった。友人も来た、が私には邪魔だった。私は彼女と二人で居たかった。彼女と笑い、そして私の病気を悲しんだ。私は彼女を姉のように感じていたし、事実「お姉さん」と呼んでいた。彼女は私が勉強に倦きると話を聞かせたり他の患者のことを話してくれた。

「三号室に居るのよ、そのおじさん。毎日毎日、失禁してとても苦勞するわ」

「失禁って」と私は尋ねた。医学上の言葉はあまり知っている方ではなかった。やはり彼女は、自分の知識を話す事が嬉しかったのだろう。いつも丁寧に答えてくれた。

「排泄の自制が効かなくて、意識なしに排泄してしまうの。だから、いつもおむつをして

いるのよ」

その話はそれで終わった。私はそれ以上、尋ねなかったし、彼女も意識的にその老人のことを避けているようであった。老人の看病は彼女の責任外らしかった。私は彼女に甘えるようになっていた。こうして毎日、顔を合わせていれば互いの気心も次第に解ってくるものだった。彼女も、その方を喜んだようだ。朝昼晩、三度の食事と四時間の勉強。そして夕方には、いつも温いタオルで全身を拭ってくれた。寝たきりの生活にとって、それはありがたいものだった。彼女は平気らしかったが、ただ一つだけ私には嫌なものがあつた。やはりその時だけは、男と女を意識せざるを得なかった。初め事務的に行動していた彼女は、やがて私の心中を察したのか、必要なものを用意して、何かと用を見つけては室から出、終った頃をみすましてもどって来た。そういう彼女の行動は私には嬉しかったが、何にか物足りなさをも感じていた。

ある日、彼女は、私が初めて目にするような物を持って室に来了。昼寝を終えて、いつも話を聞かせてくれる時間の時だった。今の彼女には、看護婦という態度が表面にあらわれていた。怖いというほどではなかったが、

やはり甘えられなかった。「何するの?」と私は尋ねた。彼女は、にやっと笑った。

「無いでしょう、長いこと……。だからね」と彼女は優しく言って、太い注射器を手にした。

「怖がらなくていいのよ」

私は、じっと彼女の行動を見つめていた。茶色に色づけした広口ビンのフタをとり、彼女は注射器の先端をビンの中に入れて、目盛を見ながら中の液体を注射器に移した。私は先端が針でないのを、取り出した時始めて解った。「それ、何?」と尋ねても、彼女はその度に私の方を見てはほえむだけだった。そして、それを彼女は台の上に置いておき、私の方へ来た。

「じっとしているのよ、すぐ済むわ。いいわね」

私は、わけの解らぬままにうなずいた。彼女は、私の足の方の掛布団をまくって二つに折ると、着物の裾を開いた。私は、やっと解りかけた。「嫌だなア」と彼女に言くと、

「でも、この為に熱が高くなってしまうたら大変でしょう」

「苦しい?」と聞いてみた。

「ちょっとだけ。すぐ楽になるから」

すでに彼女の手には、太い注入器が握られていた。そして私は、ヒヤリとするガラスの感触を肌に感じ、身をこごませた。

「がまんしてね」

と彼女は、いそいそと、その為の用意にとりかかっていた。

彼女は数分後に、もどって来た。

「洗濯物が増えたわ」

と言いながらも彼女は笑っていた。シーツも着物も汚してしまった私は、ただ一言あやまり、布団に頭からもぐり込んでしまった。こうするより他に、恥しさからのがれる道は無かった。何か自分の弱みを握られてしまった、と、そんな思いだった。それでいて、一方、支配されているという意識がかえって甘えとなって、彼女に向っていった。

「もう梅雨だわねエ」

窓からすぐ近くに、小さな丘が見えた。そして縁色にはそれは色づいていた。彼女は私の背中を半分ほど起して、外が見えるようにしてくれた。病院の庭が一面に見えた。向いの病室まで続いていた。

「あの室が三号室よ、見える？」

彼女は一つの窓を指さした。しかし、そこは窓というほどのものではなかった。窓は洗

濯物によって隠されていた。白い衣が夕日に輝いて、まぶしかった。それが何であるか私は知っていた。そして彼女の方を見つめた。

「見える？」

彼女は再び、私の方を向いていった。その仕草は、意識的にそれを私に知らせるかのようには思えた。「うん」と私が答えると、彼女は私をまた寝かせ窓を閉じた。

「おむつ……」

私をさぐるように彼女はそういった。つぶやきともとれた。「何んて言ったの？」と私は聞えないふりをして言った。二人の間に今まで技巧は無かったはずだった。私は悪いとは思ったが、彼女のそれに対する意識が気になった。

「いいえ、何んでもないわ。フッフ」

無意味な笑いだった。そしてその場をつくらうように枕元の本箱から本を取り出した。

「転出とは？」

私は、じっと彼女の顔を見つめた。今は勉強する気はなかった。

「いやな人、勉強したくないの？」

久しぶりに友人が来た。ゼミナルの友人だった。今日は女だけでやってきて、花を花

ビンに入れていった。

「まだ長いの？ あなたがいないとどうもゼミがしぼんでしまうの。勉強、進んだ？ 私なんか全然。まア担保物権、早いね。もう民法は終わったんでしょ。三度目、いいわねエ、じゃ直ったら、すぐ受けられるわね。うらやましい」

友人が来ると彼女は、室から出て行っていた。そして時間がくると、彼女達を追い出してくれた。

「お友達、女の人ばかりみたいね」

と彼女は、ひやかした。

「でも、いいお嬢さん方ね。ゆくゆくは……でしょう？」

「たくさんあるのね、お花。お花、好き？」
彼女は、花の中へ顔をうずめるようにして香りを楽しんでいた。「ねエ」と私は話かけた。「嫌なんだ、その白衣」と言う

「解るわ、普通の服がいいのね。じゃ、こうしましょう。私の仕事の時は、これを着なきゃ駄目だけど、遊びの時は脱ぐわね」

翌日から彼女は、そうしてくれた。白衣を見ると、自分が病院に居るという意識が身にせまっていた嫌だった。バラの花を刺繍した飾りのあるブラウスが、室をなごやかにして

いた。期待通りの雰囲気にもまれ、私は上気嫌だった。病気である事の悲しさと、病気であるが故にこうして優しく美しいお姉さんと一緒にいられる事の楽しさとが、私の心の中で交錯していた。しかし白衣を着たお姉さんよりも、普通の服を着たお姉さんの方が好きだった。数日間無いと、彼女はきまって注入器を持ってきた。

始めのうちは、どうしてもこれになじめなかった。むしろ、なじむ方が無理ではあったが、彼女に強制され、嫌おうなしに下着をとられて、彼女の思いどおりに、されてしまうと、私は観念せざるを得なかった。そして嫌な苦しいほどの異物感が体中に広まって、私はシーツを、乱すまであえいだ。そしていつも、そこらじゅうを汚してしまうのだった。

「困った赤ちゃんね。今度から、いいものをつけてあげましょうか？」

私をいじめるような笑いを残して、彼女は後始末をした。

「梅雨時だから洗濯がふえると困るのよ、なかなか乾かなくて。お部屋に干すの嫌でしょう？」

そう言っても彼女は少しも嫌な顔をせず、私は十分に甘える事ができた。

梅雨が本当に始まって、この地方にもじめじめした雨の降る日ばかりが続いた。

いつものように私は昼寝を終えて、熱を計られていた。私は前々から、彼女に聞きたい事があった。そしてもうそれを尋ねても、おかしくはない二人だと思って、「結婚しているの？」と聞いてみた。彼女は悲しそうに首を振った。

「結婚はしたけど、離婚。四年間、一緒だったわ」

彼女の身の上話が始まっていた。

「見合い結婚だったの。二年目に女の子が生まれて……」

「じゃ幸せだったんでしょ」と言うと、

「いいえ……正反対。毎日毎日嫌だったわ」

「理由は何？」

「フフフ、解るかしら？夫婦の事は他人が口を出すものじゃないというけれど……。夫は変人なのよ。いつもね……私をいじめるの、怖いほどに」

私は面白くなって次々に質問をあげた。

「どんな風になって……いやな人ね」

彼女はそれ以後、話すのを止めた。ただ、夫が子供をひきとり北の方へ行った、とそれだけ後になって付け加えた。

私はこのような、優しい人をいじめるその男が憎くなった。そして彼女に哀れみを感じた。

「淋しかったわ、赤ちゃん取られて……今、どうしているかしら」

彼女は人一倍、母性愛の強い人だった。

「でも今は、新しい赤ちゃんがいるから」

「もらったの？」と尋ねると、

「フフフ、大きな赤ちゃんよ、あなたは」

私は黙って、彼女の顔を見つめた。私が甘えたのと同様、彼女は甘えられたいと思っているのだろうか。

そして二人の間にある意識は、男と女ではなく、はっきりと母と子、肉親の関係である事を私は悟った。遠い昔の母が地上に再現したのだったし、そうである以上、もう線を引く必要も、またその意識も感じなかった。

私は彼女の顔が急に真剣味を帯び、私の傍に坐り直す動作を目で追った。何も語る必要がなかった。

彼女はブラウスのボタンを、ゆっくりはずした。私は、その手の動きを見つめた。

「フフフ、もう私の赤ちゃんよ。さア、そんな怖い顔をしないで——」

彼女は、いつもの表情にもどっていた。そ

してそれを急いで胸の中にしまい込み、ブラウスを着直した。私はもう、彼女の胸から目を移すことができなかった。

「私の赤ちゃんになる？」

決して彼女はからかい半分ではなかった。

彼女にしてみても真剣な事だった。

「毎日、そうしてくれる？」と私は甘えた。

「ええ、もっといい事もね」

私は、それ以上の事を望まなかった。うなずくのは最上の道だった。毎日そうしてくれるだけでよかった。

「契約規定は、任意規定だったわね。そうすると、母子契約かしら」

彼女は、私から習いたての知識をふりまいた。

夕方、彼女の「もっといい事」が私におしつけられた。夕食の後片づけを終えて、時々する注入器を彼女は持ってきた。「するの？……」と尋ねると、ニコニコして彼女は答えた。

「ええ、欠かせないものだから」

私は幾分、それに慣れていた。それに、急に体内に挿入される異物感も、快く感じるようになっていた。苦しみは嫌だったけれども後ですっきりするのが良かった。自分から望

むことは無かったが、彼女が用意すれば、以前のようにあばれはしなかった。

「さア下に敷くから、腰を上げて」

私は、いつも汚すので、ビニールをシーツの上に敷くようになっていた。しかし今夜は腰をおろしても、ビニールの冷い感触はなかった。やわらかな衣の上にいる感じだった。

彼女は、いつもより、にこやかだった。そして慣れた手つきで注入を済ますと、腰を衣で包んでいった。

こんな事はされなかった私は「何しているの」とすぐに尋ねた。

「さア、じっとして。もう少し」

苦しくなっていた。出してしまいたい、激しい緊迫感があった。でも、いつもと違う彼女の行動が気になった。

「いい子ね、おとなしくしてね」

私は急に、ももに触れる冷たいものを感じた。そしてそれは、ももの間を通り抜けた。

腰を包んだ衣が、肌にピッタリ押しつけてきた。異様な音が聞えた。ひもで胴を締められ私は始めて事の次第を悟った。私はシーツの上で、不自由な体を精一ぱい動かした。

「駄目、駄目。さア、いい子でしょう。おとなしくするの」

「とって、お願いだから、とって」と私は、彼女に言い続けた。彼女は私の言葉に、少しも耳を貸さなかった。

「いつもシーツや着物を汚すでしょう」

彼女と私の斗いだった、心の中での斗争だった。私は完全に自分の意識を彼女に支配されたくなかった。心の中での抵抗を続けた。

が、体中に注入された異物は、そういつまでも私を待っていてくれなかった。彼女の顔に勝利の笑が浮んだ。私は、顔がカッカッと暑くなっていくのを、止められなかった。おむつをしている、おむつをしている、そう思うだけで恥しさが体中に伝わった。まさかと思った事が、私の身に起ったのだった。「おむつ、おむつ」と彼女がそう言うのを、私はおぼろげながら聞いたような気がした。そしてその声が、私の耳の中に室中から飛び込んできた。私は思わず耳をふさいだ。そしてその時、私は限界外に居た。耐えられなかった。その夜は彼女と顔を合わせるのが嫌だった。そして、とうとう一回も布団から顔を出さなかった。せめてもの抵抗であった。

うなされどうしだった。いくつもの夢が、私の脳裏に浮んでは消えていった。そしてその度に、おむつがでてきた。風の強い日に外

を歩いていると、干してあったおむつが飛ばされてきて、私の顔にピッタリとくるまり、私は窒息していった。そうかと思うと、病床に伏している私を、誰かが訪ねて来て、ドアを開けると、無数のおむつが私にむかって襲いかかってきた。

道を歩いていると、母親に抱かれた赤ちゃんが居た。母親はあまり赤ちゃんが泣くので草の上に優しく寝かせ、おむつの取り更えを始めた。するといつの間にか、おむつを取り更えられているのが私になり、赤ちゃんは傍に立って私をじっと見つめていた。

私は講義を聞いていた。教授と学生が真剣に問題に取り組んでいた。教授は言った。

「おむつは、元来、赤ん坊のするものであって――」

と、一人の学生が立ち上った。

「先生、違います。おむつは、赤ん坊だけでなく大人もするものです。私は、それをしてる人を知っています」

室が急にガヤガヤしだし、周囲の目が私に注目してきた。皆んなが私を凝視した。おむつをしているんだ、こいつはおむつをしているんだ……。

私はハッとして目を覚めた。体中、汗でび

っしよりになっていた。まだ外は暗かった。彼女は室に居た。そしてその事が、今は嬉しかった。肌に冷たくなった汗をふき、彼女は私の服を取りかえた。

「さア、もう大丈夫、安心して眠るのよ。ずっと傍にいますからね」

しかし私は、もう眠る気は無かった。

「ごめんなさいね、おむつにうなされたんでしょう？」

私は、暫く彼女の瞳を見つめていた。そして、首を横に振った。確かに、その通りだった。だが、うなされしきってしまった感じだった。彼女はフツツと笑った。私の気持を見透しているようだった。

「じゃ明日からいつもおむつしましょうね」

私は答えなかった。黙ってただ笑った。

「あなたは私の赤ちゃん、おむつをする赤ちゃんよ」

彼女はすっかり満足しきっていた。私は彼女の意識に支配されようと思った。昔、与えられなかったものが、今になってやっと与えられるのだ。私も満足した。「飲ませて」と私は甘えた。彼女はニコニコ笑いながら、私の頭を彼女の胸に抱いた。

思ったより楽でもなかった。私は、彼女が

言ったとおり、朝からおむつをあてられていた。が、出たいはずのものが意識すると、なかなか出せなかった。そもそも横に寝たままするのも駄目だった。私はまして、おむつの中へするんだと意識してしまうと、全然出なくなってしまう。彼女は、そんな私におかまいなく、いつもの世間話をしていた。

「アッ、そうそう。おむつ汚したら、すぐ言ってね」

どうにでもなれ、と思った。彼女は、汚すまで取り更えないと言っていた。それに、もうその為の器具が室には置いてなかった。代りに幾組かのおむつと数枚のおむつカバーが枕元に置いてあった。

梅雨はまだ続いていた。今年の梅雨は少し長かった。もう七月も中旬だった。昨夜汚したおむつが、おむつを干すハンガーにかけられ、室の中につるされてあった。薄い赤と青色の水玉模様で、整然と干されていた。室の中で嫌だとは思ったが、雨降りの日は仕方なかった。こうして目の前に直接おむつを見ると、なお私は出るものが出なくなってしまう。とうとうその日、おむつは、更えられなかった。

「まだ汚さないの？ 我慢しなくてもいいの

よ」

うなずいたもののどうにもならなかった。私はあきらめて、そのまま眠ってしまった。結果は見えすいていた。朝、目を覚ますと、腰から腹にかけて、むれるような水気を感じた。いやな気分だった。それは第一、気持ち悪かった。おむつカバーが、ぶかぶかしているように思えた。そしてこの朝ほど、彼女が来るのが待ち遠しかった事は無かった。

「おむつ、汚れたの、赤ちゃん」

と彼女は、笑いながら室に這入ってきた。

「朝、起きてから出した」と私は言った。さすがに、おねしょしたとは言いにくかった。

「駄目、解っているわよ。おねしょ、したんでしょう？」

「違うよ」と私は、すまして言った。そして早く更えるように催促した。

「はいはい、今すぐよ」

と彼女は、枕もとから一組のおむつとおむつカバーをとって、布団をまくり、びっしょりぬれたおむつを拭うようしてはずし、温いお湯につけたタオルで丁寧に汚れをふいてくれた。そして再び、赤ちゃんのように私の腰をおむつでくるみ、カバーをあてがった。

「洗ってくるからおとなしくしているのよ」

彼女は言い残して、汚れたおむつを手に持ち室から出て行った。私はホッとした気持ちだった。と同時に、優しく腰を包んでくれるおむつが、何となく嬉しかった。肌ざわりのやわらかいおむつに、私は全てをまかせることが出来た。夢の中にいるような、そして雲の上を歩いているような快さがあった。彼女は暫くして、洗濯したおむつとおむつカバーをたずさえもどってきた。そしてそれらを、ハンガーに一つ一つ干していった。昨日、干しであつたのもまだ乾いていないらしく、室はおむつだらけの感じがして、私は恥じらいを意識した。が、彼女の前だけでは、それもすぐ消し飛んだ。

二、三日たった。もう私も彼女も、すっかりおむつに慣れていた。そして私は、意識的に、寝たままでも排尿できるようになった。その事は、彼女を大いに喜ばせた。彼女に言わせれば、

「これで、やっと一人前の赤ちゃんになれたわね」

彼女は私が離すまで、母をあてがってくれた。そして私が一口「出ちゃった」と言えば彼女はすぐ、おむつを取り更えてくれた。そして雨降りの為、室中がおむつの干し場にな

ってしまっていた。

「どオ、元気」

私は急に来客を受けた。先日来た、ゼミナールの一員だった。彼女はノックもなしに、いきなりドアを開けて室に這入って来た。

「大分、良さそうね」

彼女は、ちらっと室に干されたおむつを見渡した。むろん私達は、それらを隠す間さえなかった。

「では、ごゆっくり。三十分以上は駄目ですよ」

と、おむつをあてた張本人は、いそいそと室から出て行った。私は、もう何も言えなかった。こうしてはつきりと彼女は、私の秘密をのぞいてしまったのだ。

「フッフ、元気ないのね。これ、あんたがしてるの？」

今度は、ゆっくりおむつを見廻していた。

「赤ちゃんみたいね。おむつカバーもあるのね。フッフ」

彼女は遠慮もなしに、それを手にとってみた。

「フーン、赤ちゃんのおむつカバーと同じなのね。ただ大きいだけ」

彼女は、ちらりちらりと私を見た。

「そうそう、お花もってきたわ」

この間来た時したように、彼女は花ビンの中へ持ってきた花束を入れた。そして枕元のおむつをも発見してしまった。

「幸せね、あんなきれいな看護婦さんにおむつしてもらうなんて……。ちょっと恥ずかしいけど」

このおしゃべり女は、きっと学校へもどったら他の人に……。そう思うと辛かった。殺してしまいたいとも感じた。同時に私の恥ずかしい態を、あからさまに見られた恥ずかしさが、胸の中にこみ上げていた。

「皆、かなり進んでいるわ。あんたはどオ」私は、気が気ではなかった。おむつを見られたあせりが、私の顔を赤く染めていた。

そしてやっと彼女も、その事に気づいたらしかった。

「フフフ、大丈夫よ。言ったりしないわ。フフ……。ね、今しているの？」

私には答えられない質問だった。しかしここでは彼女が権力者だった。

「ドオしているんでしょう、赤ちゃん？」

あきらかに彼女は、私をからかっていた。私は激しい憎しみを感じた。もうこの場にはたたまれなかった。

「いいわ、答えないんなら」

彼女は、ニヤッと笑った。そして急に布団をまくり上げて、着物のすそを開いた。悲鳴にならない私のうめき声が、低く響いた。

「まあ、可愛らしいじゃない。隠さなくてもいいのに」

彼女は一見すると再び元どおりに直した。

勝利者の笑顔だった。

「秘密にしておいてあげる。こう見えても口は堅いのよ。だから退院したら私と交際してよ。フフフ、裏切ったら話しちゃうから」

彼女は、あどけなく笑って見せた。私は、やつのことであらずいた。それだけで、全ての気力を使い果した感じだった。室から出ぎわにもう一度、彼女はおむつを見渡した。

「じゃ、またね、赤ちゃん」

と言うと、出て行った。長い長い時間に思えた。苦しみの時間と共に、後悔の時間でもあった。張本人が来たらと思って、いろいろの言葉を用意しておいたが、彼女は夕方までとうとう現われなかった。

私は秋に退院した。むろん、彼女への憎しみなどはなかった。相変らず私は退院するまで、彼女にとっては赤ちゃんだった。そして

私も、それなりの行動をした。不意の見舞客は、もう来なかった。彼女だけが最初の、そして最後の、不意の見舞客だった。そして私の弱みを握った人間だった。退院の日、彼女はそっと私に包みを渡してくれた。それは二人の記念の、おむつとおむつかバーだった。彼女が私のために作ってくれたうちの、最もやわらかいのを選んで包んでくれた。彼女は「契約の解除ね」

と、淋しく笑った。しかし私は、彼女の母の味を今でもなつかしく思い、もし彼女の居所を知ることができたら、もう一度「母子契約」を結びたいと思う。が私には、やることが一つ残っていた。唯一の不意の見舞客への私のお礼を、これから準備しなければいけないと心に誓った。

お礼。もちろん月並のお礼では通用しないだろう。これは、進学テストなどより余程の難問である。私の頭は混乱した。見舞帰りの問際に、改めておむつを見渡した彼女の、意味あり気な微笑が、混乱する思いに輪をかけるように去来した。私は頭を抱えてベッドにひっくり返った。

枯葉が淋しく散る日、私は彼女と別れた。

さんと頬をすり合わせ、接吻するのよ」

川田が、夫人と捨太郎の傍へ寄って、演出にかかる。

捨太郎は、川田に指示されるまま、静子夫人の肩を抱き寄せ、片手で夫人の豊かな一方の乳房を下から持ち上げるようにするのだった。

「なかなかいいポーズだわ。でもさ、そんなに羞しように顔を横へそらすのは気に入らないわね」

千代がカメラを構えながら注文を出す。

すると、川田がうなずいて、横へそらせる夫人の頸に手をかけ、捨太郎の方へ強引に向けさせるのである。

捨太郎のゴリラに似た怪異な容貌をちらと見た静子夫人は、苦痛を噛みしめるように顔を歪め、かたく眼を閉じ合う。

「熱烈に愛し合っている夫婦のように、情熱的な接吻をかわしてごらん。そこを写真にとるわ。貴方達の愛の記録の第一頁をかざる写真なのよ。さ、始めて」

千代は、クスクス笑いながら、カメラのピントを合わせている。

「いわれた通りにしねえか」

川田に、叱咤された静子夫人は、いやらし

く口をとがらせて、身をすりつけてくる捨太郎の唇を、顔をのけぞらせるようにして、受け止めた。

知覚が喪失するばかりの屈辱の接吻を静子夫人は、全身を硬化させて、必死にこらえているようだ。

「そんなに石みてえに硬くなっちゃ、仕様がねえな。捨太郎は、お前さんのご主人なんだから。少し、ニンニク臭えが、それぐらいのことは辛抱するんだ」

川田は、そんなことをいって、苦痛に顔をこわ張らせ、捨太郎の接吻を受けている静子夫人を観察していたが、

「気に入らねえな。そんなに嫌がったキッスをするのなら、俺は怒るぜ」

川田の陰險な言葉を浴びた静子夫人は、涙を振り払い、胆をすえたように顔を起すと、遮二無二、突っこんでくる捨太郎の唇に、ぴたりと温くて、甘い花びらのような唇を重ね、しっとりうるおった舌を捨太郎の口の中へさし入れた。

捨太郎は、静子夫人の備えがゆるんだと見るや、そのがっしりした両腕で夫人の全身を抱きしめるようにし、夫人の甘く熱い舌を音をたてて吸い始める。

静子夫人は、体の節々が、暗闇の中に、溶けこんでいくような、苦しい、恐ろしい戦慄を感じながら、どうともなれと、捨太郎に全身をゆだねてしまっている。

「そう。なかなか気分が出て来たようね」

千代は、縄に緊めあげられている豊かな胸のふくらみと、たくましいばかりに量感のある尻を……されながら、ぴったりと捨太郎に唇を合わせている、静子夫人を楽しそうに見て、パチリ、パチリと、カメラのシャッターを切るのだった。

何枚かの写真をとられた静子夫人は、ようやく、捨太郎の唇を離し、抱きすくめている捨太郎の肩にがっくり首を落すようにして、小さく、すすり泣く。いよいよ落ちるところまで落ちたという感懷が、辛く苦しく、神経をさいなむのだろう。静子夫人の閉じ合わせた瞼より、屈辱の熱い涙は、幾筋も流れ落ちて捨太郎の肩を濡らすのである。

「さて、次に――」

川田は含み笑いしながら、再び夫人の傍に近寄る。

「俺がさっき教えてやった要領で、新しいご主人様に、愛の言葉を捧げるんだ。どれ程、このご主人様を愛しているか、甘くて熱いと

ころをたっぷり、田代社長と千代夫人とにご覧になって頂くんだよ」

静子夫人の乳白色の艶やかな肩先を川田は指で突いた。

「一か、川田さん」

静子夫人は、捨太郎の肩に顔を埋めながら嫌、嫌と首を振るようにして、

「貴方のおっしゃる通りに、私、宣誓しましたわ。覚悟もきめました。そ、それなのに」

静子夫人は、涙にうるむ切長の美しい瞳を川田に注いで、哀願的な表情を作った。

「だから、そんなことする必要はないというのかい。さっきと大分、約束が違うようじゃないか」

と、川田は、憤ったような眼差しを静子夫人に向けるのである。

元、自分の女中であった千代に対し、静子夫人が未だ完全に屈伏し切れず、少なからず敵意のようなものを心のどこかに宿しているということは川田も感じている。静子夫人にとって、元の使用人の前で羞しめられるというところが一番骨身にこたえて、辛く、悲しいことであるに違いない。それがまた、川田や千代にとっては、つけ目であり、腹立たしいことでもあったのだ。心底から屈服させ、静

子夫人を完全な位に柔順な、自分達の奴隷に仕上げるということが二人の目的であったからだ。

「よ、どうなんだ。千代夫人の前では、まだ素直になり切れねえというのかい。それならこっちにも考えがあるぜ」

川田は、蛇のような眼つきになり、静子夫人の耳を引張る。

「一か、川田さん」

「はっきり返事しな」

川田に、突っ放すようにいわれた静子夫人は、精魂尽きたように首を垂れ、

「一わ、わかりました」

と、すすりあげるようにいい、自分の心を整えるよう、しばらく瞑目していたが、やがて、すっと顔を上げると、傍に立つ捨太郎の方を一抹の憂いを帯びた瞳に、ぞっとする色っぽさを浮かばせて見つめるのだった。

捨太郎は、相変らず、ニタニタ笑っていたが、片手を静子夫人の肩に再びかけて、身をすり寄せ始めた。

「——ねえ、あなた」

面白そうに見つめていた川田が首を振り、「駄目だね。令夫人時代の乙にすました気取りってやつがまだお前さんにはあるようだ。」

もつと気分を出して、色っぽくやってみな。客に甘える芸者みたいに、鼻にかけて甘ったるく呼ぶんだ。こんな具合にな。——ねえ、あなたあー」

川田が頓狂な声を出したので、田代も千代も顔を見合わせ、声を立てて笑った。

「さ、やってみな」

静子夫人は、川田に強制されても一度、捨太郎の方へ、妖艶な眼差しを向け、

「——ねえ、あなたあー」

そうだ、その調子、と川田は、はしゃぎながら、

「さ、あとをつづけな」

と、調子に乗り出す。

「——静子は、静子は、今日から、貴方の妻よ。お願い、うんと静子を可愛がってね」

静子夫人は、肩を抱いて、ぴったりと寄り添う捨太郎の顔に、赤らんだ頬をすりつけるようにして、すすり泣くようにいう。

田代、千代、川田の眼が、嘲笑している。

このように、奈落に落ちた自分の姿を、うんと笑うがいいわ、といった捨鉢な気持も手伝ってか、静子夫人は、先程、川田に指示された通りに捨太郎相手に振舞って見せるのであった。

「ねえ、あなた。静子ねえ、あなたの、あなたの赤ちゃんが欲しいのよ。それが、そこにいらっしやる千代子奥様に対する罪亡しになることなの。ねえ、お願い、静子のお腹に赤ちゃんを作ると、お約束して」

川田にいい含められた通り、やっとそこまですて見せた静子夫人は、急にたまらない屈辱感に胸を押しつぶされ、声をあげて泣き出すのだった。

「おっと、さめざめ泣いて頂くのは、捨太郎とお床入りになってからだぜ」

川田はそんなことをいって、更に静子夫人を千代の前でいたぶり抜くべく、夫人に対する演技を要求するのだった。

再び、静子夫人の耳元に口を寄せる川田。

しかし、静子夫人は、反抗の空しさを悟り切ったように反感は見せず、涙を振り切ったように再び冷淡な表情で前を向きながら、

「ねえ、あなた。静子ね、あなたのお気に入るかどうか、くわしくご覧になって頂きたいの。ねえ、いいでしょう」

静子夫人は、何か幻でも見るような悲しげな瞳を上の方に向け、ぴったりと閉ざしていた肢をゆっくりと左右へ開いていく。

「い、いかが。お気に召して？ ねえ、あな

たってば」

むっちりとした脂ののった肉づきのいい太腿を

……字に……げきった静子夫人は、顔も首も屈辱と羞恥に真っ赤にしながらも、

「愛、愛するあなたに、静子、何もかもお見せしたいのよ。ねえ、もっと傍に寄って、ご覧になって下さらなきゃ嫌。静子を愛して下さらないの」

田代も千代も川田も、静子夫人が遂に、そうした大胆な仕草を捨太郎にとって演じ出したことに大満悦だ。捨太郎と一緒に、夫人の傍に身を沈め、誘拐されてこの屋敷へ運ばれて以来、鬼源の調教を徹底的に受け、鍛え抜かれた甘美な令夫人の肢体を感懐深げにじっと凝視するのである。

千代は、わざとらしくハンカチを口に押し当てて、見てはならぬものを無理やり見させられたような狼狽ぶりを示し、クスクス笑いつづけ、

「嫌だわ、私、眼の持って行き場がなくて困っちゃうわ」

などといいながらも、興味深げに、眼を注いでいるのだ。

川田は、舌なめずりをしながら、立上り、再び静子夫人の耳元に口を寄せる。

ああ、と静子夫人は、その瞬間、赤らんだ顔を急に振り、

「御、御生です。もう、これ以上——」

「まだ、わかんねえのかよ。お前は、森田組の大スターなんだぜ。そんなことぐらいいねえようじゃどうする。鬼源にちゃんと教わった筈だ」

川田は舌打ちして、静子夫人の頬をびしりと平手打する。

静子夫人は、こうした淫靡ないたぶりを千代の前で受け続ける位なら、捨太郎の獣のような攻撃をともに受けた方がどれ程、救われるかわからないとさえ思う。

「グズグズしやがると承知しねえぞ。わかったな」

川田は、威猛高になって、大声を夫人に浴びせるのだった。

「一体、どうしたのよ」

静子夫人の足元に立膝を組んでいる千代は川田を見上げていった。

「いや、なーに、こいつはどうか、鬼源にちゃんと教わってやがるのに、この場で口に出していねえと吐かしやがるんだ」

川田は……に強制された静子夫人が、その間から、わずかに……ているものを指で示し

ながら、口を歪めて笑うのだった。

「まあ、ホホホ、私も参考のためにお聞きしたいわ。ね、奥様、ご存知なら、教えて頂けないかしら」

静子夫人は、川田と千代の嘲笑を浴び、血を吐くような思いになり、同時に、もうどうとでも勝手にするがいいわ、とばかり、川田に強制されるまま、喰いつくように眼を近づけている捨太郎に対して、口を開くのであった。

「——ねえ、あなた、静子の、静子の……がおわかりになる？」

田代は、腹をかかえるようにして笑い出した。川田も、それに合わせるようにして、笑いこけながら、

「どうです社長。日本舞踊、生花、お茶で明け暮れた遠山財閥の美しい若奥様が、俺達の前で、今みてえなことを、はつきり口にするようになったのですからね。全く、大した進歩じゃありませんか」

そして、川田は眼を静子夫人に戻して、
「ご主人様は、まだわからねえとよ。もっとアソヨを開いてみな」
と、どなる。

静子夫人は、催眠術にでもかかったよう、

再び生苦しいばかりに大胆な、そして、極端な姿態をとるのであった。

「——ねえ、あなた、おわかりになって？」

静子夫人は、火のようにほてった顔を横にねじ曲げるようにしながら、川田達が望む甘い声を出す。

捨太郎は、涎を流して、えへらえへら笑いながら、川田や田代の方をちらと見、羞ずかしげに首をのぞかせている……指で突く。

ああ、と静子夫人は、赤らんだ顔を一層横へそらせて、

「——嬉しいわ。それなの。それが、静子の一番弱いところ——」

もじもじしながら、甘えかかるようにいうのであった。

もはや、何のためらいも羞ずかしさも示さず、美肌を誇示するようにして、捨太郎の鼻先へ突き出している静子夫人である。

田代は、葉巻に火をつけ、そのすさまじい光景を眼を細めて見つめている。数多くの女を知っている田代であるが、これ程の美貌とこれ程の見事な肉体美を持つ女を見たことはなかった。それに加えて、男の官能をいやが上にも高ぶらせる成熟しきった夫人の——。

それは、飽かずに眺め入っている田代の眼に

そのまま泌み入って来るよう息苦しいばかりのときめきを覚えさせるものであった。

静子夫人は、うっとり眼を閉じ、美しい横顔を見せながら、川田に強要されるまま柔順に振舞って見せている。

「ねえー、あなたあ」

静子夫人は、さも、もどかしげに身悶えするよう一層、捨太郎の眼前に突き出して、
「——お気に召した？ 静子の……ねえ、何とかおっしゃって」

捨太郎は、水漬を手でかみながら、相変らず、ゲラゲラ笑っている。

川田が捨太郎に代って声をかけた。

「旦那は大分気に入ったようだが、涎を流して喜んでるよ」

静子夫人は、それを聞くと、首を大きくのけぞらせるようにし、艶やかなうなじをくつきり浮立たせながら、川田に強要されている言葉を甘くささやくように震える唇から吐き出したのである。

「——そ、それじゃ、お願い。早く。いいでしょう。ねえ、これから、すぐよ」

田代、川田、千代の三人は声を合わせて笑い合った。

「へへへ、社長。奥様が自分からああおっし

やってるんだ。早速、思いを遂げさせてあげようじゃありませんか」

川田は、いそいそとして田代にいい、静子夫人に向かって、

「それじゃ、お望み通り、これからすぐに捨太郎とからませてやるからな。長い間、ご苦労だった」

静子夫人は、ふと、こみ上がって来た今の浅ましい演技に対する自意識を持てあましているかのよう、がっくり首を垂れてしまうのだった。

その時、鬼源の個室をしきっているカーテンが開いて、銀子や朱美、悦子などがぞろぞろ出て来る。

「あら、一体、これから何が始まるうというの」

銀子は、川田を見て尋ねた。

「いよいよ静子夫人が、捨太郎とお床入りを遊ばすんだ。たった今、お二人は、甘い接吻をかわしてよ。珍妙な結婚式をあげられたところなんだぜ」

「まあ、そうなの。めでたく捨太郎夫人となられたわけなのね」

ズベ公達は、柱に立縛りされ、がっくり首を落している静子夫人を眺め、手をたたいて

はしゃぎ出す。

「ところで鬼源は何してるんだ」

「今、小夜子を調教しているわ。いよいよあのご令嬢の幕開きよ」

「へえー」

と、川田と田代は、楽しそうな顔つきになる。

「今日は一寸、小手調べといったところね。ゆで卵よ。フッフ、あのご令嬢、目を白黒させて、只今、ご勉強中よ」

そりゃ、愉快だ、一寸のぞきに行ってみなしか、と田代が川田に持ちかけたが、千代が苦笑しながら二人を制した。

「気の多い方ね。静子夫人の方が先決じゃありませんか」

成程と田代はうなずいた。

千代は、一刻も早く、静子夫人が捨太郎の所有物になることを望み、それをはっきり確めておきたいのだ。そのことは、田代も川田もわかってる。

「早く私を安心させて下さいな。ねえ社長」

と、千代はニンマリと笑い、とってつけたような色気を田代に対して振りまくのであった。そして、次に、三人のズベ公達に対していう。

「貴女達、丁度、よいところへ来て下さったわ。この美しい花嫁に寝室のお化粧をして上げて下さらない」

OK、とズベ公達は、早速、手分けして化粧道具の用意にかかる。

田代が葉巻をくゆらせながらいった。

「この二人のスイートホームに、三階の梅の間を進呈しよう。部屋は狭いが、壁に鏡がとりつけてあって、この屋敷の中でも割に凝った部屋なんだ」

川田が、捨太郎を見ていう。

「よ。おめえ、そんないい部屋で、これからこの美人と二人で世帯を持つことが出来るってわけだ。社長のご恩を忘れず、この美人とびったり息のあった夫婦ごっこをショーの時には発表するんだぜ。いいな」

こんな天下の美女をわざわざお前のような男の女房にするっていうのは、ショーの時に夫婦の方が何かにつけてやりいいからだ、と田代にもいわれて、捨太郎は恐縮しきったようにペコペコ頭を下げるのだった。

「それじゃ、おめえは、先に梅の間へ行ってお花嫁のお越しを待ってな。どういう手で、この美人と……うか考えている。俺達は、ゆっくりと見物させて貰うんだからな」

川田のその言葉を聞くと、うなだれていた静子夫人は、はっとして顔を上げた。

この悪魔達は、これから、獣のため、身も心もズタズタに引裂かれる自分を酒の肴にでもして見物する気でいるのだ。それをほっきり知った静子夫人であるが、しかし、打ちひしがれてしまった心は、それに対し、反撓を起させるゆとりとてなく、いよいよ奈落の底へ来たという言葉が、悲しい心と肉体の間に漂い流れていくばかりである。

そんな静子夫人に対し、ズベ公三人は、用意して来た化粧品を使って、念入りの化粧を始め出す。一時、美容院に勤めたことがあるという悦子の手さばきは、眺めている千代が感心する程、あざやかなものであった。

「この奥様の髪型は、やっぱり、アップがよく似合うわね」

といいながら、踏台の上に乗って、電気ゴテを使い、悦子は器用に静子夫人の髪をセツトしていく。

「女の化粧って、随分とまた時間のかかるものなんだな」

と田代はいいながらも、見違えるばかりに美しく映え出した、化粧された静子夫人の容貌上に、吸いつけられるような眼差しを向け

ているのだ。

高貴な感じをたたえた彫りの深い、端正な静子夫人の美しい容貌は、ズベ公達三人の手で念入りに化粧されることにより、妖しいまでの艶々しさをもち直した感がする。

「まあ、きれい。遠山家の若奥様でいらした頃と、少しも変らないわ」

千代は、そんなことをいいながら、陶然とした面持で、溜息まじりに静子夫人に見とれていたが、同時に得体の知れない邪惡な嫉妬心が胸の中に渦巻き始め出すのである。

静子夫人は、一切の希望を捨て切ったよう軽く瞼を閉じ合わせ、ズベ公達に命じられるまま、そっと花びらのような唇を前へ出し、ピンク色の口紅をひかれている。そうした静子夫人の観念した、ぞっとするばかりの妖しい美しさを眼にした千代は、こうした美しいものに対する羨望、それが一種の復讐心理のようなものに変じて、今に見ている、といった陰險な顔つきになるのであった。

——いくら美しくとも、女として生れて来たことを後悔するような苦しさを本当に味あうのはこれからなんだよ、捨太郎の子を必ず孕ませてやるからね——

千代は口の中でそう呟き、静子夫人の、あ

の柔らかそうな艶々光って見える腹部が、大きく、異常にふくらみ出すのは何時頃であるうか、と空想するのである。想像すると、千代は胸がときめき始める。

そうした見世物を好む客達の前へ、臨月近い大きな腹に腹帯をしめた静子夫人が、後手に縛られた姿で登場し、客達に腹帯をとられて、その腹部を觀賞される——静子夫人が、女として本当の悲しい辛い思いをするのは、その時だ、と千代は眼をギラギラさせるのであった。

「はい、出来上り。いかが、皆様」

仕事を終えたズベ公達は、先程から飽かずに見とれている田代と川田の方を向いて鼻を動かせる。

「全く、すばらしいの一語につきるね。やっぱり、森田組の抱えている女優の中では、この奥様がナンバーワンだろうね」

田代は、ホクホクした顔になっていた。

色々な妄想に浸っていた千代も、やっと我に返り、夫人の横へ立って、

「さて、奥様。ご主人は先にお部屋へ行っしびれを切らしていらっしやいますわ。急ぎましようね」

千代は、悦子から香水瓶を受取り、静子夫

人の柔かそうな耳たぶ、艶やかな首筋、ゆるやかな美しい線の肩へ香水をふきつける。

次に川田が代って、千代の手から香水瓶を取り、

「旦那を喜ばせるため、もう少し、サービスしておこうぜ」

川田は、麻縄に緊め上げられている夫人の乳房、それから身をかがめて、臍、尻たぶ、内腿にまで香水をふんだんに振りかけて、軽く撫でさすりするのだった。

「まあ、オーバーね」

ズベ公達は、川田のすることを見て、笑い出す。

ぴったりと頑なに閉じ合っている、むっちりとした肉の引き緊まった太腿と、成熟した女臭さが甘く匂うような内腿に香水をすりつけた川田は、次に――

静子夫人は、真珠のような白い歯を見せて眉を寄せ、大きく白いうなじを見せ、首をのけぞらした。こうした屈辱をキリキリ耐えている静子夫人を、川田はすりこみながら、愉快そうに見上げて、

「上流社会の貴婦人は、その前にゃ女の身だしなみとして、ここや……にまで香水を振りかけるもんだと聞いたことがあるぜ。違うか

ね、え、奥さん」

そりゃそうだろう、と田代が川田の仕事を楽しそうに見ながらいった。

「大体、香水ってやつは、匂いのあるところへふりかけるよう出来てるもんだからな」

「そうでしょ、社長。へへへ、何しろ、この奥様は貴婦人上りなんですからね。身だしなみは、ちゃんとしておきたいだろうと思うんですよ。――さ、次は……だ」

川田は、再び、掌に香水を振りかける。前の方から手をくぐらせていった。

「ああー」

と、静子夫人は、ペソをかくような表情になって、腿と腿とで、川田の手をはさみこみそれを拒否しようとする。

「何もそう羞しがすることはねえだろう。至れり尽せりのサービスをしてやるんだよ」

川田は、強引に……それに到達すると、容赦なくすりこみ、

「さて、これで用意完了だ。へへへ、捨太郎の奴、有頂天になってハッスルするぜ」

川田は、静子夫人のうしろへ廻って、柱に縛りつけてある縄尻を解き、ついで、夫人の美しい裸身にきびしく喰いこんでいる麻縄も解きほぐす。

静子夫人は、フラフラとその場へ潰れるように身を落し、ぴったりと立膝をして、自由になった両手で豊かな二つの乳房を抱きしめ深く首を垂れてしまふのであった。

「腕がしびれたろう。少し休ませてやるぜ」

川田は、そういつて煙草を口にし、田代と何か語り合いながら、部屋の外へ出て行く。

「まあ、まるで、彫刻の芸術品みたいね。きれいだわ」

ズベ公三人は、乳房を両手で覆いながら、身を低くしている静子夫人を取巻くようにして、しゃがみこみ、夫人の美しい裸身に眼を凝らしている。

緊縛され、つい今しがたまで、女として死ぬ程辛いポーズを強制された身であっても、こうして縛しめが解かれると、静子夫人は全身に初々しい羞恥の感情を切ないばかりに漲らせ、いさるようにして身を隠し、乳房を人の眼から覆うことに必死になっている。それはズベ公達にとって、奇異な感じでもあったが、また、そうした羞じらいを示す静子夫人を、ふと頼もしく思ったりするのだった。

女らしい可憐さ、いじらしさ、といったものを夫人に感じたズベ公達は、夫人の胸や腕の付根あたりについた痛々しい麻縄の跡を濡

れ手拭を持って来て冷やしてやったりする。
「ねえ、何か私達にして欲しいことはない。
あるならおっしゃいよ」

死刑囚に対する最後の願いを聞きとどけて
やるような調子で、悦子がいった。

このように美しい人妻が、これからゴリラ
のような醜惡な男の手で骨までバラバラにな
るような責苦を受けるのだと思うと、ふと胸
が痛み出したのかも知れない。

「——すみません、お水、お水を一杯——」

静子夫人は、悦子に、美しいうるんだ瞳を
向け、氣弱に眼をしばいた。

「お水ね。ああ、いいわよ」

悦子はうなずいて走って行き、コップに水
をくんで戻って来る。

「有難う——悦子さん」

静子夫人は、コップを受取ると、片手で両
乳房を押さえながら、氣弱い感謝の眼差しを
悦子に向け、うまそうにコップの水を飲み乾
した。

その時、ドアが開いて川田が入って来る。

「さて、梅の間の方では、お床の支度も出来
たぜ。社長は、あちらでウイスキーを飲みな
がら、夫婦ショーの開幕をお待ちかねだ」

川田は、小さく立膝している静子夫人の傍

へしゃがんで、

「さ、奥さん、それだけ休めば充分だ。そろ
そろ、お床に入ってもらうぜ」

そういった川田は、手にぶら下げて来た紫
色の長い絹紐を夫人の前へ投げ出した。

「麻縄はこすれて痛いだろうから、この紫の
しごきで縛るよう社長が思いやって下さった
ぜ」

銀子が奇妙な顔をして、

「へえ。それじゃ、やっぱり、この奥様、縛
られたままで旦那に抱かれるの」

「そうさ。社長のお好みなんだ。縛り……と
でもいうのかな」

ケツケツケツと川田は笑い、しごきをとる
と夫人のうしろに廻って、そのなめらかな白
い背を指でつつく。

「さ、うしろへ手を廻しな。ギッコンバッタ
ンやっても解けねえよう、しっかりと縛って
やるからな」

静子夫人は、決心したように悲しげな顔を
冷静につくろうと努力しつつ、しっかりと乳
房を抱いていた手をゆっくりうしろへ廻し始
めた。

川田は、早速、夫人の手を背中の中程で交
錯させ、キリキリとしごきを巻きつかせる。

静子夫人は、軽く瞑目したまま、川田の手
で、ひしひしとしごきの縄がけをされていく
のだ。

豊かな美しい乳房の上下へ、あざやかな紫
色のしごきが幾本かかかり、ようやく川田が
縄止めをして、甘ずっぱい香料の匂いをぶん
ぶんさせる、ふくよかな夫人の肩に手をかけ
て、どっこいしょ、と立上らせる。

どこかへ姿を消していた千代が、金歯を見
せて笑いながら入って来、

「今、梅の間の方へ、お酒の用意もしいた
わ。見物する人々のためにね」

そして、これより、捨太郎のいる部屋に引
立てられようとしている静子夫人の、しごき
で後手に縛り上げられている美しい裸身をし
げしげと見つめて、

「ホホホ、奥様、いよいよね。悪いけど、私
も、お酒でも頂きながら見物させて頂きます
わ。奥様があのゴリラ男を——いえ、あなた
くましい体つきのご主人の愛情を受取られる
姿をしかこの眼でたしかめておきたいの」

そして、千代は、三人のズベ公に、
「貴女達もいらっしゃいよ。美女と野獣の夫
婦プレイって、興味あるでしょう」

勿論、拝見させて頂くわよ、と銀子達は、

黄色い声を張りあげながら、川田に体を支えられるようにして立っている静子夫人の周囲を取囲み、

「さ、奥様、行きましょう」

「お歩き遊ばせ」

「すばらしい……して見せてね」

などいいながら静子夫人の肩や背を押す。静子夫人は、たくましいばかりに盛り上った量感のある双臀をくねらせるようにして、静かに歩き出した。はつきり、覚悟をきめた凄惨なばかりの冷静さを表情に宿し、ズベ公や千代達に取囲まれながら。

悲痛な決心をして、獣の寝室へ曳かれていく静子夫人の美しい横顔をじっと見つめていた悦子は、調教室を出ようとする夫人の前に立ちほだかるようにし、

「ね、一寸、待ってよ」

と、一行をさえぎった。

「どうしたのよ、悦子」

銀子と朱美が、奇妙な顔をする。

「廊下には、岩崎組や関口組の若い衆達が、うようよしているのよ。その中をこんな恰好のまま引立てて行くの、一寸、可哀そうじゃない」

悦子は、そういつて、肩にかけていたネッ

カチーフをとると、夫人の前に腰をかがめ、夫人の腰のまわりにそれを巻きつけ、結んでやるのだった。

「へえ、武士の情というやつね。見かけによらず、悦子って優しいところがあるじゃないの」

銀子と朱美は顔を見合せて笑い合った。

静子夫人は、一枚の布を悦子が与えてくれたその心情に感激したのか、ふと涙ぐみ、

「——ご恩は忘れないわ、悦子さん」

と、切長の美しい瞳を涙でキラキラ光らせて、悦子を見る。

「あら、悦子、あんた、見に来ないの」

銀子は、悦子が調教室のベッドへごろりと横になってしまったので、呆れたような顔をしていった。

「あ、私、捨太郎の顔を見ると吐き気が起るのよ。遠慮させて頂くわ」

「ふん、変な奴」

銀子と朱美は、そんな悦子に舌を出し、仲間が一人欠けた忿懣を静子夫人にぶつけるように、その白い背中をどんと突いた。

「早くお歩きよ。旦那様がいらいらしているわよ」

廊下へ押し出された静子夫人は、深く首を

落し、上体を前かがみにして、歩き始めた。

「悦子の奴、この奥さんに気があるんじゃないかしら。フッフ、今日は嫌に優しく出るじゃないの」

朱美が笑うと、一度、静子夫人に女同志の交渉を迫り、肘鉄を喰わされたことのある銀子は、フンと鼻先に皺を寄せ、階段を上ろうとする静子夫人の前に立った。

「そんなものを巻くのはね、規則違反よ。とって頂戴」

と、いうや腰の横の結び目を解き出し、さっと、剥ぎとってしまうのだった。

静子夫人は、物悲しげな表情して、顔を横へそらせてしまう。

「生理日以外、いつもさらしておくのよ。勝手なことは許さないわ」

銀子は顔を硬化させて、そう浴びせ、ポケットから一束のチリ紙を出すと、

「さ、奥様に必要なのはこれでしょう。これを口に咥えてお歩き」

静子夫人は、口のあたりへそれを押しつけられると、一瞬、キラリと憎悪の色を含ませた瞳を銀子に向け、そのまますぐ、顔を横に伏せた。

「あんたは最後まで両手の縄は解いてもらえ

ないのよ。となると、始末は旦那様にして頂かなくちゃ仕様がなないじゃない。さ、これを啜えて行って、旦那様に渡すのよ」

夫人のしごきの縄尻を持っている川田が、
「銀子のいう通りにしな」

と、夫人の尻を指で突く。

静子夫人は、こみ上ってくる憎悪をのみこみ、銀子の突き出すチリ紙の一束をかたく眼を閉ざして口に啜えた。

「まあ、色っぽいわ。女の私でさえ、ふるいつきたいくらいよ、奥様」

千代は、紫のしごきで後手に縛られ、薄紅色のチリ紙を口に啜えた静子夫人が、一歩一歩、階段を上り始めたのを見て、感に耐えないといった面持になり、大喜びするのであった。

二 対 一

静子夫人が、捨太郎の待つ部屋へ引立てられて行く、ちょうどその頃——京子は、春太郎の巧妙な手で……されながら、次第に燃え上り、高々と吊り上げられている二つの肢を海草のようにくねらせながら、さも、もどかしげに全身を悶えさせていた。

「さ、京子、そろそろテープレコーダのスイッチを押すわよ。今、私達が教えてあげたように積極的に振舞って頂戴。そうしないと、貴女の妹さんが色々苦労しなくちゃならなくなるのよ、もうくどくどいわなくなつて、わかつてるわね」

「——わ、わかつたわ」

京子は、カチカチ歯を噛み鳴らし、のけぞるようにくつきり首筋を浮立たせていった。

この二人のシスターボーイの責手に自分の肉体が燃えさかり、積極的に振舞って見せたことを録音される、京子にとって、全身の血が逆流するばかりに辛い、口惜しい拷問であった。

「——そ、そのかわり、お願い、美津子だけは、美津子だけは——」

京子は、春太郎の仕草に、いよいよ情感が募って来たらしく、上の空のような力無さを表情に現わしながら、ささやくように春太郎に告げる。

「いいわ。私達が教えてあげた通りの要領でおねだりしたり、甘えてくれたりして、可愛い女に生れ変わるなら、その約束は、必ず守るわよ」

春太郎は、そう言って、京子の首の下へ片

腕を深く差しこみ、自分の方へ引き寄せて、京子の熱い頬、柔かい耳たぶ、頸筋から咽喉首に至るまで、優しく口吻したり、柔かく噛んだりする。そして、羽毛のように柔かい京子の唇へびつたりと唇を合わすと、京子は、声にならない声を出して、身悶えするのだ。
「何時になったら、こっちへお呼びがかかるの」

京子の乙側を受持つということになっている夏次郎は、妬ましげに熱い接吻をかわしている春太郎と、京子を見ながら、口をとがらす。

京子がおねだりするまで、手を触れては駄目、と春太郎に釘を打たれているので夏次郎は、高々と上へ吊られている京子の野性味を備えた太腿や、今や逃げも隠れも出来ないといった風に、はつきりと彼の眼前にさらしたまま料理されるのを待っている獲物に眼をそそぎつづけている。

春太郎は、ようやく、京子の顔から唇を離し、

「それじゃ京子。いいわね。スイッチを押すわよ。おねだりを始めるんだよ」

春太郎は、枕元に置いてあるテープレコーダのスイッチを押し、再び京子の服従を強い

るべく、ゆっくりといたぶり始める。

「さ、京子——」

春太郎は、京子の耳に熱い息を吐きかけつつ、

「早くおねだりしてあげて。夏次郎がジリジリしてるじゃないの。フッフ」

京子は、切なげに眼を閉ざし、大きくあえぎながら

「——な、夏次郎さん——」

「駄目よ、もう少し、大きな声で。テープに録音しているのよ。それから、やっぱり、彼にも、あなたと呼ばなきゃ駄目よ」

春太郎は、小声で京子の耳にささやいた。

「——あ、あなた——お願い——京子の、京子の……を——」

フッフ、と夏次郎は、身を乗り出した。

京子は、火のように熱くなった顔を左右に振り、そんなことを口にした魂も消えるような羞しさで、春太郎の頬へ顔を隠すような仕草をとる。

夏次郎は、優しく、ゆるやかに……始めた。

京子の先程からのかなしげな身悶えが、一層、あらわに、激しくなってきたことを、京子の横に寄り添っている春太郎は、はっきり

と感じとった。

「——京子は、唐手なんかもう二度と使わないわ。可愛い女に生まれかわるわ。だ、だからお願い、今夜は、今夜は京子をうんと可愛がって。ねえ！」

京子は、半開きになった口から、催促するような甘い声を出す。

夏次郎は一段と手を強めると同時に、美しい顔を悦びとも苦痛ともつかぬ風に歪めて、熱い吐息をつづける京子の方に眼をやっていた。

「ね、どういう風にすれば一番いい？京子のお好きな方法を聞かせてよ。愛する京子のためなら、どんなことでもしてあげるわ」

京子は、夏次郎の攻撃が一段とピッチを上げ始めたので、生々しい声をはりあげ、春太郎の腕の上に乗せられた首を激しく揺する。

そんな京子を春太郎は心地良げに見て、再び京子の耳に口を当てがう。

「さ、どんどん次を続けて頂戴、京子」

京子は、激しくすすり泣きながら、

「——ねえ、あなた」

「何なの、京子」

「——お、おねだりしていい？」

「ああいいわよ、さ、早くおっしゃって」

「——い、い……てほしいの……」

京子は、息も絶え絶えといった感で、口にする、全身を火柱のようにして、首をのけぞらした。が、夏次郎が京子の欲求を聞き入れて同時に責め始めると、うっと呻きに似た悲鳴をもらし、衝き上げて来るものにたまりかねたように、吊り上げられている肉の締った太腿を大きく揺すり、狂ったように悶え出した。

夏次郎は、雲の上に乗ったような、しびれるような気分で責めつづける。

「いかが。お気に召して？京子」

「——ああ、京子、幸せ、幸せだわ」

京子は、ぼんやりと力のない瞳を開き、唇を半開きにして強制された通りの甘い声を出す。

「私達だって幸せよ。だって、京子がこんなに——フッフ、まるで堰が切れたみたい」

艶やかな首筋を切なげにのけぞらせ、のたうっている京子を夏次郎と春太郎は、眼を細めて眺めながら、これが先程、自分達二人を唐手で打ち倒した鉄火娘なのだろうか、不思議な気持ちにさえなってくるのだった。

春太郎は、やる瀬ない吐息をもらしながら悶えつづける京子の咽喉首をくすぐるように

しながら、

「フッフ、京子って、随分、悩ましい音を立てるのね。ね、聞こえるでしょ、京子」

「——聞こえるわ——」

京子は、耐え切れなくなったように床に美しい額をすりつけて顔をかくすのだった。

「ね、京子、もうおねだりすることはないの」

春太郎は、絹のような感触の京子の黒髪に手をかけながら、優しい口調になつていう。

京子は、顔を隠すようにしながら、なよなよと首を振った。春太郎に強制され、口にしなくてはならぬことはすべていい、それを口惜しくも、テープに録音されてしまったのだが、二人のシスターボーイの執拗で、巧妙な方法で責めさいなまれた京子は、これまで肉体の奥底深くに隠れていた女の悪魔性といったものを引きずり出されたのかも知れない。

春太郎が再び、

「ねえ、何とかおっしゃいよ」

と……口吻したりすると、京子は、ああ、

ともどかしげに身をよじって、

「——お二人にお任せするわ。京子を、うんと、うんと羞しい目に合わせて」

と、甘えかかるようにいうのである。

それを聞くと、春太郎はニヤリとして、

「ほんと？ 何をしてもいいのね」

「いいわ。お好きなようになさって」

春太郎は、京子の頰の下から腕を引き抜くと、上体を起した。

「それじゃ、まず、あなたの唄声をたっぷりテープにとらせて頂くわ」

春太郎は、枕元のテープレコーダを取上げ夏次郎と並んで乙側に陣どった。

夏次郎は攻撃を道具に切替えた。箱の中身とガラス棒は、いよいよ京子を血でも吹き出しそうな狂おしい思いに突き落すのか。

「フッフ、どう、あとでこれを聞く社長は、きつと、びっくりするわ」

テープレコーダのマイクを持っている春太郎は、夏次郎の顔を見て、クスクス笑うのである。

京子は、自分の肉体が、口惜しく浅ましく思われ出したのか、舌足らずの悲鳴をあげ、狂ったようにのたうち必死に自分に耐え続けている。

「——ねえ」

京子は、もう耐え抜く気力がなくなったのか、白い頬を真っ赤に充血させて、春太郎に声をかける。

「どうしたの、京子」

春太郎は、優しい口調で尋ねた。

「何かおねだりしたいことがあるの？ 遠慮なくおっしゃいな」

「——も、もう堪忍。ねえ、京子——」

京子は、火のように熱くなった顔を春太郎の耳元に押しつけ、再び、ああ、と首をのけぞらせ、反対側へ全身をのた打つようにのけぞらせ、キリキリ歯を噛み鳴らして夏次郎の執拗な責めを耐えているのであった。

「第二回目の陥落ね。いいわ、そのかわり、第三回目と四回目は、私達二人と本格的なものにするのよ。自分だけいい気分になつて、私達のことを考えないっていうのは、いいこととはいえないものね」

「——わ、わかってます——」

京子は、のたうちながら、唇を震わせていうのだ。

京子は、瞼を閉ざし、ぐったりとなつたまま、観察を二人のシスターボーイに任せてしまっている。

責めの限りを極めた余韻の故か、枕の上に乗った肉づきのいい……は、波打ち、甘い体臭を発しながら、京子は、放心状態に陥っているのだ。

やがて、京子は、不明瞭な意識のままぼんやりと眼を開き、ニヤニヤしながら、眼を近づけ合っている二人の男に気づくと、怖しげに顔を横へそらせ、ああ、とやる瀬ない溜息を洩らすのであった。

「フフフ、京子、充分、満足したようね」

春太郎が、正気づいた京子にいうと、京子は、モジモジして切なげに首を振り、

「——お願い、そんなに——見ないで」

そういう京子の全身から気の遠くなる程の甘い色気が発散されるのが感じられ、春太郎と夏次郎は、浮き立つような思いになる。

天星社刊 △限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

特アート紙に対する極鮮明なるグラビア印刷による限定版写真集は、すでに売切れとなつた若干の集を除き、左記一覧表の通り在庫しておりますので、在庫している間に是非お申込み下さい。すべて大好評を博した絢爛たる内容の写真集揃いです。

女体緊縛グラフィック集「豊満と清楚」 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「限二」

緊縛美女八十態「美しき縛しめ」第四集 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」

山原清子「刺青の魅力を探る」 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」

二女緊縛「女斗緊縛競艶写真特集」 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」

緊縛写真集八責められる美女百態▽ 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美10」

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部 一〇五〇円 (送共) 略号「M特」

緊縛美態代表作品一二〇葉写真集 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美11」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

「羞しがることはないわ。京子は、私達の妻でしよう。でも、一寸、激しすぎたわね」

春太郎は、そういって、京子の羞恥を録音したテープレコーダを再び京子の枕元に配置し、この機に京子を徹底して調教し、一種の洗脳をほどこそうと心にきめたのである。

春太郎は、テープレコーダの動きを一旦停止させ、京子に、またもや難題を吹きかけ出した。

「見違えるようにいい女になって私もほっとしたわ。このテープを聞けば、社長もきっと大喜びでしょうよ。これから、始める私達と

のこともうんと積極的にやってね。素直にさえなれば美津子さんのことは私達、絶対悪いようにはしないから」

それから、春太郎と夏次郎は、京子の両側へ寝はらばうようにして、これから演じなければならぬ京子の仕草について、あれこれと注文をつけるのである。

身も心も無残に打ちひしがれ、深い、口惜しい陶酔の余韻の中で、京子は、彼等の樂しげに語る、そうした方法を、夢うつつに聞いている。先程、彼等の卑劣極まる羞恥責めに得体の知れない心の中の何かを引き出されてしまった思いになり、彼等に対する敵意と反感も織り混ぜて「京子を、うんと羞しい目に合わせて」と、口走ってしまったのだが、彼等はそれに気を良くし、また勇気を得た恰好で、京子の望み通り、これからの実際のな行為も京子に徹底した羞恥と屈辱感を与えてやろうと意気込み出したのである。

「——わかったわ。おっしゃる通りに致します——」

京子は、四肢の隅々までしびれる余韻の中で、気だるそうに身を動かしながら、小さく答えるのだった。二人のシスターボーイのペースに完全に乗せられてしまった感の京子で

あった。

「それじゃ、約束のキス」

春太郎と夏次郎が両方から唇を突き出す。

京子は、顔を曲げて、春太郎と唇を重ね合
い、次に、反対へ顔を向け、夏次郎と口を吸
い合った。

「さて、戦闘再開よ」と春太郎は、レコーダ
のスイッチを押そうとする。

「——待って」

京子は、春太郎の顔へ気弱な視線を向け、
哀願するようにいった。

「お願い、もう少し、休ませて。体中がまだ
しびれてるのです。十分だけでもいいわ。こ
の縄を解いて下さい」

「駄目よ。京子の気持が覚めないうちに、社
長や津村さん達と約束したことだけは果して
おかなきゃね」

春太郎がいうと、夏次郎も

「京子は私達二人の妻であると同時に、二人
共用の奴隷よ。あまりぜいたくなことはいわ
ないでね」

二人は、京子の哀願を突っ張ねると、レコ
ーダのスイッチを押した。

京子は、悲しげに臉を閉ざし、冷やかな
横顔を見せていたが、急にくすぐったそうに

眉を寄せて、首をなよなよと動かした。

シスターボーイ二人が、体を移動させ、さ
すったり、つついたりし始めたからである。

「困っちゃうな、京子。こんなにシーツを汚
しちまって。一体、どうするの？」

春太郎が打合せ通りのセリフを、レコーダ
に入るだけの声をはり上げて、京子にいう。

「——だって、だって——」

京子は、鼻にかかるような甘い声を出し、

「——あなたが、お上手過ぎるんだもの。京
子がまん出来なかったのですわ」

未だつづく、しびれるような余韻の中で、
京子は、身をよじって、唇を開くのだったが
それは春太郎に教えられた浅ましい演技だけ
ではなく、自分が信じられない程の奇妙な想
いを覚えた自分の本心からかも知れぬと京子
は、ふと、自己を嫌悪する気分にもなったの
である。

「——ねえ、あなた——お願い……して」

「何でも、こっち任せなのね」

「——だって、京子、こうして、縛られてい
るんですもの。ねえ、早く」

春太郎と夏次郎は念入りにテープに吹きこ
んで、京子の可愛い臍をはじく。

「じゃ、京子。今度は私達が楽しませてもら

う番だね。京子がはっきりと私達の妻になる
わけよ。いいわね」

京子は、いよいよこの男達と——そう思う
と、ふと、暗い衝動が、打ちひしがれた心の
底から、じわじわこみ上って来たが、どこか
で姉の名を悲しげに呼んでいる美津子の顔が
ふっと脳裡に浮かび上り、京子は、物悲しい
瞳を上げるのだった。

そんな京子の顔に夏次郎が顔を近づけて、
「ね、京子、私との約束、忘れないでね」

と、照れ臭そうな顔つきになっという。

京子は、眼に初々しいばかりの羞恥の感情
を浮かべて夏次郎を見、小さくうなずくのだ
った。

「——忘れないわ。あなたの赤ちゃんを、き
っと生みます」

「可愛い女の子よ。京子に似たすばらしい
美人を生んで頂戴」

さて、と春太郎が、京子にいう。

「妻一人に、夫が二人、どちらが先に妻を抱
くかということになると、これから色々め
ごとが起ると思うのよ。そこで私が考えたん
だけどね。これからは、何時もこういう風に
しましようよ」

春太郎は、自分の着想を誇るような顔つき

で、京子を見下す。

「妻は、同時に二人の主人の愛情を受ける、
どう、こうすれば、喧嘩にならないわ。もし
……が嫌なら——」

春太郎は、京子の柔かい花びらのような唇
を指でつつき云った。

「この可愛い口でもいいわ。どちらを選

◎躍進記念◎ 百萬元懸賞 ▲原稿募集▽

▽賞 金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千元	20篇

▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容
に、脱皮を企図する本誌の内容充実のため、
い、読者の間から懸賞募集いたします。
一、S並にMは、女性論のこと、各種各様の
テ、美、女相、一般、女性、切腹、男性、切腹、男、女、性
婦、嗜好、見、世、物、奇、態、珍、聞、生、首、狂、珍、奇、風、俗、風、
俗、文、献、好、見、世、物、奇、態、珍、聞、生、首、狂、珍、奇、風、俗、風、
し、て、文、献、好、見、世、物、奇、態、珍、聞、生、首、狂、珍、奇、風、俗、風、
一、題、材、を、他、古、今、東、西、に、亘、る、特、異、風、俗、に、関、す、
を、一、題、材、を、他、古、今、東、西、に、亘、る、特、異、風、俗、に、関、す、
い、な、い、分、野、の、傑、作、を、お、待、ち、し、ま、す、

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクシ
ョン、手記、見聞記、実見談でも結構です。更
論、説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、
シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最も
お得意のものをお選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品
に限り、出稿は、作者、書名、住所、電話番号、
の、上、二、枚、用、紙、に、四、百、字、以、下、に、明、記、し、
一、原、稿、用、紙、を、ご、使、用、願、い、ま、す、又、は、四、百、字、詰
の、縮、小、用、紙、に、は、毎、月、十、五、日、入、選、作、品、は、順、次
一、号、の、誌、上、に、発、表、し、ま、す、他、の、一、般、原、稿、と、区、別、す
一、た、め、懸、賞、に、関、し、て、の、必、要、な、書、き、下、さ、い、
一、返、信、料、同、封、の、上、に、原、稿、を、返、戻、の、必、要、な、書、き、下、さ、い、
一、四、十、一、号、の、送、付、先、は、大、阪、市、住、吉、局、私、書、箱、第
稿、募、集、係、宛、必、ず、郵、送、式、会、社、奇、ク、編、集、部、懸、賞、原
す、下、さ、い、採、否、は、誌、上、発、表、を、以、て、ご、承、知、願、い、ま、す、

ぶかは妻の自由。とにかく、二人の夫を同時
に満足させる。それを京子の義務にするわ」
憎しみ、悲しさ、怖しさ、といったものが
全く一つのものとなって、責苦の余韻より立
直れない京子の肉体と心に押し寄せてくる。
強制されたとはいえ彼等の求める積極的な姿
態をとり、一切の羞恥を忘れ去った如く、赤

裸々に敗北のみじめな姿を二人の眼前にさら
してしまった京子ではあるが、彼等は、京子
の没我の境地よりの目ざめを待たず、そうし
た方法で、再び京子を恥辱の絶頂へ到達させ
る心算なのであった。
「京子に赤ちゃんを作りたがっているお夏に
権利を最初に与えてあげるわ」
春太郎は、京子の胸を撫ぜるようにしてい

「私には、どちらを使ってくれるの。え、京
子」
と、春太郎は、京子にそのどちらかを選択
させようとするのだ。

この二人の男を同時に——京子は、彼等の
陰湿さにたまりかねたよう眉を寄せた。

「さ、はっきり返事して頂戴。最初は、どっ
ちにするの」

「——無、無理よ。出来ない、出来ないわ」
京子は、ベソをかきそうな表情で、嫌々と
拒否的に首を振り出した。

「駄目。はっきり決めるという約束だったで
しょう」

春太郎は、京子の耳に口を当て、小さいが
鋭い声で叱るのだった。

(未完)



マタニティ・ヌード

観 賞

瀬 沼 四 郎

最近「夜のたわむれ」を見た。

「十一月十四日から、東京で開かれたスウェーデン映画祭、なかでも、『夜のたわむれ』（監督・脚本、マイ・ゼッターリング）前評判が高かったが、ショッキングなシーンを期

待したむきには「不満の声」が強かった。

妊婦の白い腹が波うつ、苦痛の叫び、滝のように流れる汗。開巻のヘキ頭から、母親役のイングリッド・チューリンが、人垣の中で楽隊つきで分娩するショッキングな場面。：

（週刊朝日 66年12月2日号）
と紹介された、そのショッキングな分娩場面——分娩直前妊婦の裸出した膨満腹部を見たさに、わざわざ出かけたのである。

残念ながらカラーではなく、白黒で、約二時間のうち最初のところだけ分娩場面が出てくるのみであるが、物語の筋は、自分の母親の分娩するところを目撃することに始まって性的にケタ外れに無軌道で奔放な生活を送る母親との、少年時代のセックスの思い出から抜け出ることが出来ない青年が、過去の忌まわしい呪縛をたち切ろうとして、ついにその広大な屋敷を爆破してしまう、それによってはじめて、夫婦の間の新しい幸福を獲得することが可能になる、という、分ったような、分らないようなものである。本能をむき出しにして、享楽のために生きる母親にたいする（近親相姦そのものではないが）著しく近親相姦的な、マザー・コンプレックスをテーマとしたものであろう。

こう言えば、一見きわめてスキャンダラスな感じを与えるかもしれない。しかし週刊朝日の記事では、

「それほどグロテスクではない。ゼッターリング監督は巨匠ペルイマンのあとを追う有力

候補だと思う。常識のワクを破った作品として非常に興味があつた」(映画評論家佐藤忠男氏)

「性を扱ってもまじめだし、撮影、描写にも節度がある。一般公開されることになっても多少の修正でOKでしょう」(映倫審査員森満二郎氏)

「スウェーデンの映画は、芸術性を重んずる点で戦前も戦後も変わってませんよ。だからエロチックなものを強く期待しても無駄です」(映画評論家荻昌弘氏)

と、評価は高い。もともと、

「ヘンな場面ばかり出てくるでしょ。恥ずかしくなっちゃうわ。感想? グロテスクです」(若い女性)

というのもあるが……。

ところでその分娩場面だが――

最初にその分娩ショウを中心とするパーティのはじまる前のさわぎ。その中で、大きな飾りの一杯ついたイヴニングドレス(婦人用の夜会服)の長いスカートの前がたくし上げられて分娩前の妊婦の大きな腹がムキ出しにされるところ。すごい大きさに膨らんだ臨月妊娠腹の形が、驚いたことに(本当は驚く必要はないのだが)増田みゆき夫人の双胎臨月

蛙腹とまったく同じなのだ。長いスカートを捲り上げてすっかり腹が露出すると、その上に楽譜が書きこまれているのが見える。それを見てピーッとメロディを吹き鳴らす男。ヒロインのチューリンが本当に妊娠しているわけではなからうから、おそらくスタンド・インであろう。とにかくすばらしい臨月妊娠腹部の超巨大な膨満した姿なのである。チューリンの顔がスカートの向うに見えるから、ひょっとしたら張りボテ細工なのかも知れないが、多分本物の妊婦の腹だと思う。ことに次の場面では分娩する妊婦の下半身マル出しの姿が出て来るのだから、スタンド・インをつとめた妊婦があるわけで、その腹部だけ借りにちがいない。マル出しの妊婦の腹が、まったくすばらしかった。みゆき夫人の腹とそっくりなもの、非常に感激した。

つづいて、陣痛をこらえながら行進して、宴会が行なわれる室に入り、ベッドにおおむけに横たわる様。ここでのセリフが傑作であるが、割愛して、陣痛に苦しみながら子を産むところ。膝を開いて両脚を立て、下半身をムキ出しにする。巨大なマン丸い腹が、陣痛によって、グーッと大きく盛り上って高くなる。グロテスクに波打ちながら、間を置いて

丸く上に向かって突き出るのである。すぐく迫力のある、すばらしい場面である。小生の横にいた学生らしい若い男性が、思わず体のり出して夢中で見ていた。知識のあまりない若い人たちには、珍しい神秘なものに見えるのだろう。映画の中に出て来る、ひろげた両脚の間に立って、女の体から子が産み出されるところを真正面から見ている(勿論画面には真正面からは映らない)男でさえ、しまいに「刺激が強すぎる」と言って、失神してしまう位である。このところは、国産のエロダクシオンとちがって、さすがに逃げないで本物を描写しているが、もとのものはもっと長いではなからうか。大分カットされて短かくなっているように思われた。

このスタンド・インをつとめた若い妊婦のことが、小生は気になるのである。どのような事情で映画会社にスカウトされ、臨月になった巨大な腹部をマル出しにしてカメラの前にさらし、世界中に上映されることを承諾したものであろうか。しかもムキ出しの下腹部を下(脚)の方から男の俳優にすっかり観察されなければならぬのだ。女が苦しんで子を産む姿が赤裸々に公開される場面なのだ。勇気があるのか、必要にせまられてか、どの

ような気持ちで、このものすごい腹を衆人の前にさらけ出したのであろうか。この若い妊婦の気持ちを想像して見たくなるのである。物語では死児を分娩することになっているのも、象徴的である。

× × × × ×

話はかわるが、男というものは、だれでも女性の神秘そのものを見たいという欲望をもつ。いわゆる関西ストリップなどで、最近の「ハラワタ見せ」などという解剖学的な(？)ショウは、男のそういう要望に、こたえたものだろう。ハラワタを出して見せるといっても、できることではないだろうが、それでも若い男から中年まで、よろこんで見に行くことが、それを証明している。若い男は好奇心から、それを知りたいと思うのだろうし、中年の男は、より強い異常な刺激を求めて、そこへ行くのだと思う。それは辻村氏のようなヴェテランにも、何も知らない初心な学生にも共通なものらしい。男が、男である以上、どうしようもないものらしい。「夜のたわむれ」にも、そういう少年の好奇心を示す、場面が出て来る。男ならだれでも、小さいときに、どんなものなのか見たいと思った経験があるにちがいない。それが母親と結びつき、

それから離れられないときに、多分マザー・コンプレックスが起るのだろう。胎内妄想というものもある。幼児の体の形が、腹が丸く飛び出っていて、妊婦の体の形に近いということも、何か関係があるのではなからうか。とにかく、小生は、むずかしい理くつは不得手だが、この年をして、ハダカの妊婦に興味があるということは、一種のマザー・コンプレックス、いわば心理学的に小児症ではないかかと思っている。欲求不満による心理的小児化——あるいは発育不全——ではないかかと思っている。妊婦のハダカを見たいなんて、ずい分変っていると思われるも仕方ない。

もちろん映倫の制約もあるが(おそらく最初から)「夜のたわむれ」ともなると、さすがに、そのものズバリを見たいという、観客の小児的な欲望におもねるといふようなことはしない。理性の制止が利かないこどもの段階——それはまた社会的人間でない動物——本能の段階でもある——は、もう卒業しているからである。(しかし映画そのものはマザー・コンプレックスという小児の段階の心理を取り扱っているが、それは、そういう本能を卒業した上で、心理的にVつまり対象から一歩離れて客観的に描写しているのである)た

だしかし、小児的であるということは、男性の永遠のテーマであると思う。そのものズバリを見たいという、昇華されない低俗な欲望を、多かれ少なかれ、潜在的には、男がすべて持っている限りにおいて。

さて、こういうめんどくさい議論は抜きにして、それでは妊婦が、若い人たちの目にとらうつるかを見て見よう。

昨年の十二月から今年の一月にかけて、愛知、千葉、山梨の三県にわたる、十六歳の混血少年による、若い女性連続殺人事件のことは、まだ記憶に新しいところだ。被害者にはまるで野獣におそわれたのと同じで、まったく災難、非常にお気の毒としか言いようがない。しかし小生は、このうち、豊橋で殺された安藤和子さん(二十四歳の主婦——最初の犯行で十二月十三日)が、臨月の妊婦だったことに注意をひかれる。

いろいろの週刊誌などに記事が出たので、それらを総合してみると、まず和子さんは分娩予定日が一月二日で、殺害当時は臨月に入ってから一週間経っている。大きな腹を隠しようもなく、妊婦服姿であったことが想像される。犯人は、和子さんのそういう「妊婦姿に劣情を刺激されて」(ある週刊誌の表現)

襲ったものという。彼女は下半身ムキ出しで首を締められた上をタオルで包まれ、浴槽に頭から突っこまれた姿で発見されたという。十二月の風呂の水は冷たく、いかにも犯人の非人間的で残虐な性質——というよりか、人間らしく育てられなかった、冷酷な性質を暗示している。ところで、千葉、山梨の犯行では、被害者はいずれも全裸または下半身裸体（シャツやブラウスが前面を切り開かれて、胸は露出していた）、一人は生理中で、卵やソーセージで女体をおもちやにした（何という無教養で幼稚きわまる行為だろう！）形跡があるにもかかわらず、この二人には性的に犯されたあとはないという。つまり少年は、臨月の妊婦であった和子さんだけを、犯しているのだ。行為は首を締められて仮死状態になった間に行なわれたものらしい。母親に捨てられたこの少年は、女性にたいして特別な憎しみをもっていったというが、母性にたいする憎悪はとくに強かったにちがいない。それが妊婦である和子さんを見て、ムラムラと野獣性をかき立てられたのだろう。満足に育てられず、歪んだ感情を抑えることも知らない少年が、猛烈な破壊欲・征服欲に駆られるまに、むき出しの本能に従ったとすれば、何

という狂暴な犯行——無目的な凶行だろう。

少年は和子さんの首を締めて、マルマルと膨れ上った腹をムキ出しにし、それを眺めてどう思ったのであろうか。劣情（！）をさらに強く、刺激されて、夢中で犯したのであろうか。自分のおそろしい行動にたいする反省もなく、ただむやみに襲いかかったのか。臨月の妊婦を締めて下着をはぎ取り、妊娠した女の腹を見て、（少年は和子さんの妊娠腹部をたしかに動物のような目でよく観察したはずである）ますます欲情して、ガツガツと欲望を満たしたのであろうか。まったく悲惨な感じがする。小生は、まだしも、少年がこの臨月の腹を包丁か何かで切り裂いて、胎児を取り出してみようとしなかった（らしい）ことに、せめてもの救いを見出したいくらいである。小生は臨月腹にはもちろん魅かれるが、実際にこんな事件を聞くと、人一倍の憎悪を覚える。

新聞によれば、和子さんの遺体は翌十二月十四日に豊橋市民病院で解剖に付され、腹の中からは男の胎児が取り出されたという。

以上の悲惨で極端な例は論外であるが、思春期の男の子が、妊婦に特別の興味をもつという例は、それほど不思議なこととは思われ

ない。「夜のたわむれ」の妊婦の場面で、非常に興味をもったらしい若い学生のこと、すでに書いた。もう一つ映画の話になるが、以前、国産の「危険な人妻」という、まったくつまらない映画を、看板に妊婦らしい若い女の写真が見えるという理由だけで、観たことがある。ちょうど、ソフィア・ローレンが妊婦姿であられるイタリア映画「昨日今日明日」が評判になったところで、明らかにこのイタリア映画の、下手な真似にすぎないオムニバス形式の愚作だったが、この中の第一話で、男好きのするグラマーで浮気な、若い少女のような妻が、夫が、いっいち嫉妬するの、妊婦を粧って男にかまわれまいとするというだけの話である。妻の腹が膨らんであらわれたので、見ていると、入浴するところで脱衣するが、座ぶとんにヒモをつけたようなものがパタッと足もとに落ちた。あわよくば妊婦のハダカの腹が見られるかも知れないと場ちがいな期待をしていた小生はガッカリ。それでもその偽装妊婦が、受験勉強中らしい男の子と一緒にこたつに入って、二人が変な気を起すところがある。

「こんなカラダでも……？」

と女が聞くと、その男の子が

「どうやってそうなるか、原因を考えてしま
うから、とっても感じちゃう」

と答えるのである。セックスとか妊娠とか
いうことに、思春期の男の子たちが、知らな
いだけに余計神秘化して、敏感に好奇心を働
かせることは、一般的事実であろう。

もう一つ妊婦について犯罪事件を紹介しよ
う。これも週刊誌や新聞でさんざん書かれた
事件である。

昨年十二月二十一日、佐賀県小城町の天山
という山の中腹のやぶの中で、若い女性の死
体が発見された。被害者は佐賀竜谷短大文学
科二年生の志津田昌子さん（十九歳）、死亡
時刻は二十日正午ごろという。死体は一見し
てすぐ妊娠していることが分ったが、解剖の
結果、妊娠八カ月と判明した。間もなく、同
じ竜谷短大の国文科一年生、原田勝己（二十
歳）が、犯人であることが分った。二人は五
月ごろから特別の関係を持つようになり、八
月には原田は昌子さんが妊娠したことを告げ
られた。そのとき内科医に相談して、いいか
げんに、妊娠ではないかも知れないと（希望
的に）思いこんでしまったらしい。それから
原田は昌子さんを避けていたが、十二月十五
日に偶然出会い、一緒に映画を見てから旅館

に泊った。そのとき結婚を迫られた原田は、
二十日にまた会う約束をして、殺人に及んだ
のである。原田の方によほど同情すべき事情
があったらしいが、それは省いて言うのと、昌
子さんはグラマーで美人のわがままなお嬢さ
んで、十五日に久しぶりで原田と会ったとき
には、旅館につれ込んで「結婚してくれ」と
口説いたのだが、勿論男に、膨れた腹を見せ
たにちがいない。相当大きく膨らんだ妊娠八
カ月の腹を目の前に見て、原田はどういう感
じがしたのだろうか。それまで周囲の人たちに
隠しおおせた（？）というのも妙だが、冬に
かけてだからそういうこともあるうとして、
旅館の中では、すっかり脱いで、見せたと思
う。一週間経たぬうちの犯行、間もない逮捕
——愚劣で悲惨な事件である。

その後、裁判の過程で、妊婦が解剖されて
取り出された女の胎児は、血液型によって、
原田の子でないことが証明された。（週刊新
潮2月11日号「罪と罰」欄「殺された女子大
生の胎児の父親」）時期から見ても、胎児が大
きすぎるわけである。彼女は、近所の別の男
とも関係があり、出来た子どもが誰のものか
分らなくて、犯人に押しつけようとしたのだ
ろうか。原田にとっては、まったくやり切れ

ない話だったろう。自分が孕ませもしない妊
婦を殺してしまった後、そういう大それた行
為に及んだ動機がなくなってしまったのだか
ら。

× × × × ×

奇ク四月号「臨月腹を裂く」の中で、高野
原美氏は、北の庄七十五万石の太守、家康の
二男結城秀康の子忠直が、多くの妊婦の腹を
裂いた話を書いておられる。ところがこの忠
直の父親、結城秀康の出生にまつわる興味を
惹く話が、中央公論（67年3月号）に出てい
るので紹介しておこう。家康の正妻築山殿が
家康の子を孕んだ、妊娠六カ月の妊婦おまん
を折檻する場面である。

「侍女どもに命じ、おまんの手足をとらえ、
その衣装をむしり、容赦なく赤裸にした。そ
の四肢をけもののように縄でしばり、城内の
木立にかつきこみ、樹の枝につるさせた。

——死ねや。

いちいち侍女に叫ばせ、弓の折れをもって
その腹を答打たせた。おまんはすでに六カ月
の妊婦であり、どういうわけか普通よりも腹
は大きい。あとでわかったことだが、双生児
が入っていた。打ったびに妙に乾いた音が鳴
った。おまんはすでに生きものとしての美し

さも威厳もなく、ただ虚空に腹を吊され、その腹を同性から打たれつづけた。……」

ところがこのおまんが、その翌年二月双生児を産んで、一人は窒息死していたが、生き延びた方が結城秀康になるのである。(同誌司馬遼太郎「豊臣家の人々」)

「妊婦責め」については、小生の本来の領域でもないで、詳しく述べることは避けるがおまんが、わが増田みゆき夫人と同じく、双胎の妊婦だったことが、とくに関心を惹くのである。もう一つ、ベトナム戦争の悲惨は、ジャーナリズムで喧伝されて久しいので、今さら書かなくてもよいが、妊婦が出てくるところ、想像力を促すものがあるので、一、二書いてみたい。

南ベトナムの避難民村での話――

「妊婦がいく人かいる。警戒の目を盗んで、ベトコンの夫や息子たちが、家族に会いにくるらしい。『お互いに知っているくせに、だれもベトコンが帰ってきた、とはいわない』と、警備に当る民兵がいう。別に腹を立てているふうでもない」(朝日新聞2月23日の夕刊)

男はいないはずなのに、どうして妊娠したのか、と妊婦を拷問することもあるのかも知

れない。妊婦が逆さ吊るしに吊るされたり、場合によっては、戦場の荒廃した心理状態から、高野氏好みに妊婦の腹が切り裂かれて、胎内を開いて子を検べる、というようなことさえ、ありえないではない。同じような記事で、最近反響の大きかったものから――

「……十余人の婦女子が、ヤシの木陰にかたまっていた。一人はムシロをかぶって寝ている。大きなおなかをしていて、今にもお産しそうだという。……通訳兵が『いつ生れるのか』といった。妊婦は『はっきりわからないけど、今月中だわ』と答えた。

……

『亭主はどこにいるんだ』という問いに、妊婦は『もう死んでしまった』といった。

『それでなぜ妊娠するのか』と通訳兵が反問すると、彼女は黙りこんだ。夫が解放戦線のゲリラである場合に、このような言いのがれをすることが多い」(同紙4月14日「『焦土作戦』に泣く南ベトナム農民」)

勿論、戦場といえども、人権じゅうりんが簡単に許されるとは思われないが、いつ自分が殺されるかも分らない戦争の異常心理の中では、どんなはずみで、とんでもないことが起らないとは限らない。たとえば、まったく

単なる想像にすぎないのだが、村の中の妊婦をすっかり狩り集めて、マルハダカにして一カ所に並べて立たせ、腹部の大きさや恰好から、受胎日を検べてベトコンの出入りの状況を推測する、というようなこともあるかも知れない。強情に言い張って反抗する妊婦は、拷問されることは勿論、場合によっては、その生々しい腹を開いて、何カ月位の胎児かを検べることであったりあるかも知れない。不恰好に膨れた大きな腹を、突き出して立った妊婦たちが、マルハダカで面白半分にはじろじろと観察される、見られるだけでなく腹をさわられ、撫でまわされて、触診される。証拠として、前や横から、異様に膨満した腹の写真をとられる、というような空想はどうであろうか。非道な妄想だと、叱られるかも知れないが、マス・コミでは、以前から、もっと非道な行為さえ、行なわれているとも言われるから、この程度の罪のない空想は許されるのではないかと思う。逆に、ベトコンの夫が久しぶりに帰って来たら、妻が妊娠している。嫉妬に狂った夫が、妊婦の腹を切り裂いて胎児を取り出し、殺してしまふ、などという悲劇もありえないことではあるまい。

以上は、まったく小生の勝手な空想にすぎ

ない。臨月の妊婦の腹を裂いてみたら、胎内の子は混血児だった、というのも、ありえないことではない。戦争によって悲惨をきわめるのは妊婦であろう。

× × × × ×

「マタニティ……」というようなソフトな題で書き出しておきながら、妊婦の凌辱とか妊婦の拷問とか妊婦殺人犯罪とか穏かでないことばかり、原稿用紙で二十枚以上も書いてしまった。本題にもどろう。

今年は、何回も言ったように、ヒノエウマ解禁で、空前の出産Ⅱ妊婦ブームである。秋までは続く、いや、来年まで持ち越しそうだななどと言われるが、だんだん（只今四月末）暖かくなって人々が薄着になって来たためか街には妊婦が溢れている感じがする。妊婦たちの全盛期——まさに満開であるというところだ。グラマーの堂々とした妊婦はそれとして、小柄で色白の妊婦が、よくもまあこれほど膨らんだものだと思われるほど、途方もなく大きな腹を突き出して歩いているのを見ると、頼めるものなら何とか頼んで、そのものすごい妊娠腹をハダカで見せてもらいたいものだと思う。衣服の上から眺めていても、増田夫人の妊婦ヌード写真の腹の様子から想像

して、けっこう楽しいのであるが。

元来日本人は小柄であるため、妊婦の腹が欧米人にくらべて、大きく目だつと言われている。人間の胎児の大きさは人種によって違うわけではないらしい。ありがたいことである。中には双胎児を孕んでいる妊婦もあるのかも知れない。

バストやヒップが立派であることは、ただちに、性的魅力がすぐれていることとみなされる。アメリカの（最近では日本でも）男性雑誌には、ウエストがまったく無いみたいにく、バストやヒップのすばらしく大きい女のヌードがのっているのが普通である。以前、どこかのバーのホステスで子を産んだあと、客の求めに応じて、人乳を飲ませるのが評判になり、風紀上よくないと注意を受けたという記事を読んだことがある。アメリカの男性は一般に小児的になりつつあるそうだから、物質文明が発達すると、おいおい日本でもそういう現象が見られるようになって来た、というところかも知れない。小生も異常に——むしろ奇形的に大きい乳房は好きだ。ことに妊婦の乳房であれば、もっと好きだ。

そのような乳房崇拝を反映してか、ストリッパーの中には、わざわざ妊娠して乳房を大

きくし、腹の形がくずれる前、妊娠六カ月位で人工流産をする者が少なくないと言う。妊娠六カ月の流産は、危険であり望ましくないが、それにもかかわらず、そういうことが行なわれる（勿論一たん大きくなった乳房がもとに戻らないようにいろいろ手当てをする）ということである。妊娠したままおろさずに臨月になってもそのデカイ腹を突き出して、妊婦が舞台に立ってくれば、さし当り小生などは、その方が大いに歓迎であるのだが。

とにかく現在進行中、只今最盛時の観がある妊婦ブームに、ジャンジャン妊婦ヌードを撮っておいて下さることをお願いしないではいられない。本誌（66年12月号辻村氏の「いのちふくらむ」）でも、「妊婦フォトを泣くように懇願してくる」と評された小生などは別として、一度に多く分譲しても、需要がそれほどないということなのかも知れないが、ブーム前にみゆき夫人のものが多量に出てしまったてからは、この妊婦の最盛期にあって、手をつかねて一種の中だるみになっている恰好である。分譲方法についてはともかくとして、編集部は奮起を是非おねがいしたいところである。

〔告白手記〕

真^ま夏^{なつ}の悔^{かい}恨^{こん}

高村初子

私が十八才の時の夏だった。忘れもしない買物に出た帰りの私のそばを通りすぎて止ったジープ。その助手台から、若い女が、

「同じ道だったら、お乗りになりませんか？」と誘ってくれたのだ。一目で米兵相手の女と分った。しかし、親切に言ってくれたのだし、女づれなら悪いことはしないだろう、と思いついた私の愚かさ。何よりも炎天下を、重い荷をかかえて四キロもの道を歩かねばならぬ苦しみを考えて、あっさり乗ってしまった事が、涙が出るほど口惜しい。

分れ道になってもジープは停ろうとせず、物凄いスピードでとばし始めた。

「下して下さい、下して下さい」必死で叫ぶ私に目もくれず、車はつっぱしった。後部座席の私はとび下りる事も出来なかった。そして、うす暗い林の中でジープは停った。座席にしがみついていた私は引ずり下され、ニタニタと笑いながら周りを囲んでいる三人のアメリカ兵を見たのだ。真青になって私はワナワナと慄えているばかりだった。声を出して助けを呼ぼうにも、のどはカラカラで声にならなかった。

たと言声が出たとして、町から十キロも離れた山奥で誰が助けに来てくれたろう。

いきなり押し倒され、スカートをぬがされ

始めた時、私は初めて悲鳴をあげて暴れはじめた。しかし、三人のアメリカ兵に囲まれた女が、どんなに暴れたって、結果は始めから分り切っていた。

口の中にハンケチを押しこまれ、バタバタと空しく手足を動かしている私は、かえって狼共にとって、服をぬがせるのに都合だったに違いない。その上私をあざむいた、あの女まで手伝って私の髪の毛を足でふんづけていたのだ。下着一枚にされるのに五分とかからなかったらう。私の頭の中は、火の出るような思いだった。シューミーズが音を立ててさけ、ブラジャーは苦もなく外された。

乳房を押えてうずくまる私は仰向けに押し倒され、両腕に二人ずつかかって、肘をのばされていた。手首に縄がかかると思った時、両手は、地面に打ちこまれた杭に別々にくくりつけられていた。

私はもう暴れなかった。いや、暴れることが出来なかったのだ。全身がカッとこえるような恥かしさがつきぬけ、私は両足を猿のようにまげているだけだった。その両足首が痛いほどつかまれ、右と左にグイグイ引きさかれ始めたとき、私はやっと吐き出した猿轡の下で、何か続けて滅茶苦茶に叫んでいた。

けれど、どんなにもがいても、足首にロープをかけられ、左右から四人がかりで、引かれては、どうする事も出来なかった。

やがて大の字に、ぶざまな姿で足首を青竹の両端にくくりつけられた私は、もう叫ばなかった。目を固くとし歯をくいしばって、気の狂うような羞恥にたえていた。真夏の日光が私の全身をあます所なく照らし、三人のみだらな米兵の目がギラギラと集中していることは肌がいたいほど分っていた。

私は身悶えた。青竹が宙に吊られ、それは私の頭の方まで引かれて地面とすれすれに固定されたのだ。

それは、気が狂うような屈辱のポーズだった。腰の関節は音が出るほど曲げられ、お尻をつき出し、体を二つ折りにされ、赤ン坊がおしめをかえられるよりもっとひどい姿で、三人のアメリカ兵に次々になぶられたのだ。その上耐られなかったのは、憎い女の責めだった。女であるだけに、女にとって最大の弱点を知っているのだろうか？

耳を掩いたくなるような猥らな屈辱の言葉を次々にあびせながら、彼女は、私の羞恥をしつように曝き出し、アメリカ兵達もありとあらゆるいたぶりを加えたのだ。

私は、うめき、もだえ、悲鳴をあげ、あせみどろになって、泣いた。

漸く静かになった時、ぐったりとなった私の目の前につき出されたのは、ガラス製の浣腸器だった。女は憎々しそうに、そのガラス器具をみせびらかしながら言うのだった。

「お嬢さん、お前が泣くのはこれからだよ。これが分るかい、タップリ液を入れて、浣腸してあげるからね、どんなにがまんしても、がまんしきれるもんじゃない。お前まだ処女だろう。フフ……生娘が、あられもない恰好で、たれ流すなんざあ、いいさまだね。あのアメ公達に恥かしい所をよく見て貰いな、ついでにちゃんといい所を写真にとってやるからね。心配はいらない、あのジョーは写真技師なんだから、立派な芸術写真が出来るよ。そのあとで、皆から、ゆっくり女にして貰うといいわ」

私は不思議にこの時の言葉を覚えている。

「浣腸される」

「そしてその結果は？」

無駄と知りながら、私は気狂いのようにもがき始めていた。しかし、体をくねらせるだけ、男達のみだらな情欲をかき立てるにすぎなかったのだ。一刻の後、私のお腹の中は暴

風雨のように荒れ狂っていた。耐えれば耐えるほど、薬液の効果が大きくなってゆくことに気がつかなかった。

がまんしがまんを重ねたそのあげくに、私の全身は虚脱し、意識が遠のいて行った。

つづけざまになるシャッターの音。キャットと猿のように叫びながら喜んでいるアメリカ兵。それらが夢のように聞えていた。気がついた時、後始末された私は、別の所にしかれた毛布の上にねかされていた。もう私は暴れる気力もなかった。

手首が再び杭にくくりつけられる時も、されるままになっていたし、腰の下に毛布が重ねられ、両足が左右に曳かれてしばらく経つ時も抵抗しなかった。

かわるがわる三人の毒牙にかかり、いましめをとかれた時、私の体はボロクズのように投げ出されていた。

アメリカ兵が口笛を吹きながら乗り込んだジープの音が消え去ったあとも、私は草むらの中に、泣き伏していた。夕やみが近づいた時、私はのろのろと衣服をつけた。ブラウスと、シュミーズはビリビリにさけていた。

むざんにうばわれた、永遠に帰らぬ純潔。私は痴呆のように立ちつくした。

だが私の呪われた青春は、それだけでは終らなかったのだ。

十日後、漸くあの日のショックから回復し町を歩いていた。やはり青空のいい天気だった。その時だった、通りかかった米軍のトラックの上から突然、口笛と歓声がおこったのは。

思わず、見上げる私の目に忘れる事の出来ない、あの時の米兵達が映った。

しかもその中の一人がポケットから写真を出すと私に、これみよがしに見せるではないか。それは私のあの屈辱の写真だったのだ。

思わず私は顔を掩い、走りだしていた。

何という非運なのか、その時私は、MPに出あってしまったのだ。真青になってにげる私、そして私を指さしどなる米兵。

当然MPは私を追いかけ、とらえた。

何と弁解しても無駄だった。言葉が通じなかったのだ。暴れる私に、業をにやしたMPは、遂に私に後手錠をかけた。集ってくる人々にみられる恥しさに、私は抵抗もせずジープに引上げられ、米軍キャンプにつれて行かれた。そして私は売春婦として、医務室で検診をうけねばならない羽目に陥った。

私を待っていたのは、無気味な検診台だっ

た。日本人の通訳が入って来て、

「あんたパンパンだろう。検診をうけないといけないから、着物をぬいで台に上れ」といった。私は必死になって弁解した。しかし通訳はニヤニヤしながら頭を振った。

「何といっても、連中は信用しない。早くぬがないと、力づくで裸にされるぞ」

あとすざりする私にMPがよって来た。遂に私は観念した。

「自分でぬぎます」といって、後手錠を外して貰った。周りにはアメリカ兵が一杯集って来て、盛んに口笛を鳴らすのだった。

私はべそをかきながら裸になった。ブラジャーまで外したが、パンティはどうしてもとることが出来ず、拒み続けた。

とうとう私は、米兵が持って来たロープで後手に縛られてしまった。MPは私を押し倒すと、苦もなく、腰のものをはぎとった。

そして最初に尿の検査をするから、向うの室に行つて、便器に尿を出してこいという。

そこに行くには、多勢の米兵の前を通らねばならないのだ。私は「縄をといて下さい」と泣いて頼んだが、通訳は冷淡に黙殺した。その上、「早く行かないと浣腸してむりにとられるぞ」とおどされた。

私はあの日の屈辱の想出が頭に浮び、恐怖にふるえた。思わず小走りに走っていた。だが米兵の前を通るとき、あの写真を目の前に突きつけたり、後手の縄尻を引っぱったり、私にいたずらをしかけるのだった。さすがにMPが来て注意し、漸く検査室に行けたのだった。

そこでも、どんなに私はぐずり哀願した事だろう。トイレの中で尿をとると思った私は皆の見ている前で、高い椅子の間におかれた便器に排尿することを命ぜられたからだ。

しかし結局は私の負だった。浣腸という切札に屈服して遂に私は命令通りになるより他なかった。そしてそれから一時間。検診台に上り、気も狂うような羞恥に全身を真赤にそめながら、すべてをさらけ出して、検診をうけねばならなかった。

漸く台から下され、縄をとかれた私は、もう動く気もなく泣きじゃくるだけだった。

平凡だった私の生活が狂ったのは、この時からだった。一度は死のうとまで思った私だったが、どうしてもその勇氣はなかった。そして、誘われるままに米兵につきあい始め、何回か警察の検診をうけ、転落の一途をたどって行ったのだった。

恍

(こうこつ)

惚

恍

惚

保 藤 久 人



守口順平はまだ、正常に分別できる状態に立ち戻れずにいる。里絵は泣くことが仕事のよう、シートの中に突ッ伏したままだ。

ふたりともに、四囲の状況を慮ることを忘

れ、束の間の妖異の情事に熱中していた迂濶

さを、徐々に悔やみは始めている。

入口のドアは施錠^{せじよう}されていた。ふたりきり

だということに安心し切っていたのだ。

ドアに向かって坐っていた順平には視界はなく、物の見える里絵は背を向けていて、伊津子の入って来たのには、全く気づかなかつたのだ。ふたりにとって伊津子の出現は、忽然^{ぜん}というよりほかの形容はない。

「でも、よかったじゃない、サトちゃん。モ

りさんも、うまい具合に口説いたものね。あたし、見ていて驚いたり、感心したり……」

伊津子の声音^{こゑ}は平静に復していた。が、瞳だけは鋭かった。

「かんにんして。ママさん——」

里絵は濡れた顔をあげ、悄然^{しやうぜん}として言う。

「詫びることはないでしょ。あなたがたの自

由なんだもの。ア、すまないけどねサトちゃん、お絞りを取って頂戴な」

伊津子は香水の匂い立つタオルを順平の鼻先に突き出して、うすら笑って言った。

「お・て・て、汚れているわね。お口も——」

里絵は坐ろうとした体を中途でとどめ、中腰に浮かしたままの姿勢で真ッ青になった。

お・て・ても、と伊津子が言うからには、それほど前から知っていたらしい。あの狂態じみた動作も、口走った言葉のすべでも、見ききしていたことになる。

底知れぬ恐怖感で、里絵の全身は総毛立ってゆく。腋の下からツーツと冷汗が流れた。

「ママさん。私、帰ってはいけません？」

彼女は居たたまれない。キュツと唇をかみ締めて佇立する。伊津子は里絵を見た。

交叉する視線に、火花が飛び散った。

「ママさん。ぼくも帰ろう」

「いいえ。モリさんはまだ帰さないわよ」

伊津子は体をずらせて通路をふさぐ。

順平は里絵をみつめた。

熱気をはらんだような里絵の瞳は、真剣になにかをささやきかけている。彼はその視線を受け止めた。この場の情勢からいって、少くとも里絵の心をいたわり、彼女の立場に同

調してやるのが義務のような気がする。彼女を愛おしむ気持ちも強く芽生えてきている。

「帰るよ、やっぱり——」

「どうしても、帰るの？」

なにげなく、伊津子は里絵と並び立った。

チラチラッと視線が忙がしく走った。

明らかに、順平の心理を熟知した意識的な挑む動作だった。

が、それと知りながらも、彼は、伊津子の姿態より発散する威圧感に息苦しさをおぼえるのだ。眼の前に居るふたりの女性の、その片方は小さく、もうひとり雄大だった。

順平の心はふたつに別れて激しく争う。

小さいほうが淋しそうに衰えていった。

身ぶるいとともに、いったんは浮かした腰を、音立てん勢いでシートの中に落した。

それが彼の、どうにもならぬ現在の意思のようであった。

× × ×

へいまさら隠すこともない。それに羞恥の実態まで見られてしまった。伊津子とふたりきりになって順平はまずそう思った。するといくらか気持ちが悪く落ち着き大胆になれた。「ママさん。ぼくはこのあいだの晩、変なこ

思ったでしょう。滑稽だった？」

「あの娘が言ったのね。でも、そんなこと、どうだっていいじゃないの」

「いいや、よくないよ。羞ずかしいよ」

彼は面映ゆい歪んだ微笑を浮べた。彼の複雑な表情を、伊津子は面白そうに眺めた。

「ほんの偶然のできごとだったらしいけど、それにしてもさっきは凄かったわよ。一体、どちらがどうしてどうなったの？」

「わからないよ。ぼくにも——」

「あの娘もまた、ずいぶん思い切ったことをするわねえ。驚くよりもあきれてしまった。

で、あなたは、あんなことで満足？」

彼は無然とした面持ちで伊津子を見た。

つい先ほど、さようならも言わないで帰って行った、しょんぼりとした里絵の後姿を脳裏に浮かべると、彼の胸は鋭く痛む。

出しなに彼を見つめた彼女の眼は燃えているようだった。遂には伊津子の誘惑に負けた

彼を、蔑すんでいたと思えてならない。

そのときの視線が、なぜか忘れられない。

なるほど里絵のといった態度は、楚々とした彼女の人柄から言っても、さらにはまた、若い女性のものとしても、およそ想像も及ばぬ異状なものだったが、彼の「欲求」を、知った

上での実意だったような気がする。あの寸時は、彼も終始真情でもって相対していたはずなのだ。

それなのに、すがりついてくる里絵の視線をわざと避けて、眼を伏せてしまったのだ。

里絵との状況は、結果においては伊津子の故為ともいえる無粋な邪魔で半燃で終わった。

△そのためおれは伊津子に誘惑された▽

と、勝手な理窟で自分を弁護し、卑屈な我が心を唾棄したいと嫌悪しながらも、すでに魅入られたかのごとく、伊津子の容姿に瞳を据え、なめるように見つめているのだ。

「ママさんは、ぼくのことをどう思った？」

「どう、って。なぜそんなことを気にするのよ。別にひとさまに迷惑を掛けるわけでもないし、持って生れた人間の性質なんですよ。憚ることはないと思うわ」

「じゃ、理解してくれるの？」

声に出さず、伊津子のかすかに頬で笑う。

「それよりも、モリさんが皆話してくれたことのほうが嬉しかったわ。なぜって、あたしたち、夜の職業の女なんて信用できないというのが常識でしょ。それなのに、ねえ」

伊津子は今度は声高く笑い、そのあと急に表情を引き締めてゆく。

「モリさんの真実の声、聞いていてとっても気持ちよかったわ。あなたって、人柄どおりにワリと純粋なんだもの」

順平は、心ばかりか体までがおののく。

伊津子の真意がどのあたりにあるのか、推察することは不可能だが、いままでは遠い幻影だったのが、急に実体となり目前に形成されてゆくような気がする。ただ、思いどおりに手のとどかぬもどかしさがあり、それが、なおのこと、彼の欲求を刺激するのだ。

座席に入りきらぬ伊津子の下肢は、薄御召の上からでもそれとわかるほど、優美に「くの字」を描き出し、上体もやや傾いている。

澄みきったきれいな瞳。ときには吊り上り気味になり凄艶ともなる眼が、不思議なまたたきを繰り返しつつ、じっと彼を見据えている。厚い唇はふたつに別れて妖しく光る。

戦慄を誘う濃厚な相貌だ。悩美の媚態であった。順平は瞳を離すことができなかった。

「サトちゃんじゃないが、今夜を偶然の機会にしてみる気はない？ あたしのような女では、モリさん、不満かも知れないけど——」

愕つとするほど露骨な誘惑だ。

順平はゾーッとして言葉も失っていた。

「試してみないこと？」

伊津子は立ち上った。

艶然と、むしろ傲慢とも見える態度で彼を下位に見据えて嬌笑した。

順平の前に威容のある壮美が現出した。

それは、恐しい魔性であると同時に、幻妖世界での愉楽への契約書なのだ。彼は、神秘像かと敬虔な眼で、伊津子の豊身を仰いだ。

だが、彼の心うちには説明のしがたいとまどいもある。たしかに、隠蔽し秘めつづけたあさましい異形の性を、泥酔のうちに口走ったことは事実であろうが、それがそのまま、即応的に同情味さえ含めて相手に理解されるなどとは、到底信じられない現象なのだ。

彼の欲求は、当事者である相手の許容度合にかかわらず、普遍的なモラルから逸脱した「異常」なものの部類に入ることば事実だ。

彼の真の欲質を知った人は激しく嫌悪し、あるいは嘲罵誹謗し、さらには、人間ではない汚らしい動物かと解釈する人もいることだろう。その性向心理を所有するのが人間であると諒知はしても、現実では、破倫行為だと指弾し非難を浴せるに違いないのだ。

いづれにしても、むき出しにしては公道を濫歩できない質の深部心理なのだ。古くから培われて確立されている社会の既定観念は、

順平のような人間の現存することを認識しながらも寛容はしない。希う欲求点も、つまるところ「異常性」という、いまわしい語句でもって差別してしまうのだ。

「それなのに、それと知って伊津子は——」
と、順平の心は、相手の心理の不測に怯える。不可解なのだ。あるいは、自分に対応する「性」の所持者かと思う。それ以外には伊津子のこの言葉を理解しようがないのだ。そうだとすれば「同類」である。彼は総身に熱気を感じた。

「でも、正直に言ってモリさんにあんな趣味があるなんて。人は見掛けによらぬものね」
「それ、皮肉なの。ママさんはぼくのことをいやらしい奴だと思っているのでしょう」

伊津子は答えず頬をくずして「さあ、行きましょ」と、彼をうながす。

期待に胸をはずませながらも彼の理性は、行動しようとする神経に躊躇を強いる。すさまじい情炎で感情が滅裂しそうなのに、その成果が、可能性が有り過ぎるのでかえって恐しい。なんとなく無気味なのだ。

「どこへ行くの？」

「黙って、ついていらっしやい！」

その音調に、彼は自分の知っている伊津子

とは違った、もうひとりの「女」を感じた。ためらいが強く働きかける。

伊津子は彼の手首を掴んだ。力が入った。

順平の腕の付根に、キーツと疼痛が走る。

はじめて知った伊津子の力量は、即座に彼の心身を慄伏させ得る威力があった。

哀れな声で痛覚を訴えながら順平は、引立てられて、伊津子の後へすがって行った。

× × ×

胸の上に巨大な軟体物が覆いかぶさり、圧つしたり浮いたりしている。何物とも知れぬものは、圧着した瞬間はひいやりとして、すぐ、気味の悪い熱気をはらんでまといつき、圧迫で息苦しい。その感じは、BAR「F」から外へ出たときの、雨模様の生暖かくむし暑い、いやな夜気に似ている。

順平はまどろみの中で自然にもがき、無気味な粘着物から逃れようとのけぞった。

その顔を、蛭が這い回って迫る。

彼はいや応なく目を開かされた。眼球がチカチカと痛む。

「しっかりして頂戴。案外だらしのないのね」

その声で意識の目覚めた彼は、のぞき見ている伊津子の、淡く色づいた、顔を眩しく見た。ストレートに梳き解した黒髪は、長々と

うねって豊頬に伝い流れ、ふくふくとした双つの胸丘の頂点を隠していた。その姿態は、一見して冷感をおぼえるほどなまめかしく麗美だが、彼は、色気よりも睡気が強く、体も異様に気懶い。

「何時？ もう朝なの？ 会社へ行かにな」

「いやだあこの人。寝呆けちゃダメ！」

伊津子はいら立たしく言う。

「きょうは日曜日よ。会社はお休みでしょ」

「そうだったのかな」

彼はぼんやりと答える。伊津子の濃艶な裸身に接しながら、もうそのことに意が集中していかない。どうでもよかった。

彼が伊津子に対して抱きつづけた妖しい期待は外れた。やはり、夢想到にすぎなかった。

彼はそれを感じ得た。いま彼の内部にとどまっているのは陰鬱な痛嘆だけである。

伊津子に連れられて山裾の奥深いところにあるホテルへ入った。特別室らしい別館の豪勢な一室で、改めてグラスを交わし、そのあとに湯にも入った。

だがその過程には順平の希う闘戯はなく、伊津子は終始、彼の感情を無視し通った。自己嫌悪の入り混じる哀感と、やりきれぬ孤独感で暗然とした時間が、経過したのにとどま

る。

「ただの女だったのか」彼は失望した。

「しかしこの肢体で——」と、その思いは

彼の女性観への絶望にまで発展する。脳裏に創りあげた理想彫像が微塵と砕けてゆく。

おのれに向かって齒がみしたいほど口惜しく、もの悲しさばかりがつのってくるのだ。

彼はふと、里絵を思った。

彼女のうちに秘められていた鋭さは、あれこそ誠の、乙女の一途ないじらしい心根だったのかと、改まった気持ちで驚嘆しつつ懐しむ。

彼の想念を破って、伊津子の淫らな唇が執拗に追い迫ってくる。首を振ってあがらい、「睡いよ」とつれなく言う。いまはひとりきりになって安眠をむさぼりたいのが本音だ。

「この、意気地なしッ！」

かん高く尖った烈声と、順平の頬が高鳴るのと、起き上りざま、伊津子が彼の上に跳ねかえって来たのはほとんど同時だった。

彼の全神経は叱咤と平手打ちの覚醒剤で瞬時にビリついた。

伊津子は切れ長の眼を吊り上げていた。

瞳は美しいが鋭烈に、妖異の光茫を放って彼を射すくめ、感情の激昂で、乳白色だった

首から胸もとまでバラ色に輝いて見えた。

彼の全身は、戦慄が縦に割り裂き、骨までがガクガクとおののく。

「もう休養はじゅうぶんでしょ。さっきのはお決りのワン・セット・コースだわ。これからはじまるのが本番のお遊戯よッ」

「どういふことだ、これは——」瞳目して彼の心はウロウロする。だが、そんな思索はたちまちにして寸断された。

伊津子は動いた。行動を開始し、過激な暴虐への道程に足を踏み入れていたのだ。

巨大な肉塊が、ベッドのクッションを利用して球体となって跳ね弾む。彼の両手は、この夜はじめて見知った逞ましい伊津子の下肢に捕われて、シーツの中に埋って沈んだ。

恐るべき健脚だった。

驚くほど弾力のある柔軟な体軀はすさまじく躍動した。圧力で肋骨が折れ砕けるかと思うほど、息づまる胸苦しさがつづく。

間断のない強圧。彼の呼吸は無理矢理に押し出され、グ・フ・グ・フと奇怪な音韻でとぎれとぎれ、そのあいだも、きびしい平手打ちが加わる。彼は、首を振り振り、涙を流した。

ツンと鼻の奥が痛む。あがらえばあがらう

ほど苦しさが増す。耐えかねて彼は、一切の抵抗を断念して暴力の自由になった。伊津子の異常を骨髄にしみて思い知らされたのだ。

さんざん荒れてから伊津子の暴力は漸くにして止んだ。

そして、力を失い、眼ばかりをギョロギョロと光らせている彼を見てニヤツとする。

その凄絶な驕笑に、順平は足の爪先がビリッときれんし、わなわなと唇が震えた。

「降りなさい。少し遊んであげます」

彼は勇猛心を奮い起て伊津子に襲いかかった。しかし、寸前の暴力沙汰は予備運動の域を越えて、予想以上に彼の体力を絞り取ったらしく、腕力には自信のある彼が、いったんは相手を捕らえながらも、すぐ、跳ねのけられてしまう。伊津子は巧みに抜け出すのだ。

汗でぬめった肌は、まるで鰻のように捕えようがなく、その間隙に伊津子は、足指で彼の急所を正確に狙う。

グフツとうめいて、彼は蹲る。

と、その肩先を足蹴にして後転させる。奔放に、伊津子の姿体が動く。その大胆な挙動は妖怪に似ていた。

ふたつに別れて豊胸に垂れた黒髪を右と左の手に束ね持ち、女怪と変化して乱舞する姿

は、能舞台での鬼女を髣髴させる。その凄美は言語に絶した。

放恣であり淫逸でもあった。

その風姿からは、婉然として優雅な、和装姿の伊津子を想起することは不可能だった。

順平はただ圧倒された。いまにも破裂しそうな動悸と、荒く乱れた呼吸で全身を波打たせ、精魂尽きて床の上に伸びたとき、伊津子は傲然と彼の上に君臨していた。

× × ×

マダム伊津子のすべては、見た目にも猛々しくて逞ましい。それでいて、若鮐のごとく精悍に跳ね、若鹿のようにしなやかに動く。その様相は、すさまじくもあり、また華やかな、暴虐の旋風であった。

——順平の両手首を別々の足で踏みつけて、顔を真下に見下して厳然と聳え立つ。

「浴せてあげようか？ いつも怪しいことばかり空想しているそうじゃない」

——揃えた両手首を踏み締め、自由な片方の足指で、ところきらわす蹴って蹴る。

「舐めてみる？ だったら入れてあげるからお口を開きなさい。でも、断つとくけど、唇が裂けたって知らないわよ。あたしの足ってこの通り大きいんだもの」

——胸の上に乗っかり、膝頭で彼の手の動きを完封して、執拗な責め方を繰り返す。

「大きくアーンして。ハイ。ツバキ！」

言葉つきはいたって優しい。だが動向はすべて、弱小動物を翻弄する獐獍な野獣だ。

苦虐に耐えかねて順平がうめくと

「なによッ。ずう体ばかり大きくてさ。意気地なしのくせに理窟だけは一人前なのね。このバカッ。エッチ！ 変態野郎！」

と、口汚なく嘲罵し、さらに激烈な、はしたない語句を浴せかけ、その自分の言葉に挑発されて、再び狂ったように荒れるのだ。

順平の夢想する幻界での出来事は、それが奇形であり異常であるほど、耽美にふさわしい恍惚とした悦楽が約束されていた。

だが、現実の事象として体得した感覚は、苛酷な苦悶に終始する。その差異は雲泥のごとく、甘美は、遥かに遠くてはなはだ淡い。

ものすごい伊津子の暴虐に、順平は空恐しくなってくる。無駄を承知で反撓を試みる。

何度か満身に力をこめ、体ごと伸縮して、隙を見て足を跳ねて伊津子を蹴倒そうと努力した。その度に彼女は敏捷に身をかわす。

「悪足掻きはおよしなさい。あたしのほうには、ちよっとした目的があったのよ。だから

はじめから計画的に、適当に体力を消耗させちゃったのだもの。いまなら、あたしには手ごろなオモチャも同然よ。もういい加減に観念して愛玩物になってはいかが？ そのほうがエッチなあなたには嬉しいはずよ」

伊津子はケタケタと淫笑した。

妖怪さながらに変幻する伊津子に、精神の顛倒を繰り返しながらも順平は、しだいに眩惑し、過度の玩弄によって急速に抵抗力を失っていった。その様子を見とどけてから、伊

津子はようやく彼を解放した。だが、まだ終りではなく、ほんの序章だったのだ。

なにやら持ち出してそこらあたりに並べ、まだフウフウと息づいている彼の体を、足の先でゴロンと反転させた。

その举措は、顔容だけが女菩薩で、実体は夜叉かと思うばかりに兇暴だった。

順平の魂は惑乱の中で怖気づいて収縮し、なおさらに反抗の氣力を喪失して行く。

伊津子は蒲団を引き出してきて、それを巾のままでクルクルと巻き、一本の丸太ン棒のようにした。持ち上げてうつ伏している順平の背に横一文字に押しつけ、片方ずつ、彼の手を抜き出して、棒状の蒲団を背中とのあいだに挟ませ、器用な手捌きで、体と蒲団と

両腕をまとめてもろともに、X字型に扱帯しごきで
強く締めあげた。

ヨイショと、威勢の良い掛声をあげる。

相当な力である。順平の体は蒲団といっし
よに抱えられてまた仰向きあおむきになった。背中と
両腕のあいだに丸太ン棒となった蒲団を、横
にして背負っている。

それは意外に効果的なのだ。

彼は胸を反らし、前面を哀れに曝さらしたまま
で、棒状の蒲団が邪魔になり容易に横転する
こともできない。そのうえ、下敷きになった
両方の腕は、おのれの体重に制圧されて、痛
みを感じるより先に、痺しびれはじめて感覚が早
くも薄れてきている。

「少し、お遊びをしましょうね」

伊津子は落ち着いた声音だ。

「人工呼吸って知っているでしょ。その実習
をします。あなたはモデルよ。あなた好みに
女性のご不浄に溺れて死亡寸前の失神状態だ
と仮定します。あたしは応急の救助人よ。ア
バラ骨をしなければいけないから力がある
わ。これは、あたしのほうが重労働よ」

△重い役務えきむはおれのほうだッ△ そう叫びた
いのをこらえ、彼は苦悶くもんのうめきを漏らす。

そして、悲鳴と哀願だけは慎もうと、必

に、自分自身に言い聞かせていた。

「さあ、今度こそ本当に死ぬかもわからない
けど、覚悟はいいの？」

伊津子は彼の頭を抱え上げて正坐し、膝で
しっかと顔を挟みつけて、動きを強奪ごうだつしてか
ら、丁寧ていねいに汗を拭い取った。

ビニールテープを縦横に貼りつけて唇を密
閉する。本当に玩具を取り扱う動作だ。

それからゆっくりと体をずらし、上体を前
へかがめてゆく。肉感的な分厚い唇がふたつ
に割れ、ピタッと、彼の鼻を覆った。

△窒息ちっしつする。死——△悲壮な自覚だ。

彼の全身は一瞬にして栗立ち、死への恐怖
が惨として身内を貫ぬく。

現実に、順平は瀕死ひんしの生きものになった。

筋肉が震動し皮膚は波打つ。バタバタと狂
動した下肢がやがておとなしくなり、膝下あしが
突ツ張り、足首より先が小刻みに、最後の足
搔かきを示してケイレンしつづける。

伊津子は唇を離した。

「どんな具合？ いい感じでしょう」

顔を真赤にして玉の汗を湧かせている彼を
逆さまに見下してゲタゲタと笑う。

「守口順平の生殺与奪せいざととくだつの実権は、いま、あた
しの唇にあるのよ。権力者って割と気分のい

いものね」

言い終えた口から柔かそうな舌がでて唇を
ベロツと舐なめた。そしてまた襲ってくる。

が今度は、自分の胸いっぱい吸い込んだ
空気を、徐々に彼の鼻孔へ送り込んでゆく。
裂けるほど鼻翼をふくらませて彼は吸う。

だが、伊津子の言う通りに彼には自由が与
えられていないのだ。彼は、伊津子の肺はいに満
たされた空気を、彼女の口を通じてむさぼり
生きるための糧とする。彼女が口腔こうくうを閉ざし
自分勝手に鼻で呼吸して、彼に対する空気の
注入を怠ったならそれきりになってしまう。

伊津子は巧遅こうちに動作して、ときには唇を離
し、たったそれだけのことで彼の生命まで操
っているのだ。

順平はときどき外気を貪むさぼりながらも彼女の
意思に従って呼吸する。実際に、そうするよ
り他、彼には生きる道がないのだが、それが
しだいに、甘い悦服と変化してゆく。

半ば以上、呼吸を制御された息づまるその
ときどきに、彼はバラ色に輝く雲を見た。

彼の吸う空気はすべてが伊津子の香りなの
だ。言い知れぬ屈服感が絶え間なく足の爪先
に及ぶ。

瞼の裏には、美々しい七彩の虹が渡った。

その光彩に陶然として、体ばかりは苦悶の様相で妖動し、足指が奇怪な形にくねった。

彼は、徐々に意識を遠くしていった。

× × ×

遠いところから男と女の声が聞えてくる。

その音聲は、ふいに近づき、また遙かな彼方へ消えてゆく。順平は仮眠の淡い意識で、その声を、懐しい子守歌かと聞いていた。

体はまだ蒲団丸太を背負ったままで動かない。真実を言うなら、微動するのも大儀なほど、彼の感覚はバラバラになり、怠惰に弛緩しているのだ。

先ほどから夢現つの中で彼は、上半身すっぽりと、ゴムマリのようなもので包まれていた。すべすべとして、とっても肌ざわりが良く、彼に対して非常に優しいのだ。

幼な子になった彼は母の胸にすがって甘えていた。乳首が奇妙に小さい。貪婪な彼の食欲を満たすだけの乳汁が出てこない。彼はいら立ち、乳首の周辺を、荒々しく蛭のように吸い舐めていた。

母性物はただ優しいだけではなかった。小暴力を奮い悪戯の過ぎる子供には、いまのうちから厳しく躾けようと押えつける。ゆるやかな力だが幼な子には強圧となる。

圧迫の苦しさに耐えかねてやたらと激しくもがきながらも『ここよ、ここ』と、指示す母性物の誘導に従がって唇をすぼめ、力いっぱい吸ってみた。と、彼の好物の乳液が、奔流の水条となって迸り咽喉につかえた。

男と女の声が急に近くなった。

女の声が伊津子のものだと思い、どこかで聞き覚えのある男の声だとぼんやりと考え、しかし自分はまだ、夜半過ぎの情ない恰好だと自覚して熟眠を装おい目を閉じていた。

すぐそばに人の気配がした。

ふいに掛布がはぎとられた。

「J産業一番の堅物やという男も、一皮むけば案外なもんや。なんじゃいな、この姿は」

男はアハアハと野卑な高笑いをする。

その瞬間、順平は気絶するほどの恐怖混じりの驚愕の中に陥っていた。男を、声から察してN商事の中村社長だと悟ったのだ。

順平は絶望的な屈辱感に魂を凍らせ、縫い合わせたように瞼を堅くしていた。

実際にこの現実には直面して、思慮分別も定まらず、自分自身の処置に窮した。

「おきなはれや、守口はん！」

粘っこい関西弁はこの場合、蜘蛛の糸となつて彼の全身に絡みつき精神を傷める。

「返事ぐらいしたらどないや！」

枕が蹴られた。ガクンと首が垂れた。

「ああ枕。おれは枕をしていたのか」と、関わりのないことをふと思ひ、そのあと、傲慢無礼な中村社長の行動に、憤激して無念の歯がみを繰り返す。カッと眼をむいて男を睨めつけ、同時に愕然として顔色を変えた。

伊津子が――彼女は無残にも中村の無骨な手で黒髪を束ね掴まれて体を乱している。眼尻が吊り上り苦痛ですさまじい形相だ。肌の透けて見える緋色の長襦袢一枚で扱帯を垂らし、裾はしどけなく割れ開いている。

「あなたッ。守口さんにそんな乱暴な」

「お前は、黙っている！」

中村は掴んだ髪の毛をグイと引く。

ヒィーと言う女の悲鳴が彼の耳に痛い。

「中村さん。無粋なことをするじゃないか」

順平にしては精いっぱい強がりだ。

「なるほど無粋か。よう言うた。せっかくお楽しみのお邪魔をして悪かったがな。私にとつては重大な出来事やから放つとかれん。守口はん。この女は私の……わかりますなこの意味が。金がかかってます。あんたは昔風に言うたら間男や。姦夫姦婦はバツサリと成敗もんや。この始末、どないしゃはります」

順平の脳裏に直感的にひらめいた危惧は、もっとも忌むべき結果となって実現した。

『ママさんに関わるとうまくない』と言った里絵の声は、正しかったのだ。伊津子が言った『目的』の、真の意味もおぼろげながらわかる。

巧妙に仕組まれた甘い陥穽だったらしい。唇をかみしめ、さまざまな出来事に思いを走らせながら、彼の心は寒々としてゆく。

「このあいだから在庫調べで、あんたは、えろうしつかりと私のことを考慮してくれはったそうやな。まあ、そのことはあとでゆっくり談合するとして。いまこれから、ちょっとそこらでは見られんものをお目にかけますよ。見料はいりまへんよってな。安心して、とっくりとご覧なはれ。おなごを可愛がるには、こんな方法もあるんやと、知っておいても決して損やおへんで、守口はん！」

中村社長は、矢庭に伊津子を突き倒した。「ア、イヤ。やめてッ。そ、そんなことはイヤーッ。かんにんして、アア——」

順平の心の奥深くに整然として安置されている理想の神秘像は、残酷にヴェールを剥がれてゆく。中村の粗野な振舞いに抗する術はないらしく、高雅の衣を脱ぎ、潤飾をかなぐ

り捨て、生身の「女」となって、哀鳴を響かせ、あさましく花恥ずかしく散開してゆく。

落花狼藉の情景だった。

神秘体は暴虐の嵐でその森厳を犯され、呻吟の中で真実の正味を暴露されてあえぐ。

目を覆いたい光景なのだ。順平の理性は目撃することに脅えて拒否し、生理的な嫌悪をおぼえる。が、現実の状態は、目にも綾な妖美图絵で、彼の視覚は心理動向を無視して確実に展開する形態をとらえて、網膜に歴として灼きつけているのだ。

一時間近く、麗々しく展供がつづいた。

そのあいだ、彼は不自由な形で首を曲げ、驚異の瞳目に終始した。それは彼にとって残忍な拷問に価する。と同時に、違った見方をするなら中村社長の言う通り、二度とは見聞することのできぬ、人間性の底に蠢く貪欲な「性」の厳存することを教示されたともいえる。

順平はしだいに不可解な心理状態に陥ってゆく。白い生きものになった伊津子を蔑すむよりも、逆に、同じに虐げられる仲間として奇異な愛着すらおぼえるのだ。

そして、行動することが自由なら、伊津子の傍らに転々として、彼女の受動する羞恥と

屈辱と、さらにはそのあたりに秘在するはずの靈妙な愉感的感覚を二分して、おのれの受感にとどめたいと希いはじめていた。

× × ×

一風呂浴びてきた中村社長が窓のカーテンを引くと、朝の光りが射し込んで来た。

室内の重々しい気配に同化したように、窓外の情趣も濁ってよどんでいた。

粘っこい陰質の雨が降っている。

ベッド・ルームのベッドの真ん中には、ビニール製のカーペットが敷いてある。

専用衣粧となってしまう蒲団丸太を背中に負って、相も変らず「X字型」の紅い襦袢で体と腕の自由を封じられた守口順平は、その上に仰臥していた。

ルーム・クーラーで室内の空気はサラッと快いの、彼の顔は汗でべとつき、てらと光っている。

それが当然だった。頭の上には、伊津子が宙に浮いたようにして坐っているのだ。

中村社長の淫心を吐露した仕業なのだ。

中村は伊津子を翻弄し尽すと、さっそく、自己の嗜好にまかせて動作を移していった。

まず、天井から下っているサークラインを外した。と、そこには、いままで隠されていた

て見えなかった金具が姿をあらわした。

フックが三個。中村は三すじの麻縄をそのフックに結んで垂らした。

伊津子とともに、床に伸びている順平の体を抱えて、ベッドの上に放りあげて安置し、ついで、伊津子をも追いあげた。そして、泣き叫んで真剣に拒否する彼女を、分厚い掌で打ちすえて黙らし、自分の意思に従わす。

伊津子の長い黒髪と、麻縄の一本とを巧妙に連繫した。彼女の容貌は、髪が生え際の皮膚が、眼尻をいざなうて引き吊って歪み、悲痛きわまるものと変容した。

着衣は乱れたままである。緋色と乳白色ともうひとつの色彩の配合も妖しく、その姿態は華なやかで麗々しく、また恐しく哀れだ。

彼女はまさしく坐っている恰好である。

膝から下の部分を深い「く」の字に折り曲げた形で、無造作に左右に投げ出している。

お尻がピタッと床に密着する、あの奇妙な坐り方だ。内股の閉鎖を断つために、足のおや指の付根を細い紐で緊縛し、ベッドの下をくぐって別のおや指に連結してある。

前方から見下すと、彼女の腰から下は正確な「W字」を形づくっていた。

伊津子は天井から垂れ下っている残りふた

すじの麻縄を、それぞれ別な手に握り締め、それにすがって腰を浮かし続けようと、腕力に頼って努力している。

力が鈍れば体がずる。そうなれば、自分の頭髮の引きむしられる痛苦はもちろんのことだし、下にある生きものを、我が体重で緊圧し尽してしまうことになるのだ。

「伊津子。つらければいつでも縛ってやるからな。縄目が残って羞ずかしいのやったら我慢すること。そやないと、ほらほら、お前の彼氏はあんじょう窒息してしまうがな」

そのあとで中村は、ことさらに彼を覗く。「守口はん。どんなあんばいですな。おやまあ、嬉しそうな赤い顔やがな」

イヒヒヒと、下卑た笑いを浴せるのだ。その現象は、限界を超越した凄惨な冒瀉であり、正気の沙汰ではなかった。

想像を絶する恥辱の極致なのだ。

だが、順平も伊津子もふたりともに、中村社長の意図を阻止することは不可能なのだ。いまは共通して、中村の玩具にひとしく、全くの無防備状態なのだ。

「さて守口はん。これからふたりで相談や。どないや。これから先、私に協力して下さいませんか。それを言うためにこんな大袈裟な

ことをしてと不思議どすやろ。なるほどJ産業は、私にとって大切なお得意さまや。そのことには間違いあらへん。けどな、私の経営するN商事はJ産業だけが取り引き先やおまへん。それやのに、ハッハッハ。ほんとには自身、なんでこんなことをする気になったのかとびっくりしてます」

中村社長は浴衣を乱して、ふたりの妖異なポーズを目前に、どっかりと腰を据えつけてゆっくりと言う。眺めながらしゃべっていることが愉しいらしく、態度がそれを肯定している。

「あんたは私から見たら若僧や。J産業の優秀な中堅やというても係長にすぎん。しかしな、私はあんたの将来を高う買ってます。J産業で一番の有望株やな。これはお世辞やおまへん。あんたの手腕の実績がおます。去年の夏から秋にかけて、下請業者は四苦八苦やった。親方のJ産業に泣きついてみても不況のさ中や。どうにもならへん。そのときや、あんたが下請業者を集めて説得しやはったのは。利潤を上げるためには安い素材を使用することや言うてな。こんなことは誰でも考える当り前のことやが、それを一括して纏め、下請業者の横の連繫を良くしてしまうという

ことは、正に大英断やった。お蔭でみんな、儲^{もうけ}が増えて息づいたし、製品コストも下ったはずや。一番儲させてもらたのは私やが。そのことより私は、いままで工業の資材課の誰もがようやらなんだことを独断で強行したあんたに、正直いうてびっくりしてしもた。若い、すごい奴やなあと考えてな。下手をして、結果が悪かったらこれやがな」

中村は平手で自分の首を切る真似をする。「それからや、私があんたに注目するようになったのは。いろいろと調査してもらたもんや。Fへ出入さすようにしたのも私や。はじめは懐柔^{かいじゆう}して、利用したろと思うてたんや。しかし、私はこんな悪趣味のある男やから、なんとなく変な部分に敏感であんたを好ましゅう見てたもんや。そしたら案の定、あんたのお好みはおかしなもんやった。そう思ったら余計に好きになってしもた」

伊津子は麻縄にすがる腕と手が痛むのか、ときどき握る手をゆるめる。その度に弛^たんでいた髪の毛が鋭く伸張し凄艶な形相となる。

同時に順平は息づまる強圧下であえぐ。

彼女は、またあわてて麻縄にすがる。その動作が断続する。

「そんなわけで守口はん。私はあんたの力

が借りたい。商人というもんは欲深かいもんや。私はもっと儲けてもっと遊びたい。N商の品物や原材が高いとあんたはおっしゃるが、いままでが格安やっただけで、これは私の商法の秘訣^{ひけつ}や。いまの価額でも一般からみたらまだまだ安い。そやから下請仲間の苦情はおまへんやろ。人件費の高騰^{こうとう}は時の流れで仕様がおまへん。が、材料費に関する限り私にも自信はおます。守口はんは無理を言うても世間相場よりは必ず安うします。そやからときどき相談に乗って欲しおすのや。承知してくれはったら、この部屋と、女を提供します。こいつで不服なら他の女でも世話しまっせ。今度のことは、ほんと言うとこいつの入智恵や。あんたにまんざらでもないらしい。里絵という妙な邪魔^{じやま}が入ったようで、こいつは、えらい角^つを立ててましたぜ。里絵のような女でも、正味のあんたを知ると、ついふらふらと、けったいな気を起すもんらしい。あんたはそういう得なお人柄や。惚れるのは私だけやないらしい。今度はこいつのお蔭でうまい具合に事が運んだけど、そやなくても、遅かれ早かれ、あんたはこの部屋でなにかをすることになってたんや。あんたがウンと言わん場合のこととも考えてあった。けどそのと

きの手段は我ながら卑怯やし好かなんだ。私も小さいもんやが、人から社長と呼ばれる身や。あんまり卑劣^{ひれつ}な商法はいややね。しかしもう大丈夫らしい守口はん。私とあんたは好みは右と左で別々やが、ええ具合にこいつが両道で、どちらにでも通じる中庸^{ちゆうよう}らしい。いや、ほんと守口はん好みのようや。守口はんになら、と自分から言い出しよった」

順平は中村社長の言葉を、半ば以上はうわの空で聞いていたが、最後の語句に、ふと眼をあけて上を見た。靈感が作用したかのよう

に、伊津子は首を垂れて彼を見た。

彼女は、髪の毛の引きつれるのに耐えて彼を見据えている。頬がバラ色に映^はえていた。順平の感情はさらに熱狂し、過度の充血で額は真赤になり、頭はものすごい轟音に包まれていた。が彼の思いは充足していた。

× × ×

どうなっても良かった。

第三者の鑑賞の眼も気にならない。

羞恥も屈辱も、もちろん口惜しさもない。

彼は、自己の性の真随^{しんずい}を自認したことだけで、言い尽せぬ充実感に浸りきっている。

秘めつづけてきた人間としての恥情を探ぐり出され、えぐりあばかれてしまった。がし

かし、長いあいだ希求し、一筋に貫ぬいて来た慕情は、いま伊津子という女に遭遇して完とうしようとしているのだ。

その形態が風変わりであり、中村という男の熟視する中であつても。

むしろ、恥辱の醜行を露出させて、他人の眼を意識するほうが魂を揺るような気さえるのだ。視線を感じると戦慄が増すのだ。

中村のおやじ。おれを買いかぶるなよ。おれは真実、これだけの人間なんだ。と、かすかな思慮で心うちで答える。実際に順平は自分の臍まで曝け出しているのだ。

「おやじ。なんだって聞いてやるぞ。おれはいま、お前に操られている木偶の棒だ。それで嬉しいのだ」

彼の感情と感覚はとめどもなく散乱する。

「ものたりんのかいな、守口はん。伊津子、少しは暴れたらどうや。じつとしてると彼は苦しいだけや。効果半減と違うんか？」

中村はベッドから降り、散らかった伊津子の衣類の中から腰紐を探ぐり出し、さらに、なにやら小道具を手にして戻ってくる。

「ア、イヤ。それだけはよして。イヤッ」

中村の意図を察して伊津子は首を振る。

身悶えてあがらう伊津子の両手を掴んだ中

村は、容赦なくねじ上げ、背中で手首を束ねて腰紐を絡ませ、そのあまりで、マリのようになくらんでいる形の良い胸の丘の上下を荒々しく締め上げた。

「少しぐらいの紐あとは辛抱しろ。色男のためや。どうや伊津子。この人が好きやろ」

中村はしだいにムードに酔ってゆく。

たしかに情景は異妖であり、男の好き心を幻想的に誘う要素が充満している。刺激性も横溢していた。中村は、自分の言った言葉から異質の妬心を抱き、それを、伊津子への嗜虐行為によって転嫁しようとするのだ。

裸身のところきらわすくすぐり責める。

全身を平手打ちして、派手な音を引き出しつつ、肌を美々しく色づかせてゆく。

細針で皮膚を突つき鳥羽根で撫でる。

そして「大きな声を出したら口をくくってしまふからな」と、戯けながら脅かすのだ。

伊津子は吊られた黒髪を中軸にして転倒することでもできず、胆汁質の中村の、凝った責苦に身悶えてあえぎ、激しい微動と蠢動を繰り返す。伊津子の動揺にともなう、順平の苦悶はますます多様に複雑化し、情緒的に盛り上ってゆく。

苦悶と歓喜と、悩乱と甘美と、体の奥底に

滲透してくる屈服感覚は鋭烈だった。

「中間決算が終ったら一律に五パーセントの値上げや。見積り書を出しますさかい頼んまつせ守口はん。あんたさえウンと言ええば、幹部連中はなんとなくOKや。とにかく、いままです産業の資材課は、あんたというお人が関門で難儀やったが、どうやらそれも解消しそうな気配や。な、そうやおへんか。あんたと私は伊津子を仲立ちにして妙な関係ができてもたがな」

中村社長の高笑が室内に飜した。順平の心理には、なんのわだかまりも抵抗感もなかった。

「守口はん。お返事は？ ああそうや。口がきけまへんな。まあよろしおす。ア、わかった、わかりましたよ。あんたのからだ承知したとうなずいてますわ」

守口順平は中村社長の声を、かつての日々に夢想した、幻界のものとして聞いていた。

彼はいま、現実の世界で確知した、バラ色の雲のたなびく桃源境へ、徐々に足を踏み入れつつあった。四囲より伝わる音声は、すべて皆、天界の妙なる調べであった。

彼の心機を感知して、五感の念力を助長するかのよう、伊津子は、自分の頭皮に加わ

あ　あ　伝　言　板

栗　瀬　長

「一緒に住みませんか。二十一才になるBGです。六畳のアパートですが、どなたか私と一緒に生活しませんか。月九千円ですから半分宛にしましょう。」

M子

女性向の週刊誌なら何でもいい、伝言板の類を開いてみると、必ずこうした求同室者の広告にぶつかる。

最近の女の子はチャッカリしてるわい、部屋代を半分浮かそうってわけだな、なんて考

る激痛の苦行と闘いながら、すでに幾度か踏

破した道程を辿り、さらに飛躍的に、ま新しい未知を求めて神気を凝縮させているのだ。

その極みがどのようなもので、心理的な推移がどう変化するのか彼女にも不測だった。

ただ、新鮮な感覚が微妙に散在しているこ

とだけはわかる。彼女の心は拡散している感

受性を集結させたいと希いはじめていた。と

同時に、本能的な虚栄心が驕慢性^{きようまん}をともなっ

て、圧伏の形態に優越感を誘発してゆく。

自分の肉体に眩惑し、ことさらに耽溺^{たんでき}して

従属しようとする男に対して、奇妙な愛着を

抱きはじめていた。それは、女性特有の天性

的な尊大なプライドともいえたが、異質では

あっても清新な「愛」でもあった。

順平の思念は伊津子の感情を上回わる。

彼は、壮美雄大で妖艶濃密な伊津子の肢体

を霊的神秘の尊像として、心身もろともに、

その足下に隷属することが許容されるならそれだけで満足だった。

痴呆化^{ちほうか}したように瞠目して見守る中村社長

を置き去りにして、ふたりはたがいに、たがいの真性な未知を求めて探ぐり進む。

順平は伊津子の声を神籙^{しんら}かと聞く。

霊泉のとき、守口順平の真如^{しんにょ}な心性は、伊

津子を至上の真善美として遵奉し、彼の全霊

的な感覚はただ恍惚^{こうこつ}——その一意に尽きた。

ないだろう」

「ううん、それが大変なのと一緒になっちゃ

って」

「なんだい、もう同棲かい」

「いやよ、人間きの悪い、まだそんなにすれ

てませんよ」

「その口のきき方で、すれてませんよは恐れ

入りました。で、どうしたのさ」

少しいけるくちの彼女は、ビールにほんの

りとしたのか、わりと軽口をたたく。

「あるでしょ、学生何とか会って、周旋屋。

あれ、学生だけじゃないのよ、誰がいても

いいの。わりと安いつて教えられたから、い

ってみたの」

「うん、それで」

「部屋の紹介たのんでたら、そばにいた、一寸すました大学生風の人がね、勿論、女の子よ。一寸、いかすタイプだったな」

「おいおい、気をもたせるなよ」

「うふふ、その人がね、とてもよさそうな条件ね、でも一万円は一寸高いわ。どう、あなた、二人で借りないこと。そしたら半分宛で五千円ですむわね、いいじゃないの。お炊事なんか、二人で交代で、やったら楽だわ、ね、そうしない、っていうの。私も、満更でもないなと思ったけど、見ず知らずの人ですよ。返事も出来ないで、もじもじしてたら、どうでしょ。どんどん契約書を出させて、契約しようっていうのよ。すっかり圧倒されちゃって、何となく二人できめちゃったの」

「ふーん、そんなもんかなア」

「ね、驚いたでしょう。そしたら、私は明日引越してくるから、貴女は明後日頃いらっしゃいよなんて、強引なのよ。私って、案外うぶなのね、え、いいわってんで、すべてその人の言うなりよ」

「ふんふん、それで」

「引越してみたら、驚いたわ、その人、何ももってないのよ。それこそ蒲団と、着替えだ

け。私はこれでも、三面鏡も洋服ダンスも、

チャチだけどステレオだってもってるのよ」

「お見それしました。しまったわい、そんな人と結婚するんだった、今からでも」

「おそいおそい、そんなお爺さんはだーめ」

「お爺さんはひどいよ。ま、それで」

「朝は、おそくまで寝てるし、夕方は居たり居なかったり、早く帰ってるかと思うと、夜おそく帰って来たり、お勤めってきいたら、大学生だというの、でも本なんか、全然ないのよ。どこの大学ってきいたら、チャチな駅弁大学よってんで、話しにならないの」

「変なやつだね、それでどうなったの」

「そうね、かれこれ一週間もしたかしら、もうよしましろう、変な話」

「冗談じゃない、これから本番じゃないの」

「困っちゃうワ、どうしよう、あのネ、夜、

私の蒲団にもぐりこんできて変なことするじゃない」

「うん、うん、それで、どんなことしようとしたの」

「言わせる気？ エッチ」

「エッチは参ったな。僕等、男にはきみ達の生活は全く分らないんだ。どんな事をするの

さ」

「あーら、知ってるくせに。そんなこと恥ずかしくって言えないわ」

「勿体ぶらないで、教えてくれよ、君の蒲団にもぐり込んできて、それから？」

「なんとかかんとかいて、しゃべらせる気ね、あとがこわいわよ。兎に角すごい」

というわけで、これから先の会話は一寸公開をはばかられる話、要するに彼女は見事にハントされたわけなのだ。その夜は疲れるとかなんとか言って、又相手の女も、最初だけに、適当に刺戟しただけだったとか。翌日、相手の居ない間に、急拠運送屋を呼んで、逃げ出してしまった由。逃げ出さないで更に深遠な話を聞きたかったのだが。

話には聞いていたものの、こんな身近にその例があるとは。それにしても、世の中は乱れている。いや、こんなことが、女性週刊誌などを通じて、半ば公然と行われているとは、ま、一面から言えば甚だ愉快とも言えるのではなからうか。





グ

ル

ー

プ

町

陽

一

三月の二十五日。私は買ったばかりのKK誌の入った紙袋を抱きしめて、満員電車にもまれていた。大分心臓が、強くなったはずだが、まだ電車の中で、これを読む勇気が出ない。編集部の皆さんにすまない気がするのだが、どうしても駄目だ。結局は一人でこっそりと読んでしまう。相手が欲しくてたまらない。写真も買った。それとなく女性にも話してみた。どれもこの気持を満たしてはくれなかった。こんなに満たされぬ気持のままで一生を終ってしまうのではないか、時にはそんなことを考えて愕然とすることさえある。

電車が大きくゆれた。本当の満員ならよける隙間も余らないが今日のはそれ程の満員ではなく大きくふらつかされた。吊皮にぶら下る人の背中できっとふみとどまる。姿勢をたて直した時、私は自分の目を疑った。吊皮を握るその人の手首に二節三節はっきりと赤い跡、それも縄目の跡とはっきり判る斜めに断続する筋。KK誌の見過ぎか、妄想の発達したものか。その白い手は、もうそこになかった。その手の持主、小柄な色白の可愛い娘

だ。まだ社会に出て、間もない感じだ。丸い小さな鼻、丸い頬、すべてが丸く出来ているようだった。肝心の手首は下ろされ、袖口に入ってしまったていては、のぞきようもなかった。私は彼女の後について、ひたすら電車がゆれるのを願った。もし私の目にあやまりがなければ、思い切って話し掛けなければ。私の胸は彼女に聞えはしないかと思う位高鳴った。電車はゆれた。彼女の手首が露わになった。私は確信した。だが、私と同じ駅で下りた彼女は、私と反対側に歩いて行ってしまっ

た。何という意気地なしだ。何という馬鹿者だ。弱虫、腑抜け、私は自分を激しくのしった。夜道はこの夜は特に暗く、遠く感じられた。一人淋しく見たKK誌のモデル嬢が特に美しかった。

私がSMに興味を覚えたのはいつ頃だろうか。どうも持って生まれて来たものらしい。

小学校の六年の時、私は毎日のように同級生のミヨコ（本人にさし障りがあるといけなないので漢字は避けよう）を縛った。放課後の教室だ。椅子に後手に縛りつけられたミヨコの姿は可愛かった。そして矢張りこの頃、ジュンコとトモコにも縄をかけた。ジュンコは近所の年下の子。家に呼んで素裸にして縄をかけたがまだ彼女は女ではなかった。羞恥心もなかった。このジュンコは今は一児の母である。トモコはおない年。ヴァラエティに富んだ縛り方を試みたが、彼女には女を感じた為思い切って素肌を縛ることはなかった。

自分の性癖を悲しみ嘆くこともしばしば。こんなことに興味を抱くのは異常である、変質者である……だが、大学に入った時、ふと手にした雑誌で私の考えは変わった。風俗草紙と題されたその本に私の息は止った。こんな

本が出ているのか。こんな性癖は私だけではないのか、その時のショックは強烈だった。写真はなかったが、三枚の絵が今でもはっきりと頭に残っている。梢の上に大の字の磔、馬小屋での後手縛り、後手縛りの胸からの吊り、すべて全裸の女性はどれも残酷で、どれも美しかった。私は息をつめて肌に喰い入る縄目を、豊かな曲線を、そして苦痛にあえぐ表情を見詰めた。

その日から私は古本屋をあさった。時々見つかる同誌、それに別に奇譚クラブの名も憶えた。しかし古本屋で見つけて買う時の恥しさ、でも買った。気の小さい私にしては随分思い切ったことをしたものだと思う。

実際に女性を縛ったのは、それから十年近く後のことだった。本格的に縛った、鞭打った。体の良くないのが残念だったが、相当厳しい責めにもよく耐えてくれた。その女性が本当にその趣味があるのではなく、単に嫌々ながらも協力してしてくれただけだと知った時の私の落胆は激しかった。本に載っているM女性はすべて絵空事ではないか、とさえ考えることすらあった。

確かに、それらしい女性を見たことはあった。放課後の高校で、二階から降りてくる三

人の女生徒、真中の一人が後手に縛られている。勿論、遊びだろうが彼女の楽しそうな表情は見逃がせなかった。かと言って声をかけるにはその頃の私は余りにも小心だった。過去の様々なチャンスを悔みながら、私は奇譚クラブの美しいモデルに魅かれて行った。当時、全盛時代の梨花嬢、現在はどうしているのだろうか、彼女の美貌と体の柔らかさ。是非この手で縄をかけてみたかった。それに分譲写真でしか見られなかったが、田原嬢の可憐さ。ほんのわずかしかな写真がないが五月、館、両嬢の美しさ。どうしてこういった女性が私の身近にいないのか。いても魅力のない私の傍には寄りつかないのか。身の不遇をかこつ毎日だった。

胸にわだかまりのある毎日は空しかった。他の者が、パチンコにボーリングに、時間を費している時、私は一人、梨花嬢の裸身を恋い、一宮嬢の縄目を空想していた。

電車での出来事から二、三日後、私は急ぎの用事で小走りにビルの廊下を曲った。

「あっ」

とっさの動作で、私はぶつかった女性を抱きしめていた。

「す、すみません」

お互の口をついて出た言葉だが、私のそれは途中で止まってしまった。あの女性、手首に縄目を残していたあの丸い女性。

「ごめんなさい」

じっと見詰める私に、彼女は可愛く微笑んで曲って行った。同じビルの人。これは小説のように余りにも調子が良過ぎる。だが本当だ。私の頭から理性が狂って飛び出して行ったような気がした。だが、辛うじて彼女の後を追うのは止めた。せいては事を仕損じる。たけり立つ心を私は強引にねじ伏せた。

「まあ、そうだったの。恥しいわ」

彼女と言葉を交わすようになったいきさは、皆さんには退屈でしかないだろうから省略しよう。男と女との出会い、話のきっかけなど、誰でも以たようなものだ。多かれ少なかれ、互に異性を求め合っているのだから。

四月の中旬、私達は、南の個室喫茶に入った。普通の喫茶店ではどうしても話にくかったのだ、無理に彼女を説き伏せたものだ。社会人になってからの私は自分でも驚く程、あつかましくなったようだ。その喫茶店は、相当にゴージャスな感じだった。初めて会う彼女だが、この部屋では体を密着させる必要

もない程ゆったりとしていた。

「私達のグループは女ばかり三人なの」

「皆、同じ傾向」

「うーむ、そうね、道子は一寸Sがかっているかな。信子と私はやはりMの方ね」

彼女の名は幸子と云った。

「男は居ないの？」

「何だか恐いのよ。それに恥しくって」

「どんなにするの」

「恥しいな。それより一度来てみない」

「え、行っても良いの」

その時の私の顔は、恥も外聞もなく輝いていたに違いない。

「初めて会ったのに構わないの？」

「貴方は前から知ってたのよ」

「どうして」

「私は貴方の後輩よ」

「本当？」

「何だか真面目過ぎるようで近寄りにくかったの。だから貴方の口から、この趣味があると聞いた時は、正直驚いたわ」

「ふーむ」

驚いたのは、こっちだ。何と世間は狭いところか。これだから、案外簡単に話が出来たのだ。

「だけど私はそんなに立派じゃないから、がっかりしないでよ」

「皆、裸なんだろう」

「勿論よ。恥しいけど見せてあげるわ」

バッグから出した三枚の写真。

「これが道子」

やせ型の娘が大の字に磔られている。

「信子」

矢張りやせ型で、まだ少女と云ったら良いような体だ。柱に立ち縛り。

「私、恥しいなあ」

三人の中では一番肉付きがよく、縄目も深々と喰い込み、後手縛りで正座している。

「そんなに見ちゃ、いや」

「いや、一番きれいだよ」

「そう、ありがとう。あ、貴方はどっちなの

男でもMは多いでしょう」

「両方だな。見せようか」

「見せて」

かつてプレイした女性との写真。簡単な後手縛りだが、体の変化が恥しい。

「やせてるだろう」

「良いわ、この写真。もらっていい？」

「駄目だよ」

私は、あわてて取り返した。

「その代り、今度行った時、皆で写真を撮ろうよ」

「これ自分で？」

「そう、こっちは？」

「信子がするの、写真学校の生徒だもの」

「便利だなあ。で、いつも何処で？」

「信子の家よ。皆留守になる時があるのだもの」

幸子と待ち合わせて初会合の場所に行ったのは、それから半月ばかりたった、さわやかな日だった。幸子は黄色のセーターに曲線を露わにしていた。私の目には少しまぶしかった。信子の家は駅から数分、新興住宅地にあった。プレハブ住宅は新しい住宅地に映えていた。

「話はしてあるの？」

「勿論よ」

幸子は先に立って入って行った。私は、応接間に通された。小さな部屋で、別に金はかけているようではないが、落ち着いた雰囲気だ。

「町陽一さんよ」

幸子が先に立って入ってくると他の二人に紹介した。

「信子に道子」

「よろしく」

近代的な感じの、明るい娘さんだった。

「どうする、すぐ縛る？」

幸子が二人を見た。

「そうね、いつものようにしようか」

と道子。

「何か勝手が違うわ」

信子は、まだ少女らしさの残る頬を赤らめた。

「じゃ、しまししょう」

両方の橋渡しという役で幸子は努力した。

「ここでぬぐ？」

「良いでしょう」

道子は早くもブラウスのボタンに手をかけていた。

「町さんも裸になって」

「用意は？」

何となく気おくれがして私はきいた。

「向うの部屋にしてあるのよ。今日は貴方の入会式よ。さ、早く」

幸子はすでにブラジャーのホックに手をかけていた。半ばあらわれた白いふくらみにあわてた私はシャツに手をかけた。信子が一寸ためらっていたが、三人ともまたたく間に生

まれたままの姿になった。女も人数が多いと羞恥心はなく、男を圧倒するようだ。私はやっとブリーフ一枚になったが、そこから先は手が動かなかった。

「恥しそうですね。良いわ、そのまま手を後にまわして」

「先に縛られるの？」

「そうよ、貴方の入会式だもの」

幸子が私の後にまわると、重ねた手首に縄をかけ始めた。久しぶりに受ける、縄目の感触。素肌にふれる幸子の柔い手。縄を胸にまわす時には胸のふくらみさえ背中にもふれる。

形通りの後手に私は縛しめられた。

「幸子、貴女もよ」

道子がもう一本の縄を手にした。私の横で幸子の丸い体にも縄目が喰い込んで行った。写真で見たと同じように柔らかそうな体だ。肌は白く、胸のふくらみは小さいが形が良かった。

「さあ立って」

道子が幸子の縄尻を信子に渡すと、私の縄尻を引いた。よろめきながら立った瞬間、私の腰が急に涼しくなった。

「あっ」

私は思わず腰を曲げた。

「さあ歩いて」

余った縄尻が私の尻に鳴った。快い痛みが全身を走る。幸子が先に引き立てられ、信子の後に私が続いた。縛しめられた体で歩かされたのは初めてだ。今迄はその場でのプレイが多かったのだから。それにしても後手にされて歩くということは、何と奇妙なものだろう。しかも剥き出しの体が一層恥しく感じられる。

前に複数の女性とのプレイを空想したことがあった。自分がMになるのは良いが、その時必ずもう一人の女性が自分と同じ立場になって欲しかった。つまりどうしてだか判らないが、自分一人が複数の女性に責められるのはたまらないような気がしていたのだ。その夢が、今、現実となっているのだ。SM両方の性質を持つ私としては、これは最高のものだった。

私は庭に引き立てられた。明るい陽光の下に出た時、私は思わず足を止めた。このプレイに、例え見るだけでも他人を関係させてはいけない。陽を浴びた庭は私にとって公の場所に等しかった。奇妙なものだ。プレイの相手はあまり選ばない私だが、自分のプレイをその趣味のないもの、又、あっても同性には

自分の姿をさらしたくはなかったのだ。

「大丈夫よ。何処から見えないの」

「でも、どこか隙間が」

「大丈夫、抜け目はないわ。完全に調べているもの」

女の細かさが徹底的に調べたものらしい。

私が二の足を踏んでいる間に、幸子は庭の立木に立ち縛りにされていた。容赦なく引き締められた縄は、幸子の体に深い窪みを作っていた。陽光を浴びた幸子の体は美しかった。人目を避けた室内でのプレイとは全く異ったムードだ。

私は彼女の前にひざまずかされた。儀式の話は幸子から聞いていた。顔を赤らめながら話してくれたものだ。

「さあ、始めて」

それは入会式とか、儀式とかいうムードとはほど遠かった。信子と道子は両側に立っていた。若い体を誇らしげにさらしていた。幸子は背を擦る木肌が痛いのか、縄目が苦しいのか、眉をひそめていた。

女性の苦痛の表情を楽しむのは、その表情がエクスタシーの表情と同じだと云った人がある。成程、その時において女性は、楽しそうな表情はしないものだ。身内から湧き上る

快感は、苦痛の表情でしか表わせない程大きなものなのだろう。

その説の是非は別として、今の幸子の表情は美しかった、可愛いかった。私は中腰になって胸の蕾にそっと唇を寄せた。幸子の体が一瞬、緊張した。

女性の乳首は薄いピンクで小さく出ているものだと思込んでいた男がいた。結婚するまで女を知らなかった。初めて女を、妻を見た時、その乳首がむしろ黒ずみ、大きいのを知り、畸型ではないかと思う程、ショックを受けたと後ほど話していた。そんな純情な、と笑うなかれである。処女の乳首は薄いピンクで凹んでいるものと決めてかかっている男が相当数いるのだから。

私は陽光の下に浅間しい姿をさらしていることを忘れ、夢中になり出した。だが、その熱は急速にさまされた。

「もう良いわ、それからタブーよ」

私は縄尻を引かれて、ふたたび正坐の姿勢に戻った。道子が私の後に立った。目を伏せると、すらりと伸びた細い足首から膝の辺り迄見える。

「三回ずつよ」

空を切る鋭い音がして、私は思わず体を固

くした。だが、うめき声が洩れたのは幸子の口からだ。目を挙げると、白い太ももに赤い筋が薄く浮かび出ていた。

「二つ」

締った腹部に、そして、三回目は胸のふくらみの真下に打ち込まれた。続いて信子も、同じ方法で同じ場所に鞭を降ろした。

私が毎年、遊びに行く山がある。山というより、山間と云った方が良いかもしれない。小さな宿があるが、他に訪れる人は少ない。この宿から一時間ばかり山に入ると、もう絶対と云って良い位他人には会わない。大自然の唯中に如何に人間が小さいかを、思い知らされる一時である。ここで私は空想の翼を伸ばす。この大自然の懷で、一人の女性を責めてみる。自然の中では人間も自然でなければならぬ。勿論、文明的な衣服はすべて剥ぎ取ってしまう。逃げる彼女を追いかけて、ねじ伏せ、荒縄で縛り上げる。白い肌が縄の刺で苦痛に歪む。私は彼女を立木に縛りつける。空迄も届く高い木だ。小枝で素肌を鞭打つ。梢から吊るす。谷川の冷い水に浸す。女は悲鳴を上げるだろう。猿轡に妨げられない声は空の彼方に流れて行く。白い肌は熊笹に傷つき、落葉にまみれ、切株につまづいて血を流

す。だが、女は、嬉々として悲鳴を上げる。快感を味わいながら、鞭の下にのたうつ。いや、この被虐者の立場には、私になっても良い。毎年、五月と七月、それに秋に山を訪れる度に、こんな女性の出現を待ち望みながら空想するのだ。いつの日か、こんな可愛い女性を同伴出来ることを夢見るのだ。だがそれは毎年、毎回、空想で終わってしまう。一体、私の生涯に於てこの悩みを語れる女性が現われるものだろうか。いっそのこと大声で皆にふれまわりたいような気がする。だが、SMが変態性欲者と、みなされている現在ではそれも出来ない。それを仕事の一部とするのでなくてもなければ、仲々踏み切れないものだ、結局、悪循環になってしまう。

『求むM女性。当方、信頼に足る三十一才の男性。プレイだけでも可。出来得ればSM両傾向の女性。若く小柄なのを好む。平社員故報酬は無理なれど、プレイ実費は当方負担。年に一、二度、大自然の中でプレイをする為の小旅行を計画。連絡先は……』

KK読者欄に投書しようと思うのだが、ここでいつも、はたと思い止どまってしまふ。いざとなると男は気が小さいものだ。

私達は、ふたたび室内に入った。幸子の縄

も解かれた。初めて電車で見たように白い肌に赤い筋が美しかった。

「二人ずつ、組んでする？」

「そうね、初めての男性の入会者だから、町さんだけを責めてみたい気もするけど」

これは道子だ。三人の女性に責められる自分を想像して、喜びと恥しさが同じ強さで襲った。

「初めに二人ずつして、最後に町さんだけを責めない？」

幸子だ。

「そうね。皆、町さんと組めるように三回戦にしましょうよ。一回が三十分で」

「良いわね」

「町さん良い？」

「良いですよ。貴女達が主人公だから、ルールには従います」

私は、おどけて右手を上げてみせた。

「じゃあ、じゃんけんでしようか」

「いいわ」

「勝った順に町さんと組むのよ」

順は信子、道子、幸子となった。

「私達は向うに行くわ。貴方達はここでしてね」

道子と幸子は出て行った。

「して良いわよ」

信子は改めて顔を赤らめ背を向けた。

「ねえ」

「ええ？」

「セーラー服がないかな。夏の」

「どうして」

「着て欲しいんだ」

「待って、聞いてくる」

近頃、女学生の写真が、少なくなった。勿論、人によって好みはあろうが、私は何となく、女学生の責め写真が好きだ。それも半袖のセーラー服姿のが。KKの分譲写真にセーラー姿もあるが、どうしたわけか、皆、冬服だ。若々しい体が半袖からむき出しとなり、そのふくらみに喰い込む縄目の美しさは、又格別のものだ。

間もなく彼女は、私の望み通りのセーラー服を着て現われた。素肌の上にじかに着ていることは、一目見ればすぐ判る。三人の中で一番幼ない感じだが、こうしてセーラー服を着てみると身体が充分に成熟していることが判る。

「これで良い？」

信子は恥しそうに胸元を見た。開いた胸元から見えるふくらみが、裸の時よりなまめか

しい。

「良いよ」

かすれた声で云うと、私はいきなり縄を手にして彼女の後にまわった、信子は両手を後にまわした。細い手首に縄がからみつき、温い体温と柔かい肌が掌に快い。オーソドックスな後手に縛り上げると、床に座らせた。もう、自分の裸身をさらしていることも忘れ、私はプレイに夢中になっていた。短かいスカートからむき出しになった太ももは、驚くほど白かった。私はまわりを見まわしてから、彼女の下着を手にした。まるめると何と小さくなるものか。彼女の口から「嫌、嫌」と小さい声が続けて洩れるのも構わず、下着は彼女の口の中につめられ、ストッキングが唇を割って結ばれた。口を一杯に開いた恰好で彼女は観念した。セーラー服を押し上げている胸のふくらみの線が美しい。続いて私は彼女をうつ伏せにすると脚を伸ばして揃え、足首を縛った。ふっくらとしたふくらはぎ、細く締った足首、伸ばされた、膝の裏の凹みが美しい。太ももを縛り終ると、いきなりスカートに手をかけ、引きずり下ろした。猿轡の下で何か悲鳴が聞こえたようだ。セーラー服の少女は、半身をむき出しにしたまま横たわって

いた。全裸でいるよりあらぬない姿の方が羞恥心は激しいとみえて、信子は後手の指をしっかりと握りしめていた。セーラー服の下丸いふくらみ、その下に伸びる白く艶やかな太もも、これが私の求めていたものだ。私は縄目の喰い込む剥き出しの二の腕や太ももに触れてみた。縄にくびられて盛り上った肌は、張り切って強い手応えがあった。私は少し当惑した。被縛の信子は余りにも美しかった。私の少ない経験では、縛り、打つ加虐にのみ興味があつたのだが、この少女は余り可憐過ぎた。だが私は、ある勇気をふるい起こして彼女の上半身を抱き起こした。猿轡の喰い込んだ白い頬、信子は目を閉じていた。長いまつげだった。セーラー服に手をかけ胸元を押し上げると、縄目に歪められたふくらみの先端に薄紅の蕾が可愛い。一瞬、彼女が体に力を入れたのが判る。私は足をそのままにして立たせると、上半身の縄を解きセーラー服をぬがせた。二の腕に、斜めの縄目の跡が美しかった。私は彼女の両手を前で縛り合わせる、縄を上についた。肉体の門の宙吊りの姿である。もっとも信子の両脚は、しっかり床についている。露わに伸ばされた二の腕は急に細くなったように見えた。ここでやっ

と私は加虐のムードが高まって来たように感じた。ベルトを手にとると、私は彼女の後にまわった。腕の付け根がふっくらと盛り上がっている。そこをめがけて、ベルトを打ち下ろした。信子は少しうめいてのけぞった。両脚の自由を奪われている為、体が不安定にゆれる。打った所が、うっすらと、赤くなっている。次に場所を変えて細腰の辺りを狙う。太ももを、背中を、間隙は、段々短くなっていく。信子のうめきも高まり、ゆれ方も激しくなってきた。どちらかと云えばまだ子供らしい体つきで、色気を感じさせない信子だったが、私の体内には段々信子を求める気持ちが強くなって来た。鞭打ちの手を休めると、彼女を吊っていた縄を解き、手首は、そのまま頭の後にまわし、縄尻を胸にまわして固定すると、脚の縄を解き床に押し倒した。アブ・ノーマルの世界に悦びを求める私だが、今は男性の本能に従って行動しようとしていた。彼女の口から押し殺された悲鳴がもれたのは、頭の下になった手首の痛みか、私の変化を意識しての恐怖か。体を仰向けに伸ばした信子の胸は、小さくなった。細く若い体は本来なら、それ程アピールを感じる体ではないだろう。だが、私は野獣となって彼女に飛びかか

った。当然のことだが、彼女の抵抗は激しかった。この子供のような体の何処にこんな力が、秘められているのか不思議なくらいだった。しかし所詮は男と女、その上、彼女の両手の自由は奪われている。私は彼女の体をしっかりと捉えた。小さい体が必死にもがく。丁度、鮎を釣り上げて手にした時のように。

その時、私は背中に激しい痛みを感じてのけぞった。空を切って次々と私の体に打ち下ろされる鞭、それは本格的な鞭だった。道子と幸子は目の色を変えて、しかし楽しみみの色を浮かべて私に鞭をふり下ろしていた。

「駄目よ」

「裏切者」

彼女等の鞭にのたうちながらも、私は幸子の白い体の処々に残る責めの跡に気付いていた。私の体はあます所がないのではないかと思われる位、鞭の洗礼を受けた。だが、私の心は何となく満たされる気がした。

「ルール違反で処罰します」

道子が改まって云った。

「矢張り男は駄目ね」

「無理ないかもしれないけどね」

私は正坐したまま、うなだれていた。一種のポーズだった。この姿勢が一番ふさわしい

気がしたのだ。

「判決は？」

「そうね、矢張り拷問ね」

「それだったら、本人が悦ぶわよ」

「良いじゃないの、私達だって楽しむんだもの」

「町さん、手を後にまわして」

道子は私の後にまわった。両手を縛しめられながら、上目使いに私は、幸子と信子を見た。白い肌に残った縄目の跡が云い様もなく美しかった。

「立って」

隣の部屋へ連れてこられた私は柱を背に立ち縛りにされ、両足も揃えて縛られた。目を閉じて、次の責めを不安と期待のうちに待った。女の温い体温が近くに感じられた一瞬、

「ぎゃあッ」

私は、思わず悲鳴を上げた。胸に激しい痛みを感じてのけぞった。体中に縄目が喰い込む。目を開けると、左の乳首に小さなクリップが噛みついていっているのだ。男の乳首は、女のそれ程神経は鋭くないと思っていた私は、その考えを根底からくつがえされた。乳首の痛みは一瞬のうちに全身を駆けめぐり、体中を麻痺させてしまったようだ。

「ぎゅう！」

右の乳首にも噛みつく。

「男でもやはり痛いよね」

それに対する言葉もないほど、私は苦しんだ。

「もっとつけましょうよ」

女達は手に手にクリップを持ち、私の肌に噛ませて行った。だが、乳首ほどの痛みはない、唯一カ所を除いては。

「うわあっ」

私は女の残忍さをのろった。責めの苦痛を呪った。その苦痛の奥底に喜悦がひそんでいるのを知りながら。

私はSMプレイは初めてではない。しかし前の女性は陽性だった。鞭打ち、吊責め、海老責め等の経験はあったし、その種の責めにはそれ程驚かないつもりだった。だが、この三人の女性の責めは陰性だった。三人になれば男に対する遠慮も羞恥もなくなる為か。そ

れからの一時間余りは、私にとって永遠にも

匹敵するものだった。その間私は吊られ、打たれ、とても描写出来ないような責め追加えられた。私の体はむちゃともいえるいたぶりに苦痛すら覚えなくなった。責めの後、私の体は彼女等の前に投げ出された。体の縄は解かれていたが、体中の力を抜かれたようにうつ伏したままだった。目に入る腕の表面は一面に縄目や鞭の跡で、赤く彩られていた。この分で行けば、体中どんな無残な様になっていることか。

私は一体、SなのかMなのか。前のプレイの時はどちらにでもなれた。どちらにも喜びを感じた。だが、こうして三人の女性に責められてみると、Mとしての楽しみの方が強いような気にさえなってきた。複数の女性からの責めは嫌だと決めていた私だったが……。

幸子と肩を並べて帰る途中、しばらくは無

言だった。二人の手首の跡が赤い。

「どうだった」

「すごいね」

「何が」

「何がって、みんなさ」

「痛かったでしょう」

「体中がばらばらになりそうだった。いつでもあんなにするの」

「いつもは違うわ。貴方が相手だから大丈夫だと思ったのよ。……来て良かった？」

「うむ、まあね」

「貴方はS？ M？」

「さあ、どっちだろう」

「Mみたい」

「相手次第かな」

ここから先のこと、それに後日談は差し控えよう。私はKK誌が好きだ。このKK誌が私の拙文によって発売禁止になることは耐えられない。ここで筆をおく次第だ。(完)

獄

平 珍

パンチやプレイボーイ、その他が、これなど、ブームにのって奇のものにエロティシズム(ヌード類)が、あれほどあるのに、何故マルな人が読んでも面白いだろう「奇ク」が悪いのかと何カ月前に書いておられた方がありました

白い小説、物語りで、私はSM者でも、しばられたヌードは絶対に

煉

黒井

をしばりたいとも思わなくなりまして。圧迫されればまた再燃するのでしょうか。

最近の奇クは、読みものを主として、SM以外の広い読者層も狙っておられるような感じですね。

私などの出る幕にあらず。六月号の団鬼六氏の「人生論」。私の中のS派の性格を見事に指摘され、全くその通りで弱点を握られた思いです。ただ「美女をしばる」より「しばられた美女を観たい」という私の性質は、何というか、全く行動性に欠けています。妻をしばるといのは大して興味なく、誰かが妻をしばってくれたら、一層私のSM心理はうれしいでしょう。たいていの人がSMをもっていうという団氏のお言葉ですが、私の場合は「後手」のみ。できることなら自分がしばられたい。あるいは潜在的M派の「裏返しのS派」なのかも知れません。

エリス。シュテーケル。パート

そんな作品。二見書房のそれと比較できる楽しみも残っています。

バタイユのエドワルドは、先に桃源社の「エロスの解剖」（渋谷氏訳）の中でピエール・アニジェリック「エドワルド夫人」についてという短文で紹介され、日本文の原稿用紙にしてたったの三十枚バタイユの生前、五十部の私家版で、当時千五百フランという高値だった由。まかり間違っても日本に現われることはあるまい思っていたのでびっくり。（しかし、大分カットされている様子）バタイユに初めて接したのは「エロスの涙」ですが、この画集に中国の手足切断の公開処刑の写真が載って居り、ちらっと見ただけで、高価故ではなく、恐しくて買わずにいた。麻薬か何かでマヒされているらしく、手足や胸を削られているのに、うす笑いを浮べているのが気味悪かった。バタイユのエロスの哲学は、死と隣り合せなので、むべなるかなです。

あらわれない。前衛の写真展にもない。堂々と描いておられるのは古沢岩美画伯、ゴヤ・ドロクロアぐらいなもの。（純文学には、御紹介したい多くの作品があります。が、プレイボーイ、パンチのエロは、ノーマルなエロでも、SM好みは着衣のしぼりにでも魅力があるのですから、根本的にちがうのです。若し、SM好きの写真家がいたとしても、彼等はSM誌以外に、SM的ヌードを発表することは、現代ではまずないでしょう）妙な話ですが、愛妻も社会も今のところ、私のSM好きにヒステリーを起さなくなったので、私のSM心理はいよいよ薄らぎ、妻

懸賞入選作品

白　　い　　山　　河

島内 晋一郎



(1)

——ああ、春になったなあ——

青く澄んだ空、白い綿雲、水面にキラキラと輝くさざなみは陽光に映え、植え込みの若葉も青くもえ、真新しい色々な旗も微風に翻って、彩やかな色をまぶしく見せている。

本命で終わったレースも軽いどよめきを残して大半は中央広場へ去って、静かになったスタンドの片隅で、ぼんやりとオレは座ってい

た。昨夜、バーで夜中頃までそれ程飲んだ筈では無かったが、今朝は、寝坊して、今ここへ着いたばかりであった。

突然、けたたましい爆音を立て、水しぶきを上げながら、あっという間に目の前を白や赤や、黄が飛ぶように通り過ぎていった。

——四の展示やな——思出したようにポケットから数種の予想紙を取り出したが、丸めてポンポンと叩きながらも一度、ゆっくりとそんな風景を眺めてみた。華やかという他

は、何んのへんてつも無い眺めだったが、これからの神経を少しでもリラックスし、静かな落着きが必要じゃないかと思う気持だったかも知れない。

倦土重来。そんなおおげさなファイトでは無かったが、ここ二、三年ムシャクシャして来た気持を、丁度思わぬ金が入り、刹那のスリルと利慾を満たすには、恰好の場所だと、ノコノコやっては来たが、こういう所は、いつ来ても、得体の知れないムードで、一般に

庶民的に明るくなったと云うのは表面的で、その底にはまだ暗い流れが潜んでいると感じたのは、幾らかのキャリアを持つ者にとっては、共通した印象といっていいだろう。

御存知、ここはS競艇場で第三節のR市主催のH賞争奪戦の三日目である。

微風も時々冷たく感じる。オレの前の席で何やら云い争っていた若い二人連れが、席を立ったのを機にオレもその場を離れた。

ノミ屋のおぼはんの間をすり抜けて広場に出る。投票締切前のベルが鳴り出す。本命、その裏、ヒモのアタマ、穴、大穴へと殺到が始まり、日曜と祭日が重なって今日、まだ序盤戦というのに相当な人出である。

ベルと共に群衆は活発に動き出した。騒しく、激しく右往左往、縦横無尽にぶっつけ合い、ぶっつかりながら流れるさまは、空から眺めれば、さぞ壮観だろうと思う。

場内の人気の大勢は割れた。首位争いの乱戦模様。——予想紙や予想屋なんかアテにならない——。オレは独自の予想で三枚買った。三円である。三円とは三千元である。この世界（パチンコ界も同じ）のみに通じる符牒である。——

——本日のレジャーを御子様御同伴でこゆ

つくりお楽しみ下さい——。こんな所でこゆつくりしてたんじゃ幾らあっても足りっこない。

一角に備えられた休憩所、子供の粗末な遊戯場、藤棚の下には、PRのついたどきつい色のベンチが並べられ、そばには、申訳程度のウォーターローリーもあり、結構子供連れの夫婦も、ささやかな投資で楽しむ姿がアチコチに見られる。

さておき今日も何千万の札束が動くこのギャンブル、いやもうスポーツとかギャンブルでは無くなって、企業、産業化といっても間違いないが、主催市は、ここから出る財政の元に息をしているのは、何も当地だけではあるまい。が、その陰に、何百万の善良な市民が、家庭争議、一家心中、その他刑法にふれる犯罪悪の巣、公営ギャンブルのもつアンパランスな面をさらけ出し、どん底でもがく人、一歩手前であがいている人を見る時、他人事では無く、尾羽打ち枯らした己れを見つめた時、独り身の青空だと簡単に片付けられてよいものかどうか。——なんや、今更、もつとフランクに楽しめばええ、人は人や——と思うが、嘗ては、生活にミスを空けた苦い思出を頭に浮かべると複雑な気持ちに襲われ

るが、深入りしなければいいと思うと、又、別な明るい気分にかえり、——パーと使って、又会社で稼いだらしまいや——と慰められるのである。

春風に乗ってレースは始まった。

オレの白はインからスタートしながら第一第二コーナーで大きくふくれ、そのヒモ、赤が飛び出て三位四位であった。二分四十五秒で三円のパー。予想紙を見ると一位、二位共予想通りのレースであった。何んたることか、得てしてこんなものだ。払戻し窓口は、すでに八〇%負けて二〇%勝ち、もう鬼の首でも取ったような喜びを表わし、黒山の群れである。アホらして、アホらして。

次のレースも混戦の予想。ふと、無印、しかも病氣長欠、然し記録は一線級、高年令ながらひさかた振りのカンバック、ランナー戦の巧者。そんな能書を見て、危いなあと考えたが、このおっさんをアタマに、ヒモを三者、流し買いた。入れば大穴だ。大勢は混乱し、大割れで、オレもヤケ気味でもあった。半ば望み薄であった。無茶な買い方である。

スタートの進入位置がインか、サイドか、アウトか、エンジンがどうのと云う事はもう

どうでもいい事だと思った。記録が、人氣が問題では無い。要は取ればいいのである。取ればいいと云っても、手当り次第にはいかない。そこが難しいのだが、こと勝負は、近年とみに公平なレースが多くなって、一部では八百長があった方が、面白いとの声もあるが、昔と違って、大分大衆化した今日では、もう不可能な昔語りになりつつあるのは事実で、喜んでいいのか、どうか判らないが、でもやはり僅かでもいい、取り易い公正な実力本位のレース展開を望む声が大いなのは、オレだけではあるまいが、この本命ですら、うっかりすると逃がすことがあり不思議な事だと思う。

過去十何年来のぼう大な記録に首っぴき、詳さに収集研究してくると、どれもこれもに食指が動くようになるのは当然な事、窓口という窓口全部を走らねばなくなる。極端な考え方だが、そうなのである。然し、そうなると、テメエの方の軍資金がたまつたものではない。一レースから六レースは連勝複式で十五の窓口、あと、十二レース迄は単勝式で三十の窓口であるから、従つて $\frac{1}{15}$ と $\frac{1}{30}$ の確率となるので、アホらしてそんな馬鹿げた芸当など出来るわけが無いというこ

とである。

勝負にはどの世界にも共通した哲学のような信条があり、経験と、勘と、運だと言われる。将しくこの内の勘は長年幾多の辛酸をなめて得た経験のつみ重ねともいわれ、一朝一夕、なまはんかな事では仲々難しい大変なものであり、又、運というケツタイな非科学的二次元の力が作用されるともいう。

膨大な資料を小脇にして賭けるでもなし、無言で、ナマのレースを見学、それを貴重な血とし糧として、今に見てろ、いつの日かやつたるで。恐るべき執念を深く秘め、夢見る如く、仙人のような恰好で場内を闊歩する奇人は、何処の場内でも見かけるスナップである。

とまれ、勝負は、どんなに深く広く研究したって取れないものと思え。儲からないように出来ていふ言っている。だが、たった一つ方法はある。とても不可能な事だが、或る目に見えない外部からの三次元の力によっての暗示である。人間に靈魂があるように、或るエネルギーにより示唆されるというのである。然し、下界に於ては、とてもそんな高踏的、神がかりなことが通用するわけが無く、千金の夢、はかなく共、蜜に集まる蟻のよう

に、その執着は止まるところが無い。

勝負というものが研究をして、儲かるものならば、第一、予想屋がなんで、年がら年中声を溜らして商売するものか。

(2)

五レースは終った。

第一と第二コーナでおおむね勝負あつたという単純な概念は破られて、同コーナでスタンドは大きな喚声が湧いた。インコースより出た三艇の内、二艇が着水、そのおおりで後続も外にふくれ、アウトからスタートしたオレの頭が、ガラ空きの道を済みませんとばかりマクッテ二着に出た。三コーナ迄はオレのヒモは三着で続き、四コーナでマクッタため一着艇と接触、着水してしまった。穴狙いの冒険だったので、別に腹はたたなかつた。それどころかオレの予想もまんざらではないとほくそ笑み満足した。よし着水しなかつたとして、あれ位いトップに接近する實力なら、スタンド前で軽く抜いて居たものと思うが、遺憾せん、ヒモが大分遅れていてどうしようもなかつた。時間にして三分ジャスト。五円の損。場内は一万七千四百円という穴配当で唸りに唸った。

次の展示レースで、予想紙では穴気配とあるが、何が穴だ、カチカチの本命じゃないか、バカヤローと思った。マークのエンジン抜群なのは誰れがみても明かで、全く、いいかげんな研究が多い。二流、三流となると一回も当たらないというひどいものもある。場外で水引きのかかった袋に入れた特報という奴、これが千円で飛ぶように売れるが、これすら、二回乃至三回適中すればいい方である。物騒で手がつけられない。その他、回転式数字合せとか色々あるが、半信半疑のまま、群衆心理や、サクラに惑わされつつも、ワラをも掴む神頼みで、結構、そんなものを利用して活路を開こうとする輩もある。

ふと気がつき、前の二人連れには見覚えがあるがなと思った。男は葉葉服で、むやみとタバコを吹かし、薄いグリーンのワンピースの女に何かしきりと言ってるが、ここ迄は聞えて来ない。

——夫婦やな——。

ベルが鳴り出した。

とうとう穴が出やがって、もう懲りたから固い奴を流し買いやと腰を上げた時、その男が、苦虫つぶした顔でオレの横をすり抜けて出ていった。前の様子を思い出し、スツタな

と思った。それを追うでも無かったが、ふと振り返った女と視線が合うと、慌てて背を見せってしまった。俯向いたその細い襟足の抜けするような白さを、まぶしく見つめていた。

——ええ、ここが一番ええ——その延長したさまざまな姿態を画いてぼんやりしていたが——今度はガチガチやぞ——耳元で通り過ぎた声に誘われるように、その場を歩き始めた。

広場はふくれ上った群衆で、ごった返していた。五の穴で興奮の渦が冷めやらぬ雑踏にもまれながら、——抜群——絶対——大口——勝負——という強力な言葉を聞き、その窓口を見れば、もう阿鼻叫喚そのもので、臨時に窓口が増やされたとは云え、喧嘩腰の戦場であつた。石の地蔵さんより固い本命で、銀行レースという奴。これで穴が出たらドエライ事になると思ったが、圧倒的な人気では仕方がない。然し配当は元を割ることはあるまいが、ツイても一五〇円位いか。

三万放り込んだ。

——これで入らなんだらどうかしとるぞ——

見え易い席をとろうと、スタンドの入口へ走り込むと出合い頭に軟いものとぶつかってしまった。「あっ」と小さな声を上げ女はよろめき「すいません——」と云いながら体を持

ちなおした。それは相手の乳房だったと思つた。

「ご、ごめん」

見ればあの女であつた。

「痛かった？」

「い、いえ。ウチこそ、ぼんやりしてて」

にっと笑った。——きれいな歯しとんなあ——

「連れは？」

「帰りました——と思います」

「ご主人？」

返事は笑った。その中に何か淋しいかげりがあるように思った。

久しくオレは女には興味がなかった。無視してきた。それどころか、女はどれも皆んな憎くてたまらなかつた。二度目の妻に逃げられていた。白いものが身近にあると、どうしても、生来からの本能が沸々と湧き出て抑えることの苦しさは、何度爆発したか。恐怖と不信、蔑すみはやがて、愛が無くなり、残ったものはお互いの憎しみだけで破壊されていった。給料運搬係、身を粉にして馬車馬のように亭主が働き、嬪の方は、パッパと惜しげも無く負債もアチコチ出来る程、使ってくれて、男も出来た様子で、せっせとつぎ込んでいる事を聞いた或る日、もうこれで終りだ

と思い、頭にきたのを幸い、これ以上のえげつない縛りは無いという恰好にし、更に、こんなこともあろうかと、日頃用意しておいた道具を用いて、上から下から責め抜いた。今思うと、ちょっとひどかったと悔んだ。とても口では云えぬ、生々しい酷ないたぶりで、長い隠忍から一度に炸裂した怒りは凄じかった。今、何処に居るか知らないが、あの憎悪の深い傷は、おそらく今も、赤く見難く爛れて、生涯治らないのではないかと思うと、可哀想でならない。

以来、都会のこの真中で悶々とした年月が過ぎたが、失意と憎しみは、一層女に対する深いコンプレックスを持ち、何をしてでもケツタクソが悪くて、只イラ立った神経でうつろな日を送って来てしまった。

——オレはもう駄目なんだ、イルージョンなんかあるものか、もう生きる屍だ——そんな今日この頃でもあった。

——君、役付になったからには、家庭的にも責任を持たにゃいかん——と言われ、何度も見合の口もかかったが、どうせ今頃の娘にロクなのがいるわけが無い。

——家つき、カーつき、ばばあ抜き——
ふん、うまいことぬかしやがって。どこの

ジャーナリストが言い出したのか知らんが。

スタンドはギッシリと埋め尽くされ、マイクから流れるマーチの元に選手達は次々とボートに乗り込む姿が遠くに見られ、ふとオレの横に女の立つ気配に気づくと

「どうした、帰ったかと思うとった」

無言の女に、ポケットから三十枚出すと女に突き出した。何やら知らんが小さな声は判らない。強引に手に握らせた。

レースは二——がぶちぎっての楽勝であった。配当はたったの一七〇円で二十一円の勝。払戻窓口に向いながら、

「なんぼやられたんや？」

「……」

「よう、ここへは来るんか？」

「ウチは今日——始めてです」

五十一円女に受取らせた。その場でスッタモンダのやりとりがあったが、結局、ハンドバッグに収まった。

雑踏の中を、少し離れ、俯向きかげんでついて来る女は、お世辞にも美人とは言えないが、完璧と言っているいいバランスの取れた体、餅肌の白い肌、憎めない表情に、ふっと妙な感情を抱き始めた。この女は、オレに火を灯もす気なのか。長い間忘れていたあの感覚か

も知れなかった。

七はさっぱり判らなかつた。

——四や六のアタマが何んぼ売れようとアタマが違うよ、アタマが——

——さあ、今度もいただきやぜ——

一万円札を数枚頭に挟んだ赤鉢巻がどなり立てる。

——どこを狙るとるんや。しっかりしてや、恒例の特報や。一日一ぺんしか出ん特報や。

ヒモ無しの一本書きや——

——どおや、又入ったがな、おめでとうさん
——どんどん取ってや。七から単やぜ、間違いなや。穴狙い、穴狙い——

赤インクで大書した五万円の字が毒々しくしずくになって落ちていく。

ややもすると、このムードに引ずり込まれ己れの判断が狂い、判らなくなり、手当たり次第に走ってしまう虞れもあるが、大体の動きを見て居れば、先ず間違いはない。

二——四の折返えしと、三——二を計三万突込んだ。結果は三——二の九二〇円。六十二円の勝。ツキがきた。

「腹へったなあ」

返事がない。

「それ見せて」

予想紙を渡す。

二人で牛乳を立飲みしながら

「次はH賞の予選やな」

「三と五は？」

「あほかいな、四―一、一―三がごつつう売れとる。四―一や」

オレのヤマは今迄に当たった試しが無い。その上、稀にしか来ないから更に判らない。無茶は禁物である。オーソドックスでいこう。

四ワクの特売の方へ回ると、六も二もよく売れていて又、判らなくなった。ええクソと四の窓口でポケットに手を入れていると、横から女が、小さな手で窓口を塞いでしまった。

「何しとんねや」

すぎるようなまなざしが横にふられた。

「三―五か」

ハンドバッグを目の前にして

「この中の、使うてよろしい？」

「あんたの、自由やがな、でもまあ止めとき」

「―でも」

「四か―や」

「―でも何んだか」

「けったいな人やな、あんたは」

「何んにも知りません、でも―ウチ―ご

めんなさい」

予想屋から買った予想数枚も四―一の折返えし、或いは二―六であった。土壇場にきて迷いが生じた。迷う時は、買わずに流すのが賢明だが。もう時間はあるまい。三のワクは西に離れている。間に合うか。走りながら、三が、三が、そんなあほな、入るかいや―と苦笑したが、待てよ、丁度いい機会だ、間違いの無い負けだから、一つ女に責任をとらせるというアイデアが頭に浮ぶと、この口実をもっと面白く大きくする為には、ケチケチするな。大きく負けろ。大きい程、責め甲斐もあらあなと思うと嬉しくなってきた。突っ込んだオレの手に上から板が落ちて来て締切られた。聖徳太子の大きい奴が五枚であった。

(3)

七の開始前で満員だった店内はあらかた空いて、馬鹿に静かであった。

遠慮しがちな女と食事を済ますと、そんな九分通り負のレースなど見る気がせず遊園地のベンチに腰を下ろすと、なぜか疲れをおぼえた。ゆうべの酔いがまだ残っているのか。タバコに火をつけ、

「主人帰ったんやろ。あんた、こないしてて

ええんか」

「―いいんです。それより」

「え？」

「心配で―」

「なんや」

「もし、あの通りいかなんだら―」

マーチ旧友が流れてきた。予想紙を見ると三はカマシ巧者で唯一の惑星、初日と昨日は四着、スタートに難、やや技に不安あれど艇好調とある。五も大同小異で腕は甘い、直線に抜群、巧発の良機連穴。

「見ようか」

「イヤ、恐わい」

「みてみ、三―五は入らんぞ」

風が出て水は少し荒模様らしい。

場内アナによりレースは始まった。ニコーナは一五四六三二の順、直線で一が下った。四を回ったところで四―一五三二六。ざまあ見ると喜んだが、顔には出さない。三―五を買ってるんだと云う気持は毛頭無かった。どうか負けてくれと言う一念が強かったが、スタンド前で三が大分追い上げていた。六を回ると四五三二六となった。そして直線で五と三は並びトップに一艇身と迫っていた。スタンドは騒ぎ始めた。一は消えたので断念した

が、次の最後のコーナが分れ道だと思った。接近されても四は固いから、そのヒモ五か三が入るか、逆に五―四か三―四、単だから逆目の五―三でもいいから、決して間違っても三―五は入ってくれるな。オレにとっては大変な事になり、妙な倒錯状態に引きずられながら、今や、オレも必死となってきた。

俯向いてしまった女は、膝の上のハンドバッグを力を入れて握り締め、全身は小刻みに震えていた。裾から、肉の乗った円い可愛い膝小僧、これも興奮に喘いでいるような胸の脹らみをあやしく見つめる時、生き生きとしたものがよみがえり始め、アナの声も徐々にオレの耳から遠ざかっていくようであった。目の前は真っくらになった。

「あっ——」

四が、三が、そんな事はもうどうでもよかった。勝手にしやがれと思った。

ウエストから上半身を振るよう引寄せ、頭を胸で支え、上から覆いかぶさるように間髪を入れず口を吸った。左であごを押すとなお開かれた中へ、舌を深く挿じ込み、ねめ廻した。右で服の上からその脹らみへ当てていった。レースの興奮と、突如の異変に気も動転、しばらく呆然としていたが、必死になり

暴れ出した。一度口を離すと、紅をはかない桜の色は

「かんにん——」

皆まで言わず口を塞いだ。

「ああ——ムウ——ああ」

オレの頭の中で赤く、青く、白く熱い塊りが変色し始めるのを感じた。抵抗の中に、もう何もないように思った。

「イヤッ、ヤメテ下さ——人、人が」

スタンドの騒然とした喚声を聞いたと思った。アナの三——を聞いたと思った。

周囲に人の気配を感じ、促がすと多くの視線を逃がれるよう庇いながら歩き出した。

湯茶接待場裏の静かな場所へ来た。

「勘忍やぜ」

「ウチ——」

「聞えへんがな」

「恥しい——」

「ぎょうさん見とったな」

怨むような目をした。

「ひどい、本当にひどい——」

泣き出さんばかりにくるりと背を向けるとその場にしゃがみ込んでしまった。

「あのお——」

「どないした？」

「イヤッ、大きな声で」

「そこや、行っといで」

身づくろいしながら女はトイレへ向った。

オレも何んやらこうと思ったが、大きなノビをすると、払戻しの方へ歩いた。完全にやられたと思った。オレの負けだ。そして改めて気が付いたように始めて唸ってしまった。いったいあの女は——。参った参った。喜びと無念さで妙な気持で配当を受取った。元を引いて四十万の勝。東はずっしりと厚く重かった。最高であった。囲りの視線をあび逃げるようにした。

「千円ついたぞ」

「まあ、よかった。安心しましたわ」

手を叩いて心から喜ぶようであった。

「敵わん、負けたよ」

「ウチ、もう心配で心配で——」

「ほんと云うと、負けた方がよかったんや」

「ど、どうしてですの」

「あんたに、みっちり責任とって貰おうと思うとったんや」

「まあ。でも責任云わはっても」

「そこやがな」

「え？」

「いや、何んでもない。今の三―五で無かつ

たら、どうする積りやった？」

「あとで後悔して。ウチ何んであんな事、云い出したんやろ思うと、居ても立っても——それに、あんなことしはって——いけずやわ」

「あんたが悪いんや。レースですっかり、そやからオレにも移ってしもたんやがな」

「そ、そんな——」

耳まで真赤になり、完全に後ろ向きになった。その白い顔に赤味がさすと、丁度数年前撮って来た忍野の紅富士そっくりだと思つた。あの撮影には苦勞した。零下十度の朝六時二分であつた。二分か三分の勝負である。

周りに日の出を邪魔する雲があるともうおじやんである。手足の寒さと斗い三つのカメラでその決定的瞬間を迎えたあの美しい女性的な山を、何故かこの女にも当てはめて見るのであつた。超望遠で見た雪肌の雄大なスロープ。優雅な線は、この女も隠し持って居るところだろうと思つた。

可愛い、美しい、あどけない、哀れな、憂いを含むなど女に対する表現にも、色々あるが、中でもオレは、智恵の過ぎた理屈っぽい女、美人ですといった女は最も嫌いである。オレはあどけない女が一番好きだ。

この女は行きずりではあるが、今や、もうそうでは無くなったようだ。あの時の印象がやはり裏付されて居たので嬉しくなった。然し、女への憎いコンプレックスは、いったいどうしたのだろうか。オレとしたことが。一時の感情に敗けるのか、馬鹿なことは止めんかい、サカリ猫みたいに、ましてや人の鼻ちやんを——

「さっきから氣になつとんねや、家の方はええのんか」

「——」

「帰らな、いかんのと違うか」

「——」

「どないやねんな、返事せんかいな」

「——」

ポケットから数枚取り出し、又少し加えてハンドバッグを引ったくと素早く入れた。

「な、なにしはんの、ウチ困ります」

「もう帰んなさい」

女は中のものを取り出し

「さっき戴いてますんよ。ねえ、これを」

隣わず、足早く人混みの中へ入り込んだ。

必死となって追って居るであろうと思うと、可哀想でもあり、いじらしくもなつて、振り返りたい衝動にかられたが、ずんずんと群れ

をかき分けかき分けして行つた。予想屋からの予想をまとめ、調べる内、いつの間にか、南の特券窓口に立って居た。すると、中ほど辺りの後ろで、女は傾きかけた陽がまぶしいのか、手を額にかざし、左右を見て居た。ウマイ所へ陣取つたな、——二から六——五迄の窓口の中は、非常に短い。ああ頑張れたんじや、敵わん——と観念すると、女の方へとゆっくり歩き出した。

(4)

場外のその辺りは、もう悄然としたオケラ組が三々五々帰路について居た。

本命を取つて二万程入り、あとの二つは前売りを利用した。結果は明日の新聞を見ればいい。暖かくなつたといつても風が少し冷たい。時々砂塵をあげて舞い上る突風に顔をそむける。

「さあ、あと二人、どや、梅田迄三百円」

「えらい混むぜ、乗れや」

パンパンと叩きながら白タク勧誘員が、ずらっと待ち受けている。

「——」

「え、そこのお二人、どないだ、どこへでも行きまっせ」

ウルサイので歩き出した。

「あのう、なんでこんな事しはんの」

「ええわ、呉れる云うんや、貰ろといたら得やないか。それより飯でも喰えへんか」

「だって、みず知らずのお人から——恐わい、あら、済いません、こんな事云うて」

手を握った。少し抵抗があった。

「何たべる」

「——」

「何んとか云わんかいな」

「ちよっと電話して来ます」

煙草屋の赤電が目の前にあった。

「急ぐんやったら、あんた、すぐ帰らんかいな」

女はクスッと笑った。

——ほんまに、ケツタイナ女やな——

今日は、ツキにツイて、じゃかすか金が入り、ゆくりなくも見事な女との出逢い、そして女から受けた現実感に酔っていた。不思議な事で、ほんのちよっとしたきっかけで今のオレが在り、女も在る。オレが先か、女が先か、知らない。あの『時』が無ければ、考える迄もあるまい。スツカラカンで意気消沈した自分をみつめるだけだ。とすれば、女に感謝すべきなのか。女は神様なのか。オレは、

そうでは無い、運命だと思った。出逢いも運命、あの三—五も運命、悉く運命だと思う。

あとで女は云って居た。

——何んでウチ、あの時、ついて行ったんやろ——

——オレもな、ビックリしたぜ、横に立って。女でケツタイやな、ほんまになんでそんな気になった？——

——なんぼ考えても、不思議やわ。ウチ帰ろうとしてたのに——

——衝突した時、もう浮気の決心しとったんと違うか——

——イヤヤわ……そんな——

「済いません、お待たせして。あのお友達んところで今夜泊りますから」

「そう」

「いえ、あのう——今夜——お付合い」

「な、何んやて——オレ——と」

うなずいたが、如何にもキツとなった表情であった。

「あ、あんたは」

くるっと背を向け、泣きべそになった。

「だってえ——だってえ」

「あんた、奥さんやないか、あほ」

思わず大きな声に、女はビクッと体が震え

た。覗き込み、今にも涙の出そうな瞳でオレはじっと見つめられると、骨も砕けよとばかり抱き締めてやりたい位であった。

「おおきに、おおきに。その気持だけでええ。お帰り」

ひとしづく流れた。

「イ、イヤです。——ウチの気持に——」

「ええか、オレはな、始めからそんな——」

「分っています。お気持嬉しんです。——お金もですけど——いいえ、お金じゃないんです。ただ嬉しんです。——ですから——」

「えろう又、オレちゅう男は惚れられたもんやな、どこがええんかいな。然しなあ、やっぱり帰らなあかん——な」

両手で顔を覆い、体全体で否定した。

「ええか、あんたは人妻や。な、お帰り」

せきを切ったように泣声が大きくなった。

もう西成の中頃で、市電通りの人通りも多く、じろじろ視線も集まり、ヨタがかった連中からは野卑な言葉や、口笛も飛んでくる。

「わ、分った。な、分ったから、もう泣きな

や、女に泣かれると敵わん」

一軒のすし屋に入ったが、女はお腹が空いていないと云って食べなかった。ビールをついでやると、おいしいと云ってコップに二杯

程飲んだ。別れた妻とはとても比較にならぬ、控え目でおとなしい中に男をなごやかにさせる何ものかを持って居て、広い世の中には、いい女も居るものだと思った。

「イヤー、そんなに見て」

「可愛いなあ、憎らしいな、可愛さ余ってちゅうとこや」

「ううん、ウマイ事いって」

「どや、あんたの体きれえやろな」

「イヤヤ」

「中身な、何もかも見たいな、たっぷり……いやあ、ごめん、酔うたな」

「エッチやわ」

「男はな、みんな、そんなもんや」

ビールのお代りをする。

「主人とは、ウマクいっとんか」

「——」

「子供は」

「ありません」

「こんな話止めとこ。あんたが何処の人で、年がなんぼで、どんなくらしで、主人がどうのこの話しよう無いやろ、オレも聞きとう無い。だから、オレもオレの事は言わん。でもな、あんたが話してさっぱりするなら、聞いたってええぜ」

「済いません。どうせ、きれいな話じゃありませんから」

「うん、じゃ聞かんとこか。でも大体、あの時からの様子では、察しは出来るから一つだけ言わして貰おうか。男が本当にロクで無しなら躊躇する事は無いすぐ別れたらええ。大体、働かんちゅう男はあかん、元気な体でおって。男の風上にも置けんへんがな。そらあ、家庭を持つと、とても人には言えん事情や苦勞も出来てくるけどな、決してあんたとこだけや無いんやと、思わなあかんぜ。人は皆、苦勞してるんや。神も仏も無いもんかと思うような事が必ず一度や二度あるんや。冷たいと思うやろけど、男を働かすようにあんたも、もっていかなあかん。酔うて熱うなってきた。苦勞も無駄な苦勞なら止めた方がええ。苦勞のし甲斐があるのか、無いのか、主人とあんた二人の努力次第や。ハッハッハ——、言うたったあ、ええ恰好をな。人に意見する時は、自分のこと棚上げしとかんと言われんさかいな。あーええ氣持や」

店内は、テレビに相撲が出て次第に喧ましくなった。

「おとなしいあんたのこっちゃん、言いなりと違うか」

「——ええ」

「近くでないと判らんが、顔に所々あざがあるな」

「氣が短かいんです」

「体の方も叩かれるんか」

女はかぶりを振って、ふっと手でその跡をさする様だった。

「しかし、あんた今夜、大丈夫なんか」

「ウチ、どんなに輕蔑されてもいいんです。仕方が無いんです。だって、何んにもあげるもの無いんですもの」

「何言うとる。輕蔑どころか、嬉してな、太陽が両方から一ぺんに出て来たみたいや」

「イ、イヤやわ」

真赤な顔でぐっと睨まれた。

「ああ、空っ腹で酔うたな」

「大丈夫？」

外に出ると、もう夕宵が迫って居て、街は氣の早いネオンが瞬き始め、行き交う人の群れも心なしか忙しげに見えた。

車を拾うと北に走らせた。車中で、早速作戦を練り始めた。女の手前、酔った振りを見せて居るが、ビールの三本や四本で酔うオレ様か。この女は知らないだろう。さぞびっくりして、ひょっとすると逃げ出すかも知れない

い。でもこの女の事だ、案外素直について来るのかも知れない。然し、余りにも突然で、何にも用意をして居ない。最低限度のものは買わねばなるまい。あれこれと思えば、ぞくぞくと楽しい気分にも踊るようだった。

駅から北へ少しばかり、そこはビル街とはうんと離れた住宅街で、その中を割るように小さな商店が南北へ走って居る他はさして特徴の無い静かな界隈であった。車を降ると、見知りのNホテルを目で確認しながら、商店街の方へ入って行った。

日は今、暮れたところだった。

(5)

「何年振りでございますかね。全く、お懐しいですな」

別館への廊下を支配人は、指をくりながら先に立って歩いた。廊下の両側は見透しになって居て、青い芝生が水銀灯に美しく映え、葉だけの桜の木や、水の無い池、新しい庭石など、どう見ても工事中のありふれた日本庭園、一方は簡単なゴルフ練習場で中では外人がクラブを振るのが見られた。

「大分広げたな、万国博に当て込むか」

「正直、それもそうですが、近頃、とみに

外人が多うございまして」

「まだかいな、長い廊下やな。まあせいぜい儲けてくれ」

「ご冗談を。忙しいばかりですよ。それはそうと、大分お肥りになりましたな」

「腹が出ただけや」

「近頃は景気がよろしいようで」

そこは申し分の無い室内で、三部屋の洋室に分れ、調度品もかなりなものが揃えられてあり、最高級だと自慢するだけであつた。

ドアの外に消えた支配人を握え、

「果物とナイフ。ビール五、六本も頼む」

女は物珍らしそうに眺め廻して居るのを幸い、先ず気付かれぬ様に、そつとスチームのバルブを閉めると隣室の奥のトイレに入る。天井の一方が一尺程の高さで空いて居て、飛上ると隣りは浴室であつた。入口の鍵を内側からかけ、浴室から出て来た。

買物のショッピングバッグの中から数種類の縄を取り出し、気ばかり、嬉しさにあせて、何か買い落しがあるかも知れないと点検しながらしごいてみた。木綿ばかり選んで、その細糸編みの軟い手ざわりに、長い間、忘れようと努めながら、時々夢にも見たオレの大きな悲願が、今夜、遂に、この縄で、こ

の紐で実現され、その生々しい白い体から、どんな反応を示すだろうか。オレは今夜程、正に男であることの喜びを深めたことは無い。女への憧憬をオレ自身が、どう見極めていくか、女の喜びは、オレの喜びでもある。それをオレはどう吸収するのか、時間はたっぷりあるが、もったいないから大事に丁寧に使っていこう。手の舞い足の踏むところを知らず、勇んで有頂天になることはない。

口笛が自然に出てきた。

「こんな所、料金も高いんでしょう」

「まあな、度々は来れんよ」

この時、これも馴染のボーイが入って来て注文したものを置いていった。

「暖房が効いて無いんですの？ 寒いわ」

「今に効いてくるやろ」

「その色んな縄、何しますの」

「荷造りや」

「何をですの」

「今夜は忙しいぞ」

「なんか知りませんが、ウチもお手伝いしましょうか」

「手伝う？ ほっ、あんた、自分で？」

「そんなに難かしいんですの」

オレはビールを飲み始めた。女は居なかつ

たが、隣室から姿を見せ、

「あおう、おトイレが開かないわ」

「変やな」

「故障？」

「かもな」

「——」

「あとで調べとこう」

「——」

「どうしたんや」

「寒くて」

「寒いんと違うて、辛抱出来へんのやろ」

「あら、おトイレ、わざとしはったんね」

コップを置くと縄を手にした。

「じゃ、そろそろ仕事にかかろうか。手伝ってくれる言うたな」

「ええ、でもおトイレ」

女は、知らないらしい、可愛い奴だ。何食わぬ様子で近寄り、屈み込むと、さっと両足をぐるぐる巻いた。

「あつ、な、何しはるの」

次には、もうベッドの上に放り投げるようにして居た。敏捷にやらかなあかん——と思うと背中に腰を下し、ファスナーを開き、裾から頭へはいでいった。予期した通り驚きと羞恥に必死の形相で抵抗を示した。

「なんぼバタバタしたってあかん。暴れたら洩れるぞ」

「や、やめて、ひ、ひどいわ」

晒け出たそれは、白くきめ細い輪郭で出来上って居た。完璧なバランスであった。その山は両方とも、小さいくせにピンと立って居た。踏み入ればねめるばかりの平なスロープは中ほどに一つぼたんの窪みを作ってえんえんとして居た。白はいよいよ白く突然のあるかげりを残して大きな山脈が二つ南へ直線に延びて、その間の大きな谷も滑るような絶壁を深く見せて居た。小刻みに震え、断続的な声を上げる白い山肌を撫でるように鑑賞しながら、東西の細い腕を背に、南の山の上に折曲げ、エビ縛りに作るには不馴れなせいもあって、かなりの時間がかかった。女は、怨恨と憎悪の抵抗が大きく、幾度も縛りなおしながら、オレはクタクタで大汗をかく始末であった。鑑賞どころの騒ぎじゃない、大変な重労働だと思ったが、考えて見れば、女こそいい迷惑で、とんだ災難だろうと思う。それでも、オレなりの作品に相好を崩して居ると、約束が違うのだと、泣きながらわめき出した。

ビールを口に含んで来て、頭を持ち上げ鼻

を捻ると、口はわけなく開かれた。鼻から出し、むせび苦しむ、泣声も大きくなった。

「約束が違うやて？　ふざけたらあかん、さつき何言うた？」

女はくしゃくしゃの顔を横に振った。もう

一口は、喉が鳴って素直に飲みほされた。

「みてみ、可愛い顔が台無しや」

「お、お願い、かんにん——して下さい」

タオルで顔を拭いてやりながら、

「今度はお願いか、荷造りは一人では出来へん言うと、手伝うと申し出たんはどこの誰れやったかな」

「こ、こんな事とは——ね、かんにん、く、苦しい」

お代りが、わめき叫ぶ口の中へ強引に流し込まれた。

「イケルやないか」

室内も冷えて来て震え出し、寒さと生理の反射に必死に戦い始めたようだ。オレは煙草をくゆらせ椅子に深々と腰を下ろし、しばらくその白い奇山を眺めた。カメラの無いのがシャクだった。オレとした事が、頭にのぼせ上ってコロッと大事なものを忘れたようだ。

「もう——ウチ」

「うるさいな、今、休憩や」

テレビのスイッチを入れると、好きな猫と鼠の漫画。腹を抱えて見たのも束の間、執拗なコマーションに腹を立て消すと、女の声が部屋一パイに響いて居た。絶景の山脈はのた打ち、迎える極限へあらん限りの抗らいを見せて居た。

「ぼつぼつと——」

オレは軽々と荷物を抱きあげた。

「イヤッ、こ、このままじゃ、解いて」

女の体はよく冷えていた。

「じゃ、しゃあないと」

ベッドに、そっと下ろそうとすると

「イヤイヤ、もう——ねえ——あっ」

糸のような一条が——。

「この消火器め、別命なくバルブ開けたらあ

かんやないか」

抱き上げ蓋をしながらい目散、浴室に飛込んだ。

(6)

「もっと力入れんかい。撫とんか、洗ろうとんか。こそばいだけや」

「だってえ——タオルが——」

浴室はかなり大きく、ゆったり四、五人は入れる広さで、湯温も常に適温に保たれ、浴

槽からは、ふんだんに湯が流れて居た。羞ら

いにうなだれた顔をそむけながらも、タオルの無い手にシャボンを塗り塗り、その先に全神経を集中して、下からの叱咤と号令によつて、全身を隈無く軟らかな手が這い廻った。

何んとか洗い終ったのか、それとも、たま

らず途中で投げ出したのか、汗一パイ浮かべる顔を横に向け、両手は胸に当てて座った姿の可憐さはひとしおであった。

「もうこれ位にして、お願い」

「もっと丁寧に洗わんかい。女はそれが仕事やろ」

「あっ、もうかんにん」

両手首を大きく握むや捻じ曲げ、背中で見合わせると、直立の全身から声を発するよう、苦悶に顔は引き吊り、大きく物苦しく呻いた。

この白い物体の中から、今、オレは何を見ようとするのか、何を得ようとしたのか。

判らない。何も知らない弱い者を、こんなに苛めていいものか。しんから嫌がって居るではないか。己れの欲望を満たす為には、人権を冒してもいいと言うのか。イルージョンがどうの、ファンタジーがどうのと勝手な願望をデッチ上げ、縄をかけて自己満足で終って

いいものか。オレは、Sの本質を知らない。

これがSなのか、女はMでは無い。勿論Sなどにはオゾ気を震うだろう。だから、これがSなのか。だとしては、何んと一方交通のルールだろうか。こんな事があっていいのか、判らない、判らない——。

時間が流れた。

体はグッタリと延びて居た。石鹸で手早く流してやるが、抗う気力もとくに抜け、さすがにまかせた恰好で女は夢うつつのようであった。部屋に戻り、ベッドに乱暴に下ろすとハッと目を覚まし、慌てて身をかがめた。

「——もう、どうにでも——して」

咽ぶように又泣き出す。

「よう、泣くなあ、あんたは」

女は激しく泣きに泣いた。

「頭に来たぞ」

足元の縄を取り上げた。

「これ以上はもう——かんにん。許して」

力まかせに倒しておき、両手を後ろ高に縛り、その縄尻を引張るが、動かず、クソッタレとばかり白く大きな尻を続けさまにひっぱたいた。応えたと見え、泣き泣き起き上ったのを引張りながら椅子の方へ移った。

何んのゆとりも無い条件に、突然降って湧いたような出逢いで、少々心配もあったが、ふと思いついた事に、一か八か取りかかる事にした。まだ馴れないのか、時々ゆるんでくる度の締めなおしに、苛立つ気持を押し静めながら、これは丹精こめねばと、ゆっくり時間をかけていった。

思い切り開いた足は肘椅子へ。尻は殆んど椅子から突き出され、椅子の中に後ろ手の体がめり込むのを防ぐように背には何枚かのクッションが当られた。椅子はテーブルの上。

テーブルはステレオの丁度前に配置されて居た。あとは小物の用意で、ピックアップの固定、ターンテーブルの回転数及びそのインとアウトの角度、HI・FI切替、音量のOF、包装紙に附着したセロテープを丹念に剥がしたり、輪ゴムを編んだり、布団カバーの糸を抜いたり、いやはや苦勞するがそれだけに又楽しみも倍加した。

相変わらずウルサイ声に、隠してあったストッキングで口を割り、ネグリジェで頭をスツポリ被せ、ぐるぐると巻いた。

「フウ——フワ——フワ」

変な声になったが、静かになった。やれやれと汗を拭うと煙草に火をつけた。これから

が懸念された難工事が残って居るが、ここ迄きた以上もはや引返す訳にはいくまい。何んとしてでもやり遂げねばならん。

編んだ輪ゴムを乳首に固く、一方はノレンへ。長い時間がここだけに費やされ、全力を傾けて悪戦苦斗した。すると、上の方から汗と涙のミックス声がひととき高まりをあげた時、あほらしい程いとも簡単に工事は終わった。疲れを感じたが工事を続け、絹糸はY字のゴム製ピックアップの中間へ、他はターンテーブルの端の丁度裏の突出たビスに。これはお誂え向きであった。

仕上げた満足感に疲勞も忘れ、点検をするように全身を観察すると、頭に廻り汗でべつとりとなったネグリジェを取り、念入りに拭いてやった。

「天の橋立、吊上橋や」

「む、むちゃやわ。恥しい、顔、かくして」

「柔かい体や、よう曲つとる」

「なにか掛けて、早く」

「さあ、レコードでもかけようか」

世紀の大事業のオープン。交換と変速のダイヤル調整が済むと赤と青の灯が入った。テーブルは回り、斜線の糸はゆっくりと伸縮運動が始まった。試運転を終えると灯を消し、

口のものをはずすと、それで目を隠した。

「歌は好きか」

「——」

「返事でけんか」

裏になった大きな太股を抓ると、悲鳴が上り、皺の沢山出来た腹が苦惱に喘いだ。

「開店祝いだな、アトラクションに独唱と独奏をやってくれ。オレ様のお名指しや」

「——」

「やるのか、やらんのか」

「——」

「黙秘か」

「お、お水欲しいわ」

「歌ったら、やる」

HI・FIのスイッチが入った。

オレはトイレから出て来ると、買物袋を下げて来た。狭い場所で、緊縛の体は、悶え苦しみ、激しい呼吸は、歌にはならなかった。テーブルの回転により、糸は張られ、ゴムの鎖りは、鋭三角形から鈍三角形を構成、その伸縮運動につれ、呻き、もがき、全身に食い込む縄は切れるばかり。ダイヤルを緩急自在に操りながら、最も懸念されて居た事が、こうあっさりと故障も起きず連動されて居るのを見て、よくよくオレはツイてると喜んだ。

スイッチを切りひと息入れる。

ジュースを口移しに注入すると、飢えたようにさもうまそうにゴクゴク喉を鳴した。

「もっーとー」

返事をせずバッグの中から小さな楽器を取り出し、口に噛ませその両端を細紐で括ると頭に廻して止めた。

「しっかり演奏してくれよ」

鼻をセロテープで塞ぎ終るとスイッチを入れた。もう何時頃かいなと隣室を覗くと、壁にはめ込まれた時計の針は夜半を過ぎて居た。ビールをつぎ一気に喉を潤おすと、そろそろ空腹に気付いた。没頭してしまつて、余程熱中して居たのかと思うと、このあほはと苦笑した。そう言えば、ちよつと睡むくもなつて来た。明日は、どうせ社は休まねばなるまいが、女はどうしたものかと考える内、次の間から妙なメロディが流れて来て腰を上げかけたが又座りなおした。目の前よりここで飲みながら鑑賞する方が、音楽の真の臨場感があつてよろしいと考えると、ハムを出して来てムシヤムシヤ始めた。

余りコストを下げ、ロスを省き過ぎたが、この音質は如何に最良目に見ても余り感心したものではない。でも、鑑賞の仕方によつて

は、間断無く奏でる音色は時には悲痛な旋律にも聞え、マーチあり、ガボッドあり、メヌエットにも取れるが、身動きならぬステージで汗に濡れ汚れ、絹のような細くしなやかな白裙は、特製カートリッジから再生された音色が深々と五感に浸透され、肉も血も骨も呻きのた打ち、苦しみと戦つて居る女のすべての叫びのシンフォニーだと思つた。協和音から不協和音、アンダンテからアレグロへの過程のクリエーションだ。女は今、孤独の道をわき目を振らずまっしぐらに突つ走つて居るな。

——女よ、又、一人やつたな。勘忍してくれ、あんたは許してくれたが、オレは許さんぞ、内なる生には負けんぞ、自分との戦いに勝つて見せるからな。安心してくれ。女よ、あんたを大事にしたいからや——

華麗な白裙の爛熟を髣髴とまの当り見る思いがする、その時フォルテは殊更に高く、不協和音と奇音を残し、徐々にピアノシモへとデクレシェンドされていった。

終曲を感じた。

(7)

「もうイヤ。こそばい、やめて」

「湯へ入ったら大分治つたな。弾力性のある縄や、あんまりアトはつかへん」

縄の跡を優しくマッサージしてやりながら頭の中は或る一点に集中されて居た。

「あんまりやわ。息も止まるかと思つたわ」

「我慢強いな、男ならとてもああはいかん」

「あんな事、もうしないって約束して」

「分つた分つた」

「ほんと？」

「さあ今度、こっち向いて。よう虐めたな、痛かつたやろ、疲れたやろ。実言うとな、オレもこんな本格的なんは始めてや。あんたはこんな事嫌いやろ。ようそれは判つとんねや。けどな、あんたみたい肌なきれいな色の白い人、見た事無かつたんや。許してくれ

た時は、嬉しかつたぜ。飛上りたい位いやつた。ほんまにあんたはきれいや。永久に固とう縛り上げて床の間へ飾つときたい位いや」

「いややわあ」

「しおらしい、素直なところが好きやな。こんな積りや無かつたけどな、結局、結果が金なんとならちゅう事になつてしもて。ごめんな、勘忍やぜ。な？」

「いいえ、そ、そんな——ウチも——」

「なんやて」

「うれーしー。でもーウチーウチだけーウチだけ。ひどい、残酷——」

「そやから、謝ってるやないか」

オレの手を払いのけると、シャンと起き上り矢庭に、体ごと体当りしてきた。

「おい、止め、止めんかい」

髪の毛を引張れど、一向離れず、ずーんときくるものが全身を走った。

「ウチー一人じゃイヤッ」

女の情炎に空恐ろしくタジタジとなった。馥郁とした体は、体当りに更にむしゃ振りついてくる。

「ちょ、ちょっと待ちいな、これ」

「イヤ、嫌い、イヤ」

豹変、俄かにこの燃上った熱い息吹は、いったい何んだらうか。いじらしく耐え忍ぶ、当世、珍しい女とたった今迄のイメージは一度に破られ、この変り果てた性はどうした事だろう。只、茫然とするばかりで、とっさの判断がつかない。止むに止まれぬ何かを抽出したのか、今宵の美育がなせる結晶なのか。ここに至って中の中迄、遂に何もかもさらけ出した事に、全く不可解な女の深奥だと痛感してしまったのだ。

いつも手の届かぬ所に置かれ、哀哭して止

まなかったオレのひからびた憧憬が、面喰い戸惑いながらも、こうして今宵ここ迄辿って来たからには、青臭いなら青臭いなりに、オレ自身の内に一つの生声を、至って貧弱であるが、聞いたと思った。前途洋々、この上なお一層、美しく輝くようなフィナーレにしたいものだと思うと、再び縄を握って居た。グツタリとなった女をビニールを敷いたソファに長々と横たえ、両腕はそのくびれたウエストと一緒に巻き、足首と密着した太股もそれぞれ椅子の下をかくぐった縄で定着した。ウエストと膝の下へ、それぞれクッションを当がった。

「お腹が締って——足もきついわ」

如何にもくびれた部分は特に千切れそうであった。

「馴れて来たくせに、辛抱せんかい」

傍には、運んで来たものを並べていった。

「く、くるしい——」

「こっちは腹空って目が廻りそうや」ビールを持つと、静かにゆっくりと瓶を傾けた。

「ひ——、冷めたい、止めてえ」

「おい、しっかり力入れとけ、縛ってはあはげどな、ええか、」

徐々に傾けていった。

深く浸み渡り満々と湛えられたその琥珀の色に、無数に浮んで遊ぶ水玉をそっと吹き分ける。触れれば引込まれ誘うような、妖しげなその透明度。底からの小さな気泡が時々浮き上る風情に、ふーと熱くなってくるのをじっと耐えるのに懸命であった。

「冷たいわ、早くとってえ」

この女が、これ程大胆になるとは、と呆れたり、恐ろしく思ったりしながら、オレは厚化粧になった。

どちら共なく、むさぼり争うような状態に陥っていった。

間断なく受続けた深恥と屈辱にも従容として受けて立ち、追いつめられても、屈伏に次ぐ屈伏が続いても、尚、新しく見事な昇華を抽出させ、驚くべき妖変を見せ、あのたおやかな白磁の出色な、白いオブジェから、どうして、あの目を見はる程の真からのむき出しの姿が現われるのか、惜しみなく、素朴に詩い上げる、人間的、余りにも人間的、そのでかい表現力は、謂いも替れば、女も孤独であったというのか。この華美、複雑の世の中で女も、自分の心の奥底に沈んでいたある感覚がよみがえり、大胆な表現となったに過ぎない。それは、飾りの無い、無垢で、清浄な心

の発露と言ふべきであらうし、又、己れを見つめての心の回帰だったかも知れない。そうだが心の回帰だった。オレもそうかも知れない。女から心の安らぎを求めて居たのかも知れない。オレも孤独なのだと思ひ始めた。安らぎを求める心は、その証拠だと思つた。

時間と空間の中で、二人は、身も心も、シドロモドロに、これから先、どう攪乱されていくのか、あても無く無限の彼方へと押しやられていくのを、ぼんやりとした意識の中で悟つていった。

独走を続ける女の熱い息吹を遠く見つめながら、オレは、迫る陶酔と、人間的恐怖とに

死に物狂いで戦つて居た。嫋々とした女の声の中で尚、逡巡して居た。氷のようでもあった。それを決して美化しようとするのでは無い。只、守りたかった。一つになるのが恐ろしかった。女は、残酷と言つた。そうかも知れない。いや、本当の畜生かも知れない。透徹した冷酷な血が脈打つて居るのかも知れない。

白い独走は接近して来た。

無になろうとした。

時は目の前であつた。

女よ、オレよ、どうせ人間はひとりぼっちなんだ。どんなにあんたの精練されたほとばしりが、如何にオレの琴線に触れようと、如

何にオレを鳴動させようと、非情を保ち、何処迄も知らん顔しておこう。

女よ、たゆみなく孤独に向つて走れ。

非情なオレは冷やかに、それを美しく見届けておこう。

女よ。その白い山脈は、オレにとっては、長い憎恨から生れたふるさとであつた。さすらいの旅路から遙かに望んだ唯一の山と河であつた。オレにも山河があつた。

この行手にあるものが何であらうと、道は二つに分かれた。女よ、叫べ、呪え、そして後々までも恨むがいい。

——範疇より、この範疇より——

△写真「愛妻ゆう子」に寄せて▽

「妻を縛る」 中村伸也

つい先頃、仲間の寄合があつて街の小料理屋で盃を重ねるうち、話はお定まりの、落ちるところまで落ちると、さばけた幹事のあいさつがあり、私は千鳥足で玄関をでました。今夜は寄り道をせずに帰るとするかと胸の中でつぶやきながら、妻の顔を想ひ出すと急に

彼女が恋しくなりました。街の灯の中でバナナをみやげに買い求め、隣りの書店に何気なく立ち寄つた際、店頭で結婚以来読んでいなかった奇譚クラブが眼につきました。時間待ちの喫茶店の二階で、胸を弾ませながら拾ひ読みしただけで、私の心の奥へ押し込んでい

たものが、急に目覚めて不満を訴え、欲望がいつもの場合とかけはなれて強く、押えていた反動とも思えるほどモリモリ湧いて来るのを禁じ得ませんでした。そして十年もの長い間交ぜもない夫婦生活を続けた味けなさを思い、今夜は長らくの自制を捨て、特異な雰囲気盛って臨んでみようと思ひました。するとアイデアがもりもり湧いてくるのでした。そして、ただ単に縛られただけの女が、思わせぶりなヌードのポーズよりも、私にと

っていかにも不思議な魅力をもっているかというのを改めて知らされ、妻の上にそれを想像してみました。すると突然、別の妻の姿が網膜の底に浮び上ってきたのです。あえぎながら身をよじって、そんな事をする私に驚いたり、不安がったり、恥かしがったりする妻のみつ江の白いからだだ。

私は雑貨屋で細引を買い、家に戻りましたが、玄関を這入るときにわざと泥酔をよそおい、迎えに出た妻が少し眉を寄せていやな表情をしたり、みやげの包を受けとって気嫌をなおしたりする様子を観察しながら、もう少し後になったら、悲鳴をあげさせてやるからと内心わくわくして、身体中に長らく遠ざかっていったものが戻って、満ち溢れてくるような想いになるのです。

子供達の軽いいびきが隣りの部屋から洩れて来るのを聞き入りながら、色々とアイデアをまとめる間、私は妻をいたぶるという素敵なアイデアに凝っていききました。そして種々の縛り方や、カメラアングルを肚のうちで練り直しつつ、頭の片隅で、妻が侮辱されたと受けとって私を軽べつしたり、怒って、今後の夫婦生活にひびがはいったりはしないだろうかという心配も閃光のようによぎるのを覚

えました。しかし、一旦火のついた私の十年余りも押えつけられていた欲求は堰を切って、この極めて素晴らしく楽しい、しかも猟奇的な遊戯を実行する考えが、続々と怒濤のように湧いてくるのでした。私は横に眠っている妻の寝息を窺い、はだけた襟元から乳房が半分むっくり盛り上ったのぞいているのを見た時遂に実行にうつる覚悟をきめたのでした。

まず、カメラの用意です。六年生の長男の遠足にお伴をした、素人でもよく写せるハーフ判のEEカメラを拝借、フィルムもだいぶん残っていました。買って来た細引は長すぎて自由になりそうもないから、切って二本にしました。その晩は初日なので、どんな反抗があるか判からないから道具はそれだけで充分とし、早速襲撃する事にしました。第一回は乳房縛りが目的でしたので、そっと妻の上に馬乗りとなり、目を覚まさせぬ様に寝巻の胸元を開ろげました。二本の細引を背中に廻して前に交互に組み合せてグツと絞めあげ、手早く固く結びました。子供二人を育てた乳房は、昔のようにびちびちとした若さはなくなっています。まだふっくらと弾力性に富んで盛り上っています。今その双つの乳房は絞めあげられ、くいこんだ細引からちぎれんば

かりに飛び出してきました。妻は驚いて眼を覚まし、風船のようにふくれあがった自分の胸に気付いて声をあげ、起き上ろうとしたので、私はすばやく妻の両腕を後に廻して縛ってしまいました。妻は子供達が起きることを恐れてか、声をしのび、どうしてこんなたずらをするのか私にたずねました。私は照れかくしにエヘへと笑っただけで、おどおどしている妻にカメラを向け、いろんな角度から撮影しました。妻は始めのうちは怒っていましたが、何を言っても、私が強引に続けるので、しまいには黙ってされるがままになりました。

第一回の攻撃は案外成功に終わりましたが、これからチャンスを見ては色々と妻を縛り、妻にも縛られる女の、その時により様々の気分を味わせてやりたいと計画しています。

写真の方は素人ですので、出来は良くありません。次回はこうしたポーズを撮ろうかと思案中です。出来が良い場合にはまた投稿する積りですから宜しくお願い致します。

私の妻が、新田ゆう子さんのように、私に協力的になるのは、いつ頃のことか、楽しみにしています。



緊縛映画『誘拐』は、「鞭と肌」という題名にかわり、四月二十五日に克蘭クイン、五月三日にアップ、五月十日の試写会も終わった。相も変らず珍妙な個所は随所にあったが、まずまずの出来、配給会社の社長はご機嫌で、ご苦勞でした、と河豚料理をご馳走してくれた。

鬼六談義

カ メ ラ 嫌 い

団 鬼 六

この撮影には私もパジャマ姿で立合った。というのは、次のようなわけである。

この映画のロケ隊が、マイクロバスを仕立てて、私の家の前にやって来たのは、朝の八時。私は、前の晩、友人と飲み過ぎて、アルコールがまだ脳から抜けきらず、バスのクラクションを聞いた家人から揺り起されて、仏頂面をして、パジャマ姿のまま表へ出た。バスの窓から首を出して、ゲラゲラ笑っているスタッフ達に、熱海のロケ先には明日行くから、先に行け、とどなったが、一杯やっか、一杯やっか、とバスの窓から首を出す女優達

が、舶来のウイスキー瓶を私に示して、キヤッキャッ騒いでいる。何となく楽しそうな雰囲気なので、ついフラフラとそのまま、バスに乗りこんでしまったのである。

パジャマ姿のまま、やっぱり俺も行く、とバスに乗りこんでしまったのだから、スタッフ達は眼を白黒させた。こっちも、きまり悪かったが、バスは直接、熱海のホテルへ向かうのだから、何とかなるだろうと女優達が、ペチャペチャしゃべり合っている中へ入りこみ、ウイスキーやサンドイッチのご馳走になる。助監督が私の家へ行き、洋服やシャツを

持って来てくれたが、ホテルへ着けば、もう一寝入りするつもりだったから、寝巻姿でいる方が気がきいていると思い、服は網棚の上へ載せてしまった。

バスは走り出した。バスの狭い通路には、照明器材やカメラ、美津子をふん縛るロープなどの小道具が足の踏み場もない程、積まれている。これから約一週間の三文映画撮影が始まるわけだ。バスに乗っている女優の数が馬鹿に多いようなので、最初、不思議に思ったが、それは劇団『赤と黒』に所属している女優さん達だそうで、彼女達は、何人かの仲間がこの映画に出るので、応援がてら、エキストラとして参加したのだという。そういえば、この映画の出演女優は、美津子役以外、ほとんど『赤と黒』に籍を置く女優で、つまり、新人ばかりである。あっちこちに坐っていた彼女達は、狭いバスの通路を、肉の乗ったヒップをくねらせながら、私の所へやって来て「よろしくお願い致します」と挨拶をし、何がおかしいのか、両手で口を押さえ、苦しそうにヒッヒッヒッと笑うのだ。

彼女達は、劇団の仕事よりも、映画出演の方を希望しているようである。井戸の中の世界であっても、その内に、名誉功心、喜怒哀

楽はあるようで、三文演劇よりは三文映画を望むのかも知れない。Yプロの社長からこれらの女優達を見て、次回の映画に出せそうなのを選んでくれ、といわれているのだから、こうした女優を使わねばならぬ程、今、ピンク映画界の女優は欠乏して来たようだ。

人間的に好感の持てる女優は次々と足を洗っていく。私の氣に入っていた新高恵子も、能かず子も、この社会から遂に足を洗った。売れっ子の芸者がいい旦那に落籍されたというような形なら、うまくいくようだが、この社会に未練を持ち、芸能の道で飛躍しようとして飛び出した場合は、なかなかうまくいかないようだ。テレビ局の仕事をしている友人に頼んで、一、二度、ピンク女優を使ってもらったことがあるが、ディレクターの方では、ピンク女優という考えでどうしても彼女達を見るため、随分とみじめな思いをし、すぐごと引揚げてくる場合が多い。命がけで演技と取組もうとしても、こんな仕事では、と、ある元ピンク女優からテレビの台本を見せられたことがあるが、彼女の顔は出演せず、肢だけが画面に出ただけだと、彼女は私にこぼすのであった。殿様と同衾する奥女中の役で裾からはみ出す怪のアップをとられた

だけだそうで、しかし、それは、仕方のないことだと私は彼女を慰めた。ピンク女優として主演級であっても、テレビの方では、むしろ、それは、香しくない経歴となるだけで、演技者としては一年生としか見ていない。牛の尻尾となるか、鶏のとさかとなるか、よく考えろ、といったところ、しばらくたって彼女から連絡が来て、色々考えたが、やっぱり結婚することにした、というのであった。結婚という最後の切札があるだけに、何だかんだいっても、女性は何だかと思う。

私は、バスに心地よく揺られながら、その時の女優のことや足を洗った何人かの女優のことを思い出している。横縞のセータにジーパンをはいた、劇団赤と黒の女優達は、バナナやリングを噛り、まるで女学校の修学旅行のように狭いバスの中で派手に騒いでいた。

そんな中で、窓にさす初夏の日ざしを全身に浴び、気持良さそうに、こっくりこっくり居眠りしているのは、髪にかなり白いものが混った初老のカメラマン・N氏である。五社の一つにいた頃、仕事のことで監督とよく喧嘩し、途中で仕事をおっぴり出し、現場から引揚げたこともある気の強いベテランのカメラマンだったが、今は、好々爺という感じが

びったりで、若い女優達にこよりで鼻をくすぐられ、しきりにくしゃみをして、皆んなを笑わせている。二年ばかり前、一人娘が名もないアテレコ役者と墮落し、未だに行方が知れないというが、それから、彼に、急に老いの翳^{かげ}がさし始めたようである。そのうしろに坐って、若い助監と今日の仕事を打合わせているのは、ライトマンのO氏、やはり、五社の一つをくずれて来た人で、その原因は、撮影所長の女に手を出したからだともいわれている。もう五十に近いと思うが、目下、独者で、昔は随分女を泣かせて来た彼も、胡麻塩の頭、額には幾条かの皺が深く刻まれて、今の風貌からは、女たらしという印象は全く感じられない。

バスは、こうした浮草物語にも似た老若男女を満載して、熱海の海を眼下に走りつづける。初夏の柔かい日ざしを頬に心地よく受けた私は、いい気分になって唄い出した。

「旅の燕、淋しかないか、俺も淋しいサーカス暮し——」

私の奇妙な声に合わせて、N氏もO氏も、そして、若い女優達も唄い出した。

へとんぼ返りで、今年も暮れて、知らぬ他国の夢を見た

× × ×

伊豆山に近いAホテルにバスは予定の時間通り到着。私は、あてがわれた部屋に入り、女中さんに早速布団を敷いてもらった。予定通り一寝入りしようと思ったのだが、女中さんは、洋服を小脇にかかえ、パジャマ姿のままホテルへ上りこんで来た私を見て、余程びっくりしたらしい。「どこか気分が悪いのですか」と、心配げな顔をするのであった。

敷いてもらった布団へもぐりこんだ途端、助監督のT君がやって来て「早速ですが、先生。シーン三十一、旅館での鞭打ちが一番手です」という。ああ、そうかね、と布団の中から私がいうと「監督さんが呼んでますから、すぐ来て下さい」とT君は私を引張り出しに來たわけだ。そういうシーンだけは、私が監修するということになっていたので、私は、深い睡りに吸いこまれそうになっていた頭を振りながら、止むを得ず立上り、ホテルの丹前を着て、T君のあとにつづいて廊下に出る。

撮影は二階の一室で行われていた。照明の位置も決まり、スタッフがぎっしり取組んだ形の明るい室内で、津村に扮する山本昌平と桂子に扮する林美樹が向かい合っていた。

「お願いしまーす」林美樹が、私の顔を見て口元に微笑を浮かべ、スリップの紐を肩から外し始めた。岸監督が丹前の紐をつなぎ合わせたのを持って来て「これでいいかな」と私に渡す。私は啞え煙草で、美樹のうしろへ廻り「手をうしろへ廻して」と、彼女のライトにまぶしく光る白い背を突いた。乳房を両手で抱き、布団の上へ立膝して坐っていた美樹は、さっと黒髪をはねあげるよう首を振り、両手を背へ廻す。後手に縛られた桂子を津村が鞭打するシーンの段どりを、こうして私がつけさせられているのだが、正直のところ、私は恐ろしく不器用で、こういえば、花と蛇の読者は不思議に思われるかも知れないが、女体の縛り方も、乳房の上下に縄をかけるというオーソドックスなものしか知らず、それも、あまり、うまい方ではないのである。背後で彼女の両手を縛り上げ、あまった紐を前へ廻して、ピンク映画専用の乳首の上に紐をかけるというやつをやったわけだが、「それじゃ、先生、ゆるすぎるわ、もっと、きつく縛ってよ」と美樹に叱られた。津村にこれから、ムチ打たれて、布団の上でのうち廻るという大芝居に入るのだから、途中で紐が解けたりゆるんで乳首が大きく露出すると、N

Gになってしまおうというわけである。私は、力一杯紐を引きしぼり、彼女の弾力のある乳房が歪む位にまでしてしまっただが、彼女は痛いとも痒いともいわない。自作の脚本による緊縛映画撮影の時には、よく私も立合い、まるで役得のように、色々な女優を縛って来たが、痛いからもう少しゆるめて、と女優に苦情を出されたことは一度もなく、もっときつく縛れ、と叱られてばかりいる。この種の女優は、大体、肉体が頑強に出来ているので、ちよつとやそつとのことでは音をあげず、というより、じれったく感じ出すようだ。

準備を終えて、岸監督と交代、津村のムチ打シーンの撮影となったわけだが、少し変化を持たせる意味で、津村が途中で桂子を海老縛りにするというものをつけ加えてみた。ところが津村役の山本昌平は、私に輪をかけた位に、これまた不器用な男で、桂子の足をうしろへ折り曲げて縛るといふのがもたついて、何度もNGを出すのである。彼が彼女を海老縛りにするところをカメラは克明に写すわけだが、ご覧になった方はおわかりと思うが、彼は随分とこの場面に手間どっている。こうした映画のロケなどに立合った場合、私は気に入った女優に頼んで、コレクション



用の写真を撮らせてもらうことにしているのだ、大抵は友人である婦人雑誌のカメラマンK君と同行するのだが、今回は彼に連絡する暇もなく、アタフタと飛び出して来たので、内心はあきらめていたのだが、美津子役の十七才の少女、美川恵子とホテルの酒場で話し合っているうち、どうしても、彼女のフोट

が欲しくなってきた。

プレイということなら話は別だが、写真をとるということになると私はおじけづいてしまうのである。というのは、私は、恐ろしいぐらいに機械類に弱く、カメラにしても、絞りとピントとかいうことが一向にピンとこない。随分とこれまで、気に入った女性を口説き、緊縛フोटを撮ったけれど、それはすべて、友人のK君に撮らせたものばかりで、私は、モデルのポーズには注文をつけるけれど、あとはポカンと口をあけ、K君の仕事をみているだけであった。

以前一度、渋谷の酒場へ熱心に通い、そのナンバーワンであったし子を口説き落とし、彼女の写真を撮るようになったが、この時は、女がいいだけに何かK君に撮らせるのが癪になり、あとでうらやましがらせてやろうと遂に私にとっては贅沢すぎるカメラを買って、代々木のホテルで彼女と会ったことがある。想像していた通り、彼女はすばらしい肉体の持主で、床の間の柱に、私好みの立縛りにしたところ、その鞆皮なめしのように艶々光る肌の色白さや、上下にかけた縄をはじき返さんばかりの豊かな乳房、ほんのりと翳かげをつくり柔らかに盛り上った曲線の流れなど、その一



一つが私好みなもので、有頂天になってシャッターをきり、帯を買ってやるとか、ハンドバッグを買ってやるとか、うまいことをい続けて、ようやく彼女を開股縛りにし、その身も世もあらぬ羞恥のポーズをカメラに収めることに成功した。当然、助平心が首をもたげて来てそれだけは要求しない約束になっていたが、「どうかね」とお伺いを立ててみる。今日は嫌だけど、この次は約束する、という彼女の言葉を聞いて、とにかく満足して縄を解き、約束の品物を買ってやって、早速このネガの焼ツケを、K君に依頼した。L子

のすばらしい肉体に驚き、この撮影を自分に依頼しなかった私をさぞ恨むであろうとほくほくした気分です。二、三日たって彼の所へ行く時、「君、あら、あかんわ」と彼は私の顔を気の毒そうに見ているのである。「何にもうつとらん。フィルムはまっくろけや」という。「まっくろけ？」私はその場に尻もちをつきたいような気分になった。彼女のアップも二、三枚は撮ったが——などと、まっくろけ、といわれたショックにそんな阿呆なことを考えたりしたが、シャッターが開いてなかったのだらう、ということである。

それ以来私は、かかる大事な撮影を自分の手で行うということはない。その後仕事に忙がしくなり、しばらくL子の所へ行かなかったが、彼女は、何かの事情で、突然、関西へ逐電してしまったと、その酒場のマダムに知らされた。あとで色々聞いてみると、彼女はかなり性悪な女であつたらしいが、そんな女に、金品を渡したことは腹は立た

なかったけれど、カメラのシャッターを間違えた自分には、つくづく腹が立った。男と女の関係というものは、不可思議なもので、行きずりの一夜、共に枕をかわして、お互の身の上についてはろくに知らずに、そのまま別れて二度と逢えない場合もあれば、随分と長い交際で、お互に気心も知り合った仲なのに肉体の関係は生じなかったという場合もある。伊勢物語のように、別れた人を思い懐しむという年ではないが、見せつけられたままお預けを喰わされ、結果、背負投げまで喰わされてしまったL子の肉体を口惜しく思い起す時、せめて、あの時、写真だけでもとっておけたならば、と浅ましくも、カーと頭に血がのぼってくることもある。

そういう苦い経験から、一種のヌード撮影恐怖症に陥ってしまったわけだが、時折、ピンク女優を口説いて、この種の写真をこっそり、K君と共に撮っている私を、自分で撮るならとにかく、他人の手で撮らすと、モデルが怒りはせぬか、と心配する友人がいる。しかし、私は、K君のことをモデルに一流のカメラマンだと吹聴しているし、彼もまた、プロだけあって、仕事ぶりが実にうまく、彼女達に嫌悪感を絶対に抱かせない。それに彼の

風貌がどこか奈良の大仏に似て温和であり、モデルに対する時は、透き通るように丁寧な優しい言葉を使う。彼女達は、すっかり安心してしまふのである。K君は、しまいには、モデルを縛るのさえ、自分で手をつけるようになり、私はKK誌に出ている「カメラハント」などを持ち出して彼に示し、こんなのをやれと彼に指示し、あとは彼に任せて、離れた所にあぐらを組み、センベイを噛って見ているのだ。おかしなもので、自分が縛ったり、ポーズをつけたりしたもののより、マニヤでないK君がモデルを縛って、ポーズをつけた方がずっと迫力が出ているようで、やっぱり、プロは違うものだと思心させられるものがあったが、撮影の仕事がすんだあと、自分一人だけで荷物をまとめて引揚げてくれれば、もう一つ感心するのだけれど、さすがにそこまでは気がきかず、今から三人で飯を食いに行こうよ。と何となくむつかしい顔している私の肩をたたいたのである――。

さて、ロケ地の熱海において、美川恵子をコレクションに加えようと思立ったもののK君が今回は来合っていない。彼女もようやく、モデルになることを納得したので、私は一層、そわそわし始めた。いずれ日を改め

てというのは、私は嫌いである。苦々しい過去の経験から、日を改めては何か障障が起るような気がし、未来をあまり信用しないようにしている。気分が双方乗った時、こういうものは、パッパッとやっつけるべきである。

スタッフの誰かが持参して来たカメラを借りたものの、何だか、ややこしそうで、使う気になれず、かといって、スタッフの誰かに頼めば、恵子も嫌がるだろうし、うわさも立つだろう。大体、このプロダクションのスタッフ連は、おしゃべりなのが多い。酒の席などで話の種にされては彼女が可哀そうである。そんなことで、如何にすべきか、と考えている私の眼に、背の妙にひよる高い、のっぺりした顔立の若い男がうつった。助監督の助手という形で、今回のロケに参加しているN大学、映画研究部の学生である。毎回、こうした撮影に、大学の映研の連中が、アルバイトで参加し、カチンコをたいたり、スタッフ達の飯の支度や使い走りなどやっている。理屈よりも実際に映画作りの勉強をしたというわけで頼みに来るから仕方なく使っているのだが、本人達は一生懸命やっているつもりでも全く気転のきかぬ連中ばかりで、奴等、仕事の邪魔をしに来ているようなもの

だとスタッフ達は顔をしかめているようだ。その背のひよる高い、どこか益田喜頓に似ているアルバイト助監督は、A君といい、現場で、「僕の考えをいわせて頂きますとですね」と監督に対し口出しばかりするので、「お前、うるさいから出て行け」とスタッフ連につまみ出され、悄然としているのであった。現場で邪魔扱いされているなら、こっちで使ってやろう、と私は、ホテルのロビーで沈んでいるA君に近ずき「君、カメラがいろいろか」と聞くと、絶対に自信がある、という。最初、N大学の写真部に入るつもりだった、という位なので、この、皆に厄介扱いされている気の毒なA君を私のカメラ助手にすることにしたのである。

彼は大いに喜んで、私が美川恵子撮影のため、女中に頼んで用意した二階の離れの一室へ、アイランプを何個か両手に抱えてやって来る。恵子と私との間には、すでに撮影の交渉は成立し、写した写真は絶体他人に見せない、ということをや彼女に対し約束した。勿論A君にも、ここで、こういう写真をとったということは絶対人にはしゃべるな、と念を押す、彼女に対しても、A君は、このプロの正式メンバーではないし、口のかたい男だか

ら、と紹介したのだが、実は、私がA君と逢ったのはその日が初めてなのである。

美川恵子にはその日の映画の出演はなく、退屈していた所であったので、こうした写真をとるのにはもってこいの機会であった。彼女は、映画の仕事に入る時のような冷静な表情になって、部屋の隅へ行き、浴衣を脱ぐ。十七才の少女にしては、少し、艶っぽ過ぎると思われる華やかなレース飾りのついた純白の絹のスリッパを着ていたが、彼女はためらわず、スリッパの紐を肩から滑り落とし、パンティ一枚の姿となって、私に指示された床の間の柱を背にして、乳房を押さえて立つのであった。

A君は、気圧された気分になっているくせに、わざとらしく平静を装って、プカプカ煙草をふかし、「僕はもう百人以上のヌードモデルを撮ってきていますからね。ベッドシーンを見ても、全ストを見ても、一向に感じないんですね。これは、僕の若さから見て、悲しいことだと思いますよ」と、でたらめくさいことをいい、盛んに強がって見せるのであった。

私は、この映画で使うことになっているロープを持って、柱を背にした彼女に近づく。

彼女は、柔順に私の方へ背中を見せ、両手をうしろへ廻して交錯させるのだ。彼女の乳房は、如何にも十七才という年令相当の少女らしい痛々しさと、稚なさを見せている。私の数枚に及ぶコレクションの中にも見当らない若いピチピチした鮎のような感じだ。つい、くせになって、乳首の上を縛ったりし、苦笑して、もう一度、やり直し、やっとふくらみかけたような柔かい盛り上りの上下へキリキリロープを締め上げていく。

「誰か現場の人が入って来ないかしら。心配だわ」柱にゆわえつけられた彼女は、私の手がゴム紐にかかる、ブルっと身震いしていった。

「大丈夫、ここに僕達がいるってこと、誰も知らないよ」私は、それを引き下すと、あつと彼女は小さく口の中で叫んだようである。びったり閉ざしている彼女の可愛い足首から、丁寧に私はそれを外し取った。

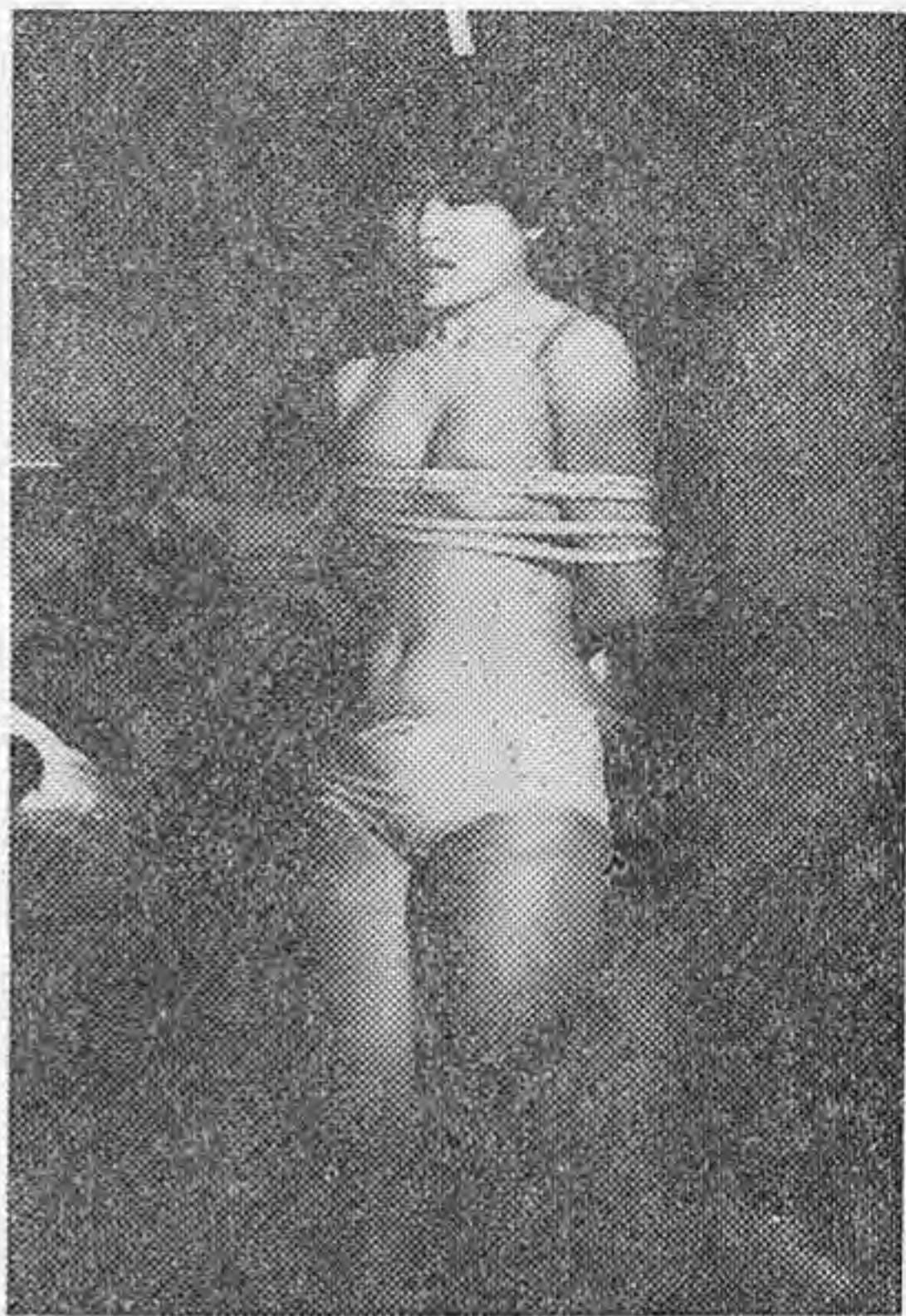
「嫌だわ、羞しいわ」と、彼女はすねるように鼻を鳴らし、紅を散らした顔をねじるようにそむける。

『花と蛇』の中で、よく私が描写する私自身、もっとも気に入った場面が計らずもここに現出したわけだ。ただ『花と蛇』は、私の

空想の産物だが、この談義に書くことは、フィクションではない。何だか、カメラハントめいてしまったが――。ただ、空想の世界では、川田や鬼源になってしまいう私でも、現実では、大分違ってくる。身も世もあらず彼女がモジモジし始めると、こっちは、早く彼女の苦痛をとり除いてやりたいと、そわそわし始めるのである。もっとも、これがプレイということになれば、大分、事情が変ってくるけれど――。

「F子にも、P子にも協力してもらったんだよ。僕は昔から女体の残酷美というやつに取り憑かれちゃってるんでね」と、奇妙な弁明をしたが、彼女にとってこの映画のいわば先輩にあたるF子やP子が、やはり私にこうした写真をとられているということは、少しは彼女を安心させるだろう、と、そこまで、こっちは氣を使って、教えてやる。

ふと、私はA君の方を見て顔をしかめた。アイランプの位置などをとくに決め、何時でも写真がとれる態勢にあると思っていたのに、彼はすぐ私のうしろに腕組みして突っ立ち、口笛を吹くような口つきをして、眼をしょぼつかせながら、彼女の羞しそうな縛られた姿を見ている。



「何しとるんだ君。早く写真をとらないか」と私がむつかしい顔すると、彼は、アイランプを立縛りにされている彼女の周辺に配置し始めたが、口はペラペラよく廻るくせに、彼の動きは実に鈍重で、よくこれで助監督の真似事が出来るものだとは私は呆れてしまう。また、彼は、妙にとりすました顔つきでペラペラしゃべり出すのであった。

「僕はですね。こういったちゃ何ですが、先生がですね、こういう縛られた女の肉体に興味を持たれることに、やっぱり賛成しますよ」と何が何だかわけのわからないことをしゃべ

り出し、私は、段々この学生が不快になって来て、腹の中で何が賛成だ、この馬鹿と舌打ちしたが、彼は、露出計というやつだと思いが、それを彼女の肌に近づけて、何だか口の中でブツブツいいながら調べている。

生まれたままの姿を後手に、柱を背にして緊縛されている彼女は、ますます羞恥さが嵩じたらしい。深く首を落とし、すすり泣いているのか、私は何をいっても返事をしなくなってしまった。仕事のためなら何でも割り切る、と先輩女優を真似たつもりで、自分を試す気にもなり全裸を承認したものの、やはり何といっても、花恥じらうという十七才の乙女である。長時間、こうして、中年男と若い学生の眼にあますところなく肉体をさらしている内、切なく悲しく、後悔めいた気分になって来たのかも知れない。これまで、写真家のB君と一緒に、カメラハントしたピンク女優や酒場のホステス達は、こうした場合はすっかり胆をすえたよ

う、こっちがたじろぐ位、大胆になり、こっちも負けじと開股縛りにしてしまつて、ふと、からかってみたりしても、エッチ、エッチと鼻を鳴らしながら、何かいい返したりする程の余裕を示したが、彼女の場合は、勿論、素人ということもあって勝手が違ふのである。こうした花恥じらう乙女の羞恥に身を揉む肢態を最も好み、それをテーマにしたような珍小説を書く作者が、実際にその夢にまで見た情景を目撃し、たまたま官能のうずきを覚えると同時に、早く、彼女を羞恥の苦痛から解放させてやらねば、とそわそわしつつ露出がどうか、光線の具合がどうか、カメラをかかえて、モタモタしているアルバイト学生に「早くせんかつ阿呆!」と、遂にどなってしまふなど、考えれば、おかしい話である。私の知っているある剣豪作家は、チャンバラの話ばかり書いていたのに、ある夜、飲んでいた酒場の中で、やくざがナイフを抜き合つてチャンバラを始めたのを見、顔面真青になって、腰を抜かしてしまつたが、私も、昔、酔っぱらつて、知っているチンピラやくざの家に一泊した時、その夜、彼等の仲間がダンスホールで拾った若い女を引き込んで、けしからん振舞を始めたのを見、胆を

潰したことがある。空想では、また、小説の上では、色々調子よく書けるものだが、実際そうした場面に出くわすと、うろたえてしまふものなのだ。

もし、この時、美川恵子が、泣きわめき、「お願い、写真をとるのは、勘忍して！」と叫ぼうものなら、私は、ただちに、彼女の緊縛を解き、長時間さらし者にしたこと許しを乞うたかも知れないが、彼女は「どうかしたの？」と私がとぼけた質問を發して、肩に手をかけると、深く首を垂れながらも、気にしないで、という風に首を振るのだった。

このアルバイト学生も、全くとぼけた無神経な男で、私が、早くとれ！とどなったのにそうあわてもせず、ようやくカメラを彼女に向けて構えたのはよかったが、すぐに小首をかしげて、彼女に近づき、君、もう少し、顎をひけよ、と、せっかく私が彼女につけたポーズをひっくり返し、「僕に任せておいて下さい。ヌード撮影には馴れているんです」と私の顔を見て吐かすのであった。そして、厚顔しくも、彼女の首や肩に手をかけて「違うよ、僕のいつてるのは、こうだよ」と彼女の全身を右に左に動かせる。一片の布も身にまとい、とわぬ緊縛された乙女は、羞しさに顔も頸も

赤らめて、モジモジしながら、薄汚ないジャンパーを着たアルバイト学生にあれこれポーズをつけられているのだ。嫌とか、そんなに触らないで、とか、何か彼女は彼に対し、小さくいったようだが、すると、A君は少し怒ったような口調で「何いってるんだ君。スチールをとる位が羞しいなら、最初から、こんな社会に足を踏み入れなきゃいいんだ。え、そうだろう、君」と、くそ生意気なことをい出した。私は卓の上に坐って、煙草をくゆらしつつ、A君のすることを黙って見ていたが、いよいよこの青年の横柄ぶりが鼻につき出す。しかし、彼女は、柔順に、彼につけられたポーズをとり、彼も、ウムとえらそうにうなずいて、ようやくパチリと一枚をとった。私は、勝手にやれ、といった気分、A君に任せていたが、彼は、ふと、私の方を向いて、彼女の前で、指をくるくる動かせ「次は、ここも、入れておきましょうか」というのである。すると、今のパチリには、そこはカットされていたわけだ。私は、阿呆か、お前は、といった顔つきで彼を睨み、「そのために、全裸にしたんじゃないか」と、チラチラ恵子の表情をうかがうようにしている。すると、A君は、また屁理屈をこね出すのであ

った。「しかしですね、かえって、写さない方が空想をかりたてて、僕はむしろ面白いと思うんですよ」悪いことはいわないから僕という通りしなさい、といった調子である。私は、つくづく情なくなり、これからは、死物狂いでカメラ技術をマスターしようと、かたく心に誓ったのである。

「一々理屈をこねず、俺にいわれた通りすりゃいいよ」「はあ？」「全部を写しなさい。全部を！」私はいらいらして彼にどなった。彼は止むを得んといった顔つきで、カメラを持直したが、その二枚目をとるまでに、また随分と時間をかけるのである。モデルの右へ体をずらしたり、左へ傾いて、カメラをかまえて見たり、そうかと思うと、かなり距離をおいた所に片足を立てて跪まずき、まるで手長猿が獲物を狙っているような珍妙な恰好をして、喰いつくような眼つきでモデルを見上げたり――。「何をしとるんだ、君は」と、ブツブツ私にいわれながら、ようやく彼は、パチリとシャッターを切ったが、その時、階下の方で、スタッフの誰かが私の名を呼んでいた。東京から電話が来たらしい。「ご苦労さん、もういいよ」と、私は、A君の手からひたたくるようにして、カメラを取上げた。

これだけ時間をかけ、生まれて初めて、一系まとぬ姿を男の前にさらした彼女を必要以上に羞しい思いをさせ、写した写真がたったの二枚。

「すまなかったね、恵子。あとでおすしでもご馳走しようか」などといって、彼女の頭を手をやり、彼女が衣類を身につけ出したのを振返りつつ私は階下へ降りて行った。

それから、二日間、私は、そのホテルにスタッフ達と泊りこみ、土蔵内における美津子受難の場面を監修したわけだが、これらのアルバイト学生達は、私が、まだ仕事を残しているスタッフ達と別れ、一足先に家へ帰ろうとした日の夜、監督の部屋へ呼ばれてベテランのスタッフ連より大目玉を喰っていた。現場におけるチャランポランもさることながら毎夜の如く、女優の部屋へ押しかけ、彼女達を連れ、会社の車を無断で動かして熱海の街へ遊びに出て明け方近くまで騒いで、午前九時開始の一番手の仕事に顔を出さなかったという。それでも、貴様ら、将来監督になる気でいるのかというわけである。お前達、女と遊びたいのが目的で、ここへアルバイトに来たのか、とスタッフの一人がいうと、「このままじゃ、彼女達も可哀そうです。演技的に

も、人間的にも進歩がないと思うんです」と彼等は、熱海の街でドンチャカ騒ぎをやって来たことの理由にそんなことをいい出すのであった。一同、呆っ氣にとられて、二の句がつげられなかったが、あとで彼女達に聞いてみると、君達、こんなことをしては駄目だ。早く、この社会より抜け出て、我々と共に、陽の当る所でがんばろう、と、調子のいいことをいい、いくらホテルへ戻る時間を、彼女達が気にし出しても、彼等は帰してくれなかったというのであった。――

『鞭と肌』の映画も、封切がきまり、私の脚本で、また現在、二つのピンク映画の撮影が熱海と下田で行われている。この二本の内どちらかに、私のコレクションに協力してもらった美川恵子を指名しようとして、克蘭ク・イン前、Yプロに電話した所、岸監督が笑いながら、「あの娘、映画はもうやめる、といい出したよ」「どうして?」「あのアルバイト学生に色々たきつけられたらしいね。処女もあいつに頂かれたってうわさだぜ」「へへえー成程」

私は納得した思いで電話を切った。
A君に緊縛写真をとられたことが、きつかけとなって、彼女は彼と交際することになっ

たと思われる。他人のいうことはみんな駄目で、俺の意見が一番正しい、という意気込みのあったA君に、純情型の彼女は次第に魅せられていったのかも知れない。うら若い乙女の純粋な美しさを最も素直に感じとるのは、やはり、A君のような若い学生であると私は、何となく腹が立つが、そう思う。ピンク映画の垢にまさに染まっていこうとする純情な乙女を、ピンク映画にアルバイトに入った学生が救出したという風に考えれば、何か小説的で楽しい気分になって来る。仲良くやっていけばいいが、と二人の倅せを祈りたい気持と同時に、何か、食べようとした甘い果実をさつと横から持って行かれたような、口惜しい気持も正直起って、抽出ひきだしを開け、A君のとってくれたたった二枚の彼女の緊縛写真を机の上に並べて見た。たまらない羞恥を痛々しいばかりにキリキリ噛みしめ、稚げな澄んだ瞳をA君の方へ向けて、シャッターを切らせた、あの日の彼女の姿が、私の脳裡に浮かんでくる。そこで、私は、また、「畜生」と舌打ちをする。

二人の間柄をねたんだのではない。机上に置かれた二枚の写真は、完全にピンボケであったからだ。



懸賞入選作品

SFストーリー

地底の国

(前篇)

山 口 広

一、プロローグ

例年のことであるが、梅雨があけると同時に、かつと地を灼く太陽の季節に入った。都会では、むし暑さだけしか感じさせない太陽も、ここ外房総では、さわやかなすがすがしささえ感じさせる七月始めの朝であった。港のはずれのヨットハーバーの浮棧橋の先端に停泊中の大型ヨットの甲板の上で、申し合わせたように濃いサングラスをかけた三人の女

性が色とりどりの水着とガウン姿で、コーラスのように呼び声をあげた。

「カーズーコー、はーやーくーう」

呼び声の向けられている岩壁の上を、大きなバッグをぶら下げて、若さのあふれた姿態をおどらせて駆けてくる派手なワンピースの小柄な若い女性が居た。

太い真紅の縦線を舷側に描いたクルーザーといつてよいほどのこの大型ヨットは、専ら強力な補助エンジンに頼って、帆走は殆んど

しないで航海する。数日の航海も可能なヨット、夕風号の持主は啓子の父、山越大二郎である。啓子はこの春K大の英文科に入った。夏休に入ると同時に、高校卒業後にも、益々親密さを増したグループを誘って、父のヨットで伊豆大島から遠く八丈島まで一週間もかけて遊びまわろうというのである。もちろんヨットの操縦は兄の一郎まかせである。一郎は我がままな啓子をもてあましているが、妹のグループで最も好意を抱いている和子と過

せるのが楽しみで、つきあいをする事になった。啓子のグループのうちで、典子だけが商事会社に勤めるOLで、和子と洋子はM女子大の学生であった。

最後の和子が乗船するのを待ち切れないように、啓子はハッチの中に向って叫んだ。

「お兄さん、和子さんが来たわよ。エンジンかけて」

もやい綱を解いて棧橋に足をふんばる夕風号の管理人、漁師の好造の方をふり向きもせず啓子はすき透るような声をはり上げた。

「出帆!!」

大きく肩で息をつきながら和子は好造に手を振った。そしてきりっと引締った顔で舵輪を握る一郎をまぶしようにふり返った。

出港して三時間、昼食前であった。

「島よ。島だよ。啓子さん、大島かしら」

ビキニ型の水着ではしゃぎまわっていた典子が大声をあげた。

「こんな所に島なんかないわよ。鯨でも見たんじゃないの」

ハッチから顔を出した啓子が驚いた。二軒ばかり前方に黒々とした岩肌を見せて、小島がぼつかりと波間に姿を現わしている。何度この航路を往復している一郎も海図を手に

不審のまなざしをなげた。双眼鏡の視野一杯に拡がったその島は奇妙にも、草も木も全くはえていない気がなかった。黒い岩だけのその島は、何か自然のものでないようであった。岩肌は磨かれたように滑らかであり、形も整っている。百米ばかりに近づいた夕風号は島をぐるっと一廻りした。

「無人島だよ」

「きれいな岩だね」

啓子たちは代る代る双眼鏡をのぞいた。直径は百米ばかりか、小さな丸い島の南側に二米ばかりの深そうな洞穴がぼつかりとあいている奇妙な島だった。典子はカメラをかまえて何度もシャッターを押した。

「探検してみない。きっと無人島よ」

啓子は上陸を相談した。ヨット旅行の第一日目に、こんな冒険が始まるとは思っても居なかっただけに、啓子の心は浮き立った。

「そうよ。ここでキャンプしてもいいわね」

典子も啓子につられた。だが和子は何か気がすまなかった。洋子も同じ思いで先に口をきった。

「でも私、こわいみたいだわ」

「何いってんの。行きたくなきゃ洋子さんだけ残っていいわよ。舟の見張りをするのよ」

和子も残りたかった。だが一郎も上陸するというので却って舟に残されなくなかった。

波は穏やかであった。目指す洞穴の直ぐ前に恰好の舟着き場さえあった。一郎はヨットを巧みに操り、岩肌すれすれに横づけした。もやい綱を持ってヨットの見張をする洋子を残して、四人はサンダルをつっかけて急な斜面を上っていった。

「お兄さん、この岩はとてもきれいだわね。磨いたみたいだわ」

「海底火山で出来たのかも知れないぞ」

「大発見だわね」

一郎は真先になって洞穴に入った。ライトの輪が、洞穴の天井や壁に反射してぼんやりと明るくなる。五十米も進んだであろうか、洞穴はまだ続いている。

——キャーッ——

かすかに洞穴の外からかん高い洋子の叫びがひびいた。

「何だ。帰って見よう」

一郎の声に、四人はぺたぺたとサンダルを鳴らして入口に走った。

「アッ。これは」

「マァーッ、こわい」

洞穴の入口は、透明なプラスチックで密閉

されてしまっているではないか。一郎が体当りをして、微動もしない。

「ミ、ミ、水、水が」

和子は恐怖におののいて一郎にしがみついた。プラスチックに遮ぎられた洞穴の外に、海水が泡だちながら、ぐーっとせり上ってくる。目の前を夕風号がぐるぐるとまわりながら純白の船体を傾けて通り過ぎる。目の高さを越した海面を見て、典子が悲鳴と共に気を失った。残った三人も、間もなくおそった甘酸っぱい匂いに包まれて、折り重って昏倒した。

三日後に、漂流する夕風号が三陸沖で漁船に発見された。五人の男女の衣服も、これから撮ろうとする昼食も全くそのままに、突然ふいに神かくしにでもあったような感じを受けた。空海を動員した大規模な捜索にも拘わらず、五人の行方は全くわからなかった。

一、スプレークロス

和子はふーと、意識をとり戻した。ぼんやりと目を開いたが、あの洞穴で外の海面がせり上り、視界が全く黒くなってしまったことしか記憶はなかった。目の前には、あくまで

も澄み切ったきれいな青空が涯しく続いている。小さな輝く太陽の眩しさに顔をそむけようとして、気づいた。

——アッ——

顔も動かず、声も出ない。口が動かないのだ。体も動かせない。呼吸をする度に、丁度びったりとした、きついタイツを身につけたように胸がしめつけられる。体は弾力のある平らな板にびったりと張りつけられている。非常に強靱な布で全身が覆われている。指一本までが別々に包まれている。ただ目と鼻と耳だけが、暖い外気に触れている。顔を上げること、左右に振ることさえ全くできない。まるで強いゴムか、ビニールのような感触の布で覆われているのに、よほど通気性がよいのか、体は全く汗ばんでこない。

和子には、どのようにして自分がこの平板に拘束されているのか想像もつかなかった。眼球の動く範囲には真青な空が拡がり、眼球の痛むぎりぎりの線に、一面の芝生と点在する樹があった。足を伸して直立の姿勢で仰向けに横たわったまま、不安におののきながら身をもだえた。しかし指一本をまげることさえできなかった。

「リルルラルリル……」

まるで玉をころがすようなきれいな音が近づいた。和子は斜上方に瞳を向けて、驚きの声をあげた。——アッ——もちろん声にはならない。何処から現れたのか、二人の若い美女が和子を見下して立っている。すきとおるようなきれいな肌の上に、ブラジャーと、パレー用とは思えない短いスカート以外は身につけていない。ファッションモデルを思わせる伸々とした、均勢のとれた体と、整った顔立ちは無表情で、何か冷たい陰を感じさせる。

「リルルラルリル……」

和子には秋の虫の音とは思えない美しい声で互いに話しあっている。その様子では、紫色の服の女性の方が、うす緑の服をまとった方よりもえらそうに見える。緑の方が手にさげた大きなバッグを開いて、中からコードのついていないイヤホンを摘み出した。和子はその女が近づくと、今迄に嗅いだこともないよい匂いをかいだ。イヤホンを耳に挿込まれたとたんに、

「リルルラルレ……おやりよ、リーナ」

「はい先生」

まるでソプラノ歌手のようにきれいな声が耳に拡がる。極めて巧妙に作られた翻訳器で

ある。リーナと呼ばれた女がバッグからぴかぴか輝く銀色の棒をとり出した。先の丸いその棒で和子の額から眉の間を通り、つんと立った鼻の上を軽くなで、顎の下までおろした。すーっとうす紙をはがすように頭と顔を押えていた拘束が消えてしまった。口も自由に動くようになった。

——ここはどこ？ 一郎さんは？——

叫んだとき、いきなり耳がガンと鳴るような感じがした。

「ギャウグー、ゴウグギーグー」

まるでさかりのついた猫のうなり声のような不快な音が耳にひびき、目を見はった。

やっと気がついた。耳に挿し込まれた翻訳器を通ずると、あの「りるるれりる」というこの女たちの声がきれいに言葉となって、和子の声は不快な雑音になってしまうのだ。

「ほほほほ。自分の声に驚いてるわよ」

「そうですわ。少しは自分たちの声が不快なことを教えた方が面白いですわ。良い実験材料になりますから」

「さあリーナ。早く研究室に運びましょう。でも、途中でギャーギャーわめかれるとうるさいから、スプレークロスで固定してしまつてよ」

「はい先生」

和子はまたあの重苦しい、えたいの知れない拘束が加えられるのかと不安がつり、大声で叫んだ。

「ギャウウギウガウ……」

リーメはそれに構わずバッグから小さなスプレーを取り出し、和子の顔の前でシューと栓を押した。大声で叫んでいる和子の口は少しゆがんだまま動きをとめた。呼吸がせかれて顔が真赤に充血してくる。うすい透明な膜が開いた口をそのままの形で、舌までも覆って固まってしまった。

リーナは銀色の棒——オロスカタ——で和子の鼻のまわりをくるりとなでながら話しかけた。和子はやっと呼吸をとり戻した。「これだから畜生は困りますわ。一寸優しくしてやるとすぐギャーギャーわめきますから」

「でもリーナ。これだけ沢山つかまえたからきつといい生産ができるよ。第一研究室のジーンに負けない仕事ができるよ」

「そうです、先生。海中島を完成された甲斐があったというものですわ」

「そうね。リーナ、あなたもよく働いてくれたからこの牝はあげてもいいわ。試験はあと

の四匹で充分だから」

「先生、有難うございます。それじゃこの牝は大事にして、長い間飼っておきます」

和子は先生とリーナの会話を、せかれていた呼吸をとり戻して、大きく肩で息をつきながら聞かされた。

芝生を音もなく滑ってきたスポーツカーのような乗物に、固定された板のまま和子の体が乗せられた。不安と恐怖に和子の見開いたままの眼から涙がつーとこぼれた。全く人間と同じ形をしていながら、この二人は和子を「畜生」といい「牝」と呼びつけにする。和子にも、うすうすこの二人が人間ではないような感じがわかって来た。

「アピの性質や能力をしらべてあれば一挙に捕えても、ワスピアンの大量生産が可能になるわ。そうになったら私だって生産研究所の所長になれるわね」

「もう少しですわ、先生。私たちの生産促進ホルモンの研究さえうまく行けば、全地球の征服もたやすいことですわ」

「そうよ、リーナ。そうしたら私は女王になれるわ。そうなればあなたを大臣にするわ」
二人の会話は、大きな建物に着くまでとめどなく続いた。

和子は理解できないところもあったが、大よその想像がついた。つまりこの二人は人間ではない。しかし人間と同じ形であり、人間をアピと呼んで、何か彼等の役に立てているワスピアンという生物であるらしく、どうやら彼等ワスピアンは人間をアピという家畜同然に考えているらしいことであった。

拘束されているスプレーから放射されたスプレークロス、耳に挿入されている超小型の翻訳器、何一つとして騒音を出さず、それ自体に意志でもあるように地物を避けるこの車といい、ワスピアの文明は人間社会よりも遙かに進歩している。最も驚ろかされたのは、他の四人も、もうこの二人の手で捕えられているらしいことであった。

一郎は別として、啓子たち四人のグループの中では、啓子が最も大柄で派手な顔立ちであり、和子は全く正反対に小柄で整ってはいないが地味な性格をそのまま表わしている顔立ちである。人によっては古来のままの大和撫子を見るようだと言われるのであるが、ワスピアンにとってはそれほど魅力があるのではないらしく、先生と呼ばれるメリーがリーナに和子を与えたのも、最も貧弱な体が気に入らなかつたのかも知れない。

「リーナ、あのスプレークロスは急いでアピを捉えるにはいいけど、全然体が動かせなくなるから物足りないわね。もっと有効な拘束具を作らなきゃ、大量に捉えたときには不便だわね」

「そうですわ。アピったら生意気にも私たちと同じ形をしますから、手と足だけを押えればいいんでしょうね。……」

和子は身悶えも、呻きを上げることさえできないで運ばれていった。

車は小さな振動もなく、樹々を巧みに避けて、平らなコンクリートの上で停止した。和子はすーと体が沈むのを感じたが呻きも挙がらなかつた。エレベーターのようにコンクリートの床が音もなく地中に沈むのだ。

これが地下かと思われるほど広い道路を車は滑っていく。二番目の十字路を左折して正面の広いドアに車は真直ぐに突き当たりそうになった。だがドアは車の前後をすれすれにまばたきする速さで開閉して車を吸込んだ。

この部屋には和子が今までに見たこともない器具が整然と並べられていた。

「リーナ、この牝はどうするつもり。自然のままに飼うつもり？ それとも」

「先生、もちろん不死処置はしますわ。私にとってのはたった一匹のペットですもの」

ソファに掛けたメリーに対するリーナの返事は丁重だった。リーナは忙がしく働いた。

和子は体を固定した板のまま大きな台の上に仰向けに置かれた。リーナは銀色に輝くクロスカーターを取上げて、和子のかすかに上下する大きな乳房のまわりを丸くなぞった。ぶくりぶくりとその分だけが拘束を解れて、まだ誰にも見せたことすらないピンクの乳首がつっ立っている。リーナがゴムのようなお椀を、剥き出されたその双丘にかぶせた。ぴつたりと吸いつくようにカップは密着する。和子の全身が硬直した。リーナは黒いカップの上に、まるでリンゲル注射のアンブルのように大きなガラス器を取付けた。するとカップはまるで生物のようにゆるやかに収縮と膨脹を繰返し、その動きは次第に激しくなっていた。和子は体の芯をゆすぶられるような感じに僅かに許された鼻からの息で呻きをもらした。翻訳器を通して「ギギググ……」という騒音しか耳に入らなかつた。その不快な騒音に拘わらず呻きは止まらなかつた。激しく生あるもののようなカップに、揉み上げられるうちにアンブルの中の液は次第に減りはじ

めた。この得体の知れないカップの攻撃は息苦しく思われ、更に痛みを伴いはじめた。

「ギギ……」呻きは続いた。アンブルの中の緑色の液が全くなくなると、カップはピタリと動きを止めた。しかし痛みは激しくなっていた。リーナがカップを取除いた。仰向けに固定され、頭を動かせない和子の目にもぶつくりと膨満した乳房の上半が入った。もぎ取ってしまいたいようなはげしい痛さに、和子是不快な音に変わるとわかりながらも呻きを上げ、全身に脂をにじませた。しゃべりながら奥の部屋に消える二人のワスピアの冷い顔も目に入らず、激しい痛みには呻き続けた。

何時間も続いたのか、ほんの一瞬であったのか、和子が正気づいた時には、あの干切れるような痛みは嘘のように消え去って、視界の下の方につき立って見えていた膨満した乳房は、もとの大きさになって見えなくなっていた。

和子の呻きが止るのを待っていたようにリーナが一人で現われた。

リーナは和子の不安と恐怖におののくまなさしを無視して、スプレークロスと、クロスカッターを両手に持った。右手のカッターが顔をなで、唇にそっと動く。長い間顎を制し

ていたスプレークロスが、すーっと顔からはがれた。カッターは和子の体と板の間をすべった。しかし和子が自由をとり戻す前に、リーナの左手のスプレーが背中にかけられ、拘束はそのままに板からはがれてしまった。

硬直したままの和子の体は台を傾けられて滑り落ちて、下に置かれたパイプ椅子のような飼育器に斜にかかった。リーナはカッターとスプレーを巧みに使いわけて、和子の体を椅子に固定した。車のついた椅子——飼育器——は、その脚に両足を、肘掛に両手を、もたれにウエストを固定された和子に乗せて自動的に進んだ。腰掛の中央は大きく穴があけられている。椅子が小さな部屋に入った。

「さあ、ここがお前の檻だよ」

リーナの美しい声がひびいた。

「お前のしたいことをいえば何でもちゃんとできるようにしておいたから、ま、うんと喰べて肥るんだね」

いい残して、きた厚いドアから消えた。

小さい部屋の中央で椅子は止った。ドアでない三面はきらきらと輝いている。天井には、不気味なパイプや器具が、いっぱいいつている。

和子はやっと落着いて、首を曲げてまわり

を見まわした。自分の体を見下して、さっと頬に血が上った。耳が熱くなった。真赤になつていたのであろう。手足の要所々々は透明なスプレークロスで固定されているが、全身は一糸もまといはない。

「ギャギャウ」

耳に叫びがひびく。無駄とはわかりながらもパイプに固定された手足をものがらずに居られなかった。首を振って悶えると、豊かな胸元がたわたと揺れた。

さきほど乳房から吸収させられた緑色の液は、メリーがリーナの協力で作った特殊薬品である。種々の伝染病に対するワクチンであり、それと共に、人間にあくまでも生き続けたいとの願望を強くさせる、いわば自殺防止薬であった。これはメリーの今迄の経験が作らせたものである。

三、争 い

和子が飼育椅子に固定され、小さな部屋——ワスピアのいう檻——の中でもがいていた頃、啓子と洋子は別の部屋に入れられていた。この部屋は「檻」というのにふさわしい頑丈な鉄格子がはめられている。床は継目なしの冷たいタイルのようなもので作られ、八

畳ほどの部屋の中はまるで山小屋のように、板切れやたきぎにするような細い棒や、太いザイルのようなロープなどが雑然とほうり込まれている。二人とも派手な水着も剥ぎ取られ、恥かしそうに檻の隅に横ずわりになっただけで、ぼそぼそと話していた。

二人は強い麻酔にかけられた間に不処置を施こされてしまっていた。啓子は洋子に洞穴探險のとき、洋子の悲鳴を聞いて戻ろうとしたが、入口が何かで閉じられてしまった事を話した。洋子は、一人でヨットのモヤイ綱を持って待っているうちに、全身を覆う真黒の服を着た人影におそわれたことを話した。

「啓子さん。あの黒い人影は何者だったか、私にはわからないわ」

「洋子さん。お兄さんはどうしたんだろう。」

助けてほしいわ」

と、鉄格子の外側から、ほかほかしたよい匂いがただよってきた。幅の狭いコンベヤベルトが音もなく動いている。大きなパンが現れた。二人はぱっと顔を上げた。不思議な島を探險に出かけたのが昼食前であり、それから何時間も経っている。途端に二人は空腹を感じた。ベルトに乗ったパンはもう檻の真中を過ぎていた。啓子はつと立上り、鉄格子の

傍によって外をうかがった。人の気配は全くない。おそろおそろ啓子はそのパンに手を出した。胃がぐうーと鳴る。二人はこわいものを見るようにおそろおそろ眺めた。遂に空腹に負けた啓子が端を欠いて一口はおぼった。空腹のせいばかりでなく、確かに美味しいパンであった。二人は勢いを得て顔ほどもある大きなパンを二つに割って、思い思いにかじりはじめた。

満腹感を得てややうすれたが、不安は消えなかった。沈黙が続いた。たった今、喰べたばかりなのに今まで以上の空腹感がおそってきた。二人はあのパンの中に強力な消化剤が入れられていたことを知るすべもなかった。膝をかかえて座りこみ、何度も唾をのみ込んだ。二人は鉄格子の外のコンベヤベルトをじっと見つめて待った。パンが運ばれて来た。

二人はがつがつと喰べる。だが空腹は続く。こんなことが何度も繰返された。コーヒーもなく、バターもつけないが、一回毎に味はちがうが、いずれも美味なパンであった。二人は待った。次々と現れていたパンが一刻の間、途切れたのだ。二人の空腹感は激しさを増した。

やっと次のパンが現われた。洋子がさきに

鉄格子に走りよって手にとった。二つに引き裂いて見較べたが、明らかに大小があった。

洋子は小さい方を啓子に差し出して、大きい方にかぶりついた。ぱっと視線が火花を散らした。啓子は洋子の手をぐっと引きつけると、大きい方を狙った。洋子はパンを離して啓子にむしゃぶりついた。背の高さは同じ位であるが文学少女である洋子よりも、テニスの選手をしている啓子の方が体力は勝っている。

やや小さい洋子の乳房を啓子は右手でがっきとつかんだ。

「むむむむ。いー」

急所をつかまれて、思わず洋子のはのけぞった。しかし無意識に延びた手が同じように啓子の胸にのびた。掌からはみ出しそうな大きな啓子の乳房は無残な形にひしゃげて鮮かな爪あとを残した。

「やっ。うーむ」

「う。あっ。いいい」

かけ声と悲鳴が壁にひびいた。忽ち二人の体から汗がにじみはじめた。啓子が洋子の髪をつかんで引倒した。洋子は両膝をついた。啓子は右脚をとばして洋子の腰にかけ、仰向けに押倒し、そのままのしかかった。啓子の右手は髪をつかんだまま洋子の首にかかっ

た。左手で洋子の右手を膝にかけて、完全に逆をとった。

「い、い、痛ッ」

悲鳴をあげた洋子は、自由な左手で啓子の髪を引っばった。だが、逆をとられた右手と、咽喉にまわった啓子の右腕と、胸を圧迫される苦しさに、全く力が入らなかった。充分に痛めつけておいて、啓子はぱっとはね起きた。だが逆をとった右手はしっかりとつかんだまま、起きようとする洋子の背後にまわり、膝を背にあてて押しつぶした。膝をついた洋子の背にまたがって左手を顎の下にかけ、ぐっと洋子の体を起こした。洋子は尻をぺたんと床について足をはね上げた。

もう争いの主導権は啓子がにぎっていた。苦しまぎれに洋子は左手をふんばった啓子の足にまわした。啓子の狙いはそれであった。顎を制していた左手を離すと、洋子の左手首をつかんで背にねじ上げた。

「い、いいい」

洋子は悲鳴だけしかあげられない。啓子は洋子の両手を持ったまま体を後に倒した。両脚を曲げて洋子の肩にかけ、両腕の逆をしめ上げた。背中を支えられ逆を取って締上げられると、洋子はもうどうすることもできな

った。脚をばたつかせる力も次第になくなってきた。

啓子は、全く抵抗力を失った洋子からぱっと飛びのいて、檻の片隅にどぐろをまいているロープに飛びついた。逆をとられて、全くしびれてしまった両腕に力を入れ、のろのろと起き上ろうとする洋子の背に、ロープを手にした啓子がとびついた。四つん這いになっていた洋子はぺしゃんとつぶれた。啓子は洋子の腰の上に馬乗りになり、洋子の右腕から背にねじ上げた。ロープの途中を口にくわえて、背にまとめた両手首にロープの端をまきつけた。縛られる、と感じた洋子は大声をはり上げた。

「け、啓子さん。やめて、お、お願い」

「何いってんの。あんなちっぽけなパンしかくれないで」

平常の二人ならたとえどんなに空腹でも、パンのことで争ったりしなかったろう。これも知らぬ間に施こされた不処置のさせたこととは気がつかなかった。

啓子は後手に縛り上げた洋子を仰向けに返した。全く抵抗力のなくなった洋子の腹に乗ると、荒い息をついている洋子の胸に手を支え、両膝に力をこめて激しくにじり上げた。

足をばたつかせ、身を悶えながら、悲鳴をあげる洋子を、満足そうに見下した。涙を流して哀願する洋子の腹から胸へ、啓子は膝頭をにじり上げた。充分に優越感を味わいながら無抵抗の洋子をいたぶってから、再び啓子は洋子を裏返した。

この二人の争いを、メリーとリーナはマジックミラーの壁の向うでじっと見ていた。リーナが手にした自動記録器は二人の動きをはっきりととらえていた。

「ふふふ。リーナ、あのアピは良いことを教えてくれたわ。アピも私たちと同じように手が背中にあれば何もできないようだね」

「先生、今度は足も縛っていますわ。そうです。あのようアピの手と足を簡単に止める道具を考えてみますわ」

「手と足をね。リーナ、しっかり止めておけば材木みたいなものだわね。ああしておけば、カーに何匹でも積めるわね」

啓子と洋子の争いは、ワスピアンに見られているだけではなかった。飼育器に固定された和子もそれを見せつけられていた。どのような装置なのか、正面の壁の一部が輝きを失い、テレビのブラウン管のように檻の光景が映るのだった。啓子や洋子も捕えられている

らしいことは、ワスピアンとの会話で聞かされていたが、目の前に、友達の二人が争い、啓子が洋子を組み敷いてロープで縛り上げるのを見せつけられ思わず叫んだ。

——啓子さん。やめて。——

「ギャギググガ……」

啓子は、裏返しにした洋子の足を折り曲げてロープをかけると、後手の方へぐいと締め上げた。啓子は何かに憑かれたように逆海老に縛り上げた洋子の胸に丁寧な二重三重にロープをかけ、背でしぼり上げた。白い肌に太いロープがぎりぎり埋れた。余分のあるロープを手にし、洋子の髪をわしづかみにして顔を上げさせると、頬もくびれよとばかりに口に噛ませた。洋子は何本ものロープをくわえて、押し殺された呻きをかすかに断片的にもらすだけで床に転がった。

啓子は洋子の自由を言葉までも奪っておいで、床に転がっていたパンを拾うと、しゃがみこんで汚れもかまわずに、なめるようにして喰べはじめた。それを横目で見ながら、洋子はよだれをロープに伝わせた。

「うっ、ううう」

殺された嗚咽が洩れ、涙が床にこぼれた。

和子の正面の壁のテレビ画面がずっと輝き

を強め、啓子と洋子の姿は銀色の光の中にとけ込んだ。

四、飼育椅子

飼育椅子に固定された和子は今見せつけられた二人の争いが、現実のものであるか。何かの幻想であるのかわからなくなってきた。しかし画面の消える前に見たあの啓子の餓鬼のような姿に、ふと空腹感をおぼえた。

メリーとリーナ、二人のワスピアンに不思議なスプレークロスで約束され、ちぎれるかと思うほどに痛かった不死処置を施された不安と恐怖によって、今迄忘れられていた空腹感がおそってきた。でも何も喰べる物はない。たとえ食物があったとしても、このようにしっかりと拘束された体ではどうにもならない。だがリーナが出ていくとき「うんと喰べて肥るんだよ」と云った言葉が、意味があるようにも思えた。

「あーあ、お腹が空いたわ」

もちろん耳には不快な音となって響いた。こうして口に出すと、もう空腹感は耐えられないほど強くなってきた。

「何か喰べたいわ」

和子の声が終るや否や、天井の器具が動き

だし、長いパイプの腕がすーと降りてきた。ちょうど歯科医の使うモータードリルの腕のようである。腕の先の盆の上にぽかぽかと湯気を立てた深皿が乗っている。よい匂いを立てながら皿は和子の顎の下で止った。

和子は限られた自由ではあったが首を伸ばして、良い匂いの中に顔を入れた。おそろおそろつけた口に匂いから想像されるより、もっと美味なスープが拡がった。やや濃い目に作られたポスタージュと云うか、シチューと云うか、そんなスープであった。食欲は不安にうち克った。美味であり、空腹であるだけに、和子は椅子に固定されたまま夢中ですりこんだ。つんと立った鼻の頭にスープがついたが気にならない。三分の一を残して、和子は今迄にない満腹感をおぼえた。

「もうお腹いっぱい」

和子がつぶやくと、盆のついた腕はスルスルと天井に帰った。

満腹は眠りをさそう。「ガーゴー」と聞こえるあくびをして椅子にもたれたまま、和子の体が舟をこぎはじめた。椅子はまるで生命を持つもののように静かに倒れ、和子が家ですやすや眠るときのように、両足を伸ばさせて仰向けに横たえた。

疲労と満腹で、和子は夢さえ見ずに何時間も熟睡した。

生理の要求が静かに眠る和子を現実に取り戻した。——うーん——「ギーグー」耳にひびく不快な音。体は伸びをうつことも許されない。力を入れてもスプレークロスは少しも弛まない。じわじわと椅子はもとの形に還る。

「ガガギガ」

和子は声を出して尿意に耐えた。しかし意志の力も生理には勝てない。息を吐くだけでも洩らしそうである。ぐるぐると目がまわる。と、さきほどの食事を思い出した。何か云えば機械が助けてくれるであらう。——、お、おトイレ——

だが何の反応もない。人間社会のように漠然と物を云ったのでは通じないのかも知れない。羞恥が顔を真赤にさせる。

半分泣きそうな声も「ギーグー」という不快音である。はつきり口にしたとき、足を固定しているパイプがぐーっと開きはじめた。

同時に天井の別のパイプの腕がガラス器を支えて降りてくる。開かれた椅子の脚部にそのガラス器が挟みこまれる。和子の全身の力を抜いた。強いられた感じだが、生理を封じられるのより、遥かに救われる感があった。ほ

のかに立昇る臭いが羞恥を高める。しかしこうなっても和子はひたすらに生きていたいと願った。器が満ち、軽い虚脱感と爽快さをおぼえたとき、パイプ腕から暖い空気が吹き出した。

今迄はなく、和子は空腹を感じはじめた。

飼育器に固定されたまま、ただ首を動かすだけしか運動しないのに、食べた後から空腹を感じていた。都合のよいことには、命じさえすれば飼育器は自動的に要求をかなえてくれ、厚いテンドーロインステーキのような美味い物までも用意してくれた。

和子がこうして飼育されている間に、有能なリーナを助手にしてメリーの「アピの性質に関する研究は着々と進んでいた。

「リーナ、アピの餌料はタルピにリメタを三割混ぜれば一番排泄物の量が少ないわね」

「そうです。それにトロピを少量入れると、一時間毎にむさぼり喰いますわ」

「一日にどれ位肥るかしら」

「私が先生から頂いたあの小柄なのは、飼育器に固定しておきましたが一日に二百グラムも肥ります。しかし檻に入れている方は百グラムしか肥りません」

「やはり体を動かさないようにした方が良さそうね」

研究室で、データをつき合わせている二人のワスピアン。飼育されている啓子たちは別々にそれぞれの状態を綿密に観察されたいたのである。

空腹を感じる度に餌を求めた和子に、当然の結果がおそった。「うう、うー」又しても和子は束縛された体をよじった。すでに飼育器の性能の一部を知らされていた和子は、何度もためらった後に、小声でつぶやいた。

「ガコ、ガココグー」

天井の腕が再び動きはじめた。椅子の脚がぐーんと開きながら上昇し、腰掛けの中央の穴が広がった。パイプ腕がガラス器を支えて腰掛の下にもぐり込んだ。和子はホッとした。

一方啓子は、逆海老に縛り上げられ、空腹にさいなまされて呻いている洋子に見せつけるように、大きなパンをかかえてしゃがみこんでいた。口に噛まされたロープから洩れる呻きには哀願と憎しみがこもっていた。

啓子はやがて満腹感と疲労からか、はげしい眠気を感じた。横になると同時に瞼が閉じ

られた。洋子は眠ってしまった啓子を見て、きびしいいましめを解こうと、逆海老にしめ上げられた体に力を入れた。だがもがけばもがくほど縄目は締め、太腿や腹から胸にかけての肌を、床にこすりつけるであった。

ギ……。突然頑丈な鉄格子がきしみながら上昇していった。そこに、緑色のブラジャーと短いスカートだけの若い美しい女が立っていた。

「りるりるる……」

玉をころがすような美しい音が耳につき、洋子は一層力を込めて体をくねらした。その美女、リーナは洋子の背をクロスカッターですーと撫でた。パラパラとロープが断ち切れ、全身の拘束がなくなった。折られていた足がばたんと床に落ち、後手がやっと体の両側に落ちた。だが全く四肢に力が入らなかった。開ききった口に噛まれていたロープを吐き出すのを待っていたように、リーナの手から、シュー、とスプレークスが吹きつけられた。たちまち棒のように硬直して固められた洋子の体は、リーナの声で呼び寄せられた車にのせられた。

リーナが車を従えて出ていくと、再び鉄格子が床に降りた。

五、タイトコイル

一郎は典子と一緒に、啓子と洋子が入れられたと同じ檻の中に、入れられていた。この二人も身にまとうものは全くなかった。気がついたとき、互いに相手を正視することはできなかった。だが、何者かに捕えられたという不安から、いつか寄りそって隅に座りこんで互いにはげましあった。誰も鉄格子の前に現われず、美味そうなパンだけが、良い匂いをふりまいて現われた。

何もしないで、只、空腹を満たすだけの生活がはじまり、彼等からは時間が消え去った。以前から互いに憎み合っていた二人であったが、半ば公開された一郎と和子の許婚の関係が典子を近づけなかっただけであった。いつか、典子は一郎に寄りそっていた。典子はがっしりした一郎の厚い胸に顔を埋めた。一郎の手がそつと典子の丸い肩を抱いた。ぴくんと典子の体が動いた。やがて顔を上げた典子は目を閉じた。一郎の顔が重なり、やがてしっかりと唇が合わされた。

一郎と典子は、そうなるのが当然のように抱きあったまま倒れた。捕えられた不安と、死にたくないという気持が働いて、理性を忘

れたのであろうか。

メリーがリーナに命じた。

「リーナ、二号檻のポリウムをあげて。翻訳器をとって」

「はい。先生。この二匹も争い始めました。

でも前のときは少しちがうようですわ」

二人のワスピアンの耳に、アピの甘い愛の囁きが入った。

「一郎さん。愛して。もうどうなってもいいわ。……貴女の赤ちゃんが生みたいの」

「典子さん。愛してる。好きだったんだ」

典子はしっかりと一郎の背に両手を回した。「典子さん。僕はどんなことがあっても君を守るよ。ここから逃げ出すんだ。そして結婚しよう」

一郎は力強くいった。典子の目尻からつと涙がこぼれた。

翻訳器を耳から外しながら、メリーはスイッチを切った。

「ふ……リーナ、あいつらは逃げ出せると思ってるらしいわね」

「そうですわ。先生。絶対に逃がしたりするものですか」

「それじゃリーナ、あのタイトコイルが出来上ったら、そろそろ別に引き放して智能測定

器にかけて、全知識を吸い取って見てね」

「はい先生、これでやって見ます」

リーナの手には細い黒紐がだらりと垂れていた。メリーは教えるような口調で制した。

「でもリーナ。牡の方が力が強いから、一匹残した牝の方から先に試した方がいいわよ」

啓子は、最後に食べたパンに入れられていた睡眠薬のためぐっすりと眠ってしまったが目を覚ますとたしかに逆海老に縛り上げ、猿ぐつわまで噛ませて転がしておいた洋子の姿が消えてしまっているのが驚いた。人が入って来た様子も全くないのに、あの太ロープがぶつぶつに切れて床に散っているだけである。あのきびしいいしめを、洋子が自分で切ったとはとても考えられなかった。しかも出口のないこの部屋から逃れたとは想像もできない。だが現実には洋子の姿はない。急に何か怖ろしさが全身を包んだ。部屋の中をしらべてまわる啓子の耳に、美しい音がひびいた。

「りりりり……」

どこから現われたのか、鉄格子の外に二人の美しい若い女が、短いスカート姿で立っていた。この二人は人間ではなく、啓子は自分がワスピアンから、アピと呼ばれる動物とし

て扱われていることなど、全く知らなかった。二三本の黒い紐を持った緑色の服を着たリーナが前に二三歩進んだとき、啓子は鉄格子をつかんで叫んだ。

「助けて。ここから出して」

しかし二人の女の表情は冷いまま崩れなかった。啓子の叫びを無視してリーナの足が床のボタンを押した。ギリギリ、太い鉄格子が天井へ上っていく。進みも退きもできないで立ちすくんでいる啓子に、リーナは一番長いゴム紐をホイと投げつけた。その紐は啓子の背に触れたとたんに、生命を得た蛇のようにくねくねと動くと、両手で胸を抱えた啓子とその形のまま、ぐるぐると二巻してぎゅっと肌に喰い込んだ。意味の通らぬ叫び声を挙る啓子に一際高いリーナの声があびせられる。

「りりりり……」——この牝もギャーギャーわめいてうるさいわね——

啓子にも翻訳器があればそう聞えたであろう。リーナは幅の広い短いゴムベルトを持って、しゃがみこんでもだえる啓子の髪をつかんで顔を仰向かせると大きく開いた口にぺたりと押しあてた。ベルトはリーナの手が離れると、西側にジワジワと動いた。啓子の口は絆創膏をはりつけられたように全く声を封じ

られ、もはや

「むつ、む……」

と呻く自由しかなかった。リーナは全く事務的に短い紐を、揃えている啓子の足首に接触させる。紐はリーナの手が触れている限り、だらりと垂れているが、手が離れたとたんに目的物を求めてうねりながら啓子の肌にまといつく。あまりの恐怖に目をみはる啓子の体一面に鳥肌が立った。足首を二巻された啓子の体にリーナの手が軽く触れると、重心を失った体はどたりと床に尻をついて倒れた。

起き上ろうともがく啓子の姿を冷く見下しながらリーナはこの紐——タイトコイル——の機能を説明しはじめた。

「先生、これがタイトコイルです。私たちに何の変哲もない紐です。でもアピの肌には鋭敏に反応するミスタール液で処理しておいたのです、ですからアピの肌を求めて動き、ぴったりと吸着してしまうのです」

「うまく作ったわね、リーナ。でも離すのはどうするの」

「それですの。ミスタール液の中に少量のムニエルを入れましたから、私たちワスピアンの肌にムニエルが反応してミスタール液が不活

性になります。ですから私たちが触れていると粘着力を失います。離れたとたんにアピの肌に吸着するんです」

「それはうまいところに気がついたわね」

「これも先生のおかげです。ミスタール液の処方を作って頂けたからです。もう一度ごらんになって下さい」

リーナは小さな笛をくわえた。これも小型の翻訳器である。啓子の耳にはじめて人間の声がひびいた。

「おとなしく云うことを聞かない。それともそのままにして放っておいてもいいかい」

声を封じられた啓子は小さくうなずいた。

と、リーナが啓子を前手に締め上げているタイトコイルに手を触れた。肌にめり込むほど強く締っていたコイルは力を失って床にぱらりと伸びた。啓子はあまりの不思議に、目を見はりながらも、自由を取戻した手について上半身を起した。口にはられた絆創膏をはがそうと手をかけたが、まるで肌の一部になってしまったかのようにぴったりと粘着してしまっている。リーナの笛が命じた。

「そんなことをしたって無駄だよ。手を後におまわし」

啓子はまるで催眠術にでもかけられたよう

に両手を背に組んだ。リーナは短いコイルを揃えた両手首の上において、手を離した。コイルは啓子の手首のまわりでくるとおどった。「む……」手首を強く締められて、呻いた啓子目分から床に倒れた。足首を締めるコイルにリーナが手を触れると、あれほど強く締っていたコイルがだらりと弛んだ。

「さあお歩き。こっちへ来るんだよ」

啓子とはたとと二人のワスピアンの真中を歩かされた。

すでに何時間か前に飼育椅子に取付られ、自分の要求に応じてくれる飼育器の働きを知って、美味しいスープをすすり、誰にも見られていないのに排泄の羞恥に身をもだえる洋子と、たった今、椅子に取付けられて四肢の自由を失いながらも、きびしいタイトコイルのいましめを解こうと全身の力をこめてもだえる啓子の二人は、殆んど同時にワスピアンの訪問を受けた。

メリーは椅子に命じて啓子の体を大の字に張り伸した。啓子には鈴を振るような音にしか聞えなかったが、メリーは——ギャーギャーわめかずに大人しく試験台になるんだよ——つぶやきながら啓子の脇に手をかけた。

「あつ。イイイ……」

悲鳴と共ににじみ出る涙がスポイトで吸われ、試験管に移される。白目をむいて歪んだ顔が奇妙である。つんと尖った鼻の奥まで、ゴム管が挿入される。小鼻がびくびくとふるえる。叫びをあげる口に開口具が噛まされる。唾液が採集される。大きくのけぞる咽喉の奥をゴム管がすべる。胃液までが吸い上げられる。何度も嘔吐しそうになり、啓子は苦い胃液を味あわされる。上にあげて大きく開いた太腿の間にメリーが立った。

悲鳴が部屋中にひびいた。しかしその悲鳴を長くは続かなかった。あまりの騒音に、リーが冷たい表情のまま幅広のタイトコトルで啓子の口を封じた。かすかに、むつ、む……と呻き、椅子に固定された腰をよじる啓子の肌は朱に染った。メリーは興味深く、不気味な器具を装着されて閉じた目尻に涙を溢れさせている啓子の悶えを観察した。めくるめく思いの啓子は、声を封じられながらも呻きに呻いた。

汗みどろになった啓子はひとときわ高い呻きをあげてぐったりとなった。

何本かの試験管にラベルをはりつけて、メリーは大切そうに持ち去った。

別の部屋で、洋子はリーナの手によって同じような検査を受けた。啓子も洋子も、自分たちがアピと呼ばれる動物としてしか考えられていないことや、自分たちと全く同じ姿をしたメリーやリーナがワスピアンという人類の敵であることには全く気づかなかった。何という恐ろしい、冷酷な人であろうかと憎しみを燃やした。

メリーが去って、ほっとした虚脱感に身をまかせたとき、椅子は徐々に元に復した。啓子はハッと正気を取り戻した。

天井から、パーマのヘヤドライヤーに似た大きな深い帽子がぎりぎり降りてきた。啓子の頭に近づくと、その中から何本もの触手がのび出してきた。頭の各部をおさえつけた触手は適度な暖かさであった。視界が深いお椀にさえぎられると、こらえきれない眠気が啓子をおそった。隣の飼育室の洋子も同じ知能測定器にかけられていた。

研究室では二台の機械から流れ出る記録紙をメリーとリーナが調べていた。洋子と啓子は催眠状態の中で、色々の質問に答えさせられている。微妙な脳波が増幅されて記録されるのだ。

「リーナ、アピは割にいいね。いくらなの」

「はい。先生、一寸お待ち下さい。えーと、少しちがいます。大きい方が知能一二一で、小さい方が方が一二五です」

「リーナ、この記号は我々にはないものだわ。もう一度ここを再生させて。音声にしてね」

リーナが記録紙を再生機にかけた。と、洋子の声が流れはじめた。

「最も貴いものは生命です。人間の生命は金では買えません。しかしもっと大切なのは愛です。愛するもののためには命をかけても悔いませぬ。……」

「ここだわ。リーナ。さっきの牡と牝も愛、って云ってたわね」

メリーの指がボタンを押し、洋子の声が消えた。

こうして何時間もかけて、洋子や啓子の知識はすべて記録紙に吸いとられてしまった。

「リーナ。アピの知識は何だか物足りないわね。この二匹の牝は機械や数字にはまるで弱いものね」

「そうです。文学だとか小説だとか云って、現実離れのしたことしか知らないらしいですわ。でもアピたちの間で争いあって、斗っているなんておかしいですわ」

「そうだよ、リーナ。お互い同志で争いあっ

ているから、我々ワスピアンに気づかないんだわ。今のうちに、アピを全部絶滅させる必要があるわね。私たちのことを知ったらきっと手向うからね」

智能測定器の大きなお椀が天井に上ると同時に啓子と洋子は、はっと目覚めた。眠っている間のことは何も知らなかったが、試験勉強で疲れたかのように、全身にだるさが残った。二人ともその前に行なわれた体の検査の方が大きなショックであった。涙や唾液を採取されるならまだしも、胃や腸までもかき廻された感じは、何にたとえようもなかった。まだ異物感が体に残っている。目で見ることもできないし、手で触れることも、もちろんできない。飼育椅子は非情に冷たく二人の体を固定していた。

二人とも、冷たいその椅子以上に冷酷で無表情な二人の美女を、怖ろしく思った。彼女らが人間ではないことに気づくすべはなかった。啓子達は今までに、生物研究、栄養摂取の名目で、何の罪悪感も残酷さも覚えずに、他の生物類を殺したり、食したりして来ている。だが、現在自分達が、それらの生物と全く同様な立場に置かれていることには、尚更に思い及ばなかったのだ。

“カメラ・ルポ”

△新庄美子^{よし}の巻▽この女^{ひと}と

山 本 一 章

五月下旬、白壁の町倉敷で私は新庄美子さんに出会った。偶然の邂逅である。いわば私が直接ハントしてルポにする第一号の女性である。それだけにこのルポを書こうとしてペンをとったものの、ふと彼女の面影が脳裡に浮ぶと、新鮮でなまなましい記憶がペンを鈍らせてしまう。少し時間を置いた方がいいのかもしれない。

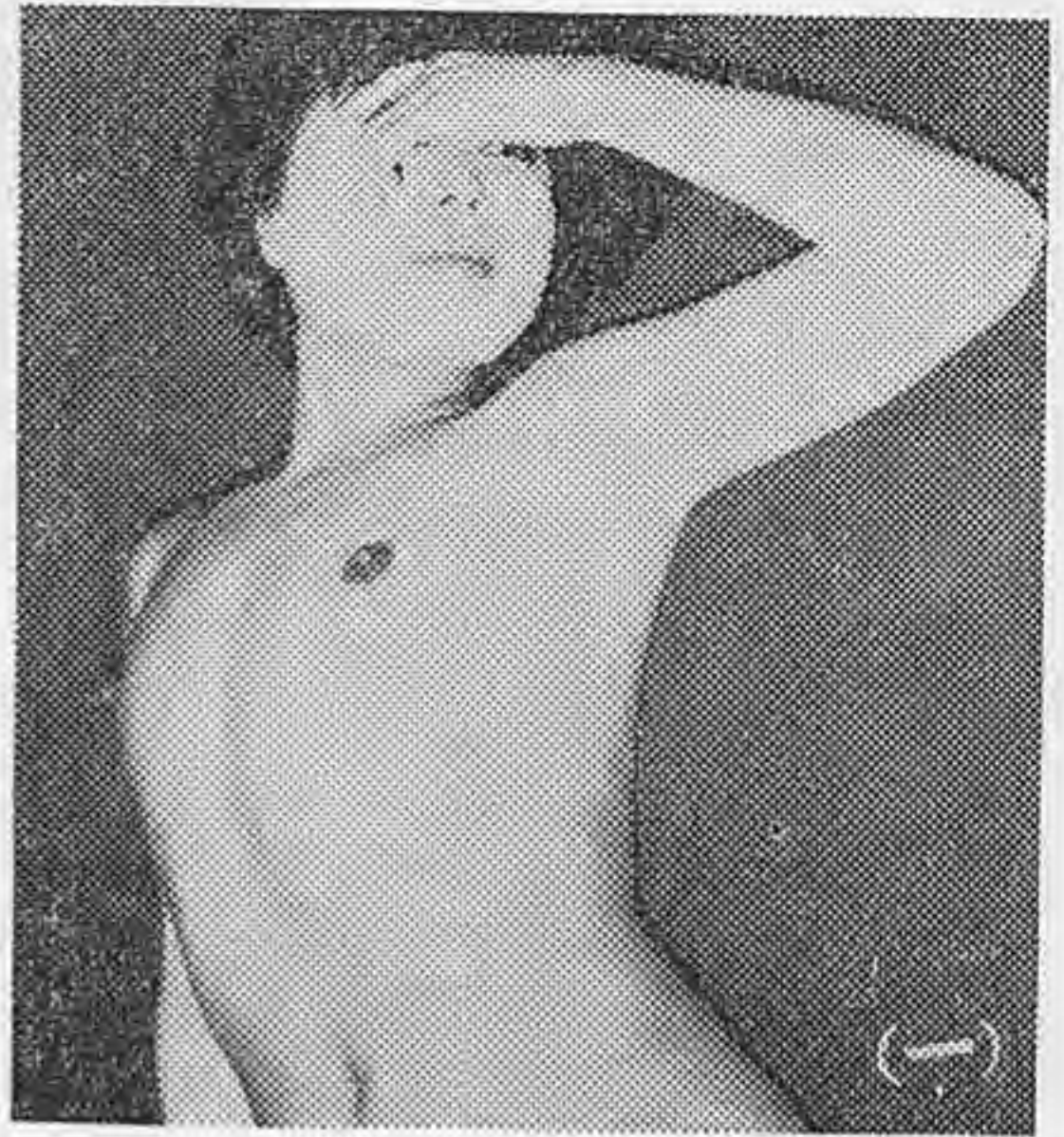
○

所用を済ませて岡山のホテルで一泊した私は、翌日をかねてから憧れていた倉敷に遊ぶことにした。夜道でも帰ることはできたのだが、幸い翌日を空けてあったのでいつも素通りしかしないこの美術の町を訪ねることに

したのである。途中の経過は無意味なので省略しよう。私の車が倉敷の町に入ったのは昼前であった。晩春の日ざしを一ぱいに浴びた道からは陽炎が立ちのぼり、碧い空に白い雲の浮んだのどかな一日である。地図で凡その見当をつけて車を停める。美術館の近くには駐車できる場所がないとドライブ案内に書いてあるので少し位なら歩くつもりである。カメラバッグを肩に掛けて自動車を後にする。直ぐ近くに民芸品などを並べた小さな店があったので、私はそこで煙草を買い、牛乳を飲む。爽快な気分である。店のおばさんに美術館や民芸館の位置を教えてもらう。おばさんは親切にくだい程詳しく道順を教えてくれ

た。旅先で親切な人に会うことは、その場所の印象を益々美化するようだ。牛乳を飲み終った私とその店を立去ろうとした時である。一人の若い女が私の横に立って、おばさんに美術館の場所を尋ねた。紺のスカートに白いブラウスを着て手に淡いグリーンのカーディガンと黒いバッグを持ったいかにも若々しい女性である。短いその頭髮や身のこなし方から、私はその女性が学生だと直感した。店のおばさんは倦きもせず私に教えたのと同じことを彼女に繰返し始めた。私は笑いながら思わず声を掛けた。

「僕も今から行くんですが、よかったら一緒にどうぞ」



「おじさん？ おじさんとはひどいなあ」
彼女はククッと笑い声を出した。

「じゃ、おにいさんって言ったらいいですの？」

「おにいさんでもないな。まあいいでしょう。倉敷は初めてなの？」

「ええ、一度来たいと思ってたんですけど」

可愛い顔をした明るい感じの娘である。

二人はいつしか打ちとけていた。分館の門を入る。近代的な建物である。前庭の芝生の中に頭のない男の裸像と胸像が向いあって置かれてある。

「何だかミスティックな感じですね。良くないわ」

私は黙って傍のベンチに腰を降ろす。二つの彫像とその背景になっている建物の配置は私に少しショックだった。しかし写真になりそうでならない気がする。彼女も横に腰を降ろす。

「どんな写真をお撮りになるの？」

「別にきまってはいませんがねえ。強いて云えば人物の方が多いですね」

「女の人？」

「うん」

私は煙草に火を点けて大きく吸い込む。時間に煩わされない一刻を求めて来た私に相應しい環境である。ぼんやりしている私に彼女が声を掛けた。

「お邪魔かしら？」

「いいえ、いいですよ。綺麗な人と一緒に悪いはずはありませんよ」

彼女はちよっと首をすくめて微笑した。

「学校はどちら？」

「神戸ですの」

「名前は聞かない方がいいかな？」

「新庄です」

私も名前を告げる。

「今日の予定は？」

「別に決めてないんですけど、晩までに帰るって家には云ってありますの」

「じゃ良かったら僕の車で帰りませんか？」

大阪まで行くんですから。一対一じゃ悪いか

「自動車で来ていらっしゃるの。じゃ乗せていただくかしら」

快活な娘さんである。それに余りにも若々しくて私の方があがり気味である。おそらく私とは二十年近い差があるようである。どうやら私が自ら求めて来た孤独の旅は崩されて

「お嬢さん、そうなのよ。今この方にお教えしたとこですから」

学生はちらっと私を見た。私は何気ない様子であたりを見廻す。

「そうするわ。構いませんかしら？」

「ええ、いいですよ」

実のところ私の胸の中はドキドキしていたのだが、年令が態度に落着きを装わせていたようだ。二人は歩き出す。

「お一人で？」

「ええ。おじさんは、写真を撮りにこられたの？」

しまったようだ。しかし私は満足である。
分館の中をあっさり素通りして、川筋に出る。写真で何度か見たことのある景色だが、白壁の立並んだこの光景は、私に新鮮な感動を与えた。川に沿って少し歩く。長崎で受

けた感激とはまた異った情緒がこのあたりを支配している。静かで清冽な感じが、私の氣持を引き締める。新庄さんは私の歩く方に随いてくる。

「素晴らしいわ。こんな所が日本にあるなんて思えないようね」

彼女も感動しているようであった。途中数人の外人観光客とすれ違う。

「外人の女の人って皆、綺麗だわね。日本人は駄目ね」

「そりゃ違うね。矢張り僕らには日本の女のの方がいいよ」

新庄さんの方がずっと魅力があると云いたかったが、きざっぽいので止める。考古館の前で橋を渡って、川の反対側を引返す。美術館まで来た私は、直ぐ傍にしゃれた喫茶店があったので入る。グレコというその名前もいい。グレコの絵は余り好きではないが、バロックは私の好きな時代だ。サンドウィッチとコーヒーを二つずつ注文する。

「何だかいい気分ね。こういうのを芸術的雰囲気って云うのかしら？」

「そうですね」

「グレコってスペインの人でしょう？」

「グレコという言葉はギリシャ人という意味らしいんですがね。僕は彼の絵は余り好きじゃないね」

「じゃ誰のが好き？」

「そうだな、バロックじゃ矢張りルーベンスかな。ムリリョも好きだな」

「ムリリョの乞食の子はいいわねえ。山本さんは絵かきさん？」

私は顔を横に振る。

「何かしら？」

「そんなことどうでもいいでしょう。しがな稼業ですよ」

しがな稼業という言葉がおかしかったのか新庄さんは声を出して笑った。

「今日は写真はお撮りにならないの？」

「撮らしてくれる？」

「私を？」

正直云って私の写慾は彼女にあった。

「顔だけ？」

「全部なら、なおいいですがねえ」

「私、体には余り自身がありませんわ」

新庄さんがヌードを意識しているのを読み取った私ははっとした。私自身ヌードまでは望んでいなかったのである。押さねばならない。



「是非お願いしたいな。初対面でこんなこと頼んで悪い男だなあ」

「そんなに撮りたい？」

私は片手を顔の前に出して祈るような恰好をする。千載一遇のチャンスである。どうやら彼女の自負心が許容しそうである。芸術的雰囲気には女は弱いのかもしれない。

「でも場所があるかしら？」

「探しますからいいでしょう。撮らせて下さいよ。新庄さんならきっと素晴らしいのが撮れると思うな」

女の自尊心をくすぐる。彼女は万更でもない顔をして微笑する。話しは決った。こうなればもう美術館に入る気もしない。喫茶店を出た私は自動車の所へ急ぐ。新庄さんも随いて来る。彼女ももう大原美術館よりも、自分が芸術のモチーフになることに興味を感じている風であった。

○

自動車で岡山へ引返す。助手席に坐った新庄さんは余り気にもしていないらしく快活に喋った。その会話は大した意味がないので省略する。ただモデルになることについて一言だけ云った。

「絶対に触らないって、約束して」

この純真な新庄さんを温泉マークへ連れ込むのは罪な気がしたので、私が昨夜泊ったホテルへ車を着ける。フロントで手続きを済ませた私は、ボーイが昨日のと変っているのに一安心する。余計な弁解をしなくていいからである。

洋室の中は絨毯が敷かれてあるので、それをバックにすれば良さそうである。新庄さんはやはり緊張したのか、部屋へ入って二人きりになると大きな溜息をついた。

「何だかこわいわ」

「大丈夫ですよ。絶対体には触らないから」

「変なことはしないでね」

「信用できない？」

「信用してるけど……」

「そこにバスがあるから、そこで脱いでいらっしゃい。用意しとくから」

こういう場合、こちらが躊躇してはいけない。自分のペースに乗せて行くのがいいようである。バッグを開けてカメラを取り出す。新庄さんはバス室の中に姿を消した。テーブルと椅子を移動して空間を作る。自然光を利用したいがどうも暗過ぎるし三脚もないので諦める。ストロボを装着しコードを引く。カメラバッグの底にロープがあるが、それは出

さなかった。それを使うことまでは、到底、期待できなかったからである。

やがて新庄さんの出て来る音がする。彼女はタオルで胸だけを押えていた。若い女性は乳房を見られることの方が恥しいのであろうか？ 私はその恰好に思わず微笑した。

「恥しいわ。こんな体、駄目でしょう？」

「いや、いいよ。凄くいい。そこに横になってごらん」

彼女は絨毯の上に坐った。私は黙って彼女からタオルを取る。しかし彼女は両腕で乳房を抱えている。

「腕を離して！」

カメラを構えながら当然のこのように命令する。成熟し切っていないのか、彼女の乳房は膨らんだばかりといったみずみずしさであった。

「いい体だなあ。素晴らしいよ。うーん」

ポーズは固くて良くないが、気持を慣らすために何回かシャッターを押す。ヌードやポートレートを初めて撮らせるモデルの場合、空でもいいからシャッターを数多く切れというのがテクニックのようである。

「新庄さん程いい体をしたモデルを余り見たことはないな。いいよ」

「山本さん、今までに何人位モデルを写したことあるの？」

「そうだな、ヌードだけで十人以上はあるだろうな。化粧品持ってる？」

「ええ、化粧が下手でしょう？」

「そうじゃないけど写真にする場合、少し輪郭をつけた方がいいからね」

私は、筆で彼女のアイラインを濃くしてやる。新庄さんは大分雰囲気慣れたのか、顔を仰向けて私に委せていた。若い女の肌の臭いが私の鼻をくすぐる。

「さあ、これでいい。今度は横になってごらん」

新庄さんが少し脚を立てたまま仰向けに横たわったので、私は傍に寄ってポーズをつける。ストロボの閃光がその若い肉体の上を走る。百聞は一見にしかずとか、このカメラ・ルポとしては不似合いかもしれないが、その時のヌード写真を一枚入れてみた。写真(一)がそれである。腋の下も綺麗にされていて清潔感があった。

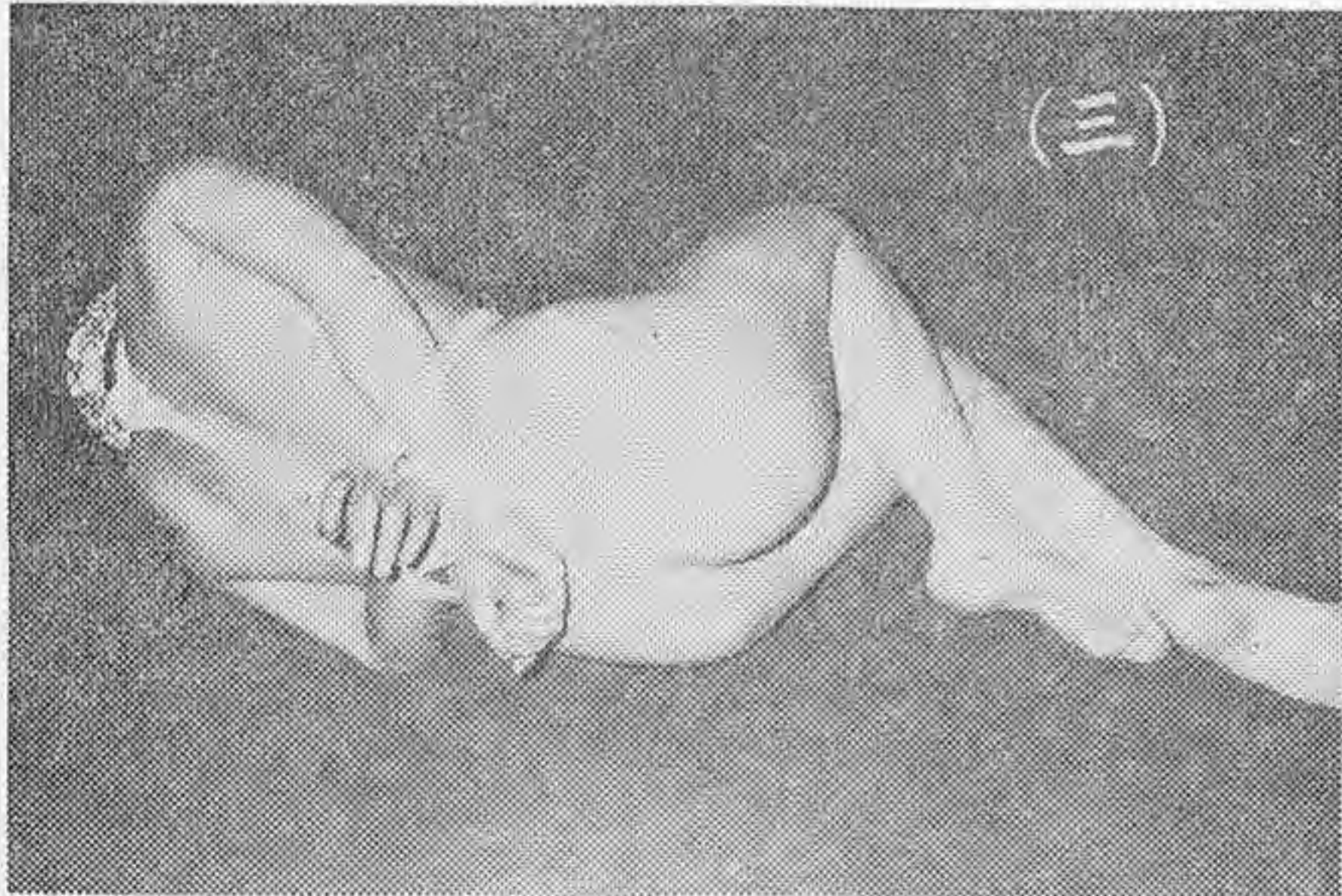
「この頃少し肥ったから……」

彼女は弁解したが、私はそれを否定する。ファインダーを覗く私の眼鏡は何回か曇り、顔へ血が上っていたことを告白しよう。実際

彼女の裸身は健康的で新鮮であった。一本のフィルムは瞬く間に消費されてしまった。

「もう慣れたでしょう？」

「ええ、最初は何だが光る度にドキッとしたけど」



新庄さんは裸のまま椅子に腰を降ろす。

そして向い合って坐っている私に微笑する。

彼女のヌードを一本撮った私の心に、異質の写真慾が湧いてくる。バッグの底にあるロープを使ってみたい。今まで写したモデルの場合、殆んどが経験者かそうでなくても事前の了解があった。私が縄を出す彼女等は自分で手を後に廻わしてくれたのだが、今私の前にいる新庄さんは全くの処女地である。どう切り出しているのか言葉が見当らない。口説き上手な辻村氏ならどうするだろうかと思えてみるが、いい考えも浮ばない。

「どうなさったの？」

「いや別に。ちょっと考えごとをしてただけですよ」

私のハイド氏が早く早くとせき立てる。もう当って砕けるしかない。私はバッグの底から写真を一枚出す。

「いいものを見せてあげようか？」

「ええ、山本さんが撮った写真？」

「びっくりしたら駄目だよ。いいね」

表を向けて彼女の前に置く。木村さんの強烈な一枚である。勿論全裸のものだが露出したものではない。新庄さんは黙ってそれを手にとるとじっと眺めた。私は彼女の表情を見

守り、その口から出る言葉を待つ。試験の発表を待つ時の気持である。

「苦しいでしょうね。こんなに縛られたら」

ほっとする。彼女の表情はそう変らない。

「こんなの初めて見せてもらったわ。山本さんこんな写真も撮るの？」

「うん、新庄さんもやらしてくれない？」

「いやだわ」

一瞬白けた沈黙が訪れる。ここでSMの説明をしたらいいかもしれないが、私にはどうもにが手である。やけに煙草をふかす。

「やらしてあげようか？」

黙ってしまった私を怒ったと思ったのか、彼女から口を開いた。私は微笑して肯ずく。

「変なおじさん。でもゆるくしてね」

私は心の中で万歳を叫んでいた。早速バッグの底からロープの袋を取り出す。

「縄まで持ってきているのね。いやだわ。絶対に変なことをしないって、誓って！」

私が右手を挙げて宣誓するような恰好をすると、彼女は肩をそばめて笑った。絨毯の上に新庄さんを坐らせた私は早速縄を掛ける。この一瞬の感動は恐らく経験しないと判らないだろうと思う。縄を彼女の滑らかな手首に巻きつけながら私の手は震えていた。

ぎっしりと手首に縄を巻いてから首縄を掛けてそれと連結する。最初から本格的な縛りである。縛り直しを許してくれるかどうかわからないので、この際思い切ってやった方がいいと考えたからである。

「きつく縛るのねえ」

「辛抱できない？」

「いいわ」

首縄に一本縄を結んで下に降ろす。縦縄である。後に廻わして後手首に繋ぐ。一条の縄が彼女の白い体に食い入った。

「うーん」

裸身がくねるが、言葉は出ない。羞恥の悶えである。縦縄と後手の上からウエストをくびるように縄を強く巻く。

「痛い？」

「……」

新庄さんは答えない。備えつけの浴衣の帯で目かくしをする。一発二発とストロボを光らせる。その一枚が写真(二)である。乳房の膨らみが陰になってしまったが、かすかに右肩の先に可愛い乳首が覗いているのが印刷に出るであろうか。そのままごろっと横に倒したのが写真(三)である。この時新庄さんは少し呻いた。

「もう解いてあげようか？」

彼女は答えない。怒っているのだろうか？ 気になる。

「怒った？」

彼女は顔を横に僅かに振った。体を仰向けにする。後に手首があるので彼女の体が少し弓なりにそり返った。素晴らしい。なだらかな胸の丘陵の上にある小さなピンクの乳首がピンと立っている。ファインダーを覗きながら私はこの美しくもなまめかしい女体に魅せられてしまった。その彼女の前面の写真は全裸であるだけに到底誌上に掲載されそうもないので提供しなかったが、もしSMフォトにも芸術があるとしたら、正にそれに相応しいものだ、と、自負している。一しきりその若い裸身をフィルムに刻んだ私は、カメラを置いてその傍に近づいた。張った胸、腹部への滑らかな曲線、しみ一つないようなその若い肌は私に噛みつきたいような誘惑を感じさせる。縛られて無抵抗な女体が私の前に投げ出されているのだ。彼女は大きく胸を上下させている。私が傍にいろのを意識しているのである。

「イヤッ！」

甘えたような声だったが体は動かさない。

私はもう感極まって両腕で抱きかかえると、その頬に唇を押し当てた。

「カンニン」

哀れな声だった。私は彼女が処女だと直感した。余計な理性が頭をもたげてくる。力いっぱい抱き締めると、彼女は私の腕の中で縛られた裸身を悶えさせた。

「ごめんよ。悪かったね」

私は新庄さんの目かくしを外し、体の縄を解く。彼女は目を閉じたまま私に体重を預けている。

「怒った？」



顔を横に振る。私はその可愛い唇に私の唇をちよっと当てがってみる。すると彼女は突然私の首にしがみついていたので、私の方が驚いてしまった。なま温い息が私の耳をくすぐりながら囁く。

「わたし好き？」

今度は私の方が答えられなくなってしまった。これ以上踏み込んではいけない——いつものことが全く余計な理性である。この際最も安全な方法は彼女の自由を奪うことである。私は黙って彼女の両手を前に揃えさせて縄を巻きつけた。

「まだくくるの？」

変態ね」

「いや？」

「まあいいわ」

私は彼女に目かくしを掛けてから抱き上げて立たせた。ずっしりした肉感が掌に伝ってくる。それから前手縛りの縄尻を引いて彼女を歩かせる。尻ごみしながら

ら歩く新庄さんの姿を眺めていると私の加虐慾がうずき出した。浴室の前の機の下に彼女を立たせてから、縄尻をそれに引掛けて手首を引き上げた。最もオーソドックスな、しかも最も無防備な鞭打ちの姿態ができ上る。今まで何人かの女性にこの姿勢を試みたが、この姿勢で写真になる女性は実際そう多くない。私の今までの記憶では大塚啓子さん位しかなかったようである。新庄さんの場合、その姿勢は彼女に似つかわしいものであった。体のバランスがとれているからであろうか。爪先立つ位の半吊りにして、しばらくその美しい裸身を眺める。縄をこたえた掛けたものより反って束縛感があるようだ。

「腕がだるいわ」

新庄さんが呟やく。

「叩いてみるよ」

「そんなのいや！」

私は彼女の拒絶を無視して平手でその豊かな臀部を打った。パーンと派手な音がして肉が震える。

「イタイッ！」

私は構わず二つ三つと叩いた。叩く度に彼女の裸身が筋肉を伸縮させた。それは私にとっても強烈な刺激であった。私は後からそっ

と彼女の大きくない乳房に手を触れてみた。
「うーん、ひどいわ」

しかし万更でもない口調である。私はその悶える姿態をフィルムに刻みたかったので、カメラを片手に構えてから、もう一発力一ぱい尻を叩いてシャッターを切った。それが写真四である。のけぞるように顔を仰向けたこの一枚で、彼女の若々しく量感のある体の線を見ていただけることと思う。

「もっと叩こうか？」

「痛いからいやよ」

「じゃ、そのまま放っとくよ」

「……」

私は新庄さんをそのままにして椅子に腰を降ろす。この姿では腕がだるくてたまらない筈であるが、彼女が降参するまで放置してやるつもりである。残酷なようだがそうすることによって彼女の燃えようとする体が鎮められるという計算である。二分、三分——案の定、彼女が体をもぞもぞし始めた。

「もうかんにんして」

「じゃお尻を叩くよ」

「意地悪ノ、もう辛抱できないのよ。早く解いて」

私は、平手で一つずつ軽く叩いてから、細

を解いてやった。彼女は立ったまましばらく両手で顔を押えていた。白い手首や腹部に残った縄の跡が痛々しい。手をとってソファーに坐らせる。向い合って坐った私は煙草に火を点けながら、内心泣かれたら困るなあと考えていた。もうこれ以上撮影のできる雰囲気ではない。

「まいっちゃった」

突然彼女が顔を上げる。その顔が笑っているのを見てほっとする。

「悪かったね。痛かった？」

「大丈夫よ。でもびっくりしたわ。おじさんって変な人」

私が手を差し出すと、彼女も快活に握手してきた。仲直りである。恐らく、私が彼女の貞操を奪わなかったことに、一沫の詫しさと安堵を感じたように、彼女もまたそれを喪わなかったことに、ほっとしているのに違いなかった。

私が片づけをしている間に、新庄さんはバス室でシャワーを浴びた。その水の撓ける音を聞きながら、私は何か性の空しさのようなものを感じていた。

○

新庄さんを助手席に乗せて、夜の国道二号

線を東に向ってひた走りに走った。途中モーターで食事を摂った以外、殆んどノンストップのドライブだった。その間二人で交わした会話の内容は、第三者には至極退屈なものであるうと考えるので省く。ただ一言、彼女が呟いた言葉だけを記して置こう。

「わたし覚悟していたの」

ああ——正にああである。

三ノ宮で新庄さんを降ろした私は更に車を東に向けて走らせた。孤独感はなく、私の心はバラ色の一瞬の余香に酔っていた。(若い、若い?)

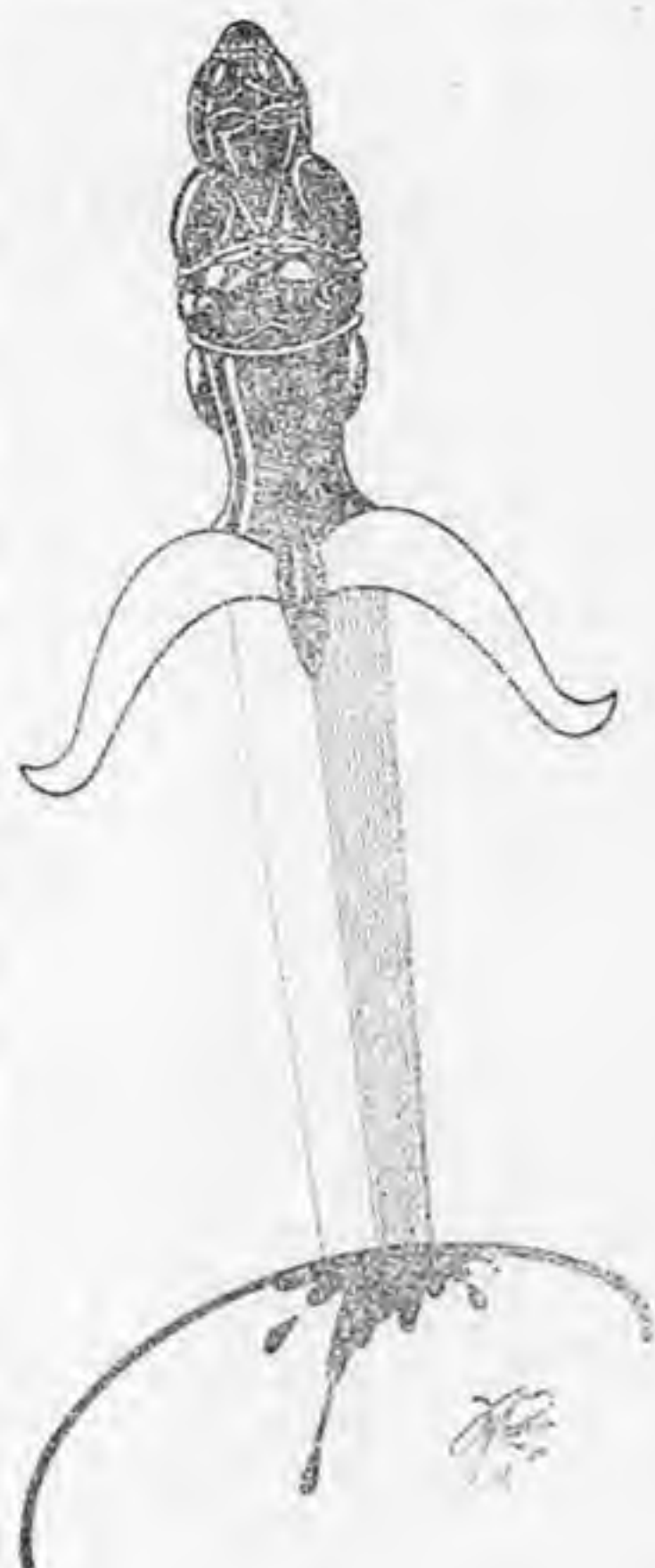
このような経過のため、新庄美子さんを写し取ったフィルムは極く僅かである。またその縄のかけ方なども、今までに提供したものと比較して、甚だなまぬるいものでしかないが、しかし私にとっては貴重な数枚であるので御了解いただきたいと思う。

彼女の住所はとうとう聞き出せなかったのだ、今は彼女との再会の機会は偶然に委ねるしかない。私は恋を知った若者のように彼女を想い憧れている。誰か美子さんを知らないか?

(この項おわり)

復讐

(ガンペッタ)



鬼青葉千

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

ダブル誘拐

気がつく、あたりはまっくらだった。しめった空気がよどんでいて、物音一つ聞こえなかった。固い肘かけ椅子か何かに、縛りつけられていたらしく、身動きもできないので

ある。

実業家三島雅義夫人、緋沙絵の記憶は、徐々によみがえりつつあった。にぶい頭痛を覚えると同時に、失踪した恵利香の事が先ず頭の中にうかんで来た。

一カ月ほど前、三月二十日のことだった。

緋沙絵夫人の娘恵利香が、国立劇場からの帰途、姿を消してしまったのである。あとでわかったことだが、国立劇場は交通の便が悪いので、あらかじめ恵利香はハイヤーを予約していた。ところが、芝居のハネる一時間ほど前に、その予約がキャンセルされていたというのである。それが、確かにハイヤーに乗って帰ったというのは、恵利香と同乗して新橋駅まで送って貰ったという友達証言からであった。ハイヤーらしく偽装した車によって彼女が誘拐された公算が大きくなった。当然のことだが、捜索願いが出されることになった。

かなり名の知られた薬品会社の社長である夫の三島雅義が極力おさえたのにもかかわらず、このことは間もなくマスコミの探知するところとなり、各紙の三面をいたずらにぎわせてしまったのである。その代り、いろいろな情報が真偽とりまぜて提供されたが、何一つ手がかりとなるようなものもなく、捜査当局も次第に焦燥の色を濃くして行くのであった。そこへ、半月ほどして、香港の消印で航空便が届き、その中にメイフラワーホテルの便せんが入っていて、まぎれもない恵利香の筆跡で次のような文章が書きつけられてい

た。

お父様お母様、どうか

警察へはいわないで

黙って信用して下さい。

私は安全ですし

自由でいられますから

心配はございません。

用事が済めば帰ります。

呉々もさがさないで。

お元気でさようなら

四月十日

筆跡は恵利香のものに相違なくとも、文章が何となくギコチないので、頭をかしげる者もすくなくなかったけれど、とに角、生きているらしいということだけは推察できるとして親達は、やや胸をなでおろしたのであったが、問題は香港へ行った理由が皆目見当がつかないことである。

今日、都心のデパートにある美容院にセットをしに行った緋沙絵夫人に、見知らぬ老人が近づいて来て、恵利香に会わせてやるから黙ってくるようにとささやいた。否も応も云わせぬ相手の態度と、娘恋しさの一念から、云われるままにパーキングに置いてあった老

人の車に、乗り込んでしまった。車は、四谷の0ホテルの地下駐車場へ、昼でもうすぐらく、ひっそりした片隅に車をとめると、老人は緋沙絵夫人の座っていた後のシートに入ってきて、突然、クロロホルムをしみこませたガーゼを彼女の顔におしつけて来た。老人とは思えない腕力だった。もがくことすら出来ず、緋沙絵夫人は気を失ってしまったのであった。

パツと灯がついて部屋が明るくなり、緋沙絵夫人は眩しくて眼を閉じてしまった。頬をはげしく叩かれて、思わず「ヒイーツ」と悲鳴をあげるのに、おしかぶせるような男の声で、

「おい、いいかげんに目をひらけよ」

おどおどと開く緋沙絵夫人の目に入ったのは、すぐ前に立っている黒ずくめの姿である。身体にピツタリついた真黒なトレーニングシャツとトレーニングズボン、ピカピカに光った黒のブーツ、黒の皮手袋、そして、最も異様なのは、頭からスッポリかぶっていて眼だけ開いている覆面であった。

何のかざりもない八畳ほどの、コンクリートの壁に囲まれた密室に、これだけはふさわ

しくないような等身大の大鏡が一方の壁にはめこまれているだけだった。

急に、自由にならない身体をよじって、緋沙絵夫人が叫んだ。

「恵利香は、恵利香はどこにいるんですか。会わせてください」

「フフ……」覆面の中で含み笑いをしながら、男はもう一つの椅子ををひきよせて、緋沙絵夫人の横にすわると、ふせぐすべを知らない彼女の肩をひきよせた。

「そんなに急ぐことはないさ。いずれトックリ御対面させてやるから」

そういいながら、男の指先が首すじから袷元へしのび込んで行く。

「何をするんです。アッ、アッ、やめて、やめて下さい。助けて……。ああ」

肘と手首、膝と足首、そして胴の一番はっそりしたあたりをギツチリと固定されていては、所詮無駄なあがきにすぎないのだが、それでも、わずかに自由になる頭を打ちふるわせて緋沙絵夫人は、男の手の執拗な攻撃から逃れようとする。ワンピースの統のような綾絹のタッチがもがけばもがくほど縄目の間から肉体の線をあらわにして行って、四十になったとはいっても、上流夫人の金と時間の限

りをつくして磨きあげたお色気をムンムンと発散させはじめた。「プツリ」と音がしてガードルが切れた。男の手が今度は、シームレスのストッキングをひきはがす。雪のように白くムッチリと脂ののった素肌が、皮を剥がれたようにふるえながらあらわれてくる。

三十分もたたないうちにセツとしたばかりの髪は乱れに乱れて、汗と涙にベツトリと頬にくっついていた。地下室でもあろうか、うすら寒い室内なのに、緋沙絵夫人の下着は滝のような汗にまみれた。爛熟した中年女の肉体は、一寸した思わせぶりの刺戟にでも、鋭敏に反応して、責め手を一層満足させるよう

に、うねうねと蠢くのだ。

「喉がかわいたろう」

事実、緋沙絵夫人の喉はカラカラに乾いていた。与えられた塩水を何杯も飲みほしてしまったのも無理からぬことであった。

男の手は、休むことなく動き続けた。彼女はいつの間にかショーツを取り去られ、足をひらいて縛り直されてしまっていたのである。スカートもブラインドをあげたように、細腰までたくしあげられていた。

どのくらい時間が経過したのか、無我夢中の彼女にはわからなかったけれど、ただ一つ徐々ではあったが、確実に現実のものとなっ

て来た意識があった。頭からワンピースを引きぬかれ、スリープの紐一つで、裸になった両腕を首の後に縛り直されて椅子の脊についた棒に結びつけられてしまった。露出した腋窩に、やわらかいボタン刷毛がソツと触れると「ヒィーッ。クッ、クッ、ワァッ」

絶叫するような悲鳴が、くすぐりに鋭く反応する緋沙絵夫人の弱点を証明するかのようであった。してやったりと、再び刷毛が……。

息もたえだえに、むせび泣く緋沙絵

夫人が、一層切実に、責められはじめたことに気づいたのは、この時であった。

「お願いです。どうか……あッ」

びくっと、全身をひきつらして絶句する。

「どうか、って。何かね」

わかりきったことを、意地悪く男が聞きかえす。いつの間にか、男は緋沙絵夫人の正面に位置をかえていた。

「いーッ。お、お願いですから」

男は落ちついて答える。

「お願いだけではわからないよ」

「御不浄へ行きたいんです。早く」

とうとう、恥かしいことを言わされてしまった。覆面の裏で、ほくそ笑む男の顔がありありとあらわれている。やっとな、男の手がおぞましいタッチを止めた。ゆっくりと立上って、部屋の隅からポリバケツを持って来て緋沙絵夫人の椅子の下に置く。そして後へ廻って、何かゴトゴトしていたかと思うと、不意に腰かけている板が外れて、アッという間もなく緋沙絵夫人は椅子の棒の間に落ち込んでしまったのである。再び前に廻った男は、

「さあ、はじめたまえ」

「まさか、あッ。こんな、こんな恰好では。助けて下さい。お、お願いです」



お尻を椅子にハメ込んだ珍妙な姿を、正面の鏡に写された緋沙絵夫人が、何とかして腰を上げようとするが、一旦はまりこんだ木杵はびくともしない。生理的欲求は、休むことを知らず、大潮、小潮、寄せて返す波のように、或は強く、或は弱く彼女を苦しめつづけるのである。

「年の割には我慢強いじゃないか」

といって、男の眼が細まる。ついに限界が来た。

「あっ」

大浪は遂に夫人の意志を打ちくだいてしまった。何でたまろう。目をつぶり、歯を喰いしばって耐える屈辱。しかし耳をおおいたい気持を外に、バケツの水音だけが、無情にも滑稽な音楽を奏でるのである。

——ジ——

という音に、ふと気がつく、正面の鏡の前に、知らぬ間に撮映機がセットされて廻っているではないか。男がゲラゲラ笑いながら「これはトーキーだぜ」という。

緋沙絵夫人は、あまりのことに声も出せずに、それに、そこはかたない解放感に神経が鈍ったのか、ぼんやりとあらぬ空間を見つめているだけであった。

「ずいぶん出したもんだね」

男はリットルびんに漏斗を使って、バケツから液体を移し終えたとフェルトペンで「昭和四十二年四月二十五日、三島緋沙絵造」とラベルに書き入れた。

ハーフ・ミラー

「気分がスッキリしたところで、お待ちかねの御対面といこうか」

男は手早く撮映機の三脚を片づけて、緋沙絵夫人の椅子を鏡の前まで引ずって来た。

夫人は、いやいやをするように頭をうごかし、真赤になってうつむいてしまった。鏡の中に見出した自分の姿の、あまりのあさましさに、すっかり打ちひしがれてしまったのである。そこで、蚊の泣くような声で、

「縄をほどこいて、着物を直させて下さい」

男は聞こえないふりをして、又もや、バケツを椅子の下におしこむ。バケツの把手の弓が固定された臂に支えた。彼女はとびあがった。とはいっても、足を踏張って、空しく椅をガタガタさせただけだったのだが。

男は、たちまち、それに気がついた。

「なるほど、こいつは面白いや」

といって、わざわざ把手の弓を垂直に立て

て、固定してしまっただのである。

「どうせ、又、必要だろうから、暫くこのままにしておこうじゃないか」

「いやです。あっ、どうか、どうか、バケツをはずしてください」

「いいよ、いいよ、辛抱しろよ。さもないと恵利香に会わしてやらないぞ」

「えっ、恵利香は、ここにいますか」

「いるさ、隣の部屋で待っているんだ。さあ連れて来てやろうか」

といって、あるき出そうとするのへ、あわてて、

「まって、まって下さい。こんな恰好じゃ困ります。ほどこして下さい」

椅子をゆり動かして身もだえる緋沙絵夫人を面白そうに見ながら、男は

「そうだね、母親の權威が、この姿じゃ台なしになってしまうね。困ったね」

といつても、別に困った様でもなく、

「じゃ、こうしよう。この鏡は、ハーフ・ミラーだから、こちら側をくらくすれば、向う側が鏡になって、見ているのに気付かれないですむんだ。とりあえず、鏡越しで恵利香に会わせてやるぜ」

部屋の一角にあるスイッチを押すと、再びまっくらになって、ただ一箇所、鏡であった部分だけが明るくなった。

息を殺して見つめる緋沙絵夫人には、その間の数秒が、ひどくもどかしかった。

「あっ、エリちゃんッ」

マジックミラー越しに、恵利香の姿が見え



た。国立劇場へ行った時のままの美しい振袖姿であった。一カ月ほどの間に、心持ちやせたようで、それが、十八才の恵利香を、より大人びた感じにしていた。

「エリちゃん。大丈夫？ お母様よ」

われを忘れて緋沙絵夫人は叫んだ。恥かしい姿も何も、その時は意識していない。

後から意地の悪い声が聞えた。

「奥さん。この部屋は防音装置がついているんだ。むこうへは聞えやしないぜ」

恵利香は、マジックミラーに姿をうつすかのように、いろいろと身体を動かしている。こちら側からそれを見ているとあたかも、ファッションショーを覗いている風な感じであった。

「この一カ月の間に仕込んだ芸をご覧に入れよう」

男は楽しそうに語りかけた。

「むこうに置いてあるテープレコーダーに、いろいろな命令が吹き込んである。その操作はこちらで出来るようになってるんだ」

カチツと音がして、テープが廻り出し、軽快な音楽が聞えて来た。向う側

の音は、マイクを通して、こちら側へ通じるようになっていたらしい。

恵利香の歌声が耳にとび込む。何ということだろう。その歌詞は、思わず耳を蔽いたくなるような下品な、みだらなものであった。しかも、それに合わせて恵利香が踊る。その振付けも又、歌詞の意味するところを表現する俗悪さである。それを、十八才の令嬢が、表情一つ変えないで歌い且つ踊るのである。

「こらえきれなくなった緋沙絵夫人が、やめて、やめさせて下さい」

と哀願するのには、

「だめだ、一旦はじまったらテープが終るまで続くんだ。こっちでは、どうにもならないさ」

と、そしらぬ風である。

急に、音楽のテンポが早くなると、恵利香は素早く肢体を回転させながら、帯をとき出す。華麗な古代裂が蛇のようにうねって落ちる。次から次ぎへ結び合わされていた紐がとかれると、ハラリと訪問着が舞って、恵利香はピンク色の長襦袢姿になる。可憐なストリップテイーズが始まったのである。

音楽は、容赦なく少女を駆り立てる。

「やめて、やめて」

うわごとのようにくりかえしながら、緋沙絵夫人は激しく身をよじった。言っても、どうせ諸かれないとわかってはいるのだが、それでも黙って見てはいられないのである。

ピンク色が視野の外へ飛んで、和服用のブラジャーと腰巻きだけが残る。目にしみるような白さである。それが又、一層、いたいたしさをさそうようだった。けがれを知らぬ深窓の乙女が、ここまで強いられて、こうした踊りを覚えこまされるまでには、どれほど血のような涙を流したことか。

クルッと回転すると、ブラジャーが外されて、両手の掌が胸のふくらみを押さえる。そのまま、ゆっくり腰を廻して思わせぶりなフラダンスに変化した。徐々に手がゆるんで、まだ固さのぬけない木の実のような乳房があらわになった。更に踊りながら後向になると、す早く腰巻きの紐がほどかれて、両手でひっぱられた腰巻きがカーテンのように腰部をかくしていた。ストリップの醍醐味は、見物人をじらしながら裸になって行く過程にあると言われている。その点でも、恵利香の動作は完璧だった。或いは外すと見せてかくしたり、脱がなかったり、観客に固唾を吞ま

せるようなテクニックは、いかなるベテランのストリップパーにも遜色がない程だった。

ただ見る。明るい窓の中には、すでに一糸もまとわれない恵利香の裸身があった。「飾り窓の女」といったように、あますところなく肉体をさらけ出した姿であるが、淫猥なものでは決してなかった。むしろ、罪を知らぬイヴのように神神しいような美しさがあった。

音楽が再びテンポを変えると、恵利香の裸身は躍り上った。羞恥心を全く無視した激しいモダン・ダンスが始まったのである。美しい裸体の待つ厳しさが、全裸であるという現実をカバーして、美事な調和を示していたのだったが、緋沙絵夫人にしてみれば、ただ魂も消えるかと思うばかりのショックで、見るにしのびず、ただ哀れで、哀れで、オイ、オイ声をあげて泣くしかなかった。

緋沙絵夫人は、グイッと男の手で引き起された。音楽はいつの間にか終わっていて、窓の中では、恵利香が棒立ちになったまま荒い呼吸をしながら、滝のような汗を拭いていた。

しばらくすると、恵利香は歩いて行ってコークの壺をとってくると、窓に向ってアグラをかき、さも美味しそうにグヒグヒと呑みは

じめたのである。

そして、空になった壺を持って思い入れるしぐさがあって、いきなり大きな声で、

「東ーッ、西ーイ。さて、お立合」

と口上を言いはじめた。

「これなるコークのボトルはボトルにしてボトルにあらず。ポインとこれにおまじないを与えれば、こーは如何に。吐く息、吸う息、差しつ、差されつ生気を発して、さーてお立合。見事、生けるものの如くみえましたなら拍手御喝采を願います——」

無表情のまま恵利香は、コーク壺を持ち直した。

思わず顔をそむけようとする緋沙絵夫人の頭は、万力のような男の両手に押えつけられてしまつて、見まいとしても目に入ってしまった。そのおぞましい光景に全身を硬直させている以外に方法がないのであった。夫人は目を閉じた。男の指が予想して待ち構えていたように、瞼の上下を押し開く。夫人は抗って見たが、男はその繰り返しを楽しむように、根気強く、執拗に見させようとする。

次第に恵利香のその奇妙な踊りは激しさをましてゆくのだ。

☆新人新趣向悶悦夫人の美態競艶場面

若妻の魅力を発揮

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「へむ」

後手縛全裸の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「へめ」

猿轡の裸身を悶ゆ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「へも」

ムチ打ちの陶醉境

大手号三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号「へさ」

両手吊りで痛める

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へし」

後手縛り竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へす」

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号「へせ」

両手吊りであえぐ

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へゆ」

竹棒強制開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号「へた」

厳しき緊縛の正坐

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へち」

責めの魔手に屈伏

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へこ」

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へて」

竹棒開股胴絞め縛

大手札五枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号「へと」

八カ月妊婦革具責

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号「へね」

九カ月妊婦首枷責

大手札四枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号「への」

☆「花と蛇」の幻想中河恵子嬢強烈緊縛

花と蛇静子立縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とむ」

足挙げ開股羞恥責

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とろ」

片脚挙で晒す裸身

大手札一枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とは」

強烈エビ縛の苦悶

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とに」

膝頭縛開股竹棒責

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とほ」

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とへ」

股間縛の裸身表情

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とち」

菱縄縛猿轡の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とり」

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とぬ」

菱縄縛で床に喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とる」

浣腸責の甘い恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とか」

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とま」

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とみ」

浣腸責の美態開陳

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とめ」

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号「とも」

△甘い鞭▽にもだえる関谷夫人の艶姿

両手吊りで悶える

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

狂い哭く美貌夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷富佐子の陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻姿態

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊上げで喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打ってネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈す

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りで甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才に鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

お申込みは大阪阿倍野局私書箱
第十四号——箕田京二へ——

「うごめく妖しい虫」の幻想譜

浴後の剝玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はゆ▽

投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はて▽

二つ折女体エビ責

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はひ▽

開股縛りは望む所

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はわ▽

全裸女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はふ▽

黒縄は白肌を彩る

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はほ▽

悦虐に身もだえる

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はあ▽

菱縄は肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△はう▽

柱立ち縛りざらし

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はさ▽

卓上開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はめ▽

無防備の女体開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はし▽

遠山静子立ち縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河恵子 略号△はも▽

お申込みは、大阪阿倍野郵便局
私書箱第十四号、箕田京二へ。



○

貴誌をはじめて入手いたしましたから早や二年余り、実にすばらしい雑誌で製作関係の諸先生方の御努力を心から感謝いたしております。今後ますます充実した内容そして、万人に愛される雑誌になりますことを祈っております。私は奇クの読者通信を読み、こんなにも多くの方々が真実自分の本心を書きつづり、同志を求めるその気持ちに思わず心打たれる思いでございます。私も緊縛写真を集めております。今の私自身、自分でプレイを行うことも同好の方を求め

ることも出来ませんが、女性の緊縛写真を見るにつけ、私がその写真に入りこんでしまったような、うれしい気持ちに思わずなっております。女性である私、でもやはり女性の緊縛写真にひかれてしまふのです。男性のは見るのもいやです。どなたか私の緊縛写真集めに御協力下さる方はございませんでしょうか。心から御願ひ申し上げます。貴方の今のお手持の写真の内、一葉でもけっこうでございます。私にお送り下さいませ。と申しましたが、只いただくわけではございません。私も手持の写真の内、送っていただいた分だけでもおかせししたいと思ひます。私が自分を自縛した姿をセルフタイマーでうつした写真もお望みでしたら、お送りしたいと思っておりますが、自然光線で窓ぎわでうつしたものですから、うつりはよくありません。本当にお恥しくて、お見せできるようなものではございませんが、お受取り下さいませんか。皆さまの心のこもった贈りものを一日も早かれと祈っております。本当に私の好きな、乳房責め、開股責めのような写真をお送り下さった方には、私がモデルになつて貴方の手で撮影されてもいい

と思います。申しおくれましたが、私は今年二十四才になるオフイスガールです。お手紙をお待ちしております。(京都市北区・岡村美知子)

○

若葉の目のしみる季節となりました。貴誌の皆様には、いつも新鮮な記事を奇クを通じてお届け下され、喜んでおります。私は十数年来の愛読者ですが、読み始めた当時も今も交らぬ気持ちで毎月の発売を待ち焦がれております。心にしみいる豊富な内容を拝見させていただき、あわただしい世の中より、しばし逃避してひとときの別世界に遊ぶ思いが致します。現在妻も有りますが、この世界よりはあくまでも一線を引いて居りますので、何んの支障もなく購読させていただきます。最近数年に亘つて傑作連載小説「花と蛇」は世の男性女性を問わず、此の種の読物は共感を得ることと思ひます。今後も奇クの飛躍のためには「花と蛇」的な柔かいSムードが良いと思ひます。私達のアイドル奇クの永遠の発展を心から祈ります。(岐阜県・加茂正)

○

KK誌を熱読している一地方都

市在住の青年です。数年前にはなかなか見事だったグラビヤ写真や口絵が姿を消してしまい、一入さびしく、何んだかこの世の中が、味気なく感じるような日々でしたが、最近はそのような視覚的な物足りなさを補って余りある内容でいささか満足いたしております。こうした趣味が学問的にどうか、か、こうだとかはとにかく、楽しくいきたいです。残念ながら小生にとっては想像上のメルヘンに過ぎませんが、またそれだからこそ実害のないストレス解消法とも思ひます。最近では当地の古本屋にて、KK誌は容易に手に入りません。都市の書店を一軒一軒探し歩いて、殆ど見つかりません。うず高く積みあげてある雑誌と違って稀少価値がありますが、購入するには、相当の努力をしないといけません。御発展を祈ります。(愛媛県・三条道夫)

○

小生は貴誌によって秘かなる楽しみを追う当年三十二才になる男性です。最近号では辻村先生のカメラハント「甘い鞭」に一番ひかれました。甘い鞭にもだえる関谷夫人の艶姿には真実小生の心はしびれました。辻村先生の文章を拝

見し写真を見ていると、せめて関谷夫人の印画紙に焼付けた写真を見たい。そしてもう一つ欲を出せば、自らの手で関谷夫人の瑞々しい肌を鞭打ってみたいという願望がしきりと湧いて、このような美しい夫人の肌を思いのままに出来る辻村先生が羨ましくてなりません。せめて、いや本当に小生も辻村先生のようになってみたくて心より願わずにはいられません。同じS男性として辻村先生は余りにも恵まれ過ぎていませんか。小生は羨望の余りそう思わずにはおれません。(埼玉県・中原逸夫)

私は鼻貴めファンです。本誌の鼻貴めの画、写真がぐんと姿を消し、文でさえ見る向きがきわめて少くなり私共鼻貴めファンにとって淋しい限りです。どうか私共鼻貴めファンを楽しませてくれる様編集部の皆さん、ハッスルして鼻貴めの絵、文、写真等の入手に御努力の程せつにお願いします。右に関する資料を広く募集し、ファ

◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中です、切手五十円同封

ンの体験告白等で誌上を賑わして下さい。お願いします。(群馬県・田養生)

いつも貴誌を楽しく愛読させて戴いております。私はむつかしい理くつは一向にわかりませんが、私自身、若くて美しい女性の縛りフォトを拝見すると、何かほのぼのとした神秘的なムードに包まれて楽しさいっぱいになることは事実です。別に他人に害を加えたり又加えようとの考えは夢にもしない平凡な一小市民です。私は必ず全裸後手緊縛で、諦観、羞恥、もがき、呻めき、喘ぎといった感じのものに大いにひかれます。こういった若い女性のフォトを眺めるのが最大の楽しみであり、慰安です。特に自分でやってみたくとも思いません。眺めるだけで十分満足なのです。こんな私は、なんというマニアなのでしょう。もし誌上でお教え頂けたら幸いです。今までコレクションした写真は、数百枚にもなりますが、自分で写

したことは一度もありません。やはり変ったモデルのものが新鮮さがあります。本誌では次々と新人を発掘され私はいつも比の世に生を享けたよろこびを味あわせていただいております。貴誌は私の好伴侶といってよいでしょう。いついまでも存続されますことを祈ります。(高知市・戸和間生)

奇ク毎月欠かさず愛読しております。特に「花と蛇」を一番に楽しみにしています。毎月毎月発売になりますと、まっ先に「花と蛇」に目を通し、今月はどうのような息づまるような場面があるかと、胸をドキドキさせて読みます。満足感に心もわくわくしますが、読んでしまふと又来月号が待たれてなりません。団先生、どうか、もっともつと、静子夫人や京子をいじめて下さい。お忙しい中を毎月連載を書き続けられるということはさぞ大変なことだと思いますが、全国の私達のような「花と蛇」ファンが毎月首を長くして待っているのですから、頑張って、書き続けて下さるようお願いいたします。もし「花と蛇」がなくなると、私の人生にも、火が消えたようになってしまふことでしょう。今までに

登場した人物が次々と責められるとしたら、急に完結することはないだろうと安心してはいますが、このような大作に取り組んでおられる団先生の健康が一番心配です。余り深酒をなさらないで頑張って下さい。(名古屋市・山形勉)

「奇譚クラブ」なんとつかしい名前でしょう。女性切腹の記事信太容子さんの(開花の契機)をみたのは、もう十二年も昔のこと。まもなく実感のこもったスケッチが載って中康、田谷など専門家の登場となりました。切腹しようとしている場面や後向きで切腹している絵は何度か見ても、真向うから、傷口や表情や、ましてハラワタの流出まで描かれた絵というものを見たのは、この時がはじめてで、その瞬間に私の受けた衝動は正に最高。恍惚というか、エクスタシーに近いものだったのを覚えています。その後も賤機礼津子、畔亭数久、四馬孝などという名手の作品をみせて戴き、児島輝彦という後世に残るほどのジャーナリストイックな才人も登場し、フォトも数々の傑作を生み出した筈ですが、モデルとしては大塚啓子、梨花悠紀子などの麗人があらわれ

迫真の名演を、残して下さいました。羽村京子という解剖願望(?)の女性なども、折々に姿をあらわし、創作では「切腹曼陀羅図絵」が、この分野の秀作だったと記憶します。幾多、起伏を繰り返しながらも、連めんと今に続いているのは、やはり御誌の編集方針というか、こうしたものに人間の真情をゆさぶり、より深く、より広く同好を求めるに足るものが盛りられているからでしょう。まことにあって稀少にして貴重、敷石だたみの間にはさまったルビーを見る想いで、手にとる人が多いのだろうと思います。考えてみれば、これは編集者にとっては、毎号々々が軽業を演ずる思いで、出し続けて居られるのでしょうか。かつて、書店店頭にくつわを並べていた数種の類似誌が姿を消し、店頭で見掛けるのは「KK」一誌だけになっってしまったのは何故でしょうか。フィクションが他誌より少いこともあると思います。それだけレポートや通信文が多いということになりましょうか。採り上げている分野が多角的だということもあると思います。夫々の分野別にみれば、もっと優れた内容のものも他誌に見られます。ドラマチック

なものや、パツと眼を驚かすようなショッキングなものは、週刊誌などの中には、はるかに多いと思うのです。しかも尚「KK」でなければならぬゆえんのもの……となると、これは簡単です。なればこそ、この種のもの作りかたが難しいのでしょう。切腹記事のカットで、旧号に一度使ったものを、そのまま再度使用したものがありません。あれが傑作であればよかったのですが、どちらかというと駄作のものといえる作だったので「KK」のオクラも、そろそろ底がみえたとはばかり、嘆息した人も、居たのではないでしょう。女斗美もので、「大奥裸女決闘」は傑作だったと思いますし、僚誌(?)が消えた今、HOMO関係の記事、かつての「美少年の秘密」みたいな作品も、採り上げてみられては如何なものでしょうか。(青森市・E・K)

○ M男性です。K誌の愛読、通算五年、ブランクもあります。自分Mに極めて近いことを自認します。ですからS女性には全くとりこにされてしまいます。でも三十台も半ばに近い小生にはS女性を求める機会はなく、ただ空想以

外にありませんが、いろいろと責められる方法は、考えているのです。小生が、S女性より責めを受ける限界としては、大用の便器でしよう。手足を縛られて、その命令で便器代用をつとめるのは、特に好む訳ではないが、S女性の強制ならば、喜びたいと考えます。刊物とか、体を傷つけることは、好みませんが、長谷川洋子様のように腕力の強い女性には全く敬意を払い、服従したいと思えます。そして、そのS女性の趣味により手足の自由を奪われて、自由に動かせるのは舌だけになっててもその舌でトイレットペーパーの代用をさせられても、小生は有難く感謝したいと思えます。M男としては先ず縛られてから、普通なら考えられないことも、それによって可能になります。小生は渋谷に住んでおります。独身です。いつでもS女性のご命令のままに応じることが出来、縛られることも可能なのですが、残念ながら、そんな機会はまだ一度もありません。腕力強く、男性をドレイとしてみたいS女性の出現、お便りをお待ちする次第です。(東京渋谷・武田久雄)

○ 六月号、七月号と相原氏の麗筆による乙女の屠腹図が紹介されていますが、清純な乙女の悲愴美を描き出して余りあります。特に七月号の「自刃柱」の乙女のスタイルが若衆髻にふんどしというのが小生の胸にぐっときます。この姿こそ小生が永年にわたって求めていたものの一つです。清らかな乙女ざかりの初々しい裸身にキリリとふんどしをしめ、若衆髻もりりしい乙女が、柱に植えこまれた槍ぶすまに抱きつた、その美しい裸身を刺し貫いて、柱をだきかえたまま果てている図は、これも小生のスクラップに永遠に残るでしょう。同じ号の読者通信にありました如く、女白虎隊の自刃図の出現を希望しているものの一人ですが、小生にとっては、やはりこれもふんどし一丁の姿で描いてほしいものです。又、もえるが如き赤ふんどし一つをきりりとして奥女中の乙女が、憎い年増盛りの、黒ふんどしの御守殿とわたりあつてこれを打ち果し、その屍の上にまたがって屠服すると言う図も出来ればお願いします。先に北斗彦様の「汝魔首帳」の出現、今度の相原氏の出現と云い、小生の夢を叶えて下さることの出来るお方と

信じ、ぜひおねがいします。又、七月号は黒田様の作品もよかった一つです。美女の首を斬り落す女首斬り役人も私の好みのテーマの一つでした。(女斗美愛好生)

○ 赤畑修造氏の通信、毎度の事ながら、嬉しく心強く思います。私もS的なものなれば、誌上の若い美しいモデル嬢に対しても勿論、又、肥満女性に対する羨望も又格別です。同じく四月号の北村夫人の写真や、以前、辻村氏のカメラハントに掲載された夫婦プレイの中年婦人の緊縛写真(残念乍ら白衣着衣、当時、編集部にその焼増し分譲を特別にお願いした)古くは岡田咲子氏の「謎の女」中のパترونになる河豚のような中年婦人の逆さ吊りの文など記憶にも生々しいものです。モデルとして肥満女性の登場に、期待出来ない現在、北村夫人の緊縛裸身の分譲写真には是非おねがいします。又、私の年令の故か(四十三才)肥満女性もさる事ながら、もう初老に近い婦人の緊縛もあっても、又、楽しいものと思います。尤もパンテイだけはつけてもらいたい。いささかグロになるかも知れませんがその婦人が教養のある品のよい老

婦人なれば裸にして緊縛虐めてみる態もそれなりに情緒あるものと思われまます。(異端者かな)さて私の日頃の幻想の中には生々しくしばしば登場してくれまます山本章氏の緊縛、御本人のおっしゃるように、山本氏としては、絶対的なものか、毎度目かくしがありません。猿ぐつわが大きくて目も覆うと言うのや、公開を憚ったの考慮の上での事なれば止むを得ませんが、何が何でも言うのでは、いささか独善的に過ぎるかと思えます。又、誌上、分譲を問わず全裸が多いのは結構だが、勢い腰部をもとらえた写真が少ないのが残念です(昔は随分、華々しいのがありました)最近のあるかなしのパティは余りその美観(?)を損われないように思います。これさえあればというのなれば色や生地、デザインを積極的に撰んで用い、股間もあらわに画面に出して緊縛して欲しいと思います。あれこれひねくれた苦情を並べて申しわけありません。御寛容の程を。(京都・洛北生)

○ 私は勇気を出してM女性を求めているSの男性です。あくまでも誠実をモットーとしてのプレイで

「最近作緊縛傑作フォト」

開股竹棒羞恥責め 大手札三枚一組 略号「ねろ」 中河 恵子 四〇〇円	逆エビ責め手足縛り 大手札三枚一組 略号「ねき」 中河 恵子 四〇〇円	竹棒開股強烈繋り 大手札三枚一組 略号「ねく」 中河 恵子 四〇〇円	鼻責めと鼻孔大写真 大手札三枚一組 略号「ねけ」 中河 恵子 四〇〇円	首縄後手強烈縛り 大手札三枚一組 略号「ねこ」 中河 恵子 四〇〇円	全裸開股膝頭縛り 大手札三枚一組 略号「ねさ」 中河 恵子 四〇〇円	菱縄縛り竹棒責め 大手札三枚一組 略号「ねし」 中河 恵子 四〇〇円	柔肌に喰込む縄目 大手札三枚一組 略号「ねす」 大島 照代 四〇〇円	豊満な全裸を弄る 大手札三枚一組 略号「ねせ」 大島 照代 四〇〇円	逆エビに痛める魔手 大手札三枚一組 略号「ねそ」 大島 照代 四〇〇円	黒髪をいたぶる手 大手札四枚一組 略号「そや」 大島 照代 五〇〇円
大島 照代 略号「そゆ」 強烈後手縛りの狂態 大手札四枚一組 略号「そき」 大島 照代 五〇〇円	牝犬奴隷の醜態 大手札四枚一組 略号「そよ」 大島 照代 五〇〇円	全裸二つ折り縛り 大手札四枚一組 略号「そむ」 中河 恵子 五〇〇円	菱縄しばりの表情 大手札四枚一組 略号「そか」 中河 恵子 五〇〇円	八の字開股羞恥責め 大手札四枚一組 略号「そえ」 中河 恵子 五〇〇円	菱縄縛りの全裸を晒す 大手札四枚一組 略号「きむ」 木村 洋子 四〇〇円	奴隷捨札開股縛り 大手札三枚一組 略号「きめ」 木村 洋子 四〇〇円	菱縄強烈開股縛り 大手札三枚一組 略号「さま」 木村 洋子 四〇〇円	竹柱立縛り晒し者 大手札三枚一組 略号「きみ」 木村 洋子 四〇〇円	柱宙縛り苦痛表情 大手札三枚一組 略号「きめ」 木村 洋子 四〇〇円	猿轡股間縛り歩き 大手札三枚一組 略号「きも」 木村 洋子 四〇〇円

身体に傷をつけたりするような責はあまり好みません。したがって鞭打ちも傷がつくほどではやりませんが、縛りでは厳しさを求めます。例えば手首が首筋の近くまで届くぐらい高く吊り上げた後手高小手縛りや、縦縄をきつくしな股間縛りや、乳房を強調した亀甲縛りでツンと無防備につき出した乳首にクリップを挟んでの乳房責。又、海老責では顔面が交叉した足首を接触するくらい厳しくし、そうして前に転がして臀部が高く上った姿勢でのアヌス責や、浣腸責をして充分に羞恥に満ちたマゾの快感を味わってあげましょう。

○ どうですか？ M女性よ、私のように勇気を出してお手紙下さい。そうしてバラ色の人生を送ろうではありませんか。申し遅れましたが私は当年とって二十六才の公務員で独身です。べつに年令は問いません。秘密は絶対に厳守します。勇氣あるM女性の快いお呼びかけを、お待ちしております。(尼崎市・箕西栄蔵)

○ 近藤映子様。奇クファンの一人です。よろしくお願い致します。六月号で貴女の告白記事を読み、どうしても貴女とお話しがしたく

筆をとった次第です。私は東京に住む二十一才になる男性です。私も御多聞にもれず幼時母や病院で受けた浣腸の洗礼のために、今では浣腸のみが持つ妖しい魅力のとりこになってしまいました。浣腸器を見ただけでも心が震えてしまいます。貴女の経験などくわしくお教えいただけませんか。私も今までの事をお話し致します。もし文通なりとも可能でしたら編集部の方へ住所を知らせておきましたから、そちらの方へ、お願い致します。最後に奇クの今後ますます発展する事を願って止みません。(東京・宮崎信次)

○ 豊中市村中豊子様。貴女の読者通信七月号誌上で拝見。是非お目にかかり色々お話ししたいと存じます。小生サラリーマン、四十才東京在住ですが、仕事の都合で毎月中旬まで大阪におります。奇クは十余年の愛読者で、その間のもの全部所蔵しております。よろしければ何時でもお目にかけます。海絡方法としてこの通信が奇クにのりました(毎月二十五日発売)翌月の四日と五日、午後六時―七時まで大阪梅田阪急横、喫茶「風車」の階段下あたりで、お待ちし

ております。目印は茶色の上衣を手持ち、黒のナイロンのバッグを提げております。亦、眼鏡をかけておりますから永田と声をかけて下さい。ではよろしく。(東京都・永田俊一)

○ 月を追って益々発展の一途を辿る貴誌を心からお祝い申し上げます。小生、目下数千冊に余る資料を抱えて青息吐息、いつの日か、これらが生かされる日を願って居り、自身の文才なきを、つくづく嘆じています。この秋ごろには、この地方の同好者をもって風俗誌趣味の会を設立したい計画中です。が、なかなか資金難と余暇がないため実現までには一苦労します。その折には、一つ貴誌編集局長さんや辻村氏にも御出向頂いて、大いに同好者(主としてサジズム)のために気焔を吐いて頂きましょう。さきに大阪の畏友、宝塚二二夫氏の死に会い、一沫の淋しさを感じましたが、氏の少女趣味と死の直前まで「僕の責め方」に没頭された努力は、今でも敬服して居ります。東京の千葉さん、鳥取の津波木さん、それに大阪の森本さん、お元気に益々御奮闘の趣きを拝承し本当に心強く思いました。

老いらくの人生に唯一つ光を与えてくれるこの性に、いま心から話し合える方なく、どうか誌上でもけっこうですから是非、言葉をかけてやって下さい。責めに没頭して四十年私財? の大半をなげうっても、辻村氏のような成果はあがらず、昔の作品も徒らに色あせて見るに耐えず。ああ吾れ老いたりの感を深くします。終りに本誌の御発展を心から祈って筆をおきます。(西尾市・かわむら生)

○ 奇ク、愛読者の皆様、お元気でですか? 初めて読者通信にお便り申し上げます。私が、この奇クを愛読し始めて、五年になります。実は、皆様にお願いがございました。筆をとりました。私が今日まで集めに集めた緊縛写真及び、絵図(拷問の図)等が随分と多くなりましたが、毎日のように見ていると何んだか飽きてしまいました。それで皆様方の中で私と同じ想いの方がございましたら、私に只の一枚の写真でも、本の切り抜きでも緊縛写真を送って下さい。私も送って下さった方には、決して負けぬ贈り物をお届けいたします。ただ私の所持しております絵図の中には、私自身が描きましたもの

もございしますが、これは全く人に見せられる様なものではありません。緊縛写真と重ねて送らせていただきます。皆様の御協力を心か

ら待ち望んでおります。(京都市
右京区・吉村実)

○ 全国奇譚クラブ愛読者の皆様、

増田みゆき双胎臨月蛙腹

大手札印画紙極鮮明焼付

〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリけ 五〇〇円

〔明瞭な臨月の妊娠線〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリき 五〇〇円

〔全裸の臨月腹鑑賞〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリス 五〇〇円

〔双胎臨月腹の威容〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリて 五〇〇円

〔垂れた太鼓腹の陳列〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリな 五〇〇円

〔臨月蛙腹のアップ〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリに 五〇〇円

〔便々たる臨月蛙腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリに 五〇〇円

〔蛙腹に腹帯をする〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリへ 五〇〇円

〔誇示する双生児腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリま 五〇〇円

〔仰臥する臨月の蛙腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリね 五〇〇円

〔臨月腹の股間しぼり〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリぬ 五〇〇円

〔亀甲縛りの妊孕美〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリた 五〇〇円

〔臨月後手縛り引き回し〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリし 五〇〇円

〔臨月の乳房縛りで弄る〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリさ 五〇〇円

〔乳房緊縛の臨月腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリち 五〇〇円

〔浣腸される臨月妊婦〕

増田みゆき 大手札三枚一組 略号ハリひ 四〇〇円

〔双胎の臨月剥玉子腹〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリふ 五〇〇円

〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリの 五〇〇円

〔臨月腹に革具装着〕

増田みゆき 大手札四枚一組 略号ハリむ 五〇〇円

お元気ですか。私も皆様同様この雑誌を愛する一男性です。愛し始めて四年目をむかえますが、毎月のグラビアや面白い物語など沢山が、私を夢中に時間を忘れさせてくれます。しかし今となつては、ただこの物語を読んだり写真を見がめるだけでは物足りず、一度でよいからお互い理解あるプレイを願っている今日なのです。プレイと申しても、やはり若い女性と一緒にプレイが出来たら、どんなに幸福だろうと思ひ、ペンをとった次第です。大勢のファンの中でも女性の方も多いのではないかと思ひますが、どうでしょうか。私と一緒に、プレイをなさいますか。怖いことはありません。貴女もそして若い貴女方も、今すぐ決心してプレイをなさいませんか。思ひ出は沢山あるでしょうが、こんな思ひ出も決して悪いとは思ひません。一生の思ひ出はいくつあってもよいと思ひます。こうしてペンをとっておきますと、あれこれ空想してボリュームのある貴女が高手小手に、そして乳房もあらわにきびしく縛られて助けを求めている姿は、思うだけでもぞくぞくと男心を誘う女の魅力が美しく現われるのではないのでしょうか。

このようになすばらしい貴女の姿は御自分でもきつと喜びに変わることと信じております。ぜひ、うれしいお便りをお待ちしております。それまで私は首を長くして楽しみに待っています。では、お元気で(東京・二十五才の男性、山田幸之介)

○

貴誌の『花と蛇』を毎号、非常に楽しく面白く拝見いたしております。最近号は一寸短くて物足りない。せめて四十頁ぐらいにお願いしたい。又、再三申し上げているが『花と蛇』の画集を強く要望する。又、特集号の前回のものを是非、又再版していただきたい(臨時増刊の前もの)。又『花と蛇』を読むにつけても、登場人物のイメージを深くする意味において静子、京子、桂子、美津子、小夜子等の写真を載せて頂ければ読むに際しても、もっと感激も大きいと思う。最近号は頁数も多くなったが、内容的には一寸淋しく感じる。余り多方面にわたっているため、小生は専ら『花と蛇』を愛読、毎日のように同じ文を読んでいる。又、参考までに鬼源や川田、朱美、銀子、千代子、義子、悦子、森田、田代、文夫等

の写真も欲しいなあ。どうせ仮空の人物ではあるが、こういう顔や姿の人だということを文だけではなく写真でのせてほしい。恐らく貴誌の生命は、この『花と蛇』にあると思う。もっと力をいれて続けていってほしい。これがなくなれば一寸興味は五十パーセント減となると思う。最近、余りに短いのので非常に物足りない。こういう小説をもう二つ三つぜひほしい。ナイトクラブの内幕や、やくざに落ちていく倫落の処女の生活の小説の如きものせてもいい。又、地方でのモデルを囲む座談会や撮影会をやってくれば本当に嬉しいと思う。この奇クの会員の如きものを募集して例会の如きものの実行は難かしいでしょうか。当地で女性の会員や男性の会員(愛読者)がありましたら、知らせて頂ければ幸甚に思います。幾分でも貴誌を良くしたいと思って、好き勝手なことを書きましたが、悪しからず。『花と蛇』臨時増刊号は本当に買って良かったと思います。それに付けても前号のものを非常に欲しく思います。『花と蛇』画集、登場人物の写真を、ぜひぜひ実現して頂きたいと、切におねがいします。(東京・吉田英男)

○
今は天候も定まり本当に初夏になりました。若葉も美しくさわやかな日々ですね。私は当年四十六才の男性です。身長は五尺で小がらで、若いときは今のようにつれておりませんでした。三十すぎより腹もでてまいりました。酒は一滴ものみません。たばこは日に二十本ほどです。私は妻もありませんが特に大きい女性、身長五尺六寸でいどの人達がちりと肥った人を見ると心を引かれます。このような思いを人にも話せず一人苦しんでおります。貴社の本を買って私のこの思いをうちあけて話せますので喜んでおります。私も四十をこえ人生も半ば以上、過ぎております。人様に迷惑をかけなければ、私の思い通りにして下さる人が本当にありましたら、一生の思い出として、私の心にひそめておきたいのです。貴社のモデル様、又はSMを理解して下さい。人が本当にありましたら御紹介下さい。又、文通でもけっこうです。お知らせ下さい。私は緊縛をしたがり傷をつけたりするののぞみません。ただ春川ナミオ画のようにしてもらいたいです。又、六月号に出ておられる関谷富佐子様の

ようなポリウムのある体の人に責められたらと思っております。大きな尻でギューギューとおさえつけられたら私の満足です。私も時々鏡を見て、男と生れてきたことがいやになります。私は今度生れるときは女性になりたいと思っております。世の男性は女性の顔をよく見ますが、私はなんだか女性の顔を見るのが腹立たしく思うときがあります。又、女性の下着がとても美しく、私が女性なれば、あんな美しいものを着れると思うと、なんだか惜しいような気がします。私の友は貴社様だけと、思っています。編集部様におねがいします。私をモデルにして下さいませんか。私は大阪ですから無理と思いますが、大阪の女性の方で知り合いの人がおられましたらお知らせ下さい。私の一生の思い出としたいのです。女性バレーボール一戦後の汗でぬれたパンティがほしい時もあります。(大阪・間曾比須徒)

天然色写真最近作

双胎臨月蛙腹写真
大手札六枚一組 略号「れや」
増田みゆき

双胎臨月腹強烈縛
大手札六枚一組 略号「れゆ」
増田みゆき

臨月腹裸身の媚態
大手札六枚一組 略号「れえ」
増田みゆき

黒縄縦縛りの媚態
大手札三枚一組 略号「れぬ」
中河 恵子

立縛りにあう裸女
大手札三枚一組 略号「れね」
木村 洋子

開股された股間縛
大手札三枚一組 略号「れの」
木村 洋子

豆絞りの猿ぐつわ
大手札三枚一組 略号「れむ」
木村 洋子

ながらのSでありながら、未だにM女性にめぐり会えず、現在に至っております。辻村氏のハントを読むたびに非常にうらやましく思います。M女性を、思い切り責めて責めぬいてみたい気持ちで一ぱい

です。「ムチ打ち」「くすぐり責め」「吊り責め」「浣腸」「ハリツケ」「逆さ吊り」など、考えるだけでも、体がぞくぞくしてきます。総ての責めを、極限まで行いたく思います。能登半島を観光しながらプレイ旅行しませんか。小生、車がありますので、案内させてもらいます。誓ってお互いの人格、家庭環境を破壊することなく秘密は厳守いたしますから、安心してお便り下さい。御待ちしております。M女性の方、心ゆくまで緊縛し責めて上げましょう。貴女です。貴女ですよ。思い切って連絡して下さい。そして楽しいプレイをしましょう。(石川・湯川佐渡志)

○ ヌメヌメとした肌に吸いつく生ゴムの感触に酔いしれると同時に又、月経帯と浣腸を愛する三十才の男性です。常時、月経帯を身に着けていると、妙に身体が引きしまってくるような気持ちになってきます。しかし自分自身で楽しんでるのが、最近になってつくづくわびしくてたまりません。奇クを拝見していると皆様、活潑に自己を発表しているのが、とてもうらやましくてたまりません。私には

とてもそのような発表が出来るほどの知識を持ち合わせておりません。ただいまのところ、ただただどなたかに責められてみたい気持ちでいっぱいです。特に女性の方を希望したいのです。奇クの記事にあるように、女王様にお仕えしてみたいのです。まだ全然、経験のないネクターとか、コート、人間便器など受けてみたいと思っておりますが、はたして私にがまんができるかどうか。それよりも、私を責めて下さる女王様があらわれるかが心配です。私のこのお願いを、どうか編集部の方へ、おくみとり下さい。もし幸せにも八月号に載せていただいても、お返事を拝見できるのは九月号か十月号です。先が長いですが私はじっと待っています。もっと手取り早く連絡のとれる手段はないものでしょうか。最後に、奇クの今後の御発展と読者諸兄姉の御健康を祈ります。(東京都・神上昌雄)

○ 小生、奇クの日本拷問刑罰史の撮影に場所と用具を提供したものです。突然ですが、久しく閉鎖していたこの処刑室を、七月中頃まで短期間ですが、再開する予定です。読者の中で、処刑や拷問に関

心をもっておられるむきに、この期間利用ねがえれば幸いです。ただしご夫婦か、モデルになる女性とご一緒の方にかぎります。用具は豊富に備えてあります。遠方の方は、宿泊していただいて結構です。貴方の好みと、簡単な自己紹介の手紙を編集部経由でお送り下さい。小生から直接の連絡を、さし上げます。新田英雄、綾研二、小竹一浩、益原駿夫の各氏、その他、熱心なプレイ愛好者のみなさん、お便りください。(京都・田川生)

○ 奇ク、女性愛読者の皆様、始めてお便りします。私は「女性狂」です。世間では変態者と呼ぶかも知れませんが、どうせ一生を平凡に大過なく過すなら、楽しく過したく、又他人には絶対に知られたくない常識はずれな秘密を持つことも愉快なことと思います。女装して女の生活、仕事をしてみたいと、常日頃真剣に考えているものです。家では女装はできませんので、婦人雑誌や女性週刊誌等をこっそり買い求め、女性としての知識を身につけています。すてきな写真は切り抜いて保存しています。「若妻のエプロン姿」「女学

生のセーラー服やジャンパースカートのブラウス姿」「タイトスカートのツーピース姿」「舞妓姿」「和装の花嫁姿」「タイトスカートの丸えりの、可愛いブラウス姿」等々。それを見て、自分が女装した姿として夢想しているので。しかし、もう我慢ができません。勇気を出して呼びかけます。一日、女装した私を洗濯、掃除、食事の仕度、かたづけ、家事の雑用等に女中として使ってみて下さい。又貴女が男装して甘い新婚夫婦ごっこ等も……。新妻の私が恥じらいながら「夫」に抱かれて……。時には手荒い「夫」に縛られいじめられて泣く新妻。女装用品は全然持っていないませんが、同好の方があらわれたら助言等していただきたく徐々に買い求めたいと思っています。下着からそっくり可愛らしく女装して、エプロン又は割烹着をつけて、いそいそと女性の仕事に精を出す私の姿を想像すると、心が躍ります。実現したら嬉しくて、卒倒するかもしれません。このような遊びに理解があり又興味を持たれる女性の方、お便りお待ちしております。小生、真面目な一男性、秘密は厳守致します。お便りは編集部より回送していただ

きます。(東京・太田好夫)

大宮の村まり子様、社会人としてのスタート、お祝い申し上げます。先月号のこの欄で貴女のお便りを拝見したとき、小生は丁度、職場に美しい新入女子社員を迎え入れたときのように、フレッシュな目の前がパツと明るくなった感じにつつまれました。小生に限らず、きつと奇巧の男性読者の多くは、そのとき一斉に貴女に向かって歓迎の握手の手を差しのべたい気持だったに違いありません。学窓から社会へ—環境の変化につれて貴女の心の歩みと体験の道程にも次々と新しいものが加わって、人生の内容は豊かに実り多いものとなってゆくことでしょう。かつて年上の同性によって未知の甘美な世界への眼を開かれた貴女は、自然のプロセスを踏んで、今は異性の、愛の責めを心に描くようになりました(私を優しく縛って、そして愛して!そんな夢のような騎士はいないかしら?)知的で美しい文章の中に、そんな貴女のやるせない願いが秘められているように小生には思えます。けれど、貴女はそれをわれわれ男性読者に対して直接的に求めることにためら

いを感じ、その魂の真実の声を控え目な言葉の中に、そっと包みこみしまい込んでおられる。学窓を巣立ったばかりの、まだ女子大生の雰囲気のないお嬢さん——自然に例えれば、固い大地を割って芽吹き萌え出た若草の健気さ、いじらしさ、そんな貴女に思えて小生は心を動かされます。われわれ世の男性が、貴女のような若く美しい女性の緊縛の姿を想うとき心の深層に野性的な征服欲、野獣のような加虐の欲望がうごめいているのは、正直に言って否定できないのですから、もしそれだけが男性なるものの心理だとすれば、正に貴女が不安の中にためらいを感じるのは当然のことでしょう。けれど、われわれの心の中には、美しいものへの憧れ、美の創造本能が同時に強く、根をはっています。そしてSMの良きプレイ・メイトは、縛しめのこよない美しさを求める本能に人間性の高い価値を認め、野獣の本能は十分にコントロールして、美の創造活動に身を心を傾倒しようとする純粋さをもった人間なのです。そして彼が緊縛という精神的にも肉体的にもギリギリの状況におかれたときに最高の女性美——それは極限美と

☆傑作迫力Mフोट☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふそ)

臀の下に呻吟する

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふた)

二女の股責地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふぬ)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふち)

ムチで仕込むスベ公

大手札十枚一組 二五〇〇円 略号(ふよ)

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 二二〇〇円 略号(ふり)

顔面を玩弄する

大手札八枚一組 二〇〇〇円 略号(ふわ)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 一八〇〇円 略号(ふる)

臀臭をかがされる

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふお)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふね)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 一四〇〇円 略号(ふつ)

顔面を素足で踏みつける

大手札三枚一組 一〇〇〇円 略号(ふな)

いう名にふさわしいのですが——を感じとれるというのは、そこに女性に対する人間愛の発露があるからだと思います。この意味で、緊縛プレイを女性と共にエンジョイできる者は、本当のフェミニストだと思ふのです。小生は、女性の緊縛美への限らない憧れを、少年の頃からひそかに胸に抱き続けてきました。そして確か二十二才の大学生活も、やがて終りに近づいたある日、それまで言葉も交わ

したことのなかった女子学生の人との間に、夢にまで描いたそのことを実現できる思いがけない機会を得たのです。人知れず自分独りの偏見と思い込み悩んでいたのと全く同じ問題を胸に秘めている人が、憧れの女性たちの中にいることを知ったときの天にも昇る欲び!彼女との体験は前後二回限りでやがて二人はそれぞれの人生へ船出して会うこともなく、今は遠く甘美な十年以上も昔の思い出と

なってしまうましたが、青春の心のわだかまりを発散したその感激の幾刻かを経て、小生の緊縛美への幼ない空想性に血が通い、それまでの「憧れ」は「恋」となり、やがて「愛」にまで昇華したのです。「緊縛は愛なのだ」それ以来小生は、こう信ずるようになってこその、縛り縛られるという、一見人間性の自由に反する行為が魂を揺さぶる美しいものにまでなりうるのですし、地獄絵のような強烈な責めの形も、それがパートナー同志の心の触れ合いの極致の姿であればこそ、いかめしい道徳でさえ、その前には脱帽せざるをえない純粋で厳肅な美しさを生み出すのです。村まり子様、貴女が心で願って行動でためらっていらつしやる「優しい男性の愛の縛しめ」小生は貴女のために、それを捧げたい、貴女のために美しい縄を選び小生の心を通わせてお贈りしたいと思います。ためらわれずに思いきって歩き出して下さいませんか。人生の幸せは行動の中にこそあるのです。そうそう、ゲーテの言葉にもありましたね。人始めに行為があった社会人としての貴女の幸せを呼ぶ首途にふさわ

しい銭けの言葉だと思っています。
(東京中野・北畠剣一)

○ 拝啓、奇ク益々発展の様子、愛

読者として、又、Sの性を有するものとして喜んで居ります。このコーナーへの投書者も増え、誌上への読者の登場など、同好者の増えるのを見るのも楽しみの一つです。さて小生は二年前より一人のM女性とプレイを共通の場として交際してきましたが、この三月、彼女は好伴侶を得て結婚し、残念ながら我がSの対象者を失いました。二年間、一人のM女性のみを相手として来たため、プレイにも又、観念上のプレイと言うものにも、一つのパターンが出来てしまひ、これを変えることの困難さを感じ、これを新しい相手を見つけたら、新しい相手を集めた奇クのパックナンバーを読み返し、その折々の彼女とのプレイを思い返して居りましたが、日を経るにつれて身内のSの血は抑え難く、又、これを機会に新生面を開拓する気持ちも起り、新しい相手を得たいと思ひ、投書した次第です。小生は二十五才、M女性の方の応答をお待ちして居ります。別に条件はありません。近畿の方だけでなく関

東の方でも結構です。では同好の方々と奇クの発展を祈って置きます。
(京都東山区・綾部誠三)

○

編集部並びに愛読者の皆様、うとうしい梅雨の季節が近づいて来ましたが、御元気で御過ごしのことと存じます。以前から愛読しておりましたが、通信を出すのはこれが初めてです。最近挿し絵にかなり満足すべき出来映えのものが見られる様になり、喜んでおります。特に、3月号の「少女と悪魔」に於ける精神的羞恥責め、6月号の「鉄のブラジャー」の説明図などは出色でした。さて、ここで私の案を述べてみたいと思ひます。特集号の臨時増刊をもっと刊行するのです。今の奇クには、SとMが仲良く同居しています。勿論、これはこれで結構だと思ひます。しかし、SはS、MはMと分けて、各々の特集号を出すのも必要なのではないでしょうか。「流腸特集」「フェチ特集」等々に分けるのも良いと思ひます。そして読者通信にも、その特集号の内容にマッチした通信、呼びかけを掲載するのです。いかがでしょうか。読者通信と言え、近頃は女性からの通信が多く載る様になり喜ん

でおります。本誌の発展に大きく貢献する読者の声を反映させるために、読者通信の頁はより増していただきたく存じます。そして、多くないであろうと思われる女性からの通信は優先的に載せてもいいのではないのでしょうか。さて言い遅れましたが、私は二十三才の青年で、多分にフェチ的傾向を持ったSです。特に流腸プレイに最高の興味を抱いております。Fの方面では生理帯に限りない愛着を持っています。私のこうした方面での渴きをいやして下さるオアシスの様な女性の方は御呼びかけ下さい。私は必ずや貴女の希望を尊重して楽しくやって行く様に努力します。文通でもいいじゃないですか。又貴女の不要になった下着や生理帯を御分け下さる方、条件を御知らせ下さい。私は誠実に貴女の条件を満たす様尽力致します。年齢の制限は一切致しません。又地域的にも制限致しません。東京周辺及び京都周辺の方には御目にかかる事もできます。さあ全国の愛読者の貴女、どしどし私の呼びかけに応じて下さい。いつまでも待っています。最後になりましたが、奇クの一層の発展を祈り、一日も早くグラビア頁の復活する

事と特集号の刊行される事を期待しつつ筆を置きます。(東京・上田敬信)

○ 大宮の村マリ子さん。貴女は三月に載った中川恵子さんとは好対照をなす普段は大変静かな女性の様ですね。それとも快活な娘さんかな。いずれにしても中河さん共に、大変な興味を覚えます。貴女は「花と蛇」に暗いイメージと陰さんな感じを受けると言われますが、私も同様です。しかし一読して興奮しないといえればそれは嘘に成る。だがそれは一時的なものでその後は空虚なものを感じる。プレイはあくまでもプレイで、そこに暗さがあってはいけない。私は一女性と時々楽しい交際をして居りますが、あの強烈な責めの場面を、想定して行った事は有りますが、素晴らしい、プレイとなりました。彼女は結婚して、それも出来なくなりましたが、とても楽しかったと文を書いて来ました。プレイは次のマニアが現れる迄お預けですが、「花と蛇」等の奇巧の小説を参考にするつもりです。又貴女の寄稿を、楽しみにしております。(川崎・大浜定夫)

私はモルタル作りの物置小屋にいる。染色工場が使用していた小屋なので、少々、染料臭かったが私は幸福を感じていた。隅にある細木で組み立てた、ガタガタの器の上で大きく深呼吸した。器の上を今まで彼女が跨っていた。彼女の油が私の顔の下で、鬼のような顔で笑っている。唯これだけののに私は彼女に逢ったような気がする。しかし彼女は私の存在を知らないだろう。彼女の油は彼女のすべてだ。だから彼女の感情を私で油で知ることが出来る。喜怒哀楽なんでも……。高原の高級別荘に住み、舶来の高級自動車を乗りまわしていても、私はそれを止めようとしない、止めてしまったら私の機械は壊れてしまう。油は私の機械を円滑に動かしている。私は生まれながらにして、油が好きだ。油の優秀なことはよく知っている。以前は油のそばに近づくと、私自身、その油に逆に呑み込まれてしまいそうな錯覚を起したものだ。今はへその緒を再びもらい、暖かい母の腹の中にもう一度帰りたい位だ。私と彼女の油との生活は、もう三カ月ほどになる。これでなぜ私がこの物置小屋に居るか解ったでしょう。解

らない？それでは、もしこの手記が載せられたら、詳細に記そうと約束しましょう。御期待を！最後にになりましたが芳野眉美氏に。『氏ももっと自分の作品に自信を持って下さい。』「水中花」は眉美ムードを出すのに、最高の逸品です。他人を気にするな、自分の腹さえ満足させることが出来たら十分です。しかし童話の世界に入り込まないように「注」油とは軽油、ガソリン、グリスの三種。

(名古屋・瑞木俊三)

○ 奇巧愛好者のサド女性に哀願するものです。ぼくは少年の頃から美しい女性に虐められたという強い願望をもっておりましたので雑誌などで男性を支配したり、腕力でも男性より強い女性が出てくると、その箇所を何回も読み返しておりました。奇巧を読むようになってからサジスチンの女性が実在すると思えるようになり、この度投書した次第でございます。S Mプレイをやる女性の方、お手紙をお待ちしております。もちろんプレイは貴女様のお望みになることならば忠実に御奉仕致しますとおもいます。充実した女体の持主で、自分の快樂のために男性を欲

しいままに使い犬や奴隷として所有する方が好きです。高慢な女王様として男性を支配し、君臨する方がよくを召してくれるなら身を粉にしてお仕え致します。職業や、年齢、過去、容姿、家柄には憧れていません。豊満な肉体の女性で、男性を責めて呻吟させたり玩具にしたり、自分の仕事などをやらせたいと思う方、女王様として男性を可愛がってくれる方、ぼくにとって救いの女神様です。来る日も来る日も女神様を求めて巷をさまよっております。サジスチンの方、是非交際してください。小生、二十四才、会社勤め。秘密を守り、その他、迷惑をかけません。プレイのできない方でも、お手紙や、写真などをお待ちしております。(東京・鶴巻四郎)

○ 私は、本年一月号に、『団先生に捧ぐ』として掲載されました荒巻謙作であります。七月号の団先生の「化物の話」を拝読して、亦もや、一筆啓上致す次第であります。お説の通り、先生の脚本による映画は、全くの所、マニアたる小生にとって、楽しいものであります。小むづかしい諸論を展開される方達が、団先生の情熱に、水

をかけるような事があってはと、一月号に載ったような事を書いたのですが、やはり、偉い人がいて御批評をされております。一体、どんな顔をして、団先生作る映画を観覧になったのか、想像するだけで吹き出します。私は、縛られた女を観る為に、縛った積りで、観賞させて頂きました。もっと、もっと、責め場を多くして頂きたいと云うのが偽らざる心境です。団先生が熱情のおもむくままに、シナリオを書かれ、映画化されるのが悪いことだと、云われるのなら、そうかも知れません。併し、

私は観たい。お前は、エロ映画のつもりか、天下の公器を何たる事ぞと、おしかりを蒙るでしょう。秘密で観るなら、かまわないが、公衆の目に晒らす映画を、もっと墮落させよとは何たる事かと、怒られるかも知れません。が、私は観たい。大映画会社作る所の、一年何十本かの映画等、目が疲労するだけの、何と情熱のない映画、作品等、目のケガレです。作りた

女性モデル募集

本誌の内容充実のため

奮て御応募下さい

○本誌ではカメラ・ハント、カメラ・ルポ或は夜の徒然草などに登場御希望の女性並に広く写真撮影に応募することの出来るセンスのある女性を求めています。
○本誌愛読の女性の方でしたら、年齢遠近は問いません。誌上発表の可否については十分御希望を考

慮いたします。又、助手介添え或はプレイのみの出演御希望の方も一応御照会して下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年齢、略歴記載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他お返事は分期待に添うよう考慮します。
○応募された方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば幸いです。

△奇ク編集部▽

ず、もっと縛りの多い本を書いて下さい。すぐ裸にするから、動きの少ない絵になってしまふ。オールヌードなんて、映画館で、観られる道理が無い。パンティを（ビキニか、褌を）はかして、バストは小森流の縛りか、責め具でかくして、責め場の多い、縛られた女性の色気、美しさ、哀れさ、エロッポさを出して下さい。これは、監督さんに要求すべきか知れませんが、つまり官能をくすぐるシーンを、もっと多くして頂きたいのです。七月号のシナリオも、責め場にもって行くストーリーを色々、納得のいくように書かれてあります。小説「花と蛇」では、責め場をつなぐように、運びを書かれてる。映画でも、この要領でお願いしたいものです。イヤ、マニアの要求は、行く所まで行かないと、終りにならないものです。団先生は、適当に換骨自在にシナリオを創られますので、あまり、こまかい事にまで、口出しを、しないようにしましょう。色々な人間がアラナ、という事で団先生の、一層の、御健筆をお祈り致します。女をイジメルのに、何の理論が、要るものですか。イヤ、これは蛇足でありました。（東京・

荒巻謙作）

○ 山本武男さん。七月号に載ったあなた御夫妻の『奴隷妻』のレポ拝見しました。愛する奥さんと共にSMプレーを楽しみ満喫して居られる由、心から羨しく思われてなりません。私も先年より妻にM教育を実施しましたが、妻は殆んど反応を示さず失敗に帰し、逆に私自身がM化したようでした。併し私の本当の希求は、M女性相手に私自身のS的満足感を得たいことに有るのです。山本さん、苦心の製作による奴隷妻のクサリ禪の姿のフォトは正に秀逸です。併もこの奴隷スタイルのまま長期に亘る実生活を過ごして居られるとは一種の驚異です。更に羨望の念を禁じ得ないのは、如何なる責め拷問にも易々として、いや、喜々として、甘受する奴隷誓約書を、あなたの手許に出されるほどの愛情を抱いておられる女性を妻として得られたことです。山本さん、どのようにして奥さんを、そのように飼育されたのでしょうか。秘訣などお教え頂けませんか。まだ奥さんのフォト、外にございませんか、差支えございませんでしたら譲って頂きたいのですが、更に厚

次号(九月号)は、七月二十五日に発売します。

かましい御願いが許して頂けるなら、山本さん御夫妻にお目にかかり、奴隷妻の実態を、実際に拝見させて頂ければ、これ以上の幸いは無いのですが、如何でしょうか山本さんの御返事を心からお待ちします。(宮城県・金山春吉)

○
奇クを愛読しはじめて既に二年有余になります。もっとも私の知人が旧号を沢山持っておりまして、四、五冊宛、借りてきては拾い読みをしておりますから、実質的には拾年も前から読者と同じ事だと自負しております。特に、現在もそうですが旧号の四馬孝画伯の画は目をみはるばかり、ただ素晴らしいの一語に尽きます。臨時増刊の花と蛇の前作静子夫人捕わる、は勿論、現在発行の分も共に購読させて頂いております。過ぐる月、港区にありますダイコーミュージックに残酷ショウを鑑に参りました時、踊り子さん達や劇場売店の方々と親しく話をされたり余興にビールを贈呈されたりなさっていられたグループの方がありませんが、若しや、箕田様方

はなからうかと、知人と語り合ったものですが。違っていたでしょう。演じていられるのは御夫妻との事、奇クで知りましたが迫力がありますね、特に私好みの長い髪がいまだに印象に残り、かぶりつきで思わず身を乗り出して、鞭の先が鼻の横に当り、お芝居ではない真実味を鼻でもって感じさせられました。去る拾巻日は、オリオン座にて小森監督の美女拷問を観て参りました。終始、責めと縛りの連続で、奇クファンの方にも是非観て頂きたいと存じますので、編集長より誌面の一部を割いて御勧め下さいますように。ただ例によって残酷一点張り、私好みの貞操の危機感といった場面は一度しかありませんでしたが、さまざまな縛りシーンはマニアの方には見応えある事と存じます。別に、内田高子の出演する、夜の悦び、というのも凄いですね。向井寛監督作品だと記憶しますが女郎の拷問シーンが二度程、写し出されます、二度共、両手吊りですが、これは凄いですよ。始めはアップで腋の下から乳房までをこ

れ程生々しくとらえたものはそうざらにはありますまい。後のも文字どおりの全裸で吊られ竹の棒でうちすえられるのですが、パンティさえもつけていない背面はよくも映倫がみのがしたものだ、驚いてしまいました。なにや、かやと編集長には周知の事柄を羅列し申訳ありません。でも、これを機会に独立プロ観て歩きなどを投稿させて頂ければ奇クファンとしてこれにすぎる幸いはないと思っております。(大阪・能美積)

○
初めてお便り差し上げます。奇クを読み始めてまだ数カ月にしかならぬ僕ですが、今や全く奇クのとりになっていました。毎月奇クの発売日が近づくたびに胸の高まりさえ覚えます。しかし残念なことは奇クを取り扱っている店が少なく、また仮にあってもすぐ売り切れ、なかなか手に入らないと言います。もうすこし何とかならないものでしょうか。よろしくお願いします。僕はどちらかと言えばMですがSの方もそれに劣らず興味があります。女の人胸のふくらみなどを責めることを考えるだけでも胸がドキドキして、思わず生唾をのんでしまいま

す。しかしガールフレンドの一人としていない僕にとってSMプレイなどは、雲の上の夢物語であって手のとどく由ありません。今は自分で縛って、それで欲求を満足さすだけです。それはまず、風呂から出て自分の部屋に入り、カーテンを引き、ドアには鍵をかけます。そして服を脱いで脚や股間を思い切り縛ります。そしてその姿を鏡に写すときとても大きな喜びを感じます。しかし自縛ですと自から複雑な縛りはとても出来ない、現在欲求不満を少し感じています。気が多いせいか、僕は女の下着類、ふんどしにも又興味を持っています。と言ってもマニヤと言うほどではありません。：。家に誰もいない時は、姉の生理帯やあるいはふんどしなどをして、一人楽しんでます。それからいつも不満に思っていることですが、他人はSMファンだと言うとすぐ変態だと思ってしまう、一体どうしたことでしょう。S性とかM性と言うものは誰の心にも宿しているはずですが……。貴誌などが先にたって広く世に訴えてもらいたいのですが……。SMファンですと誰にでも言えるようにいつかなることを期待しています。僕はや

っと今年成年を迎えたばかりの一人若造ですが、どうか僕の考えを無にしないでください。奇クの今後の発展と皆様の御健康をお祈りしてペンを書きます。(岡山市・児島周五)

○
奇ク七月号読者通信欄にプレイご希望になられた豊中の村中豊子様は最近奇クを入手してから大変興味を持たれたとのことですが、何事も初めは、勇気のいるものです。それをあのようにな誌上发表されたことに対し心から感服しております。幸いあなた様には外出の機会が多いのを利用して是非共一

度私とお会い出来るべく心の準備をして下さい。勿論その際は相互に秘密厳守の堅い約束をすることをお前提としてお互いに楽しいプレイをして或る意味における幸福な人生を送れることを心から期待しております。戦前に良い機会に恵まれ一寸この道の先輩で有名な故伊藤晴雨さんに二度ばかりお教えを頂いて貴重な写真や参考品若干分譲を受け大切に保存しております。したが、戦災で家財もろとも焼失して残念でなりません。戦後荒廃した世相の中で生活と戦い、この道とは無縁でしたが二、三年前より私生活にゆとりが出たので昔

のことが思い出され、再び年甲斐もなく心を動かされ大いにハッスルし二、三年以来より適当な女性の見付かるのを心待ちしております。した所、あなたのような方が現われたのを又と得られない好い機会と存じ、厚かましくも特に心からお願ひする次第です。一度私を試して見て下さい。きっとあなたが心の中で夢見ていた事をご満足して貰えると思います。本誌次号ご覧になりましたら六月二十七日午前十一時頃天王寺駅正面西側通路の中程で目印しに週刊誌とハンカチを持ってお待ち下さい。私より声をかけます。勇気を出して初め

ての出会いにお出で下さることを心から楽しみにしております。当編集部の方にお願ひしたいことは奇抜なさし絵をなるべく沢山掲載して下さい。誌面の片隅でもどこでもどんな小さくてもよろしいです。から毎号懸賞募集でもして作品を募集して見たら可成り良い絵が応募されると思います。よろしくお願ひします。(大阪市城東区・辰己三郎)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)
昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)

昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)

昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇円)

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

☆編集後記☆

○「奇クサロン」と「読者通信」に案外読者の関心が深いということをよく聞くが、誌面の都合で今の頁数を増すことが出来ないのが残念である。この上は内容を精選して、より一層の充実を計るより仕方がない。

○懸賞の応募作品の投稿が号を追うて増えつつあるのは喜ばしい。傑作は見逃さず掲載したいし賞金もはすみたいと思う。但し懸賞応募の作品くらいは原稿用紙を使用して方式通りの書き方をしてほしいものだ。

○久方ぶりに山口広氏の「地底の国」を載せた。島内晋一郎氏の「八白い山河」と共に異色ある創作だと思う。外に町陽一氏の「グループ」芳野眉美氏の「苦悶の部屋」などと共に

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでも自作に限ります。若し引用する部分があります。必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分該品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

読みごたえある作名として、きつと読者を飽かせないだろう。味読をお願いする。

○息つく暇もない繁忙の中をさいて団鬼六氏は再び「鬼六談義」を寄せてくれた。読者からの便りによると「鬼六談義」の愛読者が大変多い。今月号も人間味溢れる豊富な話題を提供して呉れているようだ。

○SMに徹した辻村隆氏のカメラ・ハントの今月は先月号の対談に引き続いて秋山夫妻を祖上にのせて、その全貌を披露した。山本一章氏のルポに登場した新庄美子嬢は、氏お気に入りとのペット。今後の筆力を大いに期待したいところ。今迄サロンで活躍していた千葉青鬼氏が初めて本文に登場。能美積氏の「続責め絵のある関係」は、興味ある展開を見せた。「花と蛇」の新展開も注目されたい。

☆本誌御購読の榮 ☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

八月号 〔第二十一巻第八号〕
昭和四十二年七月二十日 印刷
昭和四十二年八月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 北村 俊夫
印刷人 大田 吉雄
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
大阪市住吉区大領町四丁目六八番地
発行所 暁出版株式会社

(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。すが、本来成人向として発行を企図しておりませんが、関係上、十八才未満の方には絶対販売下されたいように、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。